鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　8

平成３年度発掘調査報告

平成４年３月

鎌倉市教育委員会

序　　文

鎌倉市教育委員会
教育長　尾崎　實

近年、鎌倉の街は、古い家屋や店舗の建て替えが相いついでいます。その中で、埋蔵文化財に影響を及ぼす様な大規摸な工事も多く数も多くなりました。このため昭和59年度からは国庫・県費の補助を受けて個人専用住宅等については鎌倉市教育委員会が独自に発掘調査を実施するようにして来ました。

しかし急速な都市化・再開発が進む中で調査が順調に進んできたとは言えません。

郷土の文化財を守るということは市民の責務でありますが、当市のように市街地の中心と遺跡の中心が全く重なってしまうという条件のもとでは、特に市民の皆様のご理解なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査は不可能であるといえましょう。皆様の御協力をお願い申し上げる次第です。工事計画作成に当ってはできるだけ早くから当委員会との協議を行い、文化財の保護の方策を煮つめて行って頂きたいと思います。

本書は平成３年度に国庫・県費補助を受けて、鎌倉市教育委員会が実施した、個人専用住宅・店舗併用住宅建設等に伴う発掘調査の記録です。本書が鎌倉の歴史を明らかにするのに少しでも役立つことを祈念すると共に、調査実施に際してお世話になった調査員をはじめ多くの方々に、心からお礼申し上げます。

例　言

1．本書は平成2年度及び平成3年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査にかかわる発掘調査報告書である。

2．本書所収の調査地点は別表のとおりである。

3．発掘調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財保護課が実施した。

4．出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財保護課が保管している。

5．各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

目　次

序　文 …… i

例　言 …… ii

平成３年度調査の概観 …… 1

１．政所跡 …… 11

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 17

第二章　調査経緯と堆積土層 …… 20

第１節　調査経緯 …… 20

第２節　堆積土層 …… 21

第三章　検出された遺構と遺物 …… 22

第１節　第一面の遺構と遺物 …… 22

第２節　第二面の遺構と遺物 …… 44

第３節　南北大溝 …… 56

第４節　道路 …… 85

第四章　まとめと考察 …… 89

２．政所跡 …… 133

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 137

第二章　調査経緯と堆積土層 …… 140

第１節　調査経緯 …… 140

第２節　堆積土層 …… 141

第三章　検出遺構 …… 142

第１節　Ⅰトレンチ検出遺構 …… 142

第２節　Ⅱトレンチ検出遺構 …… 142

第３節　Ⅲトレンチ検出遺構 …… 145

第４節　Ⅳトレンチ検出遺構 …… 145

第四章　出土遺物 …… 148

第１節　Ⅰトレンチ出土遺物 …… 148

第２節　Ⅱトレンチ出土遺物 …… 152
第３節　Ⅲトレンチ出土遺物 …… 153
第４節　Ⅳトレンチ出土遺物 …… 157
第５節　近世陶磁器 …… 158
第五章　まとめと考察 …… 160
《附篇》 政所跡溝内堆積物の花粉化石 …… 163
３．若宮大路周辺遺跡群 …… 193
第一章　遺跡の位置と環境 …… 197
第二章　調査の経緯と概要 …… 197
第三章　検出遺構と出土遺物 …… 198
第１節　層序と生活面 …… 198
第２節　検出遺構 …… 198
第３節　出土遺物 …… 202
第四章　まとめにかえて …… 204
４．台山遺跡 …… 209
第一章　遺跡の位置 …… 213
第二章　調査の概要 …… 214
第三章　検出された遺構と遺物 …… 215
第１節　遺構 …… 215
第２節　遺物 …… 217
第四章　まとめ …… 218
５．田楽辻子周辺遺跡 …… 221
第一章　遺跡の位置 …… 224
第二章　調査の概要 …… 225
第三章　検出された遺構と遺物 …… 226
第１節　中世の遺構 …… 226
第２節　古代の遺構 …… 229
第３節　遺物 …… 229

第四章　まとめ …… 231
6．無量寺跡 …… 235
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 240
第二章　調査の概要 …… 242
第三章　検出された遺構と出土遺物 …… 244
第１節　上部平場 …… 244
第２節　第１号やぐら …… 245
第３節　第２号やぐら …… 255
第４節　第３号やぐら …… 263
第５節　第４号やぐら …… 268
第四章　まとめ …… 278
第１節　出土人骨鑑定報告 …… 278
第２節　まとめ …… 282
7．若宮大路周辺遺跡群 …… 313
第一章　調査地点の位置と環境 …… 317
第二章　調査の経過 …… 319
第三章　層序と検出された遺構 …… 320
(1)　層序 …… 320
(2)　１面の遺構 …… 322
(3)　２面の遺構 …… 327
(4)　古代の遺構 …… 331
第四章　出土した遺物 …… 334
(1)　１面の遺物 …… 334
(2)　２面の遺物 …… 346
(3)　古代の遺物 …… 360
第五章　まとめ …… 365

平成３年度調査の概観

平成３年度の緊急発掘調査実施件数は12件で、対象面積は、5837㎡であった。前年度の12件、4445㎡と比較すると面積の増大が目立つが、これは、２年度から継続した２件の調査（地点１・由比ヶ浜中世集団墓地遺跡、地点２・若宮大路周辺遺跡群）に因るところが多い。他の10件の調査原因は、専用住宅が２件、店舗或は共同住宅との併用住宅が７件であった。この10数年の鎌倉市内の傾向として顕著な、家屋の老朽化に伴う建て替えに際し新たな事業を計画に採り入れ、土地の有効活用を図ろうとする動向に変化はないようである。なおその一方で、事前相談はあったものの事業が保留となったケースが数例あり、同様な事例は事業者負担の調査に関しても少なくなく、最近の経済動向が微妙に反映しつつあるものと推察される。

３年度調査の大きな特徴として保寧寺跡（地点３）・公方屋敷跡（地点11）で従来調査例が希薄であった遺跡の解明に貴重な手掛かりが得られた点や、大倉幕府周辺遺跡群（地点４）・若宮大路周辺遺跡群（地点11）で８世紀代の集落や堀立柱建物の遺構が検出され、鎌倉の古代史研究上貴重な資料が得られたことが挙げられる。

１　由比ヶ浜中世集団墓地遺跡

埋葬人骨の出土例が他遺跡に比し格段に多いところから当該名称が冠された遺跡内の、由比ヶ浜二丁目1034番１外に位置する。

本件は区分所有法にもとずく共同住宅の建て替えにともなう調査という、国庫補助事業としては極めて特殊な事例として、平成２年度から継続して実施されたものである。２年度調査では13世紀末から14世紀後半期に属する約200軒の方形竪穴建物跡を中心とした諸遺構が検出され、「前浜」の考古学的様相の解明が前進した。３年度調査においては、約50軒の方形竪穴建物跡と埋葬人骨４体、そして若宮大路に面した区域では多数の轍跡が遺存する地形面が数枚に亙って検出された。この地形面については道路或は広場的な機能を有するものと考えられ、無数の轍は当遺跡の性格を端的に物語る手立てとして意義ある発見であった。

調査はこのような多くの成果を得た上で、平成３年９月15日に終了したのである。

２　若宮大路周辺遺跡群

若宮大路を中心として広範囲に所在する当遺跡内の、御成町872番14に位置する。

本件も平成２年度から継続して実施された店舗併用住宅建設に伴う調査であり、若宮大路沿いの大溝や建物の遺構の他、古代遺構も検出されている。特に鎌倉初期のかわらけがセット状態で出土

したことは注目に値する。

調査は平成３年５月７日に終了した。

3　保寧寺跡

保寧寺は建長寺梅洲庵の末寺と伝えられ、足利尊氏禁制や黄梅院文書等にその名がみられるが詳細は不明である。従って、所在地についても今後の寺史研究の進展の中で変更される可能性は大であるが、ここでは従来の遺跡名を踏襲することとする。調査地は山ノ内字東菅領屋敷133番３外に位置する。

平成３年１月、店舗併用住宅建設に関する事前相談があり、地下室及び浄化槽設置予定箇所を対象として試掘調査を実施の上協議を進めることとした。調査は同年２月25～26日に行われ、３面以上に及ぶ遺構面が検出され事前調査の実施は不可避であると判断された。このため設計変更の可否についての検討を事業者に依頼したが、設計内容の変更が不可能であると確認されたため、県教育委員会と取り扱い方について協議したところ、国庫補助事業調査として実施すべきとの指導を得た。

３月５日、文化財保護法第57条の２の届出書の提出を求め併せて調査方法等に関する打合せを継続した。３月12日届出書が提出され、続いて３月30日に県教育長名で調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。さらに事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出された。以上の経過を経て、４月15日から７月20日にかけて発掘調査が行われたのである。

調査により、13世紀から15世紀にかけて築造された３時期に亘る地形面と同面上に築造された建物や道路の遺構が検出されるなどの諸成果が得られ、調査例が希薄であったこの地域に関する始めての考古学的成果がもたらされたのである。

4　大倉幕府周辺遺跡群

国指定史跡源頼朝墓の南方一帯は、我が国史上最初の幕府である大倉幕府が開かれた地として知られている。その周辺には幕府関係機関や主要御家人の居館などが建ち並んでいたと推察され、標記の遺跡名が付されている。平成２年１月、住居併用共同住宅の開発事業計画に係わる事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議を進めることとした。４月９日、試掘調査を行ったところ古代から中世にかけての遺構が良好に遺存していることが確認された。その後、事業者側の事由により暫く調整期間を経て、翌３年１月16日、事業者から工法及び工程等について具体的な説明がなされ、施工範囲全体を対象とした掘削を伴う計画であることが明らかになった。このため設計変更の可否を検討依頼するが、不可能であるとされたため県教育委員会の指導を得た上で直ちに調査の実施方法等についての協議を開始したのである。３月15日、文化財保護法第57条の２による届出書が提出され、続いて４月２日付けで県教育長名による調査実施を本旨とした通知書が事業者宛に送付され

た。続いて４月12日、事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、６月６日から４年１月31日にかけて、発掘調査が実施されたのである。

調査により12世紀末から13世紀前半期に亙る大規模建物跡や８世紀に属する十数棟の住居跡などが多種多量の遺物と共に検出され、いわゆる大倉幕府成立期とそれ以前の考古学的様相が具体的に解明されたと評されるほど、大きな成果が得られたのである。

5　多宝寺跡

多宝寺は鎌倉時代中半期に創建されたとされる律宗系寺院である。極楽寺、称名寺と共に西大寺派の拠点寺院として隆盛を極め、中世宗教史上重要な遺跡として周知されている。昭和37年から51年にかけて国指定建造物浄光明寺五輪塔（覚賢塔）を中心に展開するやぐら群を対象とした７次に亙る発掘調査が行われ、中世の葬制を解明する上で重要な成果が得られている。今回の調査地点は推定寺域内の扇ガ谷二丁目250番６外である。

平成３年４月、自己用住宅の建設計画に係わる事前相談があり、布基礎の掘削深度が１㍍を越える設計である点に鑑みて、試掘調査を実施の上協議を進めることとした。４月30日から５月１日にかけてなされた試掘によって、３面に及ぶ中世遺構面が検出された。このため、５月28日に設計変更の検討依頼を含む協議を行うが、変更が不可能であると判明したので県教育委員会と協議し、国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得た。５月30日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、これを受けて６月19日に調査方法等を協議し、土木工事及びその他の細目について方向を定めた。６月20日付けで県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付され、同日事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出された。以上の経過を経て、７月１日から８月15日にかけて調査が行われたのである。調査により14世紀後半の礎石建物などが検出され、同遺跡に関する新たな資料が得られたのであった。

6　長谷小路周辺遺跡

六地蔵から長谷寺に至る国道134号線沿いに広がる同遺跡は、砂丘上に形成された庶民居住施設或は生産工房的な色彩が強い方形竪穴群の発見例が多いことで知られている。調査地点は遺跡内の江の電和田塚駅の北側、由比ヶ浜三丁目229番外に所在する。

平成２年５月、住居併用住共同宅建設に係わる事前相談があり、周辺での調査結果から事前調査の実施の可能性が高いため、試掘調査を実施の上協議をすすめることとした。６月25日から29日にかけて同調査を行った結果、２面以上の中世遺構面と古代の包含層が検出され、現計画内容では調査実施が不可避であると判断された。このため直ちに設計変更の可否を協議するが変更が不可能であると確認されたので、対処方法を県教育委員会と協議したところ住居区域を対象に国庫補助事業

調査をすべしとの指導を得た。12月13日、調査実施方法等を事業者と協議し、期間等について調整を整えた。12月28日に文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、平成３年１月25日付けで県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。続いて２月８日の詳細についての再協議を経て、７月２日事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出された。その後、細部の調整協議の後、土留工事後の７月15日から12月28日にかけて本調査が実施されたのである。

調査により、13世紀末から15世紀初頭の方形竪穴建物や道路・井戸等が発見され、同遺跡に関する新たな資料が得られた。

7　宇津宮辻子幕府跡

幕府は将軍の居所を指し、建久三年（1192）源頼朝が征夷大将軍に任命されると共に成立した鎌倉幕府は当初大倉の地にあった。嘉禄二年（1226）若宮大路の東側に移転し、宇津宮辻子幕府と呼ばれ標記の遺跡名の所似である。同幕府跡は雪ノ下カトリック教会を中心とする区域にあると推察され、嘉禎二年（1236）幕府は北隣に移転し、若宮大路幕府と一般に呼称される。調査地点は、小町二丁目354番12外に所在する。

平成２年３月、住居併用共同住宅建設に係わる事前相談があり、試掘調査を経たうえで協議をすすめることとした。５月７日から８日にかけて、同調査を実施したところ地表下50ｃｍ程で中世遺構面が２枚検出されたため、事前調査の実施が不可避であることが判明した。このため設計変更の可否についての検討を依頼したところ、困難である旨の回答を得た。これを受けて、県教育委員会と協議し住居区域を対象とした国庫補助事業調査を実施すべきとの指導を得たので、直ちに全体工程及び調査方法等の調整を図った。６月18日、文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、７月７日、県教育長名の調査実施を本旨とする通知書が事業者宛に送付された。ところがその後一年近くの間、事業者側の事由により準備作業が中断したが、平成３年７月19日改めて協議が再開された。

そして７月29日、事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出されたのを受けて、土留工事等の準備作業を経て９月25日から10月31日にかけて発掘調査が実施されたのである。

調査によって13世紀初頭から14世紀後半の、各種建物遺構が発見され、特に東西方向に走る大型柵列状遺構が確認されたのは、幕府跡にも拘らず調査例が希薄であった当遺跡の解明に大きく寄与する成果であったと評されよう。

8　大倉幕府周辺遺跡群

遺跡内の南西隅、政所と隣接する辺り雪ノ下三丁目606番１に所在する。

平成２年12月、住居併用共同住宅建設に係わる事前相談があり、試掘調査を実施し協議をすすめることとした。平成３年２月25日から２月27日に行われた試掘調査によって良好な状態で残存する

3面の中世遺構が確認され、杭打等を伴う現設計内容では事前調査の実施が不可避であると判明した。また計画変更が困難であるとの回答を得たため、県教育委員会の指導により住居区域を対象とした国庫補助事業調査を実施することを前提として、その具体的実施方法の協議を4月11日及び同月24日に行った。6月4日、文化財保護法第57条の2による届出書が提出され、全体の工程ならびに具体的な調査の実施方法等を調整した後の6月20日、県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者宛送付された。続いて6月24日、調査実施依頼書が事業者から教育委員会に提出され、さらに最終的な協議を7月24日に行った。以上の経過を経て、8月19日から12月17日にかけて調査が実施されたのである。

調査により13世紀から14世紀代にかけての道路や礎石建物などが発見され、中世町割りに関する新たな成果が得られたと評されよう。また江戸期の建物や井戸等の近世遺構が数多く発見されたが、これは関東大震災の復旧工事による削平のため近世遺構が比較的乏しい市内では意義ある成果といえよう。

9　政所跡

政所は幕府の財政・訴訟等の庶務全般を司る機関である。調査地点は遺跡内の南西隅の鶴岡八幡宮三方堀東側に隣接する辺り、雪ノ下三丁目988番に所在する。

平成2年12月、住居併用店舗・共同住宅建築に係わる事前相談があり、周辺の調査状況から推して試掘調査を実施の上協議をすすめることとした。既存建物の一部解体後の平成3年2月28日から3月2日にかけて同調査を行ったところ、地表下約40cmで中世の遺構面を検出したため、現計画下に於いては事前調査が不可避であると判明した。これに基づき設計変更の可否について検討を依頼したが不可能であると明らかになったため、県教育委員会の指導により国庫補助事業調査として実施することとした。3月14日、調査実施を前提に全体工程計画等の協議を行い続いて、4月15日、文化財保護法第57条の2の届出書が提出された。5月15日調査実施を本旨とする県教育長名の通知書が事業者宛に送付され、これを受けて8月29日調査実施方法等を協議する。9月4日事業者から調査実施依頼書が教育委員会に提出され、10月3日の最終協議を経て既存建物の全面解体、土留工事等の段取り作業が終了した11月5日から平成4年2月12日にかけて調査が実施されたのである。

調査により13世紀中半期から15世紀中半期に至る年代の礎石建物や横大路沿い大溝などの諸遺構が検出され、また最も一般的な日用品であるかわらけが積上げられた状態で出土し、セット関係のみならず販路単位までおも推定し得る貴重な資料として注目された。

10　若宮大路周辺遺跡群

若宮大路を中心とした区域に広がる遺跡内の、御成町811番に所在する。

平成３年６月、店舗併用住宅建設に係わる事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。７月17日～18日、同調査を実施したところ地表下100～130cmに中世及び古代の遺構面を検出したため、事前調査は不可避であると判断された。直ちに設計変更も含めた協議を行ったが、変更は不可能であると判明したので県教育委員会に指導を求めたところ、住居区域を対象とした国庫補助事業調査を実施すべきとの指示を得た。これにもとづき８月２日、全体工程と調査方法等の具体的な協議を開始した。８月６日文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、続いて８月26日に県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付された。９月18日、事業者から調査実施依頼書が提出され、これを受けて９月20日と26日に土工事関係の詳細を打合せした後、11月１日から12月28日にかけて調査が実施されたのである。

調査により14世紀代を主とする方形竪穴建物や堀立柱建物などが検出された。また、８世紀代の竪穴住居と大型の堀立柱列も発見され、今小路西遺跡で発見された郡衙推定遺構を中心に展開する古代官衙域の一端が判明したものと評されよう。

11　公方屋敷跡

浄妙寺東側から明王院にかけての一帯は公方屋敷跡或は御所之内と呼ばれ、足利尊氏やその子基氏そして氏満・満兼・持氏・成氏らの一族子孫が第を構えた跡と伝承される。調査地点は遺跡内の西側、胡桃ヶ谷南方の浄明寺三丁目143番２に所在する。

平成元年９月、自己用住宅建設に係わる事前相談があり、地下施設等が計画されているため試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。平成元年11月18日から25日に同調査を実施したところ、既存建物がＲＣ造であるにも拘らず中世遺構面が検出されたため設計変更の可否を検討依頼したが、変更が不可能であると判明したので、国庫補助事業調査を実施すべきとの県教育委員会の指導に基づき調査実施の方向で協議を開始した。然し乍ら事業計画を整備するために時間を要し、その期間は協議を中断させざるを得なかった。平成３年になってようやく協議が再開され、３月29日文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、続いて４月17日に県教育長名による調査実施を旨とする通知書が事業者宛に送付された。その後調査方法の細部に関わる協議を数次に亙って重ね、調査方法及び土留工法等について調整を整えた。以上の経過を経て12月25日に調査実施依頼書が事業者から教育委員会に提出され、１月６日から３月31日にかけて調査が実施されたのである。

調査により、14世紀中半期の大溝や建物跡が発見され公方屋敷の解明作業の手掛かりが得られたといえる。

12　永福寺跡

永福寺の推定寺域内に含まれる、二階堂字杉ヶ谷520番１外に所在する。

昭和63年、自己用宅地分を含む宅地造成の開発行為に係わる事前相談があり、試掘調査を実施の上協議を進めることとした。伐採工事の終了を待って同年６月１日から７日まで調査を行い、３面以上の中世遺構面が検出され事前調査の実施が不可避であると判断された。このため設計変更の可否について検討依頼するが困難であるとの回答を得たため、自己用宅地の区域を対象とした国庫補助事業調査として対応すべしとの県教育委員会の指導の下に、調査実施を前提として協議を進めた。その後事業計画の再検討のため長期に亙って協議が中断したが、平成３年になって全面的に自己用宅地とする内容に変更した新たな計画が提示され、改めて協議を再開したのである。その一方で県教育委員会に取り扱いを相談したところ、自己用宅地であれば全域を国庫補助事業調査として実施すべきとの指示を得た。７月９日具体的な調査方法等を協議し、同月15日文化財保護法第57条の２の届出書が提出され、続いて８月１日県教育長名による調査実施を主旨とした通知書が事業者宛に送付された。この後数次の協議を経て、平成４年２月27日発掘調査依頼書が事業者から教育委員会に提出され、３月13日から現地調査が開始されたのである。なお調査は平成４年８月まで継続する予定である。

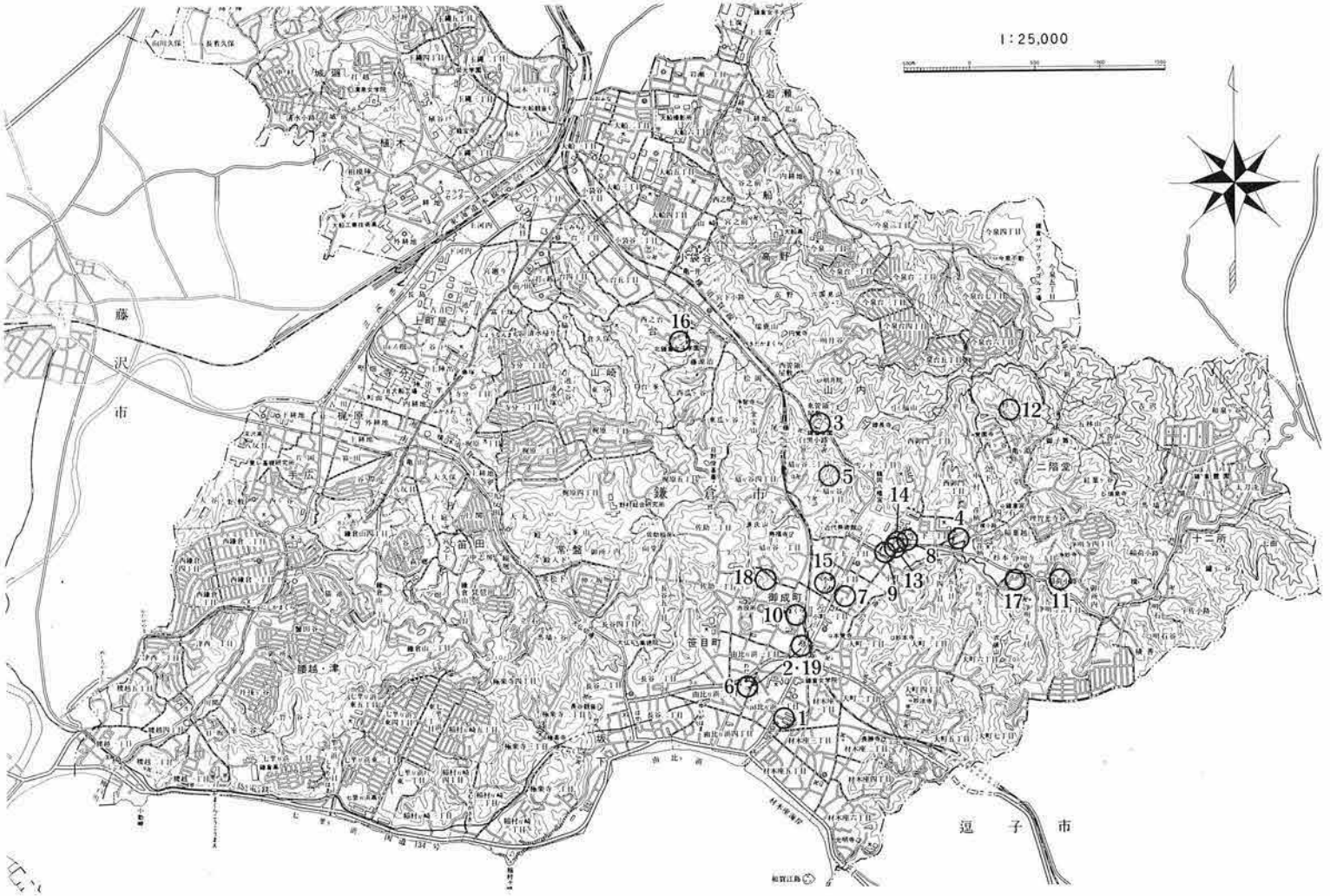
平成３年度発掘調査地点一覧

（＊印は本書所収遺跡）

No.	遺跡名	所在地	事業者	調査原因	種別	面積	調査期間
1	由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (No. 372)	由比ガ二丁目 1034番１外	岡田 雅雄 外	住居併用共同住宅	墓地 外	3800㎡	3.4.1～ 3.9.15
＊2	若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)	御成町 872番14	松田 正次	店舗併用住宅	都市	70㎡	3.4.1～ 3.5.7
3	保寧寺跡 (No. 175)	山ノ内字東菅領屋敷133番３外	大和 豊	店舗併用住宅	寺院	85㎡	3.4.15～ 3.7.20
4	大倉幕府周辺遺跡群 (No. 49)	二階堂字荏柄 38番１	神田兼太郎	住居併用共同住宅	官衙	80㎡	3.6.1～ 4.1.31
5	多宝寺跡 (No. 187)	扇ガ谷二丁目 250番６外	中島 千波	専用住宅	寺院	140㎡	3.7.1～ 3.8.15
6	長谷小路周辺遺跡 (No. 236)	由比ガ浜三丁目 229番外	二階堂昌喜	住居併用共同住宅	都市	150㎡	3.7.15～ 3.12.28
7	宇津宮辻幕府跡 (No. 239)	小町二丁目 354番12外	石渡 敏三	住居併用共同住宅	官衙	80㎡	3.9.25～ 3.10.31
8	大倉幕府周辺遺跡群 (No. 49)	雪ノ下三丁目 606番１	安田 八郎	住居併用共同住宅	官衙	120㎡	3.8.19～ 3.12.17
9	政所跡 (No. 247)	雪ノ下三丁目 988番	酒井 駿一	住居併用店舗・共同住宅	官衙	40㎡	3.11.5～ 4.2.12
10	若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)	御成町 811番	谷口 政雄	店舗併用住宅	都市	60㎡	3.11.1～ 3.12.29
11	公方屋敷跡 (No. 268)	浄明寺三丁目 143番２	横塚ヒロ子	専用住宅	屋敷	200㎡	4.1.6～ 4.3.31
12	永福寺跡 (No. 61)	二階堂字杉ケ谷 520番１外	井出 光二	専用住宅	寺院	1012㎡	4.3.13～ 4.3.31

本書所収の平成2年度調査地点

No.	遺跡名	所在地	事業者	調査原因	種別	面積	調査期間
13	政所跡 (No. 247)	雪ノ下三丁目 966番1	西山富美江	店舗併用住宅	官衙	60㎡	2.6.15～ 2.8.18
14	政所跡 (No. 247)	雪ノ下三丁目 965番	石井　豊美	店舗併用住宅	官衙	70㎡	2.10.14 ～2.11.6
15	若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)	小町二丁目12番15	竹内　一	店舗併用住宅	都市	80㎡	2.11.2～ 3.3.26
16	台山遺跡 (No. 29)	台字西ノ台1624番3外	長谷部尅彦	専用住宅	散布地外	17㎡	2.11.8～ 2.11.13
17	田楽辻子周辺遺跡 (No. 33)	浄明寺二丁目 562番33	酒井　敦生	専用住宅	屋敷	30㎡	2.12.5～ 2.12.19
18	無量寺跡 (No. 196)	御成町39番6	神田　原卓	専用住宅	寺院	100㎡	3.1.25～ 3.3.30
19	若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)	御成町872番14	松田　正次	店舗併用住宅	都市	70㎡	3.2.13～ 3.3.30



平成 3 年度の緊急発掘調査地点(1～12)と本書掲載の平成 2 年度調査地点(13～19)（遺跡名は一覧表参照）

Ⅰ．政　　所　　跡（No. 247）

雪ノ下三丁目966番１地点

例　言

1．本報は政所跡内の鎌倉市雪ノ下三丁目966番1に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．約180㎡の調査対象面積に対して、自己用住宅分約60㎡を国庫補助事業調査として鎌倉市教育委員会が実施し、残りの対象部分は政所跡発掘調査団が調査を行なった。調査期間は平成2年6月15日から8月18日までである。

3．調査体制は下記の通りである。

主任調査員　手塚直樹
調　査　員　瀬田哲夫、田畑佐和子
調査補助員　小柳津シゲコ、上原恵美、大沼真理、明木文吾、野本賢二、山本直孝
調査協力者　滝田薫、山崎理香、石丸運人、鎌倉市高齢者事業団

4．本報の執筆、編集は瀬田が行なった。

5．本報に使用した写真は遺構を手塚、瀬田が、遺構全景写真はリモコン式高所撮影装置により木村美代治が、遺物を手塚、田畑が撮影し遺跡遠景は（株）シン航空写真が撮影した。

6．本遺跡の出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

7．発掘調査、報告書作製にあたり次の諸氏、諸機関より御協力、御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）飯村均（福島県教育委員会）、伊藤正義（福島県立博物館）、藤原良章（青山学院大学）、谷川章雄（早稲田大学）、関口広次、久保田正寿（青梅市教育委員会）、金丸義一（芝浦工業大学）、鎌倉考古学研究所、安藤建設

目　　次

本 文 目 次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 17
第二章　調査経緯と堆積土層 …… 20
　第１節　調査経緯 …… 20
　第２節　堆積土層 …… 21
第三章　検出された遺構と遺物 …… 22
　第１節　第一面の遺構と遺物 …… 22
　　Ⅰ．第一面検出の遺構と遺物 …… 22
　　(1)　検出遺構概要 …… 22
　　(2)　第一面面上出土遺物 …… 22
　　Ⅱ．A～B－１～３グリット検出の遺構と遺物 …… 26
　　(1)　土壙 …… 26
　　(2)　かわらけ溜り …… 28
　第２節　第二面の遺構と遺物 …… 44
　　Ⅰ．第二面検出の遺構と遺物 …… 44
　　(1)　検出遺構概要 …… 44
　　(2)　第二面面上出土遺物 …… 44
　　Ⅱ．A～B－１～３グリット検出の遺構と遺物 …… 48
　　(1)　東西溝 …… 48
　　(2)　井戸 …… 52
　　(3)　大柱穴Ａ，Ｂ …… 52
　　(4)　礎板列 …… 53
　　(5)　柱穴列 …… 53
　第３節　南北大溝 …… 56
　　Ⅰ．検出遺構 …… 56
　　Ⅱ．出土遺物 …… 58
　第４節　道路 …… 85
　　Ⅰ．検出遺構 …… 85
　　Ⅱ．出土遺物 …… 85
第四章　まとめと考察 …… 89

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡周辺地図…… 18
Fig. 2 グリット割付図 …… 20
Fig. 3 標準堆積土層模式図 …… 21
Fig. 4 第一面遺構配置図 …… 23
Fig. 5 第一面面上出土遺物 …… 24
Fig. 6 A～B－1～3グリット検出遺構 ‥ 27
Fig. 7 土壙4出土遺物 …… 28
Fig. 8 土壙7出土遺物 …… 28
Fig. 9 かわらけ溜り遺物出土状況 …… 29
Fig. 10 かわらけ溜り出土かわらけ(1) …· 30
Fig. 11 かわらけ溜り出土かわらけ(2) …· 31
Fig. 12 かわらけ溜り出土かわらけ(3) …· 32
Fig. 13 かわらけ溜り出土かわらけ(4) …· 33
Fig. 14 かわらけ溜り出土かわらけ(5) …· 34
Fig. 15 かわらけ溜り出土かわらけ(6) …· 35
Fig. 16 かわらけ溜り出土かわらけ(7) …· 36
Fig. 17 かわらけ溜り出土かわらけ(8) …· 37
Fig. 18 かわらけ溜り出土遺物 …… 42
Fig. 19 第二面遺構配置図 …… 45
Fig. 20 第二面面上出土遺物(1) …… 46
Fig. 21 第二面面上出土遺物(2) …… 47
Fig. 22 A～B－1～3グリット検出遺構‥ 49
Fig. 23 東西溝出土遺物(1) …… 50
Fig. 24 東西溝出土遺物(2) …… 51
Fig. 25 井戸出土遺物 …… 52
Fig. 26 柱穴例 …… 54
Fig. 27 南北大溝 …… 57
Fig. 28 南北大溝内出土遺物(1) …… 59
Fig. 29 南北大溝内出土遺物(2) …… 61
Fig. 30 南北大溝内出土遺物(3) …… 62
Fig. 31 溝Ⅰ出土遺物(1) …… 65
Fig. 32 溝Ⅰ出土遺物(2) …… 66
Fig. 33 溝Ⅱ出土遺物…… 67
Fig. 34 溝Ⅲ出土遺物(1) …… 70
Fig. 35 溝Ⅲ出土遺物(2) …… 72
Fig. 36 溝Ⅲ出土遺物(3) …… 74
Fig. 37 溝Ⅲ出土遺物(4) …… 75
Fig. 38 溝Ⅳ出土遺物(1) …… 77
Fig. 39 溝Ⅳ出土遺物(2) …… 78
Fig. 40 溝Ⅴ出土遺物(1) …… 80
Fig. 41 溝Ⅴ出土遺物(2) …… 82
Fig. 42 溝Ⅴ出土遺物(3) …… 83
Fig. 43 溝Ⅵ出土遺物 …… 84
Fig. 44 道路 …… 86
Fig. 45 地鎮遺物 …… 87
Fig. 46 道路面出土遺物 …… 87
Fig. 47 溝A、B出土遺物 …… 88
Fig. 48 政所Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ地点遺構配置模式図… 90
Fig. 49 政所跡概念図 …… 91

写真図版

PL. 1　A. 調査地点遠景（北から）
　　B. 調査地点遠景（上空から）
PL. 2　A. 調査地点近景（北から）
　　B. 調査地点近景（東から）
　　C. 調査地点近景（東から）
PL. 3　A. 第一面全景ポール写真（西から）
　　B. 第一面全景ポール写真（東から）
　　C. A～B－2～3グリット（西から）
　　D. A～B－2～3グリット（北から）
PL. 4　A. かわらけ溜り（南から）
　　B. かわらけ溜り（西から）
　　C. かわらけ溜りスナップ（東から）
PL. 5　A. かわらけ溜りスナップ（南から）
　　B. かわらけ溜りスナップ（南から）
　　C. かわらけ溜りスナップ（西から）
PL. 6　A. かわらけ溜りスナップ（西から）
　　B. かわらけ溜りスナップ（北から）
　　C. かわらけ溜りスナップ（北から）
PL. 7　A. かわらけ溜りスナップ（北から）
　　B. かわらけ溜りスナップ（北から）
　　C. かわらけ溜りスナップ（北から）
PL. 8　A. かわらけ溜りスナップ（南から）
　　B. かわらけ溜りスナップ（北から）
　　C. かわらけ溜りスナップ（北から）
PL. 9　A. 土壙3堆積土層（東から）
　　B. 土壙4堆積土層（北から）
　　C. 土壙5堆積土層（東から）
PL. 10　A. 第二面全景ポール写真（西から）
　　B. 第二面全景ポール写真（東から）
　　C. A～B－1～3グリット（北から）
　　D. A～B－1～3グリット（南から）
PL. 11　A. 井戸周辺（東から）
　　B. 井戸（東から）
　　C. 東西溝（東から）
PL. 12　A. C－2グリット木組（東から）
　　B. C－2グリット木組（上から）
　　C. C－2グリット木組（北から）
PL. 13　A. 大柱穴A. B（東から）
　　B. 大柱穴B（北から）
　　C. 大柱穴A（東から）
PL. 14　A. 南北大溝Nトレンチ（東から）
　　B. 南北大溝Nトレンチ（西から）
　　C. 南北大溝Nトレンチ（合成写真）
PL. 15　A. 南北大溝Nトレンチ北壁堆積土層
　　B. 南北大溝Nトレンチ南壁堆積土層
　　C. 南北大溝Nトレンチ南北木組(南から)
PL. 16　A. 南北大溝Nトレンチ南北木組(東から)
　　B. 南北大溝Nトレンチ柱（南から）
　　C. 南北大溝Nトレンチ柱（南から）
PL. 17　A. 南北大溝Sトレンチ（合成写真）
　　B. 南北大溝Sトレンチ（合成写真）
PL. 18　A. 南北大溝Sトレンチ（西から）
　　B. 南北大溝Sトレンチ（東から）
　　C. 南北大溝Sトレンチ（南から）
PL. 19　A. 南北大溝Sトレンチ木組（西から）
　　B. 南北大溝Sトレンチ木組（北から）
PL. 20　A. 南北大溝Sトレンチ溝Ⅰ堆積土層
　　B. 南北大溝Sトレンチ溝Ⅱ堆積土層
　　C. 南北大溝Sトレンチ溝Ⅲ堆積土層
PL. 21　A. 南北大溝NSトレンチ（南から）
　　B. 南北大溝NSトレンチ（南から）
　　C. 南北大溝NSトレンチ（東から）

PL. 22　A. 南北大溝 NS トレンチ（北から）
B. 南北大溝 NS トレンチ（北から）
C. 南北大溝 NS トレンチ（北から）
D. 南北大溝 NS トレンチ（北から）
PL. 23　A. 道路全景（北から）
B. 地鎮遺物出土状況（西から）
C. 地鎮遺物出土状況（西から）
PL. 24　A. 道路区土壙（南から）
B. 道路区土壙覆土堆積状況(北から)
PL. 25　A. 道路全景（南から）
B. 道路全景（西から）
C. 道路サブトレンチ（北から）
PL. 26　A. 溝Ⅴ、Ⅵ及び道路西部（南から）
B. 溝Ⅴ、Ⅵ及び道路西部（南から）
C. 溝Ⅴ、Ⅵ及び道路西部（北から）
PL. 27　A. 道路 N トレンチ（東から）
B. 道路 N トレンチ溝 A, B(南から)
C. 溝 A、B 検出木材（南から）
PL. 28　A. 道路 N トレンチ溝 C（南から）
B. 道路 N トレンチ凹地（北から）
C. 道路 N トレンチ北壁道路地業状況
PL. 29　A. 道路 S トレンチ（東から）
B. 道路 S トレンチ溝 A, B（西から）
C. 道路 S トレンチ南壁堆積土層
PL. 30　A. 第一面面上出土遺物
B. かわらけ溜り出土遺物
PL. 31　A. 第二面面上出土遺物
B. 東西溝出土遺物
C. 井戸出土遺物
PL. 32　南北大溝内出土遺物
PL. 33　A. 溝Ⅰ出土遺物
B. 溝Ⅱ出土遺物
C. 溝Ⅳ出土遺物
PL. 34　溝Ⅲ出土遺物
PL. 35　A. 溝Ⅴ出土遺物
B. 溝Ⅵ出土遺物
C. 地鎮遺物
D. 道路面上出土遺物
E. 溝 A、B 出土遺物

表　目　次

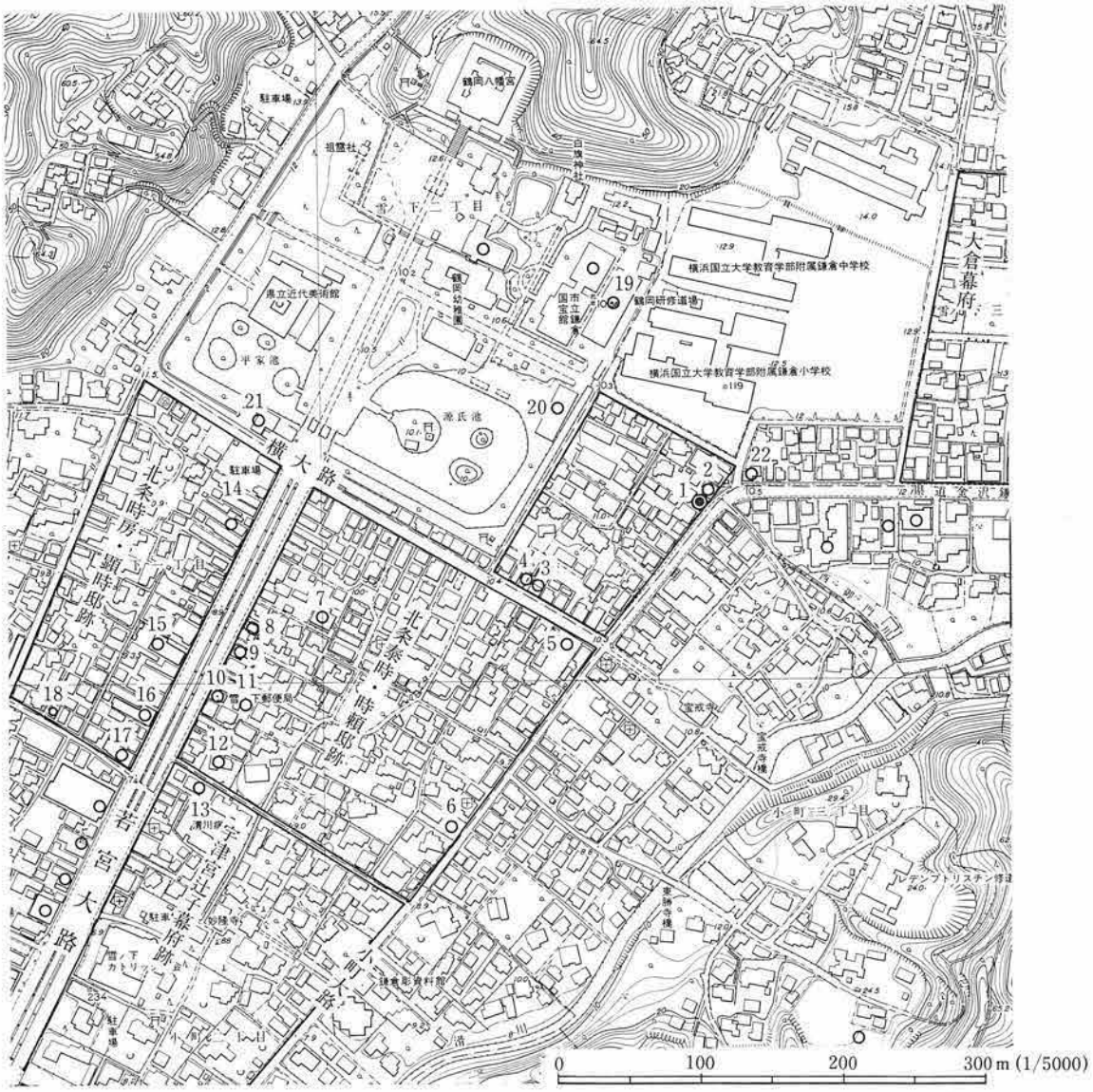
表 1．第一面面上出土かわらけ法量
表 2．土壙 4 出土かわらけ法量
表 3．土壙 7 出土かわらけ法量
表 4．かわらけ溜り出土かわらけ法量(1)
表 5．かわらけ溜り出土かわらけ法量(2)
表 6．かわらけ溜り出土かわらけ法量(3)
表 7．第二面面上出土かわらけ法量
表 8．東西溝出土かわらけ法量
表 9．井戸出土かわらけ法量
表10．南北大溝内出土かわらけ法量
表11．溝Ⅰ出土かわらけ法量
表12．溝Ⅱ出土かわらけ法量
表13．溝Ⅲ出土かわらけ法量
表14．溝Ⅳ出土かわらけ法量
表15．溝Ⅴ出土かわらけ法量
表16．溝Ⅵ出土かわらけ法量
表17．道路面上出土かわらけ法量

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 (Fig－1)

本調査地点は、「政所跡」として神奈川県遺跡台帳№247に記載されている区域の小町大路沿い北部に位置する。地番は鎌倉市雪ノ下三丁目966番１地点である。本調査地点の北東は大倉幕府、西側は鶴岡八幡宮、そして横大路をはさんだ南側は「北条泰時、時頼邸（同台帳№282)」の区域となる。また、「政所跡」区域の北東角には「筋替橋」の石碑が建てられている。

政所は親王家、摂関家、有力寺社などの家政事務機関とて生まれたものである。鎌倉幕府の政所は源頼朝が公家の政所にならい、公文所のほかに設置して幕府の財政、市政、訴訟など庶務一般を司った機関である。職制は別当、令、案主、知家事等により構成され、初め大江広元が別当となり、まもなく北条氏に移り執権兼任の職となった。令は一般に執事と呼び二階堂氏が世襲した。室町幕府の政所は財政を掌り、金穀、田畑、貸借の訴訟を取り扱い、執事の下に執事代、政所代、寄人、公文等の諸役があり、執事の職は伊勢氏が世襲し、政所代はその被官である蜷川氏が担当した。鎌倉幕府の政所の初見は『吾妻鏡』の文治元年（1185）９月５日の条の記載であり、それ以前の元暦元年（1184）年８月、公文所新造の時に共に設置されたと推定される。（註１）『吾妻鏡』建保元年（1213）５月２日の条によると和田義盛の兵が大江広元邸の門に到り矢戦をし、そののちに横大路に到り、御所の南西政所の前で御家人等がこれを支えたとある。そして横大路に注して御所の南西の道なりと記している。また、『金沢文庫古文書』の「随求法」の奥書に元応三年（1321）２月５日、相州鎌倉塔ノ辻の政所の東庇で書いたとある。「鎌倉市史」では塔ノ辻は横大路と小町大路との交叉点であるとしており、以上のことから政所は八幡宮の東、横大路の北、小町大路の西、鶴岡八幡宮の唐門から筋替橋へ抜ける道の南の一帯と考えられる。また、『吾妻鏡』の記載から政所は承久元年（1219）２月から元弘三年（1333）５月までの間に六度焼失していることが知られる。さらに、「筋替橋」は『吾妻鏡』には「須知替橋」、「須地賀江橋」とも記されており、同書の文永二年（1265）３月５日の条では町屋免許地の１つとして名を挙げられており、活発な商業活動が営なまれていたことであろう。

政所跡区域では今までに３箇所の調査が行なわれており、(Fig.１－１～３)、いずれの調査地点からも横大路、小町大路と並走関係にある大溝、或いは道路地業などが検出されている。しかし、内郭部分にはほとんど調査範囲が及ばず、掘立柱建築址、柵列状の柱穴列等を検出しただけであり、政所中枢域を思わせるような遺構は検出されていない。しかし、政所Ⅰ（雪ノ下三丁目987番1･2）地点（Fig.１－３）に於いては東西大溝の北側に構築された土塁が確認されており、この一帯に公的機関が存在していたことを示唆している。現在（1992年１月31日)、政所Ⅰ地点に西隣する雪ノ下三丁目988番地点（Fig.1－４）に於いて調査が行なわれており、かわらけ溜り、柱穴列等を検出している。今後、土塁、溝等についての新知見が得られることであろう。また、鶴岡八幡宮研修道場用地（Fig.１－19）で行なわれた調査からは鎌倉時代初期の曲線的な三方堀と、それ以降



1．雪ノ下三丁目966番１地点（本調査地点）
2．雪ノ下三丁目965番地点
3．雪ノ下三丁目987番1・2地点
4．雪ノ下三丁目988番地点
5．雪ノ下一丁目395番地点
6．雪ノ下一丁目432番２地点
7．雪ノ下一丁目374番２地点
8．雪ノ下一丁目371番１地点
9．雪ノ下一丁目372番７地点
10．雪ノ下一丁目369番地点
11．雪ノ下一丁目369番他地点
12．雪ノ下一丁目419番３地点
13．小町二丁目366番他地点
14．雪ノ下一丁目293番１地点
15．雪ノ下一丁目271番１地点
16．雪ノ下一丁目273番□地点
17．雪ノ下一丁目274番２地点
18．雪ノ下一丁目233番９地点
19．鶴岡八幡宮境内遺跡（研修道場用地）
20．鶴岡八幡宮境内遺跡（源平茶屋）
21．鶴岡八幡宮前遺跡（銀杏用地）
22．雪ノ下三丁目606番１地点

Fig.1　遺跡周辺地図

の直線的な土塁が検出されている。この土塁は13世紀中期以降に整備され、14世紀の規模は幅約10m、高さ約2mを測り居館等の外堀と同様に防備施設としての役割が多分にあったものと考えられる。また、Fig.1－21地点では下水道工事箇所という狭い調査面積ではあるが、八幡宮南側の三方堀の北壁が確認され、堀の深さは2m以上に及び、中位に「犬走り」のような平垣をもつ板組を検出している。

「北条泰時・時頼邸」では既に8箇所（Fig.1－5～12）で調査が実施され、若宮大路、小町大路、横大路とそれぞれ並走関係になる大溝や柵列状の柱穴状、掘立柱建築址、井戸、土壙等が検出されている。また、若宮大路をはさんだ西側の「北条時房・顕時邸跡」（同台帳№278）でも既に5箇所（Fig.1－14～18）の調査が行なわれており、若宮大路の西側を流れる南北大溝や礎石建物、掘立柱建築址、柵列状の柱穴列、板囲い建物（長屋状を呈する建物）、井戸、土壙等を検出している。両邸跡区域では土塁は確認されていない。

本調査地点と後に調査を実施した北隣する政所Ⅲ（雪ノ下三丁目965）地点（Fig.1－2）とは共通する遺構を検出しているが、道路、南北溝の主軸方位等について新たな知見を得ている。政所跡と推定される当該地域については今後の調査、研究の蓄積により、諸施設の構造、規模、区画等の解明が成されることであろう。

註1．高柳光寿。『鎌倉市史　総説編』1959。吉川弘文館。P172～173による。

〈参考文献〉

『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1～7』鎌倉市教育委員会。1985～1991年。
『政所跡』政所跡発掘調査団編。1991年。
『鶴岡八幡宮境内研修道場用地発掘調査報告書』同発掘調査団編。1983年。
『北条時房・顕時邸跡』同発掘調査団編。1988年。
『北条時房・顕時邸跡』同発掘調査団編。1989年。
『北条泰時・時頼邸跡』同発掘調査団編。鎌倉市教育委員会発行。1985年。
『鎌倉市史　総説編』高柳光寿。吉川弘文館　1959年。
『鎌倉事典』白井永二編。東京堂出版。1986年。
『鎌倉武家事典』出雲隆編。青蛙房。1972年。
『大系日本の歴史5　鎌倉と京』五味文彦。小学館。1988年。
『よみがえる中世3　武家の都鎌倉』石井進、大三輪龍彦編。平凡社。1989年。

第二章　調査経緯と堆積土層（Fig. 2，3）

本章においては調査の経緯と、検出された標準となる基本堆積土層についての概略を述べる。

第Ⅰ節　調査経緯

本調査は店舗併用住宅建設に伴なう緊急発掘調査として行なわれた。調査面積は約180㎡であり、自己用住宅分を対象に調査面積の3分の1を国庫補助事業調査として行ない、残りの部分は「政所跡発掘調査団（団長　手塚直樹）が実施した。

平成元年7月19日に試掘調査を実施し、現地表下60cm程で中世遺構が良好に遺存していることが確認され、翌年6月15日から現地調査が開始された。掘削深度の規定があり、調査区内全体を中世基盤層である地山まで掘り下げることは不可能であり、掘削深度を越える南北大溝遺構に対しては調査区北壁、南壁際に2箇所のトレンチを設定した。また、道路遺構に対しても2箇所のトレンチ掘りと、道路範囲確認のため現歩道側にトレンチを設定して調査を実施した。

また、廃工拠理の関係から調査区のほぼ3分の2を占める西部を先に調査し、平成二年8月18日に器材を撤収し現地調査の全行程を終了した。

調査にあたり、地境a，bを結んだ直線を南北基準軸とし、地境aから西へ90°振り、西へ22mの地点をB－2グリットポイントとした。東西軸には西から東へ向けてアルファベット（A～G）を、南北軸には南から北へ向けて算用数字（1～3）を付し、調査対象の敷地内に4.0mの方眼を配した。各々の方眼区画の名称には、その南西角の軸線交点を充てた。また、南北軸線は磁北に対して48°東に傾むいている。

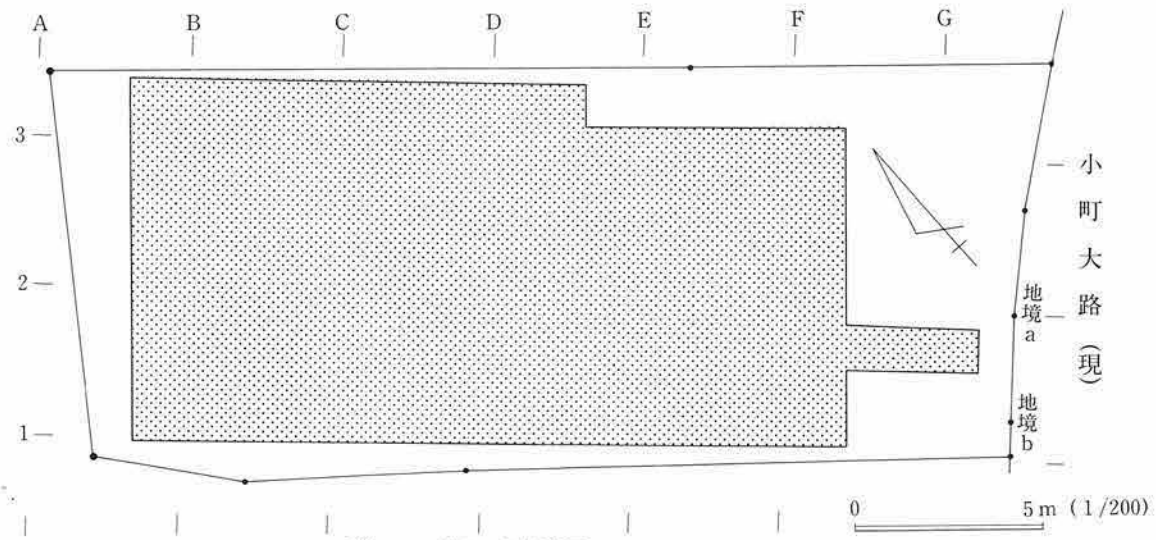
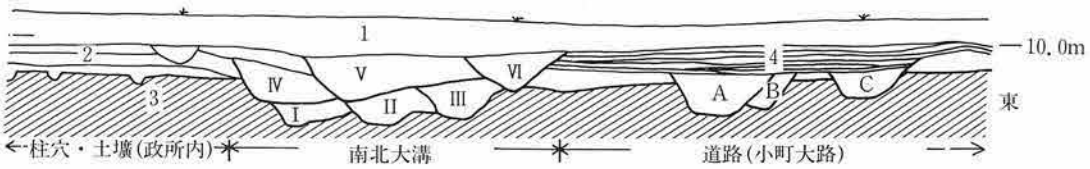


Fig.2　グリット割付図



1．表土、近現代撹乱。
2．第1面構成土、及びかわらけ溜り。
3．中世地山（黒褐色粘質土）。
4．道路地業構成土。
Ⅰ～Ⅵ．南北大溝。
A～C．道路下溝。

Fig.3　標準堆積土層模式図

第2節　堆積土層（Fig. 3）

本調査地点における標準となる堆積土層は、およそ次の6層に分けることができる。

第1層は表土層であり、近、現代の客土、撹乱である。現地表下に40～60cm程堆積している。

第2層は第一面を構成する暗褐色粘質土に白色粒子を混入する層であり、しまりの良好なものである。調査区南西部ではかわらけ溜りを検出し、1000点以上ものかわらけが出土している。

第3層は中世地山である黒褐色粘質である。しまりは良好である。調査区西部では海抜9.1m、東部では9.2mで検出されている。この黒褐色粘質土の下には調査区北部のトレンチにおいて海抜約8.5mで灰緑色粘質土、海抜8.2mで青灰色砂質粘土（シルト）層を検出している。

第4層は中世道路地業構成土である。土丹地業、暗褐色粘質土、細砂及び貝殻細粒による地業、暗褐色粘質土による地業により構成される。土丹地業は2時期確認されており、造り替えが考えられる。この道路地業は東から西へ、また、北から南へ向かい緩やかに傾斜している。

道路地業の西側は6時期の浚渫・改修が考えられる南北大溝（溝Ⅰ～Ⅵ）である。覆土には多量の遺物を含み、植物遺体、水摩した遺物片を含む層も確認されている。また、15cm程の角柱や、厚さ約1.0cm、幅約12cmの板材を網代状に組み合わせた板組も検出されている。

道路地業の下からは南北方向に流れる3条の溝（溝A～C）を検出した。いずれの覆土も暗褐色粘質土を主体としており、しまりは良好である。道路地業の西側を流れる南北大溝群と異なり、出土遺物も少ない。

第三章　検出された遺構と遺物

本章では検出された遺構と出土した遺物について述べていく。本遺跡は大きく分けてA～B－1～3グリットに位置する柱穴、土壙、井戸等を検出した「建物」と、C～D－1～3グリットに位置する「南北大溝」と、さらにD～G－1～3グリットの「道路」との3区に大別できる。さらに「建物」においては、大きく捉えて2時期の生活面を、「南北大溝」では6時期の掘り直し（造り替え）を、そして、「道路」では道路地業とその下の3条の南北溝を確認することができた。ここでは、まず、「建物」第一面と「南北大溝」、「道路」とを合成したものを第一面とし、次に「建物」第二面と「南北溝」と「道路」とを合成したものを第二面として言及した後に、「南北大溝」、「道路」について説明を加えていく。

また、かわらけ法量の内高とは器高から底部厚をひいた数値であり、手づくね成形の底径は体部外面中位の指頭痕と横ナデ調整との間に生ずる陵の最広部の直径数値であることを付記しておく。

第Ⅰ節　第一面の遺構と遺物

Ⅰ．第一面検出の遺構と遺物

(1)　検出遺構概要　(Fig. 4)

調査区北西部において現地表下80cm程で白色微粒子を含む暗褐色粘質土を検出し、これを第一面とした。この粘質土はA～B－2～3グリット内に広がり、柱穴約20口、土壙8基を検出した。A～B－1グリットはかわらけ溜りとなる。この遺構の西、南は調査区外に広がり、また、東は南北大溝により削られているため、全体規模を把握することはできなかった。以上がA～B－1～3グリットの様相であり、東は南北大溝、さらに、道路となる。

(2)　第一面面上出土遺物　(Fig. 5)

ここでは第一面遺物包含層及び第一面上出土の遺物を報告する。また、柱穴出土の遺物片も、特に遺構（建物、柵）への帰属が不明瞭なものはここに含めた。

1～27はかわらけである。1～4は手づくね成形の小皿、5～12はロクロ成形の小皿、13～18は手づくね成形の大皿、19～23はロクロ成形の大皿、24～27は内折れタイプである。手づくねタイプは全体に器壁が厚く、ボッテリとしたものが多く、16、17のようにやや器壁が薄く、体部が開くものもある。ロクロ成形は口径と底径との比率が小さく、器高の低いもの（5～9,19,20）と、器高のやや高いもの（10～12、21～23）とがある。内折れタイプでは24のみが手づくねであり、体部断面は三角形を呈する。他はロクロ成形（25～27）であり、口縁は大きく内折れる。

28－青磁劃花文碗。口径15.6cm。内面には沈線様の横線と縦の界線があり、飛雲文がみられる。釉は深緑色。胎土は灰色を呈する。焼成良好。

29－青磁劃花文碗。口径14.9cm。内面には沈線様の横線と縦の界線がみられる。釉は深緑色。胎

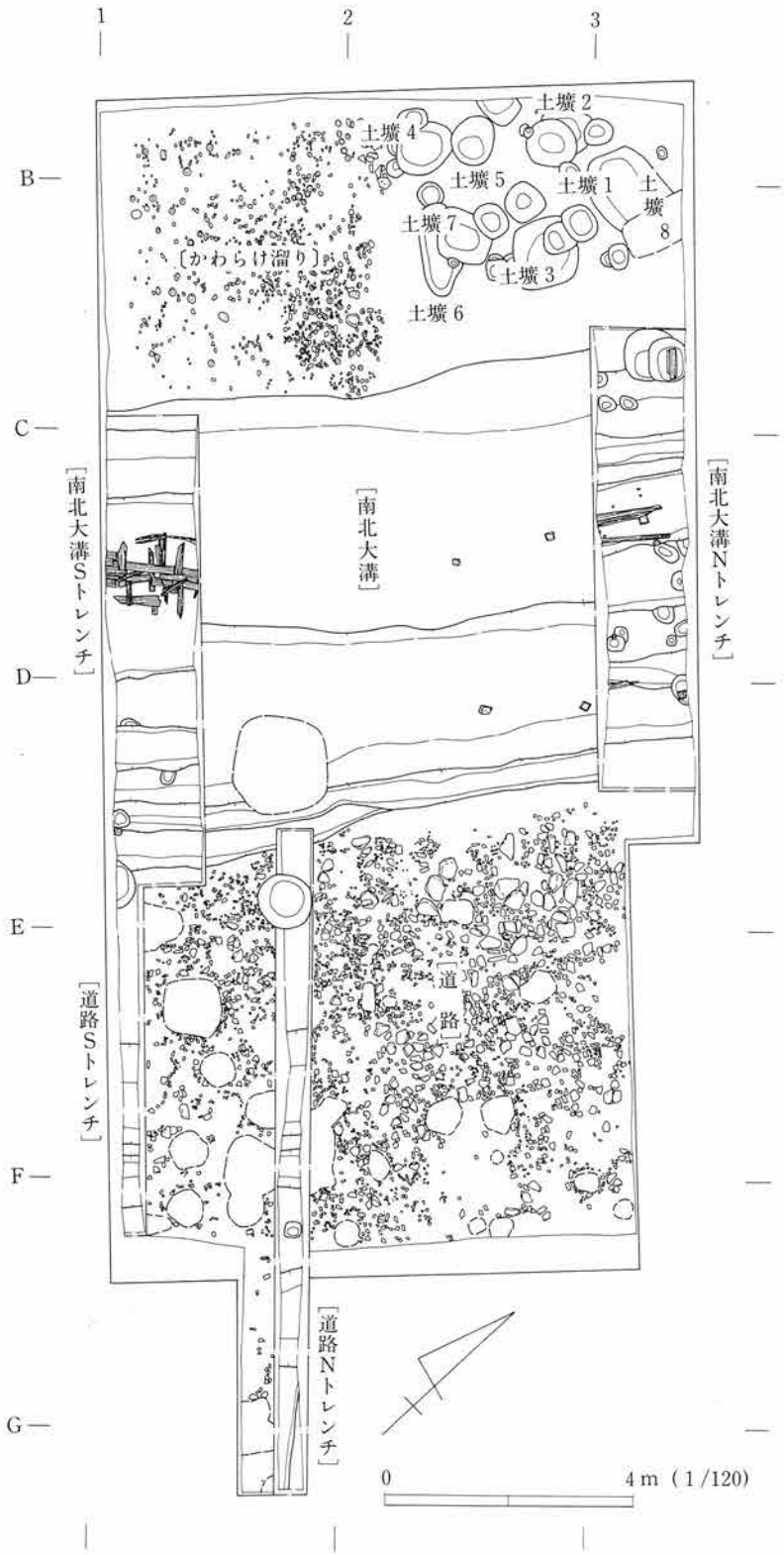


Fig.4　第一面遺構配置図

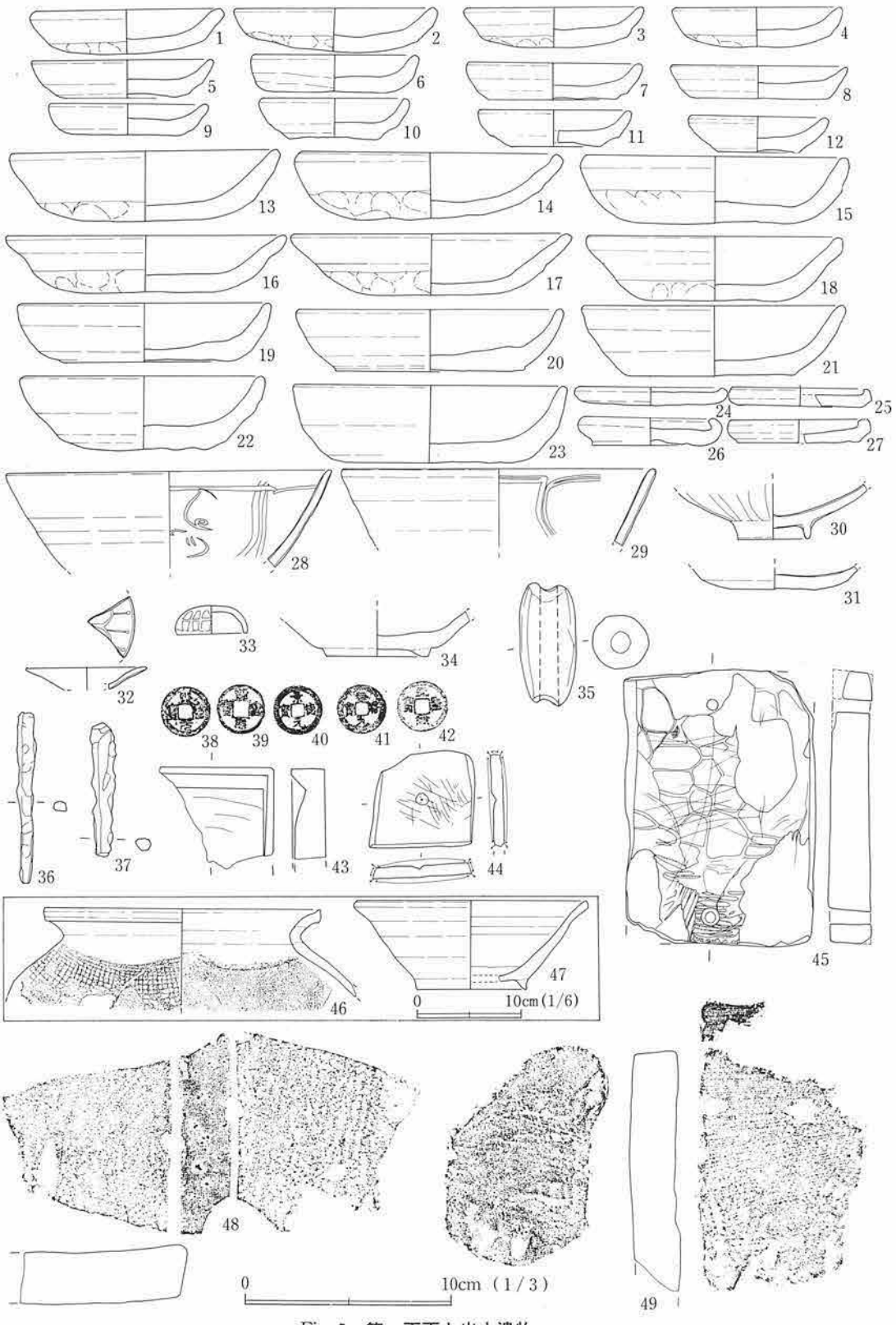


Fig. 5 第一面面上出土遺物

No.	口径	底径	器高	内高	7	8.2	6.2	1.8	1.1	14	12.3	11.3	3.2	2.3	21	12.5	8.2	3.3	2.6
1	8.9	7.5	2.1	1.4	8	8.4	6.5	1.6	0.8	15	12.6	12.2	3.7	2.2	22	11.4	6.1	3.5	2.3
2	9.5	8.3	2.1	1.3	9	7.3	5.4	1.5	0.7	16	13.4	11.0	2.7	1.9	23	13.0	8.0	3.7	2.7
3	8.4	7.0	1.9	1.1	10	6.9	4.5	1.9	1.2	17	13.0	10.6	3.0	2.4	24	6.9	6.6	1.0	0.3
4	7.9	7.1	1.9	1.1	11	7.1	4.6	1.8	1.0	18	12.0	9.6	3.1	2.3	25	6.5	6.0	0.9	0.3
5	8.5	6.4	1.7	1.0	12	6.4	3.9	1.8	1.1	19	11.9	8.6	3.8	2.2	26	6.2	5.7	1.3	0.5
6	7.7	6.7	1.7	1.0	13	12.6	10.4	3.3	2.6	20	12.5	9.1	3.0	2.2	27	6.5	6.0	1.1	0.7

単位（cm）

表１．第一面面上出土かわらけ法量（Fig. 5）

土は灰色を呈する。焼成良好。

30－青磁鎬蓮弁文碗。高台外径3.5cm。高台内の削りは深く、高台畳付部は無釉である。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。焼成良好。

31－白磁皿。底径4.0cm。内面のみ淡乳緑釉が施される。焼成不良の為、胎土は淡乳色を呈す。

32－青白磁印花文小皿。口径5.8cm。内面に花文状の文様を配する。胎土は白色、釉は水青色。

33－青白磁合子蓋。口径3.3cm、器高1.4cm。側面に幅の狭い蓮弁文を２段に配する。外面端部から内面にかけて無釉。釉は水青色透明。胎土は灰白色を呈する。焼成良好。

34－山茶碗。高台径4.9cm。底部は糸切り後、高台を貼り付ける。高台畳付にはモミ痕が残る。胎土は灰白色を呈し、やや粗い。焼成良好。

35－土錘。全長6.0cm。外径2.7cm。内径1.0cm。かわらけ質であり、暗橙色を呈する。

36－鉄釘。断面は0.8×0.6cmの長方形を呈する。残存長8.5cm。頭部を欠損している。錆激しい。

37－鉄釘。断面0.7×0.5cmの長方形を呈する。残存長8.5cm。両端を欠損している。錆激しい。

38～42は銅銭である。いずれも北宋銭であり、38、39は熙寧元宝。篆書体。40は景徳元宝。楷書体。41は祥符元宝。楷書体。42は天聖元宝。篆書体。

43－長方硯。海部の厚さは最深で0.8cm。陸部は1.4cm。周縁の厚さは1.8cm。断面は台形を呈する。

44－砥石。泥岩製の仕上砥。厚さ0.5cm程である。中央部に径0.6cm、深さ0.3cm程の凹みがある。

45－滑石製温石。長さ13.1cm。幅9.3cm。厚さ1.2cm～1.7cm。上方、下方に径0.6cmの穿孔がある。各面ともにノミ痕が顕著に残る。

46－亀山窯甕。口径26.5cm。肩部外面には格子叩目をもち、頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部は上下方向に小さく引き出される。内面は木口状工具でナデられている。器表は灰黒色、胎土は芯部が黒色、その両面が灰白色を呈し板層状をなす。

47－山茶碗窯系こね鉢。口径22.0cm。高台外径8.6cm。器高8.6cm。体部下位はヘラ削りされる。胎土は灰白色を呈し、断面ザックリとしている。内面は体部中位以下よく摩滅している。

48－平瓦。凸凹面ともに粗い離れ砂が付着する。凸面には縄叩きを有する。側面はヘラ削り。表面は灰黒色、胎土は灰白色を呈し精良。厚さ2.4cm前後である。

49－平瓦。凸凹面ともに粗い離れ砂が付着する。凸面には木口状工具（？）による横位の条線がみられる。端面はヘラ削り。胎土は白橙色を呈し精良。厚さ2.2cm前後である。

II. A～B－1～3グリット検出の遺構と遺物

ここでは道路、南北大溝の西側に位置するA～B－1～3グリットにおいて検出された土壙1～7、及びかわらけ溜りについて個々に説明を加えていく。尚、検出された柱穴20口については隅丸方形プランを呈するが大きさ、深さがまちまちであり、狭い面積での検出のため相互の関係は不明と言わざるを得ない。

(1) 土　壙

土壙1（Fig. 6）

B－2グリットに於いて検出された。平面隅丸方形を呈し、長軸（東西）0.6m、短軸（南北）0.5m、深さは検出面から0.4mである。覆土はしまりの弱い暗褐色粘質土であり、少量の炭粒を含む。図示可能な出土遺物はない。

土壙2（Fig. 6）

B－2グリットに於いて検出された。平面楕円形を呈する。長軸（南北）0.8m、短軸（東西）0.7m、検出面からの深さは0.5mである。覆土は灰褐色粘質であり、少量の炭粒を含む。図示可能な遺物は出土していない。

土壙3（Fig. 6）

B－2グリットに於いて検出された。平面隅丸方形を呈する。長軸（南北）1.1m、短軸（東西）1.0m、検出面からの深さは0.25mである。覆土は炭粒、土円粒を含むしまりの弱い暗褐色粘質土である。図示可能な遺物は出土していない。

土壙4（Fig. 6，7）

A－2グリットに於いて検出された。平面楕円形を呈する。長軸（南北）0.9m、短軸（東西）0.7m、検出面からの深さは0.3mである。覆土上層は炭を多量に混入する灰褐色粘質であり、下層は上層に比べ炭が少なくしまりも弱い。

図示可能な出土遺物はFig－7に示した。

1～2－ロクロ成形のかわらけ小皿である。口径、底径ともに広く、器高の低いタイプであり、器壁は厚手である。焼成良好。

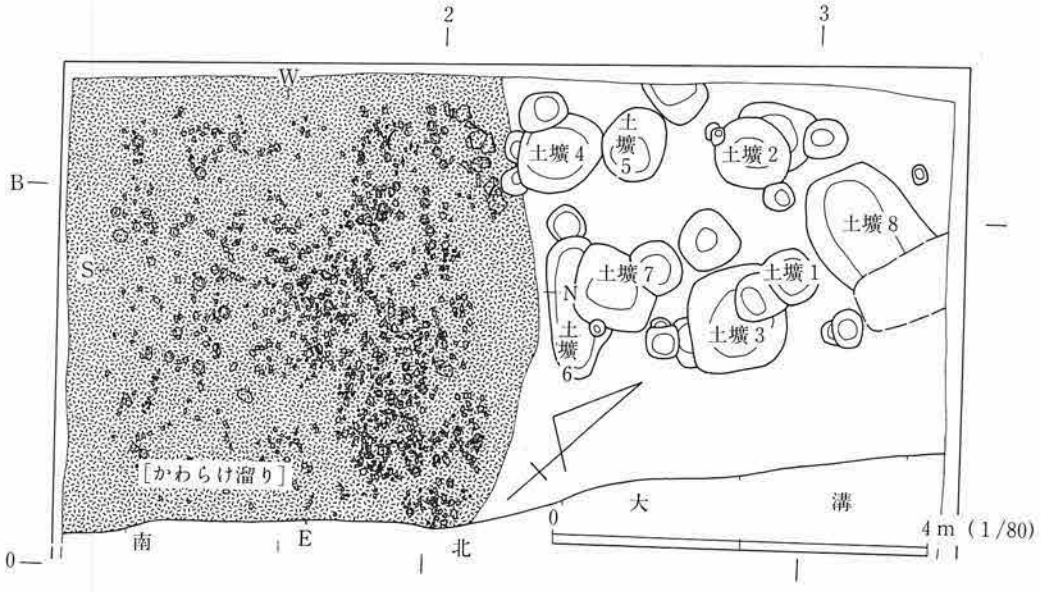
3～4－手づくね成形のかわらけ大皿である。3は器壁が厚く、やや深めのタイプであり、全体にボッテリとしたものである。体部外面中位の陵は弱い。4は器壁がやや薄く、体部外面中位の陵が明瞭なタイプである。底部は平底状を呈する。

土壙5（Fig. 6）

A－2グリットに於いて検出された。平面楕円形を呈し、長軸（南北）0.8m、短軸（東西）0.65m、検出面からの深さは0.2mである。覆土は炭粒、土円粒を含む褐色粘質土であり、しまりは弱い。図示可能な出土遺物はない。

土壙6（Fig. 6）

B－2グリットに於いて検出された。平面長楕円形を呈する。長軸（東西）1.4m、短軸（南北）



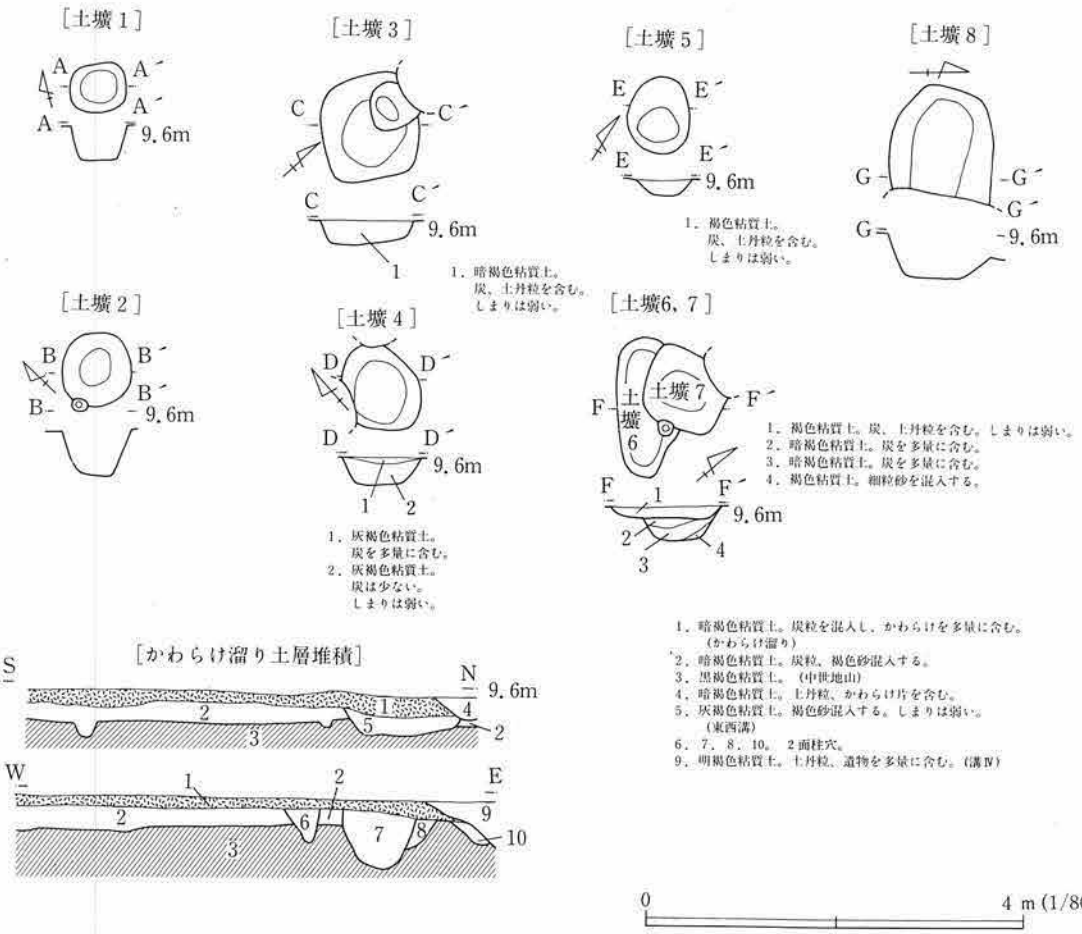


Fig.6　A～B-1～3 グリット検出遺構

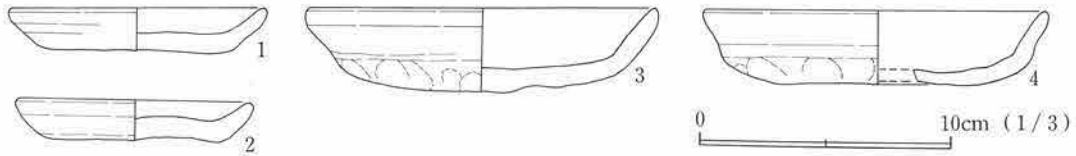


Fig.7　土壙4出土遺物

No.	口径	底径	器高	内高													
1	10.0	6.3	1.7	1.0	2	9.2	6.8	1.6	0.8	3	13.6	11.5	3.3	2.3	4	13.3	12.3	2.9	2.3

単位（cm）

表2．土壙4出土かわらけ法量（Fig.7）

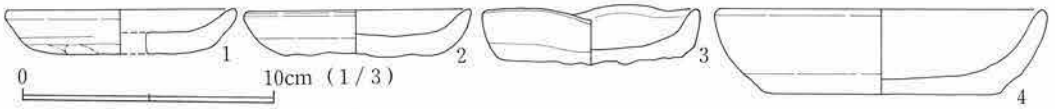


Fig.8　土壙7出土遺物

No.	口径	底径	器高	内高													
1	9.0	7.5	1.8	0.9	2	8.7	6.1	1.7	0.9	3	8.3	7.3	1.7	1.2	4	12.9	9.4	3.4	2.8

単位（cm）

表3．土壙7出土かわらけ法量（Fig.8）

0.8m、検出面からの深さは0.1mである。次に述べる土壙7と切り合っており、土壙6が新しい。覆土は土丹粒を含むしまりの弱い褐色粘質土である。図示可能な出土遺物はない。

土壙7（Fig. 6，8）

B－2グリットに於いて検出された。平面隅丸方形を呈し、長軸（東西）0.8m、短軸（南北）0.7m、検出面からの深さは0.35mである。覆土は炭を多量に含む暗褐色粘質土であり、下層は炭が少ない。

図示可能な出土遺物はFig－8に示した。

1－手づくね成形かわらけの小皿である。器壁は厚く、体部外面中位の陵は弱い。

2～3はロクロ成形かわらけの小皿である。2、3ともに器壁が厚く、焼成良好である。2の体部は開くが、3はほぼ上方に向かいたちあがる。

4－ロクロ成形かわらけの大皿である。口径、底径ともに広く、体部は丸味を帯びる。焼成良好。

土壙8（Fig. 6）

A～B－3グリットに於いて検出された。土壙東部は現代の攪乱により掘削されている。平面隅丸方形を呈するものと考えられ、長軸（東西）1.8m以内、短軸（南北）1.1m、検出面からの深さは0.45mである。覆土は土丹粒を混入する灰褐色粘質土である。図示可能な出土遺物はない。

(2)　かわらけ溜り（Fig. 9～18）

第一面A～B－1～2グリットにおける前述した土壙、柱穴群の南、及び南北大溝の西外において、かわらけを1000点以上包含するかわらけ溜りを検出した。検出レベルは海抜9.5m前後であり、炭粒を含む暗褐色粘質土に混入した状態で検出された。かわらけの検出状況から北限は2ライン以

北、1.0m以内と考えられるが、東を南北大溝により削られ、南、西は調査区外に広がるために全体規模は不明であり、東西4.8m以上、南北5.0m以上の規模をもつものと考えられる。

この堆積層は検出面から0.1～0.2m程であり、底面はほぼ平らである。明確な掘り込みは検出されてはいないが浅い凹地に一括或いは短期間に投棄されたと考えられる。

確認面における遺物の出土状況はFig. 9に示した。かわらけは完形のものが廃棄され、廃棄時

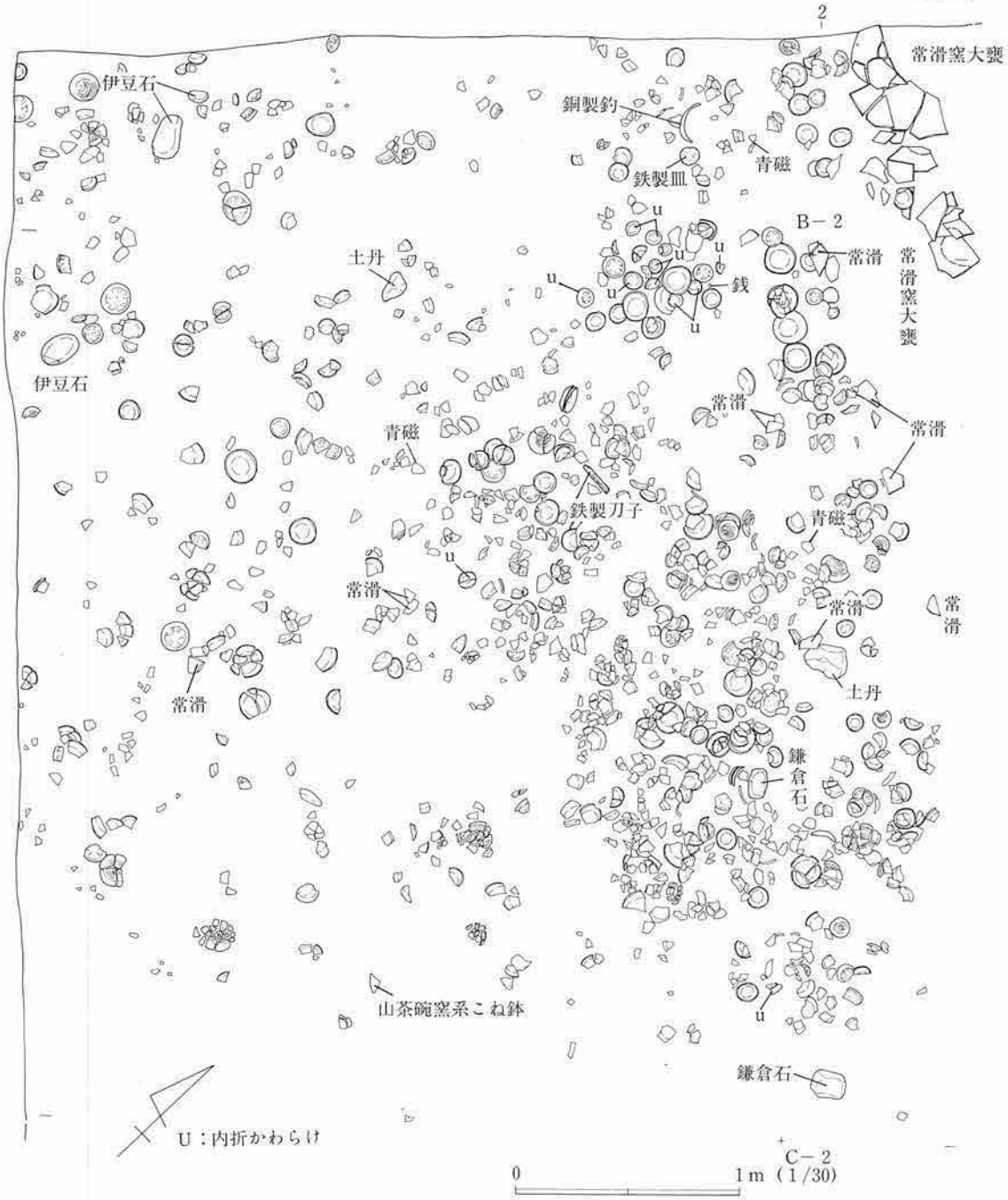


Fig.9　かわらけ溜り遺物出土状況

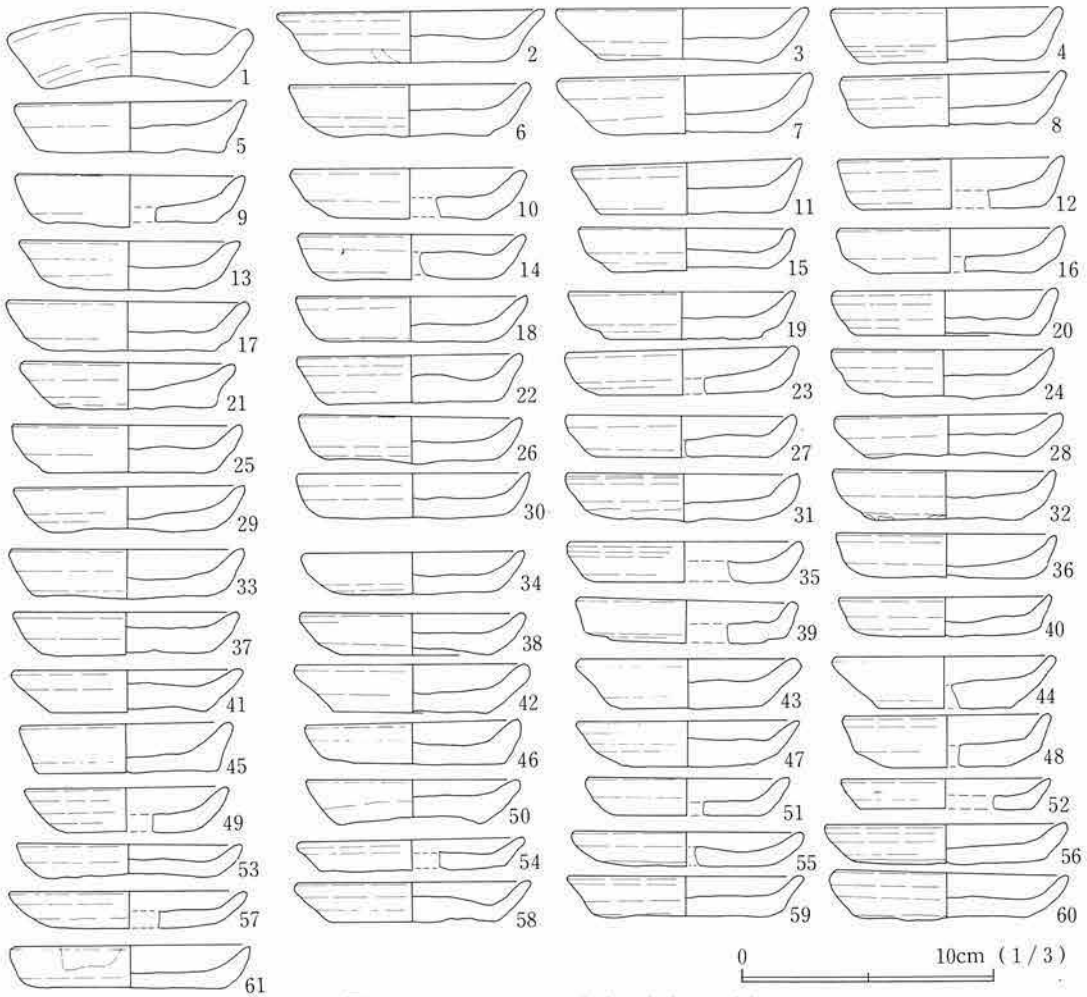


Fig.10 かわらけ溜り出土かわらけ (1)

或いは廃棄後に破損したものと考えられる。また、B－2グリット交点の南部においては内折れタイプのかわらけがまとまって出土している。出土状況は正位、伏位、横位のものが混在しており統一性はない。

図示可能な出土遺物はFig.10～18である。

Fig.10の1～61はロクロ成形のかわらけ小皿である。全体に口径、底径ともに大きく、底部が厚く、器高の低いものが主流を占める。体部中位にはナデによる凹みをもち、外反するものや、屈曲をもつもの、丸味を帯びるもの、直線的に開きながら立ちあがるものなどのバリエーションをもつ。胎土には黒色粒子を含み、焼成良好である。41～44は口径に比べ底径がやや小さいものであり、体部はハの字状に開き、器壁は厚い。48、49はやや小振りではあるが器高の高いものである。52～54は器高がかなり低いものであり、体部はやや薄いものである。

Fig.11の62～158、Fig.12の159～271は手づくね成形の小皿である。62～137は底部に丸味をもつものであり、全体に体部外面の陵は弱くボッテリとしており、器高の高いタイプである。62は特

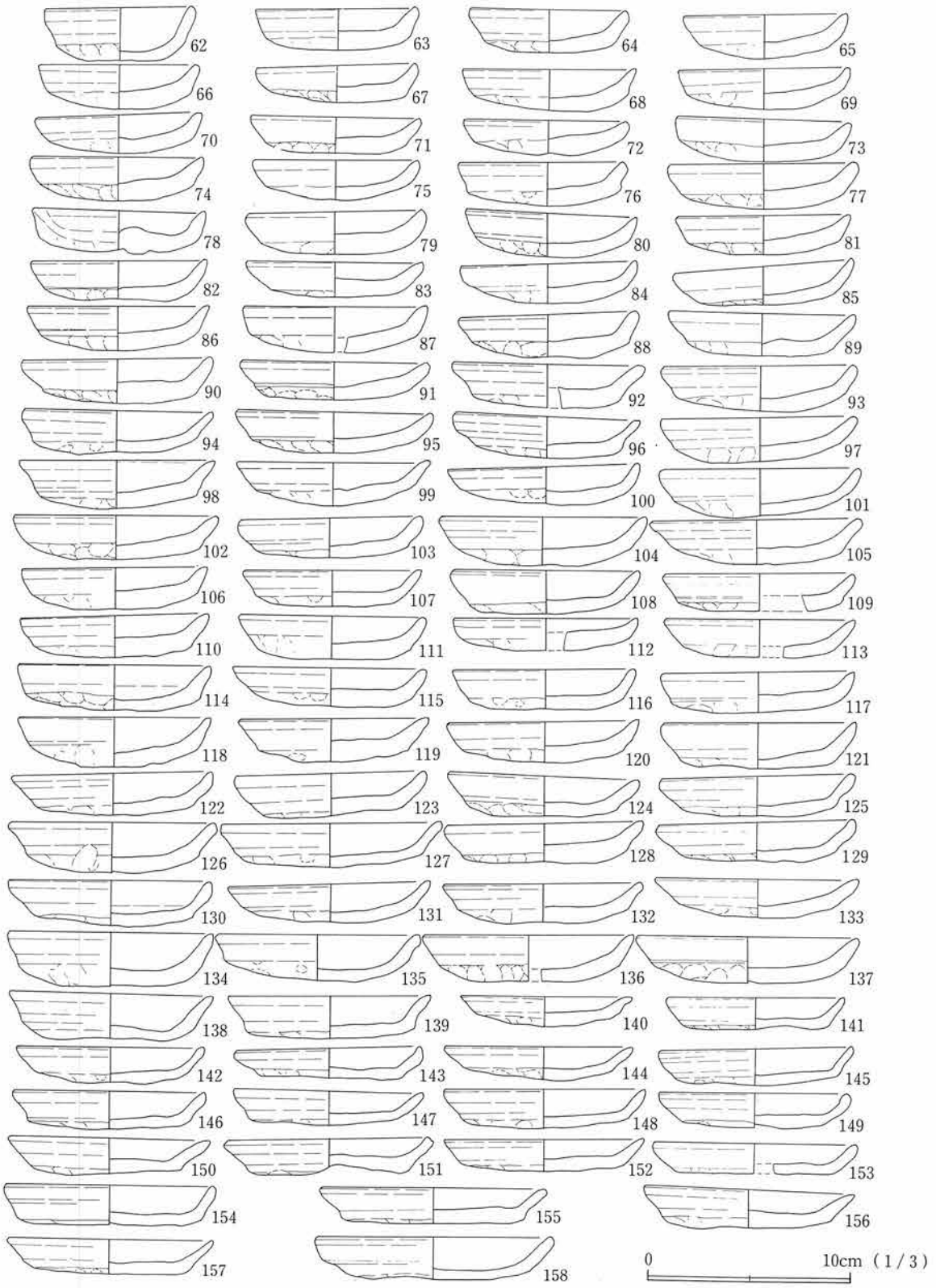


Fig. 11　かわらけ溜り出土かわらけ (2)

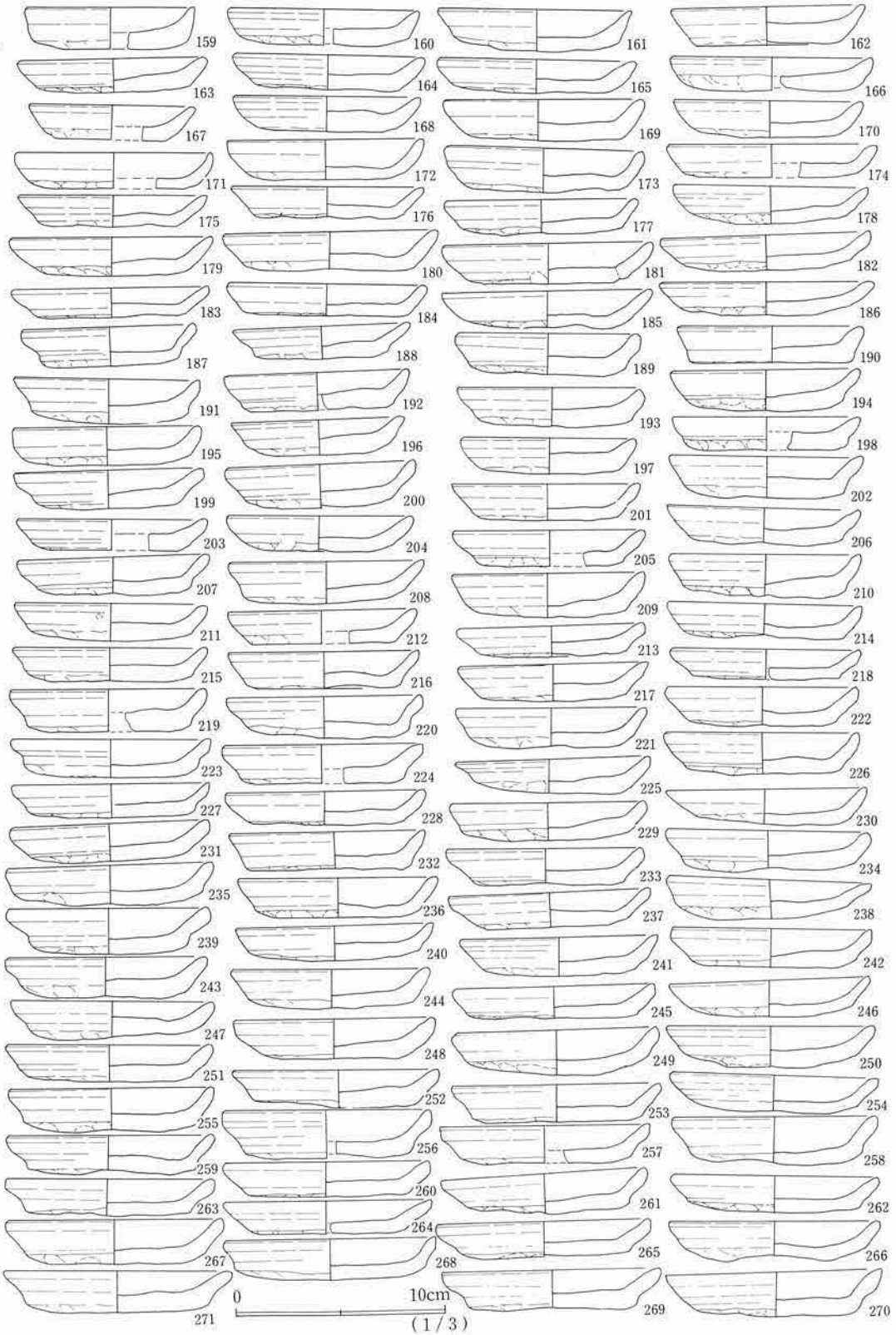


Fig.12　かわらけ溜り出土かわらけ　(3)

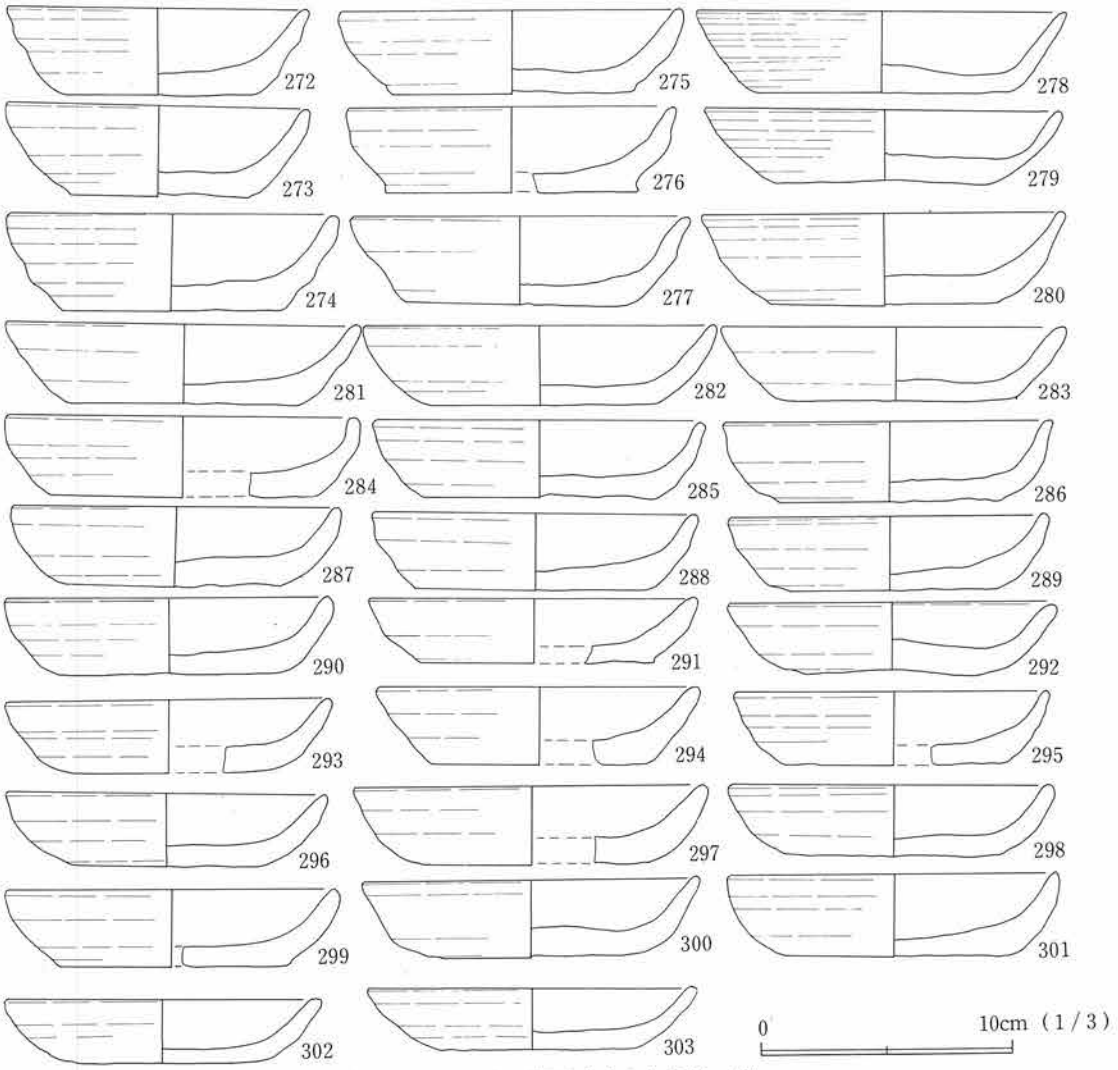


Fig.13　かわらけ溜り出土かわらけ (4)

に径が小さく、かわらけ溜りからは1点のみの出土である。138～158は器壁の薄いものであり、焼成は良好である。138，139は器高の高いもの、他は低いものである。底部に丸味をもつもの（140，142，144，148）もみられる。149の口縁部は内折れ気味になっている。159～271は底部の丸味が少ないものである。159は体部が直線的に立ちあがるもの。160～166は体部が直線的に外方に開くもの。167～174は体部に丸味をもつもの。175～186は体部が外方に開き、やや浅い印象を与えるものである。159～186の体部中位のナデは弱く陵は明瞭ではない。187～271は体部中位のナデが比較的明瞭なものである。全体的に器壁は厚く、ボッテリとしたプロポーションをもつ。

Fig.13の272～303はロクロ成形のかわらけ大皿である。272～277は口径は小さく器高の高いもの。278，279は器壁が薄く口径、底径ともに大きいもの。280は口径、底径がともに大きく、器高の高いものである。281～301は器高の低いものであり、器壁は厚く、体部は丸味を帯びるものが多

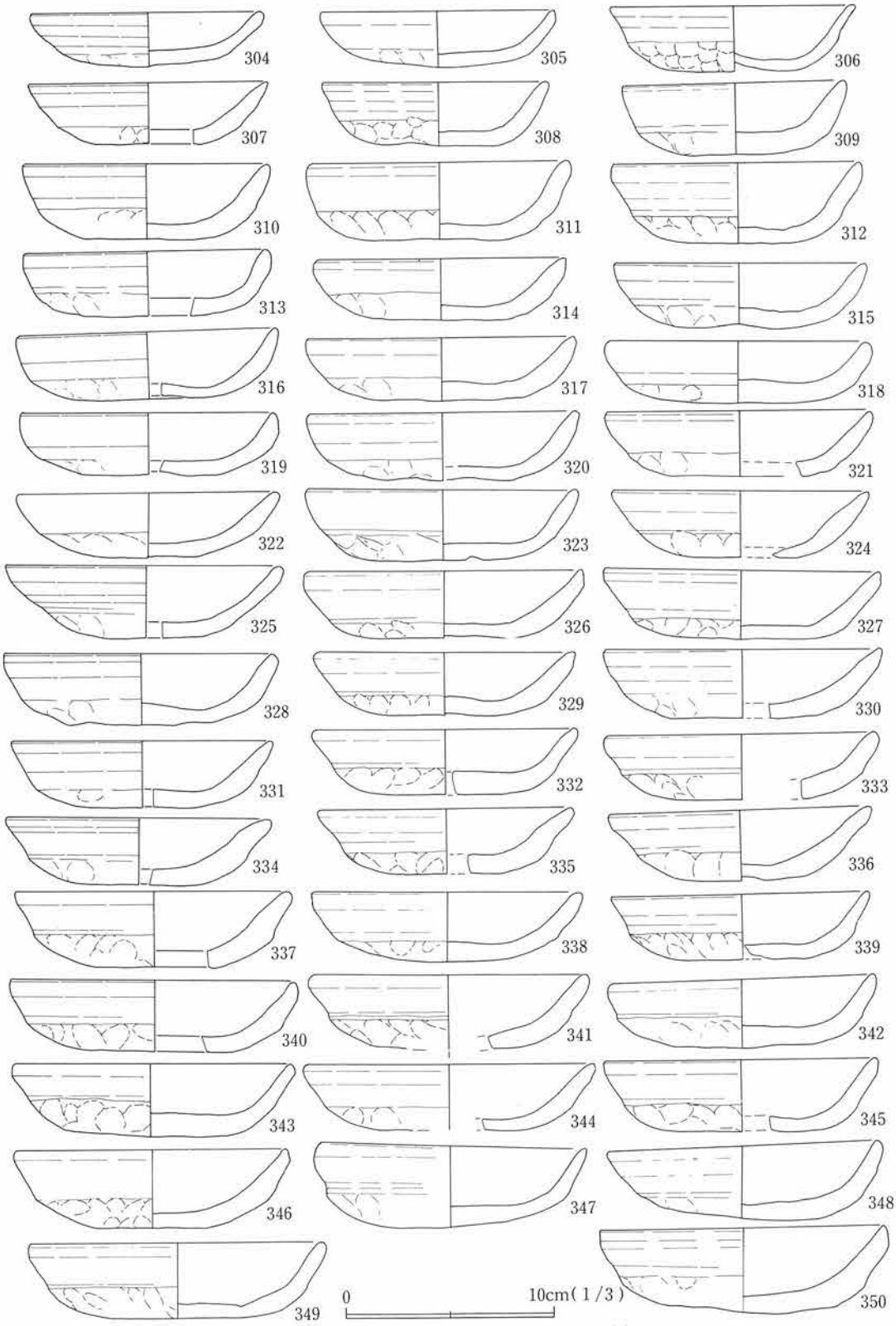


Fig.14　かわらけ溜り出土かわらけ　(5)

Fig. 15　かわらけ溜り出土かわらけ (6)

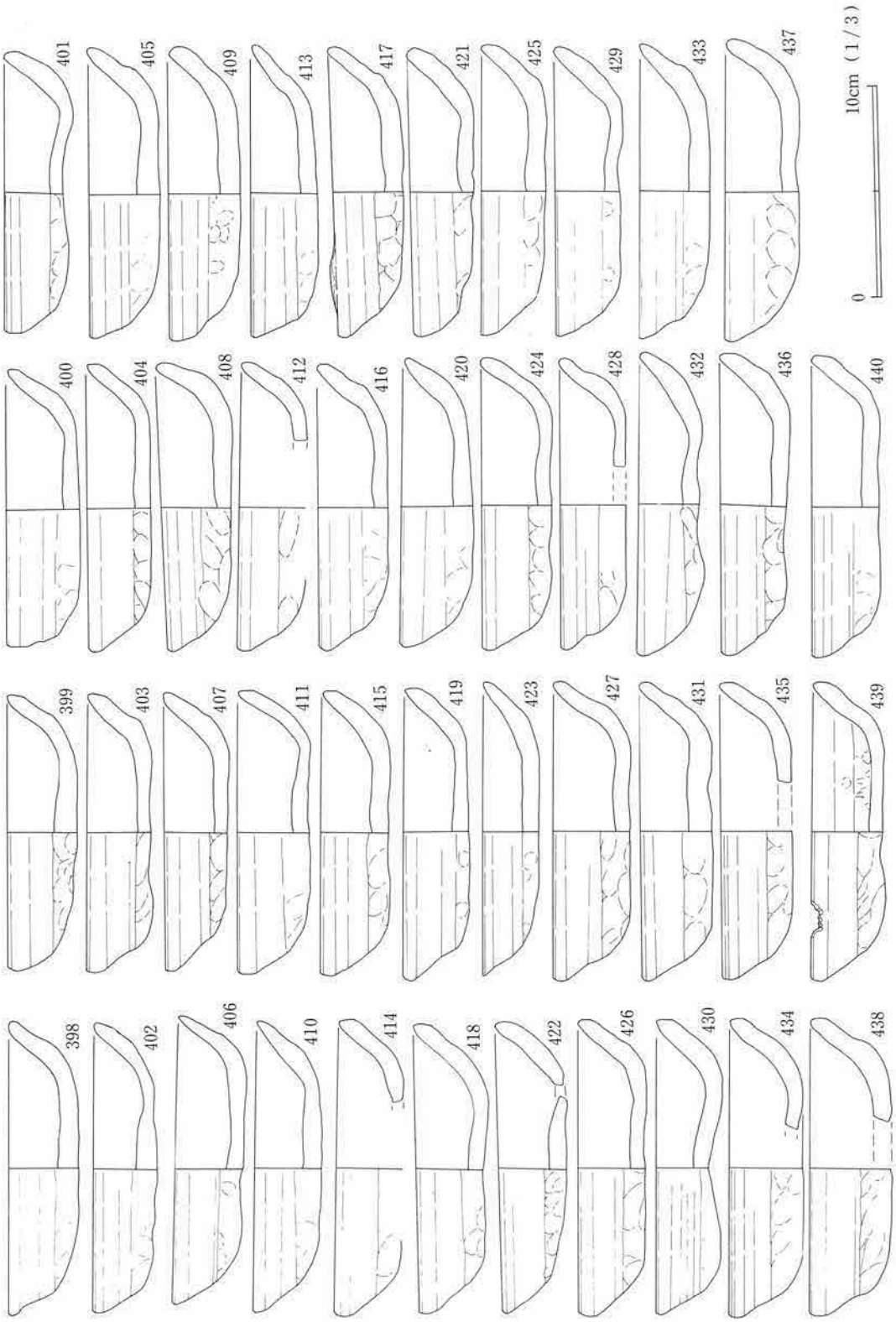


Fig. 16　かわらけ溜り出土かわらけ　(7)

Fig. 17　かわらけ溜り出土かわらけ　(8)

く、284～291のように体部中位に屈曲をもつものもある。302,303は器壁がやや薄く、体部が開くものであり、器高は低い。全体に焼成良好であり、黒色粒子を含んでいる。

Fig.14～17の304～473は手づくね成形のかわらけ大皿である。304,305は径が小さく器高の低い、器壁のやや薄いものである。306は径が小さく、器高が高く、器壁の薄いものである。307～312は径が小さく、器高が高く、器壁の厚いものである。313～350は底部の丸いタイプであり、器壁が厚く、全体にボッテリとしたプロポーションをもつ。体部外面のナデが強く、陵が明瞭なもの（331～350）と、ナデが弱く、陵が不明瞭なもの（313～330）とがある。焼成は良好である。351～473は丸底タイプ以外のものであり、前者に比べ器高の低いタイプのものである。体部外面の陵は明瞭なものと不明瞭なもの（357, 358, 360, 369, 373, 379, 389, 395, 402, 411, 415, 422, 429）とがある。470～473は口径が大きく、器高が低く、器壁もやや薄く、全体に浅いプロポーションをもつものである。

Fig.17の474～497は口縁部内折れかわらけである。484以外は全て手づくね成形である。体部は断面三角形を呈するもの（474, 475, 478, 482, 485, 495, 496）と、頂部にやや丸味をもつもの（476, 477, 480, 481, 492, 494）と、上方につまみ出されるもの（479）、体部内壁が上方に立ちあがるもの（484, 486, 487, 490, 491, 497）と、体部内壁が内傾するもの（483, 488, 489, 493）とがみられる。

以上、かわらけ溜りから出土したかわらけについて報告してきたが、ここで、全体の傾向について少しふれておく。出土したロクロ成形の小皿は口径、底径の比率が小さく、底部が厚く、器高の低いものが主流を占めており、胎土には黒色粒子を含み、焼成は良好である。ロクロ成形の大皿も同様の傾向を示しており、12世紀末の年代が与えられる内底無調整で体部外面のロクロ目が強く残るタイプ、及び、13世紀末～14世紀初頭に出現すると考えられる器壁が薄く、深い器形で体部に丸味をもつものは検出されていない。

手づくね成形の小皿は器壁が厚く、底部に丸味をもつボッテリとしたものと、底部が平底状を呈し、体部外面中位の陵が明瞭なものが主流を占めているが、器壁が薄く、焼成良好なタイプも一定量出土している。手づくね成形の大皿もこれと同様の傾向を示しており、外底面中央部が内側にへこむものもある。全体に底部が平底状になるものが主流であると考えられる。

以上のことから河野真知郎氏のかわらけ編年（註）における鎌倉第II期（13世紀前半代）と鎌倉第III期（13世紀中葉～後半）の特徴を示すものが混在しており、このかわらけ溜りが形成された時期には上記のバリエーションを有していたと考えられる。

〈註〉河野真知郎。「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古　第21号』1986。

No.	口径	底径	器高	内高	42	9.0	6.1	1.9	1.15	84	8.5		1.9	1.15	126	9.9	8.4	2.5	1.6
1	9.3	6.2	2.5	1.5	43	8.4	5.7	2.0	1.0	85	8.6	6.7	1.9	1.4	127	10.6	8.8	2.2	1.7
2	10.0	7.0	2.0	1.0	44	8.5	5.4	2.1		86	8.7	7.4	2.2	1.3	128	9.5	8.0	1.9	1.1
3	9.8	7.1	2.0	1.2	45	8.6	7.0	2.0	1.4	87	8.8	8.1	2.3		129	9.4	7.7	1.9	1.4
4	8.9	6.9	2.1	1.3	46	8.3	7.1	1.6	1.3	88	8.6	7.7	2.1	1.4	130	9.7	7.7	2.3	1.6
5	9.8	6.8	2.1	1.1	47	8.5	5.0	1.8	0.7	89	9.0	7.4	2.1	1.4	131	9.7	8.2	1.9	1.4
6	9.3	6.3	2.1	1.0	48	8.0	4.2	2.1		90	9.2	7.6	2.2	1.2	132	9.6	8.3	1.9	1.1
7	9.8	6.4	2.3	1.5	49	7.8	5.2	1.8		91	9.0	7.7	2.0	1.3	133	9.8	7.5	1.9	1.3
8	8.1	6.6	2.2	1.4	50	8.3	5.5	1.5	0.7	92	9.2	7.3	2.2		134	9.8	9.0	2.7	1.7
9	9.0	6.9	2.1		51	7.8	6.0	1.5		93	9.2	8.2	2.2	1.6	135	9.7	8.8	2.3	1.6
10	9.1	5.6	2.0		52	8.2	6.8	1.7		94	9.1	8.0	2.0	1.4	136	10.1	8.8	2.3	
11	8.9	6.9	2.0	1.0	53	8.8	6.7	1.2	0.5	95	9.4	7.9	2.1	1.4	137	10.7	9.6	2.3	1.5
12	8.8	7.0	2.0		54	8.7	7.4	1.2		96	8.9	6.9	2.0	1.4	138	10.3	8.5	2.2	1.6
13	8.6	7.1	2.0	1.0	55	8.9	4.9	1.4		97	9.3	8.0	2.2	1.4	139	9.6	8.0	2.1	1.5
14	8.8	6.1	1.9		56	9.4	7.8	1.6	1.0	98	9.4	7.6	2.4	1.6	140	8.2	6.2	1.5	0.7
15	8.4	6.3	1.8	0.8	57	9.2	7.7	1.5		99	9.2	7.5	2.2	1.4	141	8.5	6.1	1.6	1.0
16	8.7	6.4	1.3	1.1	58	9.1	6.7	1.6	0.6	100	9.3	7.8	1.8	1.1	142	9.1	7.5	1.8	1.3
17	9.4	6.8	2.0	1.2	59	9.1	7.4	1.6	0.9	101	9.6	8.2	2.3	1.7	143	9.0	6.9	1.5	1.0
18	9.0	6.5	1.8	1.2	60	9.3	6.7	1.8	1.0	102	9.8	8.4	2.2	1.5	144	9.2	7.2	1.7	1.1
19	8.7	5.9	1.9	1.0	61	9.4	7.9	1.6	1.1	103	8.8	7.4	2.0	1.3	145	9.4	8.1	1.8	1.3
20	8.6	7.7	1.8	1.1	62	7.1	6.4	2.6	2.1	104	9.9	8.4	2.4	1.6	146	9.1	7.7	1.9	1.4
21	8.2	6.1	1.9	1.1	63	7.8	7.0	2.0	1.0	105	10.1	8.3	2.2	1.4	147	9.1	7.5	1.7	1.1
22	8.7	6.8	1.9	0.9	64	7.5	6.4	2.1	1.5	106	8.9	8.0	2.0	1.1	148	9.7	8.1	2.0	1.4
23	8.9	6.8	1.8	0.6	65	7.9	6.7	2.1	1.4	107	8.5	7.3	1.8	1.1	149	9.1	6.8	1.7	1.1
24	8.7	6.7	1.9	1.0	66	7.5	6.9	2.2	1.3	108	9.0	7.6	2.1	1.4	150	9.8	7.3	1.7	1.1
25	9.0	6.4	2.0	1.0	67	7.8	6.8	1.9	1.0	109	9.1	7.9			151	9.7	7.5	1.7	0.8
26	8.6	6.6	2.0	1.1	68	8.4	7.6	2.0	1.4	110	9.0	7.6	2.1	1.1	152	9.6	7.5	1.6	1.0
27	8.9	6.9	1.7		69	8.1	7.6	2.0	1.1	111	9.0	7.3	2.1	1.3	153	9.8	8.2	1.5	
28	8.9	6.4	1.6	0.8	70	7.9	6.9	1.9	1.1	112	8.9	8.1	1.6		154	10.5			
29	9.1	7.5	1.7	1.2	71	8.1	6.7	1.8	1.1	113	9.2	7.7	1.9		155	10.0	8.0	1.8	1.1
30	9.1	7.5	1.8	1.0	72	7.9	7.1	1.7	0.9	114	9.2	8.5	2.2	1.6	156	10.2	8.3	2.9	1.1
31	9.0	7.8	1.8	1.2	73	8.4	7.6	2.1	1.4	115	9.4	7.7	2.0	1.1	157	9.7	7.6	1.7	1.1
32	8.6	6.1	1.9	1.0	74	8.2	7.4	2.2	1.4	116	8.7	7.6	2.0	1.3	158	11.3	8.6	2.1	1.5
33	9.1	7.2	2.0	1.1	75	7.9	6.9	2.0	1.3	117	9.3	7.9	2.0	1.0	159	7.9	7.2	2.0	
34	8.6	6.2	1.7	0.9	76	7.9	7.5	2.2	1.3	118	9.2	8.2	2.4	1.7	160	9.0	8.1	1.7	
35	9.1	7.2	1.6		77	8.9	8.0	2.3	1.3	119	9.2	7.3	2.1	1.1	161	9.0	7.7	2.0	1.3
36	8.5	6.6	1.8	1.3	78	8.2	7.6	2.0	1.1	120	9.2	7.8	2.0	1.2	162	9.1	6.7	1.8	0.7
37	8.7	6.7	1.7	0.6	79	8.4	7.5	2.1	1.1	121	9.3	7.6	2.3	1.8	163	8.6	7.1	1.6	1.0
38	8.6	5.8	1.7	0.7	80	8.3	7.2	2.2	1.5	122	9.6	7.6	2.1	1.5	164	9.0	6.8	1.6	0.9
39	8.5	5.8	1.7		81	8.3	7.3	2.0	2.2	123	9.2	6.7	2.1	1.3	165	9.2	7.1	1.6	0.9
40	8.2	7.5	1.6	1.0	82	8.4	7.2	1.9	1.4	124	9.2	7.4	2.0	1.3	166	9.4	9.0	1.6	
41	8.8	6.1	1.7	0.5	83	8.5	6.2	1.8	0.7	125	9.3	7.6	1.9	1.4	167	7.6	5.0	1.7	

単位（cm）

表４．かわらけ溜り出土かわらけ法量（1）

No.	口径	底径	器高	内高
168	8.7	6.5	1.7	0.7
169	9.2	7.2	2.0	1.1
170	8.8	7.0	1.7	1.0
171	9.2	8.2	1.7	
172	9.1	7.6	1.8	1.3
173	9.0	7.8	2.1	1.3
174	9.7	8.3	1.6	
175	8.8	7.0	1.5	1.0
176	9.0	7.1	1.5	0.9
177	9.0	7.5	2.1	1.6
178	9.1	7.3	1.8	1.2
179	9.3	7.6	1.9	1.3
180	9.9	8.6	1.8	1.0
181	9.8	7.5	2.0	1.3
182	9.8	8.0	1.7	1.0
183	9.2	6.0	1.4	1.2
184	9.2	7.7	2.5	0.9
185	9.8	7.6	1.7	1.15
186	9.9	8.0	1.6	0.9
187	8.0	6.5	1.9	1.2
188	8.2	6.2	1.5	1.0
189	8.4	7.4	2.0	1.1
190	8.6	7.2	1.8	1.1
191	8.6	7.4	2.1	1.2
192	8.5	7.1	1.8	
193	8.5	7.4	1.8	1.0
194	8.7	7.5	1.9	1.8
195	8.6	7.9	1.9	1.1
196	8.0	6.5	1.7	0.9
197	7.9	6.5	1.8	0.7
198	8.9	7.8	1.6	
199	8.7	6.7	1.8	1.1
200	8.7	7.3	2.1	1.3
201	8.8	6.7	1.7	1.1
202	9.0	7.5	2.0	1.0
203	8.8	6.6	1.5	
204				
205	9.0	7.2	2.7	
206	9.0	7.3	1.6	0.9
207	8.9	7.2	1.7	1.1
208	9.1	7.0	2.0	1.3
209	9.0	7.6	2.1	1.5
210	9.9	7.7	2.0	1.5
211	9.0	7.6	1.8	0.9
212	8.8	6.7	1.6	
213	8.8	7.0	2.5	0.8
214	9.1	7.6	1.5	0.9
215	9.1	7.6	1.6	0.7
216	9.0	7.1	1.7	1.1
217	8.9	6.9	1.8	1.0
218	8.9	6.9	1.4	
219	9.0	7.7	2.1	
220	9.1	7.6	2.0	1.2
221	9.0	7.7	1.9	1.2
222	8.9	7.0	1.9	1.1
223	9.3	8.2	1.8	1.2
224	9.4	7.8	1.9	
225	9.2	7.6	1.5	1.0
226	9.0	7.4	2.0	1.3
227	9.2	7.8	1.6	1.0
228	9.3	7.4	1.6	1.0
229	9.2	8.3	1.8	1.2
230	9.5	7.3	1.8	1.2
231	9.1	7.5	1.8	1.0
232	9.2	7.8	1.7	1.1
233	9.1	7.2	1.7	1.0
234	9.4	8.1	1.8	1.1
235	9.5	8.9	1.8	1.2
236	9.3	7.8	1.9	1.3
237	9.3	7.3	1.7	0.9
238	9.5	8.0	1.9	1.0
239	9.3	7.7	2.2	1.3
240	9.1	7.9	1.7	0.9
241	9.2	7.3	1.9	1.2
242	9.3	7.8	1.9	1.3
243	9.2	8.0	1.9	1.1
244	9.3	7.8	1.9	1.3
245	9.4	8.0	1.6	1.0
246	9.3	7.7	1.8	1.1
247	9.4	7.5	1.7	0.7
248	9.3	7.0	1.9	1.4
249	9.5	8.7	2.2	1.5
250	9.7	8.1	2.0	1.2
251	9.6	7.8	1.8	1.0
252	9.5	7.5	1.9	1.1
253	9.7	7.8	1.8	1.1
254	9.8	8.0	1.8	1.3
255	9.5	8.3	2.0	1.2
256	9.6	8.2	2.4	
257	9.9	8.1	1.9	
258	9.5	8.1	2.2	1.7
259	9.6	7.9	1.7	1.0
260	9.6	7.8	1.7	1.0
261	9.5	7.7	1.9	1.4
262	9.6	8.1	1.8	1.1
263	9.6	7.7	1.8	1.2
264	9.8	7.4	1.6	1.0
265	10.0	8.0	1.7	1.0
266				
267	10.0	8.4	2.1	1.5
268	9.8	9.1	2.0	1.3
269	11.2	8.0	1.8	1.1
270	11.1	7.7	2.1	1.3
271	10.5	8.5	2.0	1.2
272	11.8	7.3	3.5	2.8
273	11.7	7.0	3.6	2.65
274	12.7	8.7	3.9	2.8
275	13.3	9.5	8.2	2.4
276	12.8	9.7	3.5	
277	13.0	8.3	3.5	2.7
278	14.3	9.9	3.3	2.1
279	13.8	8.4	2.9	1.7
280	14.1	9.1	3.6	2.5
281	13.9	8.9	2.2	1.4
282	13.8	9.0	3.2	2.3
283	13.4	11.6	3.0	2.2
284	13.6	10.4	3.2	
285	12.8	9.0	3.1	2.3
286	12.8	8.7	3.2	2.4
287	12.7	8.4	3.2	2.2
288	12.6	9.2	3.1	2.3
289	12.4	8.3	3.0	2.2
290	12.6	8.6	3.0	2.2
291	12.7	9.2	2.6	
292		6.3		
293	12.7	7.6	2.9	1.8
294	12.5	8.4	3.1	
295	12.3	8.5	2.9	
296	12.5	7.2	2.9	2.1
297	13.6	8.1	3.2	
298	12.5	8.5	2.7	2.1
299	12.8	9.0	3.1	
300	13.1	7.1	3.1	2.0
301	12.8	9.1	3.3	2.6
302	12.2	7.5	2.7	2.1
303	12.8	7.5	2.5	1.7
304	10.8	8.0	2.5	1.9
305	11.0	9.2	2.7	2.0
306	11.5	10.0	3.1	2.2
307	10.2	8.7	3.0	
308	10.6	9.2	3.0	2.4
309	10.4	9.6	3.5	2.4
310	11.5	10.3	3.7	2.9
311	12.1	11.4	3.7	2.9
312	11.8	10.0	3.9	3.1
313	11.4	11.1	3.2	
314	11.7	10.7	3.0	2.2
315	11.9	10.0	3.0	2.2
316	12.1	11.0	3.3	
317	12.5	11.2	3.1	2.1
318	12.2	10.9	3.0	1.8
319	11.7	11.6	3.0	
320	12.6	11.1	3.3	
321	12.5	10.7	3.1	
322	12.2	10.2	3.0	2.4
323	12.7	11.0	3.4	2.6
324	12.0	9.7	3.2	
325	12.9	10.7	3.6	
326	13.0	10.3	3.3	2.6
327	13.0	10.3	3.4	2.7
328	12.5	11.3	3.5	2.5
329	12.3	10.0	3.1	2.1
330	13.1	11.2	3.3	
331	12.2	10.0	3.2	
332	12.3	10.6	3.1	2.0
333	12.7	11.5	3.2	
334	12.4	10.2	3.2	

単位 (cm)

表5．かわらけ溜り出土かわらけ法量 (2)

No.	口径	底径	器高	内高
335	12.0	9.7	3.1	
336	12.5	9.9	3.4	2.6
337	12.9	11.4	約4	
338	12.6	10.5	3.4	2.4
339	12.1	10.7	3.2	2.8
340	13.4	12.2	3.4	
341	13.0	11.3	3.5	
342	12.4	11.7	3.3	2.2
343	13.8	12.7	3.4	2.7
344	13.6	11.7	3.2	
345	12.9	11.2	3.5	
346	12.8	11.0	3.8	3.1
347	12.5	11.5	4.0	3.0
348	12.8	10.5	3.5	2.8
349	13.4	12.0	4.1	3.3
350	13.9	12.3	3.7	3.0
351	12.3	10.5	3.0	2.0
352	11.4	10.0	2.7	1.8
353	11.6	10.6	2.9	
354	12.7	11.7	2.9	
355	13.0	10.8	3.0	
356	12.3	10.5	3.0	
357	12.5	10.3	3.0	
358	12.4	11.0	3.0	
359	12.2	11.0	3.1	2.3
360	12.6	11.1	3.0	2.0
361	12.6	11.2	3.0	2.0
362	12.5	10.1	3.0	2.3
363	13.1	10.2	2.9	2.2
364	12.6	11.2	2.9	
365	12.6	10.3	2.8	1.8
366	12.7	10.7	2.7	1.9
367	12.2	10.9	2.9	1.9
368	12.9	11.6	3.1	
369	12.9	11.6	2.8	
370	12.8	10.8	3.3	2.6
371	12.2	9.7	2.8	
372	13.2	12.0	3.0	2.0
373	12.4	8.6	2.7	2.1
374	13.0	10.9	3.1	2.0
375	12.9	10.7	3.1	
376	13.4	11.4	3.0	2.3
377	12.8	11.9	3.1	2.0
378	12.9	8.2	3.3	2.4
379	13.0	11.3	2.8	
380	13.3	11.8	3.3	2.6
381	12.7	11.4	3.0	2.0
382	12.7	10.3	3.1	
383	12.9	10.4	2.5	1.8
384	13.7	12.5	3.2	
385	13.0	11.1	2.9	
386	13.0	11.9	2.8	1.9
387	13.2	11.4	3.2	2.3
388	13.3	10.9	2.8	2.1
389	13.1	10.5	3.1	2.3
390	13.3	11.6	3.0	2.2
391	13.3	11.5	3.1	2.1
392	14.7	11.8	2.8	2.2
393	13.5	10.7	2.9	2.3
394	13.2	11.6	2.7	1.6
395	13.7	12.7	3.3	
396	13.6	11.8	3.0	2.3
397	13.5	11.7	2.9	2.2
398	13.7	11.6	3.3	2.3
399	12.7	11.3	3.3	2.2
400	12.9	11.5	3.5	2.7
401	13.1	11.7	3.2	2.2
402	13.5	12.1	3.0	2.0
403	12.8	10.8	3.0	2.4
404	13.3	11.2	3.0	2.2
405	13.5	12.1	3.4	2.3
406	13.4	11.7	3.2	2.4
407	12.9	10.5	3.0	2.4
408	13.2	12.3	3.3	2.6
409	13.5	11.7	3.4	2.4
410	13.6	11.4	3.2	2.3
411	13.1	11.7	3.5	2.7
412	13.2	12.0	3.3	
413	13.6	11.4	3.2	2.4
414	13.8	12.1	3.1	
415	13.2	11.4	3.2	2.4
416	13.0	11.5	3.3	2.7
417	13.5	11.2	3.4	2.4
418	13.5	11.4	3.1	2.4
419	13.4	10.9	3.1	2.3
420	13.4	11.5	3.4	2.4
421	13.0	11.7	3.0	2.4
422	13.4	11.5	3.2	2.3
423	13.6	10.8	2.7	1.9
424	13.4	11.7	3.3	2.7
425	13.5	11.4	3.1	2.1
426	13.7	11.9	3.2	2.5
427	13.0	12.2	3.7	2.9
428	13.5	12.1	3.1	
429	13.3	11.2	3.0	2.4
430	13.7	12.1	2.5	1.8
431	13.8	12.3	3.4	2.3
432	14.0	11.8	3.2	2.1
433	13.9	11.9	3.3	2.3
434	14.0	12.5	3.5	
435	13.7	12.2	3.4	
436	13.8	12.3	3.2	2.4
437	13.8	12.7	3.4	2.7
438	13.5	12.0	3.9	
439	13.7	11.6	3.4	2.7
440	14.7	12.6	3.2	2.3
441	13.3	11.2	2.8	2.2
442	13.8	11.6	3.2	2.5
443	14.0	11.8	3.0	2.2
444	14.0	11.8	3.1	2.3
445	13.7	11.3	3.2	2.2
446	14.2	13.3	3.2	2.6
447	13.7	11.6	3.1	2.3
448	14.1	10.0	2.7	1.8
449	14.0	11.4	2.9	2.2
450	13.8	12.5	3.0	1.9
451	13.9	11.9	2.9	2.3
452	13.4	12.0	3.3	
453	13.6	12.3	3.6	2.8
454	14.1	12.2	3.5	2.7
455	14.2	12.1	3.2	
456	13.9	11.6	3.4	2.4
457	14.1	12.6	3.2	2.2
458	14.8	12.8	3.2	2.3
459	13.1	12.8	3.4	2.5
460	13.8	11.5	3.3	2.5
461	14.3	12.2	3.0	2.4
462	14.7	12.4	3.0	2.0
463	14.3	11.9	3.0	2.2
464	14.0	11.9	3.2	2.4
465	15.2	13.6	3.4	
466	14.6	12.7	3.3	2.5
467	14.3	12.1	3.1	2.2
468	14.2	12.3	3.6	2.7
469	14.6	13.3	3.8	2.7
470	12.3	10.6	2.1	
471	14.4	10.7	2.6	1.7
472	13.6	11.7	3.0	2.4
473	15.6	13.3	2.9	2.2
474	5.2	5.5	1.0	0.2
475	5.4	5.7	1.0	0.5
476	5.6	6.2	1.1	0.4
477	5.8	6.1	1.1	0.4
478	6.0	6.2	1.8	0.8
479	6.1	6.1	1.3	0.6
480	6.0	5.6	1.1	0.4
481	6.4	6.9	0.9	
482	6.3	6.2	1.1	
483	6.0	6.9	0.9	
484	6.2	6.9	1.0	0.6
485	6.6	6.8	2.1	0.8
486	6.7	6.8	1.3	0.6
487	6.7	6.6	1.4	0.8
488	6.7	7.2	1.6	0.9
489	7.2	7.1	1.2	
490	7.2	7.5	1.3	
491	6.6	7.7	1.2	0.6
492	7.4	7.6	1.2	
493	7.5	8.0	1.1	
494	7.1	6.5	1.0	0.5
495	7.3	7.5	1.5	0.9
496	7.5	7.9	1.4	0.8
497	7.4	8.1	1.3	0.5

単位（cm）

表6．かわらけ溜り出土かわらけ法量（3）

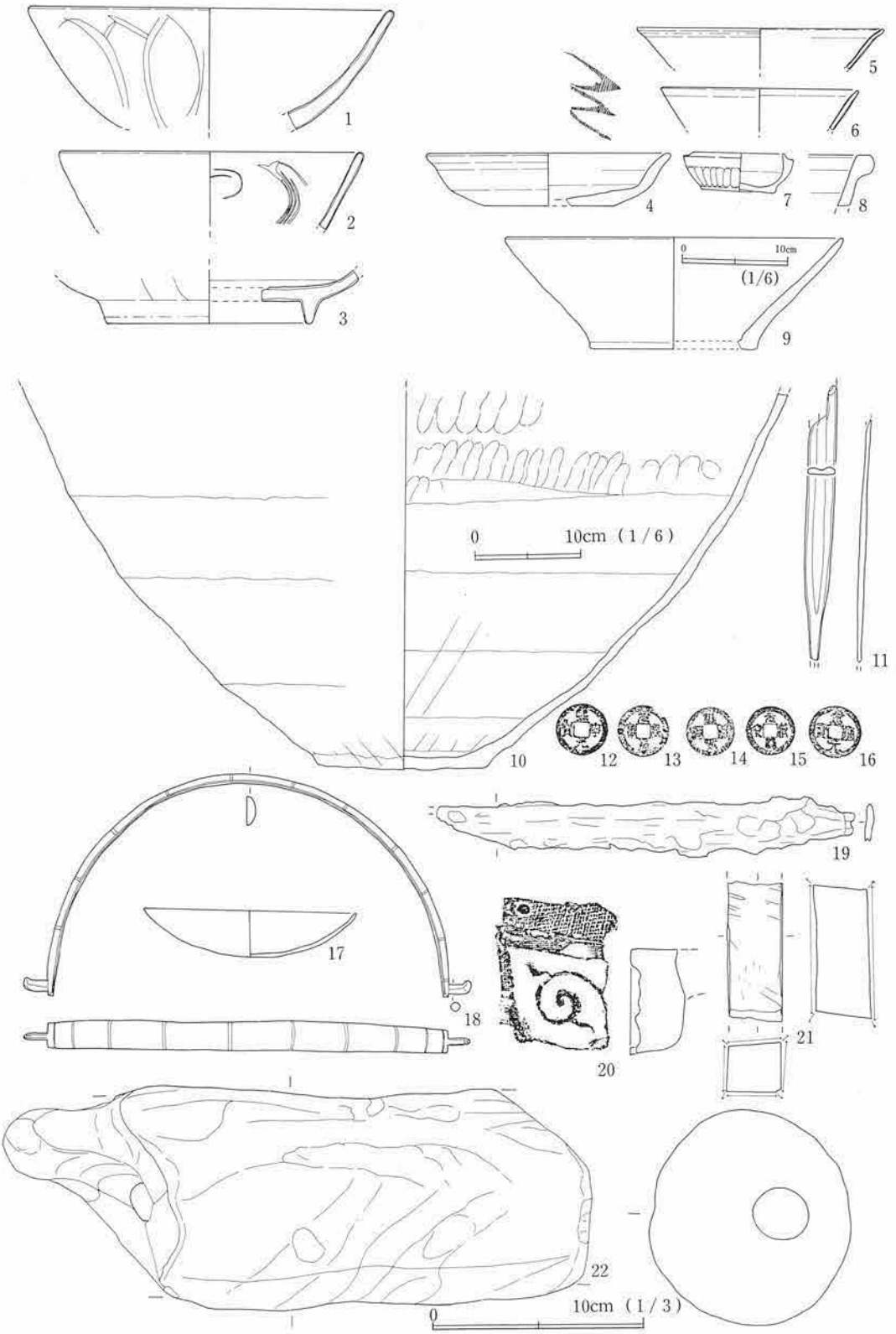


Fig.18 かわらけ溜り出土遺物

Fig.18－１～22はかわらけ溜りからの伴出遺物である。

１－青磁鎬蓮弁文碗。口径17.0cm。幅広の蓮弁をもつ。釉は淡青緑色を呈し、胎土は灰色。

２－青磁劃花文碗。口径14.2cm。内面文様の彫りは浅い。釉は淡青緑色、胎土は灰色を呈する。

３－青磁鎬蓮弁文鉢。高台外径9.8cm。折縁の口縁をもつものであり、内底に双魚文の貼花を施した痕跡がある。体部外面には蓮弁文が配される。釉は青緑色を呈し高台畳付は無釉。胎土は淡橙白色を呈する。

４－青磁皿。口径11.4cm。底径6.0cm、器高2.5cm。体部中位に屈曲をもち、口縁端部は緩く外反する。内底面に櫛描き文をもつ。釉は灰緑色。胎土は灰白色を呈する。

５－白磁口兀皿。口径11.8cm。器壁は薄く、口縁部は外反する。釉は白色透明、胎土は灰白色を呈する。

６－白磁口兀皿。口径9.8cm。体部は直線的に立ちあがる。釉は淡青色透明であり、内面に厚くかけられている。胎土は灰白色を呈する。

７－白磁合子身。口径5.2cm。底径3.4cm、器高1.8cm。体部外面は細い蓮弁文を削り出している。受け部及び体部外面下半部が露胎。釉は淡黄色透明。胎土は淡黄白色を呈する。

８－緑釉盤。小片の為復元は不可能である。釉は深緑色を呈し、一部銀化している。胎土は灰橙色を呈し、夾雑物多く粗い。口縁部の上面及び下面には焼成時の砂が付着している。

９－常滑窯こね鉢。口径31.8cm、底径16.0cm、器高10.4cm。器表は灰褐色を呈し、内面には降灰が観察される。体部は直線的に立ちあがる。胎土は灰白色を呈する。

10－常滑窯甕。底径16.0cm。体部外面の底部付近はヘラ削りされている。器表は褐色を呈し、胎土は黒褐色を呈する。断面はザクリとしている。

11－笄。両端部を欠損している。残存長13.1cm、最大幅1.3cm、厚さ0.3cm。

12～16－銅銭。いずれも北宋銭である。12は熙寧元宝。楷書体。13は元豊通宝。篆書体。14は元豊通宝。行書体。15は元符通宝。篆書体。16は宋通元宝。楷書体。

17－鉄製皿。口径10.0cm、器高2.2cm、厚さ0.1cm。

18－銅製鉉。全長30.5cm。断面はカマボコ状を呈し、幅1.3cm、厚さ0.4cm。曲面には２本を１単位とする12単位の沈線をもつ。本体との連結部は長さ1.2cmを測り、端部に鈎が付く。断面は隅丸方形を呈し、直径0.45cm。

19－刀子。錆が激しく、又、両端を欠損している。残存長19.7cm。残存幅2.6cm。

20－軒平瓦。瓦頭右端部を残す唐草文の破片である。平瓦部凹面には布目痕を残す。胎土には砂粒を含むが精良であり、色調は黒灰色を呈する。

21－砥石。中砥。方柱状を呈し、中央部の摩滅が激しい。各面ともに良く使用されている。

22－土丹製用途不明製品。直径10.0cm前後の筒状部に径2.6cmの穿孔が施されている。この穿孔は本体中心を通っていない。残存長27.7cm。

第２節　第二面の遺構と遺物

Ⅰ．第二面検出の遺構と遺物

(1)　検出遺構概要（Fig. 19）

調査区南西部のかわらけ溜りを掘り下げると現地表下1.2m程で白色粒子、炭粒を含む暗褐色粘質土層を検出したが、遺構プラン確認が難行したために中世地山である黒褐色粘質土層まで掘り下げ遺構の検出を行なった。A～B－１～３グリットに於いて、井戸１基、大柱穴２口、柱穴約250口、東西溝１条を検出した。この遺構群の東は南北大溝、さらに道路となる。

(2)　第二面上出土遺物（Fig. 20, 21）

１～26はかわらけである。１～８は手づくね成形の小皿。９～16はロクロ成形の大皿。17～19は手づくね成形の大皿。20～22はロクロ成形の大皿。23,24はロクロ成形の内折れタイプ。25,26は手づくね成形の内折れタイプである。手づくね小皿は丸底で体部外面の陵が弱いもの（１～３）と底部が平底状になるもの（４～８）とがある。ロクロ成形の小皿は器高が低く、体部が内彎気味に立ちあがるもの（９,10）と、底部が厚く体部が内彎、或いは外反するもの（11～16）とがある。手づくね成形の大皿は平底状を呈し、大ぶりなものであり、ロクロ成形の大皿は底径がやや大きめのものである。内折れタイプでは口縁が内傾するもの（23,26）と直立するもの（24, 25）とがある。いずれも焼成良好。

27－青磁鎬蓮弁文碗。口径13.4cm。釉は青緑色、胎土は灰白色を呈する。焼成良好。

28－青磁鎬蓮弁文碗。高台外径5.3cm。内底面に花文を型押ししている。釉は青緑色を呈し高台脇までかけられている。胎土は灰色を呈する。

29－青磁鉢。高台外径11.7cm。釉は青緑色を呈し、高台畳付部は無釉。貫入あり。胎土は灰白色を呈する。

30－白磁口兀皿。口径15.2cm。体部内面下位に横位の沈線あり。釉は淡灰白色、胎土は灰白色を呈する。

31－白磁口兀皿。口径15.7cm。釉は淡青白色。胎土は灰白色を呈する。

32－白磁口兀皿。底径6.6cm。釉は淡青白色。胎土は灰白色を呈する。外底面の釉はまばら。

33－白磁端反碗。高台外径6.0cm。高台は高く削り出され楔状の断面を呈す。体部外面下部から高台は露胎。釉は灰白色で白濁し、胎土は灰色を呈する。

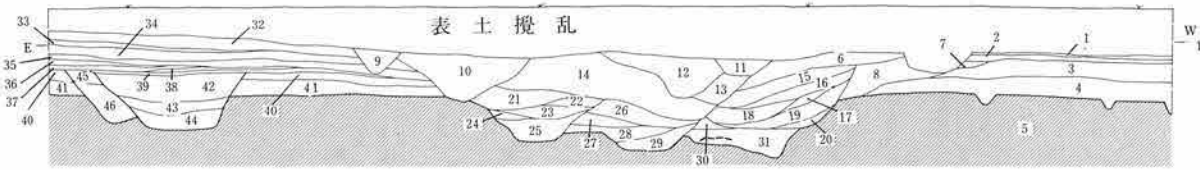
34－白磁端反碗。小片の為復元は不可能。体部は丸味を帯び口縁部は端反り。釉は淡水青色透明。胎土は灰白色を呈す。

35－緑釉盤。小片の為復元は不可能。釉は暗緑色失透。胎土は灰色を呈する。

36－山茶碗。口径14.1cm。体部外面に緩い陵をもつ。胎土は灰白色を呈し夾雑物を多く含む。

37－渥美窯甕。口径44.0cm。頸部はＣ字型に曲げれ、端部は丸くおさめられる。器表には深緑色の釉がハケ塗りされる。胎土は灰白色を呈し精良。粘性強い。

［調査区南壁東西セクション図］



1．暗褐色粘質土。かわらけ片、炭粒を含む。
2．暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。
3．暗褐色粘質土。かわらけ多量に含む。(かわらけ溜り)
4．暗褐色粘質土。少量の白色粒子、炭粒を含む。
5．黒褐色粘質土。（中世地山）
6．灰褐色粘質土。土丹、かわらけ片、炭粒多し。
7．灰褐色粘質土。土丹粒多し。
8．暗褐色粘質土。かわらけ片、小丹粒多し。
溝VI 9．褐色粘質土。土丹粒、炭粒混入する。
溝VI 10．灰褐色粘質土。土丹粒、炭粒、かわらけ片を含む。
溝V 11．黒褐色粘質土。土丹粒、貝殻粒、かわらけ片混入。
溝V 12．灰褐色粘質土。多量の土丹粒を含む。
溝V 13．暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒混入する。
溝V 14．暗褐色粘質土。土丹粒、かわらけを多量に混入。しまり弱し。
溝IV 15．灰褐色粘質土。土丹粒、かわらけ片、炭粒を含む。
溝IV 16．暗褐色粘質土。土丹粒、かわらけ片、炭粒を含む。
溝IV 17．黒褐色粘質土。有機物混入。
18．灰褐色砂。
19．灰褐色粘質土。砂、土丹粒混入。
20．黒褐色粘質土。有機物混入。
21．明褐色粘質土。土丹粒混入。
溝III 22．炭化物層。
溝III 23．明褐色粘質土。有機物混入。
24．明褐色粘質土。
25．黒褐色粘質土。水摩した土丹、遺物を含む。
溝II 26．明褐色粘質土。水摩した土丹、遺物を含む。
溝II 27．明褐色粘質土。しまり良好。
溝II 28．明褐色粘質土。土丹粒を多量に含む。
溝II 29．灰褐色粘質土。水摩した土丹、遺物を含む。粗砂混入。
溝I 30．灰褐色粘質土。
溝I 31．灰褐色粘質土。水摩した土丹、遺物を含む。粗砂混入。
32．暗褐色粘質土。土丹、炭粒を含む。
33．土丹層、しまりは弱い。
道路地業 34．大～小土丹地業層。
道路地業 35．灰褐色粘質土。土丹粒、炭粒混入。
道路地業 36．灰褐色粘質土。土丹粒混入。
道路地業 37．土丹地業層。
道路地業 38．暗褐色粘質土。細砂、貝殻細粒を含む。
道路地業 39．暗褐色粘質土。
40．暗褐色粘質土。少量の土丹粒、炭粒を含む。
41．黒褐色粘質土。少量の炭粒を含む。
溝A 42．灰褐色粘質土。炭粒を含む。
溝A 43．暗褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。
溝A 44．暗褐色粘質土。
溝B 45．暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。
溝B 46．暗褐色粘質土。土丹粒、木片を含む。

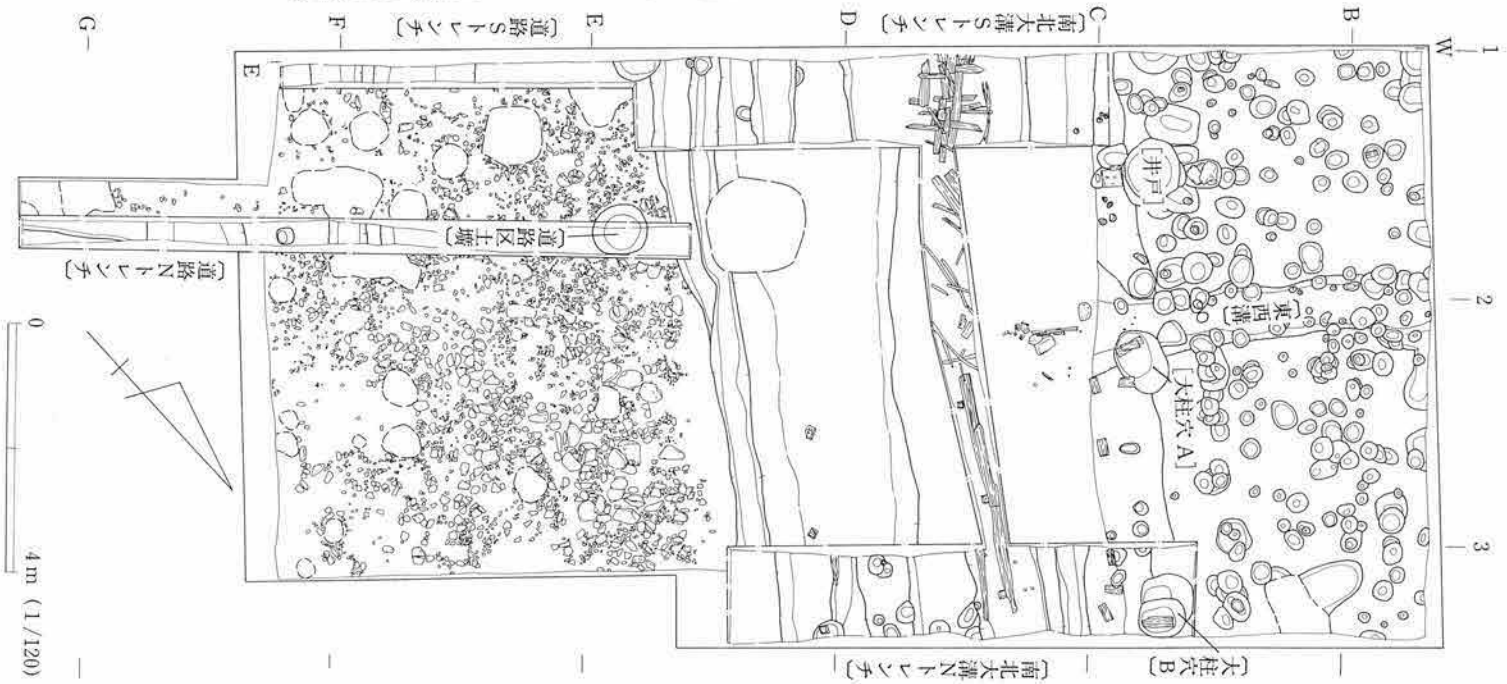


Fig.19　第二面　遺構配置図

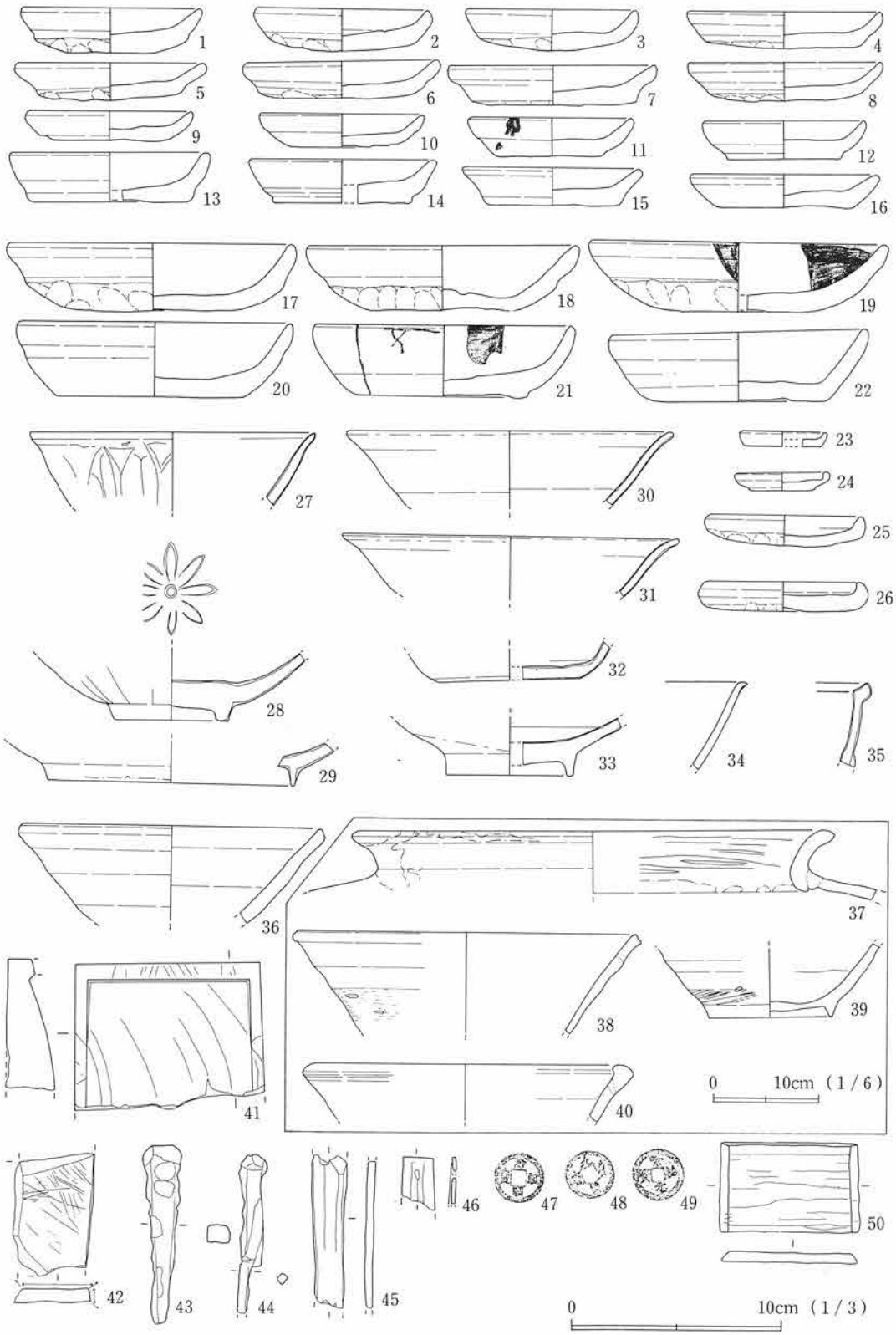


Fig. 20 第二面面上出土遺物 (1)

No.	口径	底径	器高	内高	7	9.6	7.8	1.9	1.2	14	8.6	6.5	2.1	1.1	21	12.0	8.0	3.3	2.5
1	8.4	7.3	2.1	1.3	8	9.1	7.1	1.8	1.2	15	8.1	6.0	1.8	1.0	22	11.8	8.3	3.2	2.3
2	8.0	7.0	1.9	1.7	9	7.6	5.6	1.4	0.8	16	8.6	6.5	1.6	0.9	23	3.8	3.6	0.7	0.3
3	7.9	7.0	1.9	1.1	10	7.6	4.6	1.6	1.0	17	13.2	12.2	3.1	2.4	24	4.2	3.1	0.8	0.4
4	9.1	7.3	1.7	1.0	11	7.5	5.0	1.8	1.1	18	12.6	10.8	3.1	2.1	25	7.2	7.4	1.4	0.9
5	8.7	6.8	1.8	1.0	12	7.5	5.4	1.8	0.9	19	13.8	12.0	3.2	2.4	26	7.2	7.1	1.4	0.6
6	8.9	7.9	1.8	1.1	13	9.0	7.5	2.3	1.7	20	12.7	9.0	3.5	2.6					

単位（cm）

表７．第二面面上出土かわらけ法量（Fig. 20）

38－山茶碗窯系こね鉢。口径32.0cm。体部外面下半はヘラ削り、上部は陵を残す。口縁端部は沈線状に凹む。器表は暗灰褐色、胎芯は灰褐色を呈し夾雑物を多量に含む。

39－山茶碗窯系こね鉢。高台外径11.8cm。砂底の外底面に高台が貼り付けられる。内面の磨滅は激しい。胎土は灰白色を呈し夾雑物を多く含む。

40－手あぶり。口径29.0cm。体部は開き、口縁端部は内外に小さく引き出されている。口縁及び内面はナデ、体部外面の口縁下は指頭痕が観察される。器表は灰黒色、胎芯は灰褐色を呈する。

41－硯。長方形硯。縦6.8cm以上、横8.8cm。海部最深厚1.0cm。陸部最厚2.2cm。周縁は欠損。

42－砥石。仕上げ砥。残存長5.4cm。残存幅3.6cm。厚さ0.6cm前後。斜方向の削痕が残る。

43－鉄釘。錆激しく詳細は不明。残存長8.5cm。断面は1.1×0.8cmの方形を呈すると考えられる。

44－鉄釘。錆激しく詳細は不明。残存長7.5cm。断面は0.4×0.3cmの方形を呈すると考えられる。

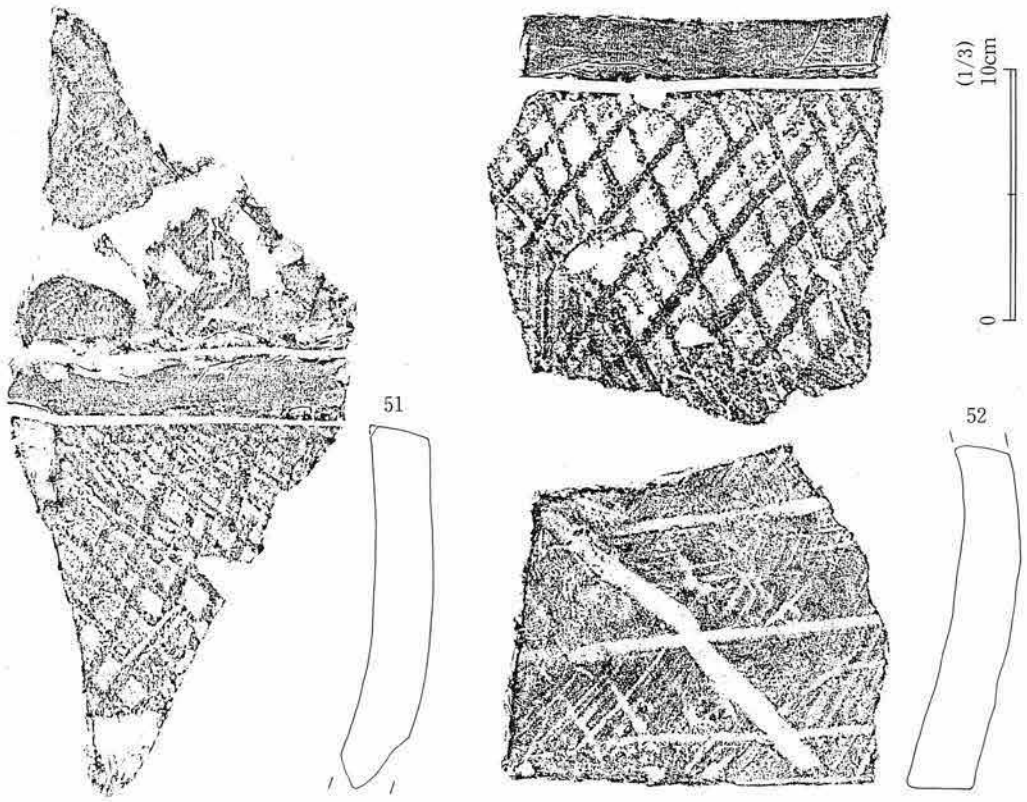


Fig. 21　第二面面上出土遺物（2）

45－笄。両端部を欠損している。残存長7.3cm、幅1.4cm前後、厚さ0.5cm。

46－笄。上部片であり長楕円形の穿孔を有する。残存長2.2cm、幅1.5cm。厚さ0.3cm前後。

47～49は銅銭でありいずれも北宋銭である。47－元祐通宝。篆書体。48－元豊通宝。行書体。

49－景祐元宝。行書体。

50－木箱の蓋。縦4.2cm、横6.5cm、厚さ0.5cm。各側面は斜に削られ断面台形を呈する。

51－平瓦。凹凸両面に離れ砂が観察される。凹面は糸切痕がみられる。凸面には格子目の叩きが施される。側面はヘラ削り。器表は灰白色を呈し芯部は黒灰色を呈する。厚さ2.3cm前後。

52－平瓦。凹凸面ともに離れ砂がみられる。凹面には糸切痕と縦、斜方向の窪みが観察される。凸面は格子目の叩きが施される。側面はヘラ削りを施す。器表は淡灰白色を、胎土は灰白色を呈する。厚さ2.4cm前後である。

II．A～B－1～3グリット検出の遺構と遺物

ここでは中世地山である黒褐色粘質土上面で検出された遺構について述べる。A～B－1～3グリットに於いて中世地山は海抜9.4m前後で検出されており、東西溝1条、井戸1基、礎板列、大柱穴、柱穴約250口を検出し、柱穴列8棟を確認することができた。以下、各遺構別に説明を加えていく。

(1) 東西溝 (Fig.22)

グリット東西軸である2ライン沿いで検出された。上端幅0.9m前後、下端幅0.6m前後。溝底の海抜は西部で9.0m、東部で8.9mである。西部は調査区外へつづき、東部は南北大溝により掘削されているが、東へ向かい緩く傾斜しているものと考えられる。下端部には杭を打ちつけたと考えられる小規模な柱穴(杭穴？)が検出されており、杭と側板による護岸が成されていたものと考えられる。C－3グリット交点付近において数本の杭と幅約9cm、厚さ0.5cmの板による木組が検出されているが、この東西溝との関係は不明である。

出土した遺物はFig.23, 24に示した。

1～62はかわらけである。1～18は手づくね成形の大皿、19～25はロクロ成形の大皿、26は内折れタイプ、27～52は手づくね成形の小皿。53～62はロクロ成形の小皿である。手づくねタイプは器壁が厚く、底部に丸味をもち、器高の高いもの（7～9、28～30）よりも、底部が平底状で器壁がやや薄く、体部が開くものが主流である。ロクロ成形大皿は口径、底径の比率が小さく、器高の低いもの（20～22）と、やや小振りのもの（23, 24)、器高の高いもの（19,25)とがある。ロクロ成形小皿は底部の厚いもの（23）もみられるが、口径、底径ともに広く、器高の低いものが主流である。胎土は砂を含み、焼成良好である。

63－青磁劃花文碗。口径16.2cm。内面に3本の横位の沈線と飛雲文が見られる。釉は深緑色。貫入あり。胎土は灰白色を呈する。

64－青磁劃花文碗。口径15.4cm。口縁部に輪花様の刻みを入れたものである。内面には横位と縦位の沈線及び飛雲文がみられる。釉は深緑色。胎土は灰白色を呈する。

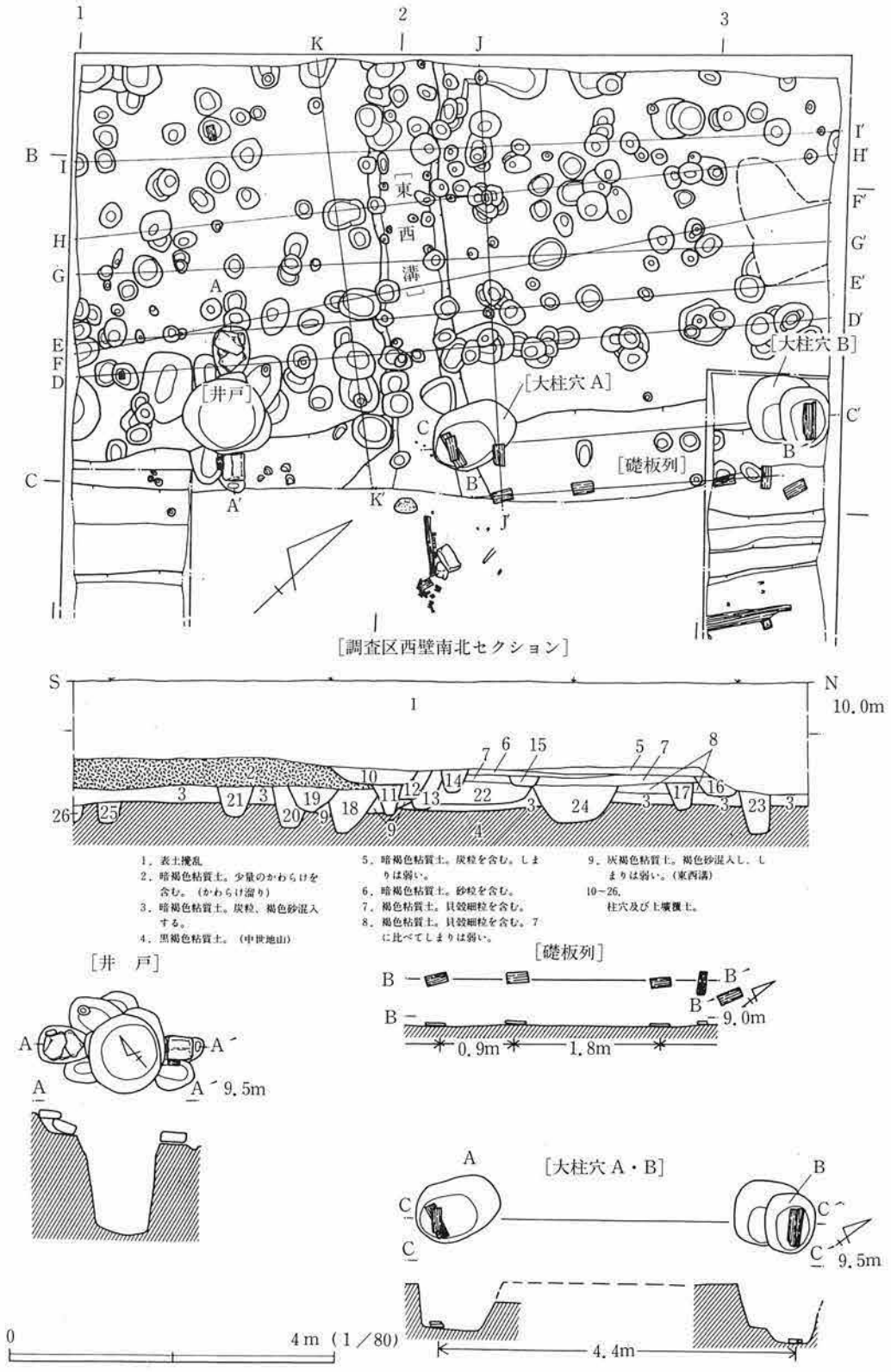


Fig.22 A～B－1～3グリット検出遺構

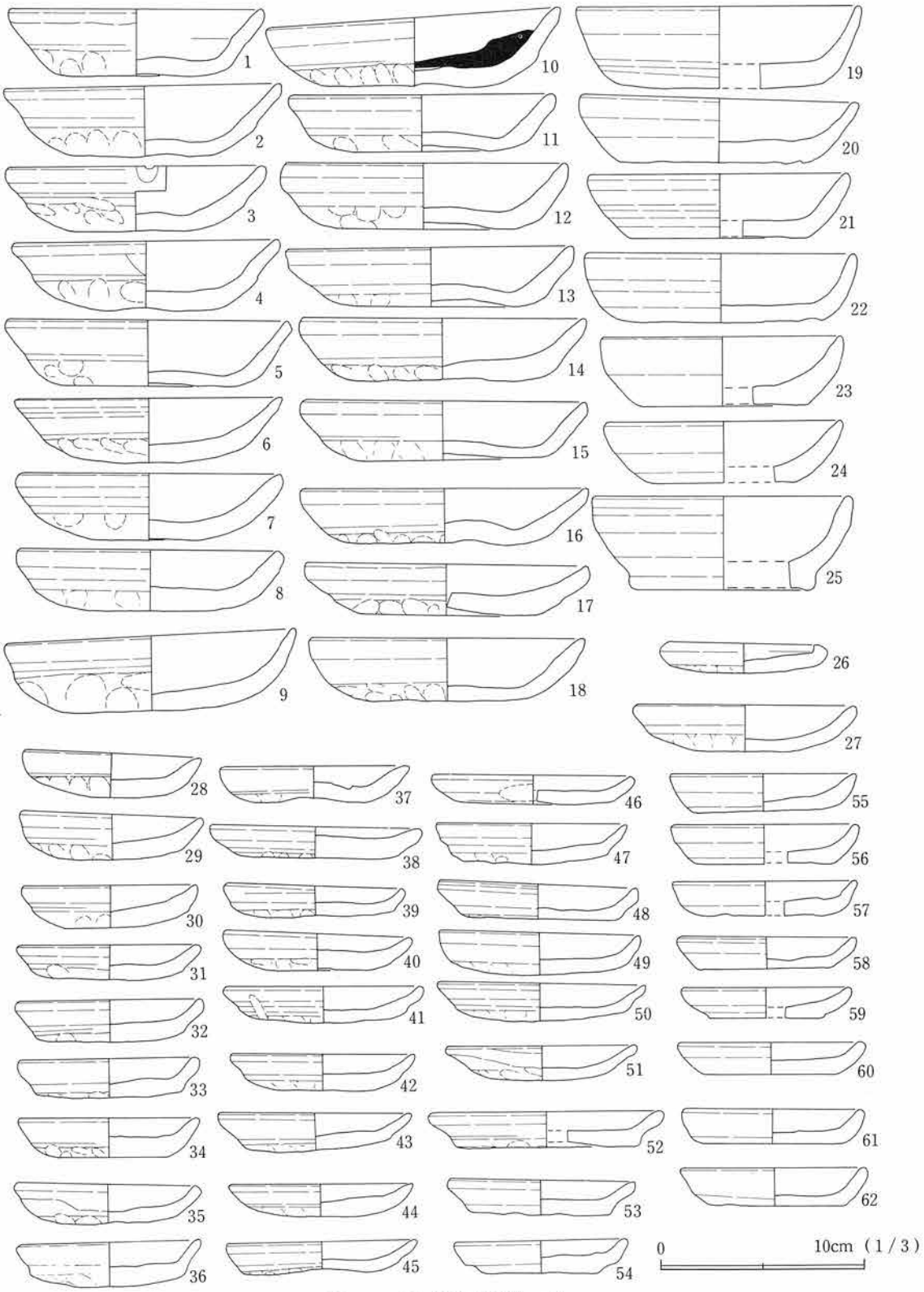


Fig.23 東西溝出土遺物 (1)

No.	口径	底径	器高	内高	16	13.6	11.2	2.6	1.2	32	9.0	7.3	2.1	1.2	48	9.6	7.9	1.7	1.1
1	12.3	10.2	3.3	2.5	17	13.6	11.8	2.5	1.3	33	8.5	7.1	1.9	1.3	49	9.7	8.6	2.1	1.3
2	13.4	11.1	3.4	2.7	18	13.2	11.1	3.0	2.3	34	8.6	7.2	1.9	0.9	50	10.1	8.2	1.9	1.2
3	12.3	10.5	3.3	2.9	19	13.2	10.0	4.0	2.7	35	8.7	6.9	1.9	1.3	51	9.0	6.9	1.7	1.1
4	12.8	10.8	3.3	2.4	20	13.0	9.3	3.1	2.1	36	8.8	7.6	2.2	1.2	52	11.2	8.0	1.8	0.9
5	13.7	11.8	3.2	2.5	21	12.7	8.5	3.1	2.2	37	9.1	7.5	1.5	0.7	53	9.0	6.8	1.8	1.0
6	12.7	10.3	3.2	2.3	22	13.0	10.0	3.4	2.6	38	10.2	8.0	1.5	0.4	54	9.3	5.8	1.6	0.8
7	12.6	10.9	3.3	2.3	23	11.5	8.4	3.4	2.5	39	8.5	7.9	1.5	0.8	55	8.8	6.1	1.8	1.3
8	12.6	11.0	3.0	1.8	24	11.4	7.2	3.0	2.2	40	9.0	7.4	1.8	0.7	56	9.0	6.8	1.9	1.3
9	14.1	13.2	3.7	2.8	25	12.3	8.9	4.6	3.2	41	9.5	8.1	1.8	1.1	57	8.9	6.0	1.7	1.0
10	13.9	11.9	3.3	2.5	26	7.2	7.1	1.5	0.8	42	8.9	7.5	1.8	1.0	58	8.5	6.6	1.6	1.1
11	12.7	10.9	2.8	1.8	27	10.7	9.5	2.2	1.7	43	9.3	7.2	1.8	1.1	59	8.1	5.7	1.5	1.1
12	13.6	12.2	3.3	2.2	28	8.4	7.6	2.2	1.3	44	8.9	7.2	1.6	0.9	60	8.8	6.4	1.6	0.9
13	13.9	11.0	2.9	1.8	29	8.8	7.5	2.2	1.4	45	9.2	7.7	1.3	0.9	61	8.6	7.3	1.7	1.2
14	13.5	11.4	2.9	2.3	30	8.4	7.6	2.1	1.3	46	9.6	7.7	1.4	0.7	62	9.0	6.7	1.9	1.4
15	13.7	11.8	2.9	2.0	31	8.6	7.4	1.7	0.9	47	9.2	7.6	2.0	1.3					

単位（cm）

表８．東西溝出土かわらけ法量（Fig. 23）

65－青磁櫛描文碗。体部外面下位には櫛歯状工具による条線、体部内面にはヘラによる文様が施される。釉は深緑色透明。体部外面下位から外底部は露胎。胎土は灰白色を呈する。

66－青磁皿。口径9.6cm、底径3.0cm、器高25cm。内面下位には横位の条線、内底面にはヘラによる文様が施される。釉は灰緑色。外底面は露胎。胎土は灰白色を呈する。

67－褐釉盤。口縁部上面～側面及び体部外面中位以下は褐色を呈する。釉は淡乳緑色。胎土は灰白色を呈し、夾雑物を含む。

68－常滑窯甕。口径38.2cm。口縁はＮ字状に立ちあがる。胎土は灰色を呈し精良。焼成良好。

69－黒漆塗りの横櫛。歯は約1.5mm間隔で挽き出されている。棟厚９mm。棟高1.0cm。歯長1.6cm。

70－用途不明木製品。丸味をもつ台形を呈する。長辺19.2cm、短辺10.9cm、厚さ３mm。曲物の

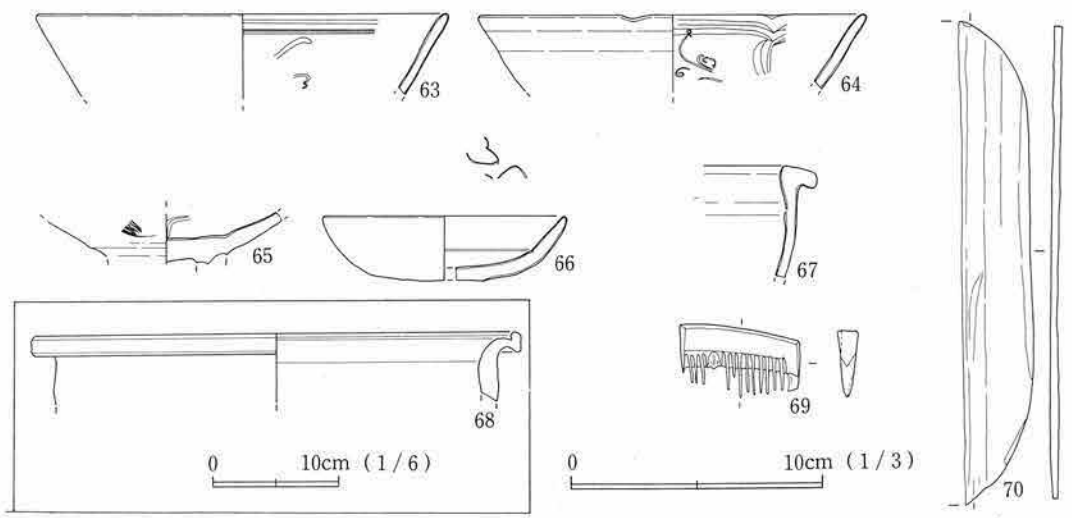


Fig. 24　東西溝出土遺物（2）

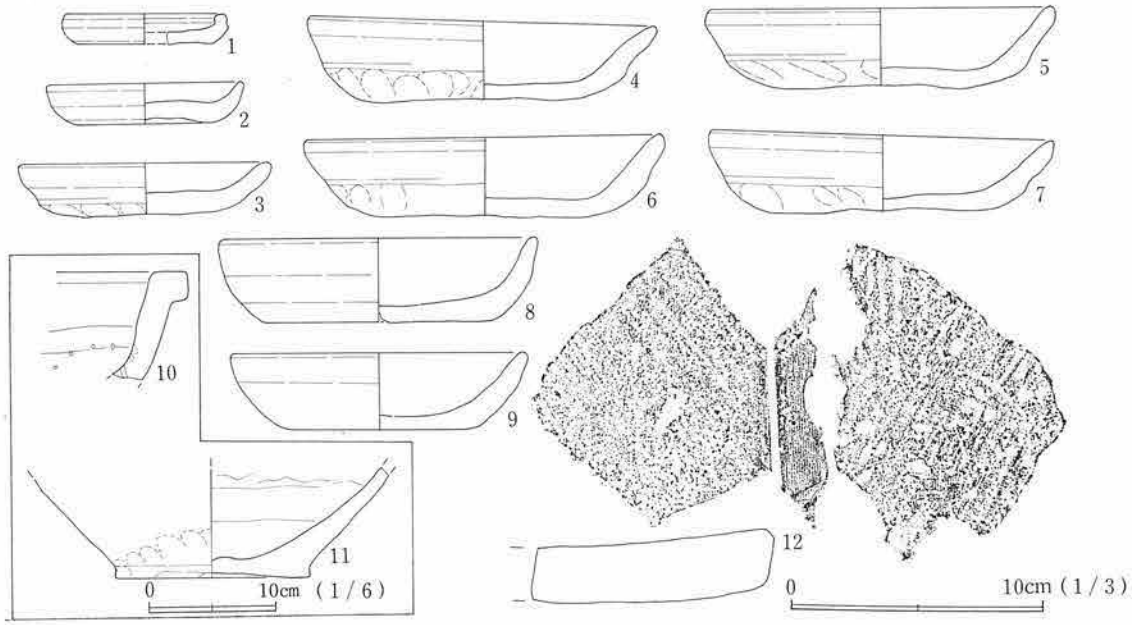


Fig.25 井戸出土遺物

底板である可能性がある。

(2) 井戸

B－1グリットで検出された。平面ほぼ円形を呈する。上端幅0.9m、下端幅0.7m、検出面からの深さは約1.5mであり、底面最深部は海抜7.8mである。覆土上層は暗褐色粘質土であり、かわらけの完形品が出土した。中～下層は有機物を含む褐色粘質土であり、しまりは弱い。また、井戸の西と東に土丹切石をすえた柱穴が検出されている。芯～芯で約1.5mを測る。井戸との関係は不明。

井戸から出土した遺物はFig.25に示した。

1～9はかわらけである。1はロクロ成形の内折れタイプ。2はロクロ成形の小皿であり器高は低い。3は手づくね成形の小皿で器壁が厚く、やや器高の低いもの。4～7は手づくね成形の大皿であり、口径が広く、底部が平底状を呈するものである。いずれも焼成良好である。

10－角形火鉢。体部は上方に立ちあがり口縁部は直角に折り曲げられる。体部下位には数ヶ所の穿孔が認められる。この穿孔は貫通するものと、しないものとがある。器壁は淡橙色を呈し、表面の剝離が激しい。胎土は夾雑物多く、芯部は灰白色を呈する。一辺22cm以上のものである。

11－渥美窯甕。底径15.4cm。内外面には乳緑色の自然釉が生じている。体部外面下部はヘラ削りにより調整され、外底面は砂底である。器表は暗灰色、胎土は灰色を呈し精良。焼成良好である。

12－平瓦。凹凸両面には粗い離れ砂が付着する。凸面には縦位、斜位の縄叩痕が、凹面には斜位の糸切痕が認められる。側面はヘラ削りされる。器表、胎土ともに灰白色を呈する。

(3) 大柱穴A，B (Fig.22)

B－2～3グリット、南北大溝の西肩において検出した。大柱穴Aは平面長楕円形を呈し、長

軸（南北）1.1m、短軸（東西）0.8m。確認面からの深さは0.5mであり底面からは2枚の礎板が重なった状態で検出された。礎板上面のレベルは海抜8.70mである。大柱穴Bは2時期の掘り直しが考えられるが新旧関係は不明である。平面隅丸方形を呈し、長軸（東西）0.75m、短軸（南北）0.6m。確認面からの深さは西のものが0.5m、東のものが0.7mであり、2枚の礎板が並んだ状態で検出された。礎板上面の海抜レベルは8.60mである。この大柱穴A，Bは礎板の芯～芯距離で4.4mを測り、南北の軸方向はN－38°－Eである。門あるいは橋の基礎部分と考えられる。

(4) 礎板列（Fig.22)

B－2～3グリット、大柱穴A，Bの東側に於いて検出した。南北大溝の範囲内であり、柱穴の掘方は検出し得なかった。礎板は4枚南北に並び、芯～芯距離で南から0.9m、1.8m、0.45mとなる。南北の軸方向はN－38°－Eであり、大柱穴と同じである。

(5) 柱穴列（Fig.26)

A～B－1～3グリット、第二面に於いては約45㎡という狭い面積上にも拘わらず約250口の柱穴を検出し、東西及び南北方向の柱穴列を8棟検出し得た。各柱穴列ともに調査区外へ広がり、或いは南北大溝により削平されているために全体の規模は不明である。以下、柱穴列1～8と呼称し、各柱穴列について説明を加えていく。柱穴列1～6は南北、7～8は東西に軸方向をもつ柵列又は塀といった構築物を想定し得よう。

① 柱穴列1

B－1～3グリットに位置する南北方向に軸方位をもつ柱穴列である。柱穴は5口であり、各柱穴は径が30～40cmの隅丸方形を呈しており、深さは検出面から40～60cmである。西端の柱穴には5×10cm角の柱が遺存していた。柱穴の間隔は2.1m（7尺）を測る。軸方位はN－46°－Eである。この柱穴列には多数の切り合いが認められ、短期間にほぼ同じ場所に同様の施設を構築したものと考えられる。

② 柱穴列2

B－1～3グリットに位置する南北方向に軸方位をもつ柱穴列である。柱穴は5口であり、各柱穴は径が20～30cmの隅丸方形を呈しており、深さは検出面から30～45cmである。柱穴の間隔は1.8m（6尺）を測る。軸方位はN－37°－Eである。

③ 柱穴列3

B－1～3グリットに位置する南北に軸方位をもつ柱穴列である。柱穴は5口であり、各柱穴は平面隅丸方形もしくは楕円形を呈し、径が30～40cm、検出面からの深さは40～70cmである。柱穴の間隔は1.9m（約6尺3寸）である。軸方位はN－32°－Eである。

④ 柱穴列4

B－1～3グリットに位置する南北に軸方位をもつ柱穴列である。柱穴は4口であり、各柱穴は平面隅丸方形を呈し、径は25～30cm、検出面からの深さは20～40cm程である。柱穴の間隔は1.8m（6尺）であり、軸方位はN－39°－Eである。

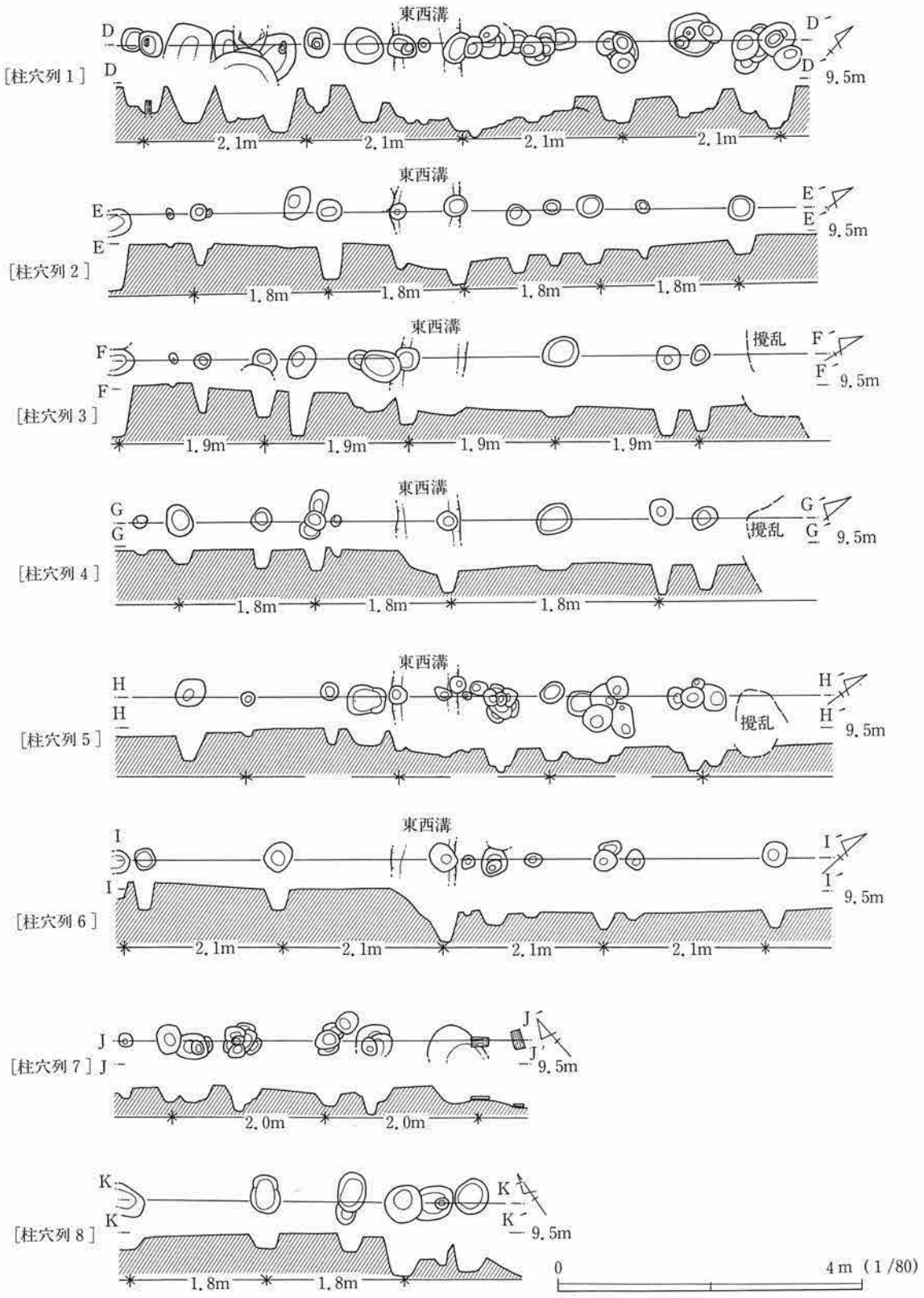

東西溝
[柱穴列 1]
D
D
D
D
9.5m
2.1m
2.1m
2.1m
2.1m
東西溝
[柱穴列 2]
E
E
E
E
9.5m
1.8m
1.8m
1.8m
1.8m
東西溝
[柱穴列 3]
撹乱
F
F
F
9.5m
1.9m
1.9m
1.9m
1.9m
東西溝
[柱穴列 4]
G
G
撹乱
G
G
9.5m
1.8m
1.8m
1.8m
東西溝
[柱穴列 5]
H
H
撹乱
H
H
9.5m
東西溝
[柱穴列 6]
I
I
I
I
9.5m
2.1m
2.1m
2.1m
2.1m
[柱穴列 7]
J
J
J
J
9.5m
2.0m
2.0m
[柱穴列 8]
K
K
K
K
9.5m
1.8m
1.8m
0
4m (1/80)

Fig. 26 柱穴列

No.	口径	底径	器高	内高	3	9.8	8.1	2.1	1.2	6	14.0	12.7	3.2	2.4	9	11.5	7.5	3.1	2.5
1	6.3	5.4	1.2	0.7	4	13.6	12.0	3.1	2.5	7	13.5	11.8	3.1	2.5					
2	7.7	5.0	1.6	0.8	5	13.6	12.0	3.1	2.9	8	12.4	9.0	3.3	2.7					

単位（cm）

表9．井戸出土かわらけ法量（Fig.25）

⑤　柱穴列5

A～B－1～3グリットに位置する南北に軸方位をもつ柱穴列である。柱穴は4口であり、各柱穴は楕円形を呈しており、径は20～30cm、検出面からの深さは10～25cmである。柱穴の間隔は2.0m（約6尺3寸）であり、軸方位はN－36°－Eである。

⑥　柱穴列6

A～B－1～3グリットに位置する南北に軸方位をもつ柱穴列である。柱穴は5口であり、各柱穴は隅丸方形を呈し、径は25～30cm程である。検出面からの深さは20～40cm程である。柱穴の間隔は2.1m（7尺）であり、軸方位はN－41°－Eである。

⑦　柱穴列7

A～B－2グリットに位置する東西に軸方位をもつ柱穴列である。南隣する東西溝との関連は不明である。柱穴は2口、礎板を一枚検出し、柱穴は平面隅丸方形を呈し、深さは検出面からの20cm程である。礎板も柱穴に伴われたものと考えられるが南北大溝の範囲であり検出し得なかった。柱穴及び礎板の間隔は2.0m（約6尺7寸）であり、軸方位はN－48°－Eである。

(8)　柱穴列8

A～B－1グリットに位置する東西に軸方位をもつ柱穴列である。東西溝に南隣するが関連は不明である。柱穴は3口であり、各柱穴は楕円形、隅丸方形を呈し、径は30～40cmである。深さは検出面から20～50cmであり、東端のものが深い。柱穴の間隔は1.8m（6尺）であり、軸方位はN－55°－Wである。

第3節　南北大溝（Fig.27～43）

ここではB～D－1～3グリットに於いて検出された南北大溝について説明を加えることとする。この溝は掘削深度の規定があり、全体を検出することは不可能であったため、施工主の御了解を頂き、調査区の北、南壁際に約1.5×7.5mのトレンチ（南北大溝Nトレンチ、南北大溝Sトレンチ）を設定し、この2箇所に限り溝底まで掘り下げた。また、両トレンチからは溝護岸施設と考えられる木組を検出したが、構築方法が異なるため、南北方向のトレンチ（南北大溝NSトレンチ）を設定し、両木組の南限、北限の確認を行なった。本節における各トレンチは以下、Nトレンチ、Sトレンチ、NSトレンチと呼称する。

Ⅰ．検出遺構（Fig.27）

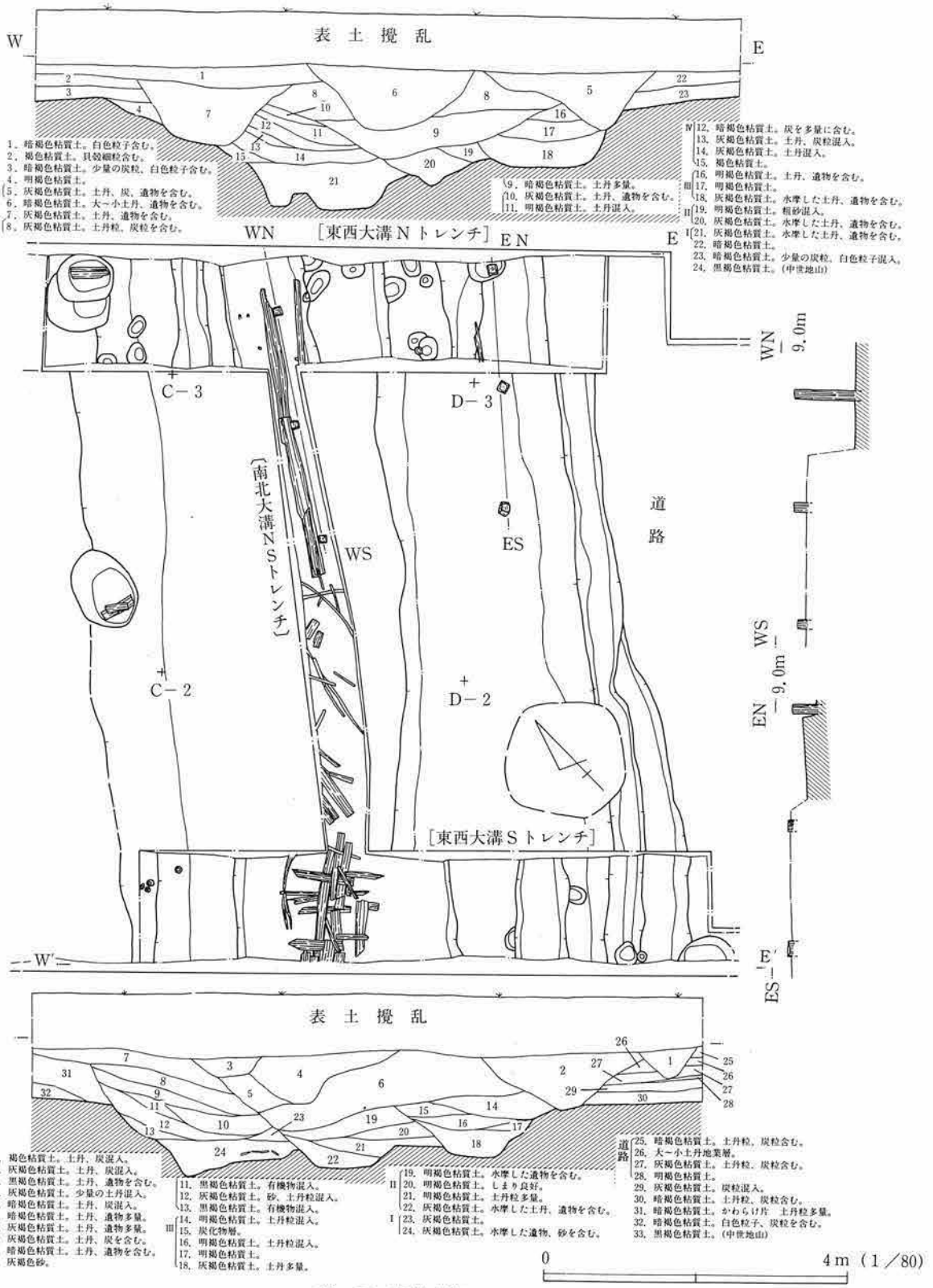
南北大溝は覆土の堆積状況から約6期にわたる浚渫、改修が行なわれたものと考えられる。各期のものを溝Ⅰ～溝Ⅵと呼称し説明を加えていく。堆積土層からは溝Ⅰ～溝Ⅵへと掘り直されていくものと考えられる。各溝の南北主軸方位はほぼグリット南北軸と同一である。

溝Ⅰの溝底はNトレンチでは2箇所の凹状地を有し、海抜レベル8.00～8.50mであり、Sトレンチに於いては西側が深く8.15～8.40mである。確認できる深さは0.5m前後、下端幅は1.2m前後であり、断面は逆台形状を呈する。覆土は水摩した土丹粒、粗砂を含む灰褐色粘質土である。また、Nトレンチでは3×2㎝角の杭を3本検出したが用途は不明である。Sトレンチでは幅12㎝前後、厚さ1㎝程の板を縦横方向の網代状に組み合わせた木組が東側に倒壊した状態で検出された。検出レベルは海抜8.45mである。縦板の下端部は山型に削り尖らせている。この木組は調査区南外へと広がるが、Sトレンチ以北への広がりはNSトレンチ南部において、木組の横板北端が二次的な削痕を有していないことから、この部分までであると考えられる。しかし、狭いトレンチ内での検出であり、詳細は不明である。

溝Ⅱの溝底はNトレンチにおいては中央部に凹状部をもち海抜レベル8.40～8.50m、Sトレンチでは8.30mであり南に傾斜している。確認できる上端幅は1.4m前後、下端幅は0.8m程であり、深さは0.5～0.6mである。断面は逆台形状を呈するものと考えられる。覆土は水摩した土丹粒、粗砂を含む褐色粘質土である。

溝Ⅲの溝底レベルはNトレンチで海抜8.60m、Sトレンチで8.45mであり、南に向かい傾斜している。確認できる上端幅は約2.0m、下端幅は0.6～1.0m、深さ0.8mである。覆土は暗褐色粘質土であり、下層には水摩した土丹粒、粗砂を含む。また、Nトレンチでは海抜8.80mで15㎝角の柱を検出した。この柱と同規模のものはNトレンチ南外でも検出され3本南北に並び、柱間は芯～芯で1.6mである。

溝Ⅳの溝底レベルはNトレンチで8.60m、Sトレンチで8.65mと南がやや高くなる。確認できる深さは0.8m前後であり、下端幅は1.6～1.8mである。断面は逆台形状を呈すると考えられる。



表土攪乱
W
E
1．暗褐色粘質土。白色粒子含む。
2．褐色粘質土。貝殻細粒含む。
3．暗褐色粘質土。少量の炭粒、白色粒子含む。
4．明褐色粘質土。
Ⅵ 5．灰褐色粘質土。土丹、炭、遺物を含む。
6．暗褐色粘質土。大～小土丹、遺物を含む。
7．灰褐色粘質土。土丹、遺物を含む。
Ⅴ 8．灰褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。
9．暗褐色粘質土。土丹多量。
10．灰褐色粘質土。土丹、遺物を含む。
11．明褐色粘質土。土丹混入。
Ⅳ 12．暗褐色粘質土。炭を多量に含む。
13．灰褐色粘質土。土丹、炭粒混入。
14．灰褐色粘質土。土丹混入。
15．褐色粘質土。
16．明褐色粘質土。土丹、遺物を含む。
Ⅲ 17．明褐色粘質土。
18．灰褐色粘質土。水摩した土丹、遺物を含む。
Ⅱ 19．明褐色粘質土。粗砂混入。
20．灰褐色粘質土。水摩した土丹、遺物を含む。
Ⅰ 21．灰褐色粘質土。水摩した土丹、遺物を含む。
22．暗褐色粘質土。
23．暗褐色粘質土。少量の炭粒、白色粒子混入。
24．黒褐色粘質土。（中世地山）
WN
［東西大溝Nトレンチ］
EN
E
WN 9.0m
C－3
D－3
〔南北大溝NSトレンチ〕
WS
ES
道路
WS
EN 9.0m
C－2
D－2
［東西大溝Sトレンチ］
W′
E′
ES
表土攪乱
1．褐色粘質土。土丹、炭混入。
Ⅵ 2．灰褐色粘質土。土丹、炭混入。
Ⅴ 3．黒褐色粘質土。土丹、遺物を含む。
4．灰褐色粘質土。少量の土丹混入。
5．暗褐色粘質土。土丹、炭混入。
6．暗褐色粘質土。土丹、遺物多量。
Ⅳ 7．灰褐色粘質土。土丹、遺物多量。
8．灰褐色粘質土。土丹、炭を含む。
9．暗褐色粘質土。土丹、遺物を含む。
10．灰褐色砂。
11．黒褐色粘質土。有機物混入。
12．灰褐色粘質土。砂、土丹粒混入。
13．黒褐色粘質土。有機物混入。
Ⅲ 14．明褐色粘質土。土丹粒混入。
15．炭化物層。
16．明褐色粘質土。土丹粒混入。
17．明褐色粘質土。
18．灰褐色粘質土。土丹多量。
Ⅱ 19．明褐色粘質土。水摩した遺物を含む。
20．明褐色粘質土。しまり良好。
21．明褐色粘質土。土丹粒多量。
22．灰褐色粘質土。水摩した土丹、遺物を含む。
Ⅰ 23．灰褐色粘質土。
24．灰褐色粘質土。水摩した遺物、砂を含む。
道路 25．暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒含む。
26．大～小土丹地業層。
27．灰褐色粘質土。土丹粒、炭粒含む。
28．明褐色粘質土。
29．灰褐色粘質土。炭粒混入。
30．暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒含む。
31．暗褐色粘質土。かわらけ片　土丹粒多量。
32．暗褐色粘質土。白色粒子、炭粒を含む。
33．黒褐色粘質土。（中世地山）
0
4m（1／80）

Fig.27　南北大溝

覆土はレンズ状堆積を呈し、植物遺体を混入する有機物層を含む。また、Nトレンチに於いて15㎝角の柱と幅約18㎝、厚さ1㎝程の横板が検出された。柱検出の海抜レベルは8.80mである。この木組についてはNSトレンチから、横板は長さ2.0mのものが2枚、南北方向に並べられ、柱は芯～芯で1.6mの間隔で3本検出された。柱は横板の倒壊を防ぐものと考えられる。先に述べた溝Ⅲ検出の柱列との対応は東西方向では一致するようであるが、柱間が北から2.9m、2.8m、2.4mを測り、南のものほど狭くなり一定の数値は得られなかった。また、NSトレンチからはこの木組と溝Ⅰで述べたSトレンチ検出の網代状木組との関係を明確にするような積極的資料は検出されていない。

溝Ⅴの溝底は西へ傾斜しており、海抜レベルはNトレンチで8.70～8.90m、Sトレンチで8.80～9.20mである。壁の立ちあがりは明確ではないが、下端幅は2.0m前後であり、断面逆台形状を呈すると考えられる。覆土には土丹、土丹粒を多量に含んでいる。

溝Ⅵは上部を表土により削平されている。確認できる上端幅2.0m、下端0.3m前後、深さは0.8m程であり、溝底海抜レベルは9.10mである。断面は上端幅の広い薬研堀状を呈している。覆土は土丹粒を含む灰褐色粘質土である。

Ⅱ　出土遺物（Fig.28～43）

ここでは南北大溝から出土した遺物について述べることとする。南北大溝は覆土の堆積状況から溝Ⅰ～Ⅵに分けることが可能であると先に述べたが、まず、どの溝へ帰属するかが不明瞭なものは南北大溝内出土遺物とし、他のものに関しては溝Ⅰから順に説明を加えていく。

①　南北大溝内出土遺物（Fig.28～30）

南北大溝内出土遺物として図示可能なものはFig.28～30に示した1～111である。

1～57はかわらけである。1～12は手づくね成形小皿。13～32、55はロクロ成形小皿。33～41、57は手づくね成形の大皿。42～50、56はロクロ成形大皿。51、52はロクロ成形中皿。53は手づくね成形の異形品で深いプロポーションをもつもの。54は白かわらけであり、手づくね成形の内折れタイプである。手づくね成形では径が広く、平底状を呈し、器高の低いもの（1～5、33～38、41）と、径がやや小さく、丸底状で、器高のやや高くボッテリとしたもの（6～12、39、57）とがある。ロクロ成形では底部が厚く、器高の低いもの（13～16、55）と、器高が低く、径の大きいもの（17～28、42～49、56）、器壁が薄く、口径に比べ底径が小さく、器高の高いもの(29～32、50～52)とがある。55～57は底部に穿孔をもつものであり、いずれも焼成後にあけられている。

58－青磁劃花文碗。口径15.4㎝。内面に横位、縦位の沈線が描かれている。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。貫入あり。

59－青磁劃花文碗。口径16.2㎝。内面に横位、縦位の沈線が描かれている。口縁は外反気味である。釉は深緑色、胎土は灰白色を呈する。

60－青磁碗。口径16.7㎝。内面にはヘラによる文様が描かれている。体部外面のナデは強い。釉は灰緑色を呈し、体部下半以下は露胎である。胎土は淡橙灰色を呈する。

61－青磁鎬蓮弁文碗。口径15.2㎝。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。貫入あり。

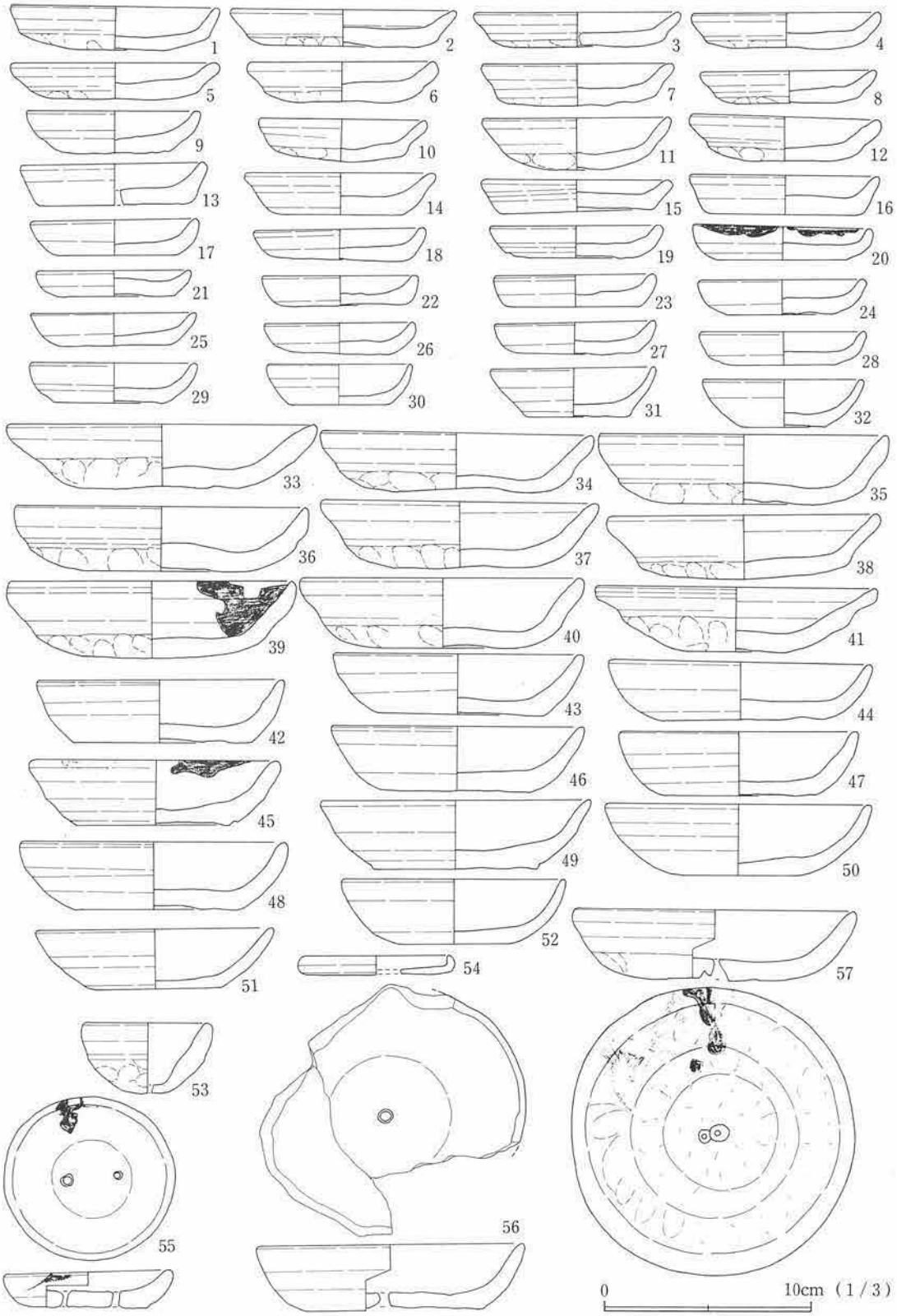


Fig. 28 南北大溝内出土遺物 (1)

No.	口径	底径	器高	内高	15	8.9	7.4	1.6	0.6	30	6.8	5.0	2.0	1.5	45	11.7	7.6	3.1	2.3
1	9.9	9.1	2.1	1.4	16	9.0	7.4	1.9	1.0	31	7.8	4.9	2.3	1.7	46	12.0	7.0	3.1	2.2
2	10.7	9.1	1.8	0.8	17	7.9	5.8	1.7	1.1	32	7.6	3.9	2.3	1.6	47	11.3	7.6	3.1	2.4
3	9.7	8.4	1.7	1.0	18	8.1	6.3	1.5	0.9	33	14.6	12.5	3.0	2.1	48	12.6	8.0	3.3	2.3
4	9.0	7.7	1.7	0.9	19	8.1	6.0	1.6	0.9	34	12.8	11.8	2.7	2.1	49	12.9	7.8	3.3	2.4
5	9.7	8.1	1.8	1.0	20	8.4	6.3	1.6	0.8	35	13.8	11.8	3.3	2.3	50	12.7	6.4	3.4	2.8
6	8.9	7.6	1.9	1.0	21	7.2	5.6	1.3	0.4	36	13.9	12.8	3.1	1.7	51	11.3	6.3	2.9	2.5
7	9.1	7.7	2.0	1.1	22	7.3	6.0	1.4	0.8	37	13.1	11.0	3.1	2.3	52	10.6	5.2	3.1	2.5
8	8.2	6.9	1.5	0.9	23	7.5	6.2	1.6	0.9	38	12.9	10.2	3.1	2.3	53	5.6	5.6	3.4	3.0
9	8.2	6.3	2.0	1.4	24	7.8	5.3	1.7	0.9	39	13.5	11.1	3.7	2.8	54	7.0	6.1	0.9	0.6
10	7.9	6.6	2.0	1.3	25	7.8	5.2	1.5	1.1	40	13.3	11.3	3.3	2.4	55	7.8	5.5	1.7	0.9
11	8.8	7.0	2.5	1.7	26	7.1	4.9	1.5	0.9	41	13.3	10.9	3.1	2.0	56	12.7	8.5	3.0	2.4
12	8.9	7.3	2.1	1.5	27	7.6	5.8	1.6	0.8	42	11.7	8.6	3.0	2.1	57	13.3	6.5	3.4	2.4
13	8.7	7.4	2.0	1.3	28	7.8	4.9	1.6	1.0	43	11.8	7.9	2.9	2.1					
14	8.9	5.9	2.0	1.1	29	7.9	5.7	1.9	1.2	44	12.5	8.0	2.8	1.8					

単位（cm）

表10．南北大溝内出土かわらけ法量（Fig.28）

62－青磁碗。口径14.4cm。口縁部に刻みを入れたもの。釉は淡青色失透。胎土は灰色を呈す。

63－青磁碗。口径12.1cm。口縁部に刻みを入れたもの。釉は淡青色。胎土は灰白色を呈する。

64－青磁鎬蓮弁文碗。高台外径5.5cm。釉は深緑色。高台内は露胎。胎土は灰色を呈する。

65－青磁無文鉢。口径20.7cm。折縁の口縁を有する。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。

66－青磁碗。口径8.1cm。口縁部は肥厚し玉縁状を呈する。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。

67－青磁皿。口径9.5cm。体部内面下位に強い凹みをもつ。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。

68－青磁蓮弁文鉢。高台外径5.6cm。高台畳付部は露胎。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。

69－白磁口兀皿。底径5.6cm。釉は灰白色透明。胎土は灰白色を呈し若干の気孔を含む。

70－白磁口兀皿。口径15.1cm。釉は淡青白色。胎土は灰白色を呈する。

71－白磁口兀皿。口径9.1cm。内面に型押しによる横位の条線と2段の蓮弁文がみられる。器壁は薄い。釉は淡青白色透明。胎土は灰白色を呈す。

72－白磁蓋。径7.0cm。上面に型押しによる雷文帯を施す。側面にも文様の痕跡が認められる。釉は灰白色透明。胎土は淡灰白色を呈する。

73－白磁壺。高台外径5.8cm。釉は灰白色を呈し、高台内及び畳付部は露胎。胎土は灰色を呈す。

74－白磁壺。高台外径7.0cm。釉は淡青白色。高台部及び高台内は露胎。胎土は灰白色を呈する。

75－白磁碗。高台外径6.0cm。釉は淡灰緑色。高台内及び畳付部は露胎。胎土は灰白色を呈する。

76－早島式土器。口径11.6cm。内面～口縁部はナデにより調整され、外面には指頭痕を残す。胎土は淡灰白色を呈すが粗雑、焼成不良である。

77－山皿。口径7.7cm。底径5.6cm。器高1.5cm。器壁は厚く、外底面に糸切痕を残す。口縁部には降灰がみられる。胎土は灰色を呈し、やや粗い。

78－瀬戸窯入子。口径7.0cm。底径4.6cm。器高2.0cm。器壁は薄く、外底面はヘラ削りである。口縁～内面に降灰がみられる。胎土は淡灰橙色を呈する。

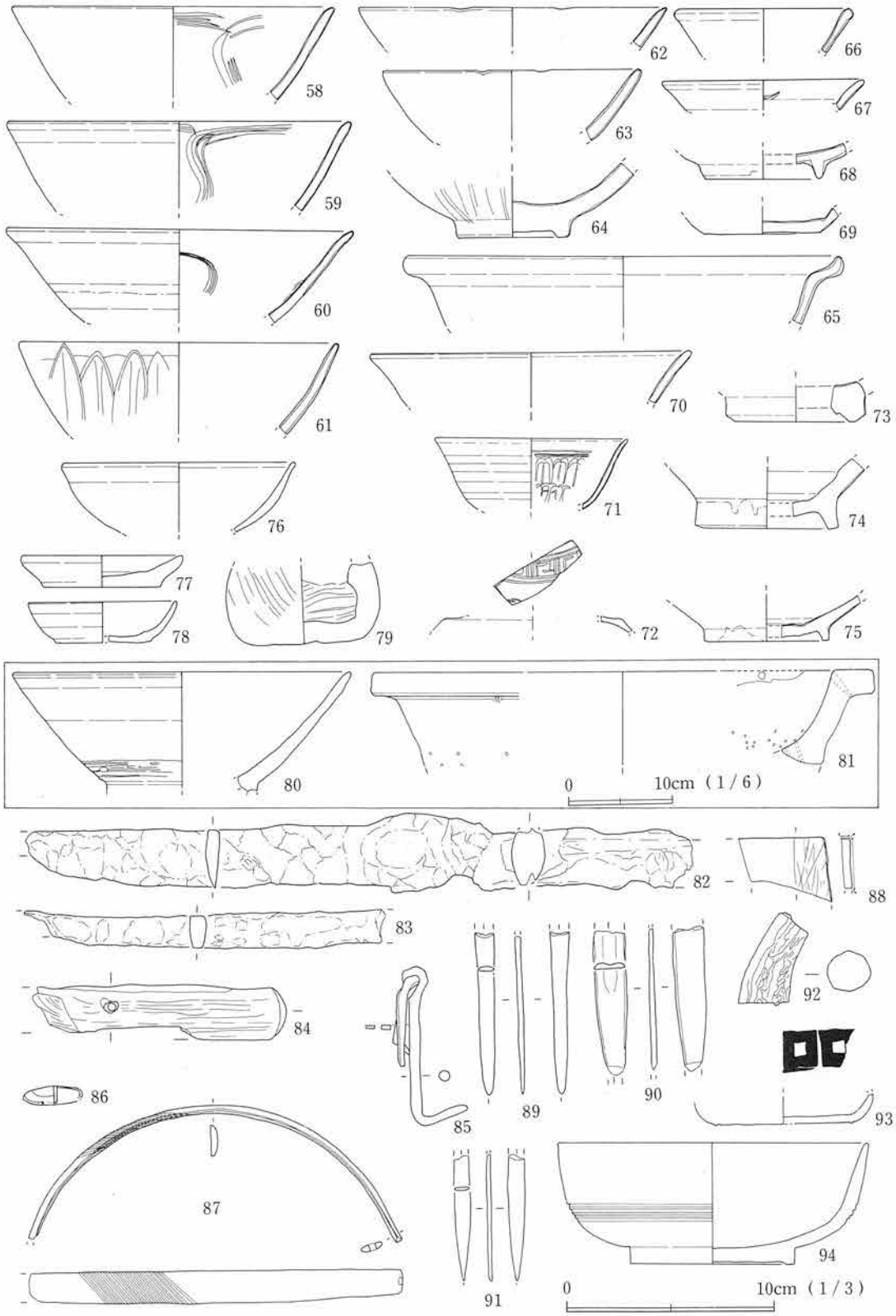


Fig. 29　南北大溝内出土遺物 (2)

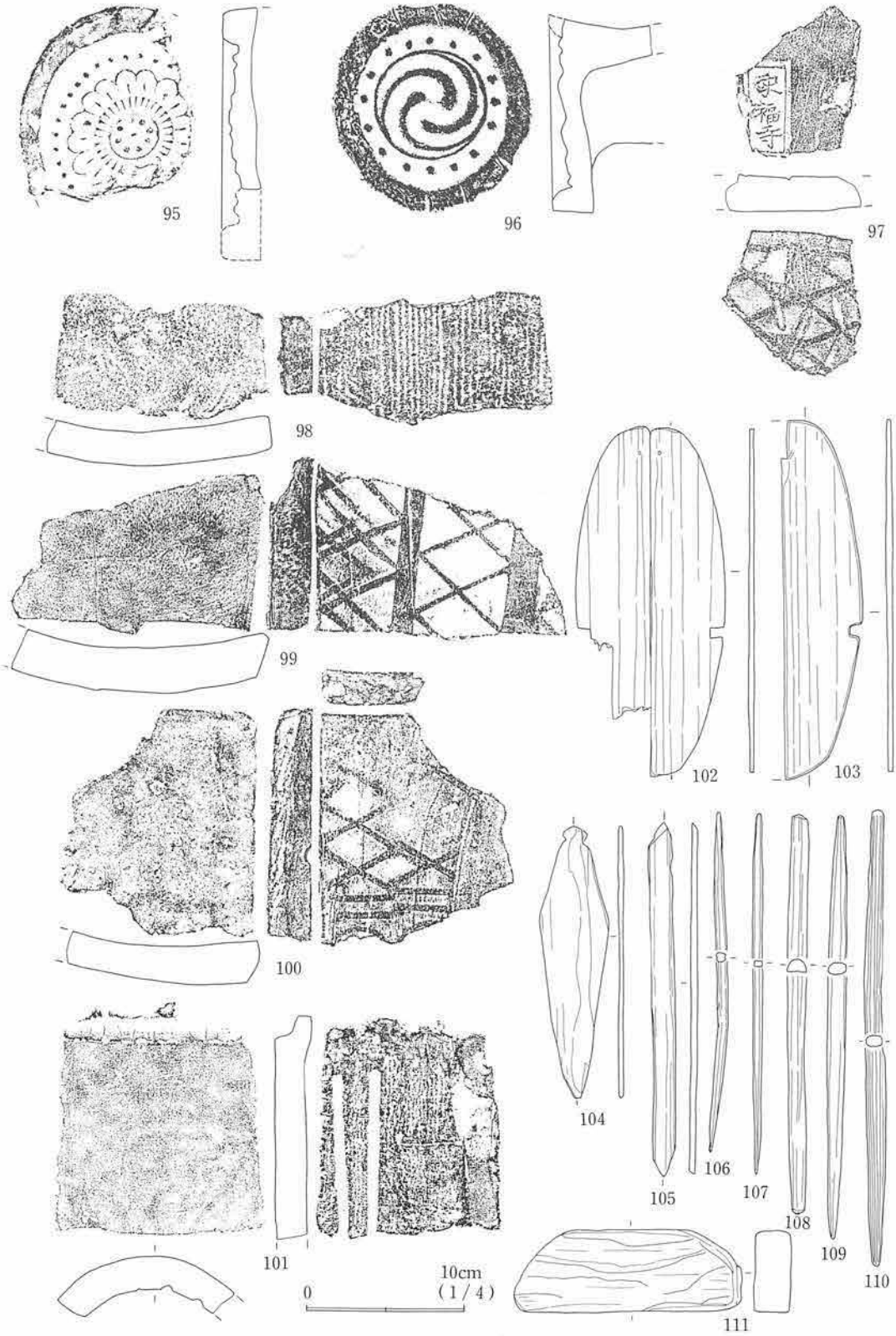


Fig. 30　南北大溝内出土遺物　(3)

79－かわらけ質土製品。底径5.5cm。外面及び外底面は雑なナデを施す。小壺となるものか？

80－渥美窯こね鉢。口径32.0cm。体部外面下位はヘラ削りされる。内面下位の磨滅は激しい。胎土は灰色を呈し、やや粗雑である。

81－手焙り。口径48.0cm。体部下半には貫通する小穿孔がみられ、口縁部にもやや大きなものを有する。器壁はナデにより調整される。胎土は軟質であり、器表は淡橙色、胎芯は灰黒色を呈し、夾雑物を含む。

82－刀子。錆激しく詳細は不明であるが残存長32.2cm。刀幅2.6cm。棟幅5mm。

83－用途不明鉄製品。両端を欠損している。残存長17.4cm。断面は1.5×0.8cmの長方形を呈す。

84－刀子の柄。木製。柄頭部は丸く仕上げられる。目貫径0.6cm。残存長12.0cm。厚さ0.7cm。

85－掛金具。掛金部長8.0cm。止金部長4.5cm。掛金断面は丸味を帯び、止金断面は平らたい。

86－金銅製飾金具。調度品の装飾品と考えられる。

87－銅製鉉。片端を欠損している。残存長28.6cm。断面はカマボコ形を呈し、幅1.5cm、厚さ0.4cm。植物繊維を巻いていた痕跡が認められる。端部に直径3mmの孔が穿たれている。

88－砥石。仕上砥。泥岩製。残存長2.8cm。残存幅4.0cm。厚さ0.4cm。鋭利な削痕を残す。

89－笄。片端を欠損している。残存長7.7cm。幅0.9cm。厚さ0.3cm。

90－笄。片端を欠損している。残存長6.1cm。幅0.7cm。厚さ0.2cm。

91－笄。両端を欠損している。残存長6.7cm。幅1.5cm。厚さ0.3cm。

92－鹿角。両端に切断面をもつ。直径1.5～2.0cmである。

93－漆器椀。高台外径は推定で6.7cm。内面に赤漆による枡状の文様が手描きされている。

94－漆器椀。口径14.8cm。高台外径7.9cm。器高5.8cm。体部外面中位に4条の沈線が巡る。

95－軒丸瓦。八葉複弁蓮花文軒丸瓦。突出した中房に1＋8の蓮子を置く。中房外周には短い雄蕊を配する。外区円縁に珠文を巡らす。瓦当面の直径は16cm前後である。器表は灰黒色、胎芯は灰白色を呈する。

96－軒丸瓦。左廻り巴文軒丸瓦。巴文のまわりに珠文を巡らす。瓦当面の直径は12.5cm前後である。丸瓦部凸面は縦位のナデが施され、凹面には布目痕を有する。焼成は軟質であり、器表は灰白色、芯部は淡橙灰色を呈する。

97－平瓦。凹凸両面ともに粗砂が付着する。凹面には布目痕がみられ「永福寺」銘のスタンプが捺される。凸面には格子目の叩きが施される。器表は暗褐色、胎土は赤褐色を呈する。

98－平瓦。凹凸面には粗砂が付着する。凸面には縄目の叩きが施される。側面はヘラ削りされる。器表は灰白色、芯部は灰色を呈する。厚さは2.2cm程である。

99－平瓦。凸面には格子目の叩きが施され、粗砂が付着する。凹面はナデにより調整される。側面はヘラ削りされる。色調は灰白色を呈し、焼成不良である。厚さは2.7cm程である。

100－平瓦。凹凸両面に粗砂が付着する。凹面の布目はナデにより消される。凸面には格子目の叩きが施される。側面、端面はヘラ削りされるが、側面の仕上げは雑である。97と同質。

101－丸瓦。凸面はナデにより調整させる。凹面は粗砂が付着し、布目痕が確認できる。凸頂部付近に縦位の２条の凹線をもつ。器表は灰黒色、芯部は灰白色を呈する。

102－板草履の芯部。長さ21.9cm、幅9.4cm、厚さ0.3cm。

103－板草履の芯部。半分を欠損している。長さ22.4cm、幅4.9cm、厚さ0.3cm。

104－用途不明木製品。平面菱形を呈し、頂部は荷札の如く両脇に刻みを入れる。長さ17.2cm、幅4.4cm、厚さ0.3cm。

105－ヘラ状木製品。長さ22.2cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm。両端は山形に削られている。

106－箸状木製品。断面は隅丸方形を呈する。長さ21.4cm、幅0.6cm。

107－箸状木製品。断面は0.4×0.6cmの長方形を呈する。長さ22.8cm

108－棒状木製品。長さ25.2cm。断面は直径1.2cmの半円形を呈する。

109－箸状木製品。断面は楕円形を呈する。長さ26.7cm。幅1.1cm。厚さ0.8cm。

110－箸状木製品。断面は隅丸方形を呈する。長さ28.7cm、幅1.1cm、厚さ0.7cm。

111－用途不明木製品。平面は角のとれた台形状を呈する。側面は丁寧に削られている。長さ14.5cm。幅5.1cm、厚さ2.4cm。

② 溝Ⅰ出土遺物（Fig. 31、32）

溝Ⅰからの出土遺物で図示可能なものはFig.31、32に示した１～49である。

１～30はかわらけである。１～８、29は手づくね成形小皿。９～16はロクロ成形小皿。17～23は手づくね成形大皿。24～28はロクロ成形大皿。30は糸切り底の内折れタイプである。手づくね成形は底部が丸く全体にボッテリとしたもの（１～３、17～19）と平底状を呈し、器高の低いもの（４～８、18～23）とがある。ロクロ成形では、底部が厚く器高の低いもの（９、11、13、14、16）と、口径、底径ともに広く、器高が低く、体部に丸味をもつもの（10、12、25～28）、体部が上方に立ちあがるもの（24）とがある。29はかなり器高の低いものであり、内面に布目痕が観察される。

31－白かわらけ。口径8.5cm、底径4.5cm、器高1.5cm。手づくね成形。

32－かわらけ質土製品。おそらく小壺となるもの。底径5.5cm。底部は1.7cmと厚く、内底面には×の線刻が観察される。

33－青磁劃花文碗。口径17.8cm。内面に横位、縦位の沈線をもつ。釉は青緑色。胎土は灰色。

34－青磁劃花文碗。高台外径6.0cm。内底面に蓮花文を描く。釉は深緑色。胎土は灰色を呈す。

35－黄釉鉄絵。底部片。内底面に草文が描かれる。釉は黄褐色。胎土は灰色を呈し夾雑物を含む。

36～38は銅銭である。36－祥符元宝。行書体。37－五銖。篆書体。38－大宋元宝。楷書体。

39－常滑窯甕。口径39.0cm。口端部は小さく上方に折り返えされ、上面には沈線状の凹みをもつ。器表は褐色を呈し、外面には自然釉が生じる。胎土は灰白色を呈する。

40－常滑窯壺。口径20.6cm。口端部は小さく上方に折り返えされる。器表は黒灰色。内面には降灰がみられる。胎土は灰色を呈する。

41－渥美窯こね鉢。体部は直線的に立ちあがる。内面の磨滅は激しい。色調は灰色を呈する。

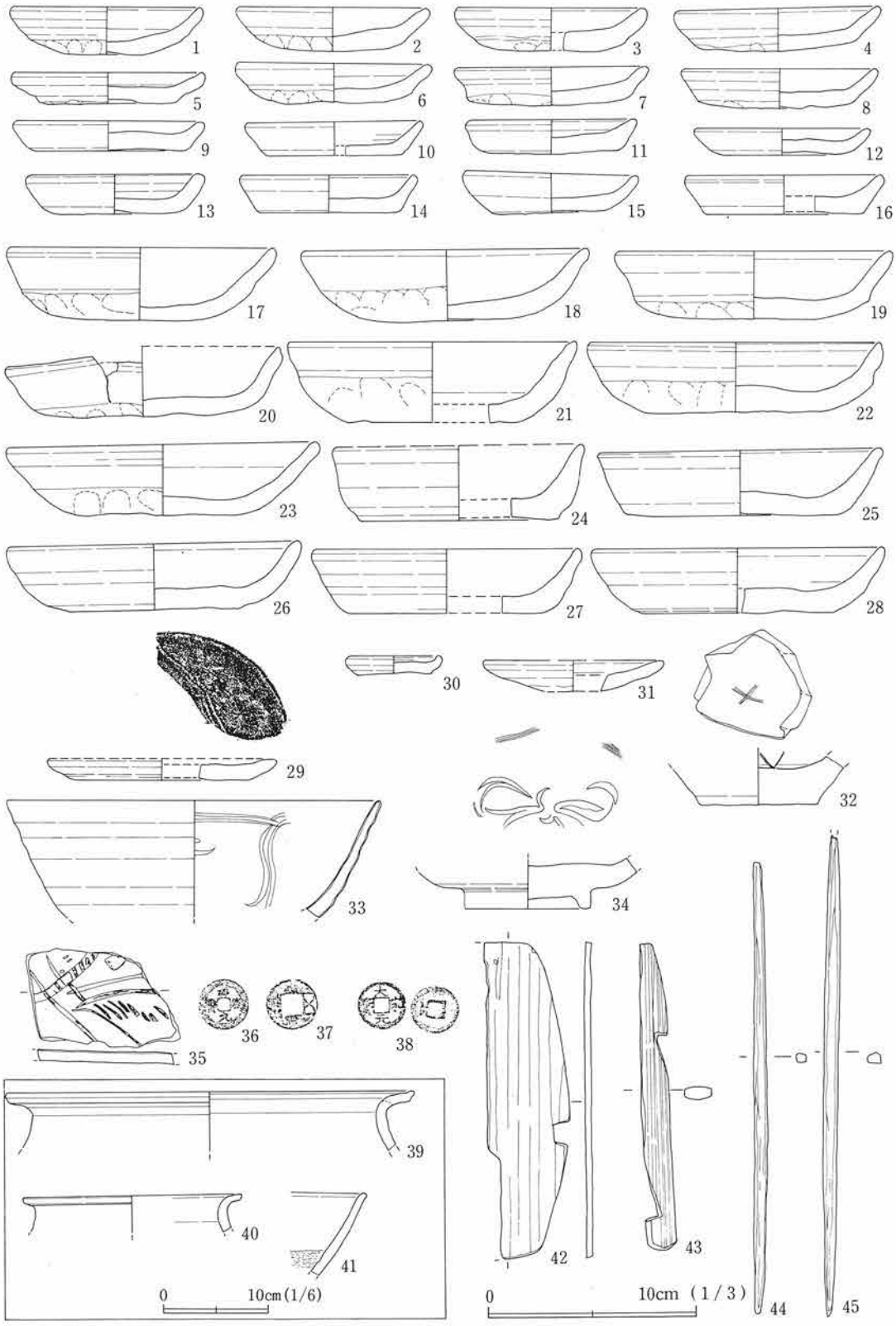


Fig. 31 溝Ⅰ出土遺物 (1)

No.	口径	底径	器高	内高	8	9.1	7.4	1.9	1.1	16	9.3	7.5	1.9	1.0	24	11.7	9.5	3.5	2.7
1	8.9	7.5	2.2	1.6	9	8.7	6.8	1.4	0.6	17	12.5	11.0	3.4	2.7	25	13.3	10.1	3.0	2.0
2	8.8	7.3	2.0	1.3	10	8.3	6.4	1.6	1.1	18	13.4	12.0	3.3	2.6	26	13.7	8.1	3.2	2.2
3	9.0	7.1	2.0	1.2	11	7.7	6.3	1.7	0.9	19	13.0	11.2	3.3	2.2	27	12.7	9.2	3.1	2.3
4	9.5	7.8	2.1	1.3	12	8.1	5.3	1.3	0.6	20	13.0	11.0	3.4	2.5	28	13.8	9.2	3.1	2.0
5	8.9	6.6	1.5	0.7	13	8.0	5.9	2.0	1.1	21	13.1	12.7	3.9	2.9	29	10.6	7.2	1.0	0.3
6	9.0	7.7	1.8	1.2	14	8.1	6.5	1.8	1.1	22	13.7	13.0	3.3	2.1	30	4.2	3.5	0.8	0.3
7	8.9	7.9	1.8	1.1	15	8.1	5.3	1.8	1.1	23	14.4	12.1	3.3	2.4					

単位（cm）

表11．溝Ⅰ出土かわらけ法量（Fig. 31）

42－板草履の芯部。半分を失なっている。長さ15.2cm。幅4.0cm。厚さ0.3cm。

43－用途不明木製品。２箇所に三角形の刻みをもつ。長さ14.8cm、幅1.3cm。厚さ0.6cm。

44－箸状木製品。長さ21.7cm。幅0.6cm。厚さ0.4cm。

45－箸状木製品。長さ23.1cm。幅0.6cm。厚さ0.5cm。

46－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着し、糸切痕が認められる。側面、端面はヘラ削りされる。器表は黒灰色、芯部は灰白色を呈する。厚さは1.2cm前後である。

47－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着する。凹面には布目と糸切痕が残る。凸面はかすかに糸切痕がみられる。側面、端面ともにヘラ削り、器表は灰黒色、芯部は灰色を呈す。厚さ1.6cm前後。

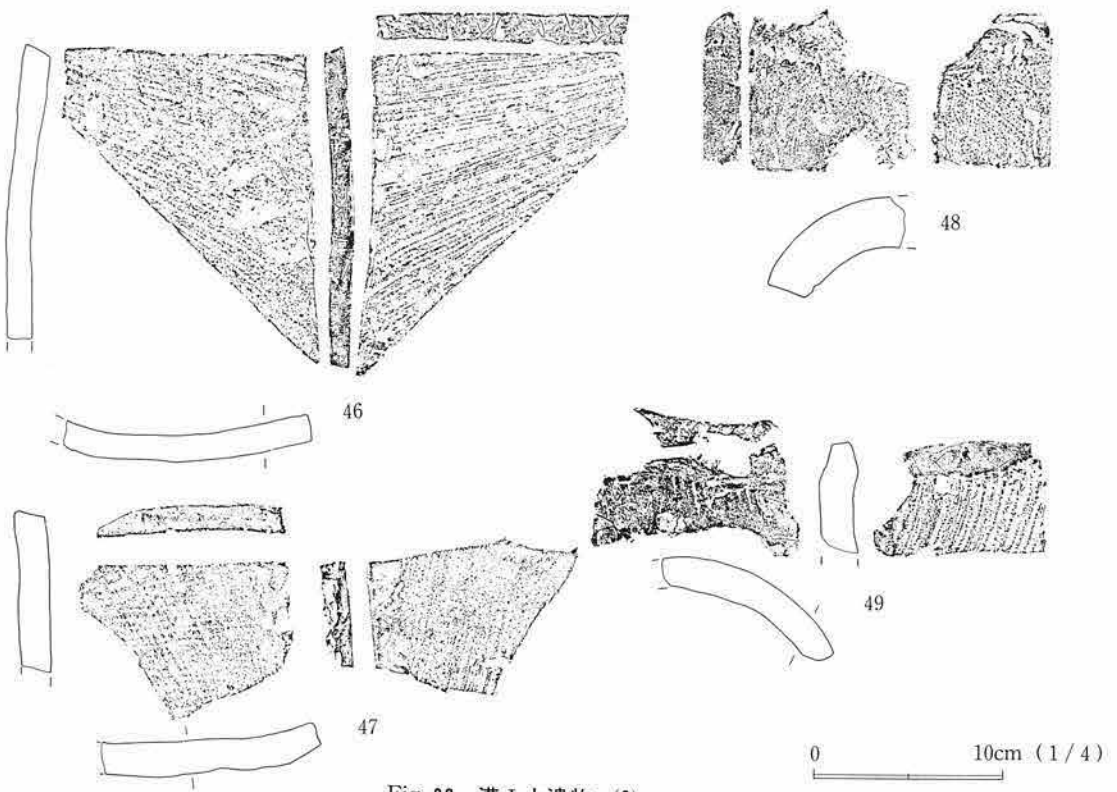


Fig. 32　溝Ⅰ土遺物（2）

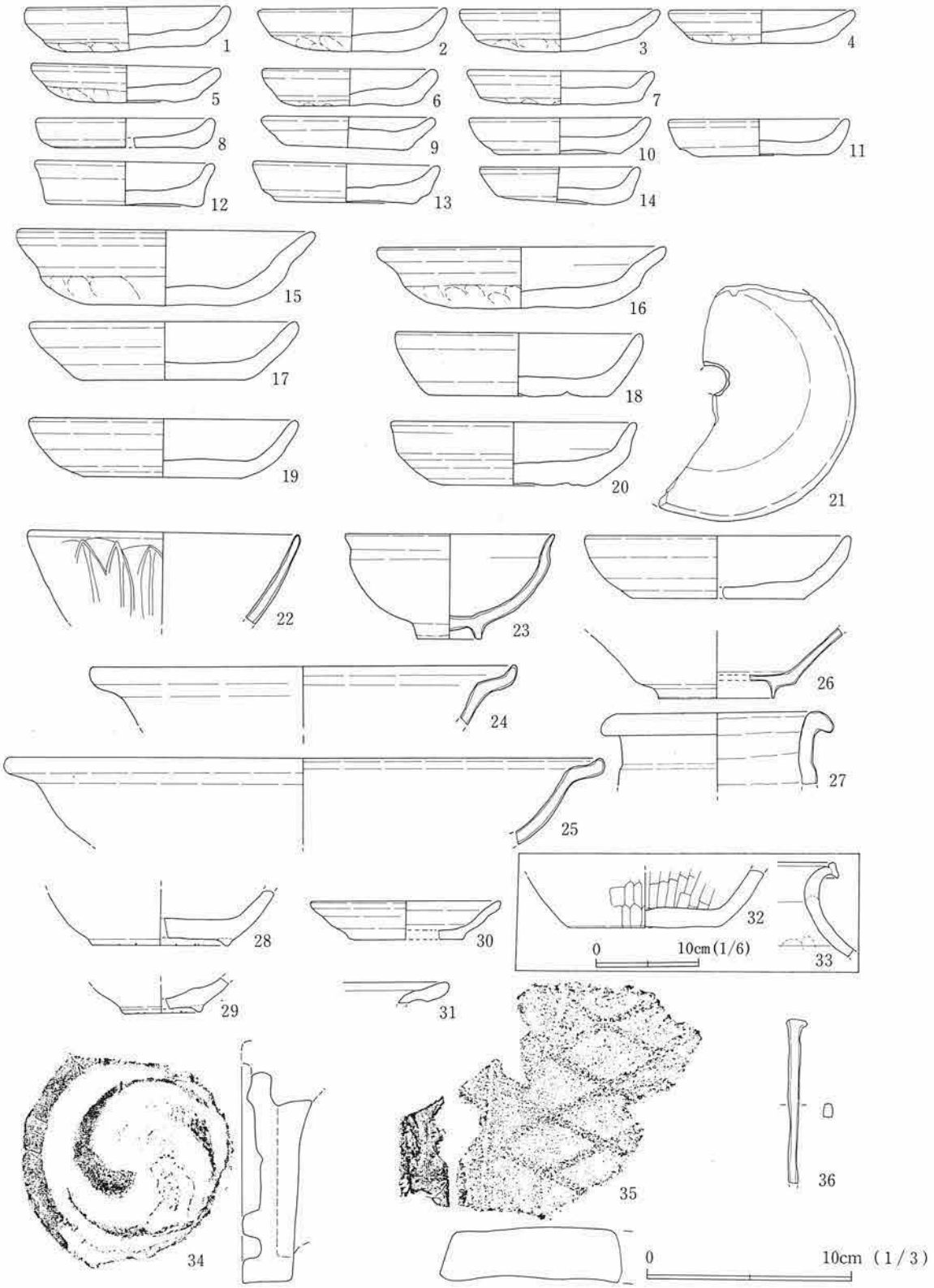


Fig.33 溝II土遺物

48－丸瓦。凹凸面ともに粗砂が付着する。凸面はナデ調整される。凹面には布目痕がみられる。側面はヘラ削りされる。器表、芯部ともに灰白色を呈する。厚さは2.6cm前後である。

49－丸瓦。凸凹面の粗砂付着は少ない。凸面はナデ、凹面には糸切痕を残す。側面、端面はヘラ削りされ、端面には粗砂が付着する。器表は灰色、芯部は灰黒色を呈す。厚さは1.7cm前後である。

③　溝II出土遺物（Fig.33）

溝IIからの出土遺物で図示可能なものはFig.33に示した1～36である

1～21はかわらけである。1～7は手づくね成形小皿。8～14はロクロ成形小皿。15、16は手づくね成形大皿。17～21はロクロ成形大皿である。手づくね成形は底部が丸く、器高の高いもの（2、3）と、平底状で器高の低いもの（1、4～7、15、16）とがある。ロクロ成形では小皿は底部が厚く、器高が低い。大皿も器高が低く、体部がやや内彎するものである。21は底部に穿孔をもつ。

22－青磁鎬蓮弁文碗。口径13.2cm。釉は青緑色透明。胎土は灰白色を呈する。

23－青磁天目茶碗。口径10.1cm。高台外径5.1cm、器高5.1cm。釉は青緑色。高台畳付部は露胎。胎土は灰色を呈する。貫入あり。

24－青磁無文折縁鉢。口径20.7cm。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。貫入あり。

25－青磁無文折縁鉢。口径28.8cm。釉は暗青緑色。胎土は灰白色を呈する。貫入あり。

26－青磁折腰鉢。高台外径5.6cm。底部は薄い。釉は深緑色。胎土は灰色を呈する。

27－白磁壺。口径11.3cm。口縁は折り返えされる。釉は灰白色失透。胎土は灰白色を呈す。

28－山茶碗。高台外径6.5cm。外底面は糸切り後、高台を貼り付ける。色調は灰白色で粗胎。

29－美濃系山茶碗。高台外径3.4cm。高台にはモミ痕がみられる。色調は灰白色を呈し胎土精良。

30－山皿。口径9.0cm。底径5.6cm、器高1.9cm。外底面には糸切痕あり。灰白色を呈し胎土精良。

31－伊勢系土鍋。口縁部は内側に折り返えされる。色調は淡灰橙色を呈し、夾雑物を多く含む。

32－滑石鍋。底径14.6cm。底部厚1.8cm前後、体部厚1.4cm前後。

33－常滑窯甕。口縁部はN字状に折り返えされる。器表は褐色、胎土は明褐色を呈し夾雑物多し。

34－軒丸瓦。右廻り巴文。瓦頭面の直径12.0cm前後。器表、芯部ともに淡灰橙色を呈する。表面裏面には粗砂が付着する。丸瓦との接合部分は深く、厚く粘土を貼りつけている。

35－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着する。凹面は縦位のナデ、凸面には格子目の叩きがみられる。側面はヘラ削り。器表、芯部ともに灰白色を呈する。厚さは2.4cm前後である。

36－鉄釘。残存長8.1cm。断面は0.4×0.6cmの長方形を呈する。頭部は平らたく曲げられる。

No.	口径	底径	器高	内高	6	8.2	7.0	1.8	1.1	12	8.5	7.1	2.1	1.4	18	11.8	8.8	3.1	2.2
1	9.7	7.7	2.1	1.3	7	8.7	7.9	1.6	0.8	13	8.9	6.7	1.9	1.2	19	12.7	7.8	2.9	2.0
2	8.9	7.9	2.1	1.3	8	8.3	6.5	1.3	0.9	14	7.5	5.5	1.7	1.0	20	11.7	7.2	3.1	2.0
3	9.5	7.8	2.1	1.4	9	8.2	5.8	1.5	0.5	15	14.2	12.0	3.7	2.8	21	12.7	8.4	3.0	2.3
4	8.0	7.2	1.6	1.1	10	8.5	6.0	1.8	0.9	16	13.8	11.5	2.9	2.1					
5	9.0	7.5	1.7	1.1	11	8.6	6.3	1.8	1.0	17	12.8	7.7	2.9	2.0					

単位(cm)

表12．溝II出土かわらけ法量（Fig.33）

④ 溝Ⅲ出土遺物（Fig.34～37）

溝Ⅲからの出土遺物で図示可能なものはFig.34～37に示めした１～161である。

１～74はかわらけである。１、２は手づくね成形の小皿。３～５は内折れタイプ。６～50はロクロ成形の小皿。51、52は手づくね成形の大皿。53～74はロクロ成形の大皿である。手づくね成形は大皿、小皿ともに平底状を呈し、器高の低いもの（１、２、51、52）である。ロクロ成形小皿は器高が低く、底部の厚いものが主流であり、器高がやや高く、深めのプロポーションをもつもの（44～50）もみられる。ロクロ成形大皿は口径、底径がともに大きく、器高の低いタイプが主流であり、65～74は器高の高いものである。73の器壁は薄い。内折れタイプは全て糸切り痕を残す。３の体部は直立するが、４、５は強く内折れる。６の小皿はロクロ成形の特小品である。

75－白かわらけ。口径8.7cm、底径8.1cm、器高1.9cm。内高1.5cm。手づくね成形。

76－白かわらけ。口径5.8cm。底径5.7cm。器高1.3cm。内高0.8cm。手づくね成形。

77－青磁劃花文碗。口径15.1cm。内面に横位の条線がみえる。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈す。

78－青磁鎬蓮弁文碗。口径14.7cm。口縁は外反する。釉は青緑色、胎土は灰白色を呈する。

79－青磁鎬蓮弁文碗。口径15.8cm。口縁は外反気味。釉は青緑色失透。胎土は灰白色を呈する。

80－青磁鎬蓮弁文碗。口径14.3cm。釉は灰青緑色。胎土は灰白色を呈する。

81－青磁鎬蓮弁文碗。口径15.5cm。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。

82－青磁鎬蓮弁文碗。口径15.6cm。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。貫入あり。

83－青磁鎬蓮弁文碗。口径14.9cm。釉は灰青色。胎土は灰色を呈する。

84－青磁鎬蓮弁文碗。口径13.1cm。蓮弁の幅は狭い。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。

85－青磁碗。高台径2.4cm。高台内は削られず外底面は露胎。釉は灰緑色。胎土は灰白色。

86－青磁碗。高台外径3.7cm。高台内は露胎。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。貫入あり。

87－青磁鎬蓮弁文碗。高台外径3.8cm。高台畳付部は露胎。青緑色釉。胎土は灰白色を呈す。

88－青磁鎬蓮弁文碗。高台外径5.2cm。高台内は露胎。釉は灰緑色。胎土は灰色を呈する。

89－青磁鎬蓮弁文碗。高台外径5.0cm。高台内は露胎。釉は灰青緑色。胎土は灰色を呈する。

90－青磁鎬蓮弁文碗。高台外径4.5cm。高台畳付部露胎。釉は灰緑色。胎土は灰色を呈する。

91－青磁鎬蓮弁文碗。高台外径5.3cm。高台内は露胎。釉は灰緑色。胎土は灰白色を呈する

92－青磁碗。口径11.3cm。口縁に輪花の刻みがある。釉は灰緑色。胎土は灰白色を呈する。

93－青磁碗。口径7.5cm。口縁は端反り状を呈する。釉は灰緑色。胎土は灰色を呈する。

94－青磁鎬蓮弁文折縁鉢。口径20.2cm。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。貫入あり。

95－青磁折縁鉢。口径19.8cm。器表は荒れている。釉は灰緑色。胎土は灰色を呈す。貫入あり。

96－青磁無文鉢。高台外径10.6cm。高台畳付部露胎。釉は灰緑色。胎土は灰白色。貫入あり。

97－青磁鉢。内面に陰刻された蓮弁文をもつ。口径13.0cm。青緑色釉。胎土は灰色を呈する。

98－青磁折腰鉢。高台外径4.7cm。高台畳付部露胎。釉は青緑色失透。胎土は橙灰色を呈する。

99－青磁碗。内面に陰刻された蓮弁文をもつ。高台外径5.4cm。高台畳付部は露胎。釉は青緑色。

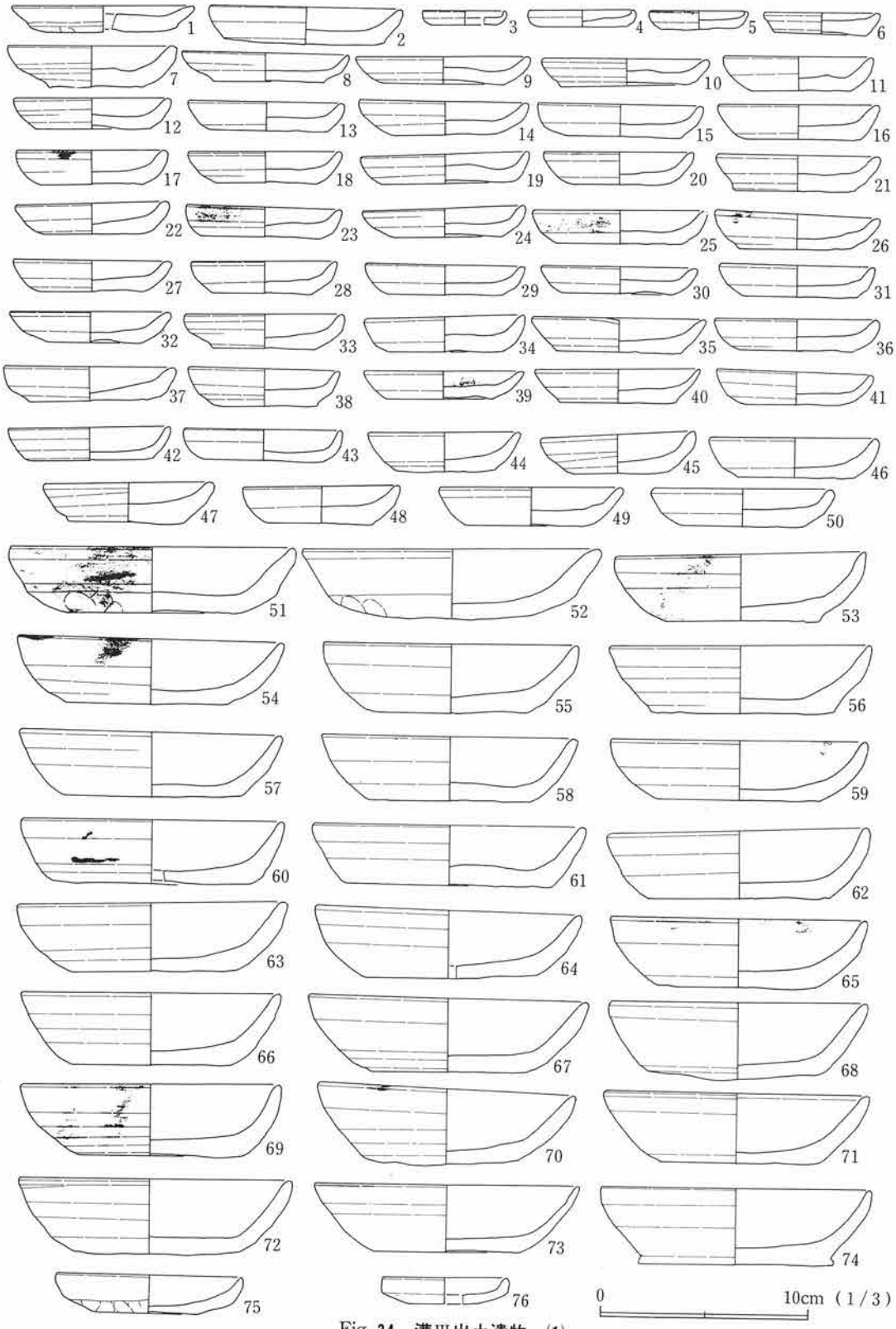


Fig. 34 溝III出土遺物 (1)

No.	口径	底径	器高	内高	19	7.8	6.5	1.4	0.6	38	7.1	5.0	1.8	1.0	57	12.4	8.5	3.2	2.5
1	8.5	7.1	1.3	0.4	20	7.0	5.0	1.6	1.0	39	7.5	5.1	1.4	0.8	58	11.9	7.8	3.4	2.2
2	9.0	7.7	1.8	1.1	21	7.7	5.6	1.8	0.9	40	7.9	5.6	1.6	1.0	59	12.0	7.8	2.8	2.3
3	3.8	3.1	0.7	0.4	22	7.1	4.6	1.5	1.0	41	7.4	4.6	1.6	1.0	60	12.3	9.7	3.1	2.4
4	4.9	4.3	0.8	0.5	23	7.3	5.8	1.4	0.9	42	7.6	5.9	1.6	1.2	61	12.7	9.9	2.9	2.0
5	4.4	3.7	0.9	0.4	24	7.6	5.2	1.4	0.7	43	7.4	5.6	1.5	1.0	62	12.2	8.7	3.3	2.5
6	5.4	4.4	1.0	0.3	25	8.2	6.0	1.6	0.9	44	7.1	4.8	1.9	1.3	63	12.7	7.9	3.3	2.7
7	7.8	4.5	2.0	1.1	26	7.8	5.4	1.7	1.1	45	7.4	4.9	1.8	1.3	64	12.5	8.2	3.3	2.6
8	7.9	5.4	1.4	0.9	27	7.4	5.0	1.5	1.0	46	7.9	5.6	1.9	1.4	65	12.2	7.6	3.3	2.5
9	8.2	5.8	1.3	0.5	28	6.9	4.8	1.5	1.0	47	8.0	5.6	1.9	1.1	66	12.2	7.8	3.6	2.9
10	7.8	6.2	1.3	0.6	29	7.5	5.5	1.5	0.9	48	7.3	5.2	1.8	1.0	67	13.2	7.5	3.6	2.8
11	7.0	4.7	1.6	1.0	30	7.3	5.3	1.3	0.6	49	8.5	6.1	1.8	1.1	68	12.1	8.0	3.7	3.0
12	7.3	5.5	1.5	0.8	31	7.3	5.4	1.5	0.9	50	8.5	6.0	1.8	0.9	69	12.3	7.8	3.4	2.6
13	7.3	5.6	1.4	0.7	32	7.5	4.6	1.5	1.0	51	13.5	12.0	3.2	2.2	70	12.2	7.2	3.7	3.0
14	7.9	4.9	1.6	1.0	33	7.5	5.0	1.7	1.1	52	14.0	11.9	3.4	2.6	71	12.4	7.4	3.4	2.8
15	7.7	5.5	1.5	0.9	34	7.5	5.4	1.7	0.9	53	11.8	7.4	3.2	2.5	72	12.9	7.8	3.6	2.7
16	7.5	5.4	1.7	1.0	35	8.2	6.0	1.6	1.1	54	12.2	7.8	3.2	2.4	73	12.6	7.0	3.3	2.7
17	7.0	5.0	1.7	1.0	36	7.6	5.5	1.5	0.8	55	11.9	7.3	3.3	2.5	74	12.9	9.4	3.7	2.9
18	7.3	4.8	1.5	0.8	37	8.0	5.6	1.7	1.3	56	12.4	8.2	3.2	2.5					

単位(cm)

表13. 溝III出土かわらけ法量 (Fig. 34)

胎土は灰色を呈する。

100 - 青磁片。頸部と肩部に透し彫りを施したようであり、肩部には唐草文が陽刻されている。小片の為、用途不明であるが夜学蓋置の可能性がある。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。

101 - 白磁口兀皿。口径12.8cm。底径7.5cm、器高3.5cm。淡灰緑色釉。胎土は灰白色を呈す。

102 - 白磁口兀皿。口径11.5cm。底径7.5cm。器高3.1cm。淡青白色釉。胎土は灰白色を呈す。

103 - 白磁口兀皿。口径13.6cm。釉は淡青白色釉。胎土は灰白色を呈する。

104 - 白磁口兀皿。口径10.9cm。釉は淡灰白色。胎土は灰白色を呈する。

105 - 白磁口兀皿。口径11.2cm。底径5.8cm。器高2.7cm。淡青灰色釉。胎土は灰白色を呈す。

106 - 白磁口兀皿。口径11.9cm。釉は淡灰色。胎土は灰白色を呈する。貫入あり。

107 - 白磁口兀皿。口径10.7cm。釉は淡橙灰色。胎土は橙灰色を呈する。貫入あり。

108 - 白磁口兀皿。口径11.8cm。釉は淡灰色。胎土は灰白色を呈する。

109 - 白磁口兀皿。口径12.2cm。釉は淡青灰色。胎土は灰白色を呈する。

110 - 白磁口兀皿。口径9.8cm。釉は淡灰色。胎土は灰白色を呈する。

111 - 白磁口兀皿。口径9.8cm。底径6.0cm。器高2.5cm。灰白色釉。胎土は灰白色を呈す。

112 - 白磁口兀皿。口径9.8cm。底径6.1cm。器高2.7cm。灰白色釉。胎土は灰白色を呈する。

113 - 白磁口兀皿。口径8.8cm。釉は灰白色。胎土は灰色を呈する。

114 - 白磁口兀皿。口径7.9cm。底径4.8cm。器高1.6cm。灰白色釉。胎土は灰白色。貫入あり。

115 - 白磁口兀皿。口径12.3cm。器壁が薄く内面に押印による文様をもつ。釉は灰白色。胎土は灰白色を呈する。

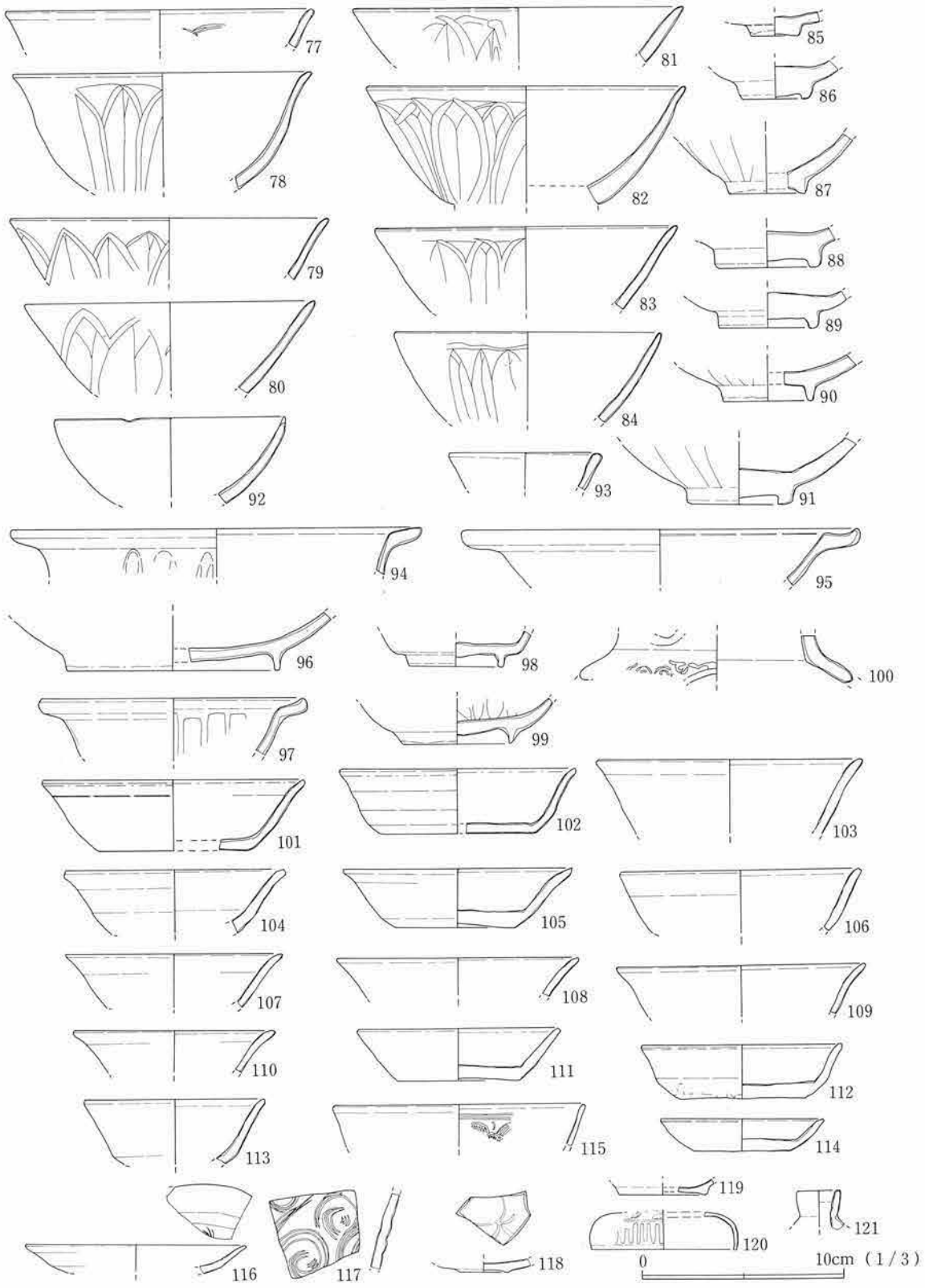


Fig.35 溝Ⅲ出土遺物 (2)

116－青白磁皿。口径10.8cm。内底面にヘラによる文様をもつ。淡青白色釉。胎土は灰白色。

117－青白磁梅瓶。表面に渦文が描かれる。釉は水青色。胎土は灰白色を呈する。

118－青白磁皿。高台外径2.4cm。内底面に文様が押印される。釉は青水色を呈し、内面のみ確認された。胎土は灰白色を呈する。

119－青白磁壺。底部小片。高台外径4.3cm。内面のみに青水色釉。胎土は灰白色を呈する。

120－青白磁合子蓋。口径7.2cm。器高2.0cm。頂部に牡丹文、側面に細い蓮弁文を施す。釉は水青色。胎土は灰白色を呈する。

121－青白磁壺。口径2.2cm。梅瓶の口縁部と思われる。釉は青水色。胎土は灰白色を呈する。

122－常滑窯甕。口径45.6cm。口縁はN字状を呈する。器表は暗褐色を呈し降灰がみられる。胎土は灰白色を呈し粘性が強い。

123－常滑窯壺。口径9.8cm。口縁は折り返えされる。器表は暗褐色を呈し降灰がみられる。胎土は灰黒色を呈し、断面はザックリとしている。

124－常滑窯鳶口壺。底径9.6cm。器表は褐色を呈する。胎土は灰白色を呈し、粘性は弱い。

125－山茶碗窯系片口鉢。口径14.2cm。底径11.4cm、器高7.2cm。体部はナデにより調整される。外底面は砂底。胎土は灰白色を呈し、断面ザクリとしている。注口は指頭によりつまみ出す。

126－常滑窯こね鉢。口径28.0cm。底径16.0cm。器高10.2cm。口縁下外面のナデは弱い。体部外面中～下位は板ナデされる。器表は暗褐色、胎土は橙色を呈する。

127－山茶碗窯系こね鉢。口径24.0cm、底径13.0cm。器高7.0cm。おそらく高台が付くものである。内面下位の磨滅は激しい。色調は灰白色を呈する。

128－山茶碗窯系こね鉢。口径22.8cm。高台外径8.6cm。器高8.6cm。内面の磨滅は激しい。色調は灰白色を呈する。

129－滑石鍋。口径34.0cm。鍔部上面と下面の幅はほぼ同じである。外面には細かい削痕をもつが、内面はきれいに仕上げられる。口縁直下内面にはノミ状工具の削痕がみられる。

130－滑石鍋。口径32.0cm。鍔部上面幅よりも下面幅のほうが長い。鍔部以下の器壁は口縁部に比べ半分の厚さである。体部外面には細かい削痕をもつが内面は丁寧に仕上げられている。

131－滑石鍋。口径30.2cm。鍔部上面幅よりも下面幅のほうが長い。器壁の厚さは一定している。体部外面には細かい削痕をもつが内面は丁寧に仕上げられる。外面にはススが付着している。

132－滑石鍋。底径22.0cm。体部外面には細かい削痕がみられる。内面は丁寧に仕上げられる。

133－手焙り。底径約29.0cm。器表は淡灰橙色。胎芯は灰白色を呈する軟質のものである。脚が付くものであるが欠損している。体部下位～底面には多くの小穿孔が認められ、貫通するものとしないものがある。脚部の穿孔は直径0.9cm程である。

134～137は手焙り口縁部片である。いずれも器表は灰黒色、芯部は灰白色を呈し、外面中位も木口状工具による縦位の掻きナデがみられる。134、135は口縁端部に丸味をもち、136、137はやや平らであり内側に小さく引き出されるものである。

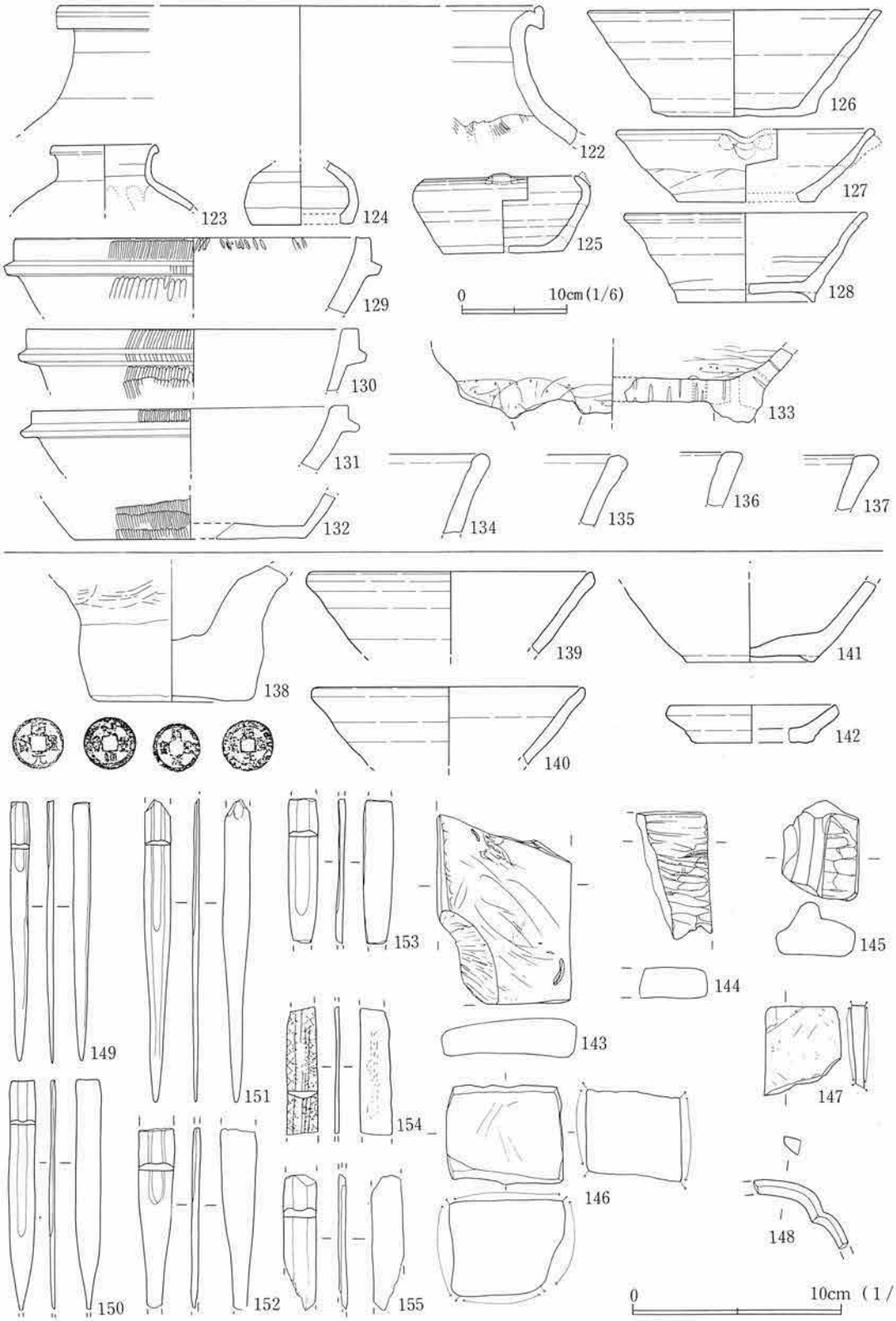


Fig. 36 溝III出土遺物 (3)

138－かわらけ質用途不明土製品。底径7.5cm。外底面には糸切り痕を残す。底部厚は2.6cmと厚い。体部は開きながら立ちあがっており、上部ほど薄くなる。全体にナデにより調整されるが、体部外面中位のナデは強い。

139－山茶碗。口径13.6cm。色調は灰白色を呈す。胎土は夾雑物を多く含む粗らいものである。

140－山茶碗。口径13.0cm。色調は灰色を呈する。胎土は粘性があり精良。

141－山茶碗。高台外径6.1cm。糸切りされた外底面に高台を貼り付ける。畳付部にはモミ痕がみられる。内面は磨滅している。色調は灰色を呈し、断面はザックリとしている。

142－山皿。口径7.7cm。底径5.9cm。器高1.8cm。外底面には糸切り痕を残す。胎土は灰白色を呈し粗雑である。

143、144－温石。滑石鍋を転用している。

145－滑石製スタンプ。スタンプ面の彫りが浅く、文様は不明である。未製品の可能性がある。

145－砥石。荒砥。表面にV字状の削痕がある。

147－砥石。仕上砥。泥岩製であり、厚さ0.5cm程である。

148－四葉硯。側面の剝離したものである。

149－笄。長さ12.5cm。幅0.8cm。厚さ0.3cm。

150－笄。長さ11.0cm。幅1.1cm。厚さ0.3cm。

151－笄。片端を欠損している。残存長14.5cm、幅1.2cm。厚さ0.2cm。

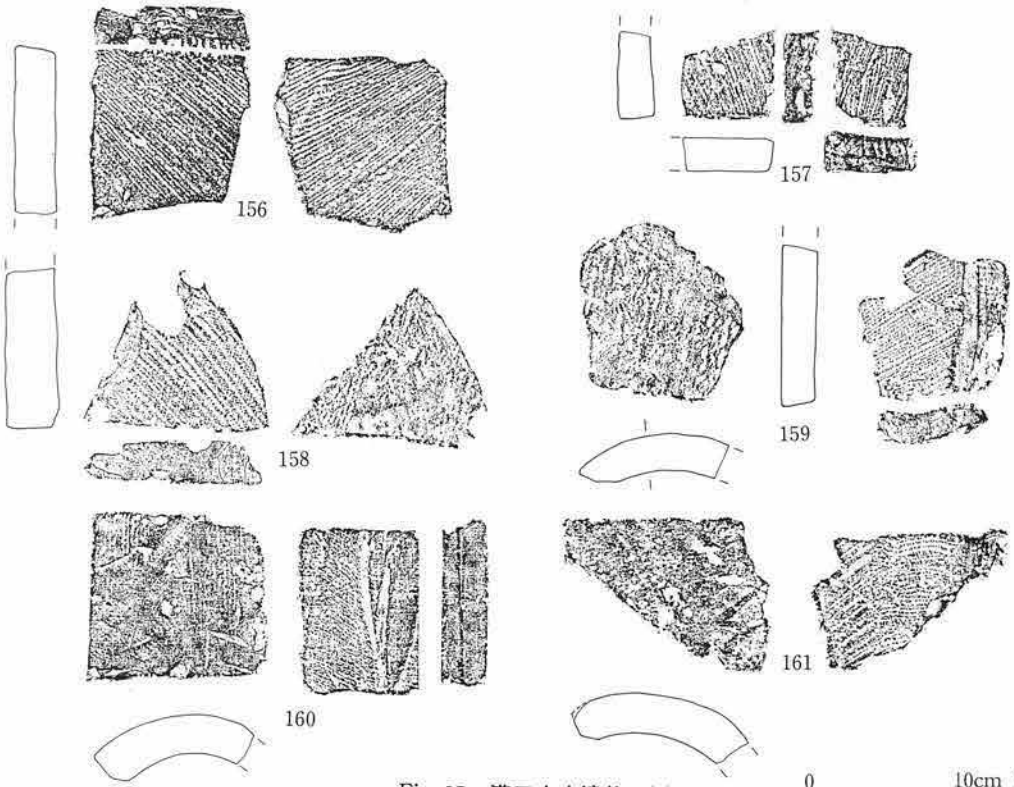


Fig.37 溝Ⅲ出土遺物 (4)

152－笄。両端を欠損している。残存長8.6cm、幅1.6cm。厚さ0.4cm。

153－笄。片端を欠損している。残存長6.8cm、幅1.4cm。厚さ0.3cm。

154－骨製品。長さ6.0cm。幅1.5cm。厚さ0.2cm。断面はカマボコ状を呈する。曲面には鋭利な刃物による文様が彫られている。

155－笄。両端を欠損している。残存長6.6cm、幅1.5cm。厚さ0.4cm。

156－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着し、糸切り痕が明瞭に残る。端面にヘラ削りを施す。器表、芯部ともに灰黒色を呈する。厚さ2.1cm前後。

157－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着し、糸切り痕を残す。側面、端面はヘラ削りを施す。器表は淡灰橙色、芯部は黒灰色を呈し焼成良好である。厚さ1.7cm前後。

158－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着する。凹面には布目痕と糸切痕を、凸面には縄叩きの痕が残る。端面はヘラ削りを施す。器表、芯部ともに灰白色を呈する。厚さ2.6cm前後である。

159－丸瓦。凹凸面ともに粗砂が付着する。凹面には布目痕と糸切り痕を、凸面には　縄叩きの痕が残る。側面、端面はヘラ削りを施す。器表、芯部ともに灰白色を呈する。厚さ2.0cm前後。

160－丸瓦。粗砂の付着は不明瞭である。凸面には縄目の叩、凹面には布目痕を残す。側面はヘラ削りを施す。器表は灰黒色、芯部は灰白色を呈し焼成良好。厚さ2.0cm前後である。

161－丸瓦。凸凹面ともに粗砂が付着する。凹面には布目痕と糸切り痕を残し、凸面には斜格子目の叩きを施す。側面はヘラ削りを施す。器表、芯部ともに淡橙灰色を呈す。厚さ2.1cm前後。

⑤　溝Ⅳ出土遺物（Fig.38、39）

溝Ⅳからの出土遺物で図示可能なものはFig.38、39に示した1～42である。

1～19はかわらけである。1～4は手づくね成形の小皿。5～12はロクロ成形の小皿。12はロクロ成形の特小品。13～15は手づくね成形の大皿、16～18はロクロ成形の大皿である。手づくね成形では丸底状でボッテリとしたもの（3、4、13、14）と、平底状で器高のやや低いもの（1、2、15）とがある。ロクロ成形では底部の厚いもの（5～8、10）と器高の低いもの（11、12、16～18）と、器壁が薄く、器高の高いもの（9）とが見られる。

20－泥岩製円盤。直径6.2cm前後。厚さ1.8cm前後。表面、側面ともに丁寧に削られている。

21－青磁鎬蓮弁文碗。口径13.5cm。釉は灰緑色。胎土は灰白色を呈する。

22－青磁鎬蓮弁文碗。口径10.4cm。口縁端部は外反する。釉は深緑色。胎土は灰色を呈する。

23－青磁鎬蓮弁文碗。高台外径5.0cm。高台内は露胎。釉は深緑色。胎土は灰色を呈する。

24－青磁碗。高台外径4.2cm。高台畳付部は露胎。釉は灰青色。胎土は灰白色を呈する。

25－青磁皿。口径10.8cm。口縁端部に輪花様の刻をもつ。釉は灰青色。胎土は灰白色を呈する。

26－青磁鎬蓮弁文鉢。口径14.9cm。口縁部は折縁である。釉は灰青色。胎土は灰白色を呈する。

27－青磁鎬蓮弁文鉢。高台外径10.7cm。高台畳付部は露胎。灰緑色釉。胎土は灰白色を呈する。

28－白磁口兀碗。口径12.0cm。器高が高く碗状である。釉は淡青白色。胎土は灰白色を呈する。

29－白磁口兀皿。口径11.2cm。釉は灰白色。胎土は灰白色を呈する。

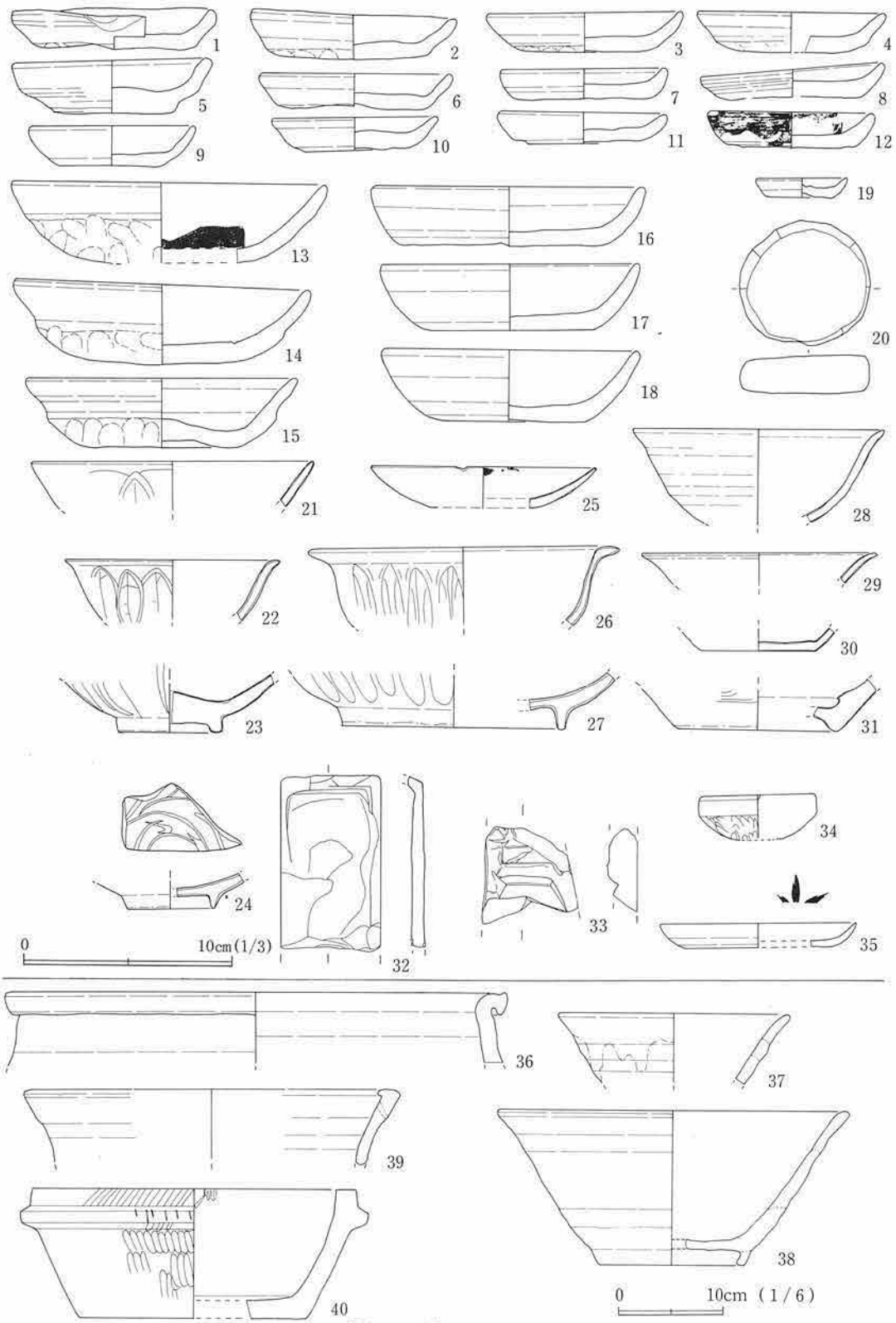


Fig.38 溝Ⅳ出土遺物 (1)

No.	口径	底径	器高	内高	5	9.1	5.7	2.5	1.3	10	7.8	4.8	1.5	0.7	15	12.7	10.9	2.9	1.8
1	9.3	7.8	1.8	1.1	6	8.8	6.4	1.5	1.0	11	7.3	5.2	1.5	0.8	16	12.6	9.6	2.8	2.1
2	9.5	7.7	2.1	1.4	7	7.2	6.0	1.5	0.7	12	7.6	5.9	1.7	1.1	17	12.2	8.0	3.1	2.5
3	9.1	6.9	1.8	1.2	8	8.6	6.2	1.7	0.8	13	14.9	13.2	3.8	3.0	18	12.0	7.1	3.3	2.6
4	8.7	7.3	1.9	1.1	9	7.7	4.7	1.8	1.3	14	13.9	11.8	4.8	2.8	19	4.3	3.2	0.9	0.4

単位(cm)

表14. 溝Ⅳ出土かわらけ法量 (Fig. 38)

30－白磁口兀皿。底径5.5cm。釉は淡灰白色。胎土は灰白色を呈する。

31－青白磁水注。底部小片からの復元である。外面には横位の条線と渦巻文（？）の一部が残る。高台部は露胎。釉は水青色。胎土は灰白色を呈する。梅瓶の可能性がある。

32－硯。剥離が激しいが、断面は台形を呈している。残存長8.1cm。残存幅4.8cm。

33－硯。小片の為、全体形は不明であるが、平面台形を呈するものであろう。海部最深厚0.9cm。最大厚1.4cm。海部の上方には線刻による文様が認められる。

34－独楽。木製。径5.7cm。上面に軸棒を差した痕跡が残る。底部は欠損しているために軸棒を差したものか、丸底なのかは不明。下半部には細かい削痕が残る。

35－漆皿。口径9.4cm、底径7.0cm。器高1.2cm。内面には赤漆による文様が描かれている。

36－常滑窯甕。口径47.6cm。口縁部は ┤ 形になる。器表は褐色、胎土は黒灰色を呈する。

37－山茶碗窯系こね鉢。口径21.8cm。口縁～外面中位には自然釉を生じる。胎土は灰白色。

38－山茶碗窯系こね鉢。口径33.0cm。高台外径13.6cm。器高15.0cm。体部下位はヘラ削りされる。胎土は白灰色を呈し夾雑物多く含む。

39－手焙り。口径36.0cm。内面～口縁にかけては横ナデ、体部中位は指頭痕がみられる。口端部は内外に突出する。貫通する小穿孔をもつ。器表は黒灰色、胎土は灰白色を呈する。

40－滑石鍋。口径31.0cm、底径21.6cm。器高12.4cm。鍔部上面部よりも下面部が長い。外面の工具痕は多くの方向性をもち一貫しない。鍔部、口縁端部内面には鋭利な刃物による削痕がある。

41－丸瓦。凸面はナデ、側面、側縁はヘラ削りが施される。凹面には布目痕、糸切痕が見られる。器表は灰黒色。芯部は灰白色を呈する、厚さは2.5cm前後である。

42－丸瓦。凸面には縄目の叩きが施され、粗砂が付着する。側面はヘラ削り、玉縁部凸面は横ナデ。凹面には布目が残る。器表は灰色、芯部は淡橙灰色を呈する。厚さは2.0cm前後。玉縁部の厚

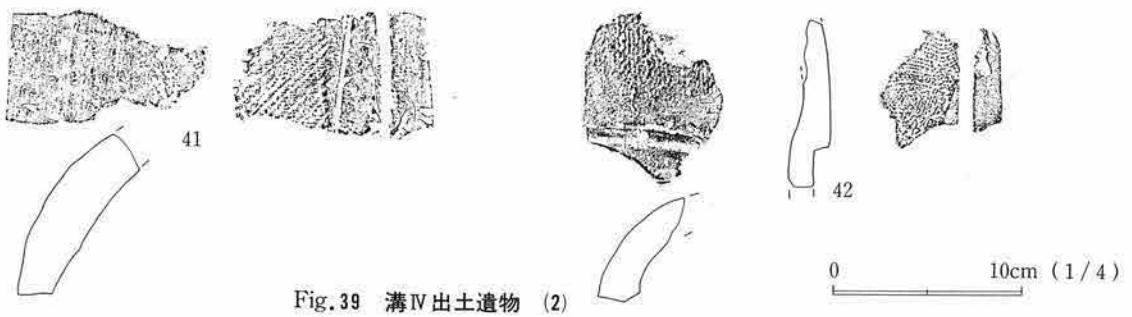


Fig.39 溝Ⅳ出土遺物 (2)

さは1.2cm前後である。

⑥ 溝Ⅴ出土遺物（Fig.40～42）

溝Ⅴからの出土遺物で図示可能なものはFig.40～41に示めした1～96である。

1～58はかわらけである。1～16は手づくね成形の小皿。17～38はロクロ成形の小皿。39は手づくね成形の異形品。40は糸切り底の内折れタイプ。41～49は手づくね成形の大皿。50～58はロクロ成形の大皿である。手づくね成形では丸底状で器高の高いもの（1～3、11～16、41～43）と、平底状で器高の低いもの（4～10、44～49）とが見られる。39は口径6.7cm、器高3.0cmを測り特異なものである。ロクロ成形では底部が厚いもの（17～19）と、器高が低く、口径、底径の大きいもの（20～24、50、51、53）と、器高が低く、小振りなもの（25～32）と、器高がやや高く、体部が内彎するもの（33～38、52、54～58）とがある。40は口縁端部が大きく内折れるタイプである。16の手づくね成形小皿の内底面には刃物の先でつけられた楔形の削痕がみられる。50のロクロ成形大皿の内面には煤の付着が観察される。

59－白かわらけ。手づくね成形。口径8.0cm。底径6.0cm。器高1.6cm。

60－白かわらけ。手づくね成形。口径7.0cm。底径6.0cm。器高1.1cm。

61－白かわらけ。手づくね成形。口径6.2cm。底径5.1cm。器高1.0cm。

62－青磁皿。口径10.2cm。内面下位に沈線状の凹みをもつ。灰緑色透明釉。胎土は灰色を呈す。

63－青磁皿。底径4.0cm。内面に櫛描き文様をもつ。体部外面中位から外底面は露胎となる。釉は灰緑色。胎土は灰白色を呈する。

64－青磁頸～肩部片。頸部外面には3条の凹み、肩部には1条の凸線が認められる。おそらく瓶と考えられる。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。

65－白磁壺。肩～胴部片。肩部内面、胴部内面下位の陵は強い。灰色釉。胎土は灰白色。

66－白磁口兀碗。口径6.4cm。体部下位は露胎。口縁端部上面、内面にはタールが付着している。釉は灰白色失透。胎土は白色を呈する。

67－青白磁合子身。口径5.3cm。底径5.2cm。器高1.5cm。体部外面には細い蓮花文を2段に配す。受け部、内面、外底面は露胎である。釉は淡青白色。胎土は白色を呈する。貫入あり。

68－白磁口兀皿。口径9.0cm。釉は灰白色。胎土は白色を呈する。

69－青白磁皿。輪花状の口縁をもつ。内面には花文を施す。釉は灰白色透明。胎土は灰白色を呈す。

70－常滑窯壺。頸部は開きながら立ちあがり口縁部は外方に折り曲げられ、端部は縁帯状を呈す。器表は黒褐色、胎土は灰色を呈し、断面はザックリとしている。

71－常滑窯甕。口縁端部はN字状を呈す。器表は暗褐色、胎土は灰白色を呈す。降灰が見られる。

72－常滑窯甕。口縁端部は上方に伸びる。器表は暗褐色、胎土は灰橙色を呈す。

73－常滑窯甕。底径18.0cm。体部下位には板ナデが施される。器表は灰橙色。胎土は灰白色。

74－山茶碗窯系こね鉢。口縁部は肥厚し、端部に沈線をもつ。色調は灰白色を呈する。

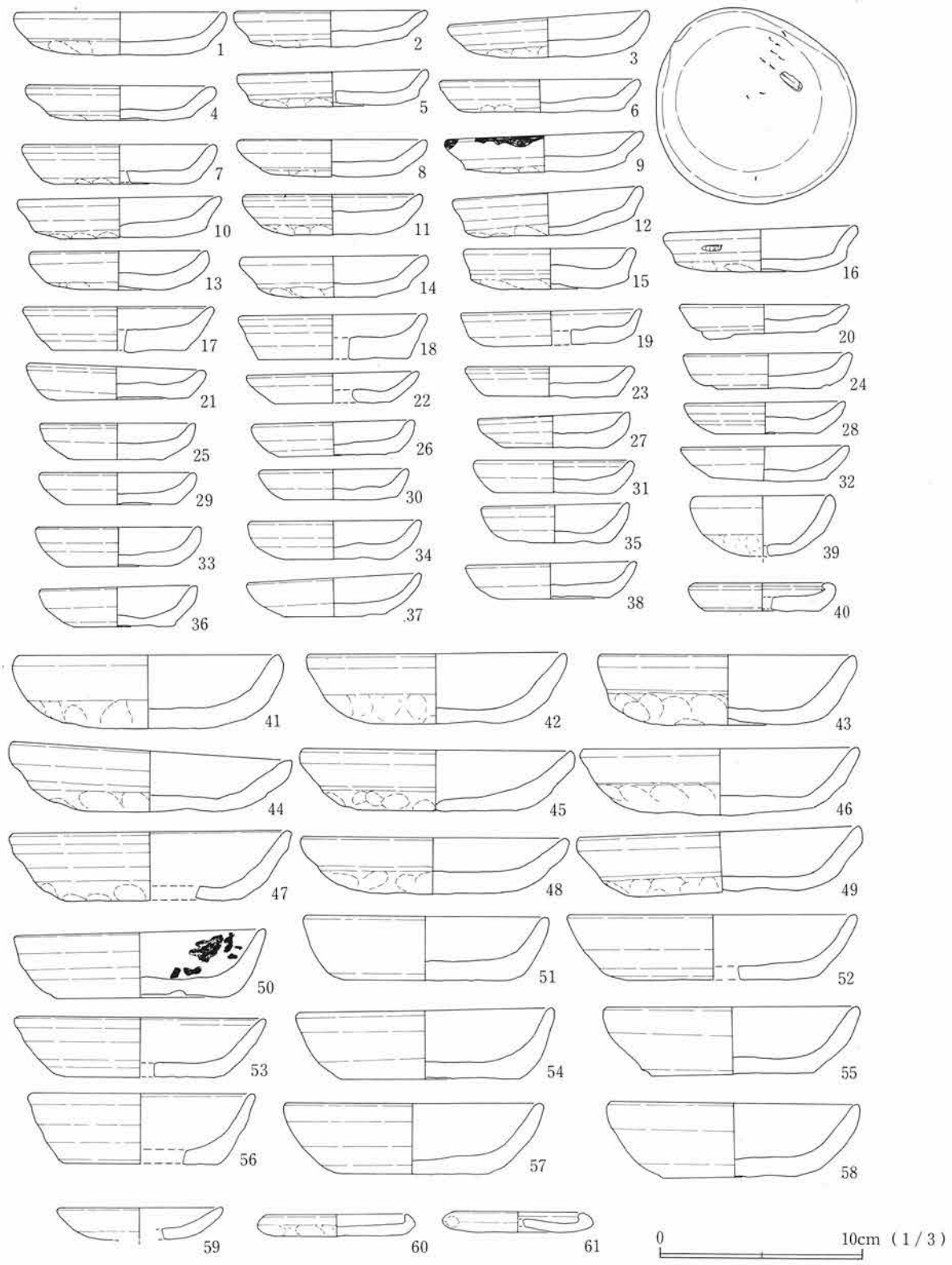


Fig.40 溝V出土遺物 (1)

No.	口径	底径	器高	内高	15	8.2	7.9	2.0	0.8	30	7.2	5.6	1.5	0.9	45	13.2	11.3	3.0	2.7
1	10.2	9.1	2.1	1.5	16	9.3	8.5	2.1	1.5	31	7.6	5.9	1.6	0.9	46	13.5	12.2	3.3	2.3
2	9.4	8.2	1.8	1.0	17	9.3	6.5	2.2	1.1	32	8.2	5.7	1.7	1.1	47	13.6	11.3	3.4	2.7
3	9.8	8.3	2.0	1.1	18	9.1	7.4	2.2	1.1	33	7.9	5.3	2.0	1.3	48	13.0	11.4	2.8	1.7
4	9.1	7.7	1.7	1.2	19	8.7	7.3	1.7	1.0	34	8.3	5.5	1.9	1.3	49	13.8	11.7	2.9	2.2
5	9.3	8.5	1.8	0.9	20	8.2	5.5	1.5	0.7	35	7.1	5.1	1.9	1.3	50	12.3	8.3	3.2	2.2
6	9.6	8.9	1.6	1.1	21	8.6	6.8	1.6	0.8	36	7.7	4.9	2.0	1.4	51	11.8	8.2	3.1	2.2
7	9.3	8.1	2.0	1.3	22	8.4	5.7	1.4	0.8	37	8.5	5.1	1.9	1.3	52	14.1	9.6	3.2	2.5
8	9.1	6.9	1.9	1.1	23	8.1	6.5	1.5	0.8	38	8.3	5.4	1.7	1.0	53	12.0	7.2	3.0	2.3
9	9.6	7.9	1.8	1.0	24	8.0	5.1	1.8	1.1	39	6.7	2.7	3.0	2.4	54	12.5	8.9	3.4	2.5
10	9.9	8.9	2.0	1.4	25	7.5	4.7	1.8	0.9	40	6.7	5.7	1.4	0.7	55	12.3	7.9	3.3	2.5
11	8.6	7.5	2.0	0.8	26	7.8	5.3	1.7	1.1	41	12.8	11.9	3.6	2.6	56	10.8	7.6	3.5	2.7
12	9.2	8.4	2.1	1.7	27	7.4	5.1	1.6	0.8	42	12.7	11.2	3.4	2.7	57	12.5	7.4	3.6	2.8
13	8.6	7.1	1.9	1.1	28	7.8	5.1	1.5	0.7	43	12.4	11.5	3.5	2.6	58	12.2	6.6	3.7	2.8
14	9.0	7.6	2.0	1.3	29	7.5	5.5	1.6	1.0	44	13.3	11.4	3.0	2.2					

単位（cm）

表15. 溝V出土かわらけ法量（Fig.40）

75－山茶碗窯系こね鉢。高台外径15.6cm。内面の磨滅は激しい。色調は灰白色を呈する。

76－瓦質黒縁皿。口径13.3cm。胎土は灰白色を呈する。

77－漆器椀。体部内、外面に赤漆で花文を手描きしている。

78－棒状木製品。残存長16.4cm。断面は1.3×1.3cmの隅丸方形状を呈する。

79－ヘラ状木製品。残存長20.1cm。断面は1.4×0.6cmの楕円状を呈する。

80－箸状木製品。残存長18.2cm。断面は1.0×0.6cmの楕円状を呈する。

81－箸状木製品。全長18.9cm。断面は0.7×0.5cmの隅丸長方形状を呈する。

82－箸状木製品。全長20.8cm。断面は0.5×0.5cmの不正円状を呈する。

83～85は銅銭である。いずれも北宋銭。83－皇宋元宝。篆書体。84、85－元祐通宝。篆書体。

86－軒丸瓦。三ッ巴文の周りに宝珠を巡らし、その外周に界線を巡らせている。器表は灰黒色、芯部は灰白色を呈する。瓦当面の直径は14cm前後と考えられる。

87－丸瓦。凸面には縄叩き痕、凹面には布目痕がみられる。側面はヘラ削りを施す。器表は灰黒色、芯部は灰白色を呈する。厚さは1.9cm前後である。

88－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着している。凹面には布目痕、凸面には縄目の叩きがみられる。側面、端面はヘラ削りが施される。色調は灰黒色を呈する。厚さは2.5cm前後である。

89－平瓦。88とほぼ同質であるが、凹面側部はヘラ削りが施される。厚さは3.0cm前後である。

90－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着している。凹面には布目痕、凸面には縄目の叩きが施される。端面はヘラ削りされる。器表は淡灰橙色、芯部は淡橙色を呈する。厚さは3.0cm前後である。

91－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着する。凹面には布目痕、凸面には縄目の叩き、端面にはヘラ削りが施される。色調は灰白色を呈し、厚さは1.8cm前後である。

92－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着する。凹面には布目痕、凸面には縄目の叩き、側面、端面は

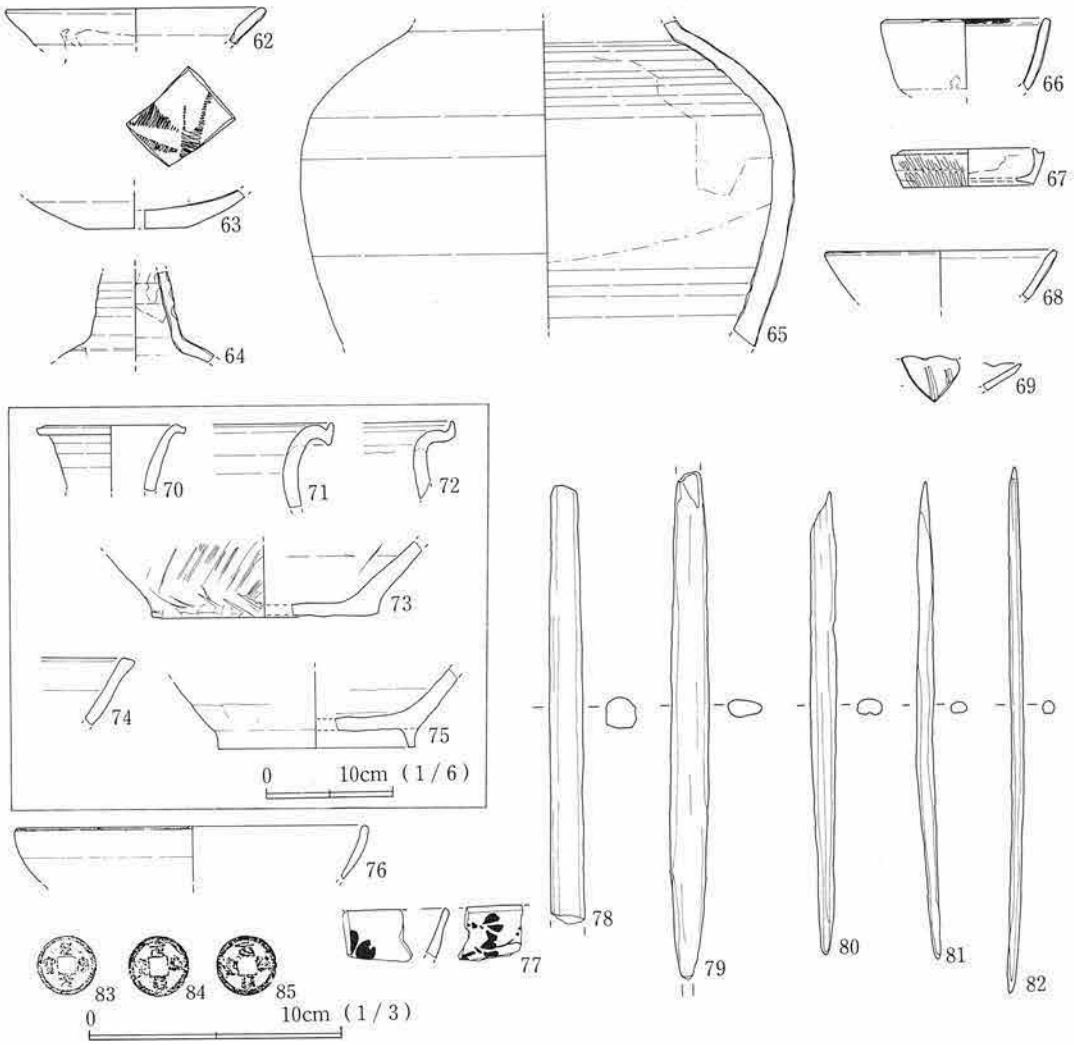


Fig.41 溝Ⅴ出土遺物 (2)

ヘラ削りが施される。器表は灰白色。芯部は灰色を呈する。厚さは2.2cm前後である。

93－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着する。凹面は縦位のナデ、凸面は縄目の叩き、側面、端面はヘラ削りが施される。器表は灰黒色、芯部は灰白色を呈する。厚さ2.4cm前後である。

94－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着し、糸切り痕がみられる。凸面には格子目の叩き、側面、端面はヘラ削りが施される。色調は灰白色を呈する。厚さは1.9cm前後である。

95－平瓦。凹凸面ともに粗砂が付着し、凹、凸、側面に糸切り痕をもつ。端面はヘラ削りを施す。器表は赤橙色、芯部は灰橙色を呈する。厚さは1.9cm前後である。

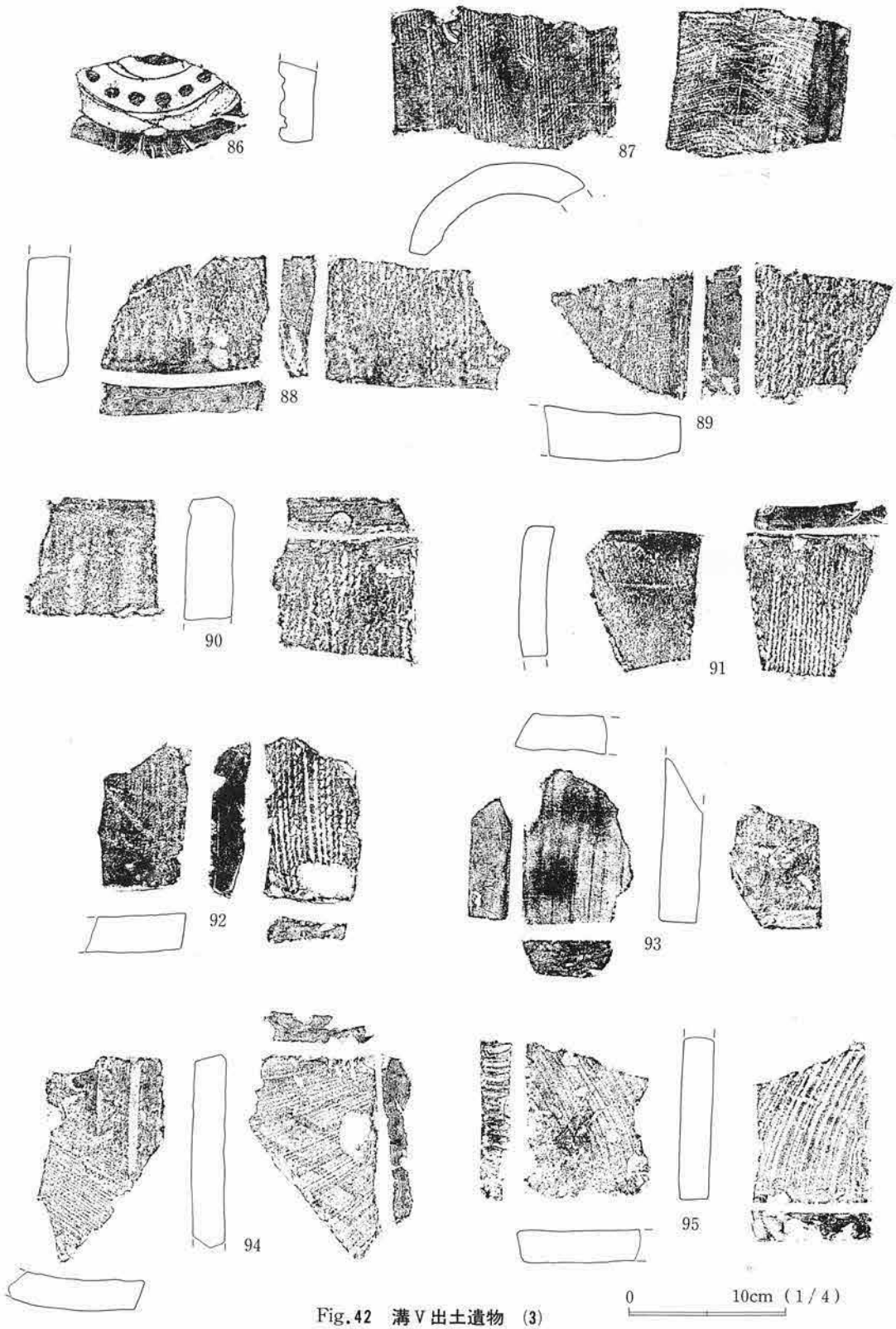


Fig.42 溝V出土遺物 (3)

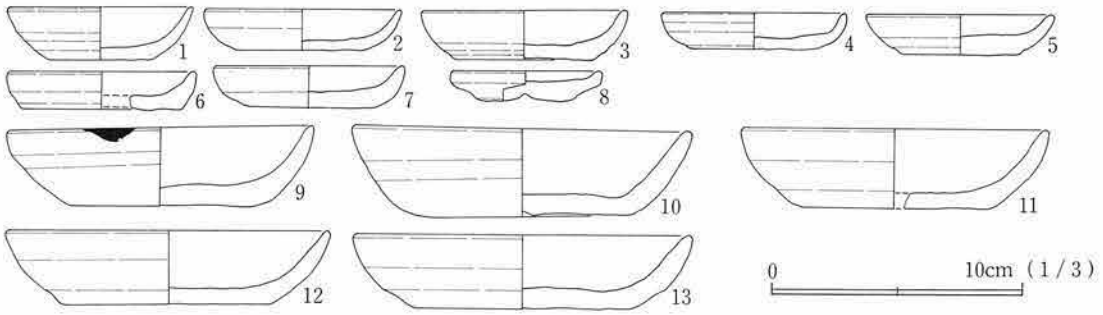


Fig. 43　溝Ⅵ出土遺物

No.	口径	底径	器高	内高	4	7.2	4.9	1.5	1.0	8	5.8	3.4	1.2	0.4	12	12.3	8.3	2.9	2.3
1	7.2	3.9	2.1	1.6	5	7.4	4.9	1.6	0.9	9	12.0	8.1	3.2	2.3	13	13.3	8.5	2.9	2.1
2	7.7	5.0	1.6	1.2	6	7.3	6.3	1.5	0.9	10	13.3	8.4	3.5	2.6					
3	8.0	5.4	2.0	1.3	7	7.4	5.0	1.6	1.0	11	12.0	7.4	3.2	2.6					

単位(cm)

表16. 溝Ⅵ出土かわらけ法量 (Fig. 43)

⑦　溝Ⅵ出土遺物 (Fig. 43)

溝Ⅵからの出土遺物で図示可能なものは Fig. 43の１～13に示した。

１～13は全てロクロ成形であり、１～７は小皿、８は内折れタイプ、９～13は大皿である。小皿では器高がやや低く、体部に丸味をもつもの(４～７)と、器壁が薄く、器高の高いもの(１～３)とがある。大皿では９～11は器高がやや高く、12、13は器高が低く、口径、底形が大きいものである。８は外底面に糸切り痕を残し、口縁端部がやや丸味をもつものであり、外底面には穿孔痕がみられるが貫通せず凹地状を呈している。

第4節　道　　路（Fig. 44～47）

ここではD～G－1～3グリットに於いて検出された遺構について説明を加えることとする。道路地業、及び土壙1基を検出している。また、道路地業、及び中世地山確認のために2箇所のトレンチを設定し、道路Nトレンチ、道路Sトレンチ（以下、Nトレンチ、Sトレンチ）と称した。さらに、道路範囲の確認のためNトレンチを東へ拡張した。道路地業下からは南北溝3条、柱穴1口を検出した。

Ⅰ．検出遺構（Fig. 44）

① 道路

現地表下に40～50cm程堆積する表土を除去すると土丹による堅固な地業層を検出する。土丹層上面の検出海抜レベルは北部で9. 80～10. 00m、南部で9. 75～10. 03m。東端部で10. 10mであり、東から西へ、北から南へと緩く傾斜している。確認できる道路東西幅は10. 70mである。この道路地業を構成するものは上層から順に土丹地業、細砂及び貝殻細粒を混入する灰褐色粘質土による地業、暗褐色粘質土による地業の版築であり、この版築状況により堆積土層から2時期を確認している。道路西側は前述した南北大溝の溝Ⅵであり、下層の道路は溝Ⅵに切られるが、上層の道路に関しては溝Ⅵと同時期、あるいは溝のほうが新しいと考えられる。

② 土壙

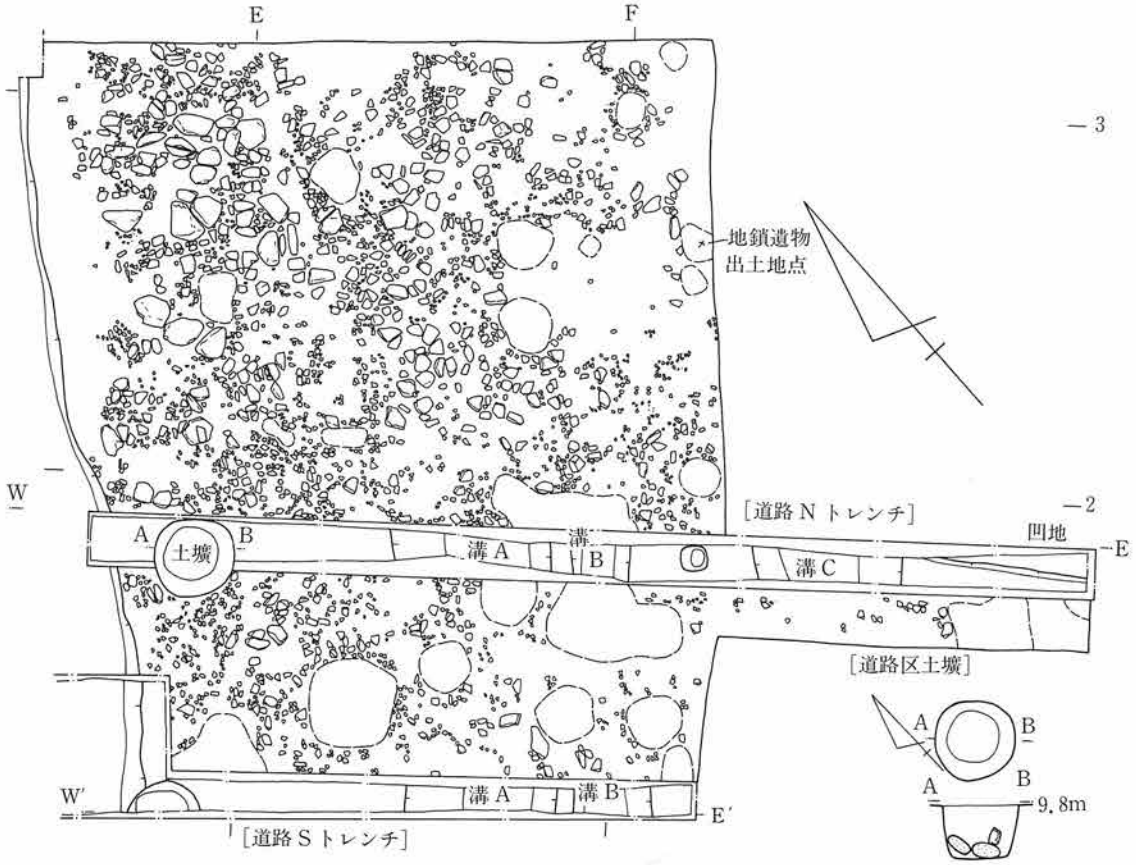
D－1グリットにおいて検出された。平面はほぼ円形を呈する。確認できる上端幅0. 8m、下端幅0. 6m、深さは0. 6mであり、底面の海抜は9. 20mである。覆土はしまりの弱い灰褐色粘質土であり、下層からは伊豆石、鎌倉石が投棄された状況で検出されている。遺物は出土していない。

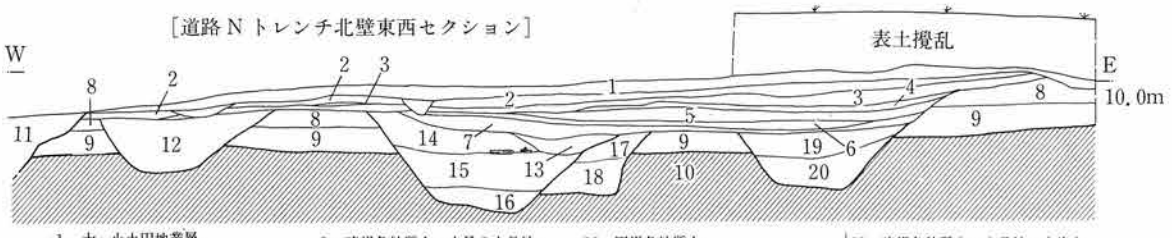
③ 溝A、B、C

N、Sトレンチに於いて道路地業下から3条の南北溝が検出された。西から溝A、溝B、溝Cと称する。溝Aと溝Bは切り合っており溝Aが新しい。溝Aの確認できる上端幅2. 4m、下端幅1. 0m、深さ0. 9mであり溝底海抜レベルはN、Sトレンチともに8. 60mである。断面は逆台形を呈する。覆土は土丹粒、炭粒を少量含む暗褐色粘質土であり出土遺物は少ない。溝Bは溝Aとほぼ同様の規模、形態、覆土を有すると考えられる。溝底の海抜レベルはN、Sトレンチともに8. 80mである。溝Cは狭い範囲での検出ではあるが、溝A、溝Bと規模、形態、覆土が類似することから溝として扱った。確認できる上端幅1. 8m、下端幅0. 8m、深さ0. 6mであり、溝底の海抜レベルは8. 80mである。この溝の東では深さ0. 1m程の浅い落ち込みラインを検出したが詳細は不明である。

Ⅱ．出土遺物（Fig. 45～47）

道路土丹層を浅く攪乱する近、現代の凹地からは合わせ口の状態で重さなった2枚の白かわらけと、その中から7枚の銅銭「寛永通宝」、紙片、草（？）が出土した。上面の白かわらけには東西南北と墨書され、ほぼその方向に置かれていた。遺物はFig-45の1～9であり、近代以降の所産である。



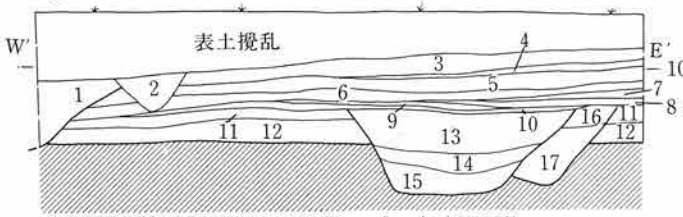


道路
1. 大～小土円地業層。
2. 灰褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。
3. 土丹地業層。
4. 明褐色粘質土。
5. 灰褐色粘質土。貝殻細粒混入。
6. 暗褐色粘質土。貝殻細粒混入。
7. 暗褐色粘質土。木片を含む。しまり弱い。
8. 暗褐色粘質土。少量の土丹粒、炭粒を含む。
9. 黒褐色粘質土。少量の炭粒を含む。
10. 黒褐色粘質土。(中世地山)
11. 灰褐色粘質土。土丹粒、炭粒かわらけ片を含む。(溝VI)
12. 灰褐色粘質土。土丹粒を含む。(土壙)

溝A
13. 灰褐色粘質土。
14. 灰褐色粘質土。炭粒、木片を含む。
15. 暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。
16. 暗褐色粘質土。

溝B
17. 暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。
18. 暗褐色粘質土。土丹粒、木片を含む。

溝C
19. 暗褐色粘質土。土丹粒を少量含む。
20. 暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。



[道路Sトレンチ南壁東西セクション]

1. 灰褐色粘質土。土丹粒、炭粒かわらけ片を含む。(溝VI)
2. 褐色粘質土。土丹粒、炭粒混入。
3. 暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。
4. 土丹層。しまりは弱い。

道路
5. 大～小土円地業層。
6. 灰褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。
7. 灰褐色粘質土。土丹粒混入。
8. 土丹地業層。
9. 暗褐色粘質土。細砂、貝殻細粒を含む。
10. 暗褐色粘質土。
11. 暗褐色粘質土。少量の土丹粒、炭粒を含む。
12. 黒褐色粘質土。少量の炭粒を含む。

溝A
13. 灰褐色粘質土。炭粒を含む。
14. 暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。
15. 暗褐色粘質土。

溝B
16. 暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。
17. 暗褐色粘質土。土丹粒、木片を含む。
18. 黒褐色粘質土。(中世地山)

0 4m (1/80)

Fig.44 道 路

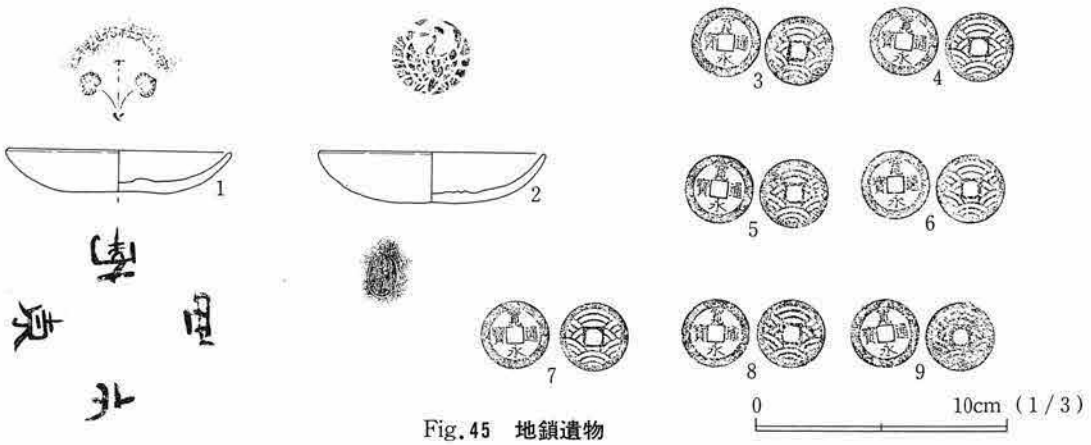


Fig.45 地鎖遺物

1 - 白かわらけ。口径8.8cm。底形4.0cm。器高1.6cm。内型成形。内底面に「官幣中社松尾神社」の文字と草文が施される。官幣中社は1871(明治4)年の太政官布告による社格の一つである。また、松尾の神は酒造の神とされている。外面には墨で「東西南北」と書かれている。胎土は淡乳白色を呈し精良。焼成良好である。

2 - 白かわらけ。口径8.8cm、底形3.5cm。器高2.0cm。内型成形。内面には鶴丸文が施される。外面下位には「鶴岡八幡宮」と押印される。胎土は淡乳白色を呈し精良。焼成良好である。

3～9は銅製の寛永通宝であり、背に21波文をもつものである。1768(明和5)年鋳造。

道路面上からの出土遺物で図示可能なものは、Fig.46の1～20である。

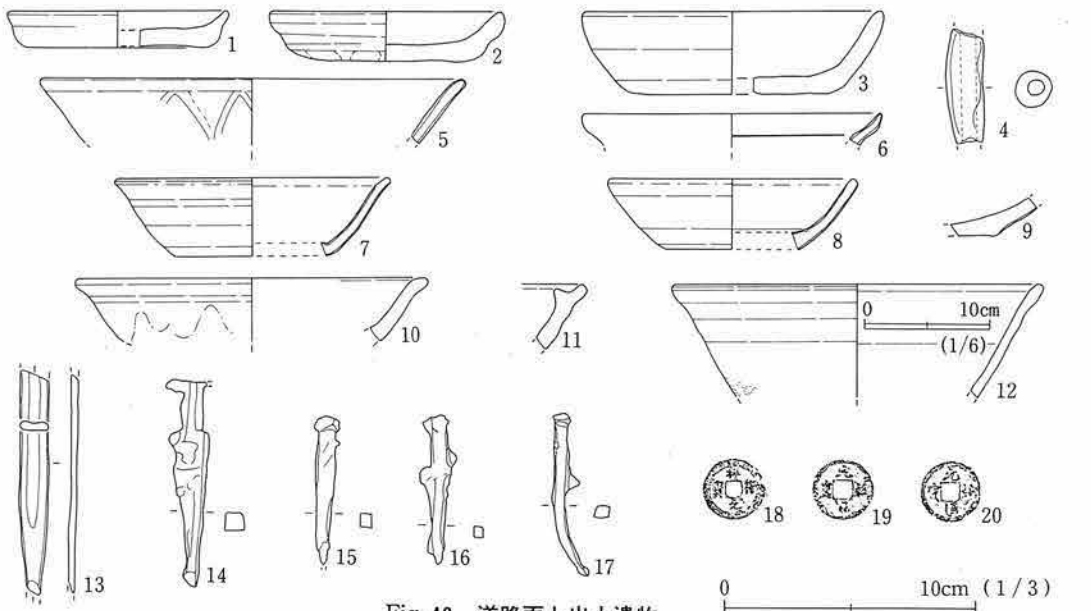
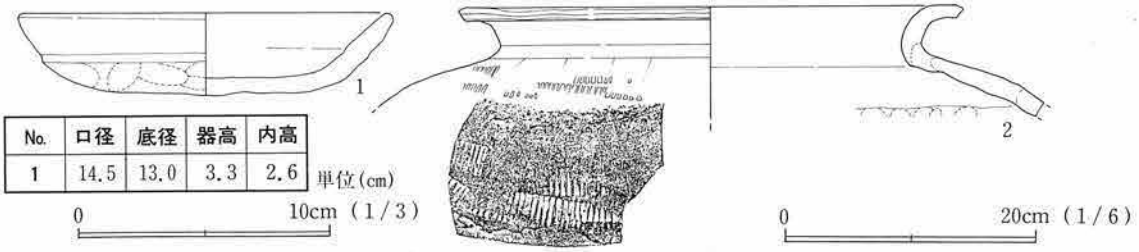


Fig.46 道路面上出土遺物

No.	口径	底径	器高	内高	1	8.5	8.3	1.4	0.8	2	9.1	8.3	1.9	1.3	3	11.8	7.9	3.2	2.5

単位(cm)

表17. 道路面上出土かわらけ法量 (Fig.46)



No.	口径	底径	器高	内高
1	14.5	13.0	3.3	2.6

単位(cm)

Fig.47　溝A，B出土遺物

1～3はかわらけである。1はロクロ成形の小皿で器高が低く、底部の厚いもの。2は手づくね成形の小皿で平底状を呈するもの。3はロクロ成形の大皿で体部に丸味をもち、器高の高いもの。

4－土錘。かわらけ質。両端を欠損している。残存長4.5cm。外径1.4cm。内径0.6cm。

5－青磁鎬蓮弁文碗。口径16.7cm。釉は灰緑色。胎土は灰白色を呈する。貫入あり。

6－青磁折縁鉢。口径10.6cm。釉は青緑色。胎土は灰白色を呈する。

7－白磁口兀皿。口径10.8cm。底径6.0cm。器高3.1cm。釉は灰白色透明。胎土は灰白色を呈す。

8－白磁口兀皿。口径9.8cm。底径5.2cm。器高2.8cm。釉は灰白色透明。胎土は灰白色を呈す。

9－緑釉盤。外底面は露胎。内面には降灰が見られる。胎土は淡灰橙色を呈し夾雑物を含む。

10－山皿。口径13.8cm。器表には自然釉が生じる。胎土は灰橙色を呈し焼成不明である。

11－瀬戸窯口縁部片。折縁皿と考えられる。釉は暗緑色。胎土は灰色を呈する。

12－山茶碗窯系こね鉢。口径28.8cm。口縁部は肥厚し端部は丸い。胎土は灰白色を呈し粗雑。

13－笄。両端を欠損している。残存長8.9cm。幅1.1cm。厚さ0.3cm。

14～17は鉄釘である。いずれも錆が激しい。14は残存長8.2cm。断面は0.7×0.7cmの方形を呈す。15は残存長6.0cm。断面は0.5×0.6cmの方形を呈す。16は残存長6.6cm。断面は0.4×0.5cmの方形を呈す。17は残存長6.5cm。断面は0.4×0.5cmの方形を呈する。

18～20は銅銭である。いずれも北宋銭。18は祥符元宝。楷書体。19、20は元祐通宝。行書体。

溝A、Bからの出土遺物で図示可能なものはFig.47の1、2である。

1－かわらけ。手づくね成形の小皿。口径14.5cm。底径13.0cm。器高3.3cm。内高2.6cm。色調は灰橙色を呈し、胎土は精良、体部外面中位の陵は明瞭である。底部は平底状を呈する。

2－渥美窯甕。口径40.0cm。頸部はC字状に外反し、口縁端部は水平に引き出される。口縁上面には沈線状の凹みをもつ。肩部外面には縦位の線刻が配されており、押印にまで達している。器表は灰黒色、芯部は乳灰色を呈する。口縁内外面及び肩部外面には乳緑色釉がハケ塗りされている。

第四章　まとめと考察 (Fig. 48、49)

本調査地点は表土撹乱が比較的浅く、良好な状態で中世の道路、溝、かわらけ溜り、柱穴、土壙、井戸等の遺構と多種多量の遺物を検出することができた。しかし、掘削深度の規定があり、南北溝等の充分な性格、年代は今後の調査に委ねることとしたい。本章においては、今回の調査で把握された諸事実から各遺構の年代観について述べ、さらに本遺跡地域における遺構の検出状況について言及したいと思う。

第一面の年代はかわらけ溜り出土遺物から導くことが可能である。出土かわらけは12世紀末の所産と考えられる深い器形で内底無調整、体部外面に強いロクロ目を残すもの、14世紀以降の所産と考えられる器壁が薄く体部に丸味をもち、深い器形を呈するタイプは検出されていない。出土個体数は圧倒的に手づくねが多く、平底状を呈するものが主流であるが、丸底状でボッテリとした外観を呈するものも確実に混在し、ロクロ成形では口径、底径の比率が小さく、体部に丸味をもち、器高の低いものが主流である。また、政所Ⅰ地点で出土した静止糸切り技法のかわらけを混在せず、灯明皿として用いられたものも出土していない。かわらけ、及び、伴出した青磁鎬蓮弁文碗、常滑窯こね鉢から13世紀中葉～後半の年代が考えられる。

第二面の年代は井戸、及び東西溝からの出土遺物から考えられよう。井戸出土の手づくねかわらけは平底状を呈し器高の低いもの、ロクロ成形ではやや小振りで器高の低いものである。東西溝出土の手づくねかわらけは丸底状のものも弱冠含まれるが、平底状で器高の低いものが主流であり、ロクロ成形では径が大きく、器高の低いものがほとんどである。出土個体数は圧倒的に手づくねタイプが多い。かわらけ、及び、伴出した青磁劃花文椀、常滑窯甕から13世紀前半～中葉の年代をあてることができる。

南北大溝の溝Ⅰ～Ⅵの年代観であるが、堆積土層の状況からは溝Ⅰから溝Ⅵへと掘り直されていると考えられることは先に述べた通りである。しかし、浚渫、改修を繰り返し、各溝からの遺物混入は不可避であるため、出土遺物からの年代観はあくまで目安である。溝Ⅰの手づくねかわらけは平底状のもの、ロクロ成形では径が大きく器高の低いものが主流であり、かわらけ、及び、伴出した青磁劃花文碗、常滑窯の壺、甕から13世紀前半～中葉の年代が考えられる。溝Ⅱ出土のかわらけは溝Ⅰのものと類似する。かわらけ、及び、伴出遺物の青磁鎬蓮弁文碗、常滑窯甕から13世紀中葉あたりを考えたい。溝Ⅲではロクロ成形のかわらけが圧倒的に多く、口径、底径の比率が小さく器高の低いものが大半であるが、器壁がやや薄く、深めのタイプも出土している。かわらけ、及び、伴出した青磁鎬蓮弁文碗、白磁口兀皿、常滑窯の鉢、甕から13世紀中葉～後半の年代が考えられる。溝Ⅳでは手づくねかわらけは丸底状のものが大体を占め、ロクロ成形では器壁がやや薄く体部に丸味をもち、器高のやや高いものがみられる。この溝Ⅳはかわらけ溜りを削平するものであり13世紀末～14世紀前葉の年代が考えられる。溝Ⅴからも溝Ⅳと同様のかわらけを出土しており、ほぼ同時期のものであると考えられる。溝Ⅵからはロクロ成形のかわらけのみの検出であり、器壁はやや薄

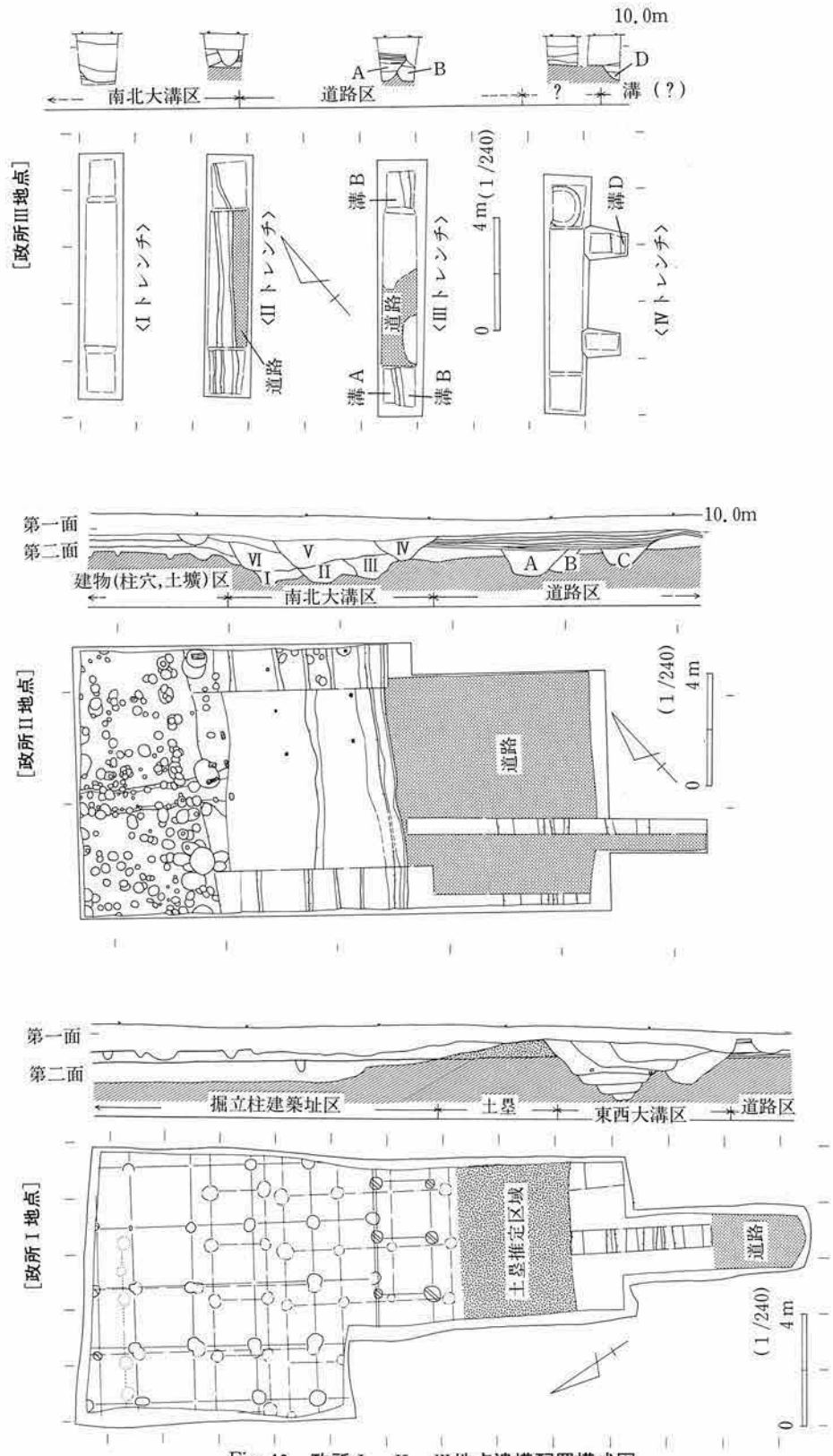


Fig.48　政所Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ地点遺構配置模式図

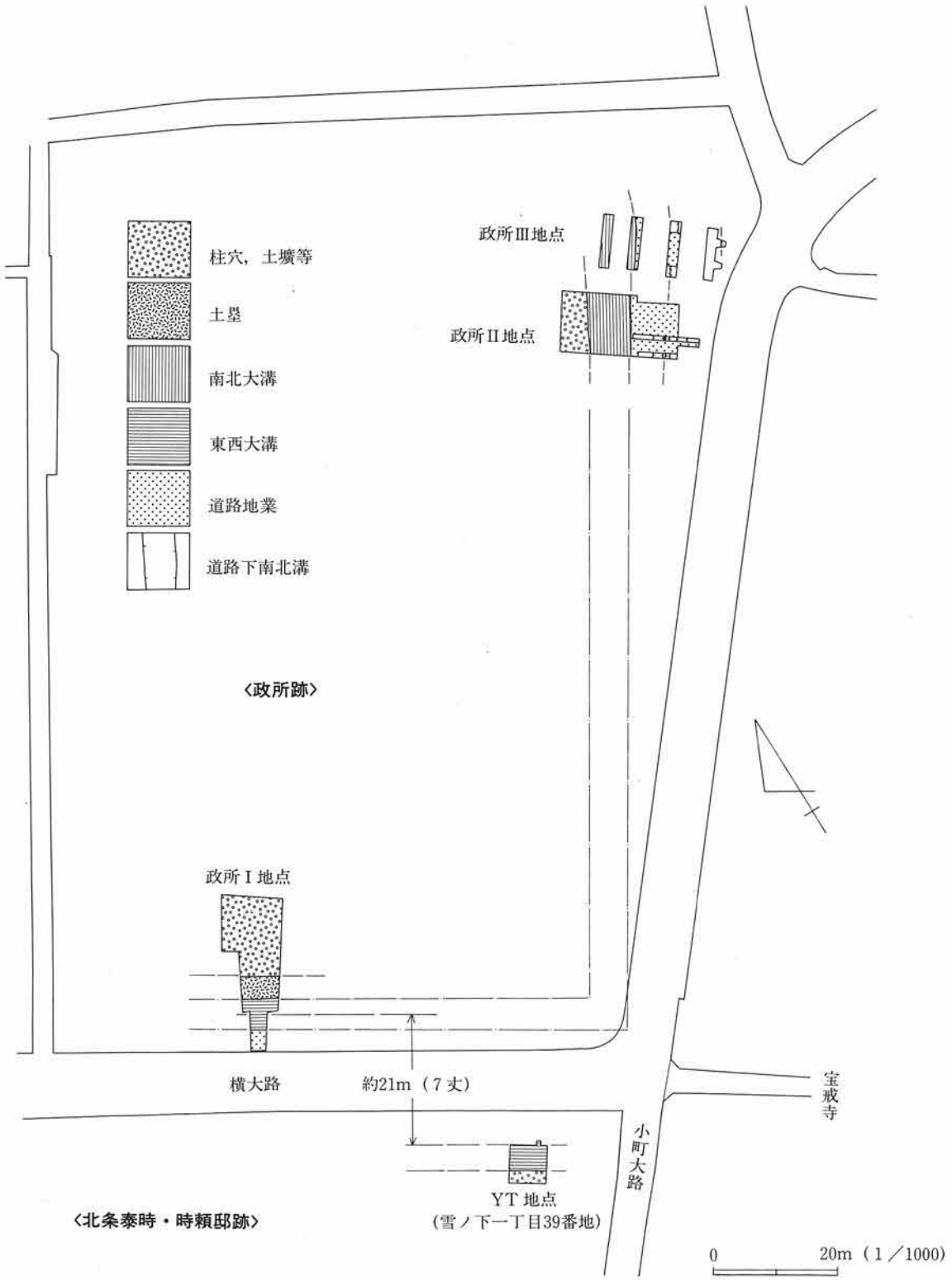


Fig. 49　政所跡概念図

く器高の高いものと、やや低いものとが出土しており14世紀中葉～末の年代が考えられる。以上のことから南北大溝の存続期間は13世紀初頭～14世紀末であると考えられる。

道路は２時期の地業を検出している。上層のものは溝Ⅵと同時期、或いは溝のほうが新しいと考えられ14世紀中葉～末の年代が考えられる。道路地業下から検出された溝Ａ、Ｂは検出範囲も狭く出土遺物も少ないが、平底状で口径が広く、器高の低い手づくねかわらけと渥美窯甕を出土しており12世紀末～13世紀初頭の年代を考えている。

ここで「政所跡」として神奈川県遺跡台帳に記載されている区域で今までに調査が行なわれた雪ノ下三丁目987番１・２地点、本調査地点、雪ノ下三丁目965番地点（以下、政所Ⅰ地点、政所Ⅱ地点、政所Ⅲ地点とする）の３地点での遺構検出状況について触れ、さらに、横大路の南に所在する「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目395番地点」（以下、YT 地点とする）の調査結果を踏まえ、政所跡を大観していく。尚、Fig.48、49に示めした遺構配置模式図と政所跡概念図は、1991年10月に催された「第一回鎌倉市遺跡調査・研究発表会　発表要旨」で筆者が掲載したものを一部加除筆したものである。

政所Ⅰ地点は北から、掘立柱建築址、土壙、池状遺構等を検出した建物区と、基底幅約4.5m、残存高約0.6m を測る土塁（調査壁堆積土層により確認）、８期以上の浚渫、改修が考えられる東西大溝区、そして南側は道路となる。東西大溝の存続期間は13世紀中葉～14世紀中葉と考えられている。（註１）YT 地点は政所Ⅰ地点から横大路を狭さみ約50m 東方に所在し、東西大溝とその南には柵等の建造物を想起させる柱穴列が検出されている。この東西大溝は板材と杭の痕跡が残存し溝幅は約2.0m であり、存続期間は13世紀中葉～15世紀初頭と考えられている。（註２）政所Ⅰ地点と YT 地点の東西溝はほぼ平行関係にあり、政所Ⅰ地点で検出された地覆材を伴なう溝の南岸延長線と YT 地点の溝の北岸延長線との距離は約21m（約７丈）を測り、ある時期（13世紀中葉～14世紀中葉）の横大路の幅を示すものと考えられる。因に13世紀中葉～14世紀前半期の若宮大路の幅は鶴岡八幡宮二ノ鳥居以北で33m であることが指摘されている（註３）。また、政所Ⅰ地点では八幡宮研修道場用地や今小路西遺跡（御成小学校内）などで検出されている土塁が確認されており、この一帯に幕府にとって重要な機関が存在していたことが窺われる。（註４）

政所Ⅱ、Ⅲ地点は近接しており、遺構の検出状況はほぼ共通している。（註５）ここで問題になるのが政所Ⅲ地点Ⅱ、Ⅲトレンチ北部において溝が流れを西に向けはじめていること、Ⅳトレンチにおいて道路地業を検出し得なかったこと、さらにⅣトレンチ東部の北拡張区で検出された溝Ｄが南拡張区では検出されなかったことである。以上のことから政所Ⅲ地点において南北溝及び道路の主軸方向がやや西に振れていることが理解できる。また、政所Ⅱ地点では道路幅が10.7m 以上であることが確認されており、さらに東へと広がるものと考えられる。政所Ⅲ地点において道路西端から10.7m の地点はⅢ、Ⅳトレンチ間であり、溝Ｄを道路地業下で検出された溝Ａ、Ｂ、Ｃとほぼ同時期であるとするとⅣトレンチ内では道路西側の南北大溝群と対応する道路東側の溝は検出されていないことになる。以上のことからⅣトレンチで道路地業が検出されないのは後世の削平に

よるものであり、道路の年代を溝Ⅵとほぼ同時期とすると14世紀中葉～末の政所区域東側の南北道路（小町大路）の幅は14.3m以上という数値が得られる。また、政所Ⅱ、Ⅲ地点において土塁は検出されず、政所の内郭部分は調査区のさらに西になると考えられる。

最後に参考として、政所Ⅰ地点で検出された東西大溝、政所Ⅱ、Ⅲ地点で検出された南北大溝の推定範囲をそれぞれ東、南へ延長させてみた。両者を直交させると南北大溝は現在の小町大路の南北軸から西へ約8°ほど振れていることがわかる。あくまでも参考として戴きたい。

註

註1．政所Ⅰ地点の事実記載は『政所跡』政所跡発掘調査団編。宮田真。1991年。を参考にした。

註2．YT地点の事実記載は「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目935番地点」菊川英政。『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』鎌倉市教育委員会編。1989年。を参考にした。

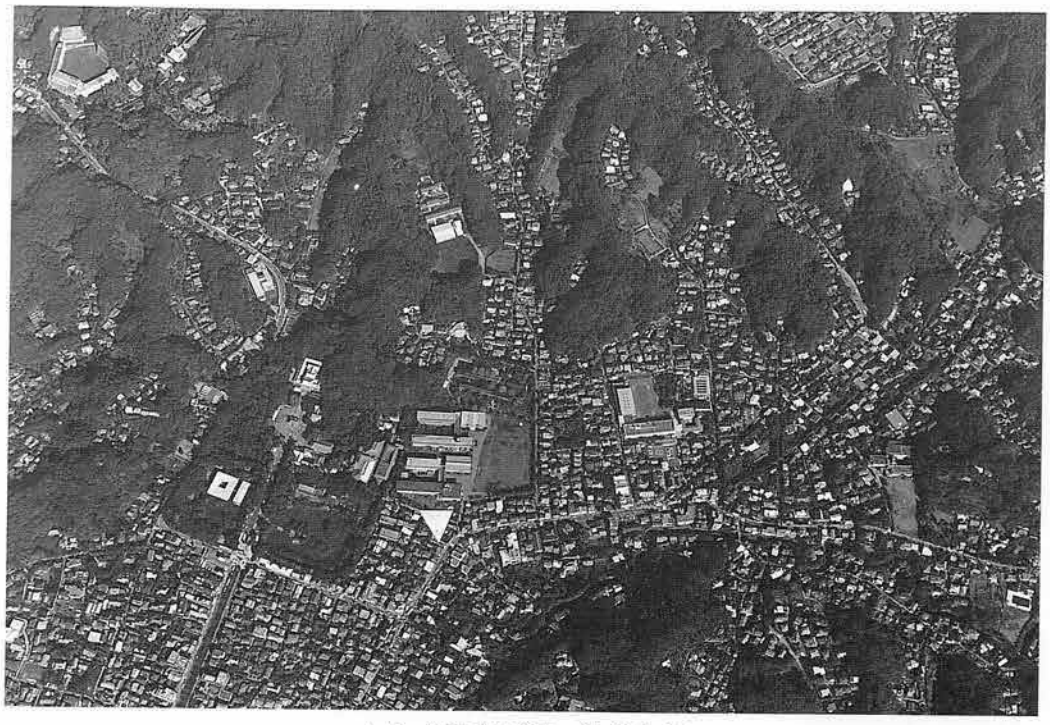
註3．馬淵和雄。「北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目233番9他地点）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』鎌倉市教育委員会編。1987年。P72による。

註4．政所Ⅰ地点に西隣する雪ノ下三丁目988番地点は現在（1992年1月）調査中であるが、政所Ⅰ地点とほぼ同様の遺構が検出されており、土塁も調査内では西へ続いていたと考えられる。筆者実見。

註5．政所Ⅲ地点に関しては筆者が調査に参加、実見した。

写　真　図　版

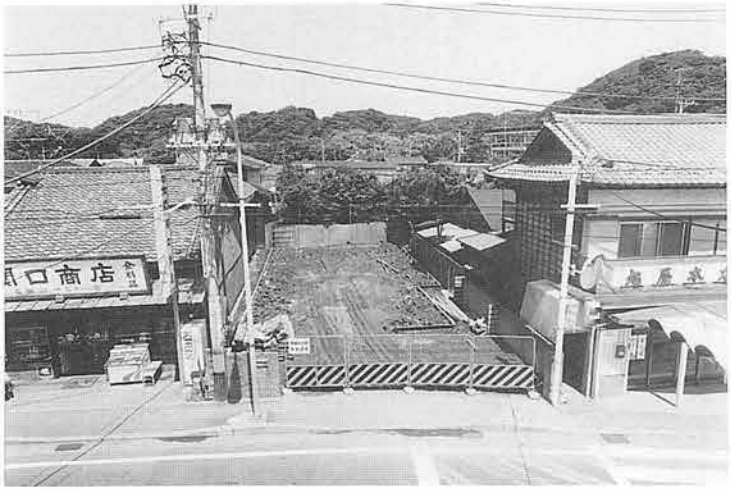
▲A．調査地点遠景（北から）南方に由比ケ浜を臨む



▲B．調査地点遠景（上空から）

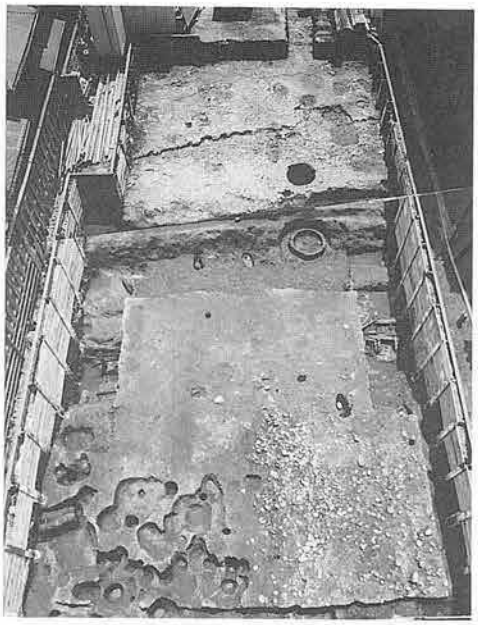
PL.2

◀A. 調査地点近景（北から）
手前に「筋替橋」の石碑がみえる。

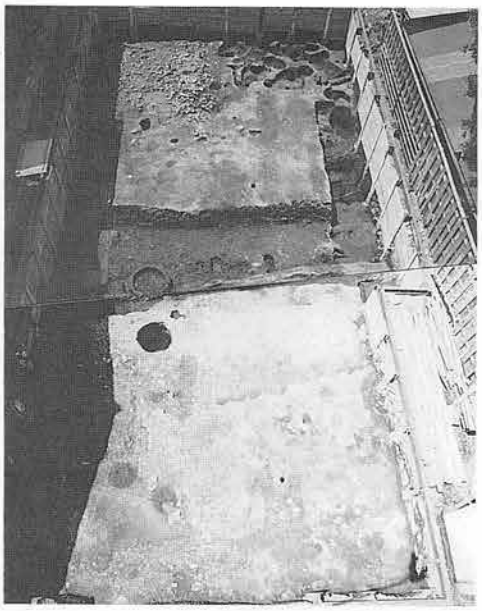


◀B. 調査区近景（東から）
右隣は政所Ⅲ地点

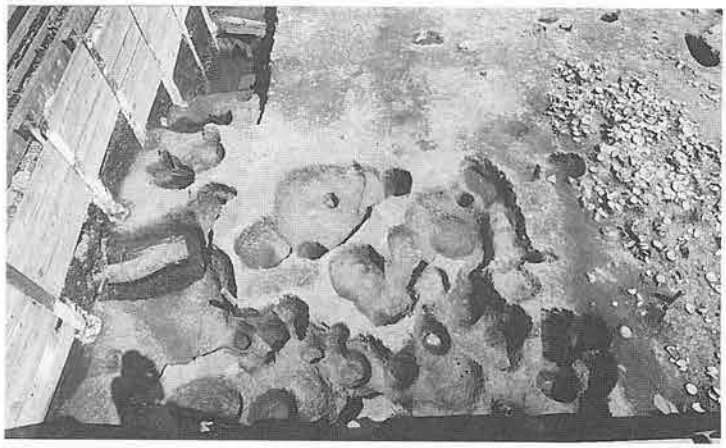
◀C. 調査区近景（東から）



◀A. 第一面全景（西から）



▶B. 第一面全景（東から）



◀C. A～B－3～4グリット
土壙検出状況（西から）

◀D. 同上.（北から）

PL.4

◀A．かわらけ溜り（南から）

◀B．かわらけ溜り（西から）

◀C．かわらけ溜りスナップ
（東から）

◀A．かわらけ溜りスナップ
（南から）

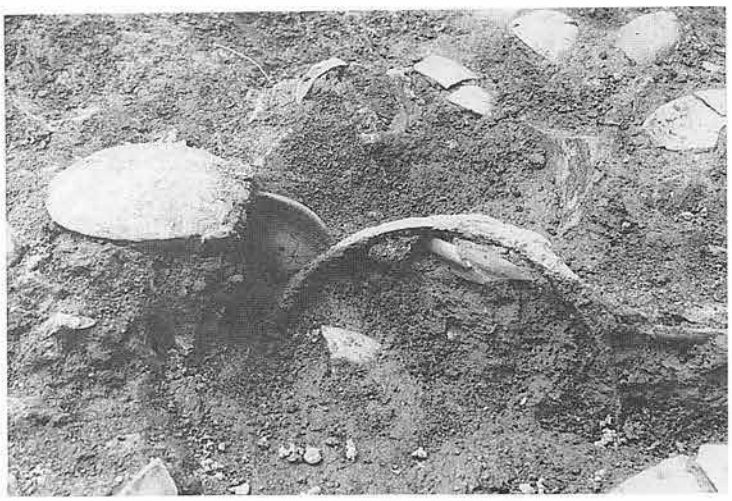
◀B．同上スナップ（南から）

◀ 同上，スナップ（西から）
内折かわらけが集中して
出土している。

◀A．かわらけ溜りスナップ
(西から)かわらけ異形品

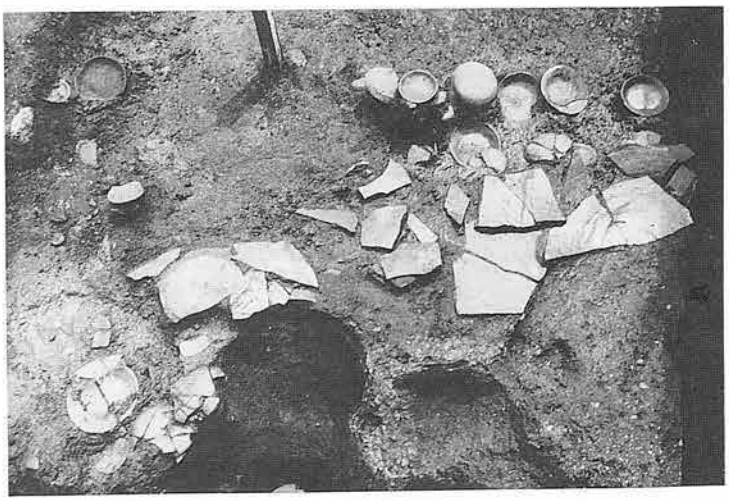
◀B．かわらけ溜りスナップ
(北から)かわらけ異形品

◀C．かわらけ溜りスナップ
(北から)



◀A．かわらけ溜りスナップ
(北から) 鉄製皿、
銅製鉱出土状況

◀B．かわらけ溜りスナップ
(北から)刀子出土状況



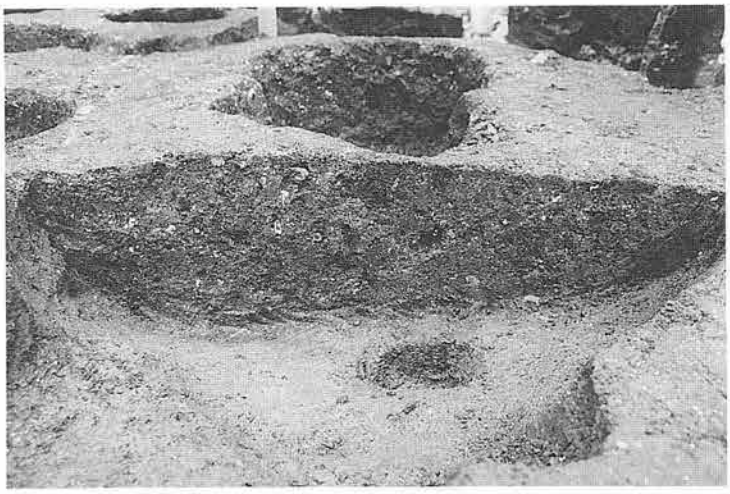
◀C．かわらけ溜りスナップ
(北から)常滑甕出土状況

PL.8

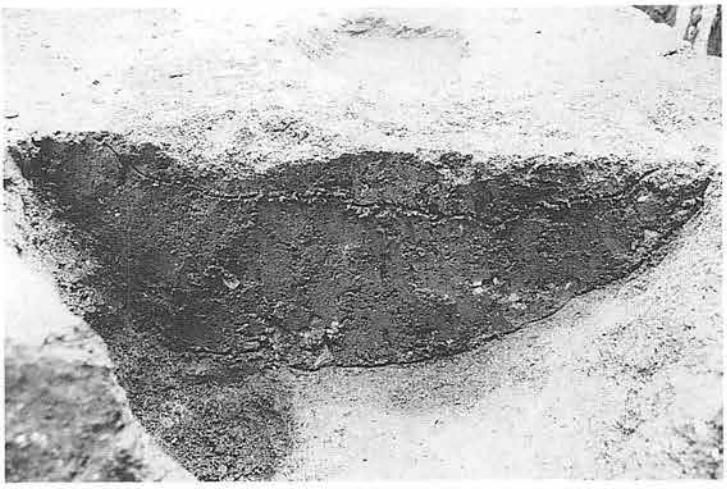
◀A．かわらけ溜りスナップ
（南から）

◀B．かわらけ溜りスナップ
（北から）

◀C．かわらけ溜りスナップ
（北から）



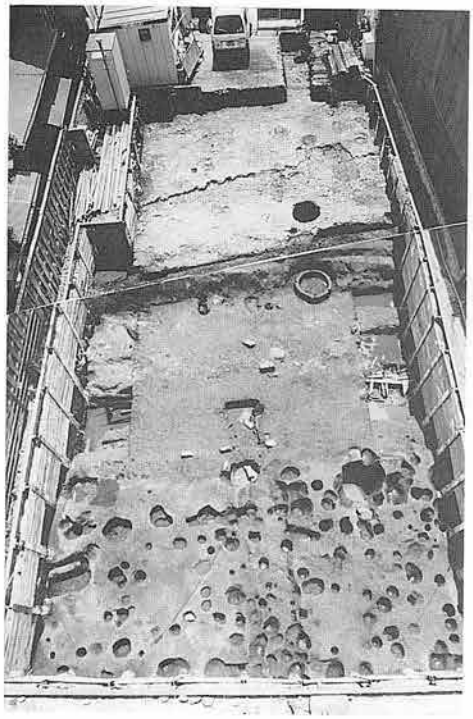
◀A．土壙３堆積土層
（東から）



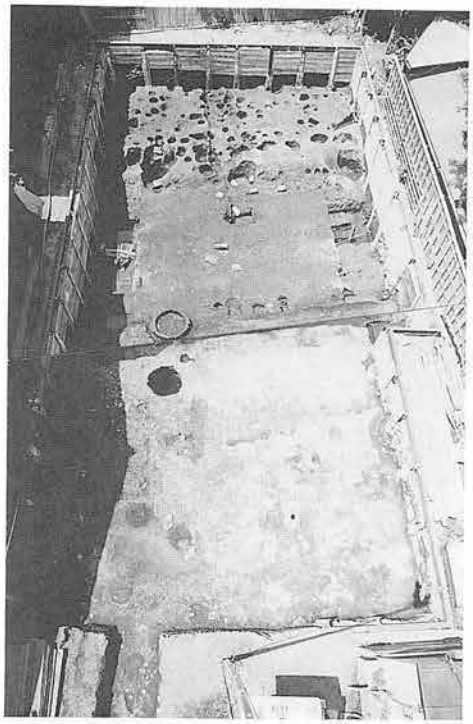
◀B．土壙４堆積土層
（北から）

◀C．土壙５堆積土層
（東から）

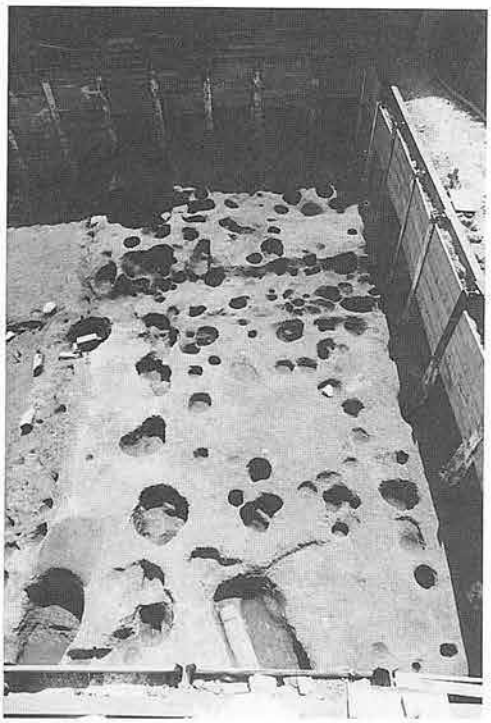
PL, 10



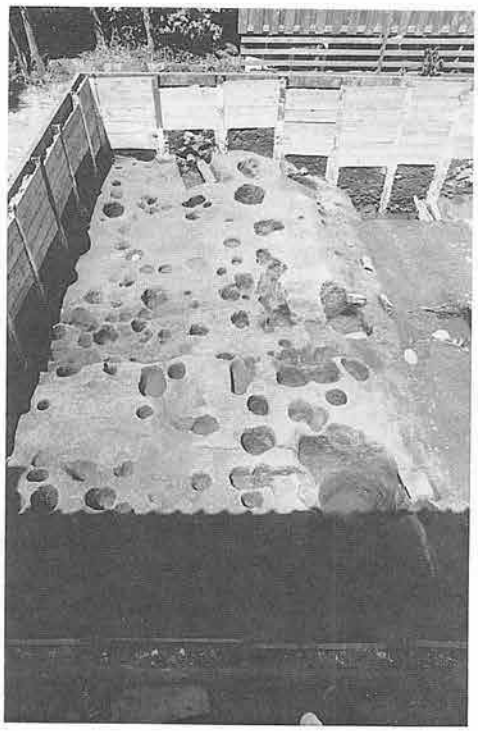
◀ A. 第二面全景（西から）



▶ B. 第二面全景（東から）



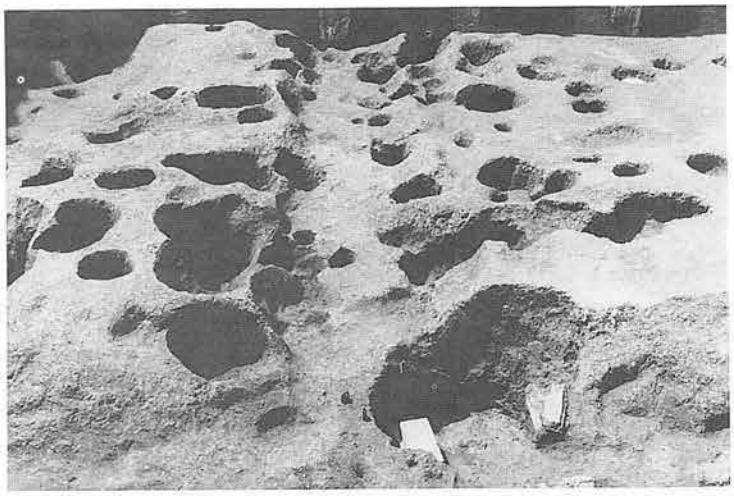
◀ C. 第二面A～B－1～3グリット（北から）



▶ D. 第二面A～B－1～3グリット（南から）

▲A．井戸周辺（東から）

▶B　井戸（東から）



◀C．東西溝（東から）

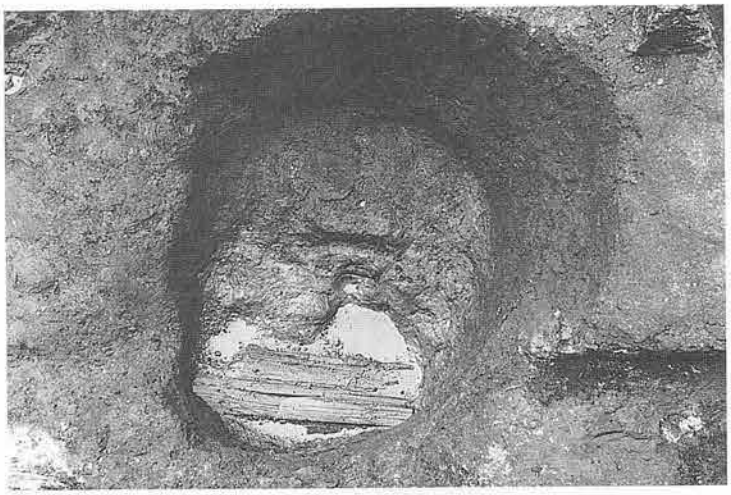
PL.12

◀A．C－2グリット木組（東から）

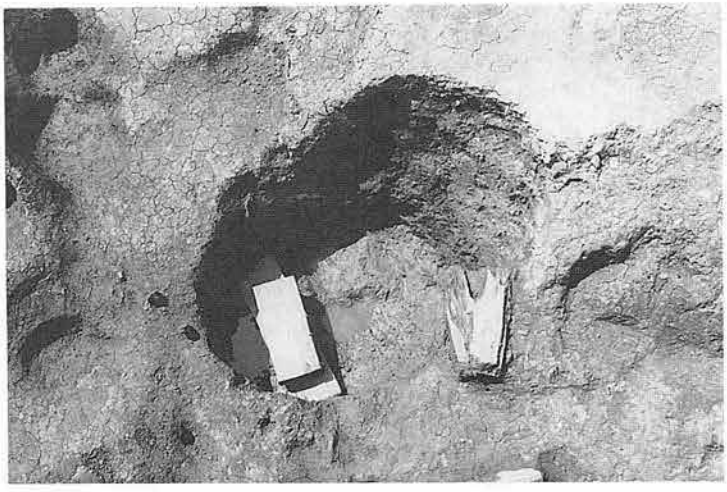
◀B．同上（上から）

◀C．同上（北から）

◀A．大柱穴A，B（東から）



◀B．大柱穴B（北から）



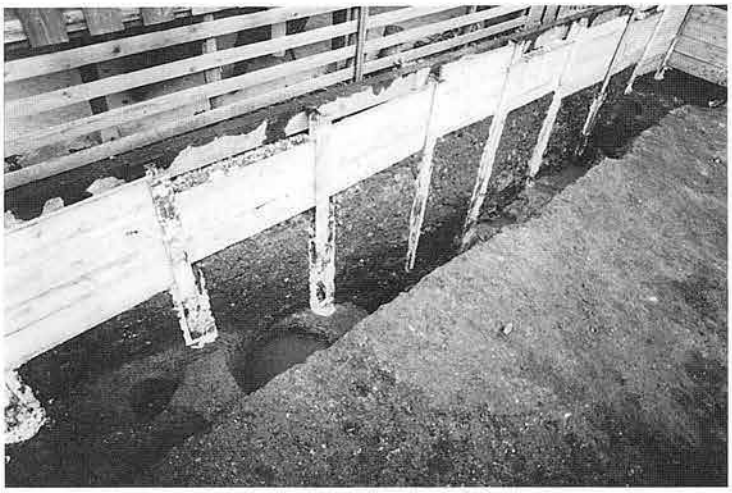
◀C．大柱穴A（東から）

PL.14

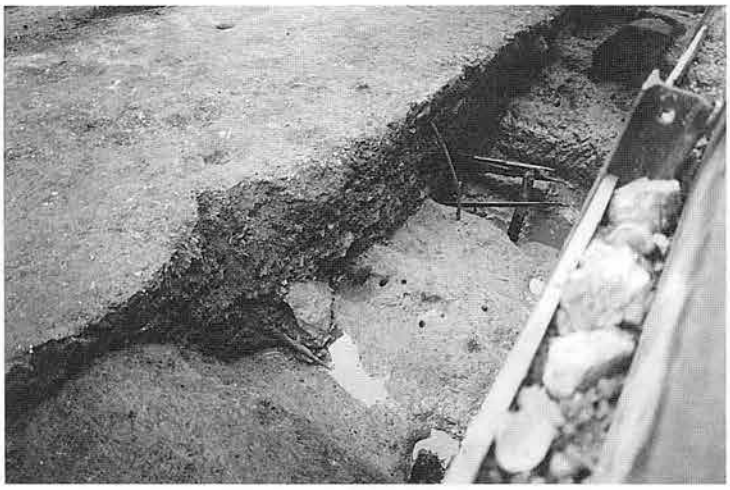
◀A. 南北大溝Nトレンチ（東から）

◀B. 同上（西から）

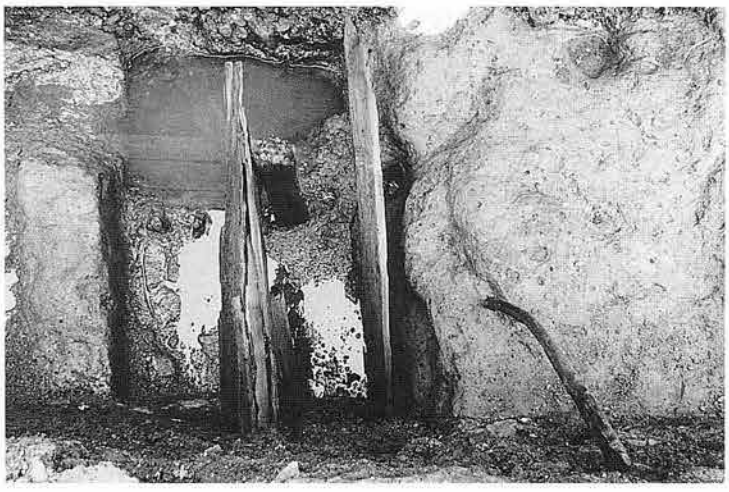
◀C. 南北大溝Nトレンチ（合成写真）



◀A．南北大溝Nトレンチ
北壁堆積土層（南から）

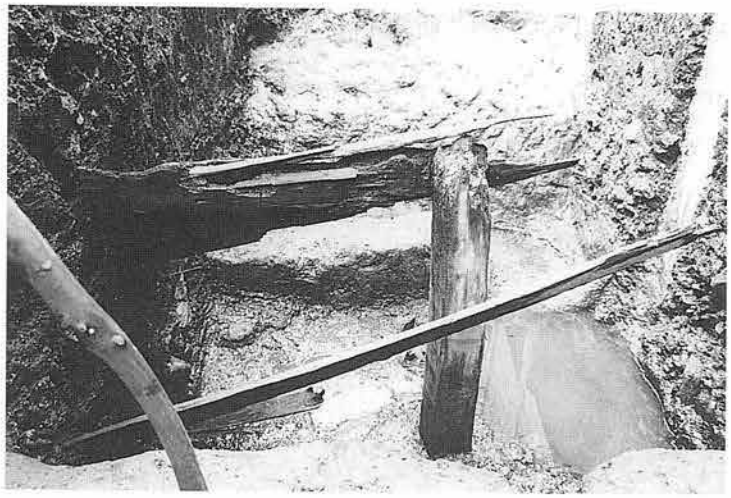


◀B．同　上
南壁堆積土層（北から）



◀同上
南北木組（南から）

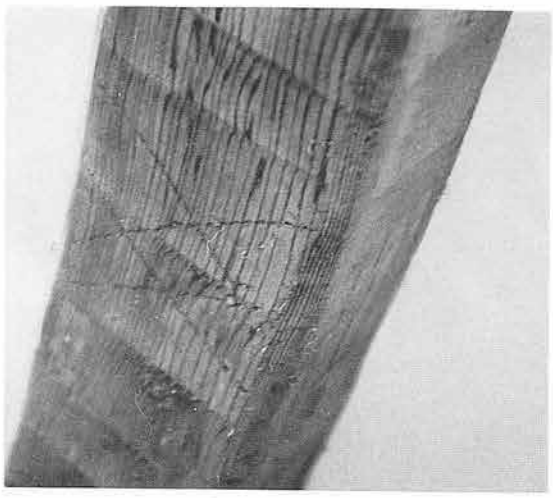
PL.16



◀A．南北大溝Nトレンチ
南北木組（東から）

◀B．同上．柱（南から）

▼同上．柱に刻みが観察される。



◀A. 南北大溝Sトレンチ（合成写真）

▶B. 南北大溝Sトレンチ南壁セクション（合成写真）

PL.18

◀A．南北大溝Sトレンチ（西から）

▶B．同トレンチ（東から）

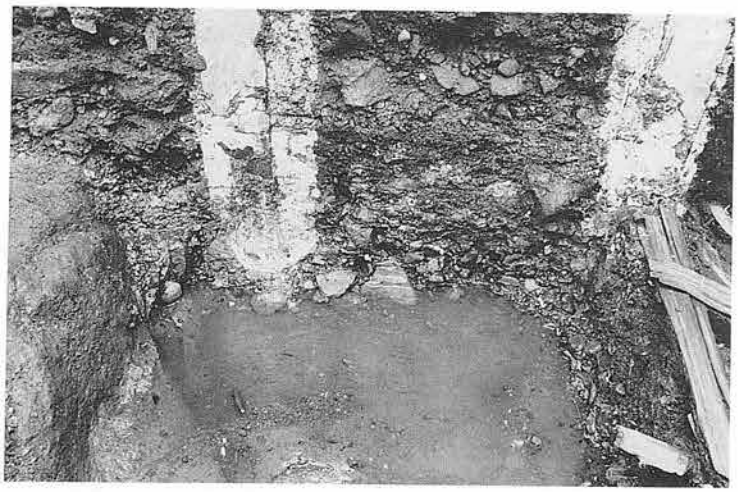
▲C．同トレンチ（南から）

▲A．南北大溝Sトレンチ木組（西から）

▼B．同上（北から）

PL.20

◀A．南北大溝Sトレンチ南壁
溝Ⅰ堆積土層（北から）



◀B．同上
溝Ⅱ堆積土層（北から）

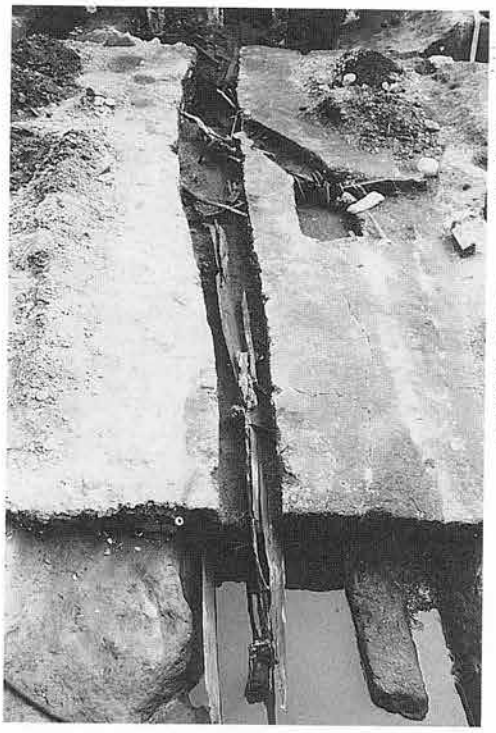
◀C．同上
溝Ⅲ堆積土層（北から）

◀A．南北大溝ＮＳトレンチ（南から）
手前がＳトレンチである。

▶B．同上（南から）

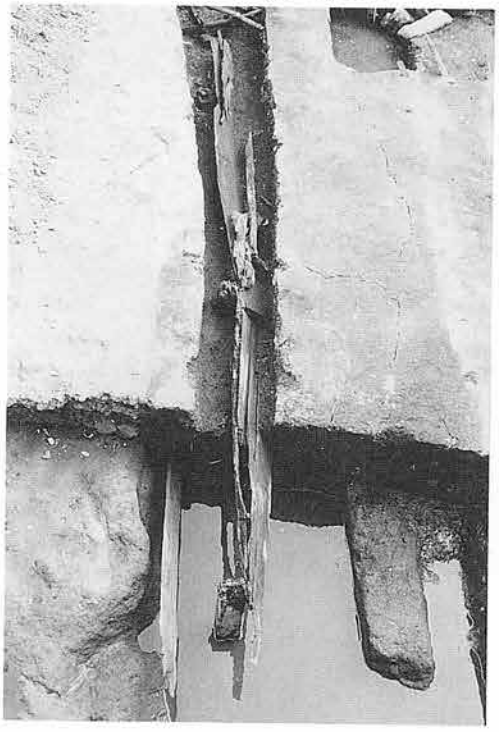
◀C．同上，部分（東から）

PL.22

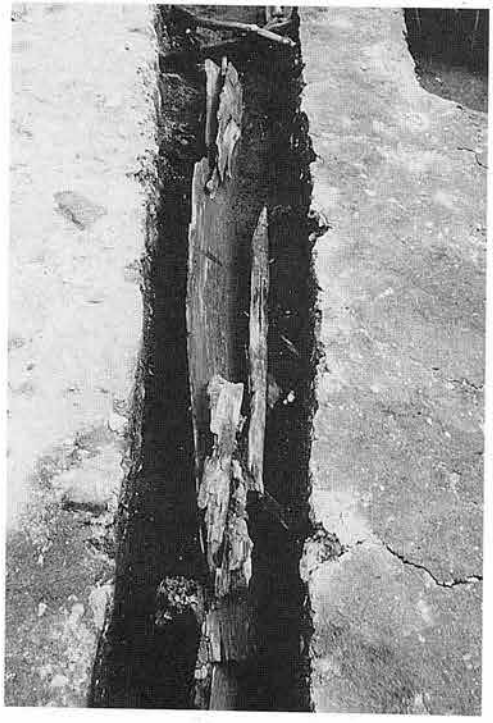


◀A．南北大溝NSトレンチ（北から）

▼B．同左，部分（北から）

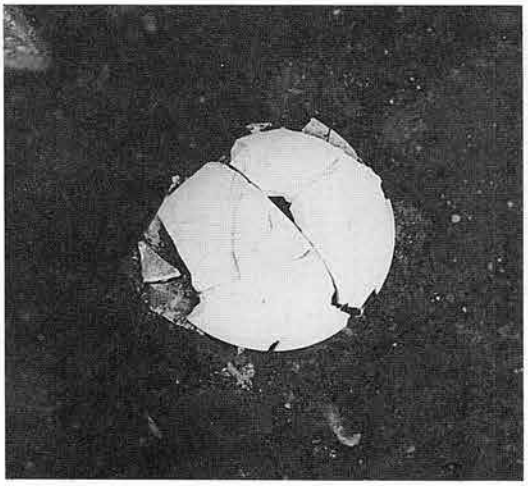


▼C．同上，部分（北から）



▼D．同左，部分（北から）

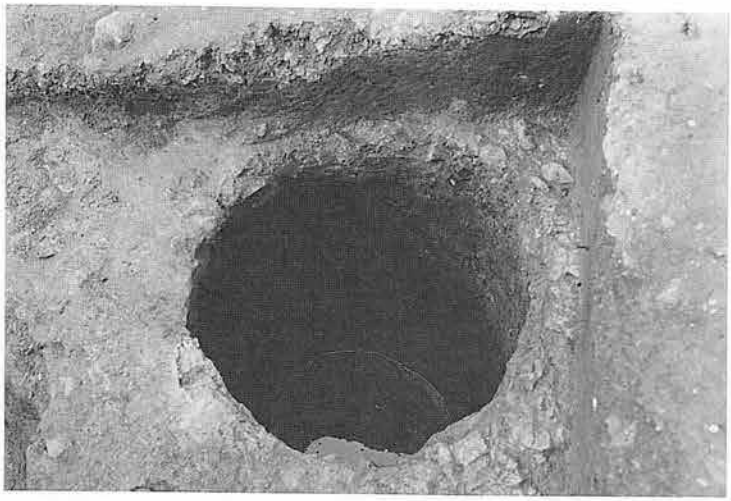
▲A．道路区全景（北から）
Pit 及び土壙は全て攪乱



▲B．地鎮遺物出土状況（西から）
白かわらけが合わせ口状態で出土

▲C．同左，覆せてある白かわらけをはずした状況。中には「寛永通宝」が7枚入っていた。

PL.24



▲A．道路区土壙（南から）

▲B．同上，覆土堆積状況（北から）

◀A．道路全景（南から）

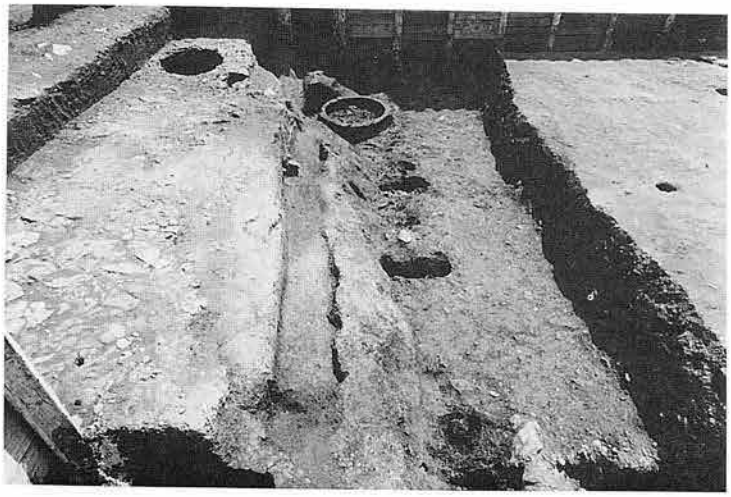
◀B．道路全景（西から）

◀C．道路サブトレンチ
（北から）

PL.26

▲A．溝Ⅴ，Ⅵ及び道路西部検出状況
（南から）

▼B．同左　（南から）



◀C．同上　（北から）

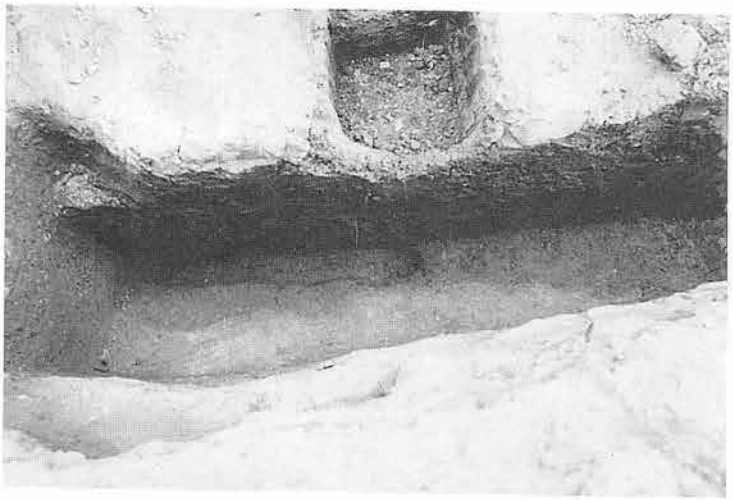
▶A．道路Nトレンチ（東から）

▼B．同トレンチ内、溝A，B検出状況（南から）

◀C．同上検出木材（南から）

PL.28

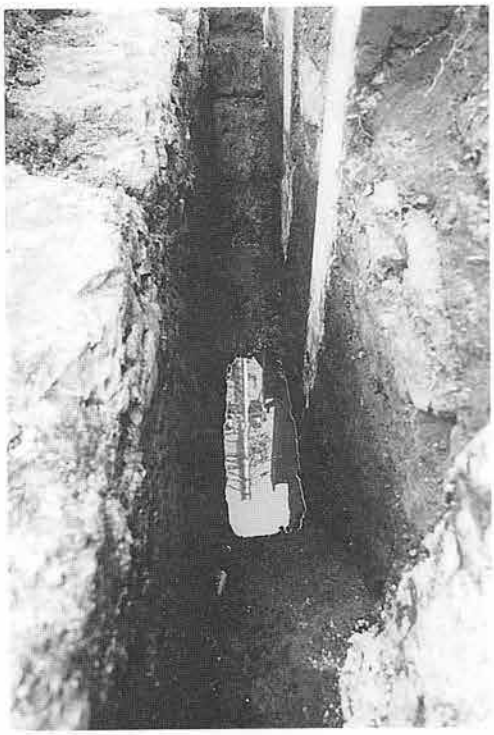
◀A．道路Nトレンチ
溝C（南から）



◀B．道路Nトレンチ
中世以前の凹地
（北から）

◀C．同トレンチ北壁
道路地業状況（南から）

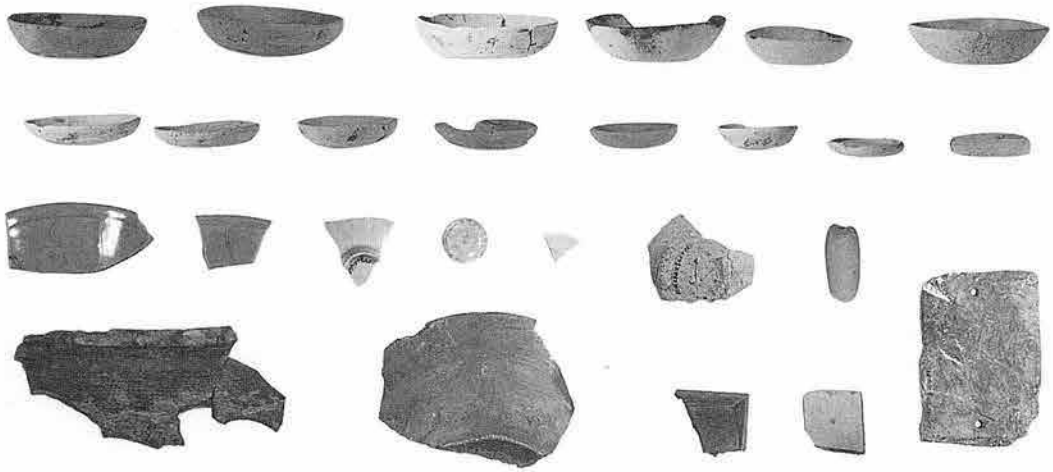
◀A．道路Sトレンチ（東から）



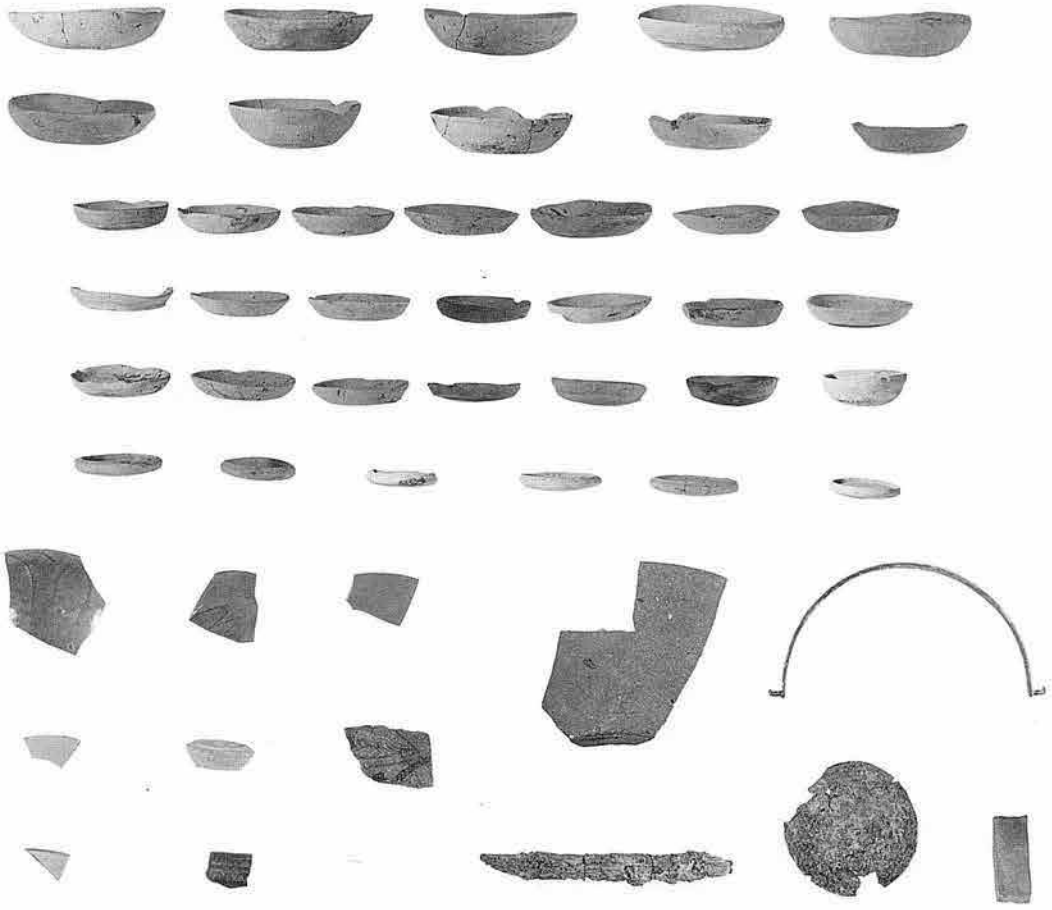
▶B．同トレンチ，溝A，B（西から）

◀C．同トレンチ南壁堆積土層（北から）

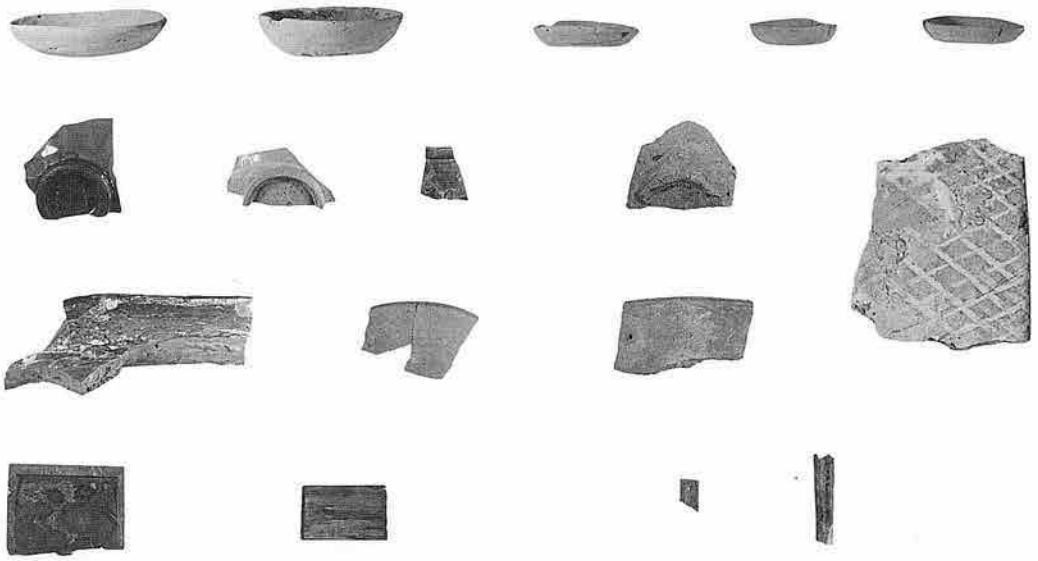
PL.30



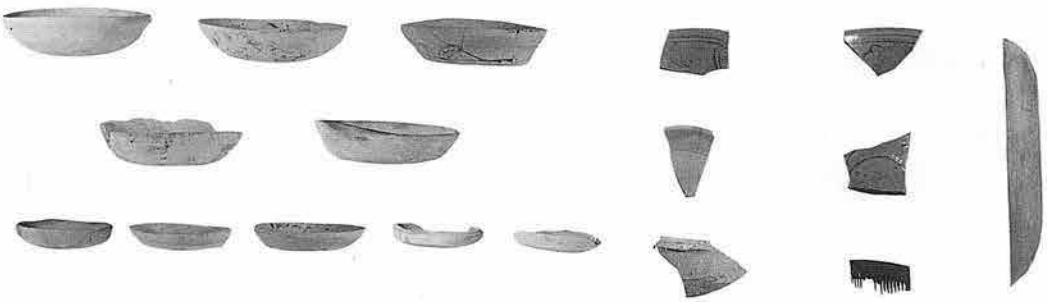
▲A．第一面面上出土遺物



▲B．かわらけ溜り出土遺物



▲A．第二面面上出土遺物

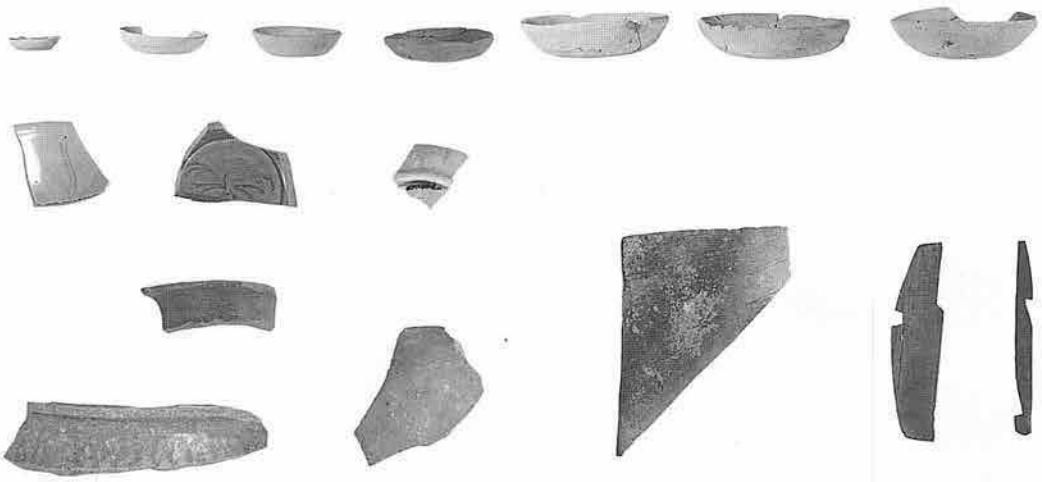


▲B．東西溝出土遺物

▲C．井戸出土遺物

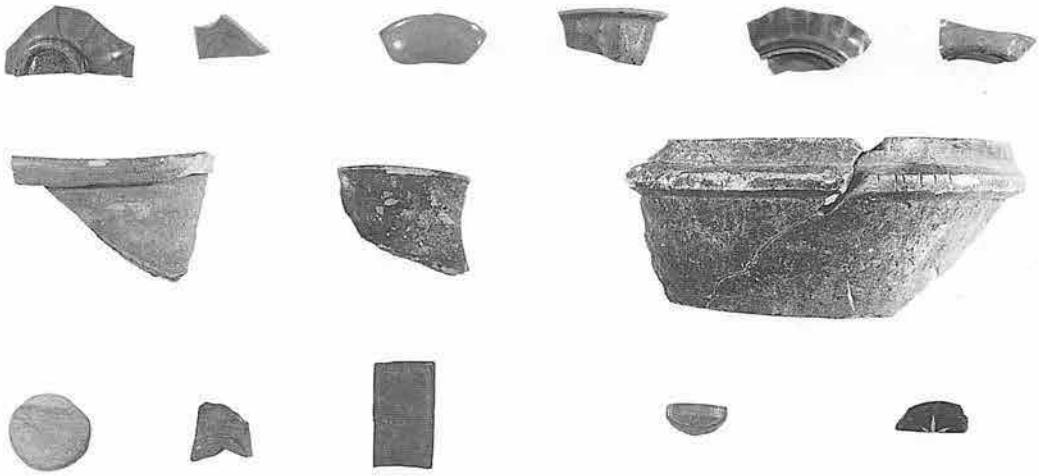
PL.32

▲南北大溝内出土遺物



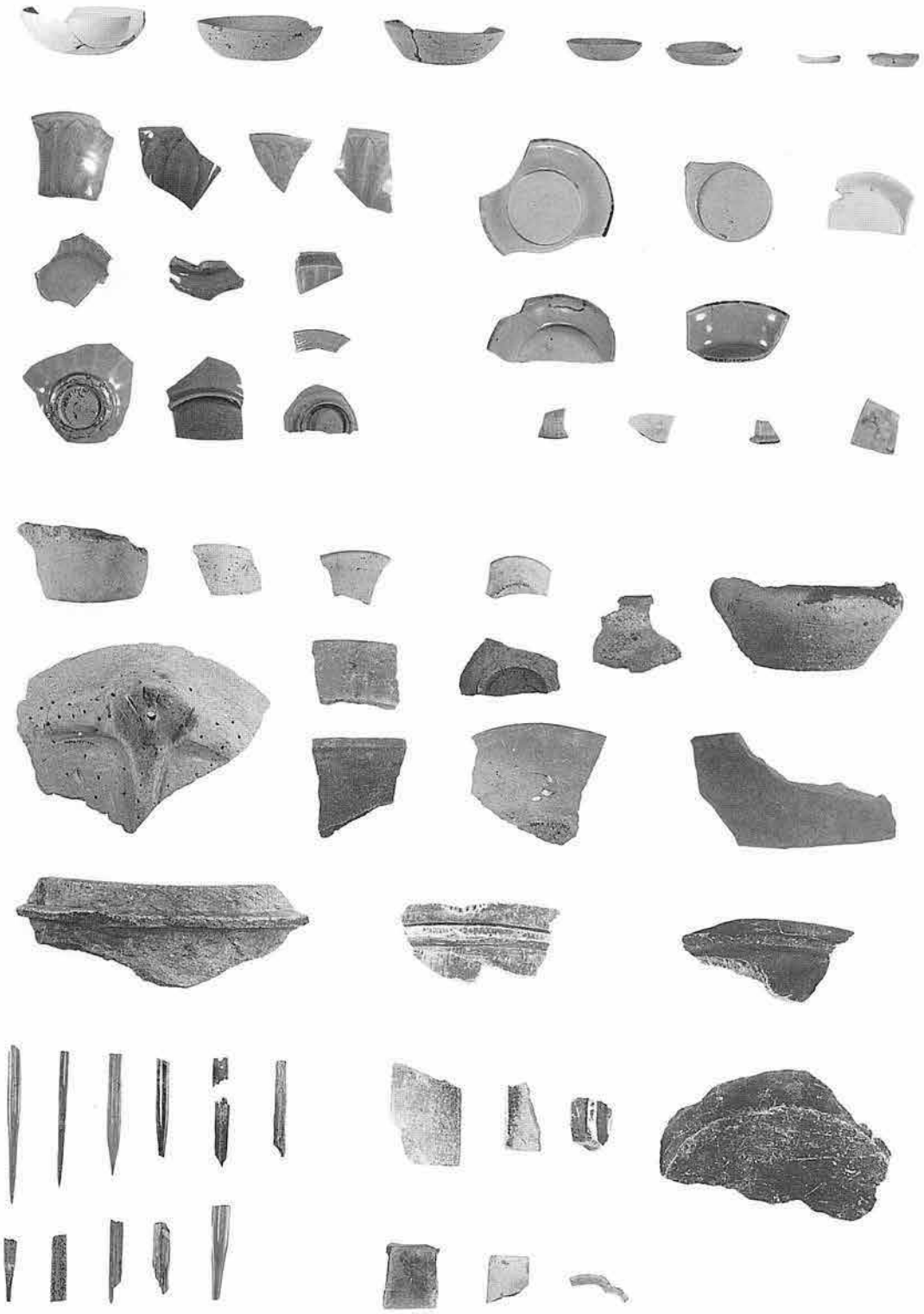
▲A．溝Ⅰ出土遺物

▲B．溝Ⅱ出土遺物

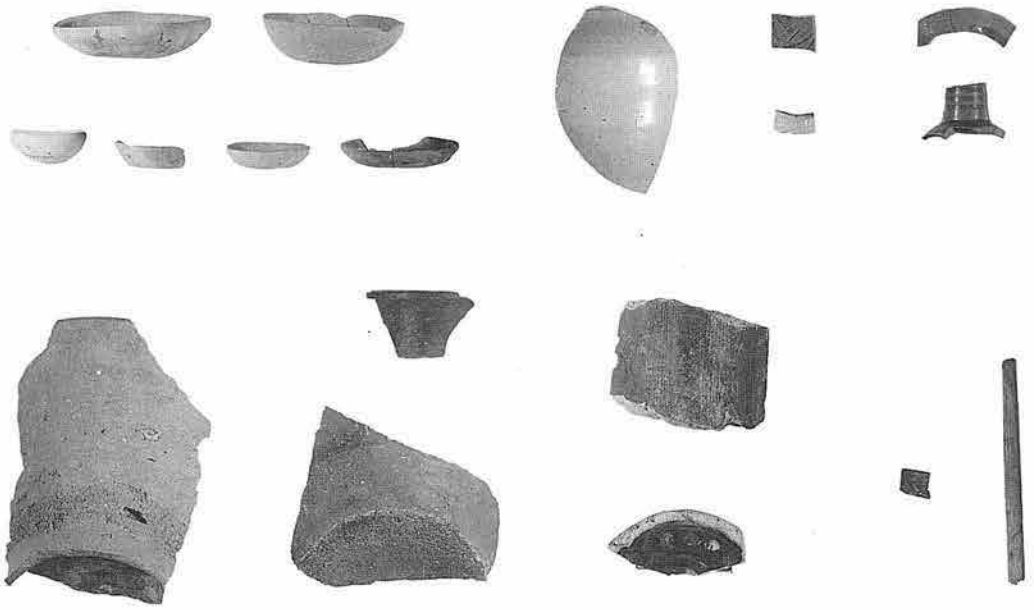


▲C．溝Ⅳ出土遺物

PL.34

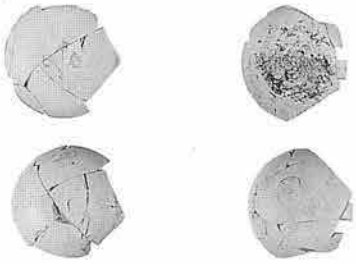


溝III出土遺物



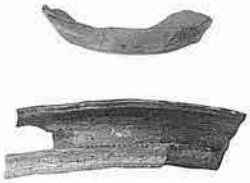
▲A．溝Ⅴ出土遺物

▲B．溝Ⅵ出土遺物



▲C．地鎖遺物

▲D．道路面上出土遺物



▲E．溝A，B出土遺物

2．政　　所　　跡（No.247）

雪ノ下三丁目965番地点

例　言

1．本報は政所跡内の鎌倉市雪ノ下三丁目965番に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施し、調査期間は平成２年10月14日から11月６日までである。

3．本報の執筆、編集は瀬田哲夫が行なった。尚、附篇は（株）パレオ・ラボに委託したものである。

4．調査体制は下記の通りである。

主任調査員　手塚直樹
調　査　員　瀬田哲夫
調査補助員　滝田薫、大沼真理、小柳津シゲコ、明木文吾、菊地正明、渡部徹
調査協力者　鎌倉市高齢者事業団

5．本報に使用した写真は遺構を瀬田が、遺物を手塚、瀬田が撮影し、遺跡遠景は（株）シン航空写真に依頼したものである。

6．本文中で使用されている「政所Ｉ地点」とは雪ノ下三丁目987番１・２地点、「政所II地点」は雪ノ下三丁目966番１地点、「政所III地点」は本調査地点のことである。

7．本遺跡の出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　次

本文目次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 137
第二章　調査経緯と堆積土層 …… 140
　第1節　調査経緯 …… 140
　第2節　堆積土層 …… 141
第三章　検出遺構 …… 142
　第1節　Iトレンチ検出遺構 …… 142
　第2節　IIトレンチ検出遺構 …… 142
　第3節　IIIトレンチ検出遺構 …… 145
　第4節　IVトレンチ検出遺構 …… 145
第四章　出土遺物 …… 148
　第1節　Iトレンチ出土遺物 …… 148
　第2節　IIトレンチ出土遺物 …… 152
　第3節　IIIトレンチ出土遺物 …… 153
　第4節　IVトレンチ出土遺物 …… 157
　第5節　近世陶磁器 …… 158
第五章　まとめと考察 …… 160
《附篇》政所跡溝内堆積物の花粉化石 …… 163

挿図目次

Fig. 1　遺跡周辺地図…… 138
Fig. 2　グリット割付図 …… 140
Fig. 3　標準土層模式図 …… 141
Fig. 4　Iトレンチ平面図、堆積土層図 … 143
Fig. 5　IIトレンチ平面図、堆積土層図 … 144
Fig. 6　IIIトレンチ平面図、堆積土層図 … 146
Fig. 7　IVトレンチ平面図、堆積土層図 … 147
Fig. 8　Iトレンチ出土遺物 …… 149
Fig. 9　IIトレンチ出土遺物 …… 151
Fig. 10　IIIトレンチ出土遺物（1）　153
Fig. 11　IIIトレンチ出土遺物（2）　154
Fig. 12　IVトレンチ出土遺物 …… 156
Fig. 13　遺構配置、土層模式図 …… 160
Fig. 14　政所II、III地点概念図 …… 161

写真図版目次

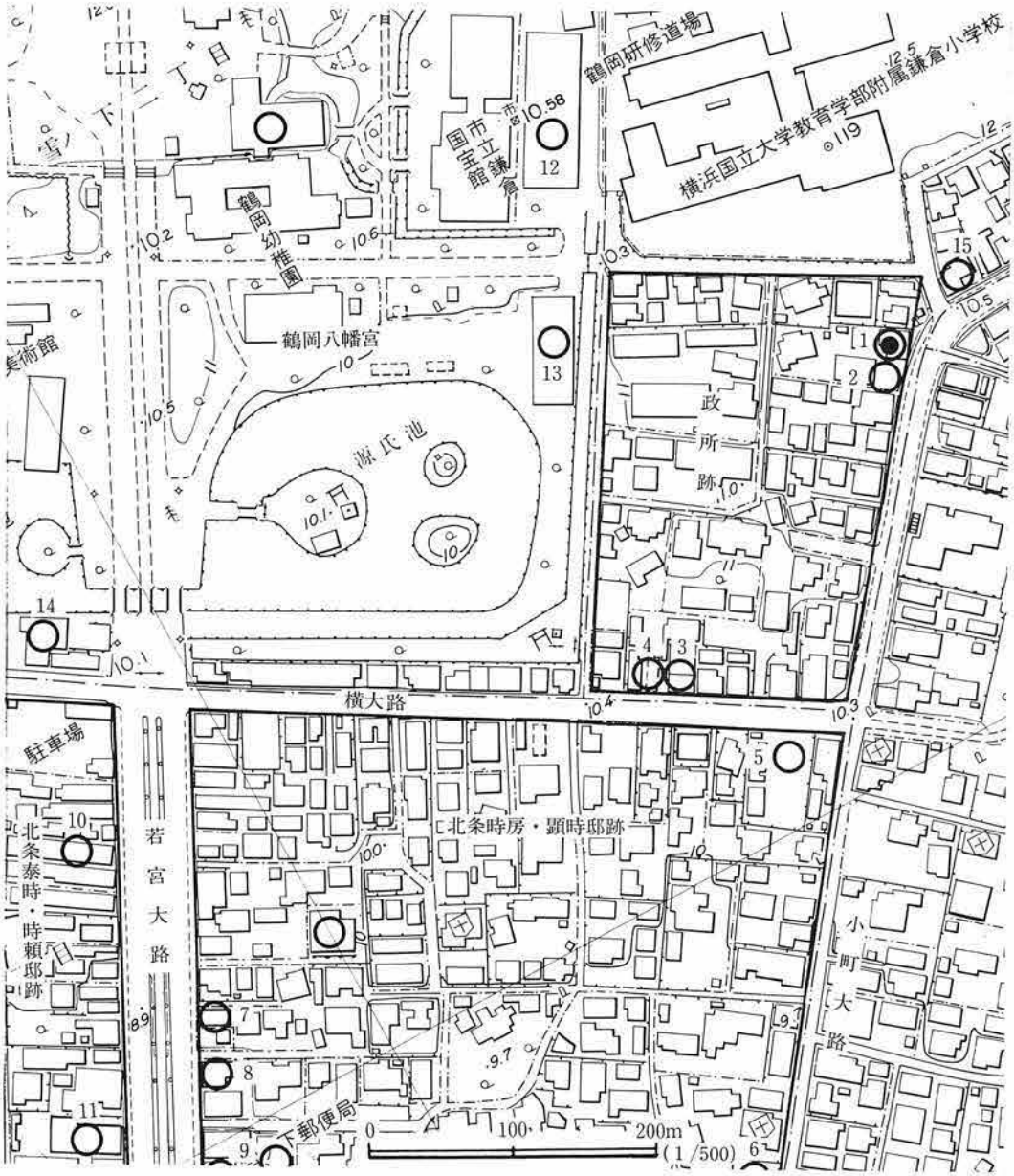
PL.1 A. 調査地点遠景（北から）
B. 調査地点近景（東から）
PL.2 A. Ⅰトレンチ全景（南から）
B. Ⅰトレンチ北壁土層堆積（南から）
C. Ⅰトレンチ南壁土層堆積（北から）
D. Ⅰトレンチ東壁土層堆積（西から）
PL.3 A. Ⅱトレンチ全景（南から）
B. Ⅱトレンチ全景（南から）
C. Ⅱトレンチ全景（南から）
PL.4 A. Ⅱトレンチ北深掘り箇所（北から）
B. Ⅱトレンチ北壁土層堆積（南から）
C. Ⅱトレンチ調査風景スナップ
PL.5 A. Ⅱトレンチ南深掘り箇所（南から）
B. Ⅱトレンチ南壁土層堆積（北から）
C. Ⅱトレンチ東壁土層堆積（西から）
PL.6 A. Ⅲトレンチ上層道路地業（南から）
B. Ⅲトレンチ上層道路地業（南から）
C. Ⅲトレンチ下層道路地業（南から）
D. Ⅲトレンチ下層道路地業（南から）
PL.7 A. Ⅲトレンチ近世土壙1（西から）
B. Ⅲトレンチ溝B（北から）
C. Ⅲトレンチ北壁土層堆積（南から）
PL.8 A. Ⅲトレンチ溝A、B（南から）
B. Ⅲトレンチ南壁土層堆積(北から)
C. Ⅲトレンチ道路地業断面（西から）
PL.9 A. Ⅳトレンチ全景（南から）
B. Ⅳトレンチ北壁土層堆積（南から）
C. Ⅳトレンチ井戸覆土堆積（東から）
D. Ⅳトレンチ井戸全景（南から）
PL.10 A. Ⅳトレンチ南深掘り箇所（南から）
B. Ⅳトレンチ南壁土層堆積（北から）
C. Ⅳトレンチ近世土壙2（東から）
PL.11 A. Ⅳトレンチ北部東拡張区（南から）
B. Ⅳトレンチ溝D土層堆積（南から）
C. Ⅳトレンチ南部東拡張区（南から）
PL.12 政所跡溝内堆積物中の花粉化石
PL.13 政所跡溝内堆積物中の花粉化石
PL.14 出土遺物（1）
PL.15 出土遺物（2）
PL.16 出土遺物（3）
PL.17 出土遺物（4）
PL.18 近世陶磁器（1）
PL.19 近世陶磁器（2）

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は「政所跡」として神奈川県遺跡台帳No247に記載されている区域の小町大路沿い北部に位置する。地番は鎌倉市雪ノ下三丁目965番である。本調査地点の北東は大倉幕府、西側は鶴岡八幡宮、そして横大路をはさんだ南側は「北条泰時、時頼邸（同台帳No.282）」の区域となる。また、本「政所跡」区域の北東角には「筋替橋」の石碑が建てられている。

政所は親王家、摂関家、有力寺社などの家政事務機関として生まれたものである。鎌倉幕府の政所は源頼朝が公家の政所にならい、公文所のほかに設置して幕府の財政、市政、訴訟など庶務一般を司った機関である。職制は別当、令、案主、知家事等により構成され、初め大江広元が別当となり、まもなく北条氏に移り執権兼任の職となった。令は一般に執事と呼び二階堂氏が世襲した。室町幕府の政所は財政を掌り、金穀、田畑、貸借の訴訟を取り扱い、執事の下に執事代、政所代、寄人、公文等の諸役があり、執事の職は伊勢氏が世襲し、政所代はその被官である蜷川氏が担当した。鎌倉幕府の政所の初見は『吾妻鏡』の文治元年（1185）９月５日の条の記載であり、それ以前の元暦元年（1184）８月、公文所新造の時に共に設置されたと推定される。（註１）『吾妻鏡』建保元年（1213）５月２日の条によると和田義盛の兵が大江広元の邸の門に到り矢戦をし、そののち横大路に到り、御所の南西政所の前で御家人等がこれを支えたとある。そして横大路に注して御所の南西の道なりと記している。また、『金沢文庫古文書』の「随求法」の奥書に元応三年（1321）２月５日、相州鎌倉塔ノ辻の政所の東庇で書いたとある。鎌倉市史では塔ノ辻は横大路と小町大路との交叉点であるとしており、以上のことから政所は八幡宮の東、横大路の北、小町大路の西、鶴岡八幡宮の唐門から筋替橋へ抜ける道の南の一帯と考えられる。また、『吾妻鏡』の記載から政所は承久元年（1219）２月から元弘三年（1333）５月までの間に六度焼失していることが知られる。また、「筋替橋」は『吾妻鏡』には「須知替橋」「須地賀江橋」とも記されており、同書の文永二年（1265）３月５日の条では町屋免許地の１つとして名を挙げられている。

政所跡では今までに３箇所で調査が行なわれており（Fig.1－１～３）、いずれの調査地点からも、横大路、小町大路と並走関係にある大溝、或いは道路地業などが検出されている。しかし、内郭部分にはほとんど調査範囲が及ばず、掘立柱建築址、柵列状の柱穴等を検出しただけであり、政所中枢域を思わせるような遺構は検出されていない。しかし、政所Ｉ地点（Fig.1－３）に於いては東西大溝の北側に構築された土塁が確認されており、この一帯に公的機関が存在していたことを示唆している。現在（1992年１月６日）、政所Ｉ地点に西隣する雪ノ下三丁目988番地点（Fig.1－４）に於いて調査が行なわれており、かわらけ溜り、柱穴等を検出している。今後、土塁、溝等についての新知見が得られることであろう。また、鶴岡八幡宮研修道場用地（Fig.1－12）及び源平茶屋地点（Fig.1－13）の調査では八幡宮東側における鎌倉時代初期の曲線的な三方堀と、それ以降の直線的な土塁が検出されている。この土塁は13世紀中期以降に整備され、14世紀の規模は幅約



1．雪ノ下三丁目966番地点（本調査地点）
2．雪ノ下三丁目966番１地点
3．雪ノ下三丁目987番１・２地点
4．雪ノ下三丁目988番地点
5．雪ノ下一丁目395番地点
6．雪ノ下一丁目432番２地点
7．雪ノ下一丁目371番１地点
8．雪ノ下一丁目372番７地点
9．雪ノ下一丁目369番地点
10．雪ノ下一丁目293番１地点
11．雪ノ下一丁目271番１地点
12．鶴岡八幡宮境内遺跡（研修道場用地）
13．鶴岡八幡宮境内遺跡（源平茶屋）
14．鶴岡八幡宮境内遺跡（銀杏用地）
15．雪ノ下三丁目606番１地点

Fig.1　遺跡周辺地図

10m、高さ約2mを測り居館等の外堀と同様に防備施設としての役割が多分にあったものと考えられる。

北条泰時、時頼邸では既に8箇所（Fig.1－5～9他）で調査が実施され、若宮大路、小町大路、横大路とそれぞれ並走関係にある大溝や掘立柱建築址、柵列状の柱穴列、井戸、土壙等が検出されている。また、若宮大路をはさんだ西側の「北条時房、顕時邸跡（同台帳No278）」でも既に5箇所（Fig.1－10～11他）の調査が行なわれており、若宮大路の西側を流れる南北大溝や礎石建物、掘立柱建築址、柵列状の柱穴列、板囲い建物（長屋状を呈する建物）、井戸、土壙等を検出している。両邸跡区域では土塁は確認されていない。

本調査地点は先に調査を終了した南隣する政所II地点（雪ノ下三丁目966番1地点）と共通する点が多いが、道路、南北溝の主軸方位等について新たな知見を得ることができた。政所跡と推定される当該地域については今後の調査、研究の蓄積により、諸施設の構造、規模、区画等の解明が成されることであろう。

註1.『鎌倉市史　総説編』　高柳光寿。1959年。吉川弘文館。P172～173による。

＜参考文献＞

『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1～7』　鎌倉市教育委員会。1985～1991年。
『政所跡』　政所跡発掘調査団。1991年。
『鶴岡八幡宮境内研修道場用地発掘調査報告書』　同調査団。1983年。
『北条時房・顕時邸跡』　同発掘調査団。1988年。
『北条時房・顕時邸跡』同発掘調査団。1989年。
『北条泰時・時頼邸跡』　同発掘調査団編。鎌倉市教育委員会発行。1985年。
『鎌倉市史　総説編』　高柳光寿。吉川弘文館。1959年。
『鎌倉事典』　白井永二編。東京堂出版。1986年。
『鎌倉武家事典』　出雲隆編。青蛙房。1972年。
『大系日本の歴史5　鎌倉と京』　五味文彦。小学館。1988年。
『よみがえる中世3　武家の都鎌倉』　石井進、大三輪龍彦編。平凡社。1989年。

第二章　調査経緯と堆積土層（Fig.2、3）

本章においては調査の経緯と、検出された標準となる堆積土層についての概略を述べる。

第Ⅰ節　調査経緯（Fig.2）

本調査は自己用店舗併用住宅建設に伴なう国庫補助事業調査として、布基礎区域部分にあたる4箇所に東西約1.5m、南北約9.0mのトレンチを設定した。トレンチの名称は西から順にⅠ～Ⅳトレンチであり、掘削深度は現地表から約0.8mである。また、各トレンチの北部及び南部は杭打箇所であり、1.5m四方の枡掘りを実施し、中世地山の確認を行なった。掘削深度は現地表から約1.8mである。さらに、Ⅳトレンチ東部に於いては、事業主の御理解を頂き、中世道路地業の確認のために東西約1.0m、南北約1.0mの2箇所の拡張区を設定した。掘削は現地表下40～50cmまでは現代の客土、撹乱と判断し重機により行ない、以下、掘削深度までは人力によった。平成2年10月14日より重機を導入して調査を開始し、11月6日に器材を撤収して現地作業を終了した。調査総面積は約70m²である。

調査にあたり、地境a、bを結んだ直線を南北基準軸とし、　地境aから西へ90°振り、西へ22mの地点をA－5グリットポイントとした。東西軸には西から東へ向けてアルファベット（A～F）を、南北軸には北から南へ向けて算用数字（1～6）を付し、調査対象の敷地内に2.0mの方眼を配した。各々の方眼区画の名称には、その北西角の軸線交点を充てた。また、南北軸線と磁北との偏差はN－48°47′－Wである。

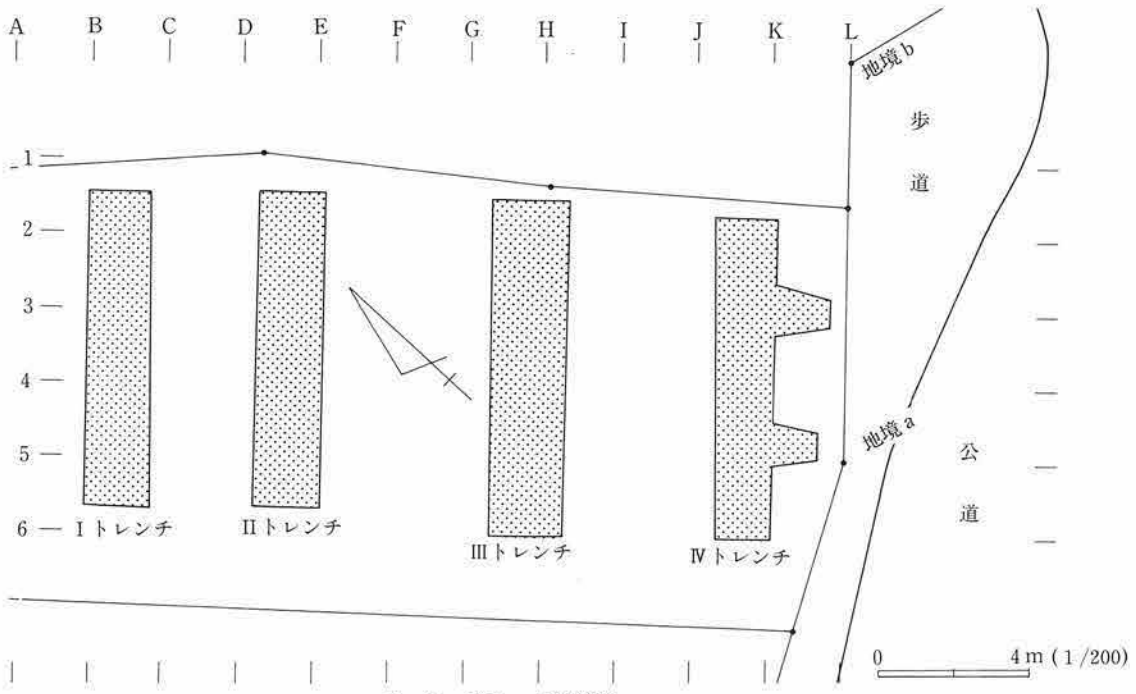


Fig.2　グリット割付図

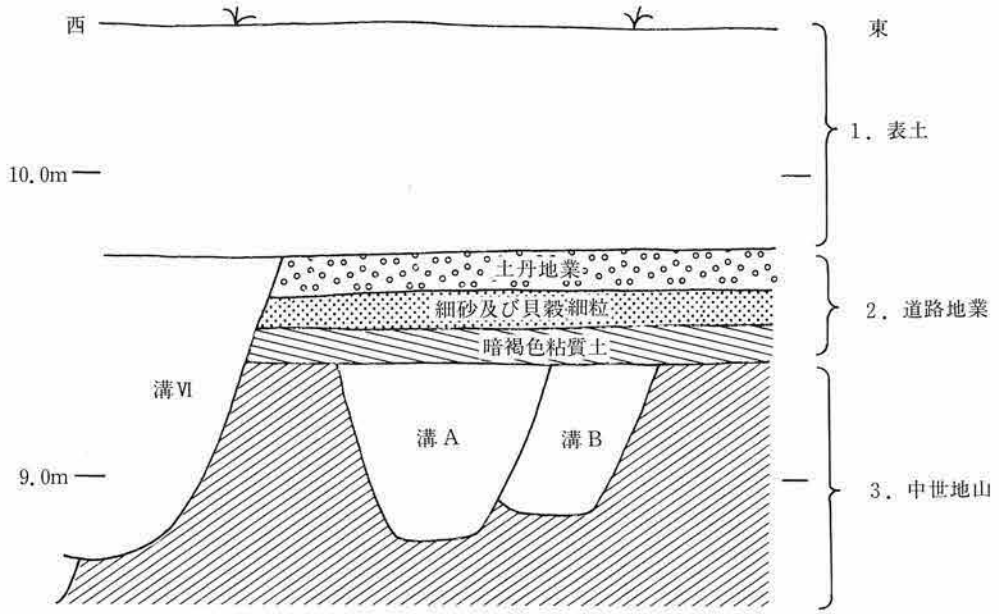


Fig.3　標準土層模式図

第2節　堆積土層 (Fig.3)

本調査地点において標準となる堆積土層は、およそ次の3層に分けることができる。

第1層は表土層であり、近、現代の客土、攪乱である。現地表下に40～50cm程堆積している。

第2層は中世道路地業層である。土丹地業、暗褐色粘質土、細砂及び貝殻細粒による地業、暗褐色粘質土による地業により構成される。II、IIIトレンチにおいて検出されたが、IVトレンチでは検出されていない。また、II、IIIトレンチにおいては2時期の造り替えが考えられるが遺存状態は悪い。

第3層は中世地山に相当する黒褐色粘質土である。夾雑物を一切含まず、しまり良好である。

Iトレンチにおける堆積土は表土を除き全て南北大溝覆土であり、掘削深度である海抜8.70mまで掘り下げても地山は検出し得なかった。地山検出レベルは調査区内においてほぼ9.30mである。

IIトレンチでは道路地業の西側を南北に走る溝Ⅵを検出した。覆土には土丹、遺物片を多量に含み、水摩した遺物片を含む層も検出している。

IIIトレンチでは道路地業の下から南北方向の溝（溝A、B）を検出した。この溝の覆土は道路西の南北大溝のものと異なり、暗褐色粘質土を主体としたものであり、出土遺物も少ない。

また、IIIトレンチでは海抜約9.70mで道路地業の土丹層を検出しているがIVトレンチにおいては同レベルまで掘り下げても検出されていない。堆積土層からもII、IIIトレンチと同様の道路地業は観察されず、さらに2箇所の東拡張区においても検出されなかった。また、IVトレンチ北部の東拡張区ではIIIトレンチ検出の溝A、Bと覆土が類似する遺構（溝？）を検出したが、南拡張区では検出していない。

第三章　検出遺構（Fig. 4 ～ 7）

本章では各トレンチにおいて検出された遺構についてトレンチ別に説明を加えていく。トレンチの名称は西から順にⅠ～Ⅳトレンチと称する。尚、各トレンチの説明で用いる土層番号は個々のものであり参照されたい。また、「政所Ⅱ地点」とは本調査地点の南に隣接する雪ノ下三丁目966番1地点のことである。

第Ⅰ節　Ⅰトレンチ検出遺構（Fig. 4）

ⅠトレンチはB－1～5グリットに位置する。表土攪乱はトレンチ中央付近では浅く、現地表下20cm程であり、トレンチ北部で50cm程である。表土下は中世遺物包含層となる。堆積土は褐色系の粘質土に土丹粒、貝殻粒、遺物片等を含んだものであり、中には粗砂及び水摩した土丹、遺物片を含む土層も観察された。表土以外は全て政所Ⅱ地点において検出された中世道路遺構の西側を流れる南北大溝の覆土であることが判明した。おそらく溝Ⅳ及び溝Ⅴのものであると考えられる。北、南深掘り箇所においては海抜8.70mまで掘削を行なったが中世地山である黒褐色粘質土、もしくは黄灰色砂、灰緑色粘質土は検出されていない。

第2節　Ⅱトレンチ検出遺構（Fig. 5）

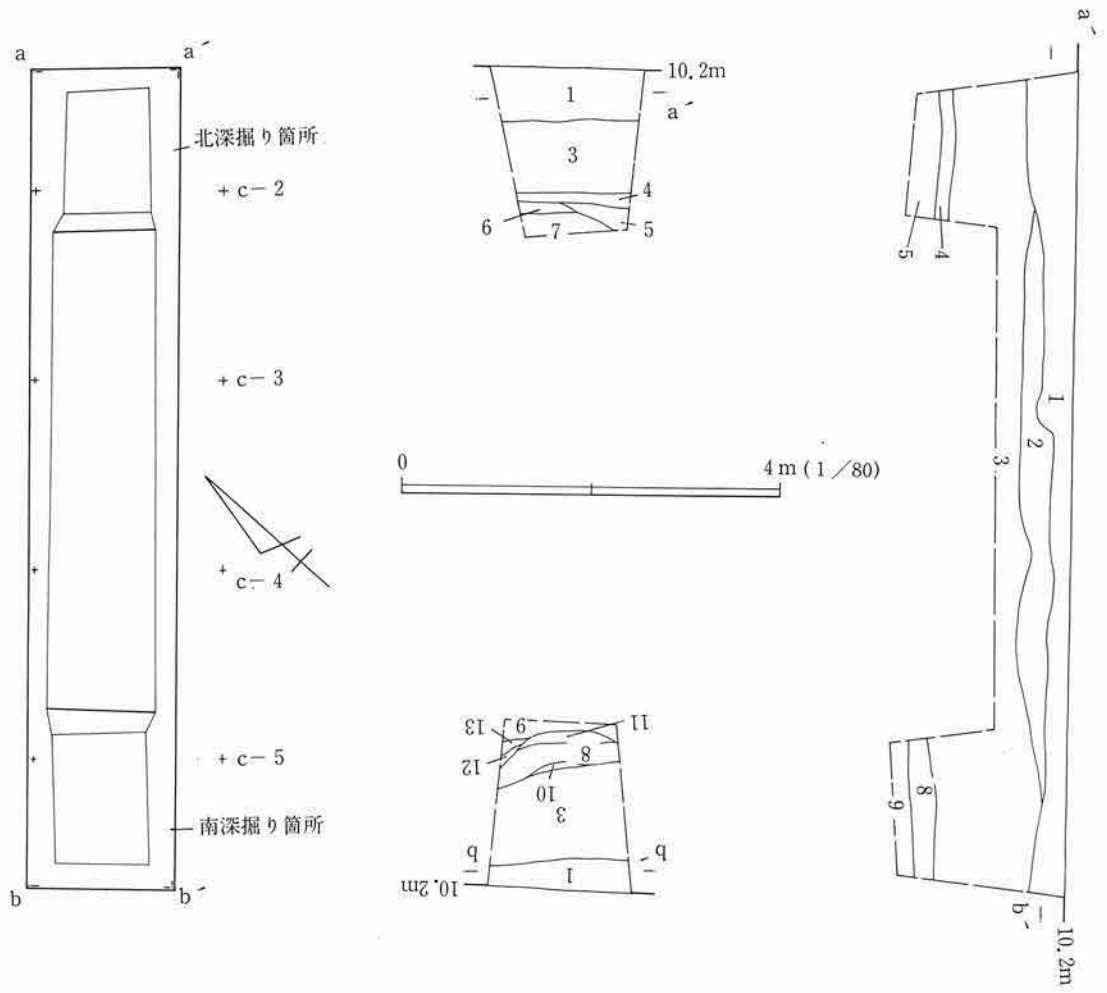
ⅡトレンチはD－1～5グリットに位置する。表土攪乱はトレンチ中央部で30cm程と浅く、南部、北部では60cm程である。トレンチ北東隅では現代の井戸掘り方により攪乱されている。

トレンチ東部において現地表下約80cmで中世道路地業である土丹版築を検出した。この土丹地業はトレンチ北壁において海抜9.80m、南壁で9.60mであり、南に向かって緩く傾斜しており、また、東から西へも緩く傾斜しているようである。道路地業を構成しているのは土丹層（9層）、細砂及び貝殻粒混じりの暗褐色粘質土層（10層）、暗褐色粘質土層（11層）であり、各層は4～6cm程の厚さで堅く版築されている。また、トレンチ東壁で確認された5～8層も道路地業と考えることができるが、検出範囲も狭く、9～11層に比べ，しまりも弱く、明確な版築ではない。

道路地業の西側では南北方向の溝が検出された。これは政所Ⅱ地点において検出された溝Ⅵである。溝覆土は暗褐色粘質土及び中、小土丹により埋められている。掘り方は確認できる上端で幅約80cm、下端で幅約30～40cm、深さ約60cmであり、溝底のレベルはトレンチ北壁で9.30m、南壁で9.25mであり、南に向かい緩く傾斜している。

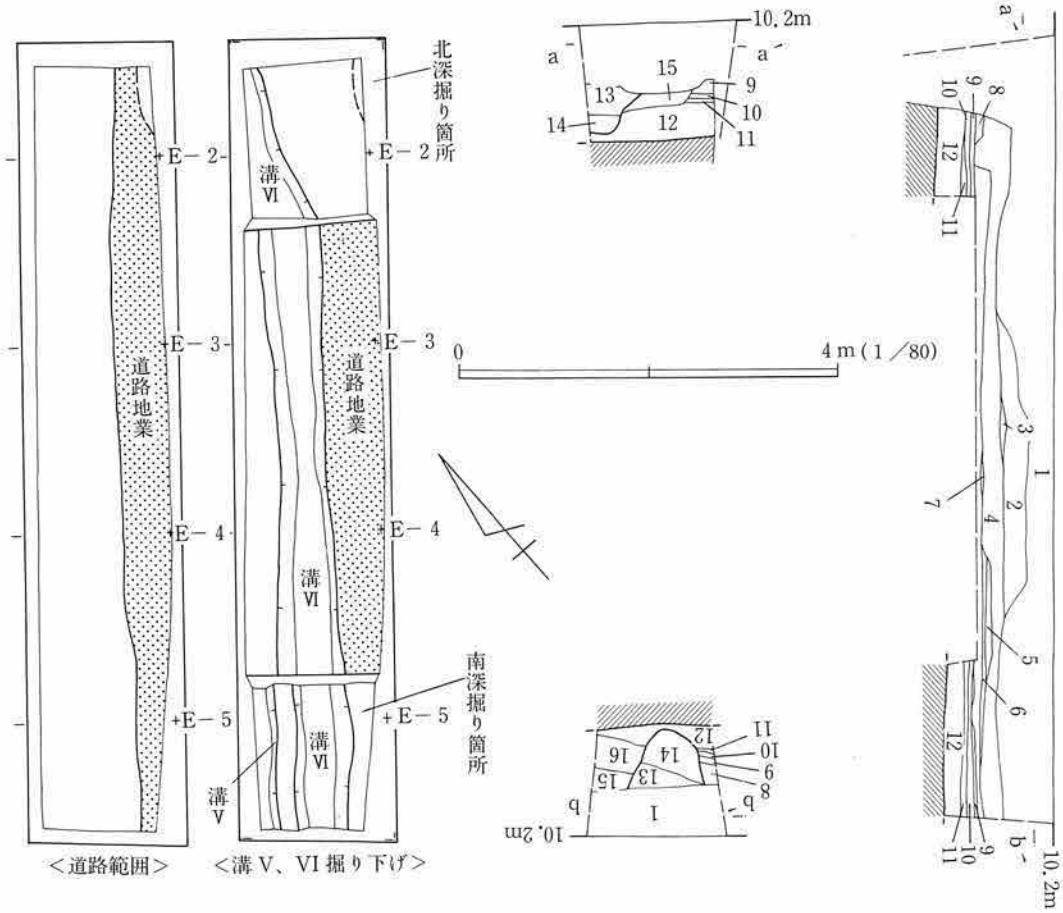
溝Ⅵの西側は政所Ⅱ地点で検出された溝Ⅴの覆土となる。溝覆土は灰褐色粘質土であり、中、小土丹を混入する。溝Ⅴは東から西への緩い傾斜を検出したにすぎないが、トレンチ南壁、北壁セクションから、トレンチ南北軸とほぼ並走している可能性が強い。しかし、溝Ⅵはトレンチ北深掘り箇所に於いて流れを西に向けていることがわかる。

中世地山である黒褐色粘質土の検出レベルはトレンチ南壁、及び北壁で9.20mである。



1．表土。
2．灰褐色粘質土。土丹粒、炭化物、かわらけ片を混入する。
3．灰褐色粘質土。貝殻粒を多量に含む。土丹、炭化物を混入する。
4．褐色粘質土。土丹粒、かわらけ片を多量に含む。しまり良好。
5．灰褐色粘質土。土丹粒、粗砂、炭化物を含む。しまり弱い。
6．灰褐色粘質土。炭化物を多量に含む。水摩した土丹、遺物を含む。
7．褐色粘質土。　土丹、粗砂、炭化物を含む。
8．灰褐色粘質土。土丹、炭化物、貝殻粒を含む。しまり弱い。
9．暗褐色粘質土。土丹粒、粗砂、炭化物、木片を含む。
10．暗褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。しまり弱い。
11．暗褐色粘質土。木片、炭化物、貝殻粒を含む。しまり良好。
12．灰褐色粘質土。土丹粒、貝殻粒を含む。
13．暗褐色粘質土。土丹粒、粗砂混入する。しまり弱い。

Fig.4　Ⅰトレンチ平面図、堆積土層図



1. 表土
2. 灰褐色粘質土。土丹粒を含む。
3. 灰褐色粘質土。土丹細粒、炭化物を混入する。
4. 褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。しまり良好。
5. 暗褐色粘質土。土丹粒、かわらけ片、炭化物を含む。
6. 暗褐色粘質土。土丹細粒を含む。
7. 暗褐色粘質土。土丹粒を含み、しまり良好。
8. 明褐色粘質土。土丹細粒、かわらけ片、炭化物を含む。しまり良好。

道路地業
9. 土丹地業。
10. 暗褐色粘質土。細砂及び、貝殻細粒による地業。
11. 暗褐色粘質土。

溝Ⅵ
12. 暗褐色粘質土。ごく少量の炭化物を含む。
13. 暗褐色粘質土。土丹粒、かわらけ片を含む。
14. 暗褐色粘質土。土丹、土丹粒を含む。

溝Ⅴ
15. 灰褐色粘質土。土丹粒を多量に含む。炭化物混入する。
16. 灰褐色粘質土。土丹粒、遺物を含む。しまり良好。
17. 黒褐色粘質土。中世地山

Fig.5　Ⅱトレンチ平面図、堆積土層図

第3節　Ⅲトレンチ検出遺構（Fig. 6）

Ⅲトレンチは G～H－1～5 グリットに位置する。表土撹乱は現地表下60cm程である。G－4～5 グリットにおいて海抜9.80mで土丹地業層を検出した。トレンチ内の撹乱が激しく全体の広がりを把むことはできなかったが、6、7層を道路地業の構成土と考えることができる。トレンチ北部深掘り箇所では近世土壙1を検出した。全体像は不明であるが確認できる上端幅は約3.0m、深さ約1.0m、下端幅は1.8m前後である。覆土はしまりの弱い暗褐色粘質土である。以上を上層遺構とした。

トレンチ南半部において海抜9.70mで道路地業の一部である土丹層を検出した。トレンチ内ではほぼ水平に堆積している。道路地業の構成土はⅡトレンチで示したものと同様だが、トレンチ北壁セクションでは土丹による地業のみを検出した。

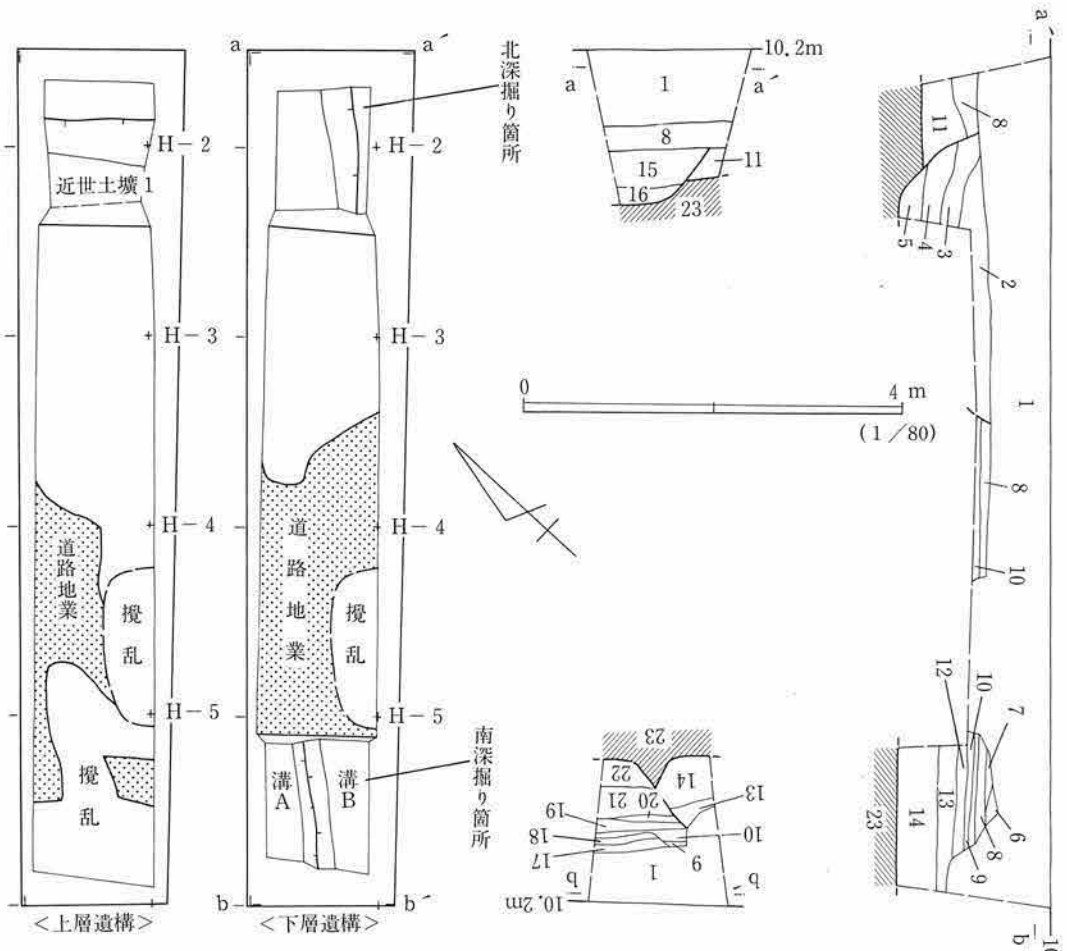
トレンチ南深掘り箇所では道路地業下から2条の南北溝を検出した。これは政所Ⅱ地点で検出された溝A、Bのつづきである。両溝ともに幅は不明であるが確認できる深さは70cm程であり、溝底は海抜8.80mである。断面は逆台形を呈する。覆土は暗褐色粘質土を主体としており、出土遺物は少ない。切り合いから溝Aが溝Bよりも新しい。トレンチ北深掘り箇所では溝Bの東肩を検出した。上部を近世土壙1により大きく削平されており、確認できる深さは約50cm、溝底は海抜8.80mであり、溝Bの溝底はⅢトレンチ内では南北にほぼ水平である。溝A、Bの主軸方位はグリット南北軸よりもやや東に振れている。

第4節　Ⅳトレンチ検出遺構（Fig. 7）

Ⅳトレンチは J～K－1～5 グリットに位置する。表土撹乱は現地表下40cm程であるが、深いところでは90cm程にも及ぶ。J－5 グリットでは近世土壙2を検出した。遺構の大半は調査区外に広がるため全体形は不明だが、確認できる深さは約80cm。底面の海抜レベルは約9.30mであり、壁はやや開き気味に立ちあがる。覆土は灰褐色粘質土を主体とし、土丹粒、玉砂利を含む。

表土をはがすと海抜10.0mで5層を検出し、以下、海抜9.30mで中世地山を検出するまでにⅡ、Ⅲトレンチで確認されている道路地業を検出し得なかった。5～7層は暗褐色粘質土を主体としており、しまりは良好であるが道路地業の一部と考えるには無理があろう。道路地業の確認のためにトレンチ東側に2箇所の拡張区を設定したが、北部拡張区では中世地山直上まで撹乱が及び、南部拡張区では前述とほぼ同様の土層堆積が確認され、道路地業に関しては不明である。また、北部拡張区では南北方向の落ち込みを検出したが、南部拡張区では検出されていない。この遺構の大半は調査区外に広がるため全体形は不明であるが、確認できる深さは約70cmであり、底面レベルは海抜約9.10mである。断面はおそらく逆台形を呈するものと考えられ、Ⅲトレンチ検出の溝A、Bと掘り方、覆土が類似することから溝と判断し、溝Dとした。南部拡張区において検出し得ないのは溝A、Bと同様に溝の主軸方向がグリット南北軸よりもやや東に振れているためであると考えられる。

また、J－2 グリットにおいて素掘りの井戸を検出した。平面ほぼ円形を呈し、上端幅約1.4mを測る。掘削深度の関係から完掘は不可能であったがボーリング探査の結果、深さ1.9m以上であることが確認された。覆土はしまりの弱い暗褐色粘質土であり、出土遺物も少ない。



近世土壙1
1．表土
2．灰褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。
3．褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。
4．暗褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。
5．暗褐色粘質土。
6．灰褐色粘質土。
7．明褐色粘質土。

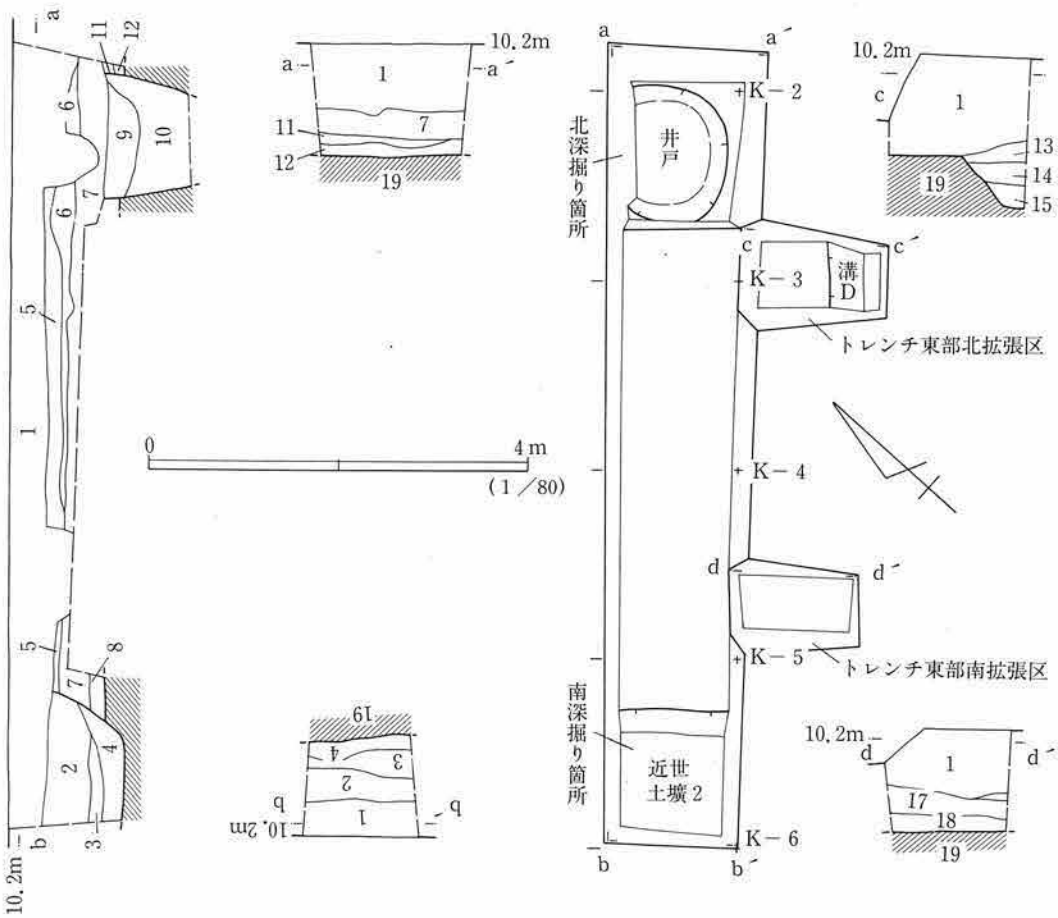
道路地業
8．土丹地業。
9．暗褐色粘質土。細砂及び貝殻細粒による地業
10．暗褐色粘質土。

溝B
11．暗褐色粘質土。土丹粒、かわらけ片を含む。鉄分多し。
12．暗褐色粘質土。炭化物を含む。
13．暗褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。
14．暗褐色粘質土。土丹粒、木片を含む。
15．暗褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。(13？)
16．暗褐色粘質土。土丹粒を含む。(14？)
17．明褐色粘質土。
18．灰褐色粘質土。土丹粒を含む。鉄分多し。

溝A
19．暗褐色粘質土。炭化物を含む。
20．灰褐色粘質土。炭化物を含む。
21．暗褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。
22．暗褐色粘質土。

23．黒褐色粘質土。中世地山。

Fig.6　Ⅲトレンチ平面図、堆積土層図



近世土壙2
1．表土
2．灰褐色粘質土。土丹粒、玉砂利を含む。
3．灰褐色粘質土。土丹粒を多量に含む。
4．褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。
5．暗褐色粘質土。炭化物を含む。
6．灰褐色粘質土。しまり良好。
7．暗褐色粘質土。
8．黒褐色粘質土。少量の炭化物を含む。
井戸
9．暗褐色粘質土。少量の土丹粒を含む。しまり弱し。
10．暗褐色粘質土。しまり弱し。
11．黒褐色粘質土。少量の土丹粒を含む。
12．黒褐色粘質土。少量の炭化物を含む。
溝D
13．暗褐色粘質土。微砂、土丹粒、炭化物及び植物遺体を含む。
14．暗褐色粘質土。土丹粒、炭化物、植物遺体を含む。鉄分多し。
15．暗褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。
16．灰褐色粘質土。土丹粒、炭化物を含む。
17．黒褐色粘質土。少量の土丹粒を含む。（7？）
18．黒褐色粘質土。少量の炭化物を含む。（8？）
19．黒褐色粘質土。中世地山。

Fig.7　Ⅳトレンチ　平面図、堆積土層図

第四章　出土遺物 (Fig. 8～12)

第Ⅰ節　Ⅰトレンチ出土遺物 (Fig. 8)

Ⅰトレンチ出土遺物の内訳は以下の通りである。

かわらけ：テンバコ 1/2。白かわらけ：2片。獣骨：4片。貝：1点。青磁：1片。青白磁：1片。銭：1点。山茶碗窯系こね鉢：3片。手焙り：2片。渥美窯甕：2片。常滑窯甕：16片。常滑窯こね鉢：2片。

図示できる出土遺物はFig. 8に示した。1～5は表土～根切り。6、7は北深掘り上層。8～24は北深掘り下層。25、26は南深掘り上層。27～33は南深掘り下層からの出土である。

1～4はロクロ成形のかわらけであり、すべて小型品である。

1は口径7.7cm、底径5.7cm、器高1.6cm。体部は内彎して立ちあがり、弱い陵をもつ。灰橙色を呈し、胎土には黒色砂粒を混入する。

2は口径7.1cm、底径5.6cm、器高1.4cm。体部断面は楔状を呈する。赤橙色を呈し焼成良好である。

3は口径7.7cm、底径6.0cm、器高1.5cm。体部は内彎気味に立ちあがる。胎土は灰橙色を呈する。

4は口径7.4cm、底径5.4cm、器高2.1cm。所謂薄手タイプである。体部中位に弱い陵をもち、内彎しながら立ちあがる。胎土は灰橙色を呈し精良、焼成良好である。

5は瓦質手焙り口縁部片である。小片のため口径復元は不可能。外面は指頭痕を横位のナデにより、また、口縁及び内面は丁寧な横位のナデにより調整している。胎土は微砂、雲母を含む。焼成不良の為、乳橙色を呈する。

6は山茶碗窯系こね鉢の底部片である。高台径11.9cm、高台高0.8cm。砂底の外底面に高台が貼りつけられる。内面の摩滅は顕著ではない。胎土は灰白色を呈し、長石、石英を含み粗雑である。

7は常滑窯こね鉢の口縁片である。外面下位には指頭痕が残る。口縁～口端～内面は横位のナデにより調整される。口縁端部は内外方向に強くひきだされている。

8～20はかわらけである。8、9はロクロ成形の小皿、10、11は手づくね成形の小皿、12～18はロクロ成形の大皿、19～20は手づくね成形の大皿である。

8は口径8.7cm、底径7.2cm、器高1.8cm。全体に薄手に仕上げられ、体部は直線的に立ちあがる。胎土は赤橙色を呈し、黒色砂粒を多く含む、焼成良好。

9は口径8.4cm、底径6.0cm、器高1.8cm。体部外面下位に屈曲をもち丸味を帯びる。胎土は赤橙色を呈し、黒色砂粒を含む。焼成良好。

10は口径8.0cm、器高1.6cm。体部外面を区画する陵は明瞭ではない。口縁端部外周のナデも弱い。胎土は灰橙色を呈し、黒色砂粒を多く含む。

11は口径9.0cm、、器高1.9cm。体部外面の陵は明瞭であり、口縁端部外周のナデも強い。胎土は赤橙色を呈し、黒色砂粒を含む。焼成良好。

12は口径12.7cm、底径9.0cm、器高3.3cm。体部は内彎気味に立ちあがり、体部外面上位で緩く

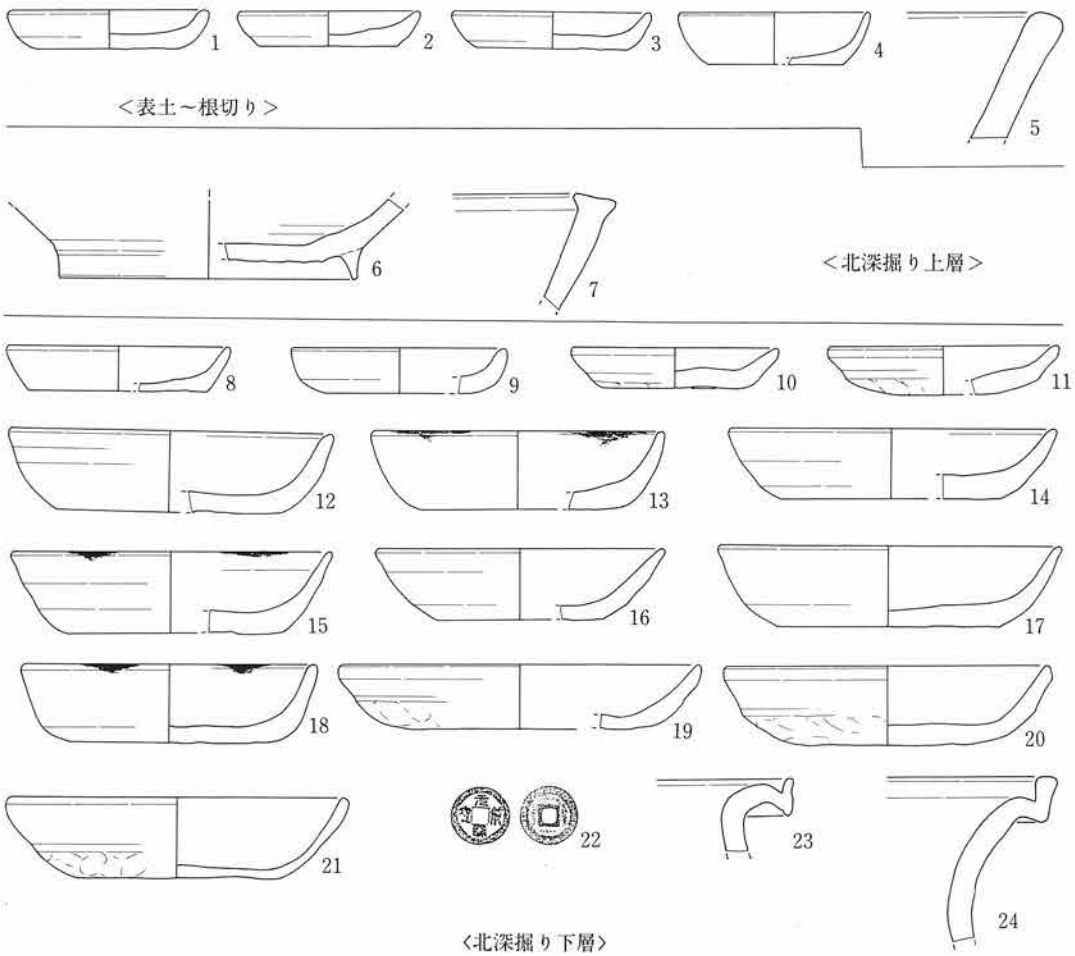


Fig.8　Ⅰトレンチ出土遺物

外反する。胎土は赤橙色を呈し、黒色砂粒を含む。焼成良好。

13は口径11.4cm、底径8.5cm、器高3.1cm。体部外面中位に弱い屈曲をもつ。胎土は赤橙色を呈し、黒色砂粒を含む。口縁部内外面には煤が付着しており、灯明皿として使用されたものである。

14は口径12.8cm、底径8.8cm、器高2.8cm。体部外面中位に屈曲をもつ。胎土は橙色を呈し、黒色砂粒を含む。

15は口径12.6cm、底径9.0cm、器高3.3cm。器壁はやや薄い。体部外面に明瞭な稜をもつ。胎土は赤橙色を呈し、黒色砂粒を含む。口縁部内外面には煤が付着する。焼成良好。

16は口径11.3cm、底径6.8cm、器高2.9cm。体部は内彎気味に立ちあがり端部は緩く外反する。胎土は淡橙色を呈する。

17は口径13.5cm、底径8.8cm、器高3.2cm。体部は緩く内彎しながら立ちあがり端部は小さく外反する。胎土は灰橙色を呈し、黒色砂粒を含む。

18は口径11.5cm、底径8.0cm、器高3.1cm。体部はやや直線的に立ちあがる。胎土は赤橙色を呈し、黒色砂粒を多量に含む。口縁部には煤が付着し、灯明皿として使用されたものである。

19は口径14.2cm、器高2.6cm。体部外面中位の陵は明瞭である。胎土は灰橙色を呈する。

20は口径12.7cm、器高3.2cm。体部外面中位の陵は弱い。胎土は橙色を呈し、焼成良好。

21は手づくね成形の白かわらけである。口径13.3cm、器高3.2cm。体部下半の器壁厚は3mm程であり、体部上位、及び、底部中央部は5mm程である。胎土は白色精良であり、焼成良好。

22は北宋銭「元符通宝」である。直径2.4cm。篆書体。初鋳は1098年である。

23、24は常滑窯大甕の口縁部片である。小片のため口径復元は不可能。口縁部はN字状に折り返される。23の内外面は暗褐色を、胎土は灰黒色を呈し、断面はザクリとしている。24の外面には降灰がみられる。胎土は灰白色を呈し粘性が強い。

25～31はかわらけである。25はロクロ成形の中皿、26、27は小皿、28は手づくね成形の小皿、29～31は手づくね成形の大皿である。

25は口径10.4cm、底径5.5cm、器高2.9cm。所謂薄手タイプである。胎土は乳橙色。焼成良好。

26は口径8.0cm、底径5.6cm、器高1.6cm。体部は内彎気味に立ちあがる。胎土は橙色を呈し、黒色砂粒を含む。焼成良好。

27は口径9.0cm、底径6.2cm、器高1.7cm。体部は外方に向かい開く。胎土は灰橙色を呈し、黒色砂粒を含む。

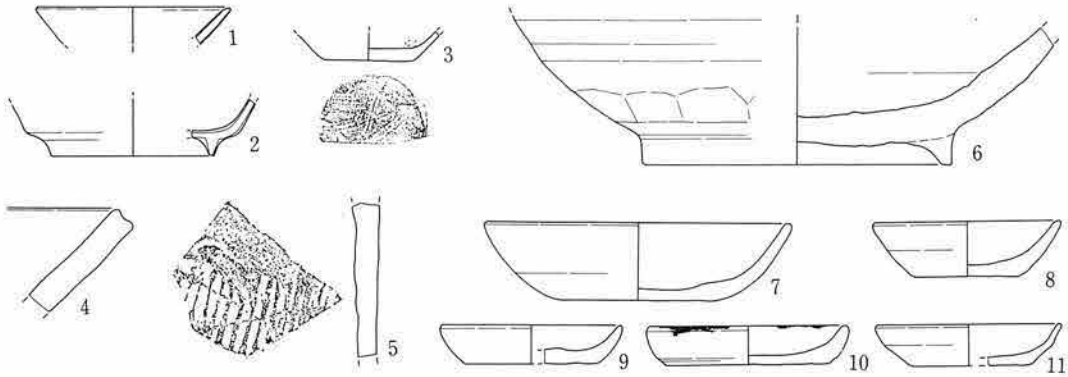
28は口径8.8cm、器高2.0cm。体部外面中位に明瞭な陵をもつ。胎土は赤橙色を呈し、焼成良好。

29は口径13.7cm、器高3.0cm。体部外面中位の陵は弱い。口縁端部に浅い凹みをもつ。胎土は灰橙色を呈し、黒色砂粒を含む。

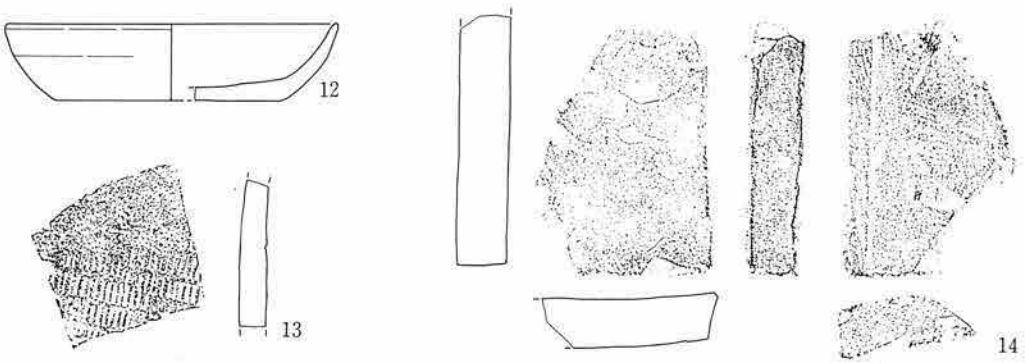
30は口径13.3cm、器高2.6cm。体部外面中位の陵は明瞭である。胎土は暗橙色を呈し、焼成良好。

31は口径13.5cm、器高3.3cm。体部外面中位の陵は明瞭である。胎土は暗橙色を呈し、焼成良好。

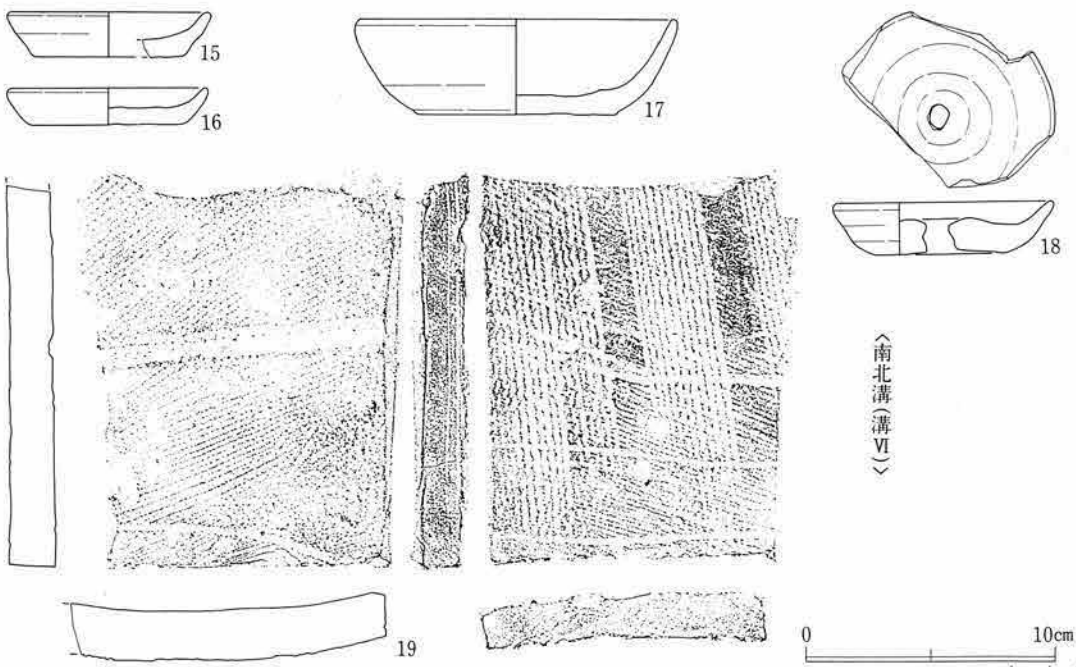
32は常滑窯甕の口縁部片である。復元口径23.8cm。口縁端部は外方へ曲げられている。外面には



＜表土～根切り＞



＜北深掘り＞



＜南北溝（溝Ⅵ）＞

0 10cm

(1/3)

Fig.9 Ⅱトレンチ出土遺物

厚く降灰がみられる。内外面ともに褐色を呈する。胎土は灰白色を呈し、粘性に富む。

33は木製品漆塗り合子の身である。直径13.6cm、器高2.5cm。上面には粗い削痕を残す。内外面ともに黒色漆が薄く塗られている。おそらく、鏡箱として用いられたものであろう。

第2節　IIトレンチ出土遺物 (Fig.9)

IIトレンチ出土遺物の内訳は以下の通りである。

かわらけ：テンバコ1／4。獣骨：7片。スラグ：1点。青磁：4片。白磁：1片。砥石：1片。瀬戸窯皿：1片。常滑窯甕：22片。常滑窯鉢：1片。渥美窯甕：4片。渥美窯鉢：1片。白かわらけ：1片。平瓦：2片。瓦質製品：1片。

図示できる出土遺物はFig.9に示した。1～11は表土～根切り。12～14は北深掘り。15～18は南北溝（溝VI）からの出土遺物である。

1は口兀白磁皿の口縁部片である。復元口径7.6cm。釉は淡青白色透明で微気泡を含み白濁状態である。胎土は淡白色を呈する。焼成良好。

2は青磁無文折腰鉢片である。腰部外径8.4cm、高台径6.4cm、高台高0.7cm。釉は深緑色透明で高台畳付部のみ無釉となる。胎土は灰白色を呈し緻密精良。

3は瀬戸窯入子の底部片である。復元底径3.6cm。外底面は回転糸切のちヘラ削りで調整される。体部内面には乳緑色降灰がみられる。胎土は灰白色を呈し緻密精良。焼成良好。

4は常滑窯こね鉢の口縁部片である。小片のため口径は不明。口縁端部は角形を呈し、中央部は凹む。外面は指頭のち縦方向のナデが施され、口縁部及び内面は横位のナデにより調整される。内外面ともに暗褐色を呈し、胎土は長石、石英を多く含み暗灰色を呈す。粘性に富む。焼成良好。

5は常滑窯甕の肩部片であろう。粘土の継ぎ目に縦線及び×印のスタンプが押されている。

6は山茶碗窯系こね鉢の底部片である。高台径12.2cm、高台高1.0cm。体部外面下位はヘラ削りにより調整される。内面は極度に摩滅している。胎土は灰白色を呈し夾雑物を多く含む。

7はかわらけの大皿、8～11は小皿である。いずれもロクロ成形である。

7は口径12.1cm、底径6.0cm、器高3.1cm。所謂薄手タイプであり、体部は曲線味を帯びる。胎土は赤橙色を呈し精良。焼成良好である。

8は口径7.2cm、底径4.0cm、器高2.2cm。体部はやや直線気味に外方に開く薄手タイプである。胎土は乳橙色を呈し精良。焼成良好。

9は口径7.0cm、底径5.2cm、器高1.6cm。体部は緩かに内彎する。胎土は灰橙色を呈する。

10は口径7.8cm、底径6.6cm、器高1.6cm。体部は丸味を帯びる。口縁端部内外面には煤が付着する。胎土は淡橙色を呈し精良。

11は口径7.2cm、底径4.4cm、器高1.7cm。体部中位に屈曲をもち端部はやや外反する薄手タイプである。胎土は赤橙色を呈し精良。焼成良好。

12は口径13.0cm、底径8.8cm、器高3.1cm。体部中位に屈曲をもつ薄手タイプである。胎土は赤橙色を呈し精良。焼成良好。

13は常滑窯甕の体部片である。外面に格子文様の押印がみられる。内外面及び胎土は灰白色を呈し、粘性に富み緻密。焼成良好。

14は平瓦である。凹凸面は縦位のナデ、側面、端面はヘラ削りで調整される。凹凸両面には粗い離れ砂が付着している。胎土は灰白色を呈し、小砂粒を含み、粘性に富む。

15、16はかわらけの小皿、17は大皿である。いずれもロクロ成形である。

15は口径7.8cm、底径6.0cm、器高1.5cm。体部は外方に開く。胎土は赤橙色を呈し焼成良好。

16は口径8.0cm、底径6.0cm、器高1.8cm。体部中位に屈曲をもつ。胎土は赤橙色を呈する。

17は口径12.4cm、底径7.8cm、器高3.9cm。体部下位に屈曲をもつ薄手タイプである。胎土は淡橙色を呈し精良である。

18は底部中央に直径約1.0cmの穿孔をもつかわらけ小皿である。口径8.6cm、底径5.2cm、器高2.1cm。胎土は灰橙色を呈し粗砂粒を多量に含む。体部は直線的に外方に開き立ちあがる。底部厚は最大1.3cmを測る。穿孔は焼成前に穿けられている。

19は平瓦である。側縁にほぼ平行して細目縄叩きを施す。凹凸面は斜めのわずかな弧を描いた糸切痕を残す。これは粘土角材から一枚分の粘土板を弓状工具で切り取った際の痕跡であろう。凹面には布目痕がなく、離れ砂が付着する。凸面の縄目は縦位に11条を1単位とする。側面は直角に面取りされ、側縁にも弱いヘラ削りで調整される。胎土、焼成ともに良好であり、色調は表面灰黒色、芯部が灰白色を呈する。

第3節　Ⅲトレンチ出土遺物（Fig.10、11）

Ⅲトレンチ出土遺物の内訳は以下の通りである。

弥生式土器：6片。かわらけ：テンバコ1／4。 渥美窯甕：1片。常滑窯甕：1片。貝：2片。手焙り：1片。青磁：2片。鉄製品：4点。瓦：3片。研摩痕のある瓦質手焙り：1片。他に近世陶磁器が数点出土している。

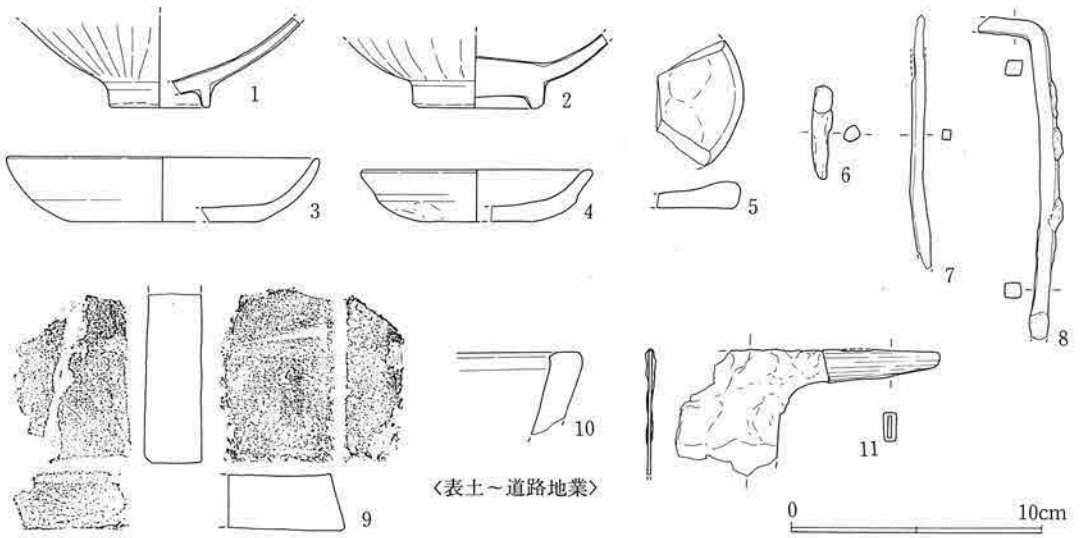
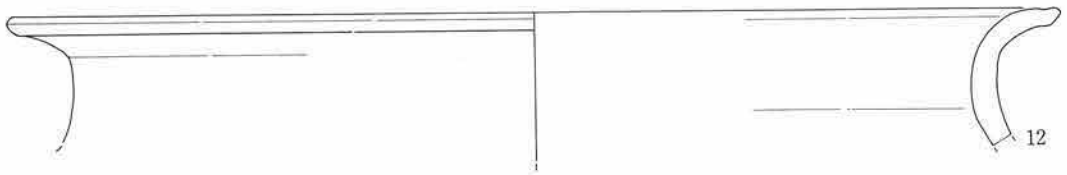
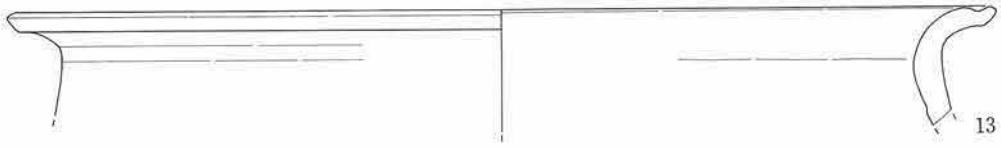
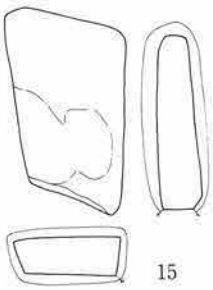


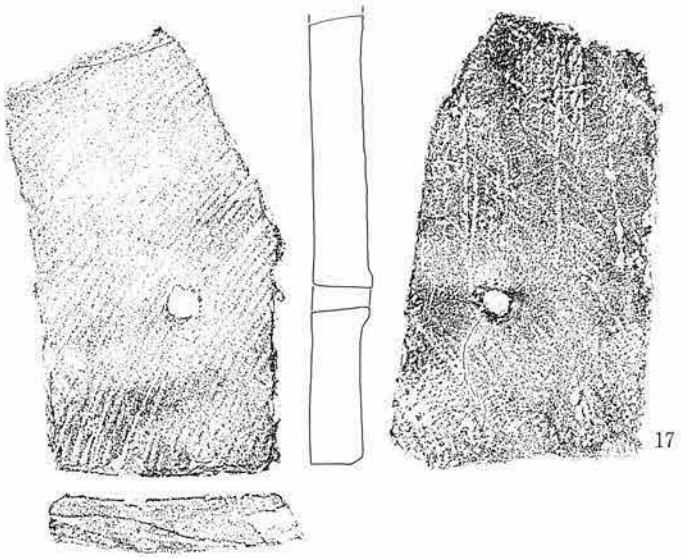
Fig.10　Ⅲトレンチ出土遺物（1）

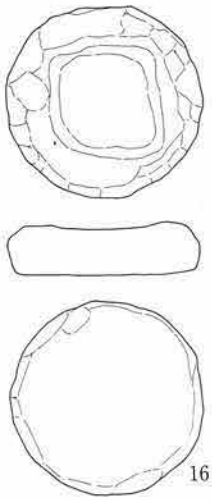


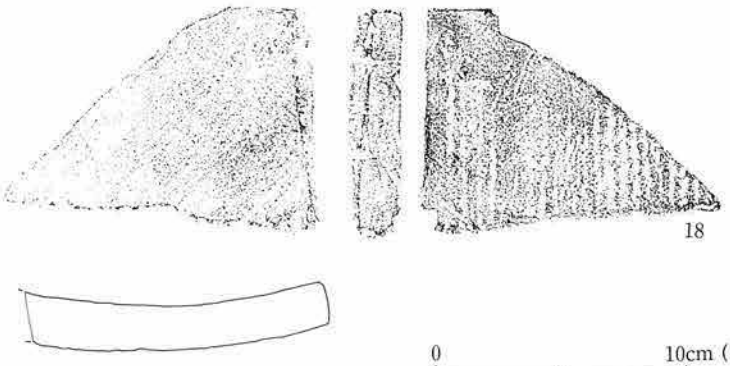




△溝A・B出土遺物▽







0 10cm (1/3)

Fig.11 Ⅲトレンチ出土遺物（2）

図示できる出土遺物はFig.10、11に示した。1～9は表土から道路地業。10、11は道路地業内。12～18は溝A、Bからの出土である。

1、2は青磁鎬連弁文碗の底部片である。

1は高台径4.0cm、高台高0.7cm。高台畳付部分のみ無釉であり赤褐色を呈する。釉は深緑色を呈し、胎土は灰白色緻密である。

2は高台径5.4cm、高台高0.6cm。高台内面まで青緑色釉が認められる。胎土は暗灰色を呈し緻密。焼成良好。

3はロクロ成形のかわらけ大皿である。口径12.4cm、底径8.0cm、器高2.6cm。体部は薄く曲線的に立ちあがる。胎土は淡橙色を呈し精良。焼成良好。

4は手づくね成形のかわらけ大皿である。口径12.4cm、器高2.6cm。体部外面中位の陵は明瞭である。胎土は赤橙色を呈し精良。焼成良好。

5はかわらけ質土製品である。底、側面はナデにより調整されるが、上面は指頭により押された痕跡が残る。復元径7.0cm前後であろう。胎土は赤橙色を呈し精良。焼成良好。

6～8は鉄製品である。

6は釘であろう。錆が激しく大半を欠損している。残存長3.8cm、残存幅0.8cmを測る。

7もおそらく釘であろう。断面方形を呈する。両端を欠損している。残存長10.2cm、幅0.4cm。

8は鎹である。これも両端を欠損しているが、断面方形の鉄材を直角に曲げている。残存長14.0cm、幅0.6cm。

9は平瓦である。凹凸両面ともにナデにより仕上げられており、叩き痕、布目痕は不明である。胎土は粗い石粒と砂を含みやや粉質である。全体に灰白色を呈する。

10は瓦質輪花型手焙りの口縁片である。胎土は焼成不良のため赤灰色を呈する。小片の為、口径復元は不可能であった。

11はおそらく鋸であろう。錆が激しく詳細は不明であるが、鉄部分の厚さは1㎜を測る。柄部分には木質が残る。

12は渥美窯大甕の口縁部片である。復元口径は41.5cmを測る。口縁部は頸部から大きく外反し、口端は丸くおさめられており、上部に強いナデによる沈線状の凹みをもつ。胎土は灰白色を呈し精良。粘性に富み焼成良好である。

13は常滑窯大甕の口縁部片である。復元口径39.0cmを測る。口縁部は大きく外反し、口端部上面には強いナデによる沈線状の凹みをもつ。内外面は褐色を呈し、口縁内面には乳緑色の降灰が観察される。胎土は灰白色を呈し、粗く、粘性が弱い。

14はロクロ成形のかわらけである。口径14.2cm、底径8.6cm、器高5.1cm。体部は直線気味に立ちあがり、上位で屈曲をもつ。全体に薄く仕上げられている。胎土は灰橙色を呈し、黒色砂粒を多く含む。内底面見込みのナデは弱く、明瞭ではない。

15は研摩痕のある瓦質手焙り片である。各面ともによく使用されている。

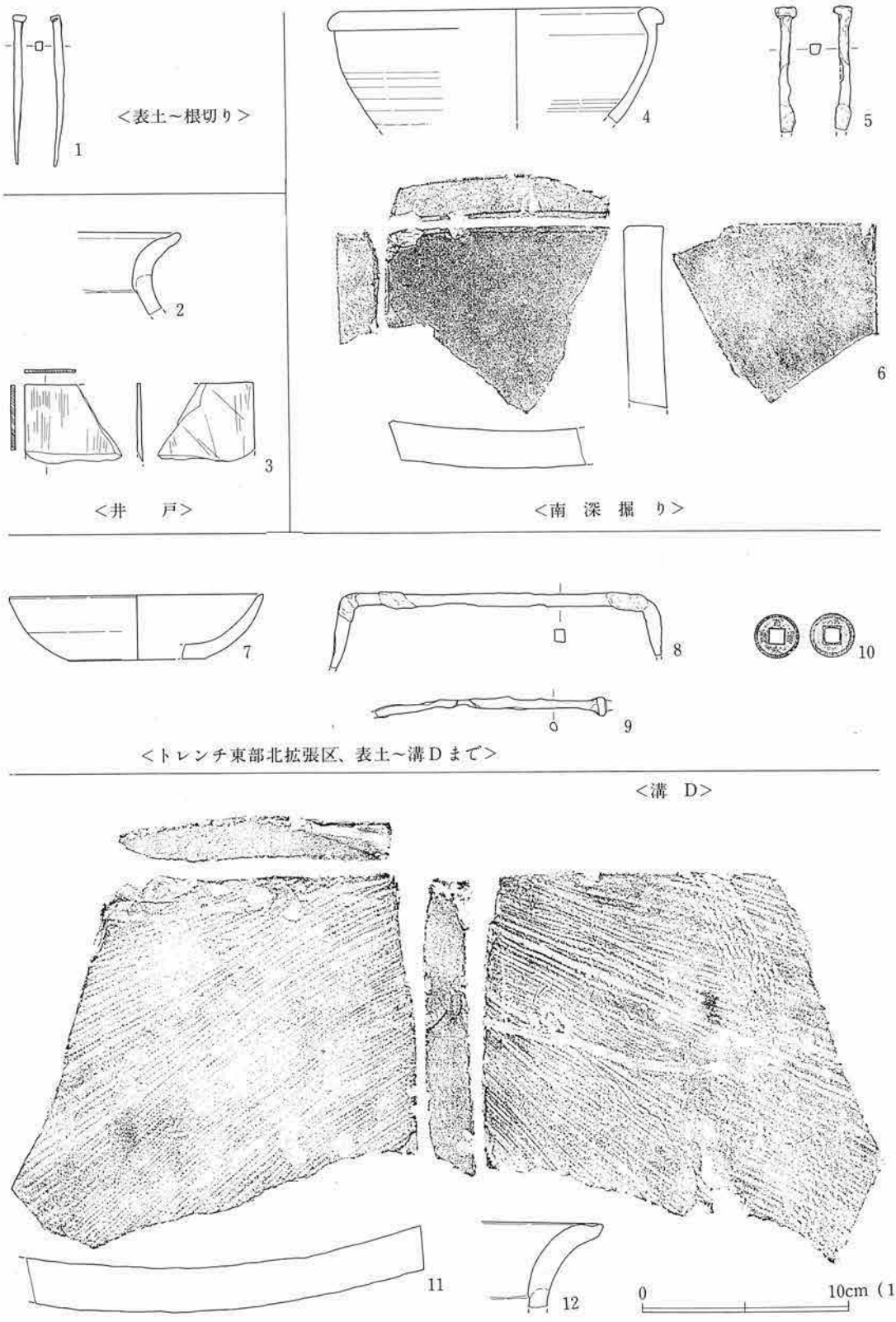


Fig.12　Ⅳトレンチ出土遺物

16は土師器壺底部片であろう。胴下半部を打ち砕き、断面を研摩している。

17、18は平瓦である。

17は細い縄叩きを縦位のヘラ削りとナデ調整により摩り消す。焼成前に穿たれた釘穴を有する。端面はヘラ削りを数回施し、面取りをする。胎土は精良、焼成は良好であり、表面は灰黒色、芯部は灰白色を呈する。

18は凸面に太い縄叩き目を側縁に平行して施す。凹面には布目痕がなく、凹凸面ともに離れ砂が付着する。凸面の砂は縄叩きによって打ち込まれており、叩きを加える前に表面に撒いたものと理解される。側面には2面の面取りを施す。胎土、色調、焼成等は17と同質である。

第4節　Ⅳトレンチ出土遺物 (Fig.12)

Ⅳトレンチ出土遺物の内訳は以下の通りである。かわらけ：テンバコ1/4。常滑窯甕：10片。渥美窯甕：1片。鉄製品：4点。銭：1点。種子：3点。青磁：4片。瀬戸窯鉢：1片。硯：1片。

図示できる出土遺物はFig.12に示した。1は表土～根切り。2～3は井戸覆土。4～6は南深掘り。7～10はトレンチ東部北拡張区表土～溝Dまで。11～12は溝Dからの出土である。

1は鉄釘である。残存長7.3cm。断面方形を呈する。頭部は平らに叩かれた後、折り曲げられる。

2は常滑窯大甕の口縁片である。頸部から口縁部は大きく外反し、口縁上面には沈線状の凹みをもつ。内外面は褐色を、胎土は灰白色を呈し粘性に富む。口縁内面に乳緑色の降灰がみられる。

3は粘板岩片である。表裏両面に研摩痕がみられ、砥石として使用された可能性がある。

4は瀬戸美濃窯系の鉢である。復元口径14.8cm。体部は丸味をもち、口縁端部は折り返えされる。釉は灰釉であり、胎土は灰白色を呈し粘性は弱い。近現代の所産であろう。

5は鉄釘である。錆が激しく全体形は不明である。残存長6.0cm、断面は0.5cmの方形を呈する。頭部は体部に比べやや薄くなり、ほぼ直角に曲げられている。

6は近世以降の平瓦である。凹凸両面及び側面、端面はよく磨かれている。表面は灰黒色、芯部は乳白色を呈し、焼成良好である。

7はロクロ成形のかわらけである。口径12.1cm、底形6.6cm、器高3.1cm。体部は丸味を帯び立ちあがる。胎土は橙色を呈し精良。焼成良好。

8は鎹である。残存長16.1cmを測る。断面は0.6cm×0.5cmの長方形を呈し、両端部は3.0cm程の箇所で折り曲げられ、端部は尖がる。

9は火箸である。残存長11.2cmを測る。断面は直径約0.3cmの楕円状を呈する。

10は銅銭「寛永通寶」。初鋳1668年である。

11は平瓦である。凸面に平行または斜方向の縄叩きを施す。凹凸面ともに斜方向の弧をもつ糸切痕を残し、凹面には布目痕が観察される。凸面の離れ砂は顕著である。側面は数回のヘラ削りで面取りし、この面に流文状の文様がみられる。胎土は精良、焼成はやや甘く、色調は黒灰色を呈する。

12は常滑窯大甕の口縁片である。頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁部上面には沈線状の凹みをもつ、内外面は灰褐色、胎土は淡乳褐色を呈し粘性に富むが焼成は不良である。

第5節　近世陶磁器（PL.18、19）

本節においては表土層及び、Ⅲトレンチ検出の近世土壙1、Ⅳトレンチ検出の近世土壙2から出土した近世国産陶磁器についてとりあげることとした。PL.18－1～21は染付、PL19－22～33は陶器類である。これらの生産時期は17世紀後半～19世紀中葉にかけてのものであり、政所Ⅰ地点における表土層から出土したものとほぼ同時期である。以下、一覧表を明記する。尚、近世土壙1からの出土遺物はPL.18－11、20、21、PL.19－26、31。近世土壙2からのものはPL.18－2、18、19である。

尚、近世陶磁器の生産地及び製作時期に関しては佐賀県立九州陶磁器文化館学芸課の大橋康二氏より多大な御教示を賜り、また、文字資料の判読は鎌倉国宝館の三浦勝男、内田浩史両氏に御願いした。記して感謝の意を表する次第である。

遺物番号	器　種	文様　その他	産　地	時　期	法　量（cm）
					口径・底径・器高
PL18－1	染付碗	横帯模様	瀬戸・美濃(?)	1820～1860年代	8.0 ・－ ・－
2	染付碗蓋	端反り。外面花唐草文。口端内四方襷。	関西系（?）	1820～1860年代	9.1 ・－ ・－
3	染付湯呑み	口縁外面雷文帯。	瀬戸・美濃	1820～1860年代	－ ・－ ・－
4	染付湯呑み	広東形。牡丹文。焼き継ぎ。	肥前系	1780～1840年代	12.8 ・－ ・－
5	染付皿	内面文様あり。	肥前系	1780～1820年代	－ ・－ ・－
6	染付碗	外面渦文。焼き継ぎ。	瀬戸・美濃(?)	1820～1860年代	－ ・－ ・－
7	染付猪口	外面唐草。内面四方襷。内型成形で輪花	肥前系	1820～1860年代	－ ・－ ・－
8	染付碗(?)	外面菊。	肥前	1760～1810年代	－ ・－ ・－
9	染付碗	広東形（?）。	肥前系	1780～1840年代	－ ・－ ・－
10	染付瓶	文様松。	肥前	1760～1810年代	－ ・－ ・－
11	染付瓶	文様笹。	肥前	18世紀	－ ・－ ・－
12	染付碗	Fig.18－1と同一個体。	瀬戸・美濃(?)	1820～1860年代	－ ・3.8・－
13	染付蓋	折枝文様。	肥前系	1760～1840年代	－ ・－ ・－
14	青磁染付碗	（湯呑み。）見込みに五弁花文。	肥前	1780～1800年代	－ ・3.2・－
15	染付碗(?)	高台脇○×文。	肥前	18世紀前半～1780年代まで	－ ・－ ・－
16	染付皿	内型成形により輪花。口紅。	肥前	1740～1780年代	－ ・－ ・－
17	染付皿	内面雷文帯。蛇ノ目凹形高台。	肥前	1760～1810年代	－ ・－ ・－
18	染付碗	（湯呑み）文様外面竹ノ子掘り文。見込み五弁花文。	肥前	1780～1810年代	8.3 ・3.2・5.1
19	染付碗	（湯呑み）外面飛鳥文。	瀬戸・美濃系	1820～1860年代	7.4 ・3.6・6.2
20	染付碗	口紅。外面木の字文。	瀬戸・美濃系	1820～1860年代	6.8 ・3.6・3.9
21	染付皿	見込み蛇ノ目釉ハギ。	肥前系	18世紀	－ ・－ ・－
PL19－22	鉢	内面に白化粧を施し、呉須絵（スッポン、流水）。脚付道具の熔着痕あり	関西系	19世紀	28.8 ・13.8・12.9
23	鉄釉鉢	外底面に墨書「とくりへ共兵」	瀬戸・美濃	18世紀頃	18.8 ・12.5・15.5
24	灰釉香炉	外面に半菊文。外底面に墨書「□ヤ」	瀬戸・美濃	17、18世紀	10.0 ・6.5・5.5
25	火入れ(?)	外面に鉄絵、外底面に墨書「ゆイ」	瀬戸・美濃	18世紀	－ ・7.2・－
26	鉄釉銚子	鉄釉。	関西系	18世紀	－ ・－ ・－

表．近世陶磁器（1）

遺物番号	器　種	文様　その他	産　地	時　期	法　量（cm）
					口径・底径・器高
27	小　碗	透明釉	関　西　系	18世紀後半~19世紀初頭	－　・－　・－
28	蓋　物	灰釉。	関　西　系	18世紀~19世紀	7.6　・－　・－
29	土瓶（？）	鉄釉。	関　西　系	18世紀後半~19世紀	－　・－　・－
30	灯　明　皿	灰釉。体部内面に菊文貼付。	関　西　系	18世紀後半~19世紀	－　・－　・－
31	灯　明　皿	サビ釉。	関　西　系	18世紀~19世紀	10.4　・4.2・1.8
32	灯　明　皿	サビ釉。	関　西　系	18世紀~19世紀	10.8　・4.4・2.1
33	土　瓶	鉄釉に灰釉流し。	関　西　系	18世紀後半~19世紀	7.8　・－　・－

表．近世陶磁器（2）

第五章　まとめと考察 (Fig. 13、14)

本調査地点は4箇所のトレンチ調査という狭い調査面積にも拘わらず、表土撹乱が50～60cmと比較的浅かったため、良好な状態で中世の道路地業、南北溝、井戸等の遺構を検出することができ、テンバコ約5箱分の遺物の出土をみた。しかし、掘削深度の限界もあり、遺構の充分な性格、年代観等は今後の調査に委ねることとしたい。ここでは今回の調査で把握された事実等から各遺構の性格、及び年代観を、さらに南に隣接する「政所II地点」との対比を試みてゆきたい。

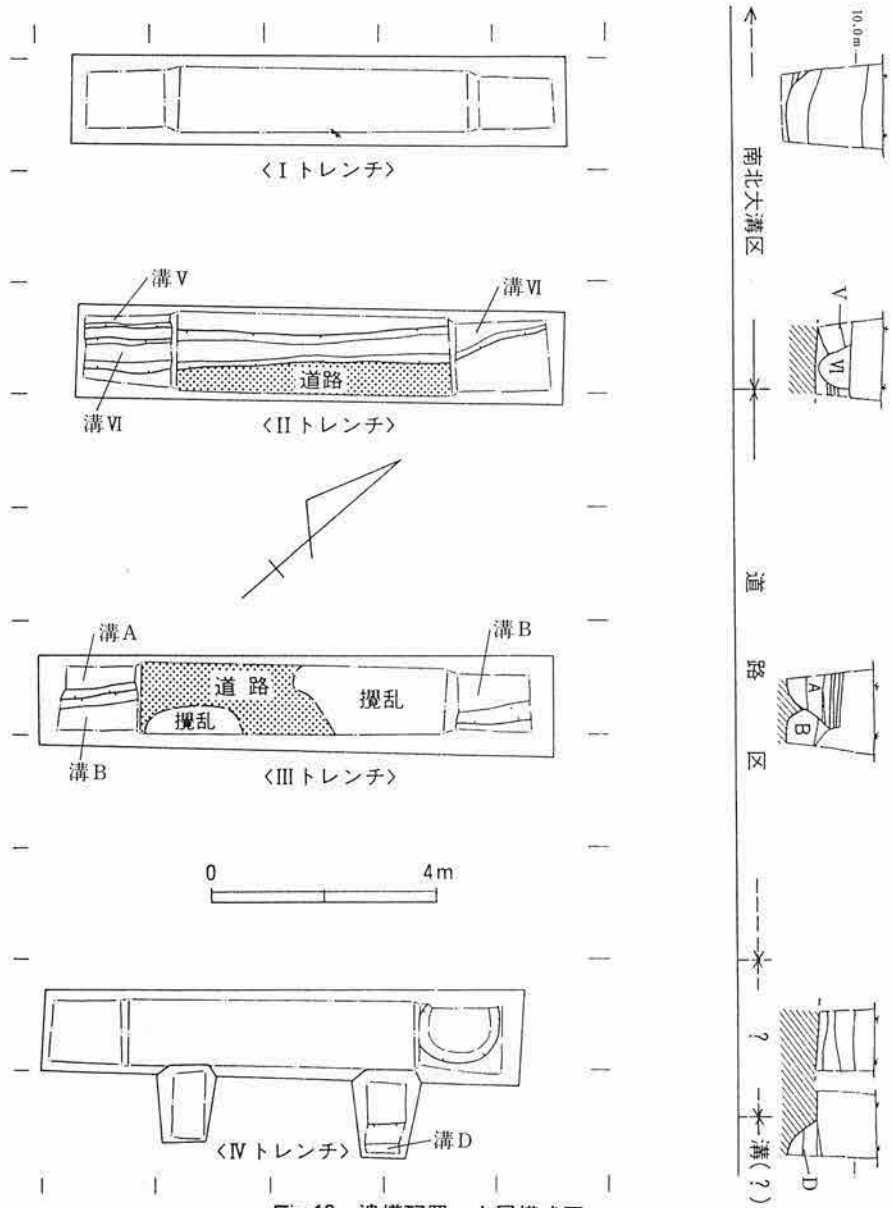


Fig.13　遺構配置・土層模式図

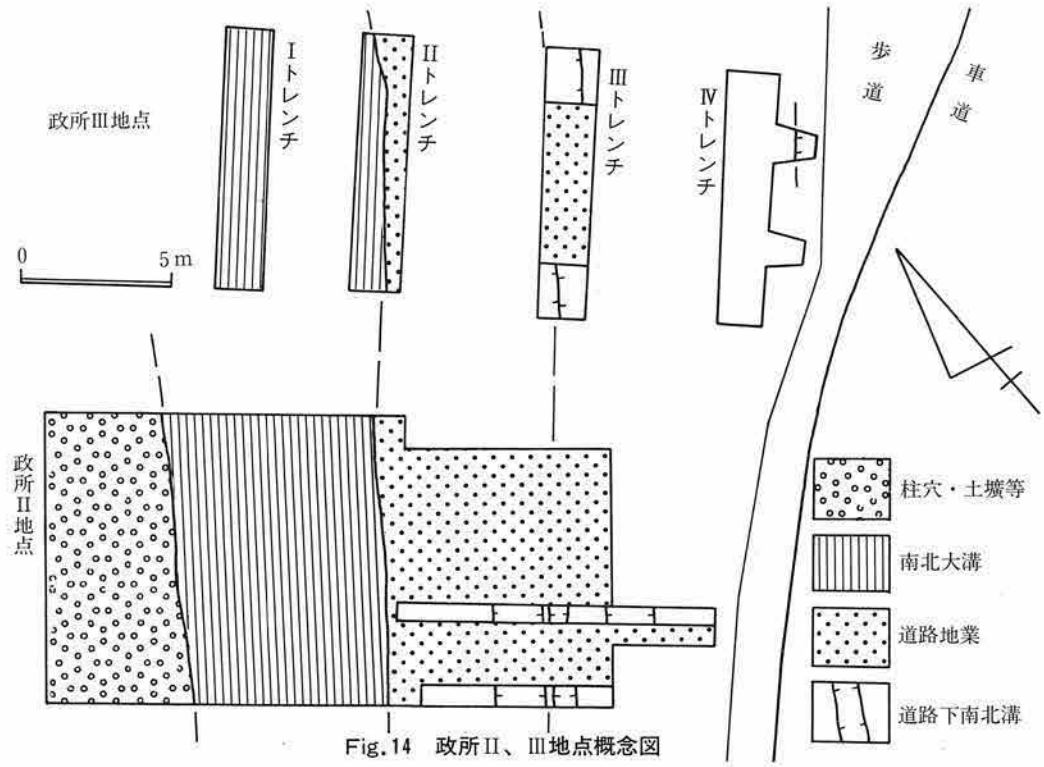


Fig.14　政所II、III地点概念図

Fig.13に示した遺構配置図は各トレンチで検出した最終面での遺構である。また、土層模式図は各トレンチの北、南壁セクションであり、それぞれ良好な状況を示すものを載せた。(これは1991年10月に催された「第1回鎌倉市遺跡調査・研究発表会」で筆者が掲載した図を一部加除筆したものである。)

Iトレンチでは表土撹乱以外は全て南北溝の覆土と考えられる。出土遺物からは13世紀末～14世紀前葉の年代があたえられ、政所II地点で検出された溝Ⅳ、溝Vの覆土であると考えられる。

IIトレンチでは道路地業及びその西側を流れる2条の南北溝を検出した。明確な道路地業は1時期であるが、その上層に堆積する薄い3枚の土層（これは撹乱をうけ、ごく一部にしか遺存していないが）をも様相がやや異なる弱い道路版築と考えることができる。2条の溝は政所II地点で検出された溝V、及び溝Ⅵと考えられる。出土した遺物から14世紀前葉～14世紀末の年代をあたえることができる。溝Ⅵと道路地業との時期差は土層断面からは同時期、あるいは溝Ⅵのほうが新しいものと考えられる。

IIIトレンチでは道路地業とその下の2条の南北溝を検出した。道路地業は2時期あると考えられるが上層のものは大部分を撹乱されている。南北溝は政所II地点で検出された溝A、溝Bであると考えられる。狭い深掘り箇所での検出のため出土遺物もごくわずかであり速断は避けねばならないが12世紀末～13世紀初頭の年代を与えることができる。この両溝の切り合いから溝Aが後出で

あるが、2条の溝には大きな時期差は無いと考えられる。

ⅣトレンチではⅡ、Ⅲトレンチで確認された道路地業を検出し得なかった。トレンチ北部で井戸と南北溝（溝D）を検出した。井戸は未完掘であり年代は不明である。溝Dは前述した溝A、溝Bと類似した掘り方、覆土をしており、前二者とほぼ同時期のものと考えられる。出土した平瓦は鶴岡八幡宮創建時に使用されたと考えられる瓦（註1）と同類であり、12世紀末～13世紀前半の年代が与えられる。しかし、トレンチ東部北拡張区でごく一部を検出したにすぎず、遺構としての性格は不明と言わざるを得ない。

ここで本調査地点（以下、政所Ⅲ地点）と政所Ⅱ地点とを合成した概念図（Fig.14）を参照されたい。政所Ⅱ、Ⅲ地点は近接しており遺構の検出状況はほぼ共通している。ここで問題になるのが政所Ⅲ地点Ⅱ、Ⅲトレンチ北部において溝が流れを西に向けはじめていること、Ⅳトレンチにおいて道路地業を検出し得なかったこと、さらにⅣトレンチ北部東拡張区で検出された溝Dが南部東拡張区では検出されなかったことである。以上のことから政所Ⅲ地点において南北溝及び道路の主軸方向がやや西に振れていることが理解できる。また、政所Ⅱ地点では道路幅が10.7m以上であることが確認されており（註2）、道路面はさらに東へ広がると考えられる。政所Ⅲ地点において道路西端から10.7mの地点はⅢ、Ⅳトレンチ間であり、溝Dを道路地業下で検出された溝A、Bと同時期であるとするとⅣトレンチ内では道路西側の南北大溝群と対応する溝は検出されていないことになる。以上のことから、Ⅳトレンチで道路地業が検出されないのは後世の削平によるものであり、道路幅は14.3m以上という数値が得られる。この道路の年代を溝Ⅵとほぼ同時期とすると14世紀中葉～末の年代があたえられる。因に、13世紀中葉～14世紀中葉の横大路の幅は推定で約21m（約7丈）（註3）、13世紀中葉～14世紀前半期の若宮大路の幅は鶴岡八幡宮二ノ鳥居以北で33m（11丈）（註4）であることが指摘されている。最後に、政所Ⅱ、Ⅲ地点では土塁を検出しておらず、この地域の遺構の広がりを考えさせられる。

註

註1．『鶴岡八幡宮境内研修道場用地発掘調査報告書』　同調査団編。鎌倉市鶴岡八幡宮発行。1983年。及び『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書（鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査）』　同調査団編。鎌倉市教育委員会発行。1985年。による。

註2．雪ノ下三丁目966番1地点における調査を筆者実見。

註3．『政所跡』　政所跡発掘調査団。1991年による。

註4．『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3　北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目233番9他地点）』　鎌倉教育委員会。1987年。

＜付篇＞　政所跡溝内堆積物の花粉化石

鈴　木　　茂（パレオ・ラボ）

1．はじめに

政所跡（雪ノ下三丁目965地点）において鎌倉時代初期（12世紀末～13世紀前半）のものと考えられている溝内堆積物の花粉分析を行った。この時期は幕府が開かれ都市開発が盛んに行われた頃と思われ、したがって当時の植生としてはこの影響を強く受けたことが予想される。こうした人間活動と植生との関わりあいに注目して花粉分析を行った。

2．試料と方法

花粉分析はIVトレンチ東側のトレンチNの東側壁より柱状（5cmm角）で採取したものより6点（試料No2～7）と、IIIトレンチ南面よりスポットで採取した4点（試料No8～11）の計10点について行った（図1、図2）。詳しい土層の記載については遺跡の項を参照して頂くとして、ここでは花粉分析に用いた試料について以下に若干記載する。なお層位番号はセクション図に用いられていたものである。

1）Ⅳトレンチ：19層は砂レキ層、12層は暗灰色砂質粘土～シルトでレキや土丹（最大径40㎜）が点在し、21層は暗灰緑色粘土質砂まじりシルトで径1㎜以下の土丹粒が多く入り、炭片が点在している。これら3層は攪乱層である。17層は暗灰緑色砂まじりシルトで炭片が多くみられ、大型の土丹が点在し、本層も攪乱されているようにみうけられる。この17層より下位の26層、23層、25層が溝内堆積物である。26層は黒灰色粘土質砂まじりシルトで、材片や炭片が点在し、径50㎜の土丹もみられる。また中部や上部よりモモ核が検出された。23層は黒灰色砂まじり粘土で、炭片や径30mmの土丹がみられる。また最下部に径60㎜の円レキが観察された。23層は黒灰色砂まじり粘土で、最大径30mmのレキが点在し土丹もみられる。この25層の下位は暗灰緑色砂質シルトで、溝内堆積物の基盤をなすものである。この26、23、25層より6点について花粉分析を行った（図1）。なお17層については予察的に花粉化石の有無を確かめたところ、ほとんどみられなかったので省略した。

2）IIIトレンチ：溝内堆積物は5、6層および22、23層である。時代的にはほとんど差はないと思われるが、発掘状況から5、6層の方がより新しいと考えられる。5層は暗灰色粘土質シルトで、最大径25㎜の土丹や30㎜のレキや炭片が点在している。また管状に酸化鉄が入る。6層は黒灰色シルト質粘土で、細粒～中粒砂の団塊が点在している。また炭化材片もみられる。22層は暗灰褐色粘

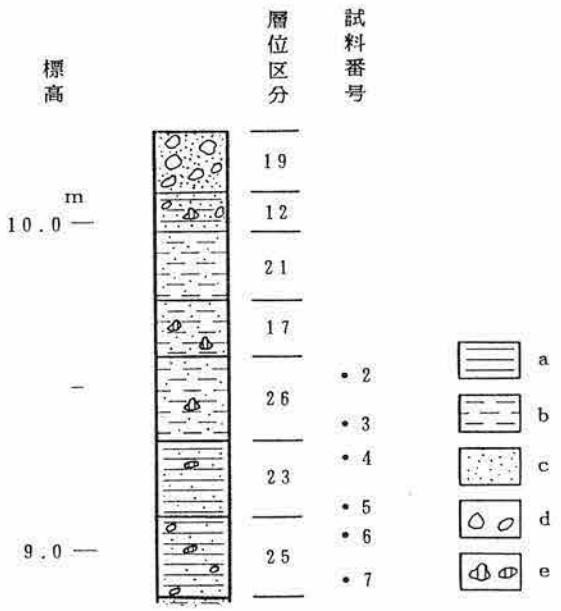


図１　政所跡溝内堆積物の地質柱状図（第４トレンチ）
ａ：粘土ｂ：シルトｃ：砂ｄ：レキｅ：土丹

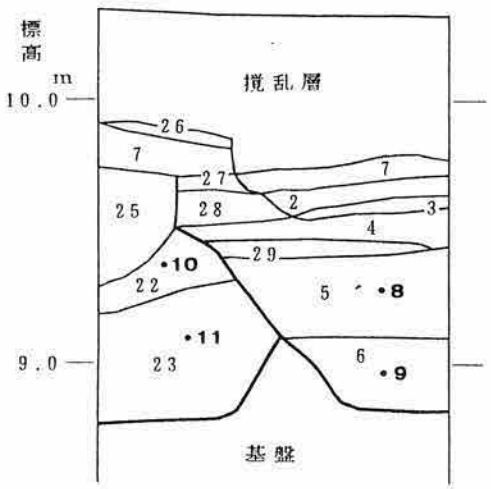


図２　政所跡第３トレンチ南面のセクション図

附篇　図1・図2

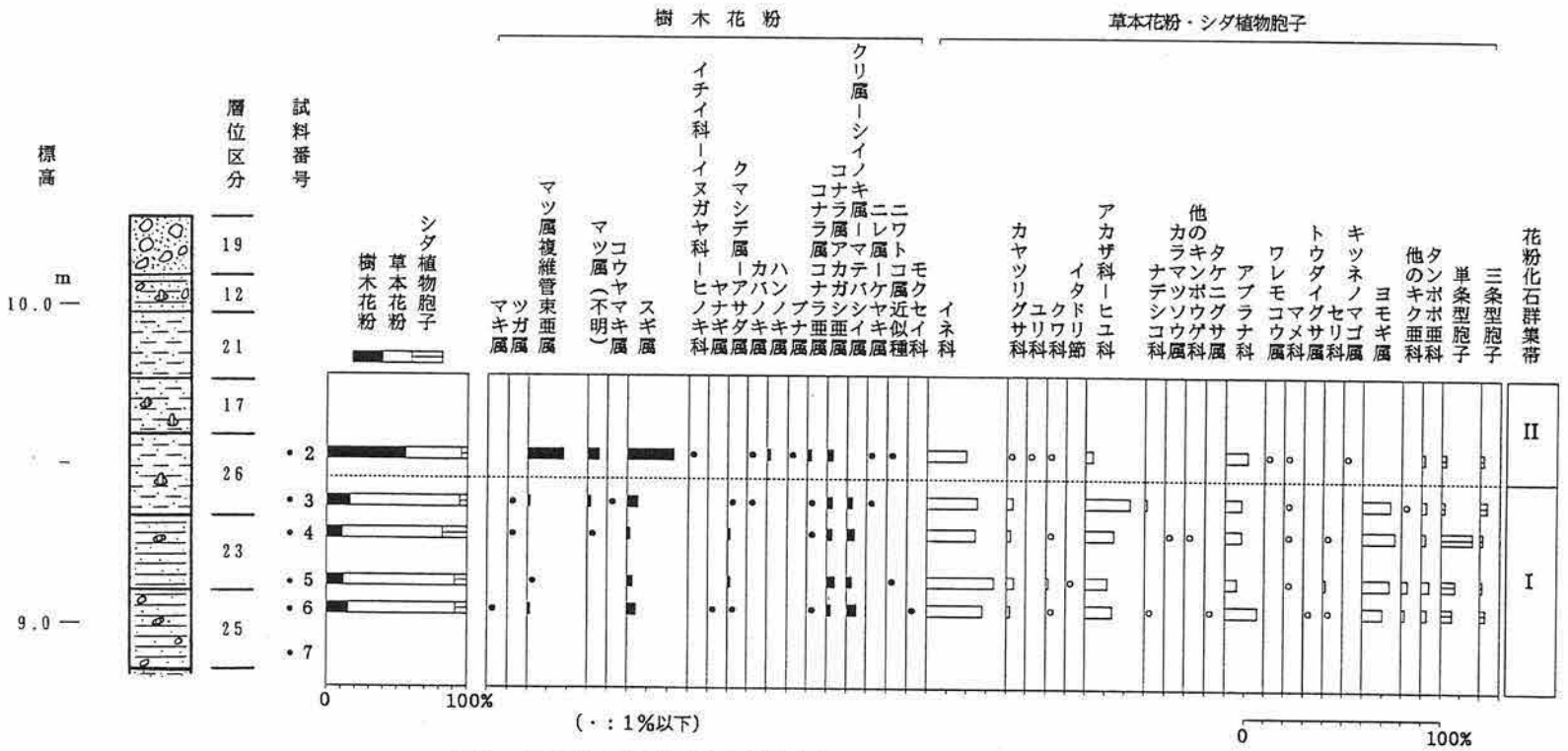


図３　政所跡の主要花粉化石分布図
（出現率は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

土質シルトで、細かな土丹が多量に含まれている。23層は暗灰褐色粘土で、草本質の植物遺体がみられ、また炭片や最大径30㎜の土丹が点在している。下部には材片が多くみられ、最下部には最大径120㎜のレキが点在している。これらの各層1点、計4点について花粉分析を行った（図2）。

以上の試料10点について次のような手順に従って花粉分析を行った。

試料（湿重約0.5～1.0g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体等を取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

3．結　果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉17、草本花粉21、形態分類で示したシダ植物胞子2の計40である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、またIVトレンチにおける主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図3に示した。この分布図における樹木花粉、草本花粉、シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。なおIVトレンチの試料No7およびIIIトレンチの試料については検出できた花粉数が非常に少なく分布図として示すことが出来なかった。表1および図3においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。検鏡に際して花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート）を適宜作成し各々にPLC.SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果、Ⅳトレンチについては樹木花粉の産出傾向から2つの花粉化石群集帯（下位よりⅠ、Ⅱ）を設定した。またⅢトレンチの試料については検出された花粉化石からみてⅣトレンチにおける花粉化石群集帯Ⅰに相当すると思われる。

花粉化石群集帯Ⅰでは草本花粉の占める割合が非常に高く、60～70%に達している。その中ではイネ科が30%前後出現しており、その他ではアカザ科－ヒユ科、ヨモギ属が10～20%、アブラナ科が10%前後みられる。樹木花粉ではスギ属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属－シイノキ属－マテバシイ属が10%以下と低率ではあるが安定して出現している。

花粉化石群集帯Ⅱでは樹木花粉が60%を占めており、その中ではスギ属やマツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）が優占している。コナラ属コナラ亜属が1%を越えて出現し、アカガシ亜属もⅠ帯と同様にみられるが、クリ属－シイノキ属－マテバシイ属は検出されなかった。草本類では減少したとはいえイネ科は20%出現し、アブラナ科も10%を越えて検出されている。一方アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属は急減し、特にヨモギ属は全く検出されなかった。

表１　政所跡の産出花粉化石一覧表

和名	学名	第４トレンチ						第３トレンチ			
		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
樹木											
マキ属	*Podocarpus*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ツガ属	*Tsuga*	-	3	1	-	-	-	-	1	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	36	4	-	1	3	-	-	-	-	2
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	11	5	1	-	-	-	-	-	-	1
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ属	*Cryptomeria*	46	17	3	4	10	-	4	6	2	5
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤナギ属	*Salix*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	1	2	2	1	-	-	-	1	-
カバノキ属	*Betula*	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブナ属	*Fagus*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	4	1	1	-	1	-	-	1	-	-
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	6	9	5	6	5	1	4	2	1	3
クリ属－シイノキ属－マテバシイ属	*Castanea-Castanopsis-Pasania*	-	9	7	4	11	1	2	4	-	2
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-
ニワトコ属近似種	cf. *Sambucus*	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
モクセイ科	Oleaceae	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
草本											
イネ科	Gramineae	40	83	44	51	64	2	10	14	8	39
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	11	4	6	4	-	1	1	1	2
ユリ科	Liliaceae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	1	-	1	2	1	-	-	-	-	1
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	8	74	26	17	31	-	2	5	3	27
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	4	-	-	2	-	-	-	-	5
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
タケニグサ属	*Macleaya*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	23	28	15	9	38	-	1	1	2	8
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マメ科	Leguminosae	2	1	1	1	-	-	-	-	-	2
トウダイグサ属	*Euphorbia*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	1	2	1	-	-	1	-	-
キツネノマゴ属	*Justicia*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヨモギ属	*Artemisia*	-	47	30	21	23	2	1	19	3	38
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	2	-	5	4	-	2	2	3	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	3	8	4	6	6	-	1	1	6	1
シダ植物											
単条型胞子	Monolete spore	5	6	29	11	13	3	2	-	4	5
三条型胞子	Trilete spore	4	12	3	2	6	1	-	-	-	1
樹木花粉	Arboreal pollen	113	53	20	18	34	2	10	15	4	13
草本花粉	Nonarboreal pollen	81	258	128	121	176	4	18	44	27	124
シダ植物胞子	Spores	9	18	32	13	19	4	2	0	4	6
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	203	329	180	152	229	10	30	59	35	143
不明花粉	Unknown pollen	13	29	18	23	26	2	4	2	6	11

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

4．考　察

花粉化石群集帯Ⅰでは草木花粉の占める割合が非常に高く、樹木花粉は全体の10～20%であり、遺跡付近において樹木の少ない景観が予想される。東京都板橋区舟渡遺跡（平安期の館跡）の溝内堆積物の花粉組成は80%が草本花粉で、ヨモギ属やヘクソカズラ属、ノブドウなどが多くみられ、土手や屋敷周辺の植生が雑草一色に変貌していたことがうかがえる（辻　1988)。当遺跡においてはアカザ科－ヒユ科やヨモギ属といった道端あるいは荒れ地などに生育する植物が多くみられる。このように溝の周辺ではイネ科をはじめとして荒れ地あるいは草地的な雑草が生育しており、スギ属やコナラ亜属、アカガシ亜属といった樹木はまばらに生育していたに過ぎなかったと思われる。時代的には12世紀末から13世紀前半頃と思われ、鎌倉幕府成立後の人間の干渉を強く受けていた環境であったであろう。

なおアカザ科－ヒユ科およびアブラナ科などには食用になるものもあり、水洗いや投棄されることにより溝内に花粉が供給されたことも考えられる。また先にも記したが26層中よりモモ核が３個体（１つは半分ほど欠けている）検出されている。これらの大きさは長さが2.609cm、2.630cm、2.750cm、幅は2.226cm、2.059cm、不明、厚さは1.791cm、1.796cm、1.482cmである。現生桃の種核の大きさは3.5－４cm以上あり（太田　1986)、それに比べればかなり小さい。奈良県天理市布留遺跡出土の桃核の大きさは平均して古墳時代前期では長さが2.23cm、幅は1.88cm、厚さが1.52cm、古墳時代中期～後期では長さが2.38cm、幅1.87cm、厚さ1.46cm、奈良時代末～平安時代では長さ2.55cm、幅2.03cm、厚さ1.52cmであり（太田　1986)、当遺跡出土のモモ核は布留遺跡のものの平均値よりやや大きいようである。

花粉化石群集帯Ⅱにはいるとニヨウマツ類やスギ属が急激に分布を広げたと思われる。史跡永福寺跡における花粉分析の結果ニヨウマツ類が優占しており、それ以前はシイ・カシ類を主とし、ナラ類、スギ、ケヤキ、クマシデ属－アサダ属などからなる森林が形成されていたと考えられた（吉川　1990)。これらの樹木は鎌倉幕府成立後の人間の干渉により一部伐採され、その跡地にアカマツなどの二次林が形成されたであろう。また永福寺におけるその後の発掘調査でニヨウマツ類の増加（クロマツの植栽による）は13世紀後半からと考えられ、スギ属についても13世紀から14世紀にかけて有用材として利用されたスギ林は急速に破壊され、その後になって植林がなされたのであろう（鈴木　1991）と考えられた。このように花粉化石群集帯Ⅱにおけるニヨウマツ類やスギ属の増加は人間の森林への干渉による結果と思われる。

こうした人間の植生への干渉は草本類にもおよんだであろう。すなわち溝周辺において目立つ存在であったアカザ科－ヒユ科やヨモギ属の出現率は急激に減少しており、これら雑草類が除去された結果が示されていると思われる。

5．まとめ

以上のように当政所跡における12世紀末から13世紀前半頃の植生は鎌倉幕府成立後人間の干渉を強

く受けたとみられ、スギ属やコナラ亜属、アカガシ亜属などの樹木類はまばらに生育していたのみで、アカザ科－ヒユ科やヨモギ属などの雑草が目立つ植生であったと思われる。

その後遺跡周辺では二次林化が進み、また植林などによりニヨウマツ類やスギ属が分布域を広げたのであろう。

<引用文献>

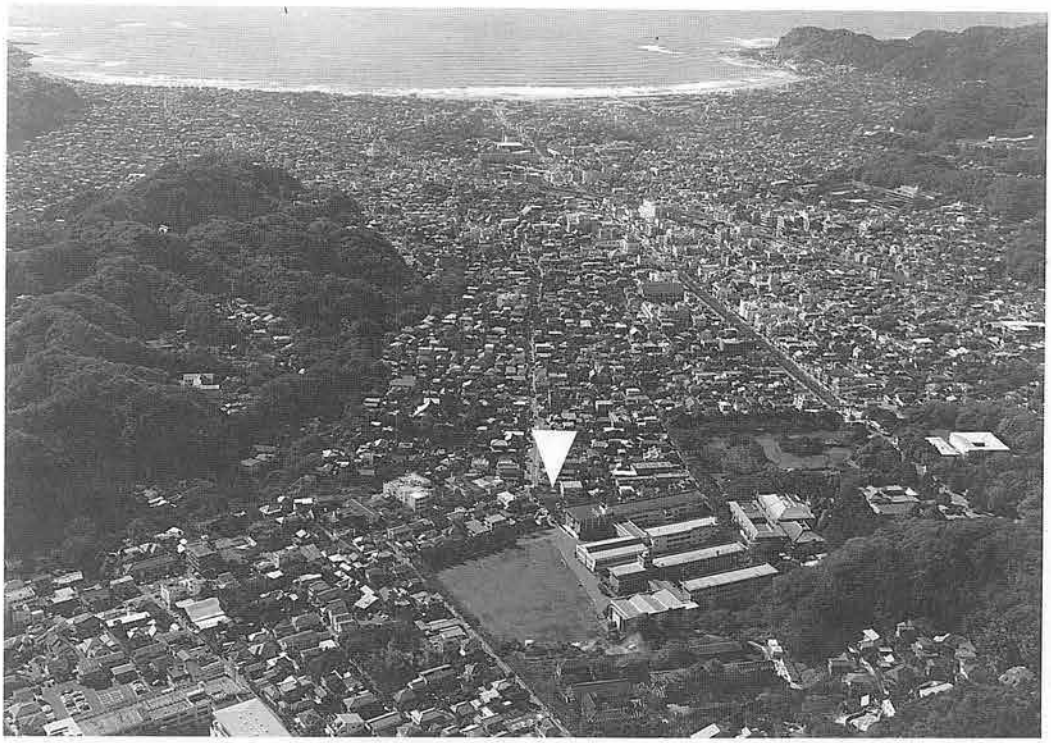
太田三喜（1986）古代遺跡出土の桃核について。考古学と自然科学、19、P85－99。

鈴木　茂（1991）史跡永福寺跡の溝内堆積物の花粉化石。鎌倉市二階堂国指定史跡永福寺跡国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係わる発掘調査概要報告書－平成二年度－、P26－32。

辻誠一郎（1988）花粉分析に見る人間と自然。週間朝日百科　日本の歴史・別冊歴史の読み方3　考古学への招待、P51－52

吉川昌伸（1990）史跡永福寺跡における花粉化石。鎌倉市二階堂国指定史跡永福寺跡国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係わる発掘調査概要報告書　平成元年度－、鎌倉市教育委員会、P20－34。

写　真　図　版



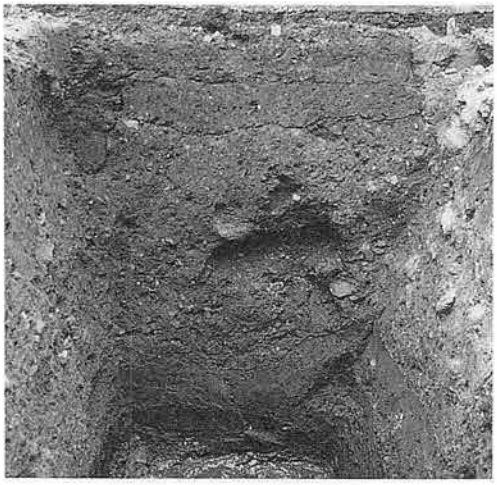
▲A．調査地点遠景（北から）

▲B．調査地点近景（東から）　1．雪ノ下三丁目965番地点（政所III地点）
2．雪ノ下三丁目966番1地点（政所II地点）

PL.2

▲A．Ｉトレンチ全景（南から）

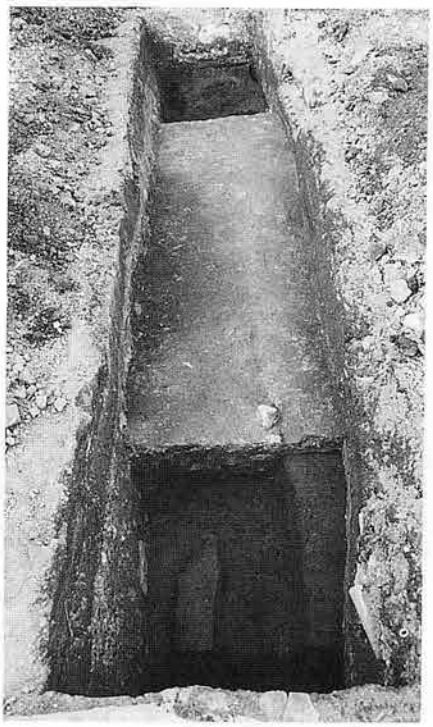
▲B．Ｉトレンチ北壁土層堆積状況（南から）



▲C．Ｉトレンチ南壁土層堆積状況（北から）

◀D．Ｉトレンチ東壁土層堆積状況（西から）

◀A．IIトレンチ全景（南から）
道路地業面検出時

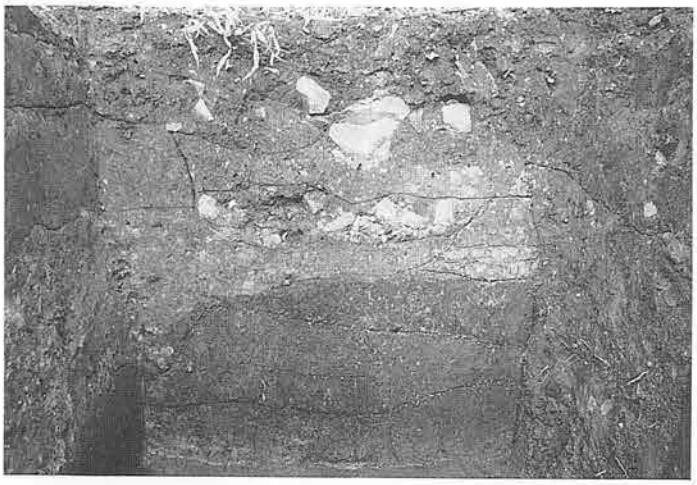


▲B．IIレンチ全景（南から）
北、南深掘り箇所にて。
溝V、VI掘り下げ終了後。

◀C．IIトレンチ全景（南から）
北、南深掘り終了後。
溝の東側が道路地業である。

PL. 4

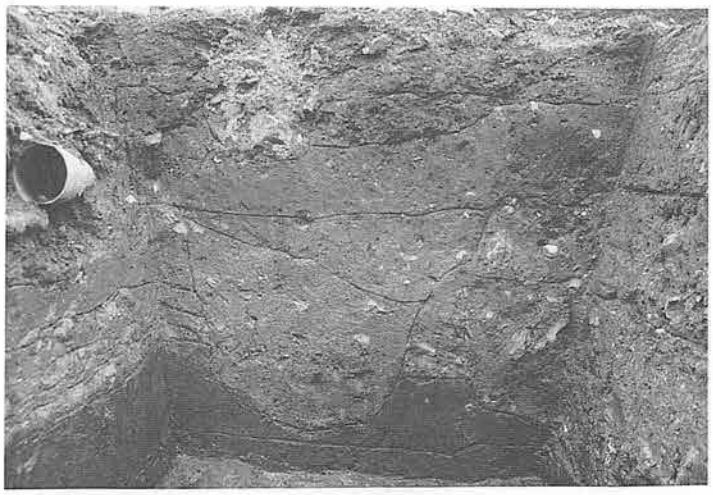
◀A．Ⅱトレンチ
北深掘り箇所（北から）



◀B．Ⅱトレンチ
北壁土層堆積状況（南から）

◀C．Ⅱトレンチ
調査風景スナップ（南から）

◀A．Ⅱトレンチ
南深掘り箇所（南から）
溝Ⅴ、Ⅵ掘り下げ終了後。



◀B．Ⅱトレンチ
南壁土層堆積状況
（北から）

◀C．Ⅱトレンチ
東壁土層堆積状況
（西から）

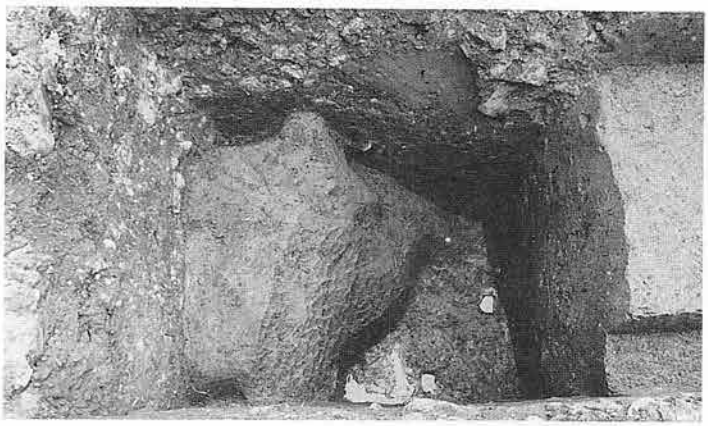
PL.6

◀A　B▶

Ⅲトレンチ　上層道路地業検出状況（南から）

◀C　D▶

Ⅲトレンチ　下層道路地業検出状況（南から）



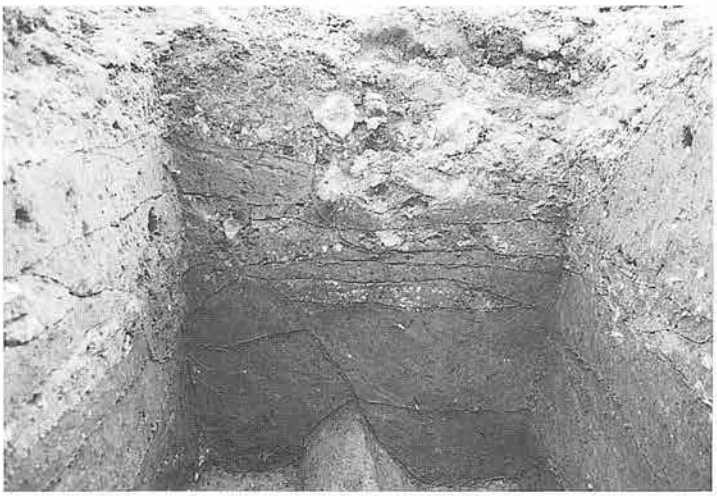
◀A．Ⅲトレンチ
北深掘り箇所（西から）
近世土壙１検出状況

◀B．Ⅲトレンチ
北深掘り箇所（北から）
溝Ｂ検出状況

◀C．Ⅲトレンチ
北壁土層堆積状況（南から）

PL.8

◀A．Ⅲトレンチ
南深掘り箇所（南から）
溝A、B掘り下げ終了後



◀B．Ⅲトレンチ
南壁土層堆積状況（北から）

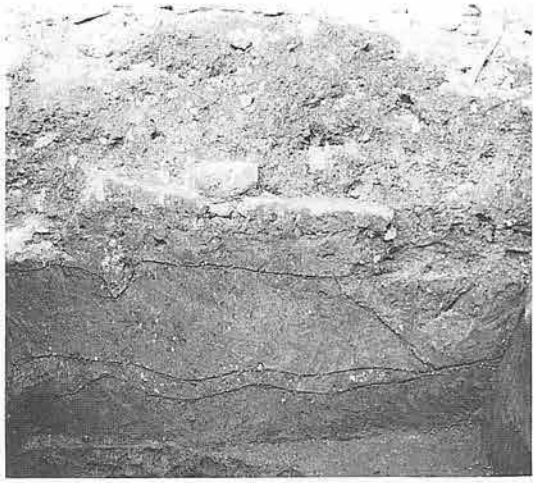
◀C．Ⅲトレンチ
道路地業断面（西から）

土丹地業

細砂及び貝殻細粒による地業

暗褐色粘質土

▲A．Ⅳトレンチ　全景（南から）

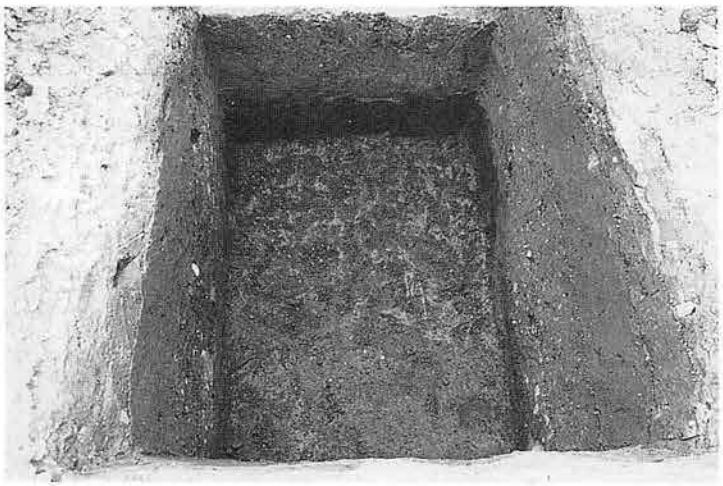


▲B．Ⅳトレンチ　北壁土層堆積状況（南から）

▲C．Ⅳトレンチ　井戸覆土堆積状況（東から）

◀ D．Ⅳトレンチ　井戸全景（南から）

PL.10



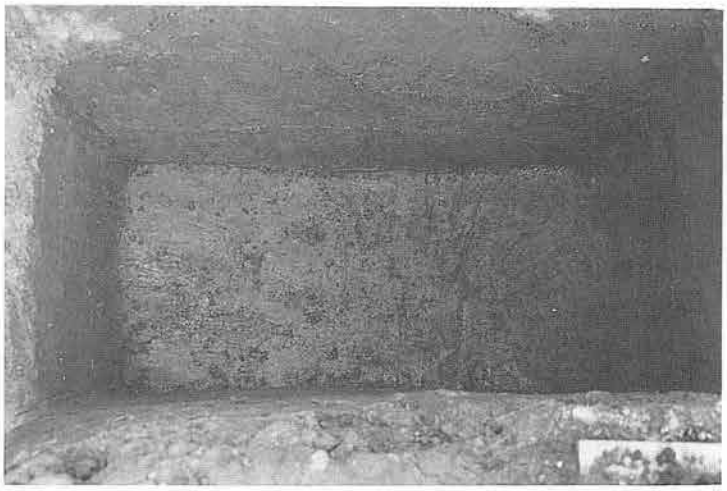
◀A．Ⅳトレンチ南深掘り箇所
近世土壙２（南から）

◀B．Ⅳトレンチ　南壁土層堆積状況
（北から）

◀C．Ⅳトレンチ　近世土壙２
覆土堆積状況（東から）

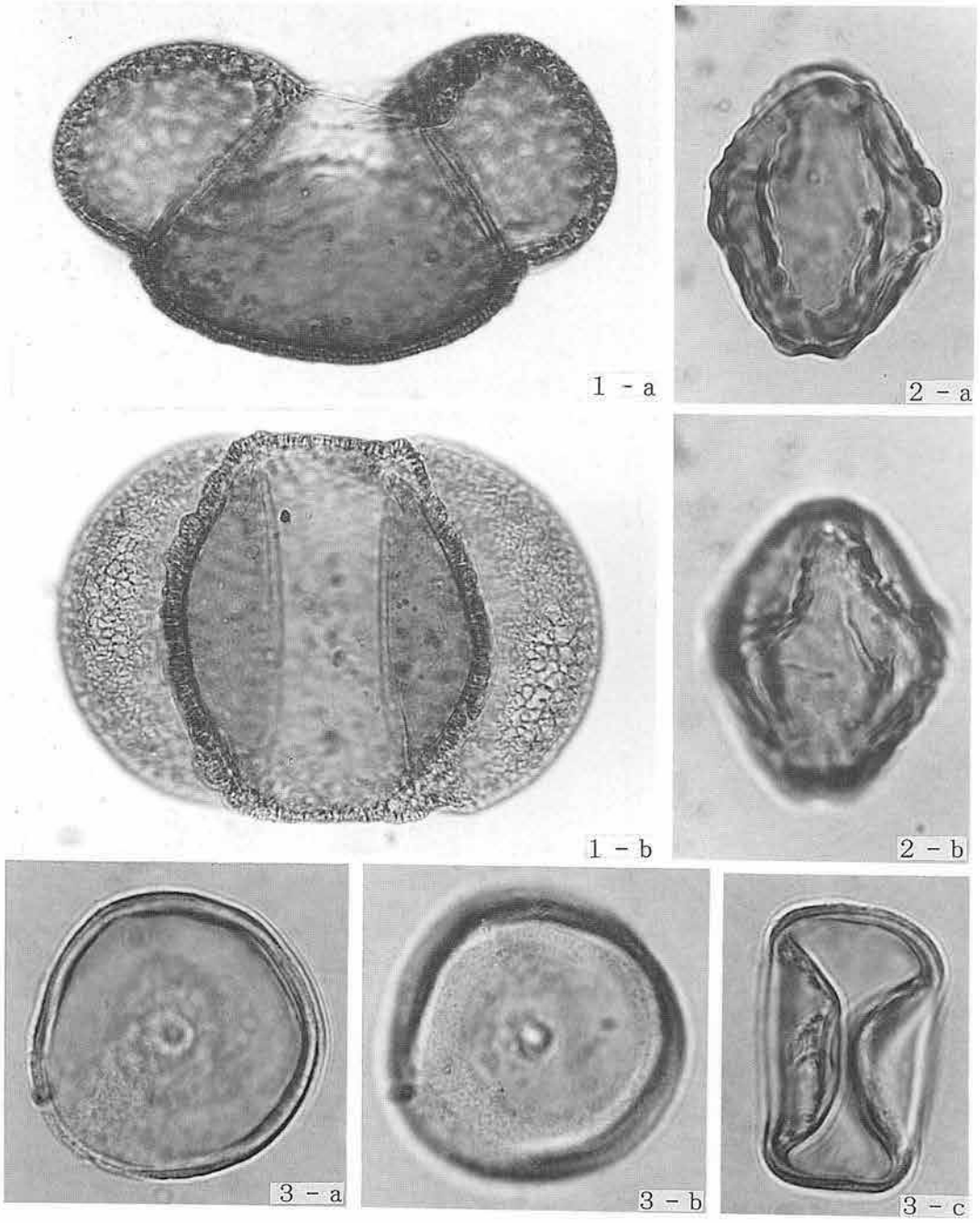
◀A．Ⅳトレンチ北部東拡張区
全景（南から）

◀B．同上、溝D土層堆積
（南から）



◀C．Ⅳトレンチ南部東拡張区
全景（南から）

PL.12



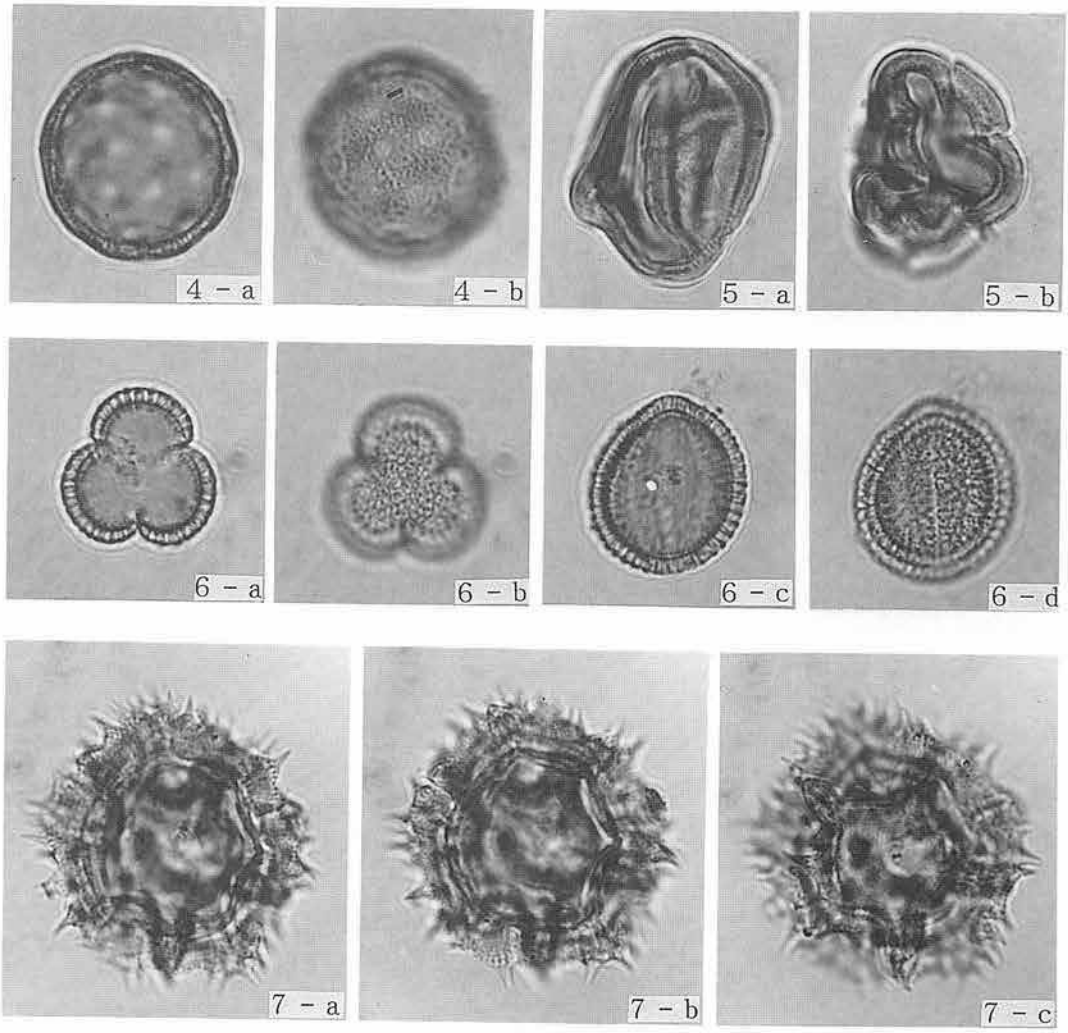
図版1　政所跡溝内堆積物中の花粉化石

図版1　政所跡溝内堆積物中の花粉化石

1：マツ属複維管束亜属　試料No.6　PLC.SS 521　(×850)

2：ニレ属－ケヤキ属　試料No.3　PLC.SS 519　(×1100)

3：スギ属　試料No.2　PLC.SS 522　(×1100)



図版２　　政所跡溝内堆積物中の花粉化石

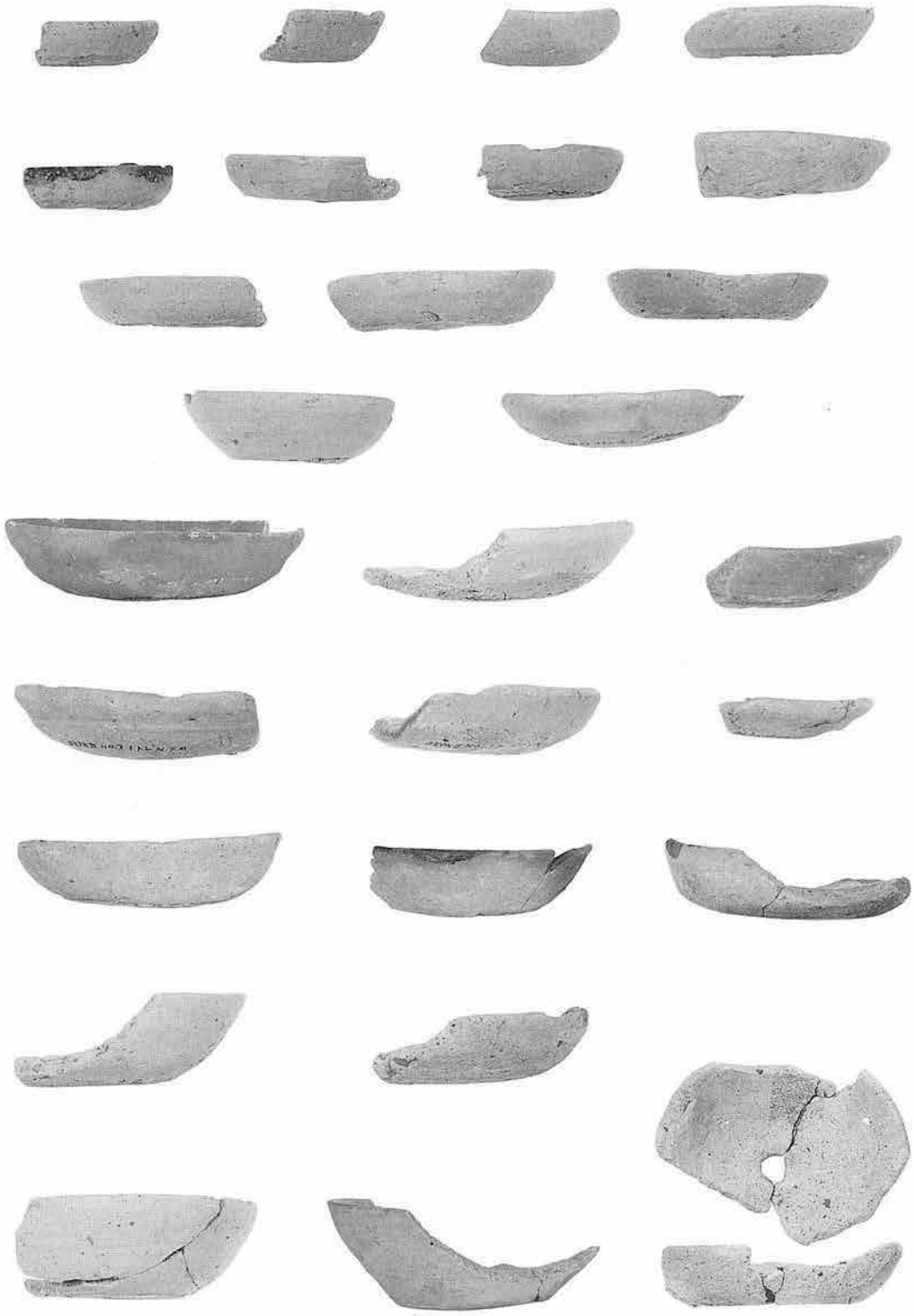
４：アカザ科－ヒユ科　　試料No.３　　PLC.SS 518

５：ワレモコウ属　　試料No.２　　PLC.SS 524

６：アブラナ科　　試料No.６　　PLC.SS 520

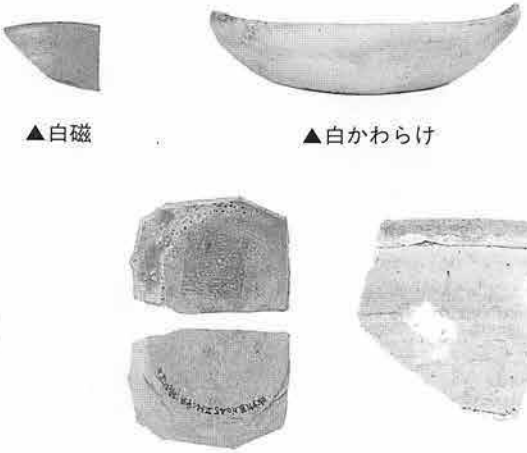
７：タンポポ亜科　　試料No.３　　PLC.SS 517　　（×1100）

PL.14

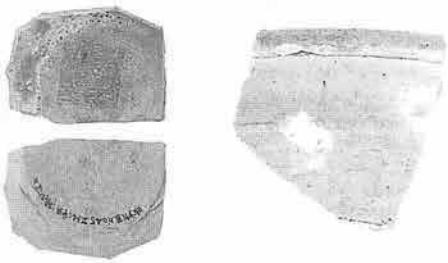


▲かわらけ

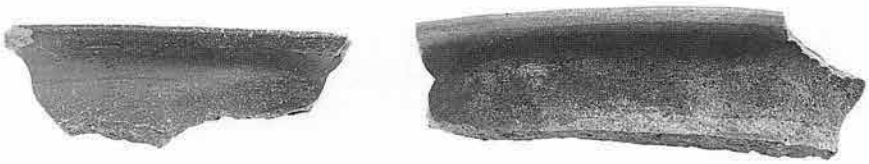
▲青磁

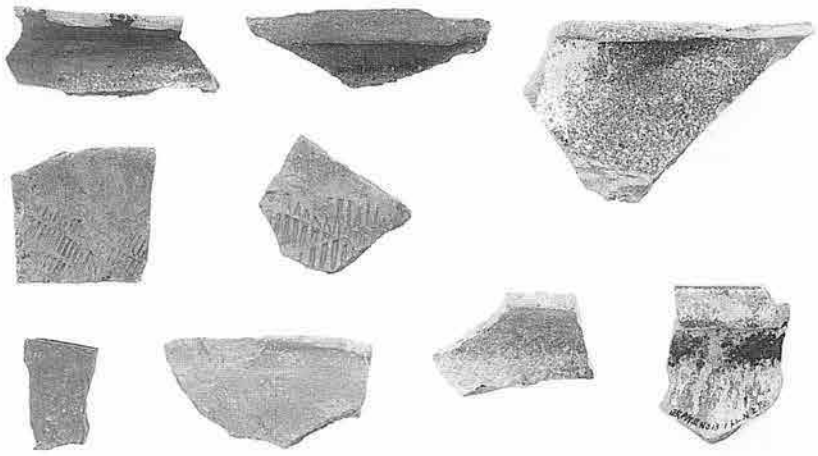


▲白磁　▲白かわらけ



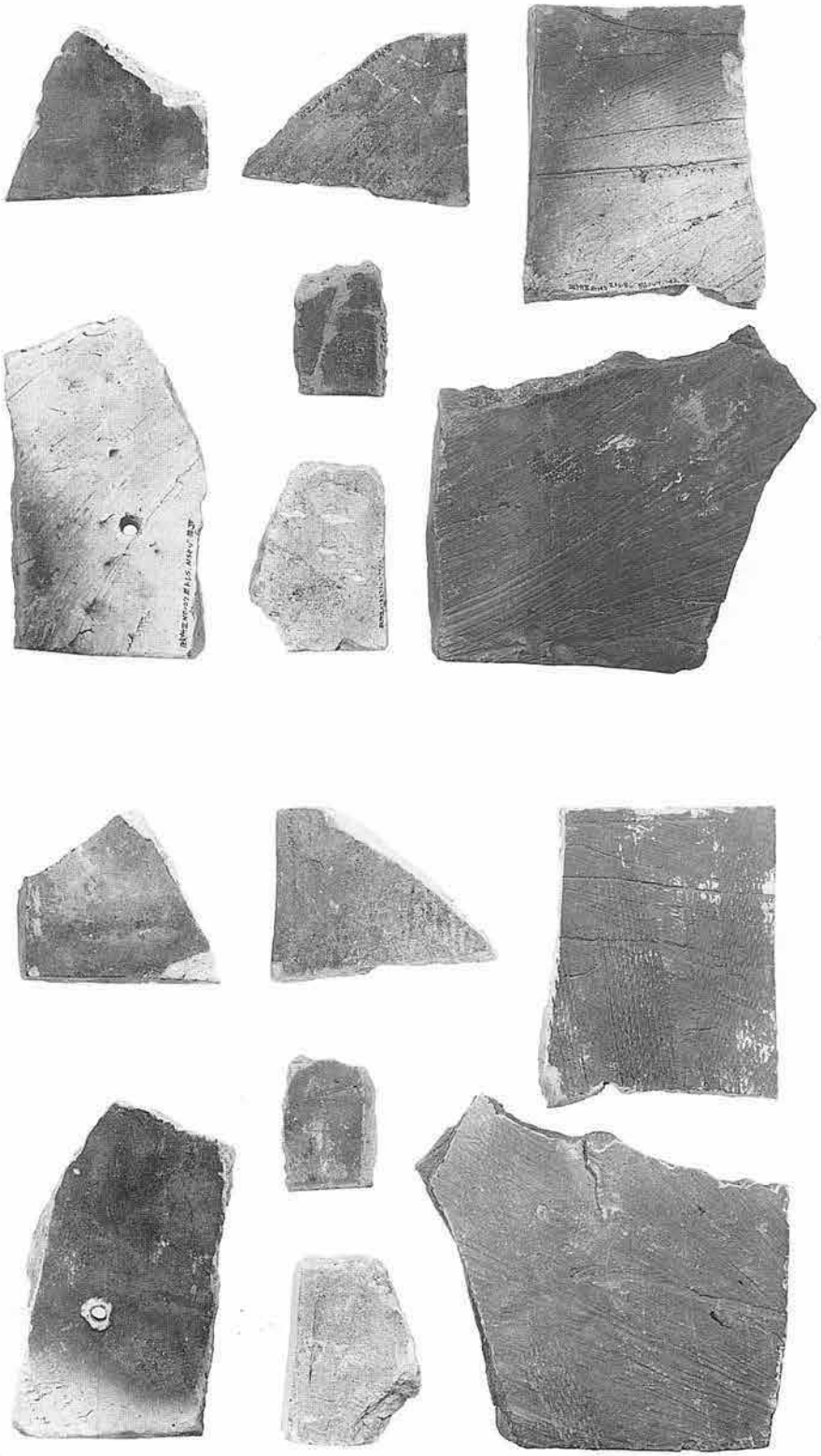
▲瀬戸、美濃

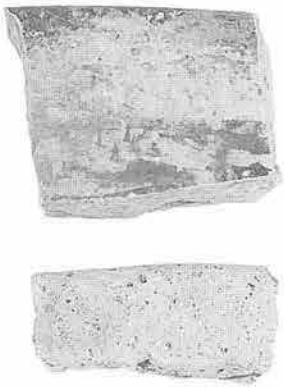




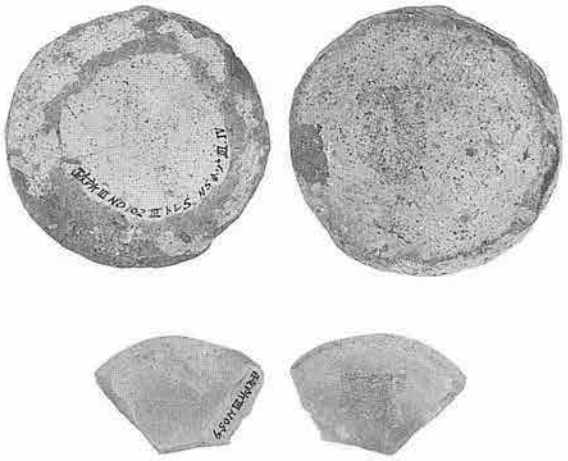
▲常滑、渥美、山茶碗窯系

PL.16





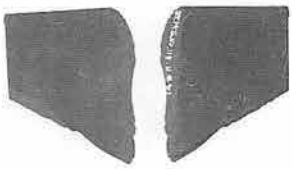
▲手焙り



▲土製品

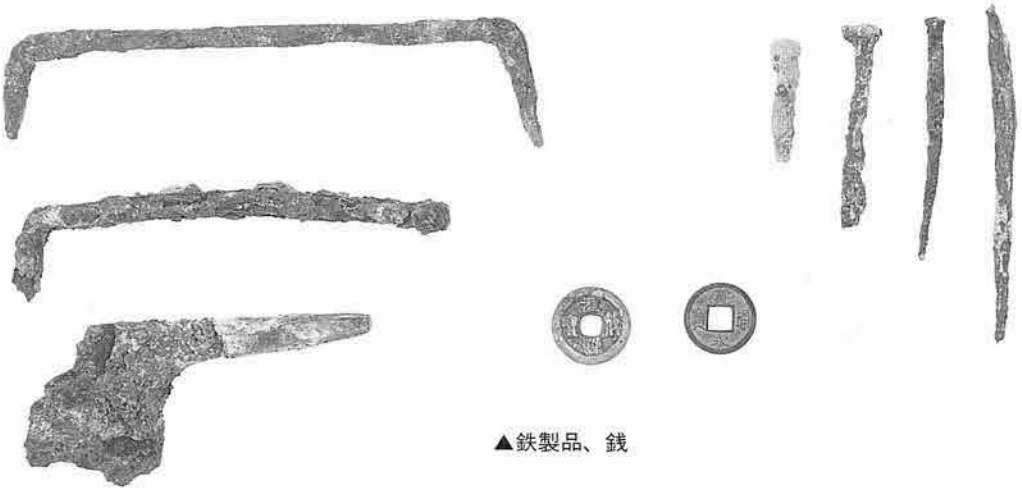
▲漆器

▲研磨手焙り



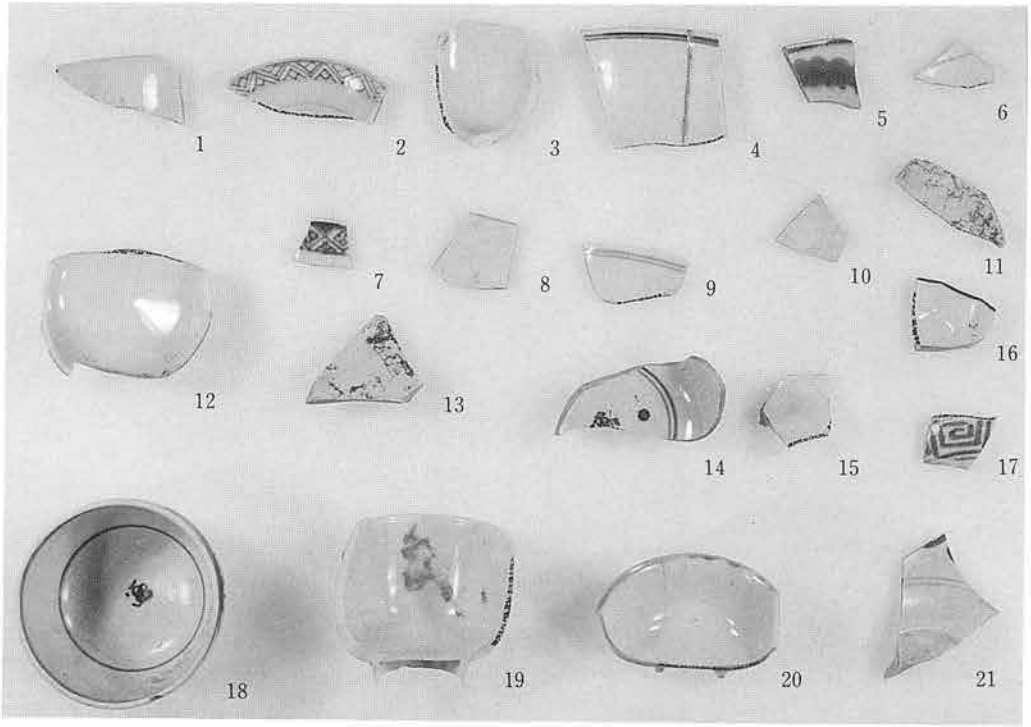
▲砥石

▲種子



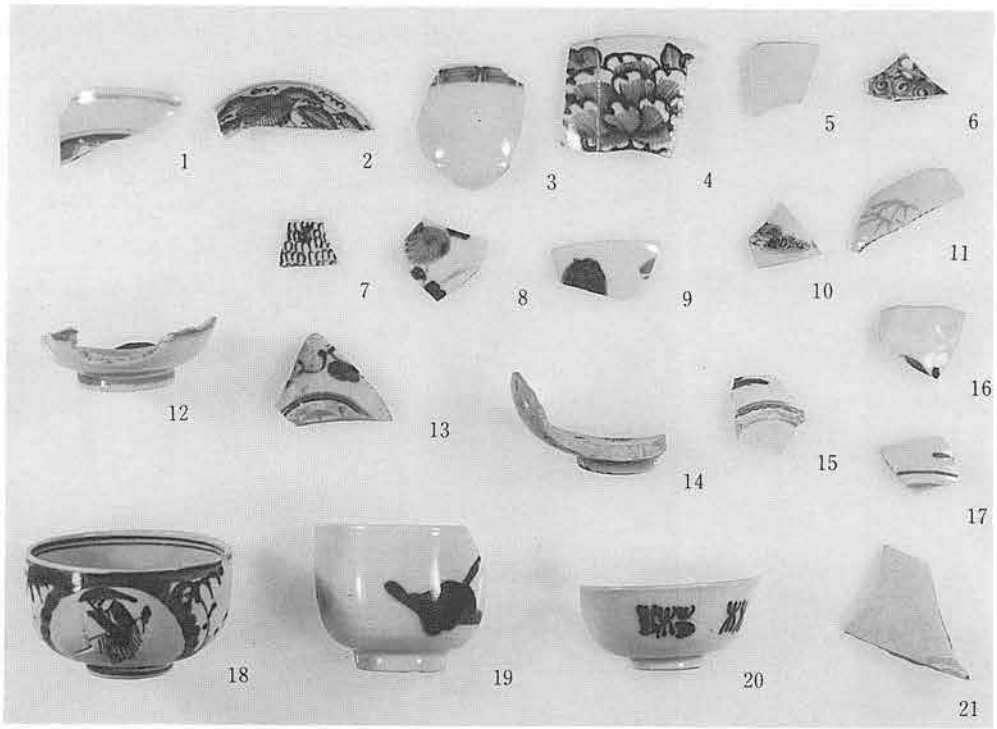
▲鉄製品、銭

PL.18



▲染付（内面）

▼染付（外面）



23

22

24

25

27

28

29

30

26

31

32

33

近世陶器類

3．若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町二丁目12番15地点

例　言

1．本報は、鎌倉市小町二丁目12番15における住居併用店舗建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．発掘調査は、149m²対象地の内住居分80m²を国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が実施した。

調査期間は、土工事の都合による中断期間を含め、平成２年11月２日から平成３年３月26日までである。

3．本報の執筆・編集は菊川が行い、中世遺物の実測は長田、樋口、石丸、須藤に依頼した。また、遺構トレースには石丸の協力を得た。

4．本報に使用した写真は、遺構・遺物ともに菊川が撮影した。

5．調査体制は以下の通りである。

主任調査員　菊川英政
調　査　員　片岡睦枝
調査補助員　長田夏子、樋口美江、須藤千佳子、石丸運人、山田健二、園部雅之
協力機関　（社）鎌倉市高齢者事業団、（株）高松建設

6．出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例　言 …… (194)
目　次 …… (195)

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と環境 …… (197)
第二章　調査の経過と概要 …… (197)
第三章　検出遺構と出土遺物 …… (198)
　第１節　層序と生活面 …… (198)
　第２節　検出遺構 …… (198)
　第３節　出土遺物 …… (202)
第四章　まとめにかえて …… (204)

挿　図　目　次

図１　遺跡位置図 …… (196)
図２　グリッド設定図 …… (197)
図３　土層堆積図 …… (198)
図４　検出遺構全体図 …… (199)
図５　木組溝 …… (200)
図６　井戸（古代） …… (201)
図７　井戸出土遺物 …… (202)
図８　第１面上包含層出土遺物 …… (202)
図９　第２面上包含層出土遺物 …… (203)
図10　第３面上包含層出土遺物 …… (203)

図　版　目　次

図版１　Ｉ区全景 …… (205)
図版２　II区全景 …… (206)
図版３　木組溝・井戸 …… (207)
図版４　出土遺物 …… (208)

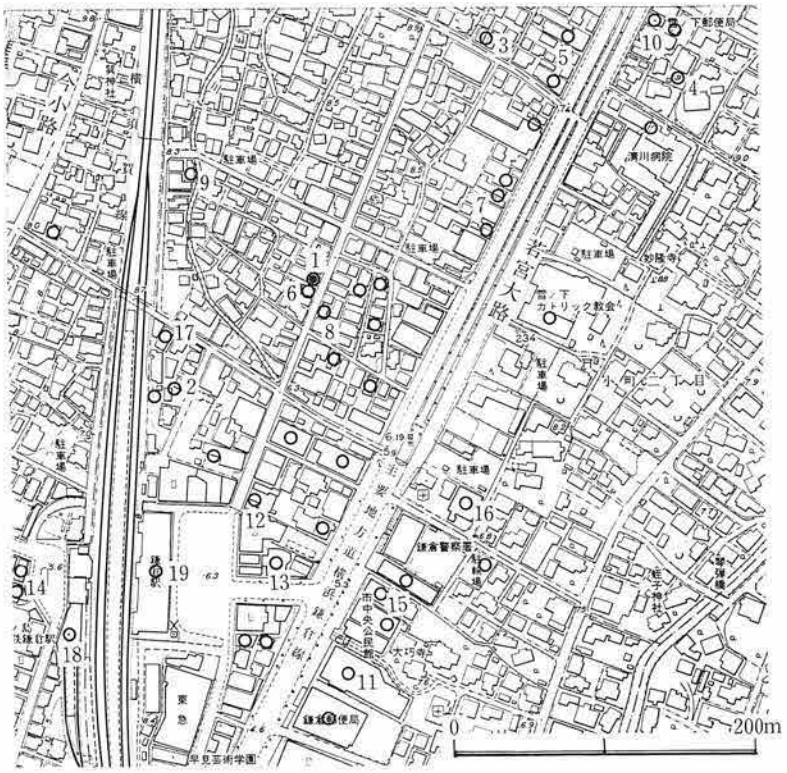


図1　遺跡位置図

調査地点および既調査地点の文献一覧

1．調査地点
2．『鎌倉市埋蔵分化財緊急調査報告書2』　5頁　鎌倉市教育委員会　S.61
3．『　同　3』　5頁　同　S.62
4．『　同　3』　101頁　同　S.62
5．『　同　4』　9頁　同　S.63
6．『　同　5』　163頁　同　H.1
7．『　同　6』　261頁　同　H.2
8．『　同　6』　301頁　同　H.2
9．『　同　7』　33頁　同　H.3
10．『　同　7』　239頁　同　H.3
11．『(推定) 藤内定員邸跡遺跡』　鎌倉市教育委員会　1985
12．『鎌倉考古学研究所調査研究報告　第一集』5頁　鎌倉考古学研究所　1982
13．『　同　第一集』25頁　同　1982
14．『　同　第二集』29頁　同　1982
15．『小町一丁目309番5地点発掘調査報告』(推定) 藤内定員邸跡発掘調査団　1983
16．『小町二丁目345番2地点遺跡』同地点遺跡発掘調査団　1985
17．『小町一丁目120番1地点遺跡』風門社ビル発掘調査団　1989
18．『蔵屋敷東遺跡』江ノ電鎌倉ビル発掘調査団　1983
19．『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会　1984

第一章　遺跡の位置と環境

調査地点はJR鎌倉駅の北方約250mのところに位置し、現在“小町通り”と呼ばれる商店街に面した場所にある。

この付近一帯は店舗・個人住宅等が密集し、発掘調査もかなりの件数が実施されている。その成果によれば、若宮大路と今小路に挟まれた一帯には低地が広がり、鎌倉駅の辺りと若宮大路東側は微高地を呈していたらしい。低地部分では、往時の様子を伝える文献資料はないものの、掘立柱建物、溝、井戸、土壙等の遺構、漆塗りの椀・皿をはじめとする多量の木製品の出土が目立ち、中世都市の生活を窺い知る貴重な資料を提供してくれる。

周辺部の調査について詳述する余裕はないが、概報、報告書の刊行された遺跡（地点）を前頁に記したので参照して頂きたい。

第二章　調査の経過と概要

本調査に先立ち、建物基礎杭の入る8箇所が平成2年10月末から10日間の予定で調査された。この先行調査では、2×2m幅のトレンチを地山まで掘り下げて行われたが、湧水量の多さから、調査区北側の4箇所は完掘を断念した。

本調査は平成3年1月に開始し、3月をもって終了した。調査にあたり、事務所と排土置場を確保するため調査区を2分し、西側のI区から発掘を行った。なお、II区に置いた事務所の真下には調査前に埋められた井戸があり、この部分は除外した。

調査区には4m方眼のグリッドを設けた。グリッドの南北軸は磁北に対して27.5°東に傾き、若宮大路中心軸とほぼ合致している。

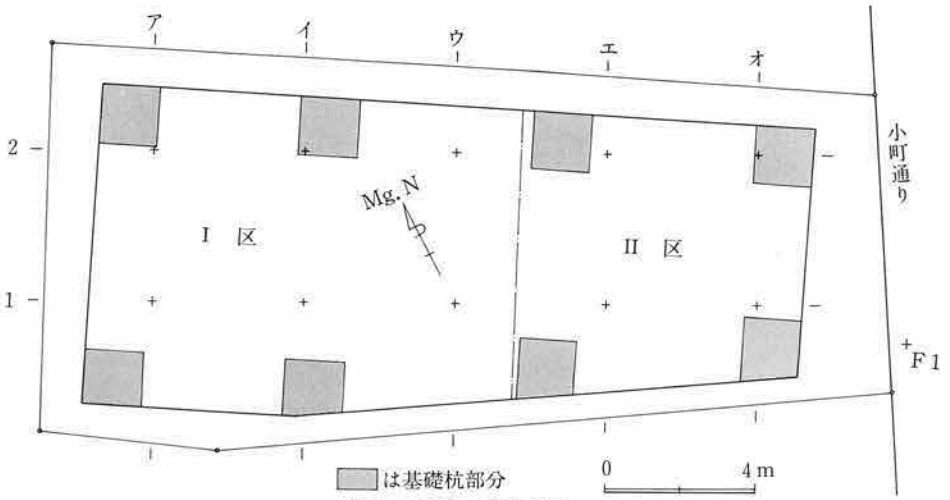


図2　グリッド設定図

第三章　検出遺構と出土遺物

第1節　層序と生活面

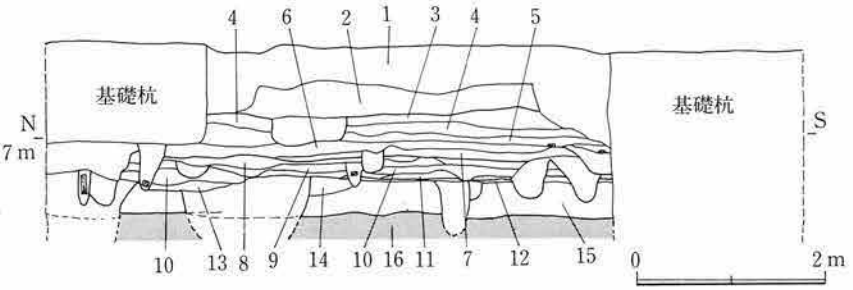
土層堆積図はI区とII区の境、南北方向の図を使用した。

1層は板ガラス・コンクリート塊を混入する近現代の客土層で、2層（土丹層）はその床土と思われる。

3層以下が中世遺物包含層で、4層（土丹層）は生活面の可能性が強い。当初、4層上面での遺構検出に努めたが、湧水と霜柱の影響で精査面が徐々に下がり、結果的には8層上面を第1面とせざるを得なかった。したがって、第1面の遺構はかなりの時期幅をもつものである。

8層から11層までは暗灰色を基調とする粘土が堆積し、12層は貝殻粒を混入する硬い砂層である。12層上面での遺構検出は容易で、第2面として調査を行った。

15層は中世基盤層と考えられているが、精査中に中世遺物と古代遺物がかなり出土しており、16層を第3面として最終的な遺構確認を行った。16層は暗青灰色を呈する沖積砂層で、ここで検出された遺構の掘り込み面は、すべて15層中に存在すると思われる。したがって厳密な意味での生活面ではない。



1．表土層　2．土丹層　3．暗茶褐色土　4．土丹層　5．暗褐色砂質土　6．暗褐色砂質土
7．暗褐色粘質土　8．暗灰褐色粘土（第1面）　9．暗灰褐色粘質土　10．暗灰色粘土
11．暗黄褐色粘質土　12．貝殻砂層（第2面）　13．炭化物層　14．暗茶褐色粘土　15．黒褐色粘土
16．暗青灰色砂層（第3面）

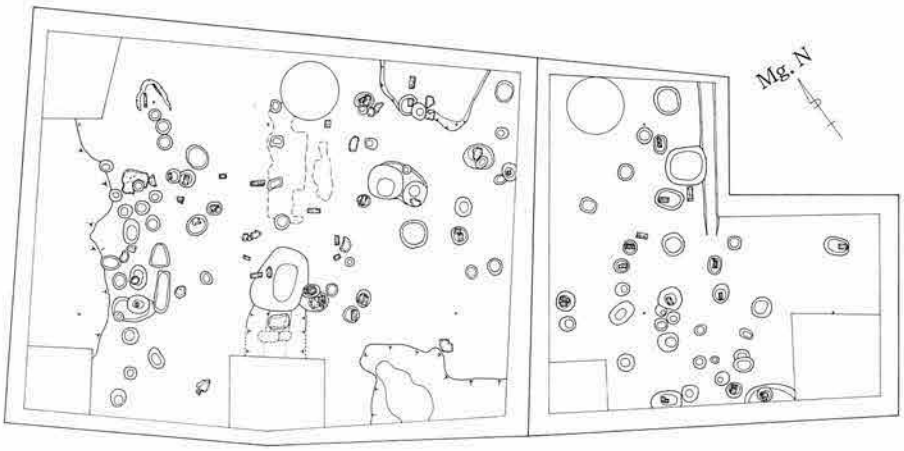
図3　土層堆積図

第2節　検出遺構

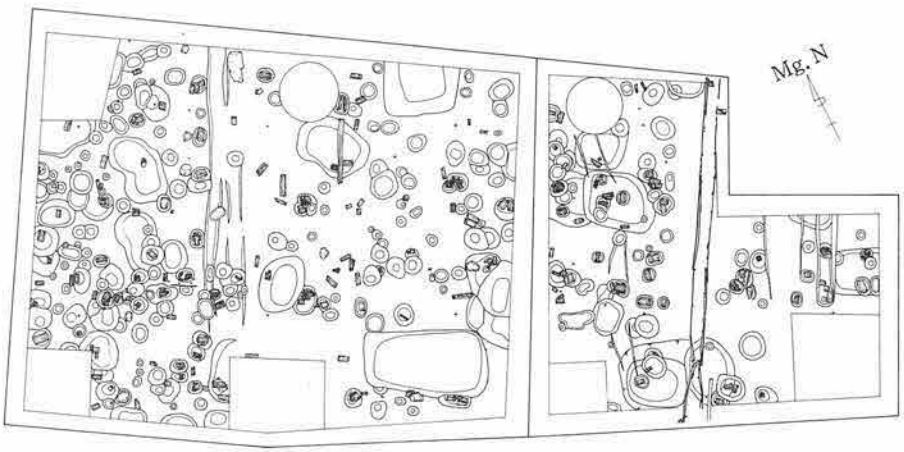
第1面では柱穴、土壙、溝（？）が検出された。調査区の西端と中央部南北壁寄りは、土留め作業の際に踏み荒され、遺構検出が不可能な部分である。

柱穴は礎板を置くものと素掘りのものがあり、礎板をもつ何穴かは、並びが確認されている。調査区中央部では、その並びと平行して、南北方向に細長い土丹版築面と土壙、溝状の落ち込みが掘られている。

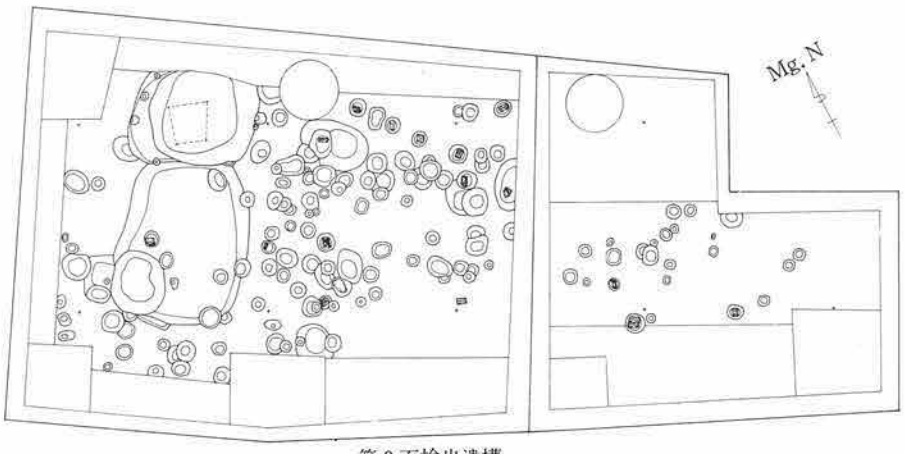
溝状の落ち込みは、南側の隣接する調査地点で検出された溝の続きと思われるが、基礎杭部分で切られ、明確にはできなかった。内部に大形の凝灰岩切石3個が投げ込まれていた。



第 1 面検出遺構



第 2 面検出遺構



第 3 面検出遺構

0　4 m

図 4　検出遺構全体図

第２面は遺構密度が高く、切り合いも激しい。第１面で見逃した遺構も当然含まれている。

柱穴は調査区西側に集中して検出された。柱根の残るものもあるが、建物規模を復元するには至っていない。また、礎板だけが検出されているものは、上面から掘り込まれた柱穴の名残りか、第２面建物の束柱下の礎板であるか判断は出来なかった。

土壙は調査区中央部で検出された。隅丸長方形を呈するものが多く、１m×1.5m程の中形土壙は２～３基まとまって掘られている。1.5×2.5m、深さ0.7mを測る大形土壙は南壁寄りにあり、同一規模と思われる大形土壙の一部が北壁際でみつかっている。この２つの大形土壙の長軸は、互いに直交する位置にある。

溝は計６条が検出され、その内の１条に木組の護岸施設が残る。溝の主軸はすべて南北方向である。調査区西側の溝は、２条が平行しており、浅いため所々で分断され消滅している。溝の西側肩部に並ぶ柱穴は、１～２mの間隔を保ち、柵などの構築物があったと考えられる。木組溝については後述する。

第３面は中世基盤層下で精査・発掘を行ったため、中世遺構の掘り残しと古代遺構とが検出された。

柱穴の大部分は中世期の遺構であるが、調査区中央部の掘立柱建物址は、出土遺物が少なく速断はできない。南北１間、東西２間程の建物と考えられる。

古代遺構としては、井戸と竪穴状遺構が検出された。

竪穴状遺検は井戸に接して作られ、短辺2.5m、長辺3.5m、確認面からの深さは約35cmを測る。床面は平坦でなく、壁の立ち上がりも緩やかである。柱穴はないものの、南西部角隅に深さ25cm程の窪みをもっている。出土遺物からみて、井戸と同時期のものと考えられる。井戸については後述する。

木組溝

木組溝はII区第２面で検出された。溝幅23cm、深さ25cm、主軸方位はN－31°－Eを測る。掘り方を伴わず、壁面に直接板材を立てかけ、内側を杭で止めて構築する。

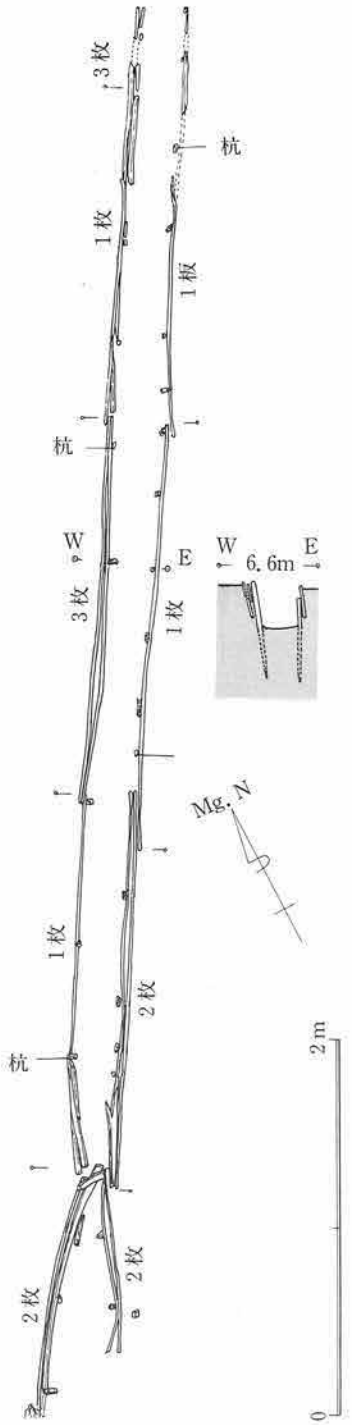


図５　木組溝

使用された板材は、幅９～13cm、長さ205～208cm、厚さ１～1.5cmの柾目材で、１枚ないし縦に２枚積んで壁とするが、後者の場合、更に１枚を杭との間に入れ、３枚で使用している箇所もある。

杭は2×3㎝程の角材で、43～50㎝の長さのうち、先端9㎝ばかりを尖らせている。壁板の継ぎ目に1箇所と中間に数箇所打ち込み、壁板の倒壊を防いだものと思われる。

なお、この木組溝は、南側に隣接するビルの発掘調査では検出されず、途中で止まるか東西方向へ曲がっていると考えられよう。

井戸

井戸はⅠ区第3面で検出された。出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

掘り方は1辺約1.8mの隅丸方形を呈し、西側にテラス状の低段がつけられる。この低段の壁際には直径10～15㎝程の小穴が並び、反対側の井戸肩部にも2穴みられる。杭穴状の小穴で、上屋構造を考えるには無理がある。

井戸底面の検出は、壁面が崩落し始めたため、断念せざるを得なかった。ボーリング棒で探査したところ、確認面から約4mの深さの井戸と推測される。

井戸枠は確認面から約1.5m下に遺存した。土圧を受けて変形するが、1辺75㎝の正方形を呈している。構造としては、枘をあけた支柱を四隅に立て、各々を横桟でつなぐ。その外側には縦板を2～3枚並べ、内側には枘を入れた横板を3段に積んで補強している。最下段の横板は土砂が流入し検出できなかった。各部材の詳細は以下の通りである。

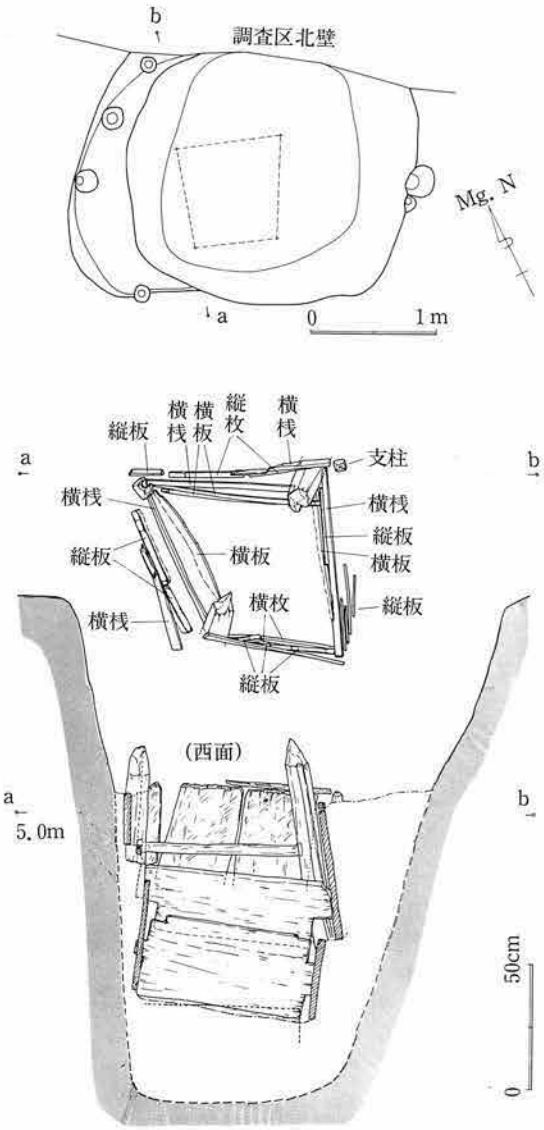


図6　井戸（古代）

支柱は1辺9㎝の角材で、面取りをして断面6角形を呈すものもある。全長1.4m程が遺存し、下端から1m上に横桟用の枘穴をあける。それと直交する側には、縦に溝を抉って横桟をすべり込ませていたようである。

横桟は4×5㎝の角材で、長さ65㎝。両端2㎝程が支柱枘穴に組み込まれている。

縦板は幅25～30㎝、厚さ3㎝、下端から63㎝程が遺存する。

横板は縦幅25～30㎝、横幅75㎝、厚さ3㎝で、両端に5㎝程の抉りを入れて組み合わせている。

いずれの木材も材質については未鑑定で、他に出土遺物はない。

第３節　出土遺物

図７は井戸覆土中の遺物である。

１は灰釉陶器皿。口縁の一部を欠く。三日月高台、灰釉は刷毛塗りである。見込み部は滑らかで転用された可能性もある。口径14cm、高台径6.2cm、器高2.9cm。

２は須恵器坏。約１/４残存。底部は回転糸切り無調整。白色針状物質含有。口径11.6cm、底径6.6cm、器高3.1cm。

３は須恵器坏。約１/７残存。体部外面の墨書文字は判読不能。白色微粒を含有。口径11.6cm。

４～６は須恵器坏の底部。いずれも約１/４が残存。底部調整は４が回転糸切り無調整。５・６が外周回転ヘラケズリ。白色針状物

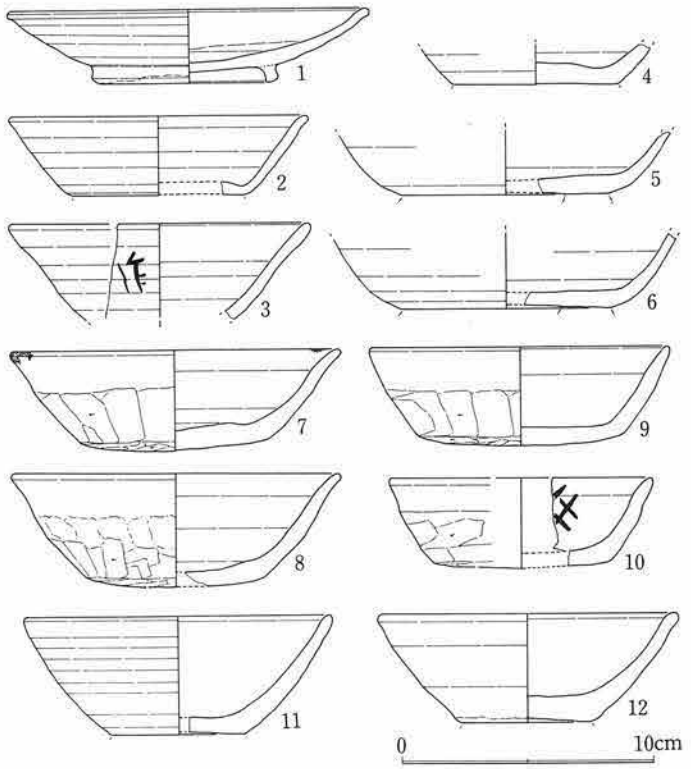


図７　井戸出土遺物

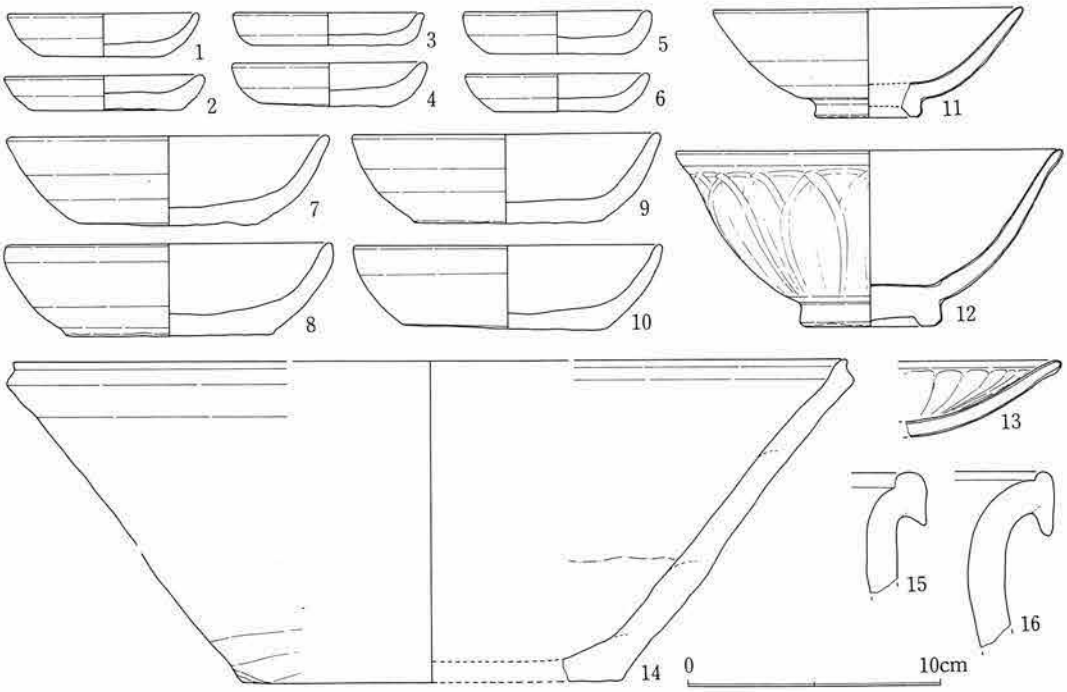


図８　第１面上包含層出土遺物

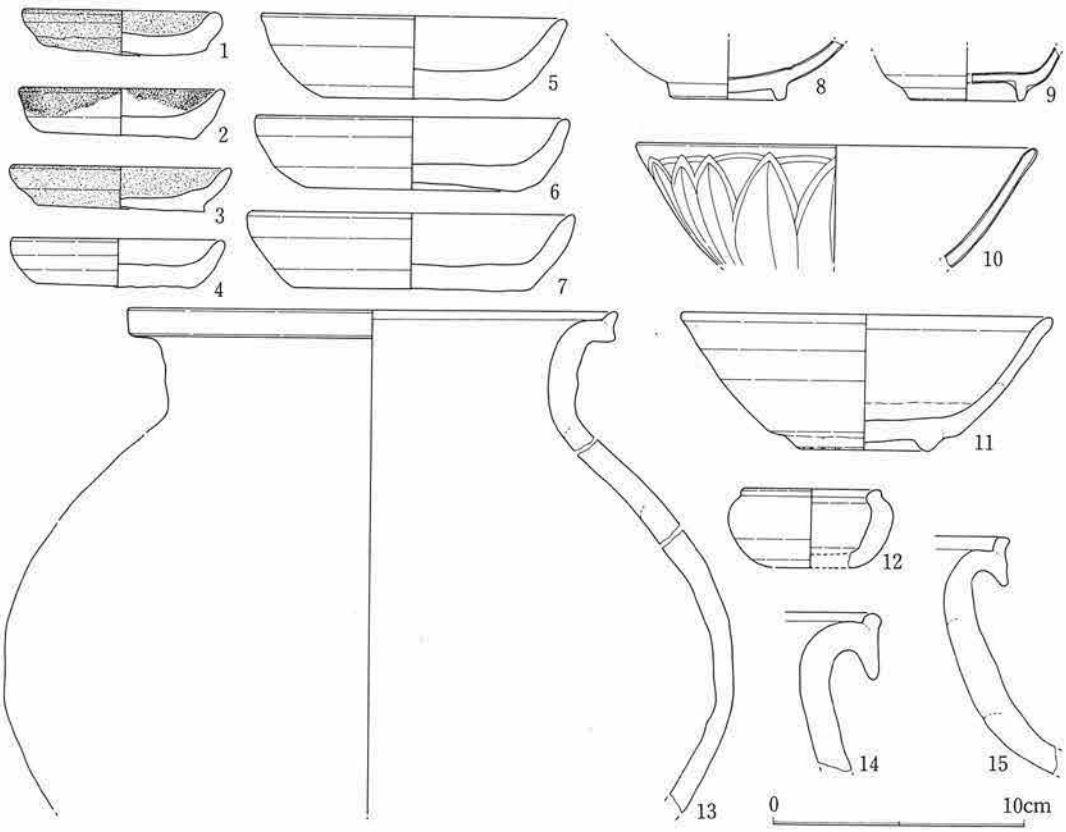


図9　第2面　上包含層出土遺物

質は5・6に多く含有。底径は順に、6.6cm、8.2cm、8.4cm。

7～10は土師器坏。7は略完形。口唇部の黒色化した部分は焼成時のものか。8は約1/4残存。口縁部下に指頭痕が残る。9は約1/3残存。10は約1/6残存。10の体部内面には墨書文字「井」が残る。

11・12は土師質土器。約1/3～1/4が残存。底部は回転糸切り無調整である。11は体部外面の轆轤目が顕著。内面は丁寧なナデ調整。口径12cm、底径5.2cm、器高4.7cm。12は口唇部が軽く外反。内底面に渦巻状の整形痕が残る。口径11.6cm、底径5.2cm、器高4.3cm。ともに白色針状物質含有。

図8は第1面上包含層出土遺物。

1～10はかわらけ皿。1は薄手タイプの小皿。7は口縁が外反傾向を示す皿である。

11～13は青磁。11は輪花碗。12は鎬蓮弁文碗。13は内面に蓮弁

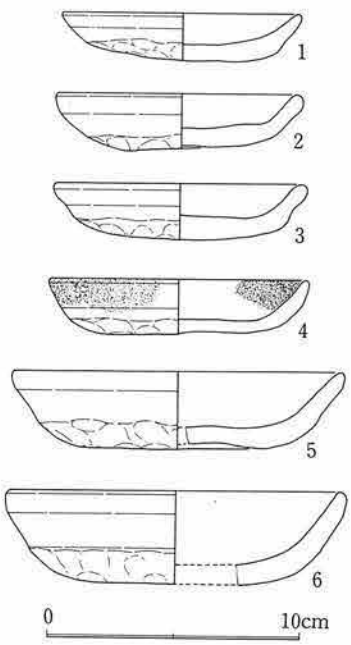


図10　第3面上包含層出土遺物

を押捺する皿。推定口径24cm。

14は常滑捏ね鉢。口唇端部が短く立ち上がる。

15・16は常滑甕。15は縁帯上部が肥厚する。

図9は第2面上包含層出土遺物。

1～7はかわらけ皿。1は手捏ね整形。1～3は灯明皿として使用。

8は白磁碗。見込み部に1条の沈線。釉は内面と外面体部下位にかかる。

9・10は青磁。9は無文の腰折れ鉢。10は鎬蓮弁文碗。

11は山茶碗。内底面が磨耗しており、転用された可能性がある。

12は土製品。小形の短頸壺である。

13は渥美甕。口唇端部が短く立ち上がる。体部下端に火熱を受けた箇所がみられる。

14・15は常滑甕。

図10は第3面上包含層出土遺物。土師器・須恵器も出土したが、中世遺物だけに限った。

1～6はかわらけ皿。手捏ね整形で占められる。2・3は倒置し、重なった状態で検出された。4は灯明皿として使用。

第四章　まとめにかえて

本地点の調査では、概ね13世紀前半から14世紀後半代に至る中世遺構群と平安時代にまで遡る井戸・竪穴状遺構が発見された。中世遺構群についての詳細はまだ整理途中であるが、木組溝を軸とした柱穴群・土壙群のまとまりから、屋敷地内の空間的な配置、更には若宮大路西側の街割り構造を考える上で重要な地点となろう。また、平安時代の井戸址は市内での検出例がなく、沖積低地上の古代集落の展開、頼朝以前の鎌倉の様相を知る手掛りとなろう。

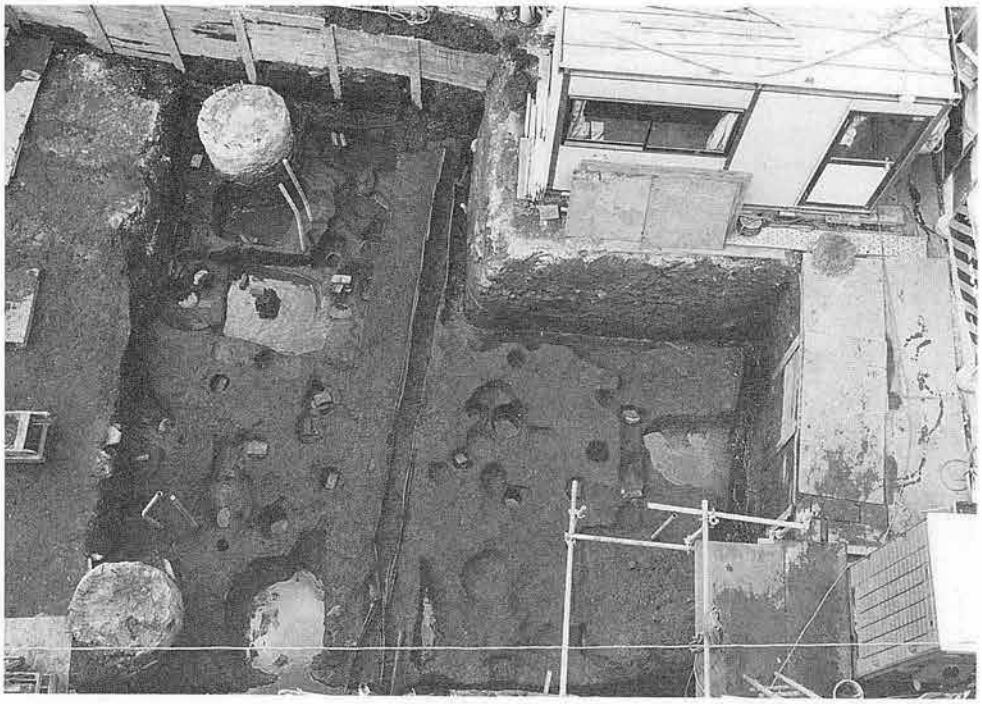
最後に遺物の問題について付け加えて置きたい。調査に伴なって出土した多量の遺物のうち、実測用に選別された遺物は総量の約1/10程度に過ぎず、本報に使用した遺物は更に少ない。選別にあたっては生活面・遺構ごとに年代指標となるもの、遺跡・遺構の性格を反映するもの等を勘案し、完形から約1/6程度の破片までを目安とした曖昧な基準である。出土品すべてを測図化するのが不可能である以上、数量・内容等のデータをとった後に選別するのは止むを得ないことである。だからこそ、この限られた遺物に関しては最大限の観察と正確さが要求され、実測図はその第1歩となろう。

本報で使用した実測図にも表現の稚拙や不正確さにより情報量不足となったものが多く、今後改めていくべき問題と考えている。

▲ I 区 2 面全景

▼ I 区 3 面全景

図版 2



▲II区 2 面全景

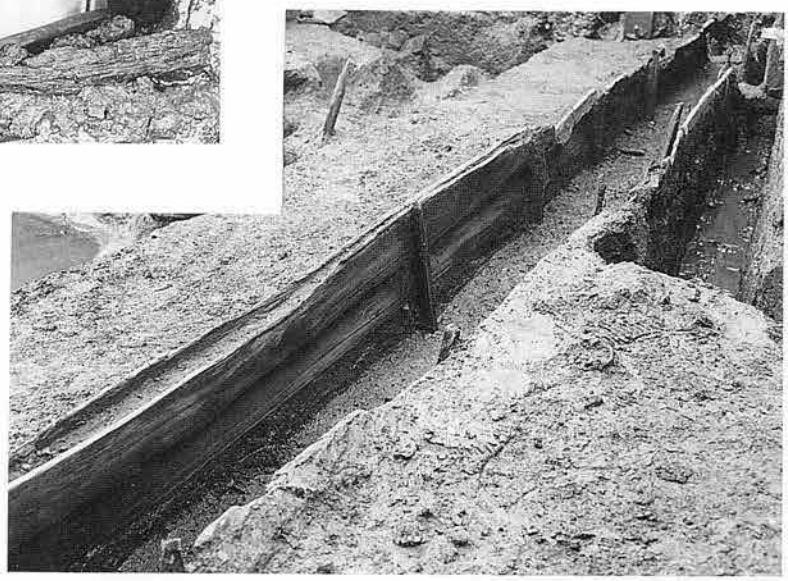
▼II区 3 面全景

図版 3

▲井戸全景

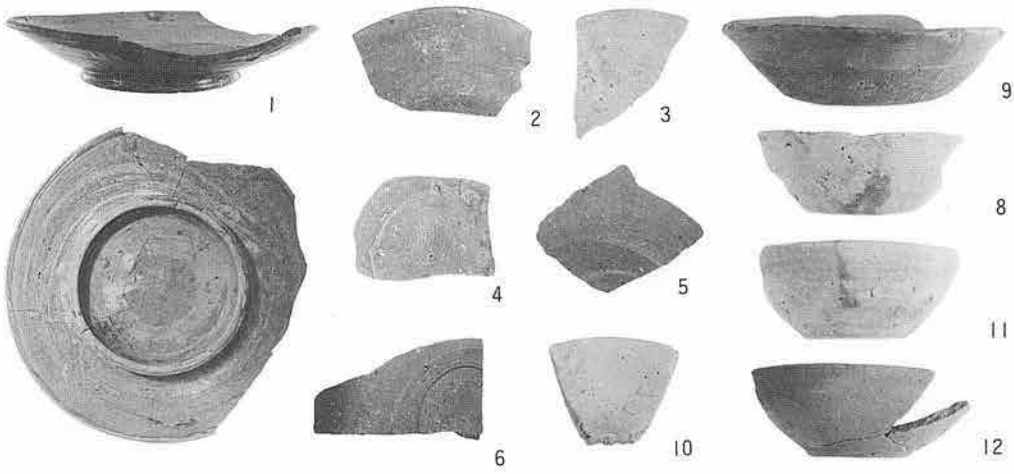
▶木組溝全景

◀井戸木枠



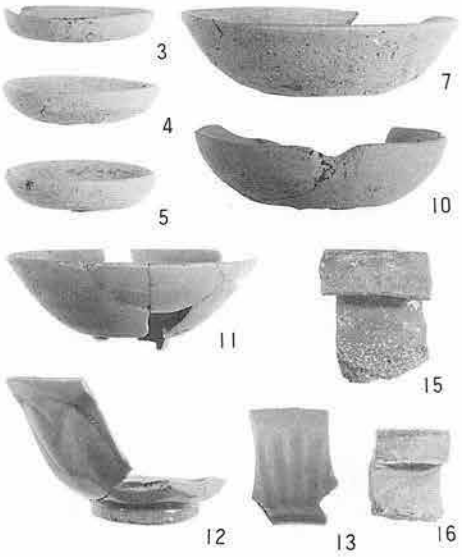
▶木組溝近景

図版 4

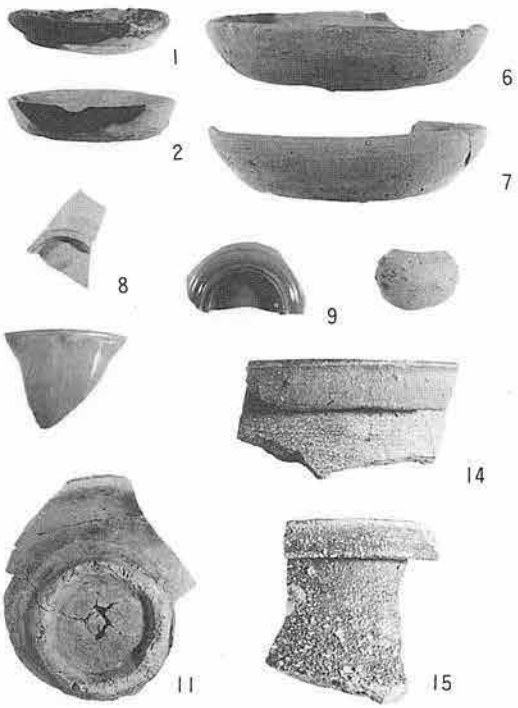


▲井戸出土遺物

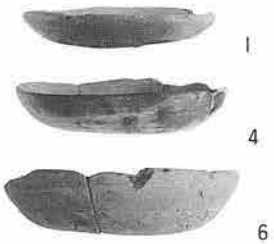
▼第 1 面上包含層出土遺物



▼第 2 面上包含層出土遺物



▼第 3 面上包含層出土遺物



（番号は挿図中の番号と同一）

4．台山遺跡（No.29）

台字西ノ台1624番3外

例　言

1．本報は、鎌倉市台字西ノ台1624番３外に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、鎌倉市教育委員会(教育長　尾崎　實、担当者　菊川英政）が、平成２年11月８日～11月13日にかけて実施した。

3．本報の執筆・編集・図版作成は大上周三が担当した。

4．本報に使用した写真は、遺構を菊川英政が撮影し、遺物は木村美代治が撮影した。

5．整理にあたって、石材の鑑定を市文化財専門委員の松島義章先生にお願いし、また馬淵和雄氏よりご教示を賜った。記して謝意を表したい。

6．現地での調査体制は以下の通りである。
調査補助員　滝田　薫・菊地正明
協力機関　（社）鎌倉市高齢者事業団

7．出土品・記録図面類は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例　　言 …… 210
目　　次 …… 211

本 文 目 次

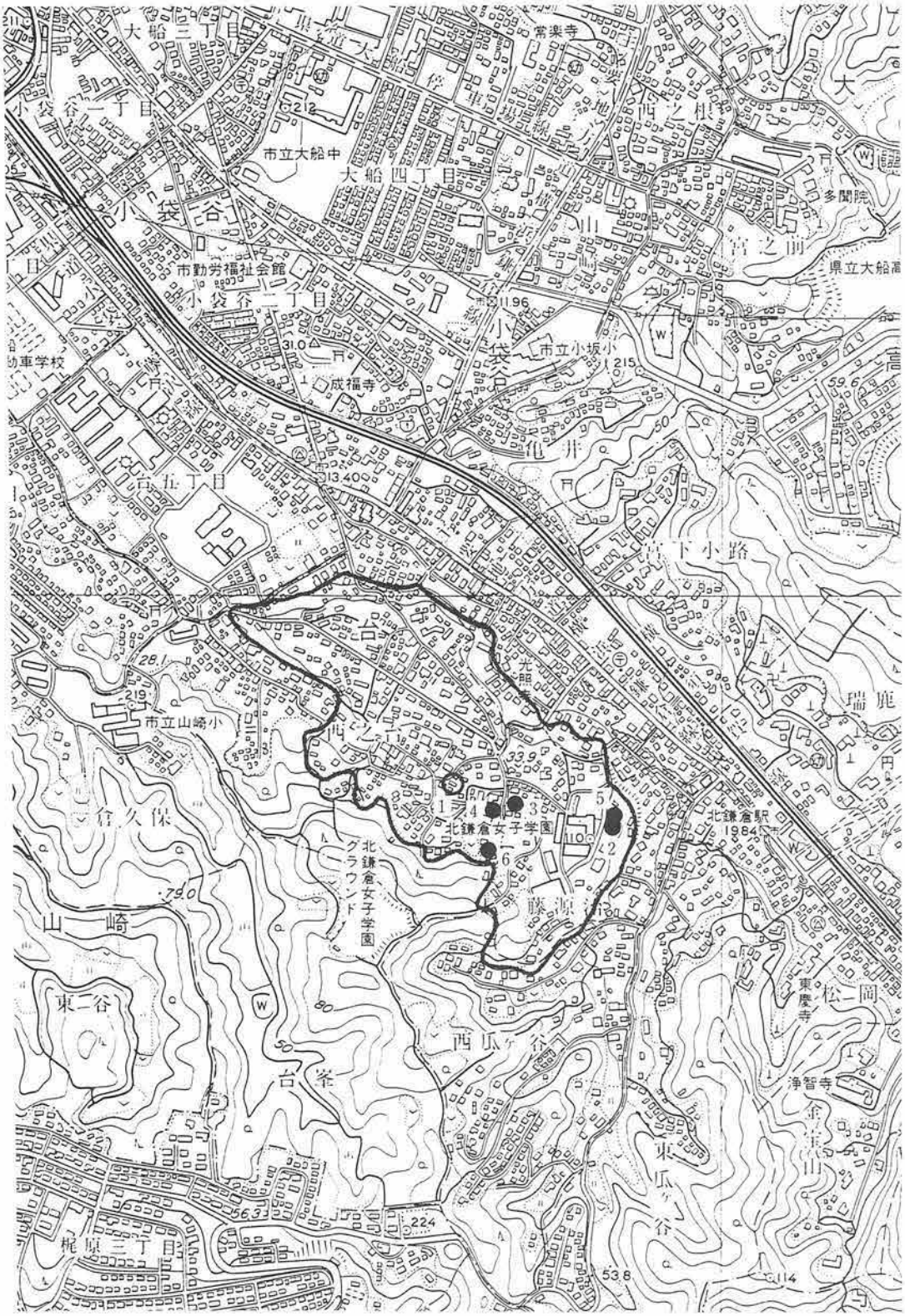
第一章　遺跡の位置 …… 213
第二章　調査の概要 …… 214
第三章　検出された遺構と遺物 …… 215
　第１節　遺　構 …… 215
　　１）溝状遺構 …… 215
　　２）ピット …… 216
　　３）落ち込み遺構 …… 216
　第２節　遺　物 …… 217
第四章　まとめ …… 218

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置 …… 212
第２図　調査範囲 …… 214
第３図　遺構平・断面 …… 215
第４図　出土遺物 …… 217

図 版 目 次

図版１－１　遺跡全景
図版１－２　中世遺構
図版１－３　出土遺物



第1図　遺跡位置（1/10,000）

第一章　遺跡の位置

台山遺跡（No.29）は、JR横須賀線の南で、南東－北西に伸びる台の丘陵及び南側の谷戸部分からなっている。東西700m×南北300mの規模を有する広大な遺跡である。現状は遺跡の大半が宅地化されており、往時の景観は大きく変貌している。遺跡台帳には縄文時代から中世にかけての遺物散布地、集落跡、中世館跡、砦跡と記され周知化されている。北側丘陵下には柏尾川の支流である小袋谷川が北西に流下している。

さて、今回調査の対象となった箇所は遺跡のほぼ中央部、台字西ノ台1624番3他の地点（第1図1）である。当該地の微地形は、北鎌倉学園グランドがのる丘陵とその北にある丘陵に挟まれ、台の神明神社附近から南東に伸びる谷戸の奥で、JR北鎌倉駅の西約550mに位置している。

ところで、台山遺跡は過去においてもたびたび発掘調査の手が入っており、次のような成果が得られている。例えば、1983年5月から7月にかけて台字藤源治914（第1図2）で実施された調査では弥生時代中期～後期の竪穴住居址18軒、古墳時代前期～後期の竪穴住居址13軒、平安時代の竪穴住居址5軒の他、中世の道状遺構1条が検出（手塚他　1985）された。1984年10月に山ノ内字藤源治874番2（第1図3）で実施された調査では弥生時代後期の竪穴住居址6軒が検出（斎木他　1985）された。1987年10月に台1730番1他（第1図4）で実施された調査でも弥生時代の竪穴住居址1軒が検出（玉林他　1988）されている。また最近では1990年7月から8月にかけても山ノ内914他（第1図5）で実施され縄文時代の落とし穴2基、古墳時代、奈良・平安時代の竪穴住居址2軒等が検出されている。このほか、1970年には台1737番（第1図6）の地点が調査され、弥生、古墳時代の竪穴住居址が検出されている。

こうした調査の積み重ねにより、台山遺跡の実態はわずかづつではあるが徐々に明らかになってきており、鎌倉における有数の古代集落遺跡としての評価が固まりつつある。

註

斎木秀雄他　1985「3.台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1

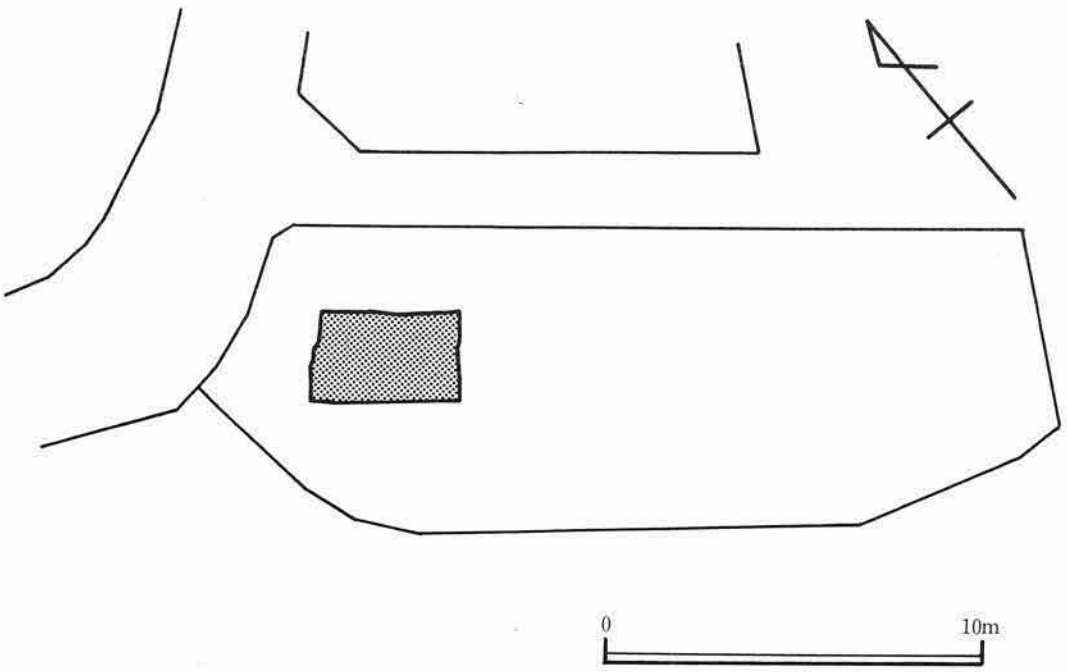
手塚直樹他　1985「台山藤源治遺跡」台山藤源治遺跡発掘調査団

玉林美男他　1988「6.台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4

第二章　調査の概要

平成２年８月、事業者から自己用住宅建設に係わる事前相談を受けた。そこでまず文化財保護課では建設計画による埋蔵文化財への影響の有無を確認するため平成２年９月19日に試掘調査を実施した。その結果、GLから－50～80cmのレベルで中世遺構の落ち込み面が確認されるとともに、中世、古代の遺物も多少出土した。この試掘データと建設計画との突き合せを行ったところ、地下駐車場部分が埋蔵文化財に影響を与えることが明らかになった。設計変更による忌避も不可能となったため発掘調査を実施することとなった。

調査は、地下車庫部分約９㎡を対象として、平成２年11月８日に試掘データを参考にまず第１層を機械により除去、その後第２～６層を人力により掘削し、遺構確認作業を行なうことから開始した。まず、近現代のごみ穴などの攪乱坑を掘り上げた後、試掘調査時に確認していた溝状遺構を中心に中世遺構の調査に取りかかった。特にこの溝状遺構は、調査区の５割近くを占め、かつ掘り込みが深かったため、精査、掘り上げに調査期間の大半を費やす結果となった。この間、降雨により調査の中断があったものの、調査手順に従い、中世遺構検出・精査、平・断面図作成、並びに調査区の土層断面図の作成を行い、そして11月13日に遺構の写真撮影を行い、全ての調査を終了した。



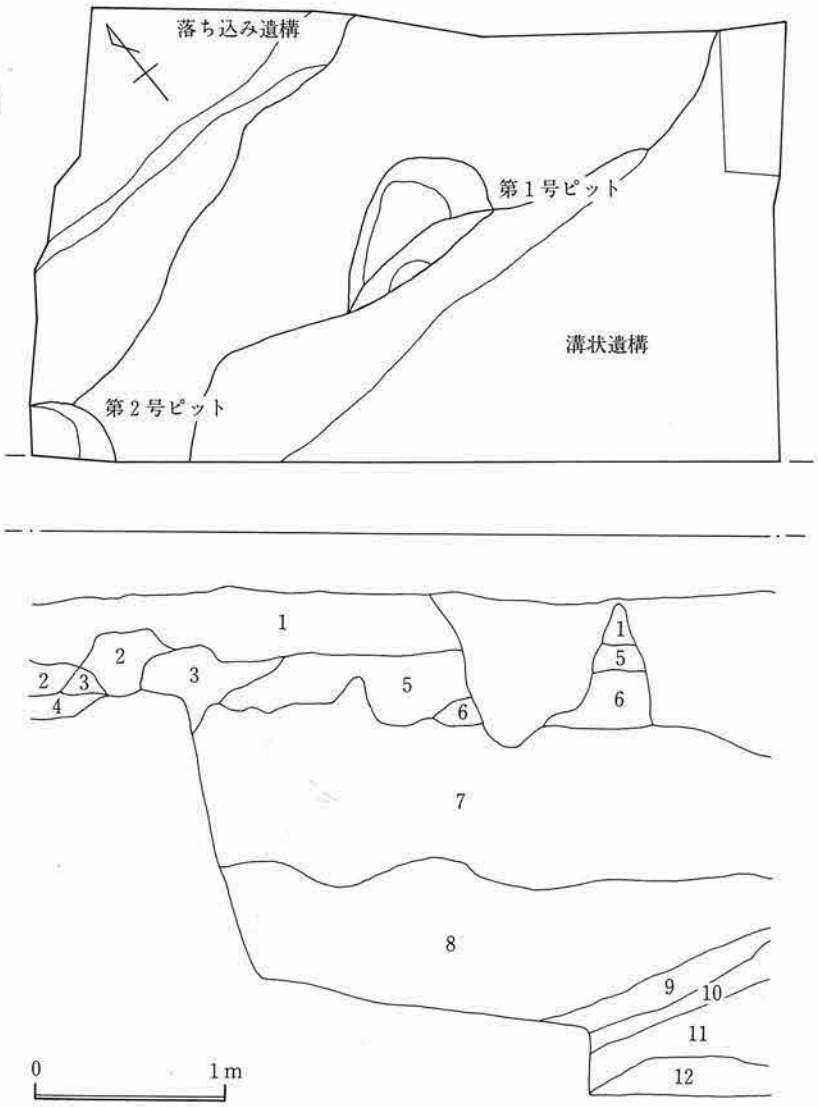
第２図　調査範囲

第三章　検出された遺構と遺物

第Ⅰ節　遺　構

1）溝状遺構（第3図）

調査区を斜に横切るように南寄りの地点で検出されている。落ち込み面で見る限りではこの溝は東西方向に伸びているものと思われる。溝の幅に関しては調査区の狭さが災いし明らかにすることは出来なかった。溝底面は、東壁から西へ約1mまで徐々にレベルを上げてきているが、その地点から西側では一転してレベルを下げかなりの傾斜を示している。底面そのものは概ね平坦である。確認面から底面のトップまでの深さは1.70mとかなりの深さとなっている。また、壁の状況を北壁で見ると、直線的で急角度で落ちている。このことからするなら恐らくこの溝の断面は逆台形を呈するものと思われ、規模もそのものもかなりなものになると予想される。



第3図　遺構平・断面

底面の傾斜及び覆土下層の堆積状況から、この溝は全体として西に傾斜している可能性が考えられる。

実測可能な遺物の出土は第4図5・6の2点だけで、いずれも覆土中からの出土である。この他、かわらけ、古墳時代から平安時代の土師器坏、甕片、須恵器高台付坏、蓋、甕片なども出土してい

る。

なお、ここで第３図によりながら本遺構の覆土と共に、調査区の土層堆積状況も含め見ておきたい。

第１層　表土層　概ね40cmの堆積で、一部撹乱部分は80cm程度と深くなっている。

第２層　暗灰色粘土層　鉄分が浸透している。20～40cmの厚さで堆積は部分的である。

第３層　暗赤茶褐色土層　よくしまっている。かわらけ片を微量含む。部分的に堆積しているだけである。

第４層　暗青灰色粘質土層　炭化物を微量含むが、しまりに欠ける。

第５層　暗茶褐色土層　かわらけ片を含むが、しまりに欠ける。東寄りは10cm前後と薄いが、西寄りでは25～35cmと厚くなっており、かつ傾斜している。

第６層　黄灰白色粘土層　炭化物を混入し、ブロック状を呈している。東寄りで認められるだけである。

第７層　暗茶褐色土層　炭化物、かわらけ片、土師器片を含む。しまりに欠ける。１m前後堆積している。

第８層　暗茶褐色土層　第７層に近いが、第７層よりしまっている。厚さ20から70cm以上で、西寄りで厚く堆積している。下底面は西にかなり傾斜している。

第９層　炭化物層　第８層をベースとして、木炭状の薄い炭層が挟まる。厚さ15cm前後で、西に傾斜している。

第10層　暗茶褐色粘土層　よくしまっている。厚さ10cm前後と薄く、やはり西に傾斜している。

第11層　暗茶褐色粘土層　炭化物を混入し、10層に比べ色調は暗く、しまりに欠ける。土師器片を含む。厚さ20～50cmで西に傾斜している。

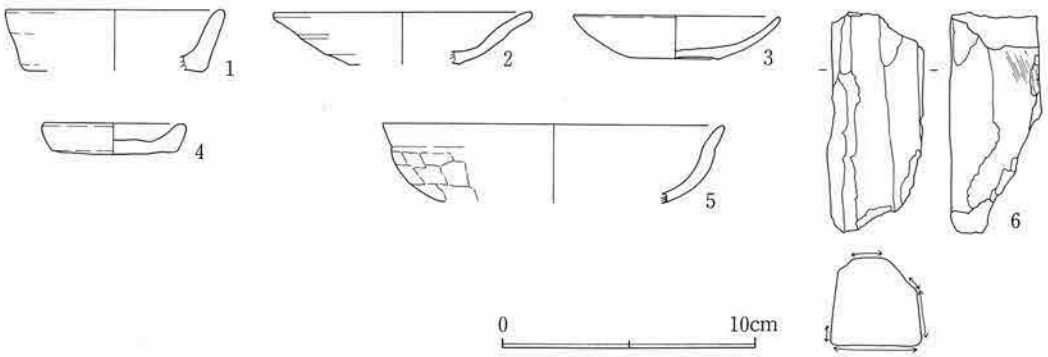
第12層　黄褐色ローム層　地山である。

２）ピット（第３図）

溝状遺構と切り合う第１号と、西隅で検出された第２号ピットが検出された。第１号ピットは東西95cm×南北50cm、深さ45cmの規模である。第２号ピットは1/4程度しか検出されておらず、40×25cm以上、深さ11cmの規模である。共に遺物の出土はなかった。

３）落ち込み遺構（第３図）

調査区の北隅よりで検出された。中ほどに小さな段を有し南から北へだらだらと下り勾配になっており、確認範囲内でのレベル差は45cmを測る。部分的な調査のため規模、形態等詳細は不明である。図示可能な遺物の出土はなかった。



第4図　出　土　遺　物

第2節　遺　物

第4図5・6は溝状遺構覆土中からの出土である。5は土師器坏で口径13.6cmを測る口縁部～体部にかけての破片である。体部は丸く内湾し、口縁部は開き気味に立ち上がっている。体部と口縁部の境はくびれている。体部外面には数段のヘラ削りがなされている。6は流紋岩質細粒凝灰岩製の砥石で長さ8.8cm、幅3.6cm、厚み3.5cmで、5面に使用痕が見られる。

第4図1～4は遺構確認時の出土である。1・4はかわらけ、2は灰釉小皿、3は灰釉段皿である。1は口径8.6cm、底径7.0cm、器高2.4cmで、残存率は1/6である。体部は、底部から鋭く直線的に立ち上がっている。4は口径5.8cm、底径5.0cm、器高1.2cmで、残存率は1/3である。平らな底部から体部は短く開きながら直線的に立ち上がっている。底部外面には回転糸切り痕が見られる。2は口径10.4cm、底径4.2cm、器高2.1cmで、残存率は1/6である。体部中ほどに段を有し、口縁部は外反気味に開いている。体部内面及び口縁部内外面に灰釉が掛けられている。3は口径8.2cm、底径3.6cm、器高1.7cmで、残存率は1/3である。体部はゆるやかに内湾しながら口縁部に至っている。底部外面には回転糸切り痕が見られる。体部内面及び口縁部内外面に灰釉が掛けられている。

溝状遺構出土の土師器坏(5)は古墳時代後期、砥石(6)は形状から中世の所産と思われる。一方、遺構確認時出土のかわらけ（1・4）は16c前半の、2の灰釉段皿は16c後半～17c前半の、3の灰釉小皿は近世の所産と思われる。この他、かわらけ片、常滑片さらには15c頃の備前すり鉢片、15c後半～16c前半の灰釉小皿片なども出土している。

第四章　ま　と　め

台山遺跡における過去の調査は丘陵上及び斜面地に限られており、検出される遺構・遺物も古代が主体であった。ところが今回は谷戸の奥の調査であった。そうしたことが起因してか検出遺構は溝状遺構、落ち込み遺構、ピットとこれまでの調査結果とは様相を異にするものであった。

これら検出遺構の中では溝状遺構の理解がメインになると考えられるが、調査範囲の狭さ、その上遺構の部分的な検出にとどまったためそれも難しい。しかしながら確認面から溝底まで1.70mを測り、壁も直線的に鋭く落ちていることからかなりの規模の溝状遺構になることは確実と思われる。

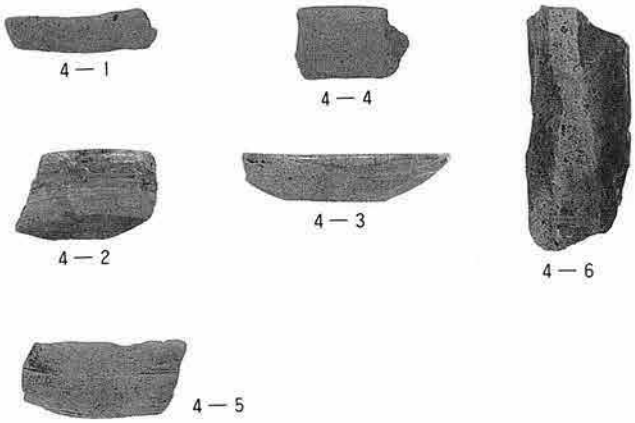
ところでこの遺構の年代に関してであるが、前述の通り遺物の出土は多くなく、まして実測可能なものは砥石と混入の可能性の高い古墳時代後期の土師器坏の2点だけで、その他かわらけ、常滑、土師器、須恵器の小破片が少々出土したにすぎない。これらの資料から遺構の年代を特定することは困難な作業であるが、覆土の状況、さらには遺構確認時出土の遺物から勘案するなら、中世のある時期、その中でも後半の所産とするのが妥当なところではないかと思われる。

さて、調査からこの溝状遺構は谷頭に向かって傾斜しながら伸びている状況を読み取ることが出来た。かかる様相を見せる溝状遺構が谷頭において如何なる役割をはたしたかは筆者ならずともいささか気になるところであるが、得られたデータが余りに少ない状況下ではそれもままならない。

今回は資料の提示にとどめ、解明は今後の調査の進展を待ちたい。

1　遺跡全景

2　中世遺構



3　出土遺物

5．田楽辻子周辺遺跡（No.33）

浄明寺字宅間562番33

例　言

1．本報は、鎌倉市浄明寺字宅間562番33に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、鎌倉市教育委員会(教育長　尾崎　實、担当者　大上周三）が、平成２年12月５日～12月19日にかけて実施した。

3．本報の執筆・編集・図版作成は大上周三が担当した。

4．本報に使用した写真は、遺構を大上周三が撮影し、遺物は木村美代治が撮影した。

5．整理にあたっては、馬淵和雄氏よりご教示を賜った。記して謝意を表したい。

6．現地での調査体制は以下の通りである。
協力機関　（社）鎌倉市高齢者事業団

7．出土品・記録図面類は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例　　言 …… 222
目　　次 …… 223

本 文 目 次

第一章　遺跡の位置 …… 224
第二章　調査の概要 …… 225
第三章　検出された遺構と遺物 …… 226
　第１節　中世の遺構 …… 226
　　１）溝状遺構 …… 226
　　２）ピット …… 228
　第２節　古代の遺構 …… 229
　　１）溝状遺構 …… 229
　　２）ピット …… 229
　第３節　遺　物 …… 229
第四章　まとめ …… 231

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置 …… 224
第２図　調査範囲 …… 225
第３図　中世遺構平・断面 …… 227
第４図　古代遺構平面 …… 228
第５図　出土遺物 …… 229

図 版 目 次

図版１－１　中世遺構
図版１－２　中世遺構
図版１－３　古代遺構
図版２　　中世出土遺物

第一章　遺跡の位置

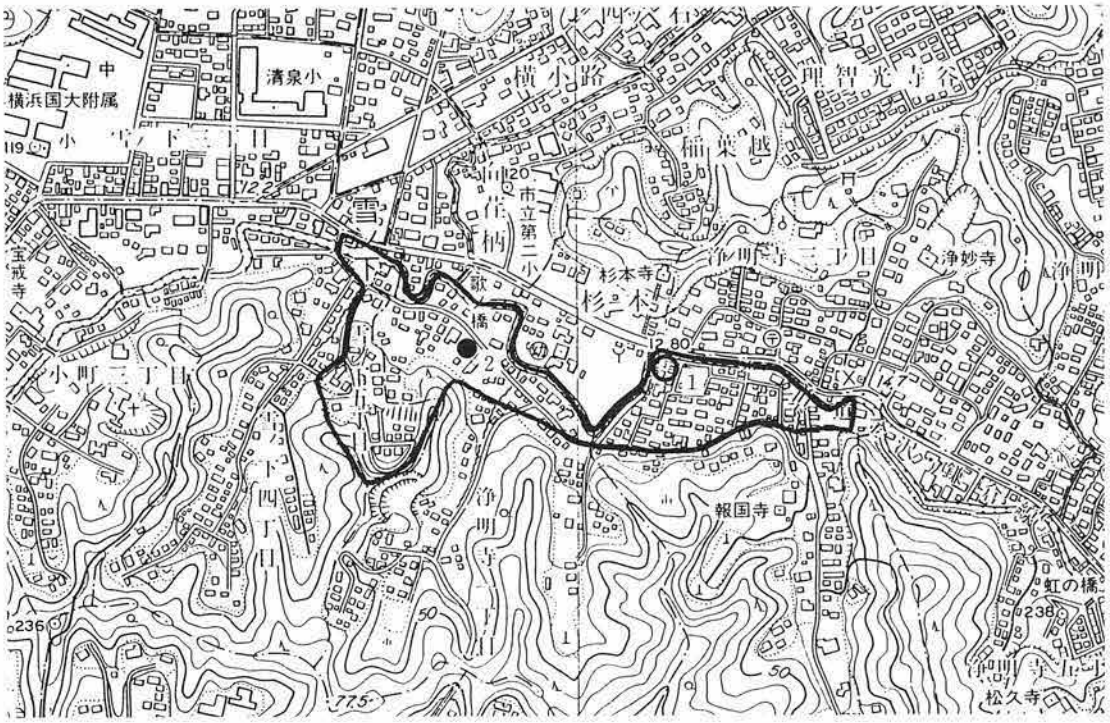
田楽辻子周辺遺跡（No.33）は、釈迦堂ヶ谷の前面平坦地、滑川の流路に沿って大御堂橋から報国寺の門前に至る東西に伸びる細い道路の両側、そしてその北に位置している杉本寺周辺遺跡（No.158）の南半を取り囲むように周知化されている。遺跡は東西700m×南北200mの規模を有し、中世屋敷跡と遺跡台帳には記されている。なお遺跡命名に至る経緯は『釈迦堂田楽辻子遺跡』（手塚他　1990）に詳しいのでそれに譲ることにする。

さて、今回調査した箇所は、滑川左岸、杉本寺周辺遺跡に隣接する東半の一部で、犬懸橋を渡り、滑川に沿って東へ僅かに進んだ住宅地の一画（第１図１）である。地番表示は浄明寺字宅間562番33である。JR鎌倉駅から東へ直線距離にして約1,500mの地点である。

ところで、田楽辻子周辺遺跡では1989年に浄明寺釈迦堂658番外の地点（第１図２）が調査され、13～16世紀にかけての道路、井戸、土坑等が検出（手塚他　1990）されている。

註

手塚直樹他　1990「釈迦堂田楽辻子遺跡」釈迦堂田楽辻子遺跡発掘調査団

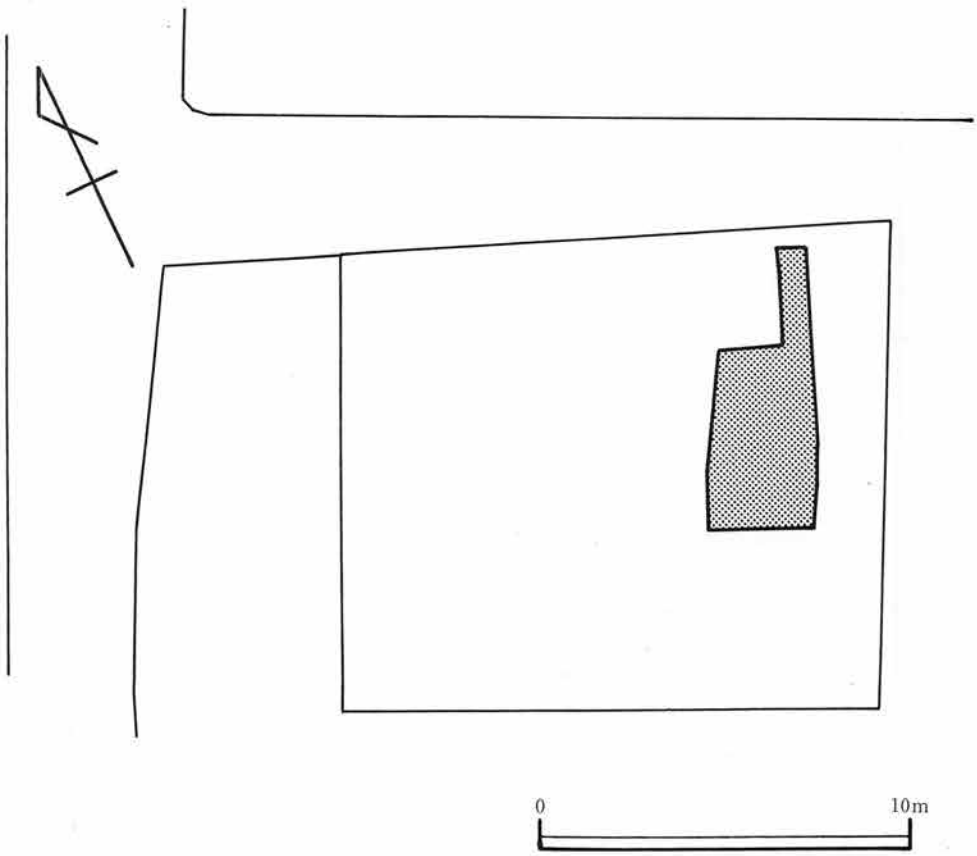


第１図　遺跡位置（１/10,000）

第二章　調査の概要

平成２年７月、事業者から自己用住宅建設に係わる事前相談を受けた。そこでまず文化財保護課では建設計画による埋蔵文化財への影響の有無を確認するため、平成２年８月20日に試掘調査を実施した。その結果、GLから－50cmのところで古代・中世の遺構面が確認された。この試掘データと建設計画との突き合せを行ったところ、地下駐車場部分が埋蔵文化財に影響を与えることが明らかになった。設計変更による忌避も不可能なため発掘調査を実施することとなった。

調査は、地下車庫部分約15㎡を対象として、平成２年12月５日に、試掘データを参考に第１層を機械により除去することから開始した。ついで人力により中世の遺構確認を行ない、その後中世の遺構検出・精査そして平・断面図作成、写真撮影を行い中世の調査を終了した。引き続き13層上面まで掘り下げ古代の調査に移り平成２年12月19日に古代の遺構実測・写真撮影を行い、全ての調査を終了した。



第２図　調査範囲

第三章　検出された遺構と遺物

第Ⅰ節　中世の遺構

1）溝状遺構（第3図）

調査区中央やや北寄りの位置から1条検出されている。検出された長さは3m弱と短いものの、主軸方位は概ねN－65°－Wとなっており、東でやや南に振れるものとなっている。この方位は滑川或いは北側の生活道路に沿っている。この溝状遺構の全体的な平面形状については調査範囲が極めて狭いため、速断はできないものの、おそらく一定程度の長さ直線的形状を呈し東西方向に伸びていたものと考えられる。

溝の幅は最大で3.70mを測り、かなり幅広のものとなっている。深さは南肩部確認面から1.35mを測る。溝の断面形態は単調ではなく、かなり複雑な形状を示している。すなわち、両側壁とも直線的でなく、3段構成となっている。まず最下段は幅90cm、深さ20cm程度で断面かまぼこ状の小規模な溝状を呈している。中段は上幅約2m、下底幅1.60m、深さ60cmの規模を示し、壁、底面共に直線的で、断面逆台形状を呈している。上段は上幅3.70m、下底幅3.30m、深さ50cmの規模であるが、南側底面には小ピットや、並行して走る小規模な溝があり、凹凸が見られる。溝最下底面のレベルは、東西両端で計測値にほとんど差が認められないため、いずれの方向に傾斜していたのか明らかではない。

覆土の堆積状況は、土丹を含む粘質土が溝の両側から流れ込んでいる。その過程で多数の大小さまざまな土丹塊が溝底から少し浮いた状態で、重なるように埋没していた。また、特に溝の南からローム様の灰黄褐色粘質土（第5層）が落ち込んでいる点が目を引く。

以上から、溝が一度に掘られたものか、それとも数度にわたって掘られたものであるかはにわかに判断はつきかねるが、かかる複雑な形状をみせていることからすると、溝の掘削は数度に及んでいる蓋然性は高いと思われる。一方、覆土の堆積状況は典型的ではないものの一応レンズ状を見せていることから、この溝の埋没は人為的な埋め戻しや、埋没途中の最利用は考えにくく、恐らく溝の両側からの自然埋没と思われる。

実測可能な遺物の出土はそれほど多くはなく、第5図に示したかわらけ、灰釉皿が覆土中から出土している。

ところで、溝の覆土中に大小さまざまな土丹塊が多数みられることや、南側の上段の壁に沿うように灰黄褐色粘質土（第5層）が見られることから、溝の南肩に接して土塁状のもの存在も可能性として考えられよう。

なお、ここで第3図によりながら溝状遺構の覆土と共に、調査区の土層堆積状況も含め見ておきたい。

第１層　表土層　概ね30～40cmの厚さで堆積。部分的に攪乱により１ｍ以上に達している箇所も見られる。

第２層　淡黄褐色土丹層　溝状遺構の上部を覆うように、最大厚約50cm堆積している。

第３層　灰茶褐色粘質土層　小土丹ブロック・粒子を僅かに含むが、粘性は弱い。南半部では約10cm前後、北端では20～30cm、溝状遺構の箇所では第２層同様、溝状遺構の上部を覆うように30cm前後堆積している。

第４層　灰黄褐色粘質土層　土丹ブロックを多量に、炭化粒子も含む。中世のピットの可能性あり。

第３図　中世遺構平・断面

第５層　灰黄褐色粘質土層　第４層より灰色味が強く、土丹ブロックも第４層より大きい。溝状遺構北壁に沿って落ち込むように見られる。最大厚40cmである。

第６層　灰黄褐色粘質土層　第５層より灰色味が強く、小土丹ブロックを含む。大半は溝状遺構の覆土として検出されている。最大厚40cmである。

第７層　淡茶褐色粘質土層　小土丹ブロック・粒子を多量に、そして炭化物も含む。溝状遺構に南から落ち込んでいる。約15cm前後堆積している。

第８層　灰黄褐色粘質土層　30～50cmの土丹塊、炭化物を含む。第７層同様南から落ち込んでいる。最大厚40cmである。

第９層　黄褐色砂質土層　灰褐色粘質土に第13層が多量に含まれている。溝中央下底部に厚さ10cm前後堆積している。

第10層　灰褐色粘質土層　小土丹ブロックを含んでいる。南から落ち込み、溝の底部に10～20cm堆積している。

第11層　茶褐色粘質土層　炭化物、黄色微粒子を含む。中世の地山と思われる。概ね20cm前後の厚さである。

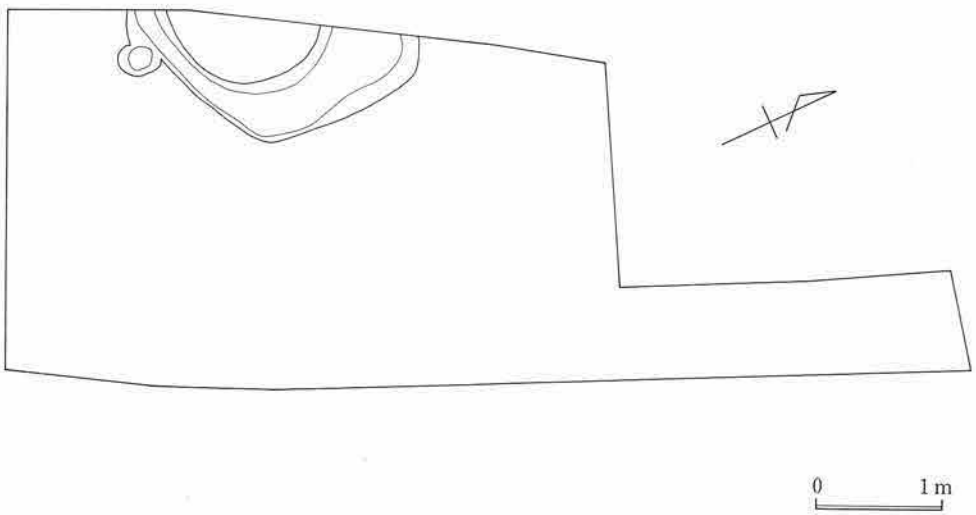
第12層　暗灰褐色粘質土層　炭化粒子、白色・黄色微粒子を多量に含む。古代の包含層と思われる。20cm前後堆積している。

第13層　淡黄褐色砂質土層　調査区底面に部分的に顔を出している。

２）ピット（第３図）

調査区中央部で１穴検出された。南半分は試掘調査坑により切られ、欠いている。径30cm、深さ５cm程度のもので、第５図13の青磁碗が出土した。

この他、調査区東壁土層断面図の第４層を覆土にもつ落ち込みが、該期のピットの可能性がある。



第４図　古代遺構平面

第２節　古代の遺構

１）溝状遺構（第４図）

調査区南寄り西壁にかかるように一部が検出された。平面形態は弧状を呈している。規模は、外径で2.25m、内径で1.20m を測る。幅は最大で65㎝、最小で20㎝弱とかなりのばらつきが見られる。溝底は多少の凹凸があるものの、レベル差はほとんど認められない。断面形態は概ね逆台形を呈している。

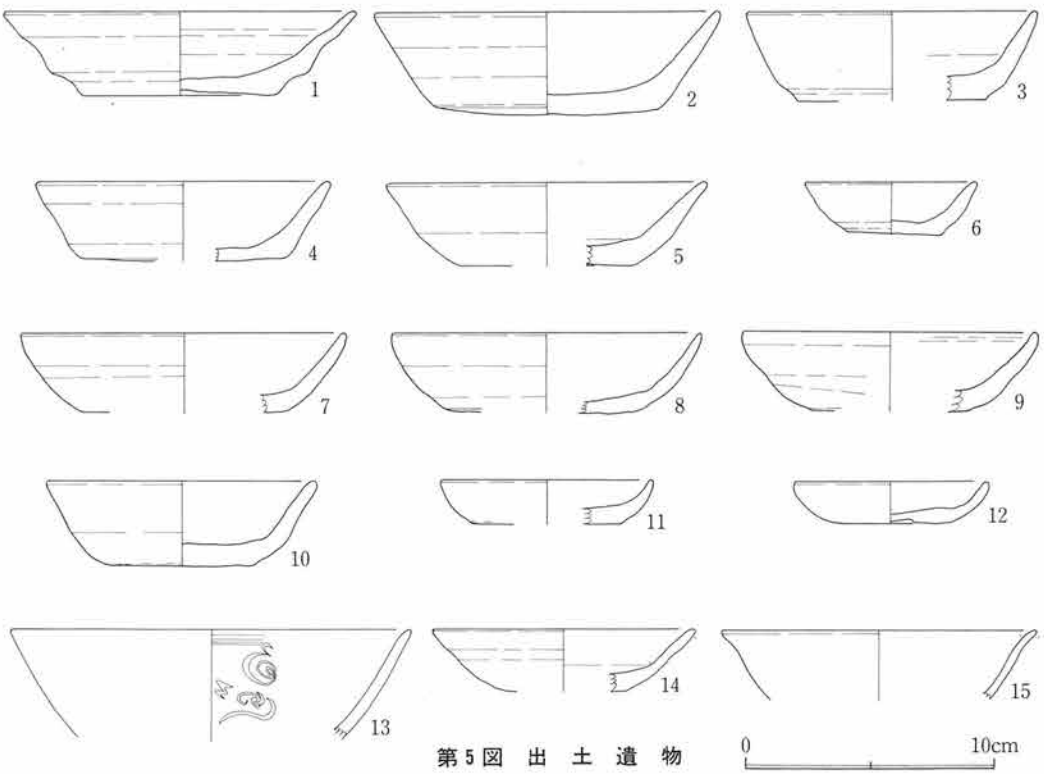
遺物の出土はなかった。

２）ピット（第４図）

調査区の南、溝状遺構に接して１穴検出された。径35×25㎝、深さ17㎝で、平面形態は楕円形である。

遺物の出土はなかった。

第３節　遺　物



第５図　出　土　遺　物

遺物は遺構内外から整理箱１箱に満たない程度しか出土せず、図示可能な遺物もそれに比例してわずかであった。

第５図１～６・14は中世の溝状遺構覆土中からの出土で、１～６はかわらけ、14は灰釉皿である。１は口径14.2cm、底径7.8cm、器高3.3cmで、残存率は1/3である。体部外面は凹凸が激しい。２は口径14.0cm、底径9.2cm、器高4.1cmで、残存率は1/2である。３は口径11.8cm、底径7.4cm、器高3.5cmで、残存率は1/4である。４は口径12.0cm、底径8.2cm、器高3.2cmで、残存率は1/4である。５は口径13.0cm、底径7.0cm、器高3.3cmで、残存率は1/4である。６は口径7.0cm、底径3.8cm、器高2.1cmで、残存率は2/3である。１～６の体部は直線的に開き口縁部に至っている。14は口径10.6cm、底径5.2cm、器高2.5cmで、残存率は1/3である。底部外面には回転糸切り痕が見られる。体部内面及び口縁部内外面に灰釉が掛けられている。

第５図13はピットからの出土で、青磁劃花文碗である。口径16.2cmの口縁部～体部の破片である。

第５図７～12・15は遺構確認時の出土で、７～12はかわらけ、15は口兀の白磁碗である。７は口径13.2cm、底径8.2cm、器高3.1cmで、残存率は1/4である。８は口径12.6cm、底径8.1cm、器高3.2cmで、残存率は1/3である。９は口径12.0cm、底径6.2cm、器高3.2cmで、残存率は1/4である。10は口径11.0cm、底径5.8cm、器高3.5cmで、ほぼ完形である。11は口径8.6cm、底径6.0cm、器高1.8cmで、残存率は1/4である。12は口径8.0cm、底径4.6cm、器高1.7cmで、残存率は1/4である。７～９の体部はゆるやかに内湾しながら口縁部に至っている。10は体部下半で内向した後、口縁部へ直線的に開いている。11・12の体部は下半から内湾しながら口縁部に至っている。１・２・４・５・８～10・12の底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕が見られる。15は口径12.8cmの口縁部～体部の破片である。

溝状遺構出土の１～６のかわらけと14の灰釉皿は概ね15c後半～16c前半の所産と思われる。またピット出土の青磁碗の13は12c末～13c前半の、遺構確認時の出土の７・８・９は14c前半の、11・12は13c後半～14c前半の、10は15c後半の、15は13c中～14c前半の所産と思われる。

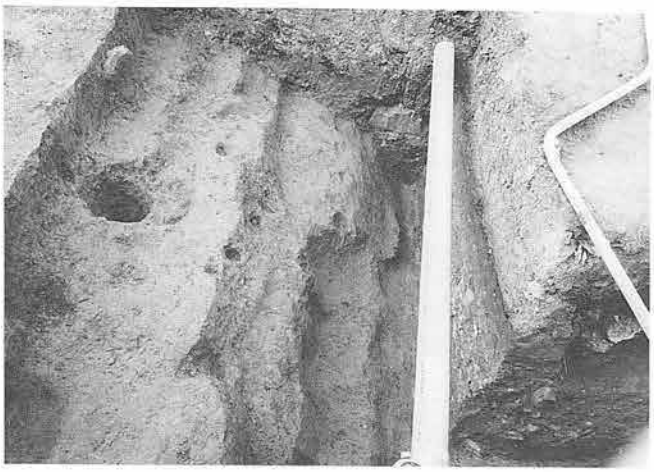
第四章　ま　と　め

今回の調査では、中世の溝状遺構、ピット、そして古代の溝状遺構、ピットが検出された。ここでは中世の溝状遺構に話題をしぼることにしたい。

この遺構は、幅3.70m、深さ1.35mを測り東西方向に伸びている。この溝は前述の通り数度にわたる作り替えがなされ、埋没は人為的なものではなく自然埋没で、その時期は出土遺物から15c後半～16c前半の時期と推測される。この遺構の全体像が明らかでない現在、如何なる形状をとり、如何なる機能を果たしていたかは知る術もないが、次のような理解も可能性として考えられよう。すなわちこの溝状遺構の覆土中にローム様の灰黄褐色粘質土（第5層）と大小さまざまな土丹塊が検出され、特に灰黄褐色粘質土は南側から流れ込んでいることが確認されている。想像を逞しくするならば、これらは溝状遺構の南壁に接して付設されていた土塁に供された資材の一部との見方もあながち不可能なことではないだろう。仮にこうした想定が成り立つなら、滑川左岸のこの平坦地に溝と土塁を外郭施設として持つそれ相応の居住施設の存在も、数ある仮定の中の1つとして考えられよう。

いずれにしても田楽辻子周辺遺跡の調査は緒に着いたばかりであり、往時の景観の解明に関しては今後の調査の進展に期待したい。

図版 1



1　中世遺構

2　中世遺構

3　古代遺構

5 — 2

5 — 7

5 — 8

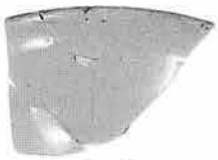
5 — 6

5 — 11

5 — 10

5 — 12

5 — 1



5 — 15

6．無　量　寺　跡（No.196）

御成町39番6地点

例　言

1．本報は鎌倉市御成町39番６における専用住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は国庫補助事業とし、平成３年１月25日～３月30日にかけて実施され、調査面積は100m²であった。

3．本報の執筆は第１章を手塚直樹、第２～３章を田畑佐和子が担当し、編集は田畑が行った。

4．本報の図版製作は田畑佐和子が行い、遺物実測・トレースは、手塚直樹、小柳津シゲ子、滝田薫、野本賢二、山崎理香の協力を得た。

5．本報に使用した写真は、遺構を田畑佐和子が遺物は手塚直樹と田畑佐和子が撮影した。

6．本遺跡から出土した白かわらけの墨書文字の解釈について鎌倉国宝館々長・三浦勝男氏の御教示を戴いた。また出土人骨については、聖マリアンナ医科大学教授・森本岩太郎氏及び同助手・平田和明氏に鑑定ならびに執筆戴いた。なお資料写真は両氏の撮影である。

7．調査体制は以下の通りである。

主任調査員　手塚直樹

調　査　員　田畑佐和子、清水菜穂、関口真理

調査補助員　小柳津シゲ子、滝田薫、上原恵美、大沼真理、野本賢二、山本直孝、三浦陽一、明木文吾、菊地正明

協　力　者　戸塚栄、大湊修、
長浜長松（鎌倉市高齢者事業団）

8．本遺跡の出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例　言 …… 236
目　次 …… 237
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 240
第二章　調査の概要 …… 242
第三章　検出された遺構と出土遺物 …… 244
　第１節　上部平場 …… 244
　第２節　第１号やぐら …… 245
　第３節　第２号やぐら …… 255
　第４節　第３号やぐら …… 263
　第５節　第４号やぐら …… 268
第四章　まとめ …… 278
　第１節　出土人骨鑑定報告 …… 278
　第２節　まとめ …… 282

挿　図　目　次

第１図　調査地点と周辺の遺跡 …… 241
第２図　遺構の位置とグリッド図 …… 242
第３図　上部平場遺構平面図・断面図・土層図 …… 244
第４図　上部平場出土遺物 …… 245
第５図　第１号やぐら平面図・立断面図・土層図 …… 246
第６図　第１号やぐら上層出土遺物（１） …… 248
第７図　第１号やぐら上層出土遺物（２） …… 249
第８図　第１号やぐらかわらけ溜出土状況 …… 250
第９図　第１号やぐらかわらけ溜出土遺物（１） …… 250
第10図　第１号やぐらかわらけ溜出土遺物（２） …… 252
第11図　第１号やぐらかわらけ溜出土遺物（３） …… 253
第12図　第１号やぐらかわらけ溜出土遺物（４） …… 254
第13図　第１号やぐら下層出土遺物 …… 254
第14図　第１号やぐら床面上・遺構出土遺物 …… 254
第15図　第２号やぐら平面図・立断面図・土層図 …… 256
第16図　第２号やぐら上層人骨出土状況 …… 257

第17図　第２号やぐら上層出土遺物 …… 258
第18図　第２号やぐら青灰色土丹層上遺物出土状況 …… 260
第19図　第２号やぐら青灰色土丹層上出土遺物（１） …… 260
第20図　第２号やぐら青灰色土丹層上出土遺物（２） …… 261
第21図　第２号やぐら床面上・遺構出土遺物 …… 262
第22図　第３号やぐら平面図・立断面図 …… 264
第23図　第３号やぐら上層出土遺物（１） …… 265
第24図　第３号やぐら上層出土遺物（２） …… 266
第25図　第３号やぐら下層出土遺物 …… 267
第26図　第３号やぐら床面上・遺構出土遺物 …… 268
第27図　第４号やぐら平面図・立断面図・土層図 …… 269
第28図　第４号やぐら土丹層遺物出土状況 …… 270
第29図　第４号やぐら土丹層出土遺物 …… 270
第30図　第４号やぐら焼土層上層遺物出土状況 …… 270
第31図　第４号やぐら焼土層上層出土遺物 …… 271
第32図　第４号やぐら焼土層下層遺物出土状況 …… 270
第33図　第４号やぐら焼土層下層出土遺物 …… 272
第34図　第４号やぐら遺構出土遺物 …… 274
第35図　銭拓影（１） …… 275
第36図　銭拓影（２） …… 276

表　目　次

表Ⅰ　第１号やぐらかわらけ溜データー …… 251
表Ⅱ　第４号やぐら焼土層出土かわらけデーター …… 273
表Ⅲ　銭 …… 277

図　版　目　次

図版１．１、扇ケ谷村古絵図　２、調査地点遠景
図版２．１・２、上部平場全景（東から・西から）
図版３．１・２、上部平場遺構（ピット２・３）　３、ピット６かわらけ・銭出土状況
図版４．１、第１号やぐら調査前状況　２、かわらけ溜（奥壁付近）出土状況　３、かわらけ溜（東側）出土状況　４、かわらけ溜瓦質製品出土状況
図版５．１、１号やぐらかわらけ溜（中央付近）出土状況　２、同上（西から）　３、かわらけ溜西壁際床面上出土かわらけ

図版６．１、１号やぐら全景（北から）　２、同上（西から）

図版７．１、１号やぐら奥壁寄ピット列　２、床面前方ピット　３、床面上出土瀬戸小壷

図版８．１、２号やぐら調査前状況　２、中間奥壁際出土人頭骨　３、西壁際寄（上層）出土人骨

図版９．１、２号やぐら青灰色土丹層上（西側）遺物出土状況　２、折敷・漆器・竹片出土状況　３、奥壁寄床面上出土舟形

図版10．１、２号やぐら奥壁　２、東壁　３、西壁　４、床面西側ピット列　５、床面前壁付近ピット・方形穴

図版11．１、２号やぐら全景（北から）　２、１・２号やぐら全景（北から）

図版12．１、３号やぐら調査前状況　２、奥壁際（東側）床面上出土木製品と瀬戸水注　３、西壁際床面上出土常滑

図版13．１、３号やぐら全景（北から）　２、床面前方部（南から）

図版14．１、３号やぐら奥壁　２、東壁　３、西壁

図版15．１、４号やぐら調査前状況　２、中間奥壁際出土人頭骨　３、東壁寄土丹層遺物出土状況

図版16．１、４号やぐら奥壁　２、東壁　３、奥壁際焼土層検出状況　４、周溝東側焼土層出土白かわらけとかわらけ

図版17．１、４号やぐら全景（周溝焼土層遺物出土状況）（北から）　２、全景（北から）

図版18．１、４号やぐら前方（東側）検出状況　２、方形穴底銭出土状況　３、２号やぐら北側延長トレンチ内ピット

図版19．１号やぐら出土遺物（１）かわらけ

図版20．１号やぐら出土遺物（２）

図版21．１号やぐら出土遺物（３）

図版22．２号やぐら出土遺物（１）

図版23．２号やぐら出土遺物（２）

図版24．３号やぐら出土遺物（１）

図版25．３号やぐら出土遺物（２）

図版26．４号やぐら出土遺物（１）かわらけ

図版27．４号やぐら出土遺物（２）

図版28．第２号やぐら出土人頭骨

図版29．第２号やぐら出土人骨

図版30．第４号やぐら出土人頭骨

第一章　遺跡の歴史地理的環境

遺跡は源氏山から脈生した支丘が南の御成小学校、東の巽神社へとのびる南東へ開口した谷戸の出口の西側に位置する。この谷戸は無量寺ヶ谷と呼ばれている。

『鎌倉志』によると「無量寺谷ハ興禅寺ノ西ノ方ノ谷ナリ、昔、此処ニ無量寺ト云寺有、泉涌寺ノ末寺也シト云、今ハ亡」とある。興禅寺は寿福寺の南に有り、寛永年間に建立されているが、今は廃寺となっている。

江戸時代の天保年間の「扇ヶ谷村古絵図」（図１）を見ると谷戸は綱広谷となり、無量寺はその前面に記載されている。この綱広は相州刀鍛冶として有名な正宗の血を引くと言われている。綱広は北条氏綱より山村対島守綱広の名をもらい、以降、代々綱広の銘を切り、天文七（1538）年、鶴岡八幡宮に氏綱が奉納した刀にも銘が残っている。江戸時代以降も鎌倉に住し、その子孫が現在に至る。谷戸付近には合打稲荷、刀稲荷などの刀工に関係した神社があり、調査地点の前には正宗井戸もある。

無量寺に関する初見は『金沢文庫文書』に見い出す事ができる。「無量寿寺律師宏教付法、建長二（1249）年九月十七日、於相州鎌倉无量寿寺南廊」、『吾妻鏡』文永二（1265）年六月三日安達義景十三回忌の仏事を無量寿院でおこなっている。また金沢文庫文書に「弘安八（1285）年八月九日談了、相州鎌倉甘縄称无量寿院西僧坊見聞之也」、「弘安八年五月五日始之［　甘縄無量寿院」、『鎌倉大草紙』の上杉禅秀の乱の条、応永二十三（1416）年十月四日「無量寺口そば上杉蔵人大夫憲長」とある。

無量寺の位置については金沢文庫文書の「鎌倉甘縄称（於）無量寿寺」との記載しかない。恐らく伝承等調査地点付近が無量寺の字名が残ることから、この谷戸の内部の何処にあったとは想像できるが、場所は特定できない。

いずれにしても16世紀中頃まで存続していただろうことは文献からはたどることはできる。

谷戸は奥行約250m 近くあり、巾は約100m 前後ある。山裾には大型のやぐらが点在し、調査地点のやぐらとの関連性が窺える。

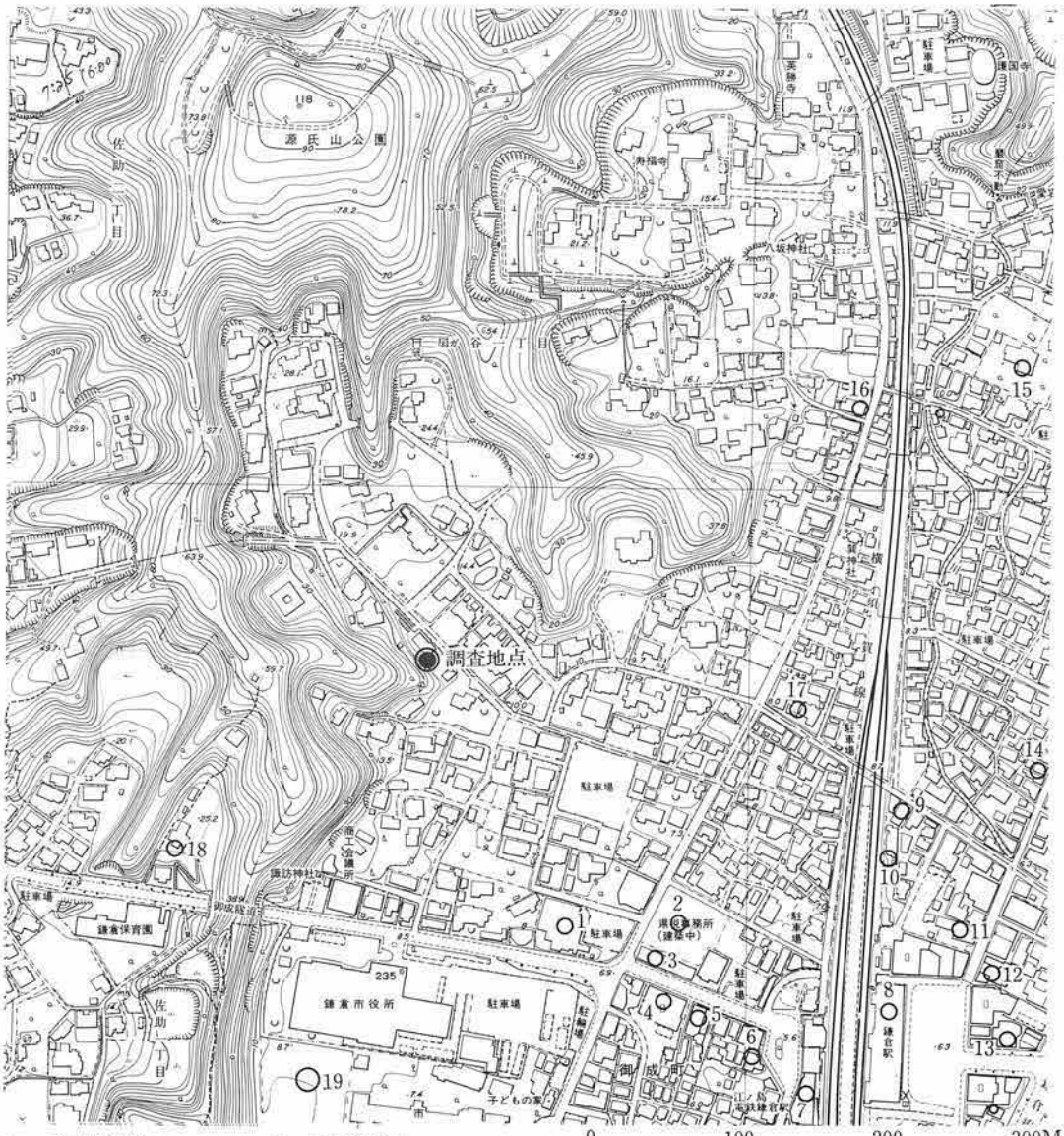
遺跡反対側の谷戸内の佐助遺跡(註1)では屋敷跡、粘土採掘坑跡などが発見されている。

南東側の今小路に面する千葉地遺跡では13世紀～15世紀にかけての屋敷跡、道路、溝、その西側、千葉地東遺跡(註2)では河川跡、屋敷跡等が発見されている。

北東の今小路周辺遺跡(註3)（小町一丁目75番地点）は正宗の屋敷跡との伝承があり、ここでは今小路の側溝、屋敷跡、吹子の羽口などが多量に発見され、正宗伝説はともかく、この周辺に相州鍛冶の存在が考えられている。

現在、調査地点の前面の路を西へ向うと佐助トンネルを抜け銭洗弁財天社への近道となり多くの参詣者でにぎわっている。

（手塚直樹）



1．千葉地遺跡
2．千葉地東遺跡
3．御成町228番２地点
4．諏訪東遺跡
5．御成町806番３地点
6．御成町11番５地点
7．蔵屋敷東遺跡
8．蔵屋敷遺跡
9．小町一丁目120番１地点
10．小町一丁目116番地点
11．小町一丁目106番地点
12．小町二丁目61番21地点
13．小町一丁目75番１地点
14．小町二丁目12番18地点
15．雪ノ下一丁目210番地点
16．扇ヶ谷一丁目131番１地点
17．扇ヶ谷一丁目74番８地点
18．佐助一丁目620番地点
19．今小路西遺跡

第１図　調査地点と周辺の遺跡

註　　註１　手塚直樹他『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団　1982年
　　註２　服部実喜他『千葉地東遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター　1985年
　　註３　馬渕和雄「小町一丁目75番地点」、『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告』鎌倉市教育委員会　1989年
参考文献　貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺事典』有隣堂　1980年
　　本阿弥宗景「刀鍛鍛冶」『鎌倉市史－近世通史編』　鎌倉市教育委員会　1990年

第二章　調査の概要

発掘調査は、平成３年１月25日～３月31日の期間実施され、宅地造成工事に係わる個人住宅裏の山腹とその上部平場の一部分を調査した。

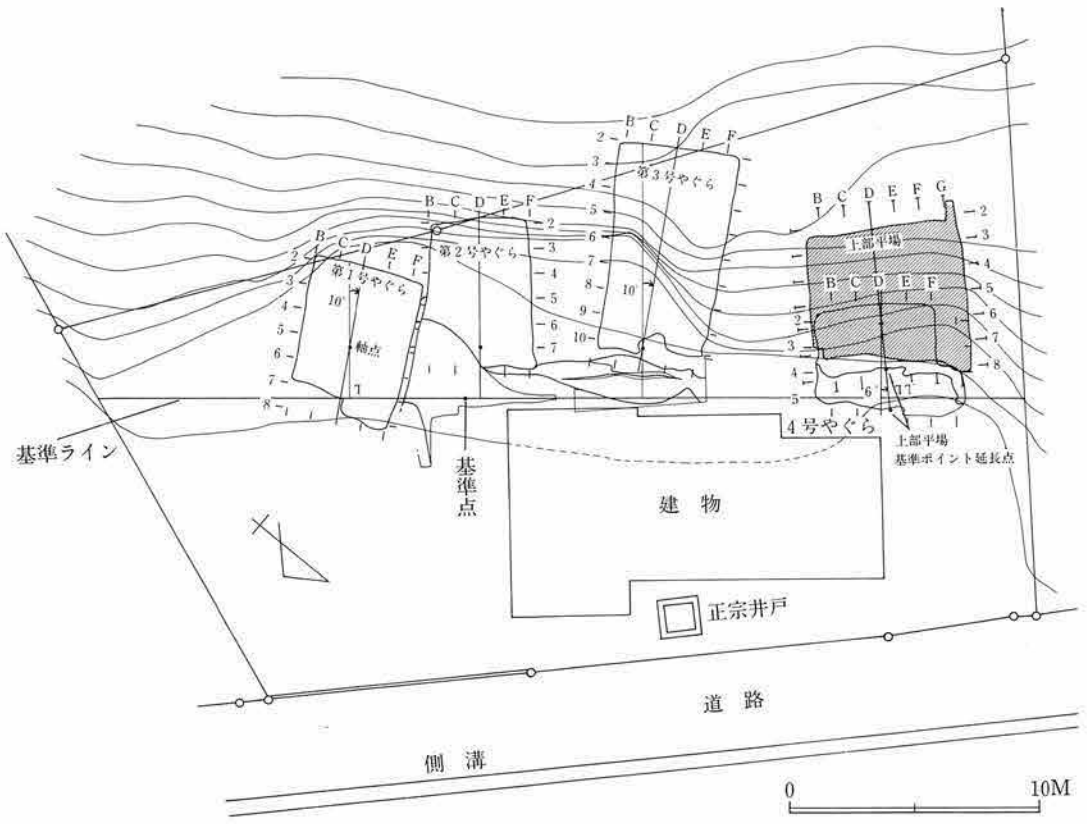
排土土砂の搬出状況から、上部平場部分から調査を開始した。

上部平場部分は、本遺跡やぐら群の最も西側に開口する第４号やぐらの上部に位置する。岩盤面上に約30～40cmの包含層が堆積しているだけで、岩盤面の遺構を確認・記録し、山腹のやぐらの調査に移った。

やぐらの各称は、東側から第１号・２号・３号・４号と付した。

やぐらは、天井部が若干確認出来る程度まで埋められており、まず各やぐらの中央部分と考えられる部分に、幅約１ｍのトレンチを奥壁まで入れ、岩盤までの深さ、土層堆積状態を確認した。

各やぐらの上層には現代の盛土、流入土、岩盤崩落土が約１ｍ以上堆積しており、遺物包含層と考えられる土層堆積は岩盤から約１ｍ以内であった。包含層中（土丹層）からは15～16世紀の



第２図　遺構の位置とグリット図

遺物が出土している。

やぐらの調査は、トレンチで確認した上部土砂を搬出する作業から始めたが、宅地と山腹との間の通路となる平場部分が狭いため重機の移動が困難で、土砂の搬出が思うように運ばなかった。又、作業の安全のため最も東側の第１号やぐらは、狭い範囲に分割しながら、土砂の搬出と調査を行ったため、同一層位における全体での状況確認が出来なかったのは残念であった。

上部土砂搬出作業終了後は、各やぐら中央部にベルトを残し、手堀りで遺物の出土状況を確認・記録しながら、岩盤まで掘り下げた。

各やぐら内の発掘作業終了後、やぐら前の通路を、調査区域までコンクリートを重機で取り除き、岩盤状態の確認作業を行った。又、第２号やぐら北側に１ケ所、岩盤面までサブトレンチを入れた。

グリッドは、各やぐら間が離れている状況から、やぐらと宅地間の平場である通路に、任意の基準点を設定し、東西間が見通せる直線ラインを引いた。この東西ラインを基準ラインとし、やぐらは、それぞれ中心を通る点を決め、基準線から90度の南北軸を設定した。又、この南北軸の東西ラインから２ｍの点を軸点とし、各１ｍのグリットを設定した。第１・３号やぐらは南北軸がやぐらの中心を通らないため、各々軸点から10度西に移動しグリッドを設定した。上部平場は、単独で１ｍグリッドを組み、軸線の延長ポイントを第４号やぐらに示した。上部平場軸線ラインは、第４号やぐら軸線ラインから南に６度の方角である。

各やぐら・遺構のグリッドは、南北軸にアルファベット、東西軸に算用数字を付した。各グリッドは個別なもので、全体の位置状況は、第２図による。

全遺構図版の位置が北側を下方に成作したが、これは、やぐらの開口方位によるもので、すべて統一した。

本遺跡は、昭和32年に故赤星直忠氏により調査が行なわれている。

当時の発掘概報を読むと、やぐらは２穴確認されており、第１・２号穴に相当すると考えられる。

赤星氏は、第２号穴の中央部にトレンチを掘り、土層状況と採集遺物の記録を残しているが、今回の調査結果と一致するものであった。

第三章　検出された遺構と出土遺物

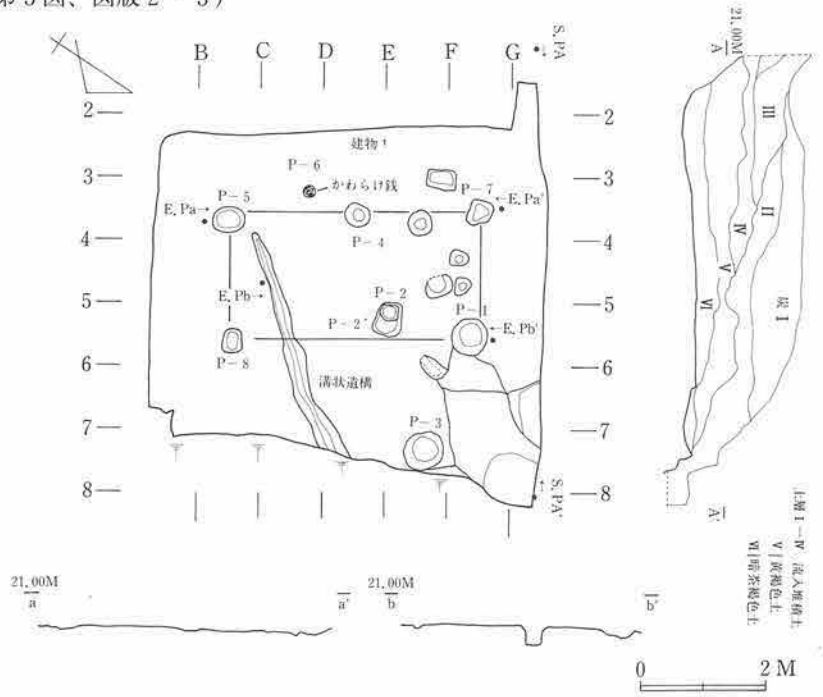
第Ⅰ節　上部平場遺構

(1)　検出された遺構（第３図、図版２・３）

上部平場遺構は、第４号やぐらの開口する山腹上部に検出された。

上部約１m間は流入土が堆積し、岩盤上30～40cmの遺物包含層を取り除くと、標高約20.40mに岩盤面が検出された。

岩盤面は、人工的に削平され、平場上にはピットと溝状遺構が検出された。



第３図　上部平場遺構　平面図、断面図、土層図

ピットと考えられる穴は、全部で14穴あるが、小型で深さ10cm以内の浅いものが多かった。深さのあるピットは、ピット１・２・３である。

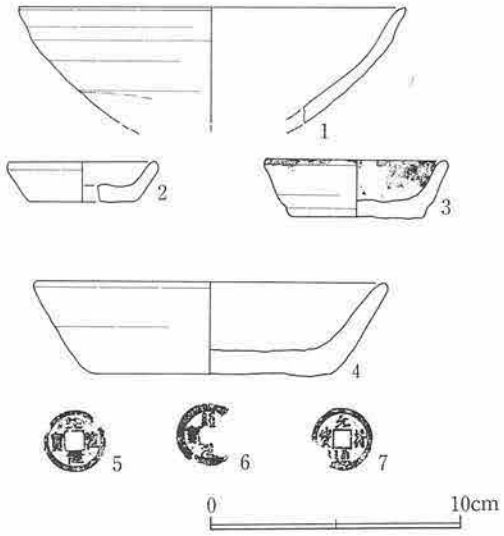
建物として考えられるのは１軒のみ（建物１）で、柱間２m。南側ピット列のピット４に対応するピットは確認されなかった。又、調査範囲外の南側の状況も不明であり、１軒×２軒の入口の広い建物にとどまるのか、東・西・南側に拡張されるのかは分からないが、簡単な建物ではないかと考えられる。又、ピット６は、幅約40cmの円形を呈し、深さは約５cmの浅いピットであり、内部にはかわらけとその中に銭が３枚検出された。かわらけ内には、破片が残り、２枚で口を合わせてあったのではないかと考えられる。これは、建物１に関係する地鎮遺構ではないかと考えられる。

溝状遺構は、建物１内の東側から、平場部分の北側限界の中央部に向かって確認された。この溝は、建物１に伴う排水施設なのか不明であり、北側に向かって傾斜している。

上部平場遺構は、下部に開口する第４号やぐらとの関連性があるのか、興味深い点である。

(2)　出土遺物（第４図、図版19）

出土遺物は極めて少なく、かわらけを中心として、破片のものが多かった。実測可能なものは、わずか４点のみであった。



第4図　上部平場出土遺物

1～3は包含層出土遺物である。1は瀬戸灰釉碗である。口径15.3cm、口縁部がやや外反しており、外面には轆轤成形痕が残る。胎土は淡褐色を呈し、灰釉がかけられているが、剝落している。露体部は茶褐色を呈している。

2、3は小型かわらけである。2は口径5.3cm、底径4.3cm、器高1.6cmで体部が上方に開き、やや薄手の極小であり、焼成はあまり良くない。

3は口径7.2cm、底径5.2cm、器高2.3cmで体部が上方に立ち、底部脇は窪む。胎土も焼成もあまり良くない。口縁付近にタールが付着している。

4～7はピット6出土遺物である。4は大型のかわらけである。口径13.8cm、底径9.5cm、器高3.6cm、体部が上方に立ち上がる。胎土も焼成もあまり良くない。5～7は銭である。5は天聖元宝で、書体は篆書である。初鋳は1023年で北宗銭である。6は破損しているが、紹聖元宝である。書体は篆書である。初鋳は1094年で北宋銭である。7は元符通宝で、書体は行書である。初鋳は1098年で北宋銭である。ピット6内の銭は3枚とも違う種類の銭であった。

第2節　第1号やぐら

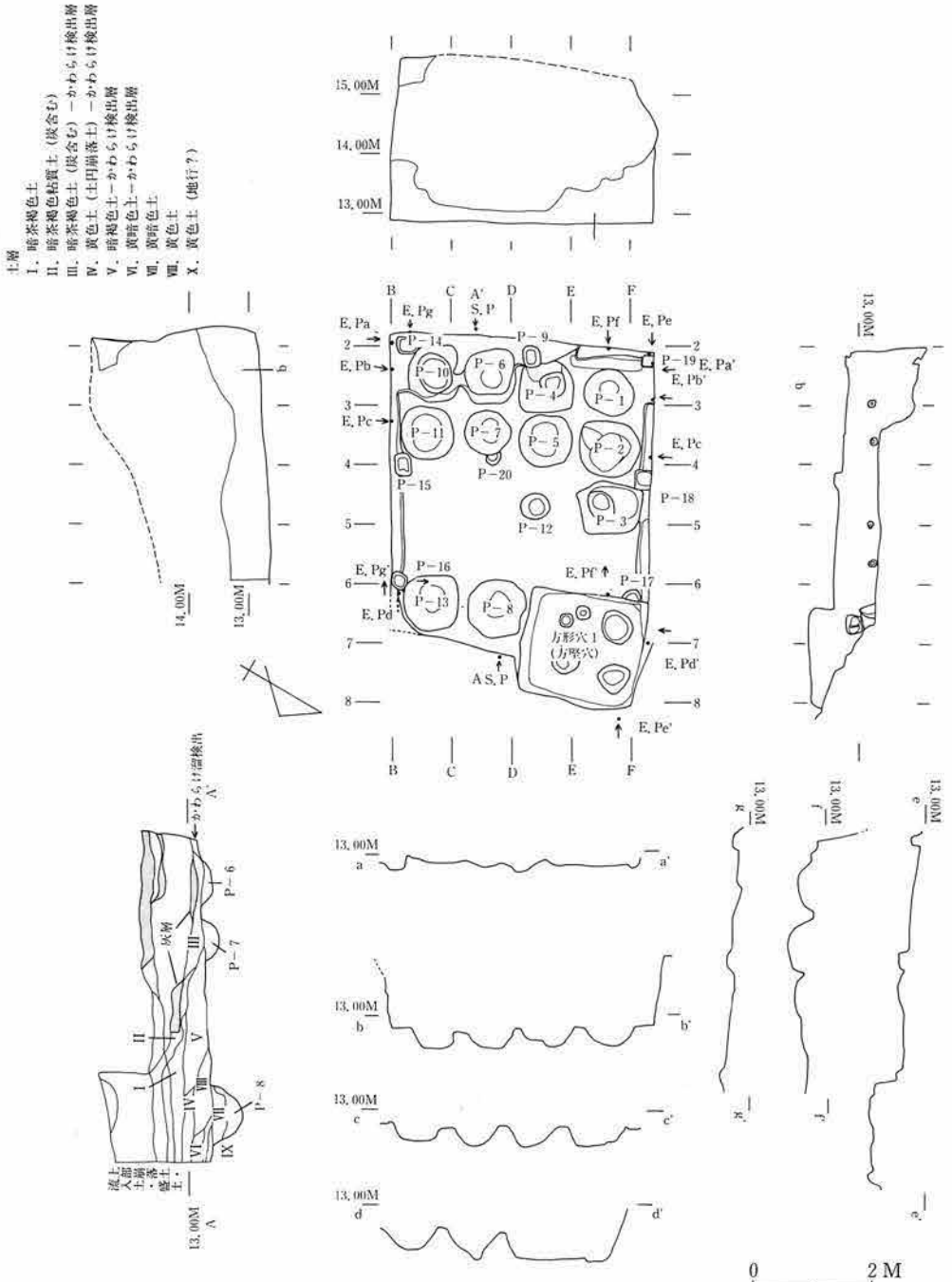
(1)　検出された遺構（第5図、図版4～7）

第1号やぐらは、調査前の状況では、残存状態が非常に悪いと思われたが、遺構の状態は良好であった。やぐら上部の盛土・流入土・崩落土を取り除くと、標高約13.00M前後に一部炭の堆積を含む土丹層が検出された。この層中からは、多量のかわらけと、若干のその他の遺物が出土している。この土丹層は、床面上まで奥壁側に堆積しており、この土丹層とは、少々違う土層が、やぐらの中央から前方部のほぼ同じレベルに堆積している。この層中からも、若干の他遺物を含むが多量なかわらけが出土し、これを一括してかわらけ溜として、分布状態をとらえてみた。(第8図)

やぐらは北東方向に開口しており、玄室は床面の標高が約12.80Mで、若干入口に向かって低くなる。奥行6.0m、幅4.5m、東・奥壁の高さは約2.8mで、横長の平面長方形を呈している。鑿痕の残存状態は悪く、壁面下方の3分の1程度しか残っていない。西壁は第2号やぐらと共有し、高さ約1.4mで前方まで長く続き、壁面には、径約15cmの小穴4穴と、横40cm×縦30cmのピットが掘られている。天井部は崩落して残存していなかった。矩形平面で構成される大型のやぐらである。

床面には、大型の摺鉢状ピットが計11穴検出された。径約80～100cm、深さ約40cmの不整円形であり、奥壁側東西2列のピット列は、ほぼ一定規模である。前方の2穴は、同一規模であるが、奥壁の一群から離れている。又、このピットの西側の方形穴は、一辺約2m、深さ90cmの竪穴であり、

底には、ピットの痕跡が確認出来る。その他、長軸約40cmの楕円状ピット５穴を含む、９穴の小型のピットが検出されている。この内ピット９・14～19の７穴の小型のピットは、柱間約2.0m で、２間×２間の床面上の遺構を覆う上部施設が存在していたのではないかと考えられる。又、ピット20はピット７に切られており、その他小型ピットが大型ピット中に確認出来る事から、後世、再利



第５図　第１号やぐら平面図、立面図、断面図、土層図

用のため改めて掘られた遺構ではないかと考えられる。

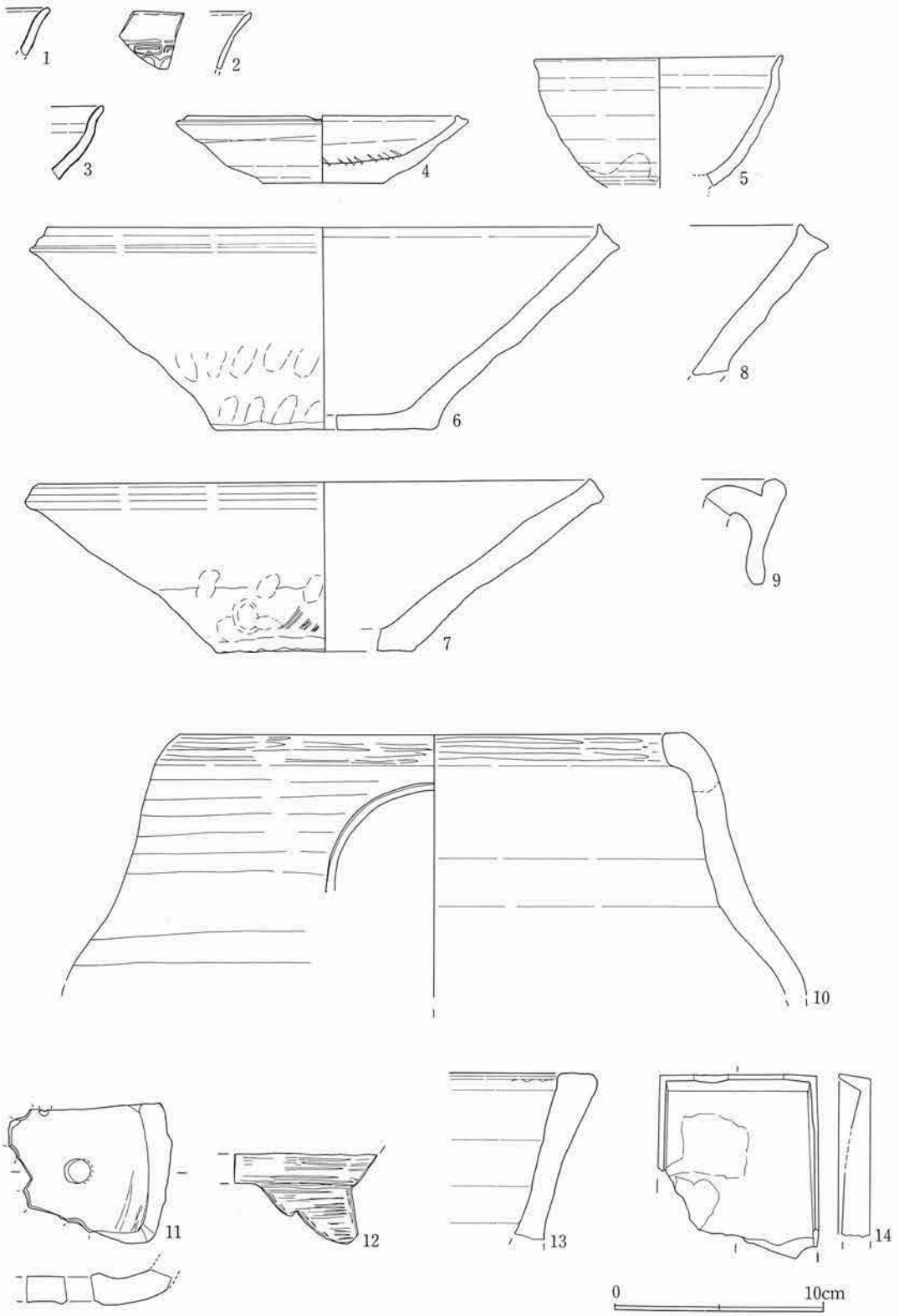
(2) 出土遺物（第６～12図、図版19～21）

第１号やぐらは、かわらけ溜が検出されている事から、かわらけを中心とした遺物が多量に出土している。かわらけ溜検出面から上部土丹層までに出土した遺物を上層出土遺物、かわらけ溜検出面下から床面までの出土遺物を下層出土遺物とし、以下順に説明を記す。

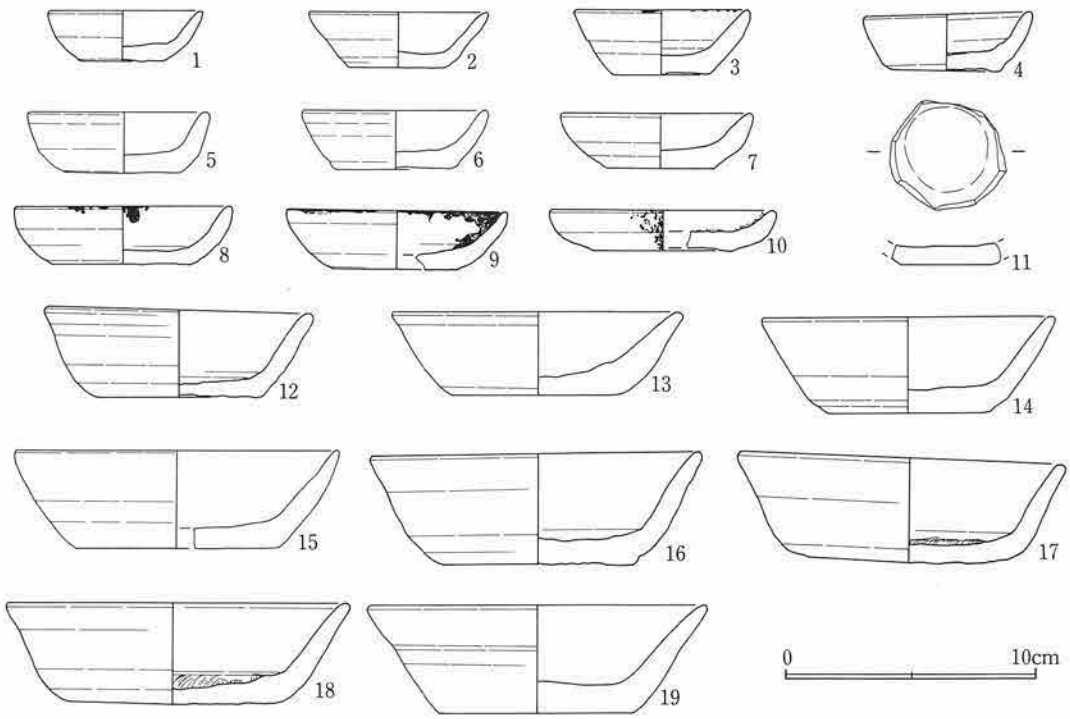
上層出土遺物（第６図）

１、２は磁器。１は白磁の口兀皿の口縁部である。胎土は白色を呈し黒色粒子を含む。口縁部はやや外反する。２は青白磁碗の口縁部である。表面は淡緑色を呈し口兀である。体部は反り、外面中程に突帯が廻り、内面には型押しの雷文の文様を有する。３～５は瀬戸。３は天目茶碗である。釉は黒褐色を呈す。体部は内彎し、口縁部が外反する。４は卸し皿である。口径13.8cm、底径5.8cm、器高3.2cmで、体部は内彎し、中程から口縁にかけ外に開く。口縁端部は凹み、一ケ所に片口の痕跡が見られる。内底には篦により、二方向に直向する条線の切り込みがある。胎土は黄褐色を呈しており、口縁部には鉄釉をかけている。轆轤成形糸切り底である。５は天目茶碗である。口径は11.8cm、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部が外反する。釉は黒褐色を呈し、露体部は茶褐色を呈す。轆轤成形痕が明瞭に残る。６～９は常滑である。６～８はこね鉢である。６は口径28cm、底径10cm、器高9.7cm。体部は直線的に外に開き、口縁部は丁字状を呈するが、内側端部が押され拡がっている。外面下方には指頭痕による押さえが認められる。外底面には砂目が残る。７は口径28.4cm、底径8.4cm、器高8.1cmである。体部は反り気味に開き、口縁部は四角形を呈する。外面下方には指頭痕が少々認められ、内面には自然降灰が多い。外底面には砂目が残る。８は口縁部が丁字状を呈し、外面には指頭痕が多く認められる。胎土は白色粒子を多く含み粗い。９は甕の口縁部である。縁帯が上下に拡がり、頭部に接続しない。10～13は手焙りである。10は土風呂である。口径24.2cm、体部は中程まで膨らみを持ち、口縁部にかけて、やや斜め内側に立ち上がり、口縁部は四角形を呈する。口縁部近くに、円形の窓を４箇所有していたと考えられる。口縁部から外面は研磨され、黒色処理がなされている。内面は指頭によるナデ痕が残る。胎土は灰褐色を呈している。11は瓦質手焙りの底部片である。胎土は灰色を呈し、黒色砂を含む。外面は黒色処理されている。外周辺には小孔が５ケ所認められ、中央部には径１、２cmの穴が穿孔されている。12は瓦質手焙りの脚である。器型は方形であり、外面は研磨され、黒色処理されている。13は瓦質手焙りである。体部はやや斜め上方に立ち上がり、口縁部は厚く断面四角形を呈する。表面は黒灰色を呈し、胎土は淡灰色を呈し粗い。14は硯である。長方硯で下部は欠損している。幅7.7cm、陸部分の厚さは1.3cm、高さは1.5cmである。色調は赤褐色を呈している。

（第７図）１～19はかわらけである。１～10は小型のかわらけである。１は口径6.2cm、底径3.4cm、器高2.0cmの超小型で薄手であり、体部はやや内彎気味に立ち上がる。２は口径6.9cm、底径3.8cm、器高2.2cmの超小型で薄手であり、体部は直線的に開く。３は口径7.1cm、底径4.0cm、器高2.6cm、体部は直線的に開くが、口縁部はやや内彎する。口縁部にタール痕が付着する。４は



第6図　第1号やぐら上層出土遺物（1）

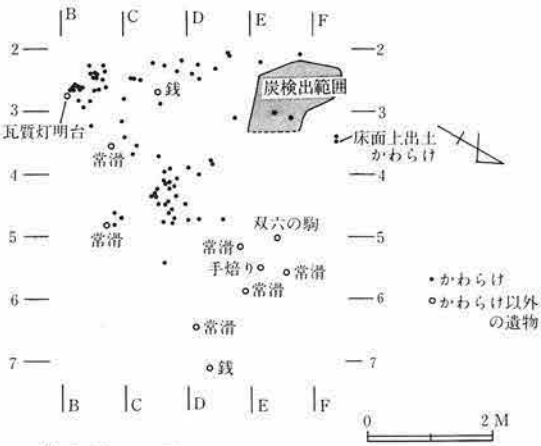


第7図　第1号やぐら上層出土遺物（2）

口径6.5cm、底径4.3cm、器高2.3cm、体部はやや内彎気味に立ち上がる。5は口径7.2cm、底径は4.6cm、器高2.4cm、厚手で、体部中程から上方に立ち上がる。6は口径7.4cm、底径4.4cm、器高2.3cm、薄手で、体部はやや内彎気味に立ち上がる。底部脇は窪み高台状を有する。7は口径7.7cm、底径4.4cm、器高2.2cm、厚手で、体部は中程から上方に立ち上がる。8は口径8.4cm、底径5.5cm、器高2.3cm、薄手である。9は8.6cm、底径5.0cm、器高2.4cmで薄手であり、8、9は、体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部にはタール痕が付着する。10は口径8.7cm、底径6.5cm、器高1.6cm、体部は外に開き中程から上方に立ち上がり、器高は低く、タール痕が付着する。11はかわらけ底部片である。底部の周囲を欠き、平な部分を転用したのではないか。12～14は中型のかわらけである。12は口径11.4cm、底径6.4cm、器高3.5cm、薄手である。14は口径11.6cm、底径6.0cm、器高3.8cm、薄手である。12、14は体部をやや開き立ち上げる。13は口径11.5cm、底径3.8cm、器高3.3cmで腰部が肥厚する。体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。15～19は大型のかわらけである。15は口径12.9cm、底径7.8cm、器高3.9cm、薄手であり、体部は内彎気味に上方に立ち上がる。16は口径13.3cm、底径7.8cm、器高4.2cm、体部は直線的に開く。17は口径12.7cm、底径8.0cm、器高4.2cm、薄手で底部には丸味がある。体部は中程から、やや外に開く。18は口径13.4cm、底径8.2cm、器高4.0cm、薄手で、体部は直線的に外に開き、口縁部はやや反る。19は口径13.3cm、底径7.3cm、器高4.3cm、底部が少々厚い。体部は直線的に開き、口縁部はやや外反する。

かわらけ溜出土遺物（第８～12図）

かわらけ溜の出土状況（第８図）は、５ラインから南側に、かわらけが集中して出土している。先にかわらけ以外の遺物の説明を記し、かわらけ溜のかわらけについては、別表にまとめた。

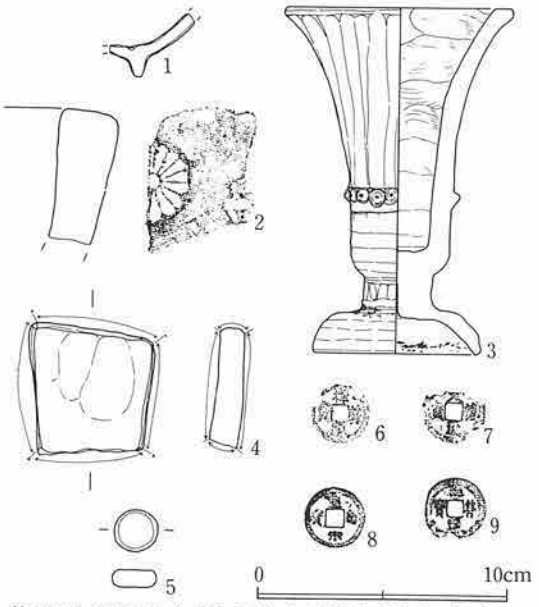


第８図　１号やぐら　かわらけ溜出土状況

（第９図）１は青磁碗の底部片である。釉は草緑色を呈し、畳付部分は無釉で、内底部外周に沈線が廻ると考えられる。２は瓦質手焙りの口縁部である。口縁断面が四角形を呈し、外面上部には菊花文のスタンプが押されており、表面は黒色処理されている。３は瓦質仏華瓶と考えられる。口径8.9cm、底径6.3cm、器高13.8cmである。胴部は上方に立ち上がり、中程から外反し、口縁端部は平になる。外面中程の２本の沈線間に26ケの蓮珠を廻す。胴部上方は縦方向、下部は横方向の磨きが入り、脚部上方も縦方向、下部は横方向に磨かれている。脚部上部には漆痕のような黒色異物が付着し、内面底部付近にはタール痕が付着している。脚部内側中心に小孔が途中まで穿けられている。胴部内面は横方向のナデ痕が認められる。外面は黒色処理がされている。４は転用砥石である。常滑片の周囲、全面を使用している。５は骨製品、鹿角製の双六の駒である。径1.7cm、厚さ0.7cm、表面を丁寧に磨いている。全体にひびが入っている。６～９は銭である。６は祥符通宝。書体は楷書で、初鋳は1008年で北宋銭である。７は天禧通宝、書体は楷書で、初鋳は1017年で北宋銭である。８は皇宋通宝。書体は楷書で、初鋳は1039年で北宋銭である。９は天符通宝。書体は楷書で、初鋳は1098年で北宋銭である。

（第10～12図）は、かわらけである。かわらけは別表に、法量と器型を示す。法量は口径・底径・器高を記す。器型は、体部の形状の分類で表現し、以下の記号で示す。

Ⅰ、体部が内彎気味に立ち上がる。
Ⅱ、体部が直線的に開く。
Ⅲ、体部が外反する。
ａ、口縁部が内彎する。
ｂ、口縁部が上方に立つ。
ｃ、口縁部が外反する。



第９図　第１号やぐらかわらけ溜出土遺物（１）

かわらけのデーター表の結果から、かわらけ

表1　かわらけ溜出土かわらけデーター

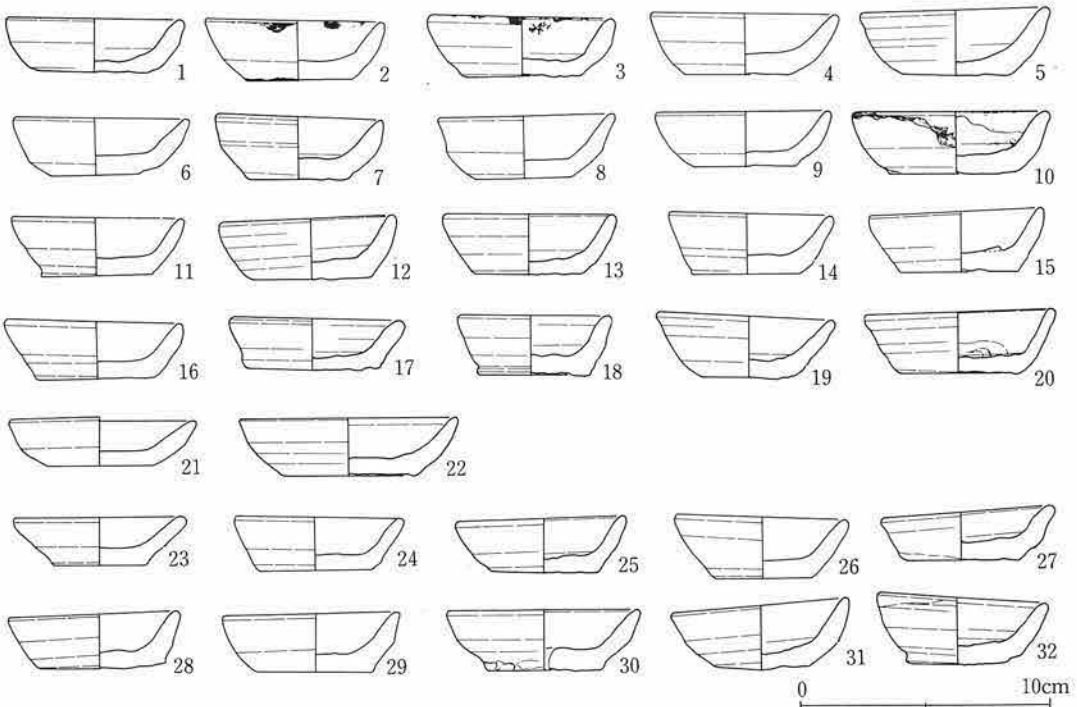
単位　(cm)

図版	No.	口径	底径	器高	器型	備　考
図版10	1	6.8	4.5	2.1	I	
	2	6.9	5.1	2.4	IIa	タール痕
	3	7.0	5.5	2.3	II	タール痕
	4	7.2	5.2	2.4	I	
	5	7.2	4.2	2.6	Ic	
	6	6.7	3.5	2.3	Ib	高台状有
	7	6.4	4.0	2.5	I	高台状有
	8	6.8	3.7	2.5	IIc	
	9	6.7	4.1	2.2	I	高台状有
	10	7.5	5.1	2.5	Ic	タール痕
	11	6.6	4.4	2.3	I	高台状有
	12	6.7	4.7	2.4	I	
	13	6.5	4.2	2.3	I	
	14	6.3	4.3	2.4	Ib	
	15	6.8	4.6	2.4	IIb	内底ナデ強
	16	6.8	4.6	2.3	IIb	
	17	6.5	5.3	2.1	II	
	18	5.8	4.3	2.4	IIc	高台状有
	19	6.8	2.9	2.4	II	
	20	7.3	4.5	2.4	II	
	21	7.2	4.2	2.0	II	歪がむ
	22	8.5	5.1	2.3	I	高台状有
	23	6.6	3.7	1.9	III	
	24	6.5	4.4	2.1	II	
	25	6.5	4.2	2.2	I	高台状有
	26	6.6	3.8	2.4	I	
	27	6.6	4.4	1.9	II	
	28	6.6	5.0	2.2	IIc	
	29	6.7	4.6	2.3	II	
	30	7.5	4.5	2.4	IIb	高台状有、指頭痕
	31	6.7	3.8	2.6	IIb	
	32	6.6	4.0	2.2	I	高台状有
図版11	33	11.7	5.6	4.2	II	器高高い
	34	10.6	6.2	3.9	II	器高高い
	35	10.3	6.0	3.4	II	
	36	10.8	7.5	3.3	II	
	37	11.1	6.1	3.6	II	内底ナデ強
	38	11.7	7.5	3.6	Ib	
図版11	39	11.6	7.1	3.8	Ib	
	40	11.5	6.5	3.8	Ic	
	41	11.7	6.7	3.4	IIc	内底ナデ強
	42	11.0	7.0	3.9	Ib	
	43	13.0	8.0	4.2	II	
	44	12.8	7.7	4.3	II	内底ナデ強
	45	12.5	7.3	3.9	Ic	
	46	13.3	7.8	4.3	II	
	47	12.7	7.3	3.9	IIc	
	48	12.7	8.0	4.2	II	
	49	12.8	7.5	4.0	IIc	
	50	14.0	8.2	4.2	IIc	
	51	13.6	8.0	4.1	II	
	52	12.8	6.8	3.8	II	
	53	12.3	7.1	3.9	II	
	54	12.0	6.5	3.9	II	
	55	12.2	7.3	3.9	IIc	沈線入る
	56	12.3	7.9	3.8	II	内底ナデ強
	57	12.5	7.3	3.8	II	
	58	12.7	7.4	4.1	II	
	59	12.6	8.0	3.9	II	
	60	12.8	7.5	4.2	II	
	61	13.2	8.8	4.4	II	高台状有
	62	24.5	8.4	4.2	Ib	
	63	13.2	7.3	3.6	I	タール痕?床面上
図版12	64	12.8	8.0	3.5	II	
	65	10.5	6.8	3.5	II	底部スノコ痕強
	66	10.4	7.2	3.1	II	
	67	11.5	7.5	3.3	II	
	68	11.1	7.0	3.5	II	
	69	13.8	9.1	4.0	II	
	70	12.6	7.2	4.0	Ic	
	71	12.6	7.5	4.2	Ic	
	72	13.5	7.0	4.2	II	
	73	14.0	8.4	4.5	Ib	タール痕？
	74	12.3	6.0	3.7	Ic	
	75	13.3	8.0	4.0	Ic	

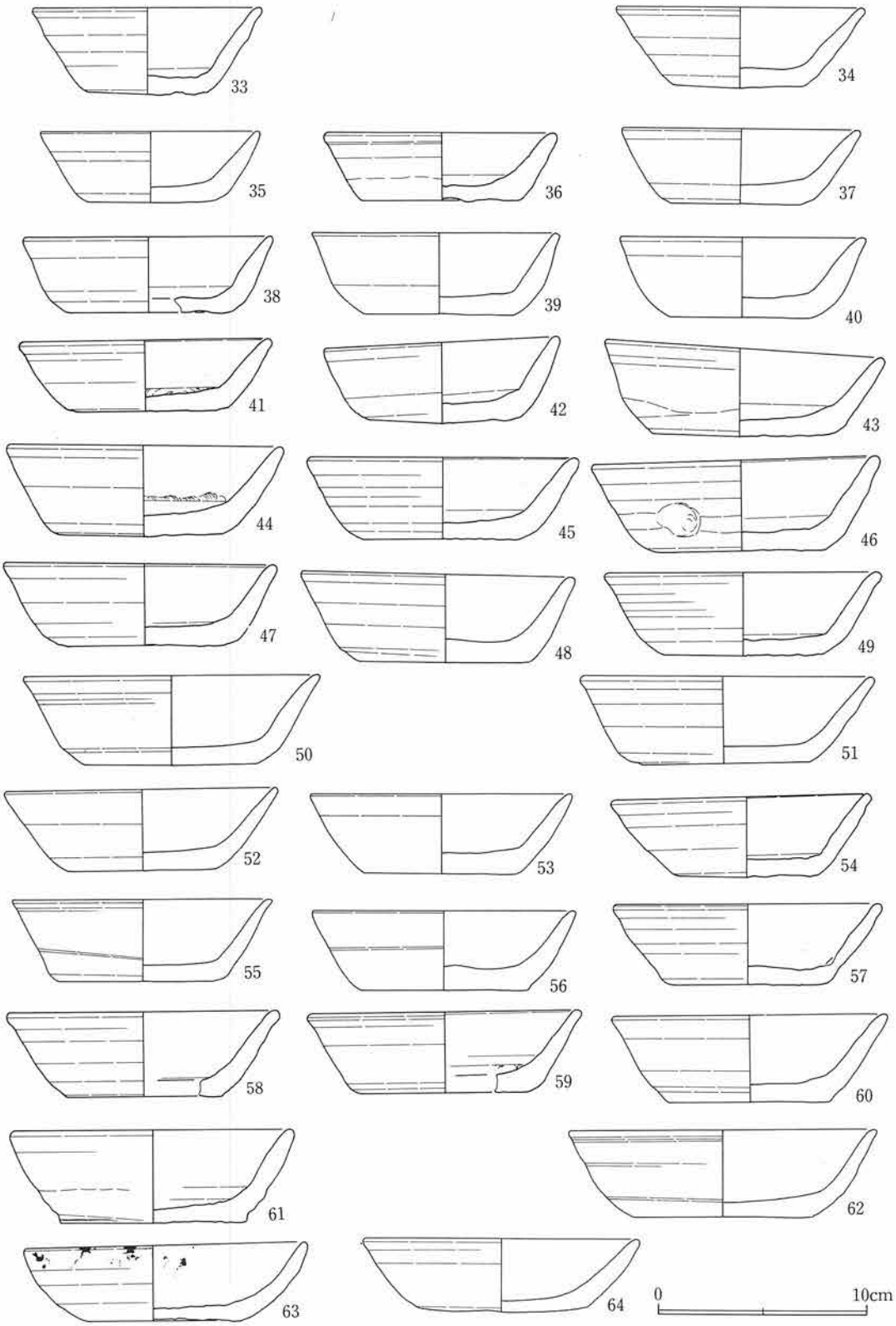
溜のかわらけは、大型・中型・小型に分類される。ここでの小型かわらけは、口径６～７㎝の法量のものを示し、鎌倉市内においては超小型の法量のものが大部分を占めている。傾向としては、大型・超小型のかわらけの出土数が多く、口径10～11㎝の中型と考えられるかわらけは、少なかった。器型においては、Ⅱの占める割合が多く、さらに口縁部がやや外反傾向を示すＣの割合も多かった。又、体部が内彎傾向を示すＩと考えられる器型もあったが、これもⅡに近いタイプと考えられる。床面上から出土したNO.63はＩと考えられる。全体的にかわらけは、側面観逆台形を示す器高の高いものが多く、腰部の丸味・口縁部の反りは、一括資料とすると、バリエーションと考えられる。しかし、超小型のかわらけの器型に関しては、この結果に順ずるものもあるが、体部が内彎するもの、外反するものなど統一的ではないが、傾向としては、底部脇が少々窪み高台状を有しているものが超小型には認められる。

下層出土遺物（第13図）

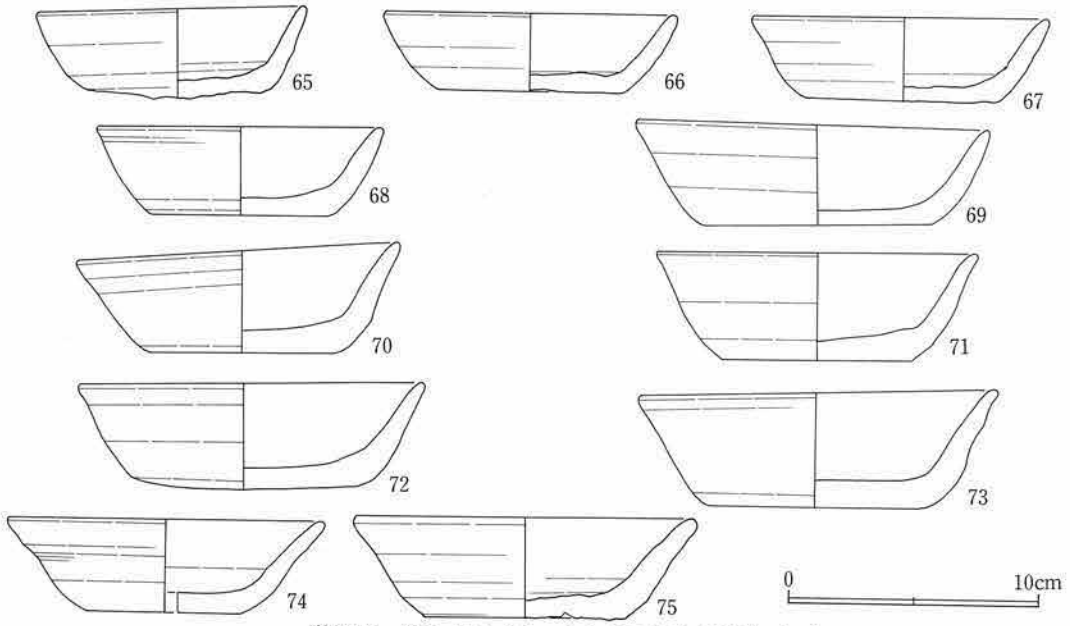
１は灰釉平碗である。釉は淡緑色を呈し、外面体部下方までかけられ、全体に細い貫入が入る。内底に目痕が残っている。２は褐釉劃花文壺の破片と考えられる。釉は褐緑色を呈し、櫛状工具で波状文を表現している。胎土は淡灰色を呈し、白色粒子、褐色砂などが混入し粘性がある。内面には釉がたれている。３は常滑の甕である。口径42.4cm、縁帯が上下、特に下方に拡がり頸部に接続していない。内面には、指頭による調整が認められる。全体的に焼きすぎによるヒビが入っている。４～12はかわらけである。４～10が小型のかわらけである。４は口径6.5cm、底径4.8cm、器高2.0cm、体部は直線的に開く。５は口径6.7cm、底径3.0cm、器高2.3cm、体部は内彎気味に立ち上がる。



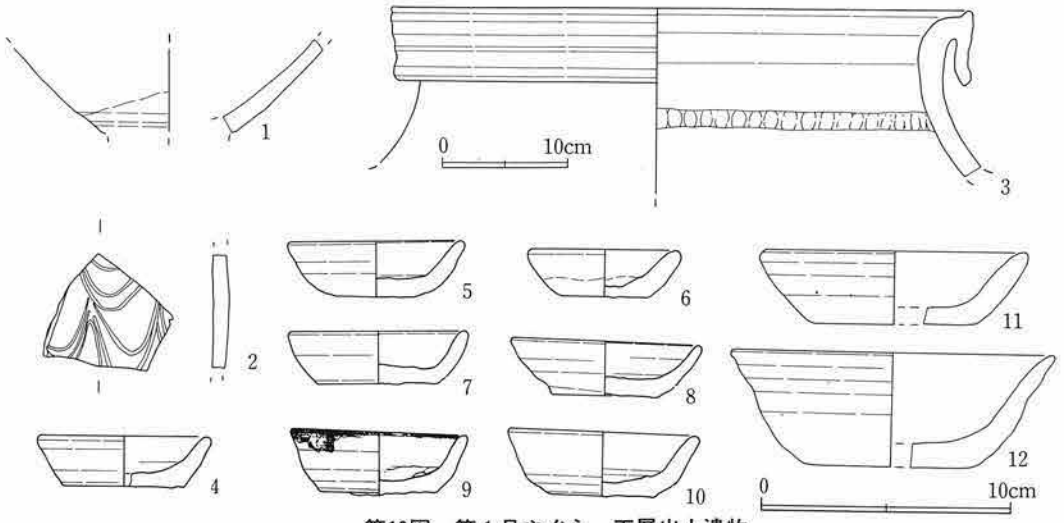
第10図　第１号やぐらかわらけ溜出土遺物（２）



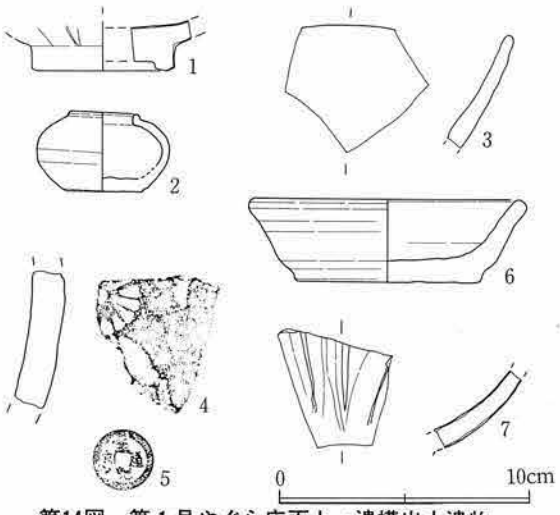
第11図　第１号やぐらかわらけ溜出土遺物（３）



第12図　第１号やぐら　かわらけ溜出土遺物（４）



第13図　第１号やぐら　下層出土遺物



第14図　第１号やぐら床面上・遺構出土遺物

６は口径5.8cm、底径3.4cm、器高1.9cm、体部は直線的に開き、器壁も厚い。７は口径6.8cm、底径4.8cm、器高2.1cm。８は口径7.3cm、底径4.2cm、器高2.2cm。７、８は薄手で、体部は内彎気味に立ち上がり、高台状を有する。９は口径6.8cm、底径4.8cm、器高2.5cm。10は口径7.3cm、底径4.1cm、器高2.5cm。９、10は薄手で、体部中程から直線的に立つ。９はタール痕が付着している。11は中型のかわらけである。口径10.2cm、底径6.4cm、器高3.0cm、体部は直線的に開く。12は大型のかわらけである。口径

12.7cm、底径6.5cm、器高4.5cm、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反し、器高が非常に高い。

床面上・遺構出土遺物（第14図）

1～3は床面上出土。1は青磁蓮弁文碗の底部片である、高台径は5.2cm、畳付部分は山型に削られ、緑色の釉は高台外までかかる。2は瀬戸小壺。口径2.6cm、底径3.0cm、器高3.1cm、轆轤成形糸切り底である。外面体部下方から底部を除き全体に濃緑色を呈した灰釉がかかっている。3は瀬戸灰釉平碗である。釉は淡緑色を呈し、細かい貫入が全体に入る。4は瓦質手焙り片である。外面に菊花文のスタンプを配し、表面黒色処理している。ピット1出土。5は銭である。至道元宝で書体は楷書である。初鋳は995年で北宋銭である。ピット2出土。7は青磁蓮弁文碗片である。釉は緑色を呈し厚い。素地は灰白色を呈し粘性がある。ピット5出土。

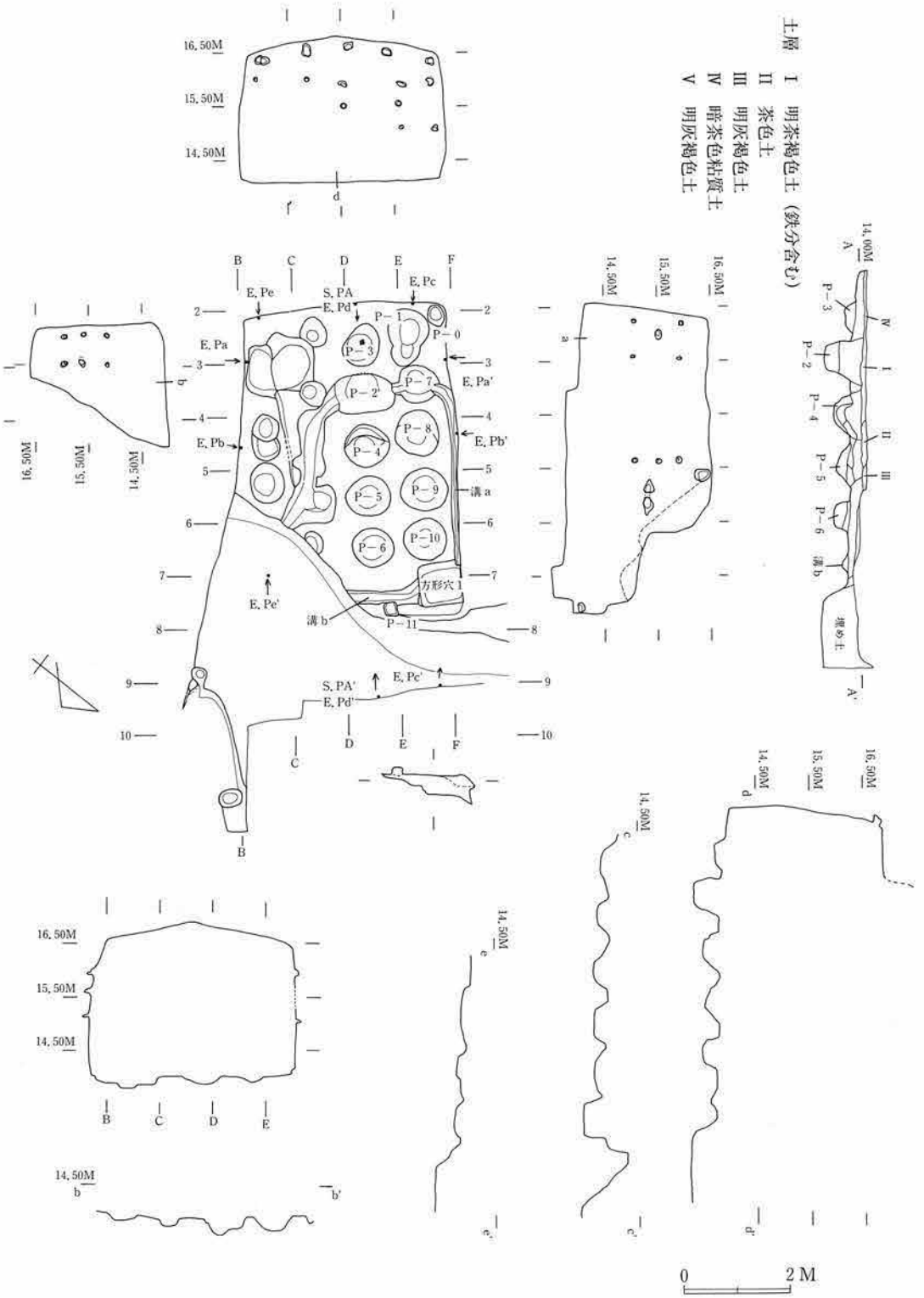
第3節　第2号やぐら

(1) 検出された遺構（第15、16図、図版8～11）

第2号やぐらの調査前の状況は、天井部付近まで埋められており、内部施設の状況は一際確認出来なかった。昭和32年の故赤星直忠氏の調査の記録によると、奥壁の状態が記録されている事から、近年、盛土され埋められたようだ。

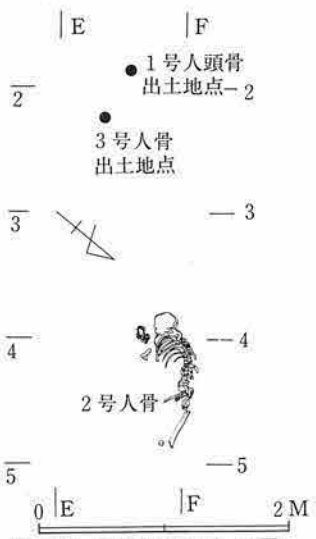
やぐらは、約2m近く盛土と崩落土である土丹が堆積していた。土丹層中、標高約14.50mの西壁際に、側臥伸展葬の人骨一体（2号人骨）と、奥壁寄に人頭骨（1号人骨）と獣骨と考えられる脚骨が検出されている。（第16図）やぐら東側半分は、昭32年におけるトレンチ調査の跡と考えられる埋土が確認された。厚い土砂を取り除くと、西側半分には、標高約14.20Mのレベルで青灰色土丹層が検出された。この層上からは、木製品、漆器を中心とした遺物が出土しており（第18図）、故赤星氏の記録と合致している。

やぐらは、北東方向に開口しており、玄室床面の標高が約13.80Mで、若干入口に向かって低くなる。奥行約6.0m、幅4.0mの船底形天井のやぐらである。壁面は4面存在し、東壁は高さ約2.5mで、北側部分は後世の改造により破壊されたと考える。壁面には、径約15cmの不整円形の小穴6穴が2列に2穴づつ並んで掘られている。奥壁は高さ約2.8mで、天井部は緩やかな山型であり、横長の平面長方形を呈する。壁面には、小穴が多く掘られており、天井部ラインに接して径約20cmの楕円状を呈する小穴が均等に5穴掘られている。これは、龕と考えてもよいのではないか。又、その下部に径約15cmの不整円形の小穴が、1～3個の列を成し掘られている。西壁は高さ約2.7m、横長の平面長方形を呈する。壁面には、径約10cmの小穴が7穴掘られていて、縦方向に2穴並ぶ穴が2列、3穴並ぶ穴が1列掘られている。又、2穴並ぶ2列間の間に径約20cmの楕円状の穴が掘られている。その他、北側寄り天井付近に径約30cmの楕円状のピット1穴と、その下方に、壁中で穴が通じている楕円状の穴が2穴、入口付近下方に径約20cmの楕円状の小穴が1穴掘られている。これは扉の施設に関係があるのだろうか。この3壁に掘られている小穴は、レベルがほぼ同じ位置で



第15図　第２号やぐら平面図、立面図、断面図、土層図

ある事から、何か意味のある穴であったと考えられる。又、東壁の北側の崩壊部分が残存していたとしたら、西壁と対応する施設が掘られていたのではないだろうか。第２号やぐらは、前壁と考えられる立ち上がりが、西側に若干残っている。高さは約40cm、幅約80cmの不整形の壁が残っている。これに対応する東壁は、やぐら前方の一段低い、標高約14.00Mの平場を改造する時に、グリッドD－５ラインから北側は破壊されたと考えられ、東側前壁も失われたのであろう。



第16図　第２号やぐら上層人骨出土状況

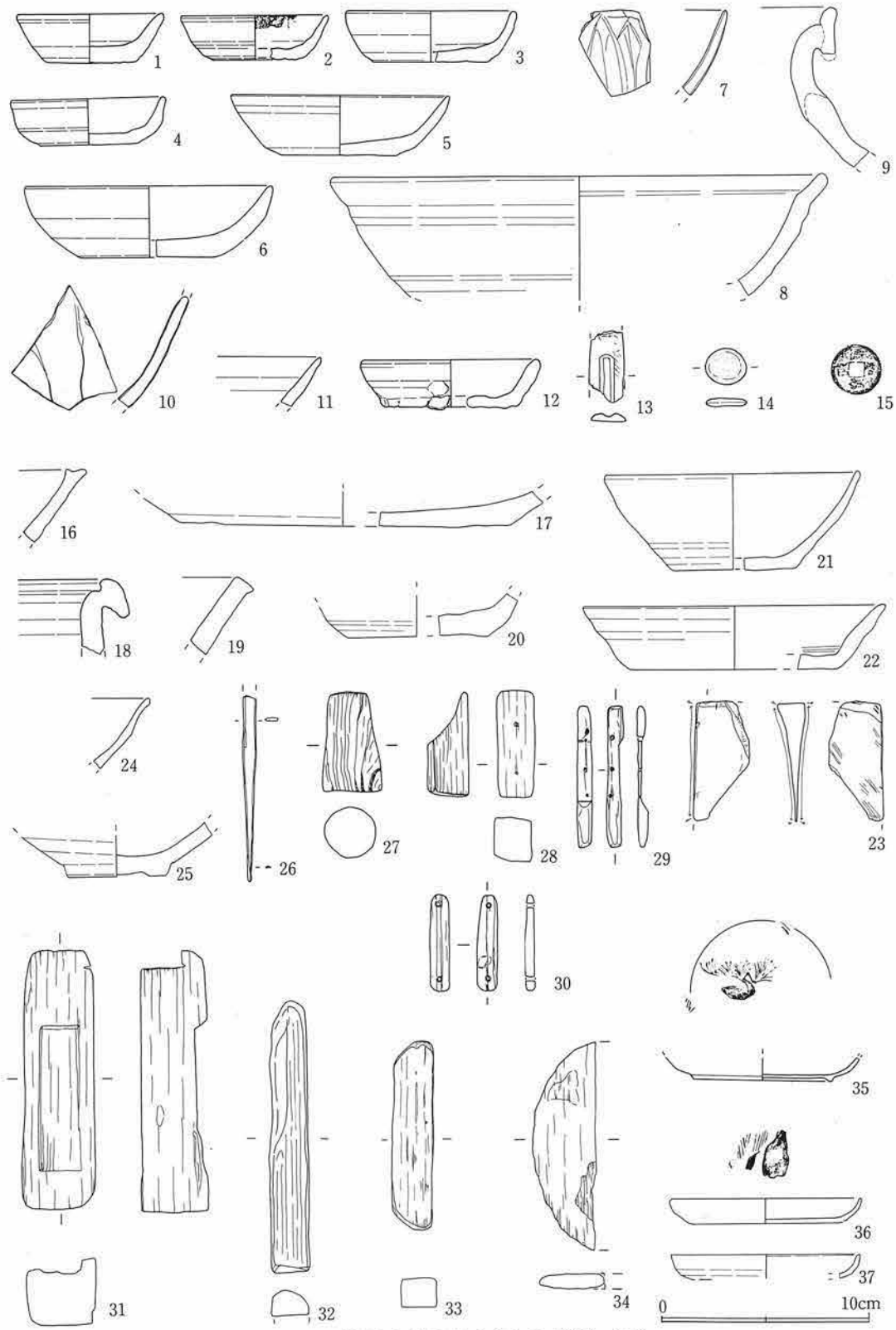
床面には、第１号やぐらと同様、大型摺状ピットが掘られているが、中心のDラインを境に、東側と西側では様相が異なっている。西側は、径約80cm、深さ約40～60cmの不整円形のピットが南北に２列５穴ずつ並んでいる。又、西壁（溝a）前壁（溝b）に沿って小溝が掘られている。両溝ともレベル差がないので、流れの方向は断定出来ないが、両溝とも入口に向って流れていくのではないか。入口角に方形穴が１穴掘られている。１辺約80cmの竪穴である。その他、径約30cmの不整円形の小ピットが２穴、奥壁角（P－０）と前壁入口部分（P－11）に掘られている。P－11は扉状施設に関係すると考えられる。東側は、径約50cm、深さ約20～30cmの不整円形のやや小型のピットが５穴、不統一に掘られており、その他は、窪みのような不整形の穴と、溝が通っている。溝は若干入口に向かって低くなるようだが、レベル差はほとんどない。

やぐら前は平坦な平場であるが、サブトレンチを入れた結果、北側に向かって低く傾斜していくようだ。サブトレンチ内には、ピットが１穴確認された。径30×40cmの楕円状のピットで、径約６cmの木が残っていた。やぐら前方にも、何らかの施設が存在していたと考えられる。

(2)　出土遺物（第17、19～21、図版22、23）

第２号やぐらは、故赤星氏の記録にも残る、青灰色土丹層上において、種々の遺物が出土した。この層から床面までを下層とした。上層においては撹乱の遺物もかなり含まれてしまうが、実測可能な遺物はすべて示した。以下、順に説明を記す。

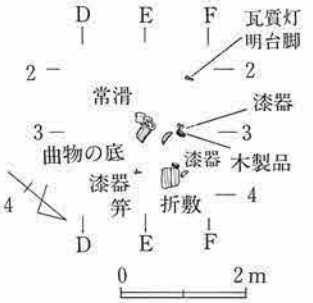
（第17図）１～６はやぐら前出土遺物のかわらけであり、１～４は小型のかわらけである。１は口径6.8cm、底径4.2cm、器高2.3cm、体部は直線的に開く。２は口径6.9cm、底径4.9cm、器高2.1cm、薄手で体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部にタール痕付着。３は口径7.9cm、底径5.4cm、器高2.4cm。４は口縁7.2cm、底径4.7cm、器高2.2cm。３、４は薄手で、体部が内彎気味に立ち上がる。５、６は中型のかわらけである。５は口径10.3cm、底径5.5cm、器高2.8cm、薄手である。６は口径11.7cm、底径6.3cm、器高3.4cm。５、６は体部が内彎気味に立ち上がる。７～８は撹乱出土遺物である。７は青磁蓮弁文碗片である。８は常滑の甕である。口縁端部は丁字状に、上下に拡がり、頸部に接続しない。８は瀬戸灰釉平鉢である。口径23.8cm、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。胎土は黄白色を呈し、釉は刷毛塗りで、塗り切らずまだらになっている。外面体部下方は篦削りである。10～15は上層出土遺物。10は青磁蓮弁文碗片。釉は草緑色を呈し、胎土



第17図　第２号やぐら出土遺物（１）

は灰白色であり、黒色粒子を含み粘性がある。11は瀬戸灰釉鉢片である。釉は濃緑色を呈し薄い。12は小型かわらけである。口径8.2cm、底径6.4cm、器高2.2cm、体部は直線的に開き、口縁部は肥厚する。体部下方には指頭痕の調整が認められる。13は骨製笄である。幅1.65cm、厚0.4cm、中央に幅0.7cm、深さ0.15cmの溝が削られている。上下は欠損し、表面は磨かれている。14は碁石である。長径1.9cm、短径1.7cm、厚さ0.4cm。15は銭である。政和通宝で、書体は篆書で初鋳は1111年の北宋銭である。16～22は中間土丹層出土遺物。16は瀬戸灰釉平鉢片である。口縁部はＹ字状を呈し、釉は全体にかかる。17は瀬戸灰釉盤である。底部は15.5cmで、胎土は黄白色を呈し、釉は内面に灰釉を刷毛塗りしているが、部分的に褐色である。外面は篦調整であり、脚足の付くタイプである。18は常滑の甕の口縁部である。口縁端部は肥厚しＮ字状に折り曲がる。19は常滑のこね鉢である。口縁断面は方形を呈するが、端部外側がやや拡がる。内面は自然降灰が多量に付く。20は渥美の小壺である。底径は6.6cmで、上げ底状になる。内底面には輪状痕が残り、自然降灰が付く。21は瀬戸灰釉小碗である。口径12.0cm、底径5.7cm、器高4.6cm、薄手で体部は内彎気味に立ち上がる轆轤成形糸切り底である。釉は黄色を呈し貫入が全体に入り、体部中程までかかる。22は大型のかわらけである。口径14.4cm、底径9.8cm、器高3.1cmで、体部は直線的に開き、内底面には強くナデ痕が残る。24は砥石である。現長5.6cm、頂部の厚さ1.3cm、端部の厚さ0.1cmで頂部の側面は、切り出し時のままである。両面ともう一方の側面は使用されており、砥面には斜め方向の削痕がある。仕上砥と考えられるが、生産地は京都である。24～37は下層出土遺物である。24は瀬戸灰釉碗片である。口縁部が外反し、釉は淡緑色を呈し全体にかかり、細かい貫入が入る。口縁端部は釉が兀ている。25は灰釉碗の底部片である。高台径は4.6cm、断面方形を呈する低い削り高台である。胎土は黄白色であり、釉は黄色を呈し、内底のみにかけられている。26は骨製笄である。現長9.0cm、上部幅0.6cm、下部幅0.2cmで、断面はかまぼこ状を呈している。一端は尖り、一端は欠損している。27～34は木製品である。27は不明木製品である。長さ4.1cm、幅、上方が1.8cm、下方が3.0cmの側面観縦長の台型状を呈する。断面は円形であり栓と考えられるが、用途は不明である。28は不明木製品である。長さ5.1cm、幅1.8cm、厚さ2.1cmの平面長方形を呈する。片面には径0.2cmの小孔が、縦方向に２ケ穿いているが、貫通はしていない。裏側は半分まで斜めに切り落とされている不明木製品である。29は長さ11.7cm、幅0.7cm、中心の厚さ0.2cmの棒状の製品である。表面には、径約0.2cmの小孔が３ケ、縦方向に均等に並んで穿いている。裏面は、両端を残し、中央付近幅2.8cm間を平坦に削っており、小孔が貫通している不明木製品である。30は長さ4.6cm、幅1.0cm、厚さ0.5cmの、小型の棒状の木製品である。両端寄りに、径0.2cmの小孔が各１ケずつ穿いており、用途は不明である。31は、長さ12.5cm、幅3.3cm、中心の厚さが2.6cmの隅を加工した方形の角材である。一面には、長さ7.0cm、幅1.9cm、深さ0.7cmの方形の凹を掘り抜いている。はめ込み式の建築部材なのか、用途は不明である。32は棒状木製品である。長さ13.1cm、幅約1.9cm、厚さ約1.2cmで断面かまぼこ状を呈し、一端を尖らせている。風化が激しい。33は不明木製品である。長さ9.1cm、厚さが1.4cmである。曲物の蓋の一部に類似しているが厚すぎる。34は曲物の蓋

である。現長9.9cm、厚さ0.7cm、表面は風化が激しい。35～37は漆製品である。35は黒漆皿である。高台径6.6cm、断面三角形を呈する高台が付く。内底面には、朱漆で松の絵を描いている。36は黒漆皿である。口径9.2cm、底径7cm、器高1.2cmの平底皿である。内底面には朱漆で文様を描いている。37は黒漆皿である。口径9.0cm、底径約7.0cm、器高約1.2cmである。

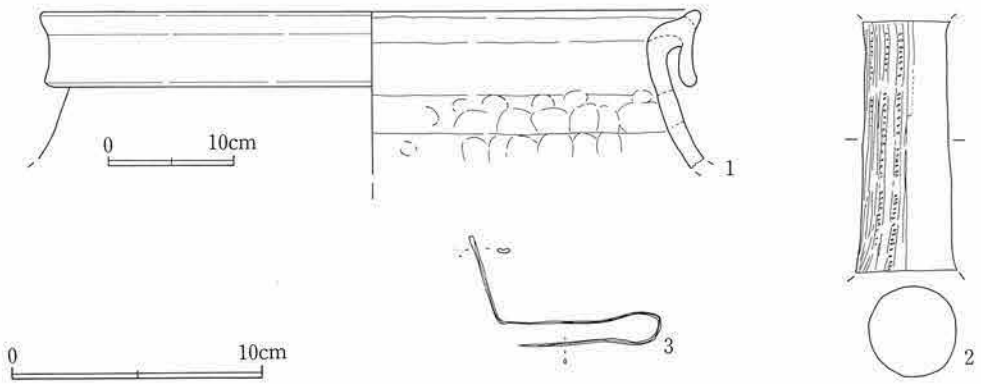


第18図　第2号やぐら青灰色土丹層上遺物出土状況

青灰色土丹層上出土遺物（第18～20図）

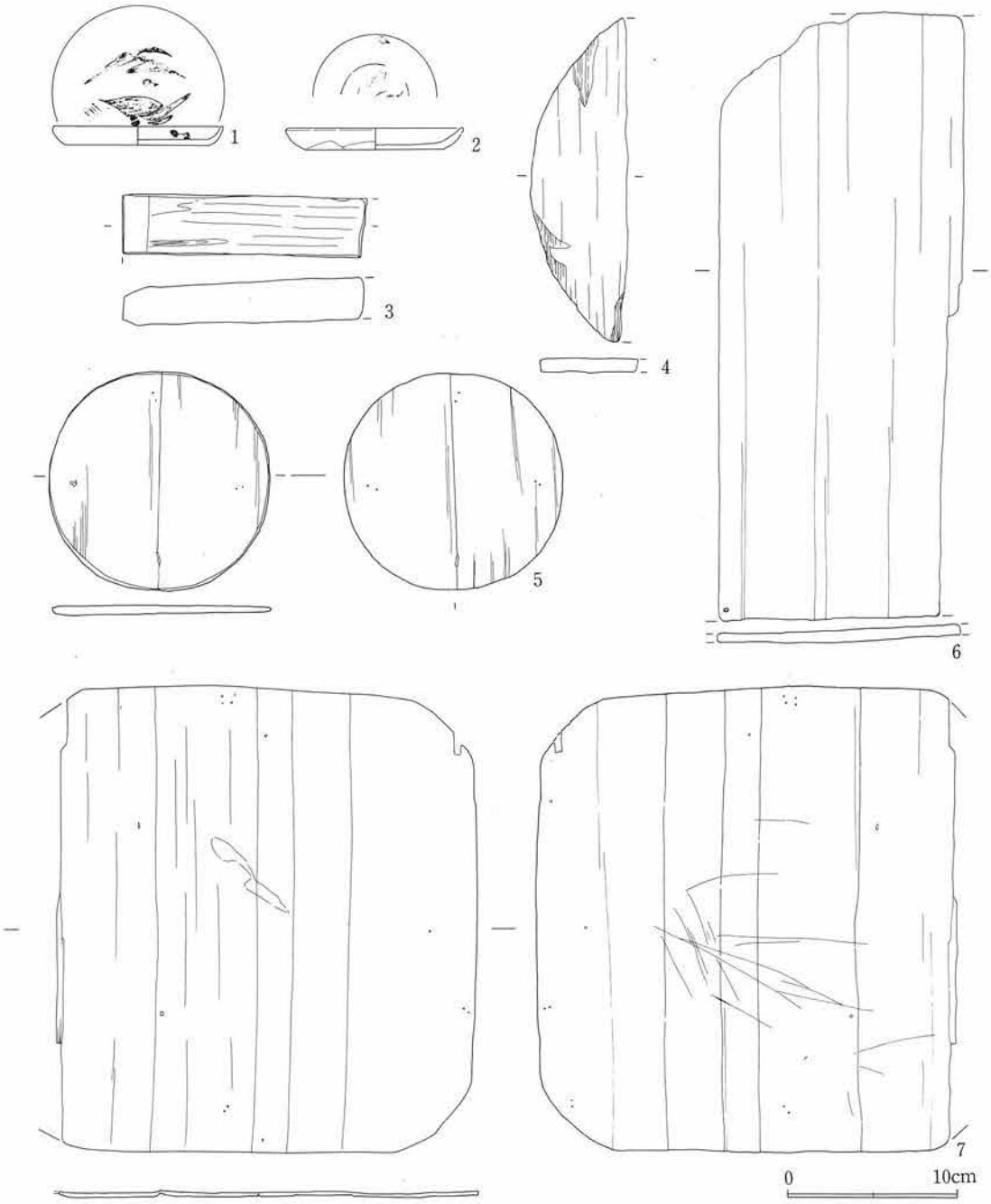
やぐら西側の青灰色土丹層上からは、小範囲内に種々の遺物が出土した。

（第19図）1は常滑の甕である。口径51.5cm、口縁部断面はN字状を呈し、頸部に接続はしない。内面には、指頭によるナデの痕跡が残る。表面は焼けており、黒褐色を呈し、肩部に降灰がかかっている。2は瓦質灯明台である。現長9.9cm、断面は、径3.5cmの円形を呈す。外面は、縦方向の篦磨きが施され、所々にひっかかりの痕が細かい楕円状になる。上部内側の中心に、径0.4cm、深さ3.6cmの孔が穿いている。表面は黒色処理され良く焼き締っている。3は銅製鍍金笄である。全長約16.5cm、上部幅は0.5cmで、表面に窪みが入る。下部幅は0.2cmで、断面はかまぼこ状を呈する。先端は尖り、表面は塗金されている。



第19図　第2号やぐら　青灰色木土丹層上出土遺物（1）

（第20図）1、2は漆製品である。1は黒漆皿で、口径10cm、底径8.4cm、器高1.1cmの平底皿である。内底面には朱漆で、須浜文を描いている。2は黒漆皿で、口径10.4cm、底径8.0cm、器高1.2cmの平底皿である。体部外面下方に削痕を残し全体に漆が塗られている。内底面には、朱漆で文様を描いている。3～7は木製品である。3は残長14.2cm、幅3.4cm、厚さ2.4cmの角材である。末端は欠損し、先端は両側から斜めに削りが入っている、不明木製品である。4は曲物の底である。現長19cm、厚さ0.8cm、表面全体に漆が塗られている。5は曲物の底である。径12.9cm、厚さ0.5cmの円形の板であり、表面周縁部には、径0.1cmの小孔が、2穴で1対を成し、4ケ所に認められる。6は板折敷である。一辺35.5cm、厚さ約0.8cmである。各辺の中央部に、径0.4cmの小孔が穿けられていたようだ。現状では、1ケしか確認出来ない。7は板折敷である。一辺27.4cmで、厚さ

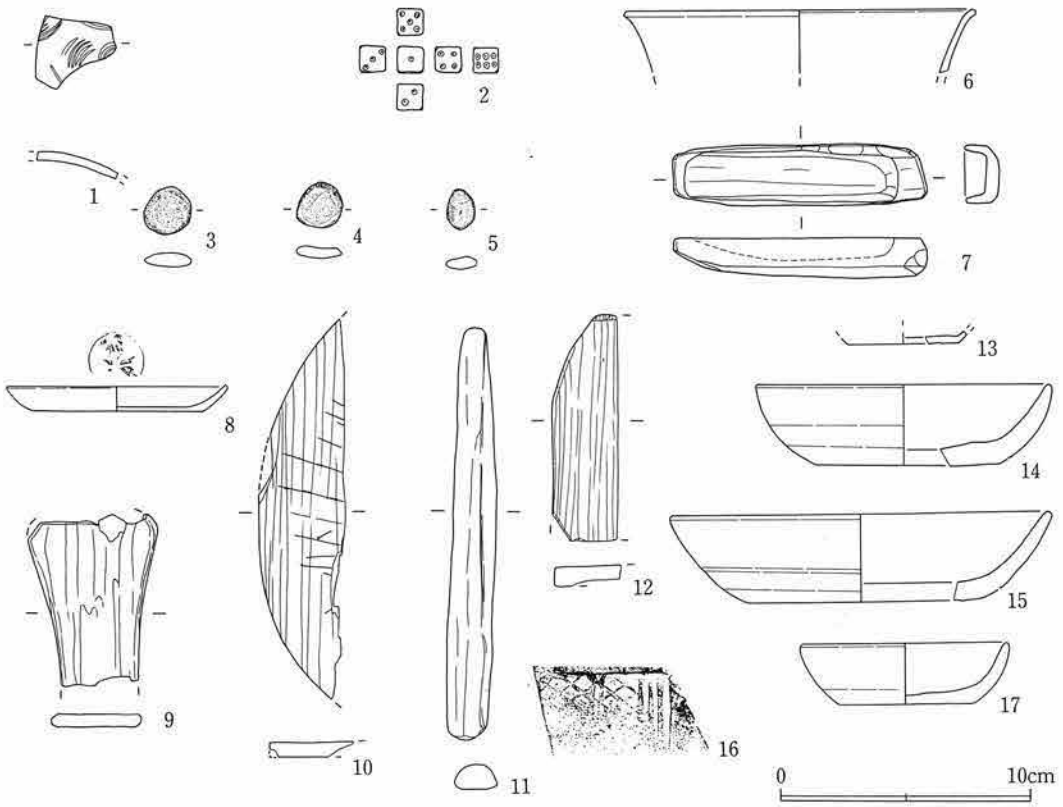


第20図　第２号やぐら青灰土丹層出土遺物（２）

約0.3cmである。平面方形を呈し、四隅を斜めに切り落している。片面中心付近には鋭利な切痕が認められる。各辺には、径0.1cmの小孔が2穴1対で何組か穿いているが、位置も数も不統一である。小孔は全体で14ケ所穿いている。

床面上・遺構出土遺物（第21図）

1～7は岩盤上出土。1は青白磁梅瓶の肩部片である。釉は淡青色を呈し、貫入が入る。肩部に櫛描渦文が施され、内面には輪状痕が認められる。2は角製骰子である。一辺約1.0cmで、表面は丁寧に研磨されているようだ。サイの目は表裏合計7となる。目は錘状工具であけているようだ。鹿の角製である。3～5は碁石である。3は径約1.9cm、厚さ0.5cmの断面楕円状を呈する。4は径約1.8cm、厚さ0.5cmの片面が窪む、断面楕円状を呈する。5は短径1.1cm、長径1.7cm、0.5cmの断面楕円状を呈する。平扁な黒色石であり、この他に30個出土した。6は朱漆碗である。口径14cm、体部は上方に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部のみに黒漆を塗っており、無文である。7は木製舟形である。全長10cm、幅2.3cm、高さ1.5cm、断面はコの字型を呈し、全体に丸味を帯びている。木質部が劣化し、削痕面が明瞭ではなく、造りは丁寧ではない。8～17は遺構出土遺物。8～10はピット2出土。8は黒漆皿である。口径8.8cm、底径6.8cm、器高1.0cmの平底皿である。内底面中心には朱漆で楓の文様を描いている。9は不明木製品である。残長6.6cm、最大幅5.2cm、



第21図　第2号やぐら床面上・遺構出土遺物

最小幅3.0cm、厚さ0.5cmである。10は曲物の底である。現長15.0cm、厚さ0.6cm、片面には刃物状のものによる切り痕が、同一方向に入る。11は棒状製品である。長さ16.9cm、幅1.8cm、厚さ1.0cm、断面かまぼこ型を呈する。周囲は面取りされている。ピット3出土。12は曲物の底片である。現長9.0cm、幅2.6cm、厚さ約0.8cm、他の用途に転用されたと考えられる。ピット4出土。13、14はピット7出土。13は瀬戸入子の底部片である。底径4.4cm、外底面は轆轤成形篦削りである。内底面、外周部に自然釉が少々かかる。14は中型のかわらけである。口径11.6cm、底径7.2cm、器高3.2cm、体部は内彎気味に立ち上がる。15は大型のかわらけである。口径15cm、底径8.2cm、器高3.5cm、薄手で体部が内彎気味に立ち上がる、ピット8出土。16は出土常滑片の叩き目の拓影、ピット11出土。17は小型かわらけである。口径8.0cm、底径5.3cm、器高2.4cm、薄手で体部は内彎気味に立ち上がる。

第4節　第3号やぐら

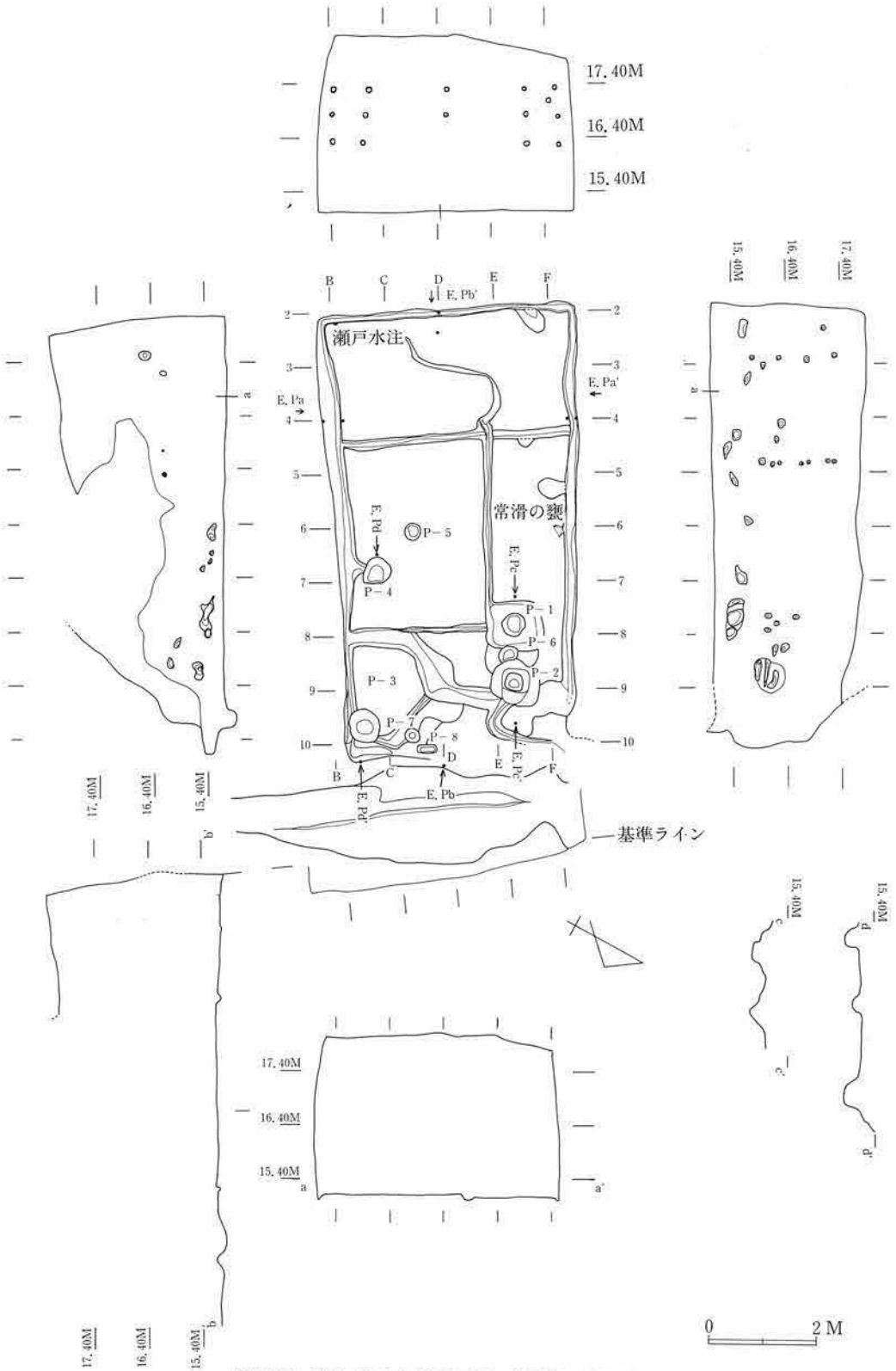
(1) 検出された遺構（第22図、図版12～14）

第3号やぐらは、調査前の状況では、標高も高く、玄室の半分ぐらいまで埋められていたが、内部の残存状態が非常に良好であった事から、期待は大きかった。しかし、埋まっていた土は、奥壁際の床面上、約20cm間の包含層を残し、すべて盛土と岩盤崩落土であった。よって3号穴は岩盤面上のやぐら構造のみの作業となった。

やぐらは北東方向に開口しており、玄室の床面の標高は、約15.00Mで、あまり高低差がなかった。奥行は7.5m、幅4.5m。天井は舟底形天井であった。東壁は高さ約3.30Mで、横長の平面長方形を呈している。壁面の鑿痕の残存状態は良好で、全体の3分の2残っていた。壁面、奥壁寄に径約20cmの小穴が1穴掘られており、入口寄の壁面下方には各々大きさのピットが多く掘られている。奥壁は高さ3.30Mで、横長の平面長方形を呈し、天井ラインは緩やかな山型を呈しているが、壁面には、径約10cmの小穴が、縦方向に3穴まとめて2列ずつ、壁面の両端に掘られ、又中央部には縦方向に2穴掘られている。西壁は高さ2.90Mで、横長の平面長方形を呈する。壁面には、径約15cmの小孔が数多く掘られている。この中で、まとまりのある小穴は、3ライン付近の縦方向に並ぶ4穴と、5ライン付近の縦方向に並ぶ6穴である。又、入口寄りの壁面下方には、東壁と同様に各々の大きさのピットが掘られている。このような壁面に掘られている小穴は、各壁で対応してくる可能性が強い。第3号やぐら前方東側には、低い高まりがあり、前壁と考えられるであろう。

床面には、区画のように溝が巡るが浅く、深さは10cm以内である。溝底の高低差は少いが、入口に向かって流れ出て行くと考えられる。ピットは大小合わせて8穴である。大型のピットは、径約1mの不整円形を呈し、深さが約30cmである。小型のピットは、径約30～50cmの不整円形を呈し、深さは約30cmである。入口付近の径約40cmの方形ピットは、扉状の施設に関係すると考えられる。やぐらは、出土遺物が少なかったが、床面上に2点、常滑の甕と瀬戸の水注が発見された。

やぐら前の施設は、標高約15.50Mに平坦な場所がある事が確認されたが、遺構などは検出され



第22図　第３号やぐら平面図、立面図、断面図

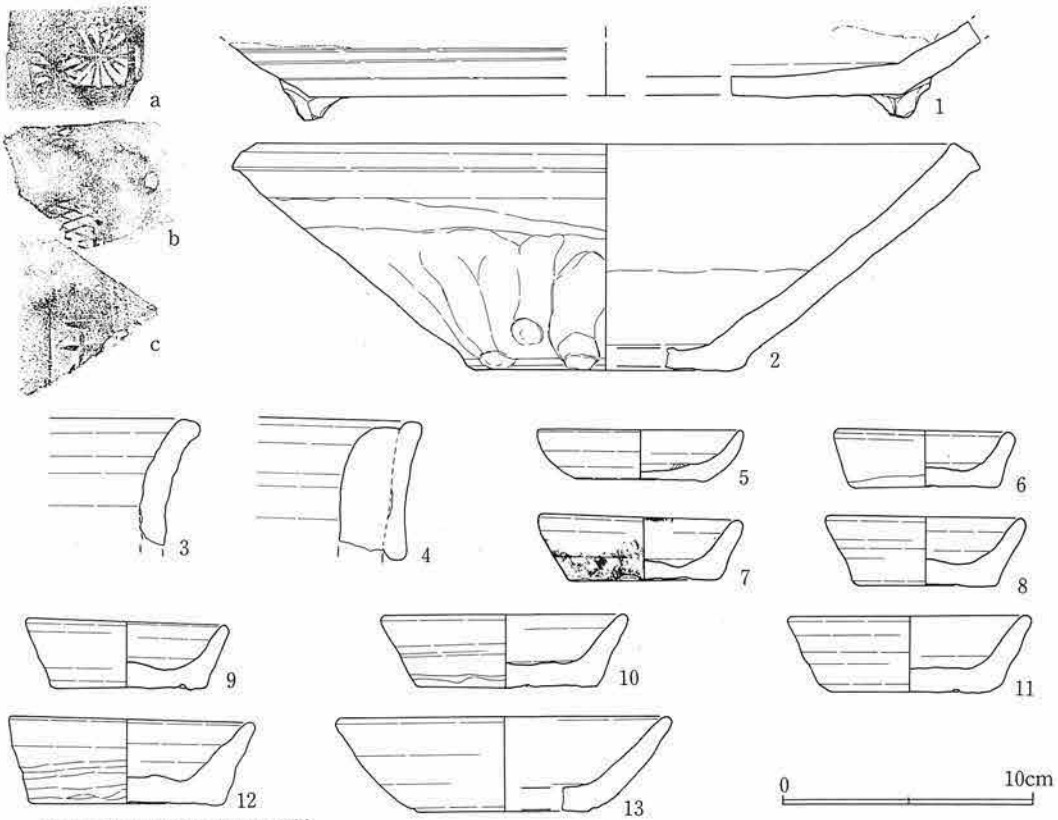
なかった。

(2) 出土遺物（第23～26図、図版24、25)

第３号やぐら出土遺物は、極く薄い包含層中の遺物を下層出土遺物とし、上部に堆積する厚い土丹層中から出土した遺物を一括して、上層遺物とした。以下、順に説明を記す。

上層出土遺物（第23図)

１は瀬戸の折縁深鉢の底部片である。胎土は灰褐色を呈する。釉は灰釉で、内面は刷毛目の痕跡が認められる。外底部には獣足が３脚付く内の１脚が存在する。２～４は常滑である。２はこね鉢である。口径27.7cm、底径10.5cm、器高9.0cm、体部が直線的に外に開き、口縁部は平面方形を呈するが、口縁端部外側は若干凸る。体部外面下方は、指頭によるナデが認められる。内面下方部は、使用痕跡が認められる。３は壺の口縁部である。口縁部は外反気味に立ち上がり、断面四角形を呈し、端部外側がやや膨らむ。外面には自然降灰がある。４は甕の口縁部である。断面Ｎ字状を呈し、縁帯は広く頸部に接続する。５～13はかわらけである。５～12は小型である。１は口径8.0cm、底径5.0cm、器高2.0cm、薄手で体部が内彎気味に立ち上がる。６は口径6.8cm、底径5.7cm、器高2.3cm。７は口径7.8cm、底径5.8cm、器高2.1cm、タール痕が付着する。８は口径7.7cm、底径5.7cm、器高2.7cm。９は口径7.8cm、底径6.0cm、器高2.6cm。10は口径9.5cm、底径7.2cm、器高2.9cm。11は口径9.5cm、底径6.0cm、器高3.0cm。12は口径9.5cm、底径6.6cm、器高3.5cm。６～12は体部

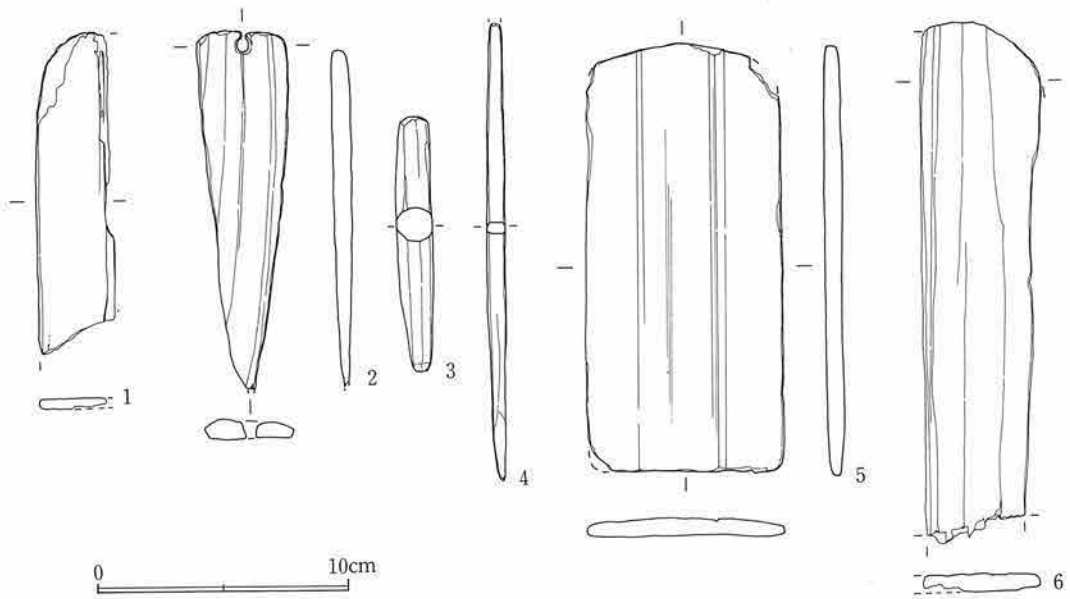


a～cは上層出土常骨片の叩き文様

第23図　第３号やぐら上層

がやや外反気味に立ち立がり、厚味のある質の悪い一群である。13は大型のかわらけである。口径13.0cm、底径6.8cm、器高3.8cm、体部は内彎気味に外に開く。a～cは常滑片叩き痕の拓影である。

（第24図）は木製品である。1は草履芯片である。残長12.7cm、厚さ0.4cm。2は不明木製品である。長さ14.2cm、最大幅3.5cm、厚さ約0.7cm、両面は平坦であり平面形は木簡状を呈している。上部中央には、径0.5cmの小孔が穿けられており、下部は尖る。周囲は面取りされている。3は棒



第24図　第3号やぐら上層出土遺物（2）

状木製品である。長さ10.1cm、幅1.4cm、厚さ1.3cm、周囲は成形されており、断面は不整円形を呈す。4は箸状木製品である。現長18cm、幅0.8cm、厚さ0.4cm、断面楕円状を呈し、一端は尖る。5は不明木製品である。長さ17.0cm、幅7.6cm、厚さ0.6cm、上方は山型になり、平面長方形を呈す。板折敷の転用品ではないか。6は不明木製品である。残長20.6cm、厚さ約0.7cm、草履芯の破片か。

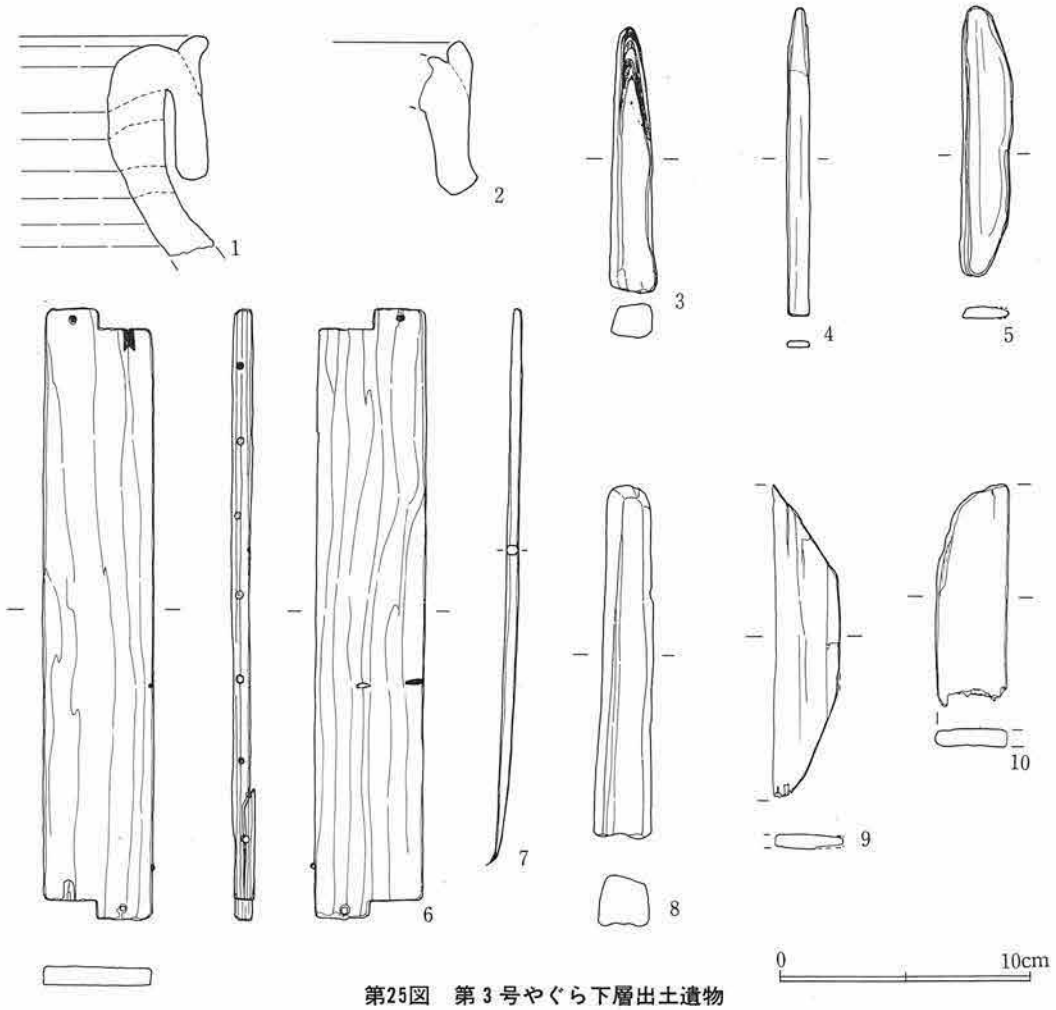
下層出土遺物（第25図）

1、2は常滑の甕の口縁である。断面はN字状を呈し、縁帯は広く頸部に接続しない。口縁から縁帯にかけ、自然降灰がかかる。3～10は木製品である。3は棒状木製品である。長さ10.5cm、幅約1.5cm、厚さ1.3cm、断面四角形を呈す。周囲は丸く面取りさせ、一端を細く尖らせる。4は箆状木製品である。長さ12.2cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、断面長方形を呈する。周囲を面取りし、一端を尖らせる。5は不明木製品である。長さ10.7cm、幅2.0cm、厚さ約0.5cm、断面楕円状を呈し、周囲は面取りされている。曲物の底の破片の転用か。6は不明木製品（箱？）である。長さ24.7cm、幅4.4cm、厚さ0.8cm、断面は長方形を呈する。形体は縦方向に長い長方形の板の両端を、それぞれ

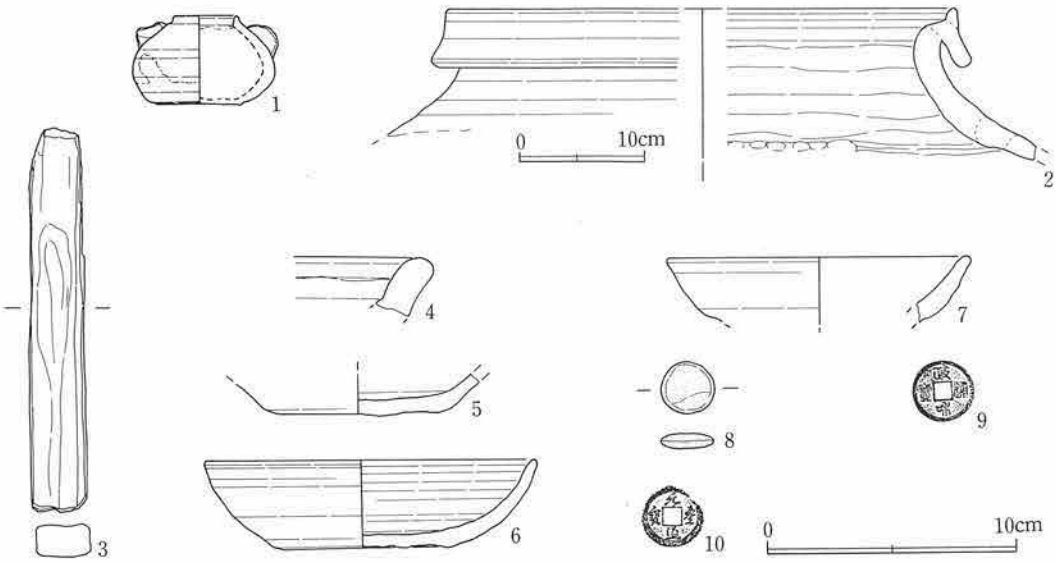
逆側の0.8cm間突き出しており、その端の中央に、径0.4cmの小孔を穿けている。一側面には、径約0.3cm小孔が、ほぼ均等に８ヶ穿いており、小孔内には木釘が入っている孔もある。７は箸状木製品である。長さ22.2cm、幅0.5cm、厚さ0.4cm、断面楕円状を呈する。周囲は面取し、一端は尖る。８は棒状木製品である。長さ15cm、幅2.1cm、厚さ2.0cm、断面台型を呈する。周囲は面取りされ一端は丸く成形される。９は不明木製品である。現長12.5cm、厚さ0.6cm、断面長方形を呈する。曲物の底の破片と考えられるが、一辺を斜めに切り込んでおり、他の用途に転用されたのか。10は草履芯の破片である。厚さ0.7cm、断面長方形を呈する。周囲は面取りされている。

床面上・遺構出土遺物（第26図）

１は瀬戸水注である。口径2.4cm、底径3.3cm、器高3.5cm。胎土は淡褐色で、釉は灰緑色を呈し、外面は胴部中程までかけられている。内面は口縁部までである。注口は広く低く、上方に向いており、取手は簡略化され、つまみが付いているだけである。それぞれ貼り付けである。外面胴部中程に、破損面が１ヶ所ある。床面上出土。２は常滑の甕の口縁部である。口縁部は断面Ｎ字状を呈



第25図　第３号やぐら下層出土遺物



第26図　第３号やぐら　床面上、遺構出土遺物

し、頸部に接続しない。内面はナデ調整と指頭による押さえが認められる。自然降灰は、外面に少々かかる。床面上とピット２出土。３～６はピット１出土。３は棒状木製品。長さ15.2cm、幅2.1cm、厚さ1.2cm、断面長方形を呈し、周囲は面取りされている。一端はやや細くなり、上面中央が、やや窪む。４は常滑の口縁部である。口縁部は断面四角形を呈する。５、６はかわらけである。５は底部のみで、底径6.3cm、薄手である。６は口径13.0cm、底径6.5cm、器高3.4cm、薄手で体部は内彎気味に立ち上がる。７～９はピット４出土。７はかわらけである。口径12.0cm、体部はやや内彎気味に立ち上がる。８は碁石である。径約2.1cm、厚さ約0.6cm、断面楕円状を呈する平扁黒色石である。９は銭である。政和通宝で書体は篆書である。初鋳は1111年で北宋銭である。10は元豊通宝で、書体は行書である。初鋳は1078年で北宋銭である。溝出土。

第５節　第４号やぐら

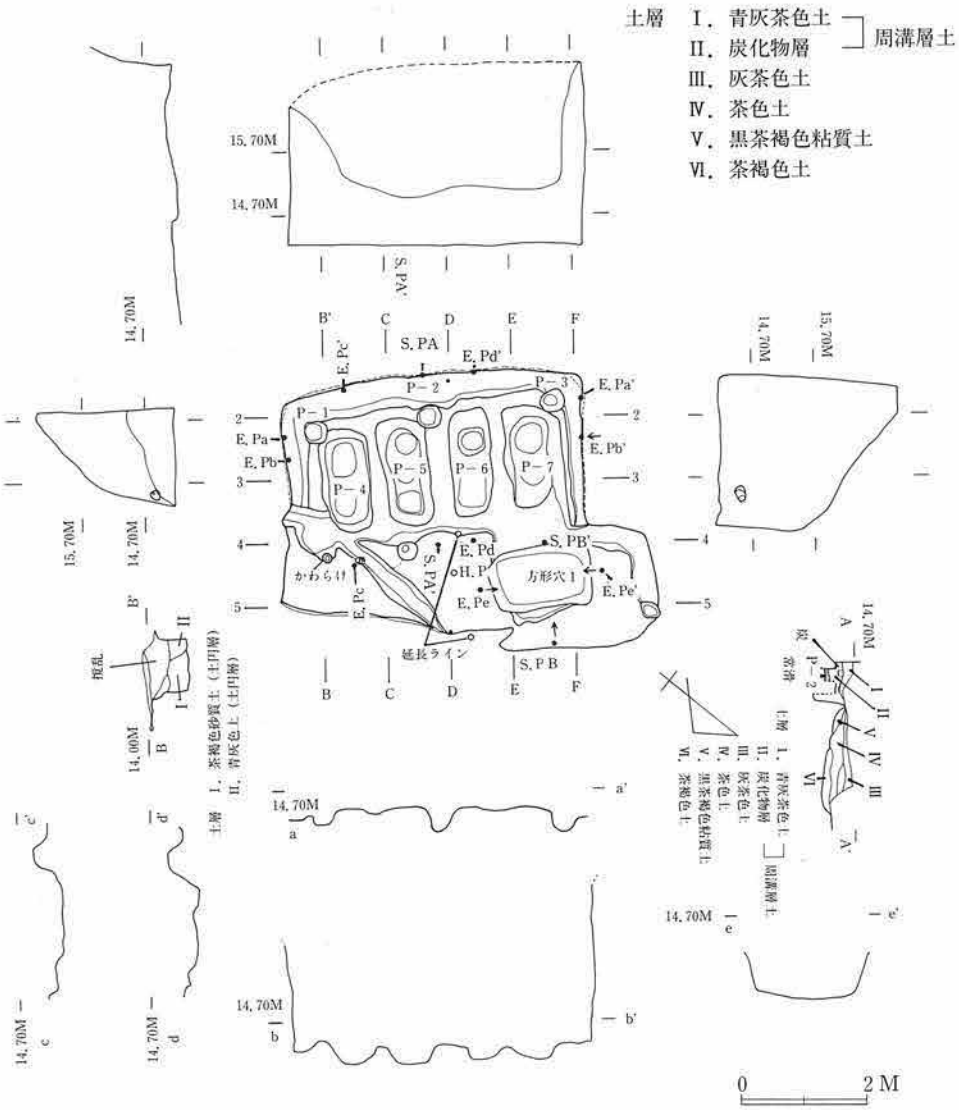
(1)　検出された遺構（第27・28・32図、図版15～18）

第４号やぐらは、上部、山からの土砂などにより、調査前は完全に埋没していた。土砂を取り除くと、土丹層が堆積しており、奥壁寄、周溝の北側付近まで、近年の撹乱が入っていた。東側中間土丹層中から人頭骨が検出され、その下部に、遺物が出土している。（第28図）この土丹層を取り除くと、周溝内と周囲に、焼土層が堆積する。焼土層上層においては、周溝内に、焼けた鎌倉石と炭、遺物が出土している。（第30図）さらに周溝内の焼土層を取り除くと、白かわらけを含む、多量の遺物が出土した。（第32図）その後、岩盤まで掘り上げた。

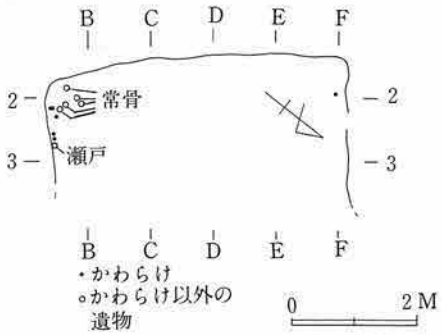
やぐらは、北東方向に開口しており、玄室は床面の標高が約14.20Mで、入口に向かっての高低差はない。奥行は2.50mで、幅は4.90Mである。東壁の高さは2.20Mで上部が崩壊しており、平面状、三角形を呈している。鑿痕の残存状態は、下方３分の１である。壁面入口付近下方に、径18

cmの小穴が掘られている。奥壁は高さ2.90Mで、横長の平面長方形を呈する。鑿痕は下方の半分が残っている。西壁は高さ2.80M、平面状、三角形を呈している。鑿痕の残存状態は良い。壁面入口付近下方に、径約25cmの小穴が掘られている。これは東壁と対応する。

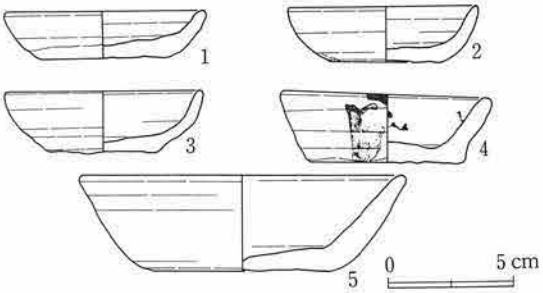
床面は、奥壁周囲に幅約40cm、深さ約20cmの周溝が廻る。周溝の北側肩には、径約40cm、深さ約30cmの小ピットが3穴、均等に掘られている。床面上には、径1.7m、南北に長い楕円状の掘り込みが4穴、均等に掘られている。この楕円状遺構内は、各2穴のピット状の掘り込みの痕跡がある。やぐら前の状況は、西側部分には、東西に長い方形（1.8m×1.0m×0.7m）穴内の岩盤直上に、60枚の銅銭が発見された。他に径約30cmの小ピット2穴と、さらに壁に廻る溝と、かわらけを据えた小ピットが検出された。



第27図　第4号やぐら平面図



第28図　第4号やぐら　土丹層遺物出土状況



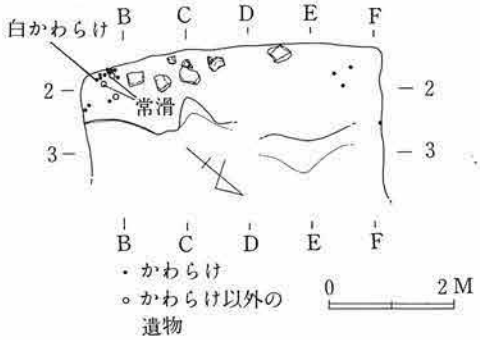
第29図　第4号やぐら　土丹層出土遺物

(2)　出土遺物（第28～34図、図版26、27）

出土遺物は、遺物出土状況ごとにまとめ、検出レベルの高い層位から順に説明を記す。

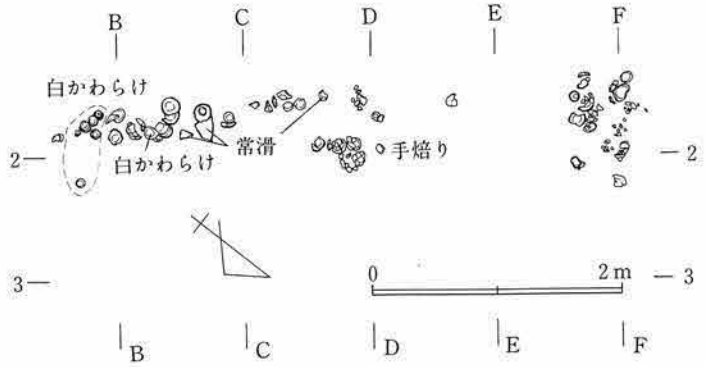
土丹層中出土遺物（第28図）は標高約14.50Mで発見された。遺物は東壁寄に集中し、かわらけの他、常滑もめだった。

（第29図）はかわらけである。1～4は小型のかわらけ。1は口径7.8cm、底径5.0cm、器高1.9cm、薄く体部は内彎気味に立ち上がり、器高が低い。2は口径7.4cm、底径4.4cm、器高2.2cm、薄手で体部は内彎気味に立ち上がる。3は口径7.7cm、底径4.3cm、器高2.4cm、薄く、体部は直線的に開き、中程から上方に立つ。4は口径8.1cm、底径6.0cm、器高2.7cm、体部が外反気味に立ち上がる。タール痕が付着する。1～3とはタイプが違う。5は大型のかわらけである。口径12.8cm、底径7.0cm、器高3.8cm、体部は直線的に外に開き、やや体部壁は肥厚する。



第30図　第4号やぐら焼土層上層遺物出土状況

焼土層出土遺物は、上層と下層に区分する。上層部は（第30図）、標高約14.40Mで、焼けた鎌倉石の他は、かわらけと常滑片などが出土した。下層は（第31図）、標高約14.30Mで出土。かわらけ中心であるが周溝東側に白かわらけがまとまって出土している。焼土層出土遺物の法量、器型については、別表にまとめる。法量は口径・底径・器高を記す。白かわらけの蓋状遺物



第32図　第4号やぐら焼土下層遺物出土状況

については、広い方を口径、狭い方を底径、器高は紐を入れた高さと入れない高さを記す。器型は体部の形状の分類で表現し、以下の記号で示す。又白かわらけは、これに順じない。

I　体部が底部から内彎するもの

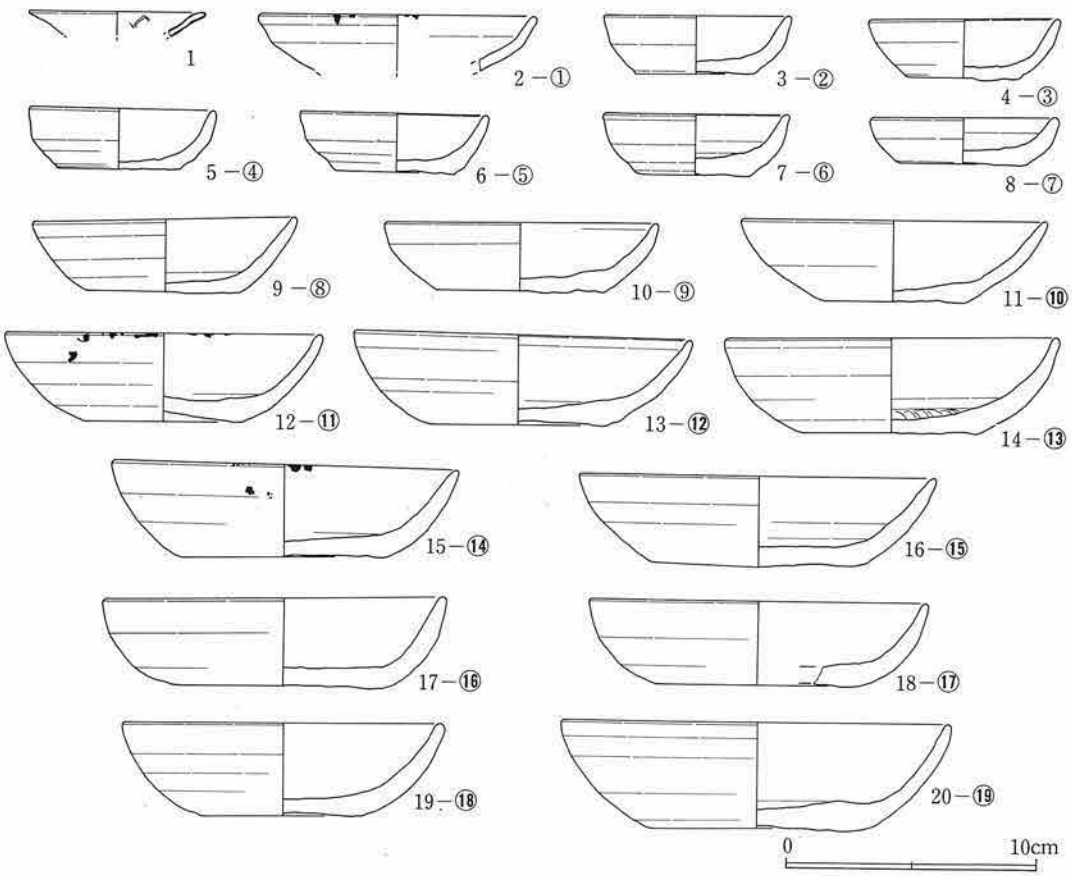
II　体部が底部からやや直線気味に立つもの

a　口縁部が内彎するもの

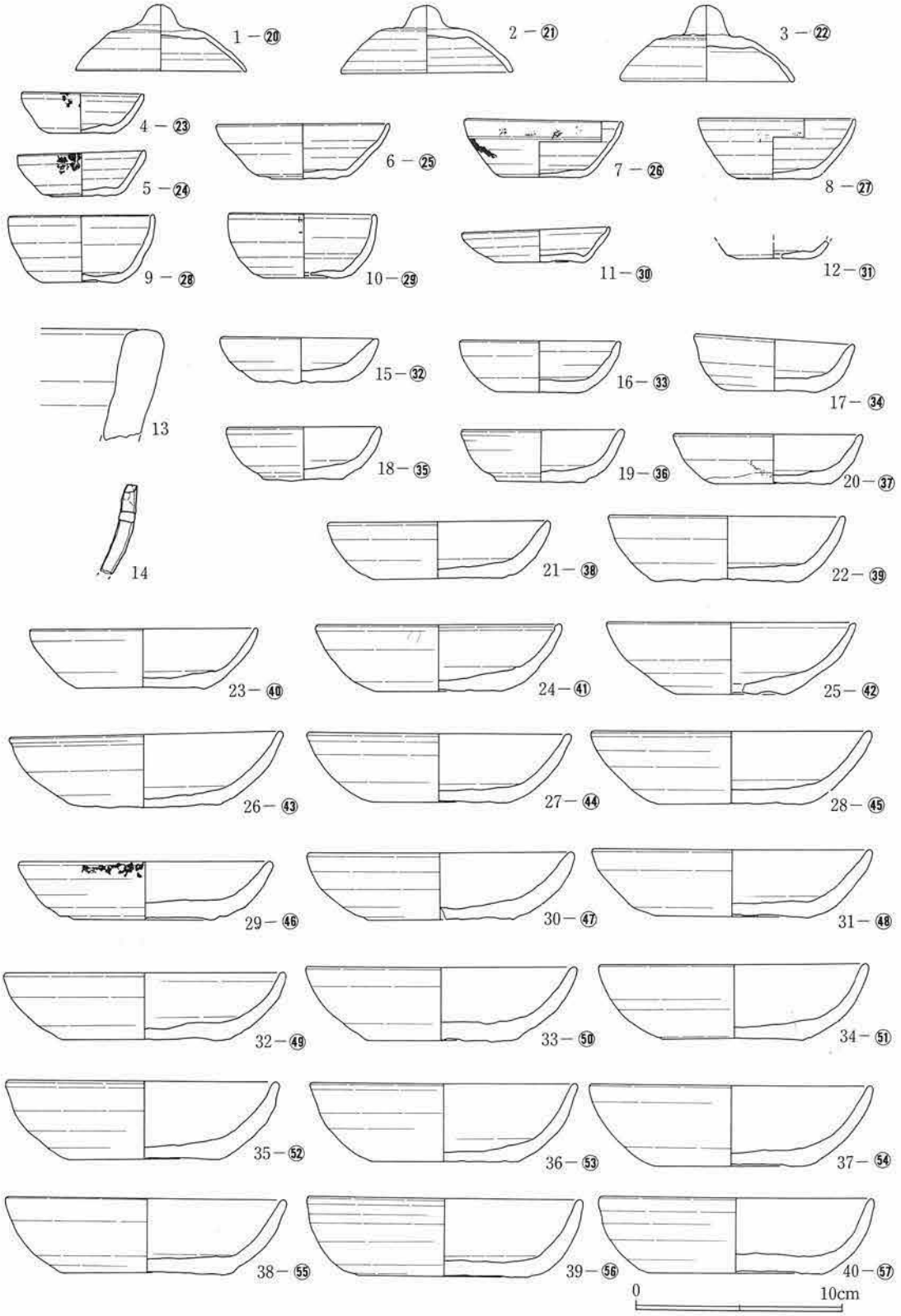
b　口縁部が上方に立つもの

かわらけ以外の遺物を先に記す。(第31図) 1は青白磁皿である。口径7.0cm、素地は白色で、釉は淡水色を呈す。内面に蓮弁の葉を型押しする。(第33図) 13は手焙り片である。胎土は灰色で砂っぽい。口縁部は丸味があり四角形を呈する。14は釘である。残長4.5cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm、断面隅丸方形を呈する。

かわらけは以下のデーター表の結果から、焼土層出土かわらけの法量は、大型が口径12～13cm中心で、小型は口径7.0cmが中心となってくるようだ。中型と考えられる口径10～11cmのものがあるが、範囲の限定は出来ない。器型の傾向としては、薄手で体部に丸味を有するタイプであり、焼土



第31図　第4号やぐら焼土層上層出土遺物



第33図　第４号やぐら焼土層下層出土遺物

表II　焼土層出土かわらけデーター表

※図版 No は○印の番号を記す（cm）

図版	No.	口径	底径	器高	器型	備　考
第31図　焼土層上層	1	10.9			IIb	タール痕
	2	7.3	4.7	2.3	IIb	
	3	7.5	5.0	2.3	Ib	
	4	7.3	4.8	2.4	Ib	
	5	7.4	4.8	2.4	II	
	6	7.2	4.4	2.5	Ib	
	7	7.3	5.0	1.8	Ib	
	8	10.4	6.0	2.8	II	
	9	10.7	6.6	2.7	Ib	
	10	10.9	5.6	3.3	IIb	
	11	12.5	6.5	3.5	I	タール痕
	12	13.3	6.8	3.6	I	
	13	13.1	6.8	3.8	I	内底ナデ強
	14	13.6	8.0	3.8	I	タール痕
	15	14.0	8.5	3.6	I	内底ナデ強
	16	13.4	8.2	3.5	I	
	17	13.3	7.8	2.8	I	タール痕
	18	12.6	6.5	3.7	I	
	19	15.3	9.0	4.2	I	大型
第33図　焼土層下層	20	8.2	3.8	3.2 (2.0)		
	21	8.1	3.3	3.2 (2.2)		
	22	8.2	3.2	3.7 (2.2)		
	23	5.8	3.2	2.0		タール痕
	24	6.1	3.1	2.1		タール痕
	25	8.2	3.0	3.7		
	26	7.5	3.8	2.8		墨書文字タール痕
	27	7.5	3.5	2.9		墨書文字
	28	6.9	3.6	3.2		
	29	7.0	3.5	3.1		墨書文字

図版	No.	口径	底径	器高	器型	備　考
第33図　焼土層下層	30	7.0	3.3	1.6		
	31		3.2			
	32	7.5	4.4	2.2	I	
	33	7.6	4.0	2.5	I	
	34	7.6	4.4	2.5	Ib	
	35	7.3	3.9	2.5	I	
	36	7.7	4.4	2.5	Ib	
	37	9.0	4.6	2.4	IIb	
	38	10.5	6.3	2.8	I	
	39	11.2	7.2	3.0	Ib	
	40	10.9	5.7	2.8	IIb	
	41	11.7	6.0	3.2	I	
	42	11.9	5.3	3.5	IIb	
	43	13.0	7.2	3.5	Ib	
	44	12.5	6.5	3.3	I	タール痕
	45	13.4	7.0	3.5	Ib	
	46	12.0	6.6	2.8	Ib	タール痕
	47	12.7	7.0	3.2	I	
	48	13.3	7.3	3.3	Ib	
	49	13.3	8.0	3.3	Ib	
	50	12.8	7.3	3.5	I	
	51	12.8	6.8	3.6	I	
	52	13.0	7.2	3.8	Ib	鉄分、炭
	53	12.7	7.0	3.8	Ib	
	54	13.5	7.5	4.0	I	
	55	13.3	7.7	3.6	Ib	
	56	13.1	8.2	3.8	I	タール痕?
	57	13.0	8.3	3.7	I	

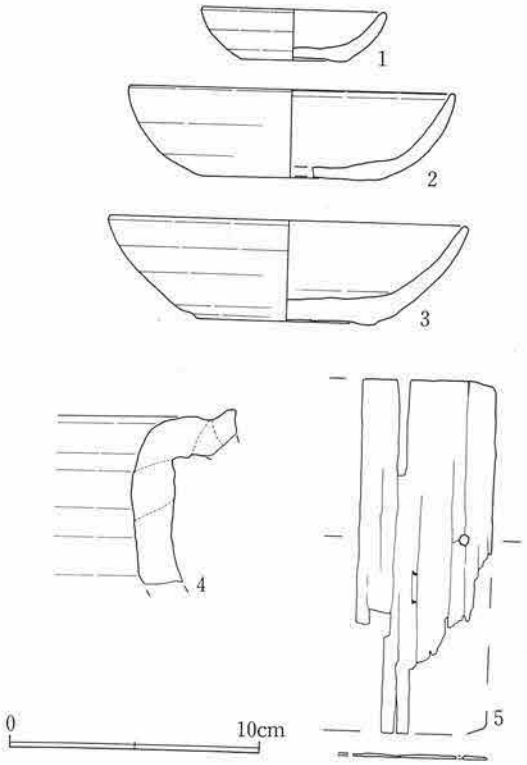
層出土のかわらけの器型の違いは微妙なものであった。体部が若干内彎傾向を示すが、直線的ラインで立ち上がるものがあったが、バリエーションと考える。焼土層出土かわらけは、出土レベルから、上層と下層に分けたが、同じ周溝内の覆土中からの出土であり、違いはなかった。この周溝内出土のかわらけは、同一傾向を示す。

東側出土白かわらけは、全部で12個出土した。胎土は褐白色を呈し、器壁は薄く、焼成は良好であった。

1～3は蓋状白かわらけであり、紐部分は貼り付けてあると考えられる。紐を取り、逆転すると皿状を呈し、体部が直線的に立ち上がるタイプである。4～10は碗状白かわらけである。4～8は、

体部が直線的に開き、口縁部が上方に立ち上がる広口のタイプであり、サイズも２種類ある。９・10は、体部が直上に内彎する口の狭いタイプであり、器高は高い。11・12は皿状白かわらけであり、体部は直線的に外に開き、器高の低いタイプである。サイズは２種類ある。以上のように、蓋・碗・皿と、３タイプ４種類に分類出来る。

出土白かわらけのうち３点に墨書文字の痕跡があった。（７、８、10）この内１点（７）は残存状態が良かった。文字は「□庚申散」と書かれており、庚申信仰に関係してくる内容であるとも考えられるが、時代的背景なども考慮してみなければならない。又、他２点の文字も「申散」「申」が読める事から、３点伴、同じ文字がかかれていたと考えられる。



第34図　第４号やぐら遺構出土遺物

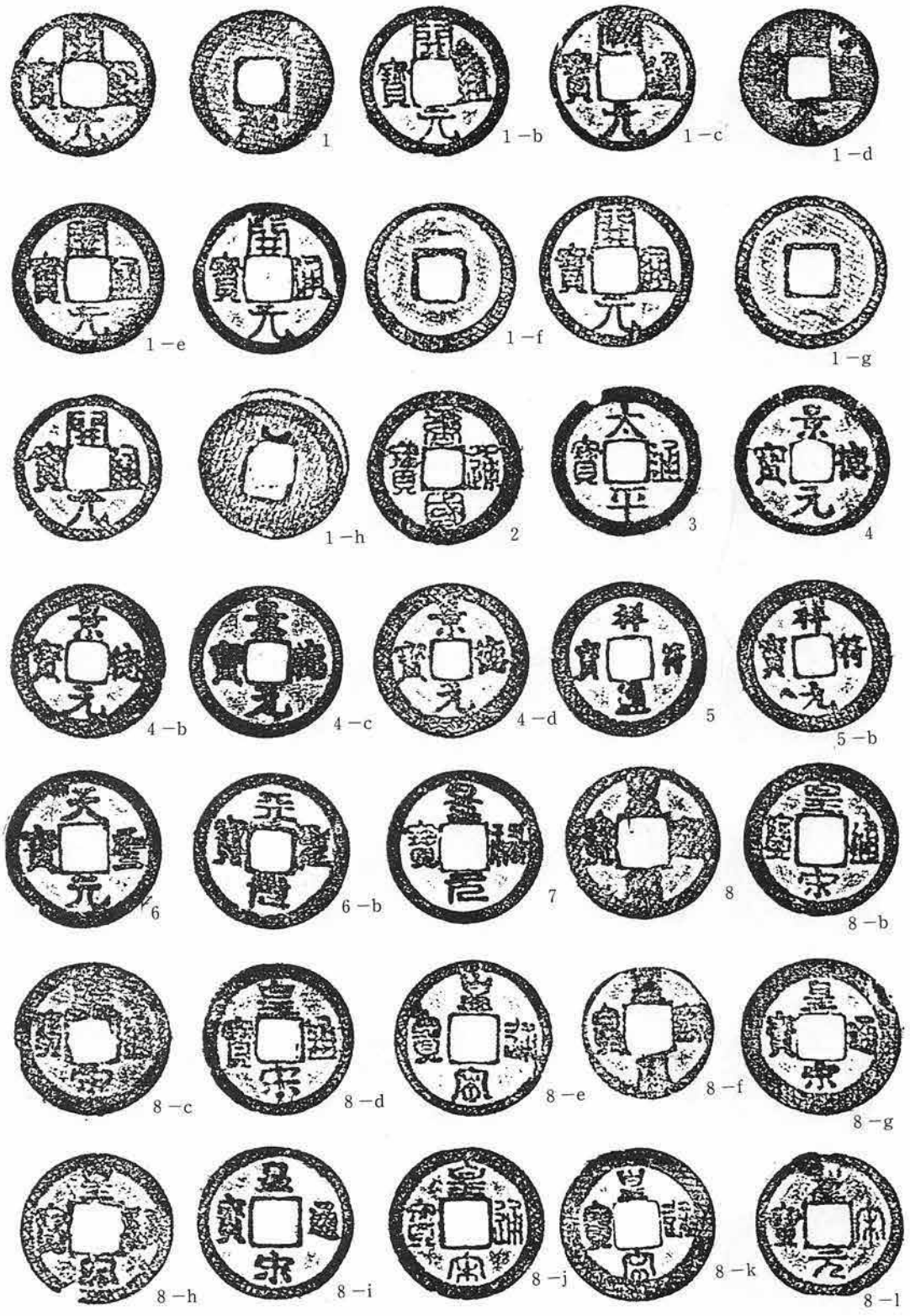
遺構出土遺物（第34図）

１・２はピット４出土。１は小型のかわらけである。口径7.2cm、底径4.2cm、器高3.0cm、薄手で、体部がやや直線気味に内彎する。２は大型のかわらけである。口径11.8cm、底径7.0cm、底径3.5cm、薄手で体部は内彎する。３は大型のかわらけである。口径14.1cm、底径7.0cm、器高4.0cm、薄手で体部は直線気味に内彎する。４・５はやぐら前方形穴出土。４は常滑の甕の口縁部である。口縁帯部は欠損している。縁帯がＴ字状になると考えられる。５は経木折敷である。一辺14cm、厚さ0.1cmで四隅を斜めに切っている。各辺中心に径0.4cmの小孔が穿いている。この他、方形穴から銭が出土しているが、分類は別表（表Ⅲ）に記す。

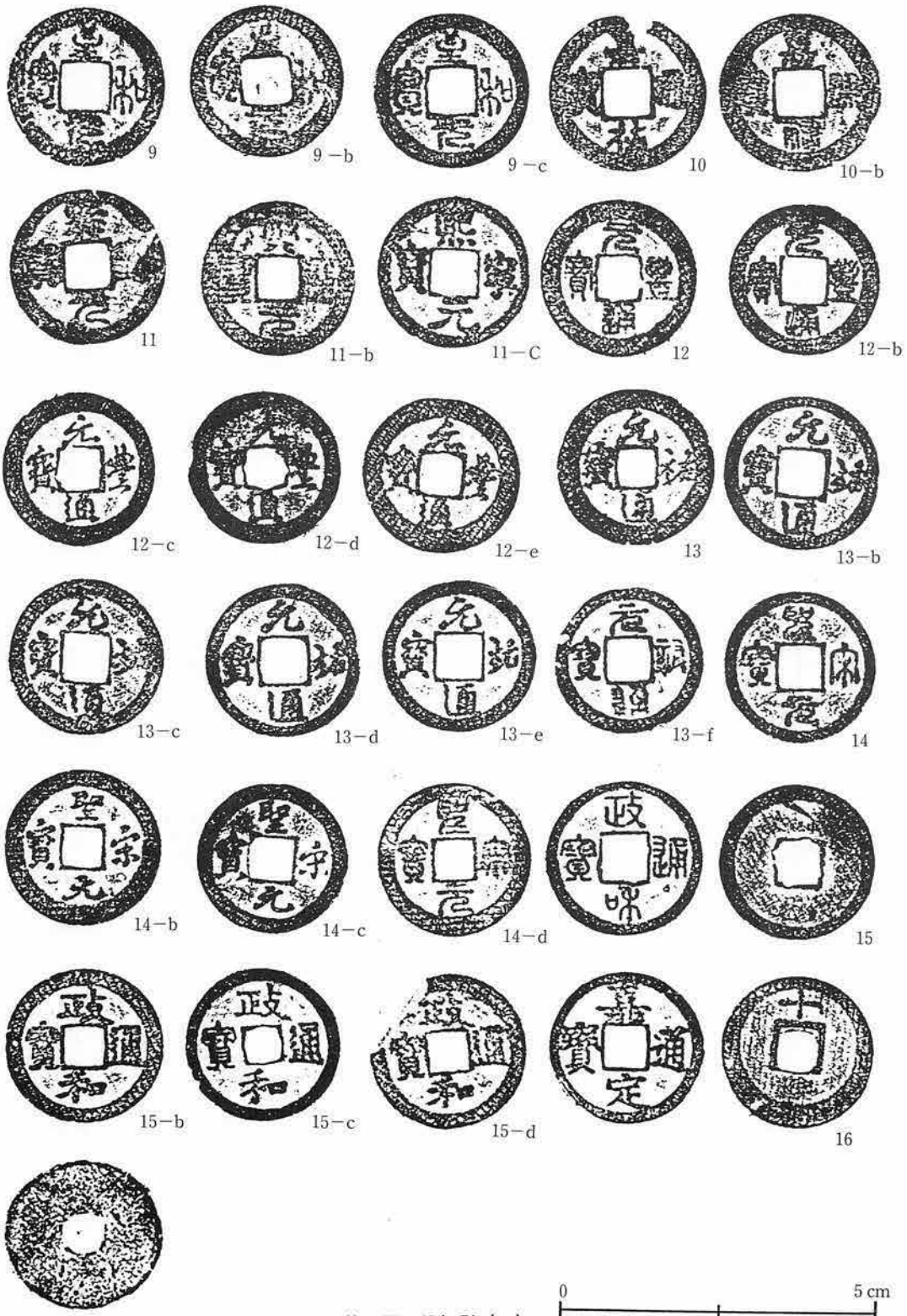
銭（第35、36、表Ⅲ）

方形穴出土の銭は総計60枚であった。出土状況は、岩盤面に貼り付いたような状態で出土した。

銭を分類してみると16種類で、書体を含むと25種類になる。一番古い銭は唐代の開元通宝（初鋳621）で、一番新しい銭は南宋の嘉定通宝（初鋳1208）であった。全体の約80％が北宋銭であった。（背文のある銭は６枚、解読出来ないものもあったが表に記した。加工銭は、方孔のずれているもの（８h、12d）、周縁を磨いているもの（８f）が認められた。


1
1－b
1－c
1－d
1－e
1－f
1－g
1－h
2
3
4
4－b
4－c
4－d
5
5－b
6
6－b
7
8
8－b
8－c
8－d
8－e
8－f
8－g
8－h
8－i
8－j
8－k
8－l
0
5cm

第35図　銭拓影（1）



0　5 cm

第36図　銭拓影（2）

表Ⅲ　第4号やぐら前方形穴出土銭

	銭　　種	時代	初鋳	書体	計	備　考 (背　文)
1	開元通宝	唐	621	楷書	8	背文　⊔, ⊔, ⌒, 洪 ? 加工銭含
2	唐国通宝	南唐	959	篆書	1	
3	太平通宝	北宋	976	楷書	1	
4	景徳元宝	北宋	1004	楷書	4	
5	祥符通宝	北宋	1008	行書	2	
6	天聖元宝	北宋	1023	楷書 篆書	1 1	
7	景祐元宝	北宋	1034	篆書	1	
8	皇宋通宝	北宋	1039	楷書 篆書	6 6	加工銭含
9	至和元宝	北宋	1054	篆書	3	
10	嘉祐通宝	北宋	1056	楷書 篆書	1 1	
11	熙寧元宝	北宋	1068	楷書 篆書	1 2	
12	元豊通宝	北宋	1076 1078	篆書 行書	2 3	加工銭含
13	元祐通宝	北宋	1086	篆書 行書	1 5	
14	聖宋元宝	北宋	1101	楷書 篆書 行書	1 2 1	
15	政和通宝	北宋	1111	楷書 篆書	3 1	背文
16	嘉定通宝	南宋	1208	楷書	1	背文＋

第四章　ま　と　め

第Ⅰ節　鎌倉市無量寺やぐら遺跡出土人骨について（図版28～30）

森本岩太郎・平田　和明

Ⅰ．はじめに

神奈川県鎌倉市扇ヶ谷の無量寺やぐら遺跡から発掘調査により14世紀後半に属する人骨１個体分と戦国時代に属する人骨３個体分の計４個体分の人骨が出土した。鎌倉市教育委員会から出土人骨の鑑定を依頼されたので、ここにその結果を報告する。

Ⅱ．出土状況

無量寺やぐら遺跡の２号やぐらから出土した人骨は３個体分ある。そのうち１号人骨は頭蓋だけである。２号人骨はほぼ全身の骨格が残存している。３号人骨は下顎骨片と下肢骨片だけが認められる。２号人骨は解剖学的に自然の位置を保って出土しており、ほぼ南頭位で顔面は東を向き、背部が西を向いている右側臥伸展位葬である。

４号やぐらから出土した人骨は頭蓋だけ単独で出土し、１個体分である。

Ⅲ．人骨所見

(1)　２号やぐら出土人骨

Ａ．１号人骨（写真１・２）

壮年期の女性人骨１個体分であると思われる。

下顎骨を欠く頭蓋があるだけである。

左右側頭部の一部を欠損する。頭蓋の最大長が166㎜，最大幅が132㎜で，頭蓋長幅示数は79.5であり、短頭型に近い中頭型に属している。バジオン・ブレグマ高は126㎜で、頭蓋長高示数は75.9であり、高頭型の下限に属している。左右に舌下神経管二分、左に鼓室骨裂孔があり、ラムダ小骨が認められる。前頭縫合・インカ骨・頭頂切痕骨などは無い。骨質は薄く、眉弓・外後頭隆起・乳様突起の発達が弱いので、この個体は女性頭蓋と推定される。また頭蓋冠の３主縫合は内板の一部が閉鎖しているが、外板は全て離開しているので、この女性頭蓋の年齢は壮年期と思われる。

外に復元不可能な頭蓋片が総重量にして約20gある。

Ｂ．２号人骨（写真３～９）

熟年～老年期男性人骨１個体分であると思われる。

不完全ではあるが、ほぼ全身の骨格が残存している。

頭蓋：前頭部・側頭部・頭蓋底・顔面部の一部に欠損が見られる。下顎骨は下顎体と右関節突起がある。頭蓋の最大長が186㎜、最大幅が135㎜で，頭蓋長幅示数は72.6であり、長頭型に属している。バジオン・ブレグマ高が147㎜であり、頭蓋長高示数79.0で、高頭型に属している。ラムダ小骨があり、左に頭頂切痕骨が認められる。前頭縫合・インカ骨・舌下神経管二分・鼓室骨裂孔・頬骨後裂は無い。眉弓・外後頭隆起・乳様突起の発達が比較的良いことから、この個体は男性人骨と思われる。頭蓋冠の３主縫合については、内板はほぼ閉鎖しているが、外板は部分的に離開している。

外に舌骨の骨体と右大角が存在する。

歯および歯槽の状況を次に示す。

× ● ● 5 4 3 ● ●	○ 2 ○ 4 5 × × ×
× ● ● ● ● ● 2 ●	● ● ● ● ● ● ● ×

ただしアラビア数字は残存する永久歯、○印は歯槽開放、●印は歯槽閉鎖、×印は欠損のため状況不明であることをそれぞれ示す（以下の歯式についても同様）。歯の咬合様式は鋏状咬合型と推定される。咬耗度は543|がMartinの４度で、他は同２度である。齲蝕が|5の歯頸部に認められる。なお右上顎の犬歯と第１・２小臼歯および右下顎側切歯の歯根部に歯根膿瘍の痕跡が認められる（写真５）。この男性人骨の年齢は頭蓋の縫合の閉鎖度、歯および歯槽の状況などから熟年～老年期と推定される。

外に復元不可能な頭蓋片が総重量にして約40gある。

椎骨・肋骨・胸骨：頸椎については環椎片および軸椎片のほかに６個の頸椎片がある。胸椎片は13個ある。腰椎片は11個ある。外に部位不明の椎骨片が多数ある。下位胸椎から腰椎にかけての椎体片縁に変形性脊椎症による骨棘の形成が認められる。仙骨は岬角と前面上部を欠損している。

肋骨片は左右ともに12個あり、外に骨片が多数ある。

胸骨は胸骨柄片と胸骨体片が認められる。

上肢骨：肩甲骨片ならびに鎖骨片が左右とも存在する。

上腕骨は、右は大結節の下部と外側上顆を欠くが、最大長は314㎜で骨体の中央最大幅は26㎜、中央最小幅は16㎜である。左は骨頭片が２個と下端を欠く骨体片（27㎝大）がある。三角筋粗面の発達は良い。

橈骨は左右ある。左は最大長223㎜である。右は下端を欠く骨片（20㎝大）である。左橈骨は下端付近における定型的橈骨骨折（Colles骨折）の変形治癒像（いわゆるフォーク背状変形）が認められる（写真８）。

尺骨も左右存在し、いずれも下端を欠損する骨片（左25・右24㎝大）である。

手根骨片は左舟状骨・左月状骨・右三角骨・左右の大菱形骨・左右の小菱形骨・左右の有頭骨・

左有鉤骨が認められる。中手骨片は左右とも第１～５中手骨がある。外に指骨片が18個ある。

下肢骨：寛骨片が左右ある。大坐骨切痕は狭く、男性の特徴を示している。

大腿骨は左右ある。大腿骨体上部の断面示数は左70.3・右70.3で超広型に属している。骨体中央の断面示数は左93.8・右96.7であり、ピラステル形成は認められない。大腿骨最大長は左432㎜であり、この数値からPearson式による椎定身長は162.5cmである。殿筋粗面および粗線の発達が比較的良い。

脛骨も左右存在する。左は脛骨粗面上部と骨体下部を欠く骨片（32cm大）と外果・下関節面を含む骨片がある。右は骨体片（24cm大）と上関節面を含む骨片がある。栄養孔部における脛示数は左76.5・右77.8で正脛型に属する。脛骨体中央の横断面はHrdlickaの第Ⅱ型に属する。

腓骨は左の最大長が334㎜であり、右は骨体上部片（23cm大）がある。

膝蓋骨は左右存在する。

足根骨片として左は踵骨・距骨・舟状骨・立方骨・内側楔状骨・中間楔状骨が残存している。外に左の第１～５中足骨片と、母指とその他指の基節骨片が計５個ある。

その他：復元・同定不可能な骨片が総重量にして約140gある。

C．３号人骨（写真10）

熟年期男性人骨１個体分であると思われる。

下顎骨と下肢骨片があるだけである。

下顎骨は左右の下顎頭の一部と左筋突起を欠損している。下顎骨角の外反は強く、男性の特徴を示している。

歯および歯槽の状況を次に示す。

● ● ● 5 4 ○ 2 1	× × ○ 4 5 6 7 ●

歯の咬耗度は $\overline{6\ 7}$ がMartinの３度であり、他は同２度である。この男性人骨の年齢は歯および歯槽の状況などから熟年期と推定される。

下肢骨：大腿骨は骨頭・大転子・小転子・下端部を欠く左の骨片（36cm大）がある。
粗線および殿筋粗面の発達が比較的良いことから、男性人骨と思われる。大腿骨体上部の断面示数は81.3で広型に属している。骨体中央の断面示数は90.3でありピラステル形成は認められない。

外に左の腓骨体片（16cm大）がある。

(2)　４号やぐら出土人骨（写真11～15）

壮年期の男性人骨１個体分と思われる。

下顎骨を欠く頭蓋片だけが認められる。

顔面部と頭蓋底・側頭部の一部が欠損している。頭蓋の最大長が191㎜、最大幅が133㎜で、頭蓋長幅示数は69.6であり、過長頭型の下限近くに属している。ラムダ小骨が認められる。眼窩上孔・前頭縫合・頭頂切痕骨・鼓室骨裂孔はない。

歯は残存していない。

骨質は比較的厚く、眉弓の発達も良い。頭蓋冠の3主縫合は内板・外板ともに離開している。これらのことから、この個体は壮年期男性と思われる。

外に復元不可能な頭蓋片が総重量にして約20gある。

この頭蓋には刀創と思われる新鮮な創面が6カ所に認められる。(写真13) いずれも頭蓋冠の左側面に存在する。最大のものは頭頂骨の上部にあり、創面の長さは68㎜で、頭蓋腔内に達しており、致命傷となったと考えられる (写真14)。頭蓋腔内に達する創面は頭頂骨後上部 (32㎜大) にもあり、上述の最大の刀創の後部と交差している。そのほか頭頂骨後上部 (31×20㎜大の半円形) ・頭頂骨後部 (32㎜・18㎜大の2本) ・前頭骨前頭鱗の左部 (32×12㎜大)。側頭骨の頬骨突起の起部から外耳道上部にかけて (30×12㎜大) の部位に、外板を切っただけで頭蓋腔に達しない刀創が存在する (写真14・15)。これらの創面には骨新生などの生活反応は見られない。

Ⅲ. まとめ

鎌倉市無量寺やぐら遺跡から出土した人骨は成人4個体分である。そのうち2号やぐら出土人骨は戦国時代に属する壮年期女性1個体分と熟年～老年期男性1個体分および熟年期男性1個体分の計3個体分であり、4号やぐら出土人骨は14世紀後半に属する壮年期男性人骨1個体分である。

2号やぐら出土の2号人骨 (熟年～老年期男性) の左橈骨下端にColles骨折による変形治癒が認められた。また右上顎の犬歯と・第1・2小臼歯の歯根部に歯根膿瘍の痕跡が見られた。齲蝕が左上顎第2小臼歯の歯頸部にあった。

4号やぐら出土の壮年期男性頭蓋冠の左側面には致命的と思われる新鮮な刀創面が2箇所と外板に達する刀創面が4箇所に認められた。

第2節　ま　と　め

無量寺やぐらは、多くの遺物が出土した。その大部分を占めたかわらけにより時期を考えてみると、第1号やぐら（かわらけ溜）出土のかわらけは、15～16世紀代（河野Ⅵ期）と考えられ、この時期には、他の用途（廃棄場所？）として再利用されていた事が考えられる。第3号やぐらは、上層部出土のかわらけにより、更に近世（河野Ⅶ期）にかけても同じように利用されていたと考えられる。第4号やぐらの周溝内の焼土層は、後世の攪乱が入っていないと考えられ、ここから出土したかわらけ（河野Ⅴ期）は、他のやぐらの床面上又は遺構内から出土したかわらけと同じタイプであり、この時期は、やぐらの本来の用途である墓、供養施設としての利用が成されていたと考えられる。又、構築年代も、これに近い範囲に入ってくるのではないだろうか。

本やぐら群は、床面上における構造が特徴的であった。1・2号床面には、多くの大型の摺鉢状ピットが掘られており、第4号やぐらにおいては、並列する4穴の楕円状遺構が発見された。又、1・2・4号やぐら前西側には、方形穴が各1穴ずつ検出されたが用途は不明である。第4号内の方形穴からは多量の銭が出土した。又、各やぐらの前面部？が長い事、前面が改変されている事など、後世において手が加えられている事が伺われる。15～16世紀代に廃棄場所？とされる前に、更に、現床面の構造を利用した施設、他の用途に転用されていたのではないだろうか。市内の笹目遺跡内やぐらにおいても、床面上に摺鉢状ピットが検出されている事から、やぐらがある時期に、同一用途として転用したものもあると考えられる。無量寺やぐら内からは、常滑の甕片が多く出土しており、骨蔵器の可能性もあるが、摺鉢状ピットに伴う遺物とも考えられる。又、各やぐらの検出レベルは、それぞれ違う。第3号やぐらは、検出レベルが1穴だけ高く、床面の構造は、他のやぐらと違う事は、何か意味があるのではないだろうか。

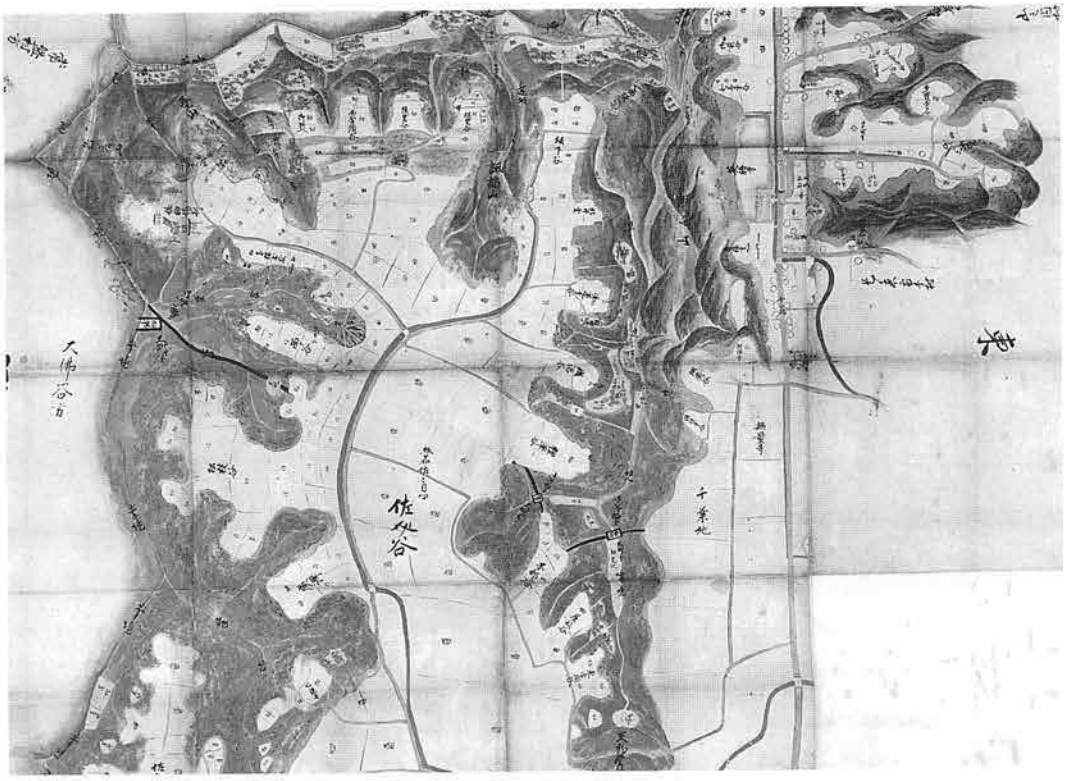
やぐらは、現在市内各所に存在し、人々の目に触れているが、墓としての意識を持つ人は少なく、現在は物置、倉庫として転用されているものも多い。この意識と同様に墓域としての意味を失い、色々な用途に転用されていたやぐらもあったと考えられる。

第4号やぐら周溝内から出土した白かわらけは、鎌倉市内でも珍しく、蓋・碗・皿と、3種類の器型のものが一括して出土した。これはセットとして考えてよいだろう。又、白かわらけに書かれていた墨書文字は、庚申信仰に関係するとの考えもあるが、やぐらと庚申信仰については、今後の課題ではあるが、第4号やぐらの周溝内のかわらけは、供養か信仰か、何らかの意味を持つものと考えられ今後の課題である。

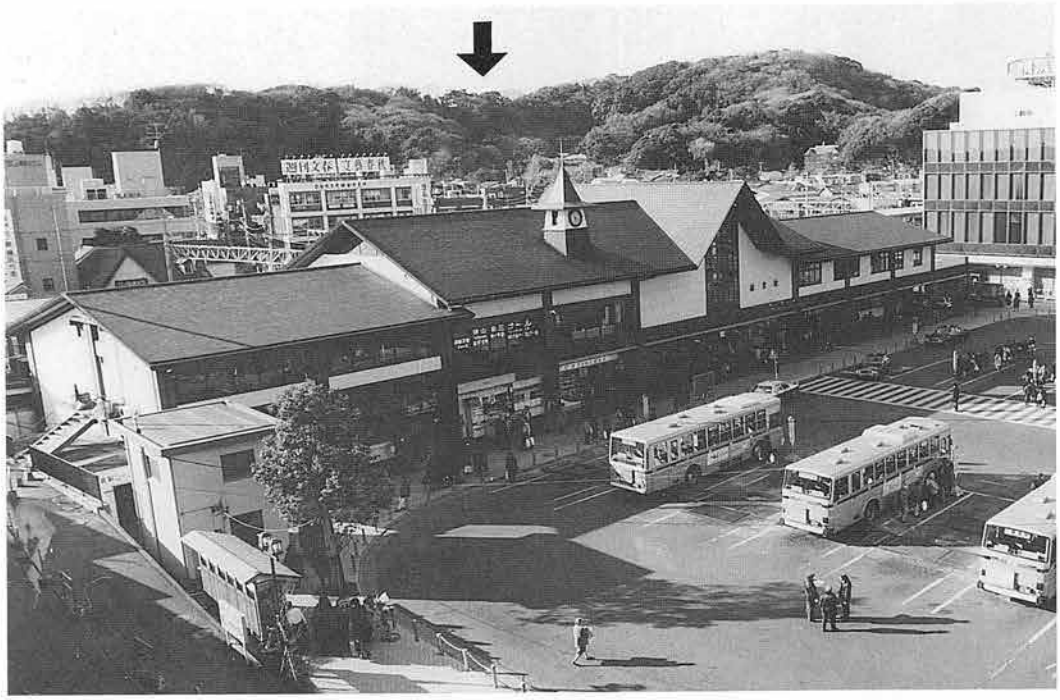
参考文献

河野真知郎「鎌倉における中世土器様相－神奈川考古第21号」神奈川考古同人会　1986年

田代　郁夫「笹目遺跡内やぐら－昭和63年度鎌倉市内色傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」同調査団 1990年



扇ヶ谷村古絵図　天保三（1832）年
鎌倉の古絵図（2）－鎌倉国宝館図録第十六集－より転載



2．調査地点遠景（鎌倉駅方面から望む）

図版 2

1．上部平場全景（東から）

2．上部平場全景（西から）

1．上部平場ピット 2（北から）

2．上部平場ピット 3（南から）

3．上部平場ピット 6 かわらけ、
銭出土状況（北から）

図版 4

1．1号やぐら調査前の状況

2．かわらけ溜（奥壁付近）出土状況（北から）

3．かわらけ溜（東側）出土状況（北から）

4．かわらけ溜　瓦質製品出土状況（北から）

1．Ⅰ号やぐらかわらけ溜（中央付近）
出土状況（東から）

2．Ⅰ号やぐらかわらけ溜（中央付近）
出土状況（西から）

3．かわらけ溜
西壁際床面上出土かわらけ

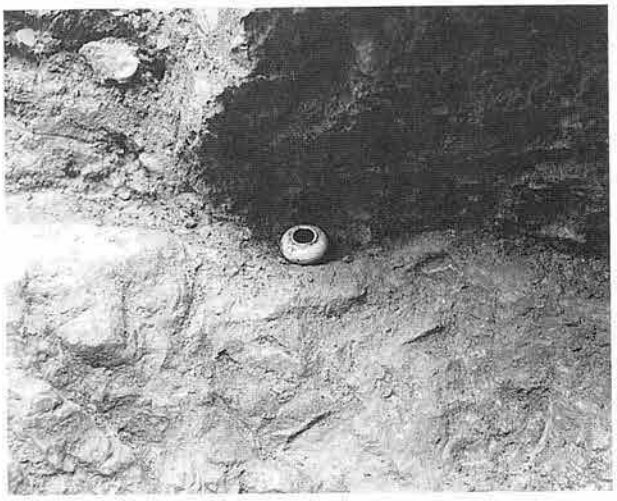
図版 6

1．1号やぐら全景（北から）

2．1号やぐら全景（西から）

1．1号やぐら奥壁寄ピット列
（北から）

2．1号やぐら床面前方ピット
（南から）



3．1号やぐら床面上出土瀬戸小壺
（南から）

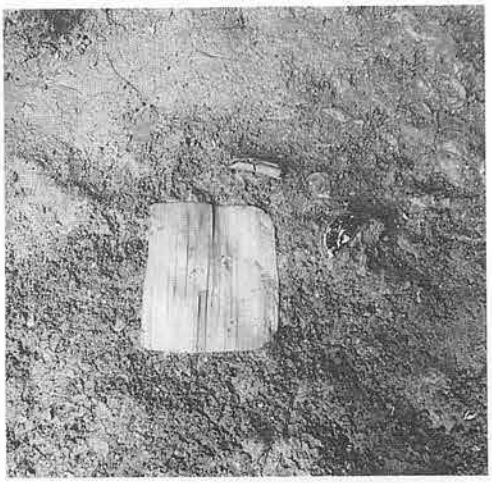
図版 8

1．2号やぐら調査前状況

2．2号やぐら中間奥壁際出土人頭骨

3．2号やぐら西壁寄（上層）
出土人骨（側臥伸展）

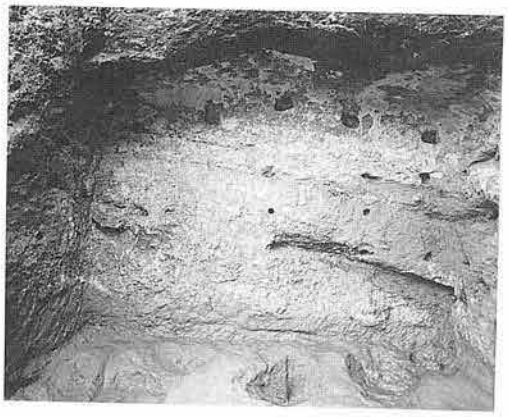
1．2号やぐら西側青灰色土丹層上遺物出土状況
（北から）



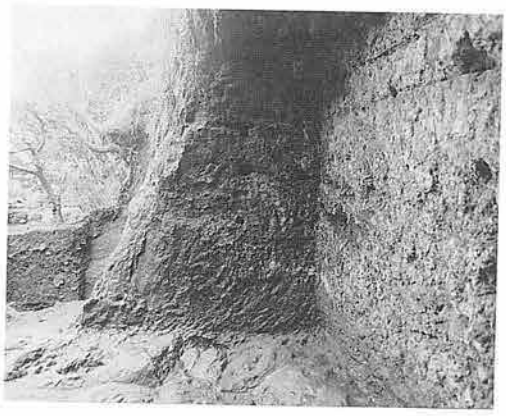
2．折敷、漆器皿、竹片出土状況

3．2号やぐら奥壁寄床面上出土舟形

図版10

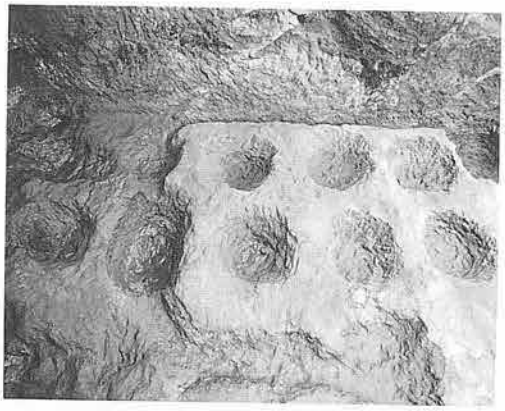


1．２号やぐら奥壁



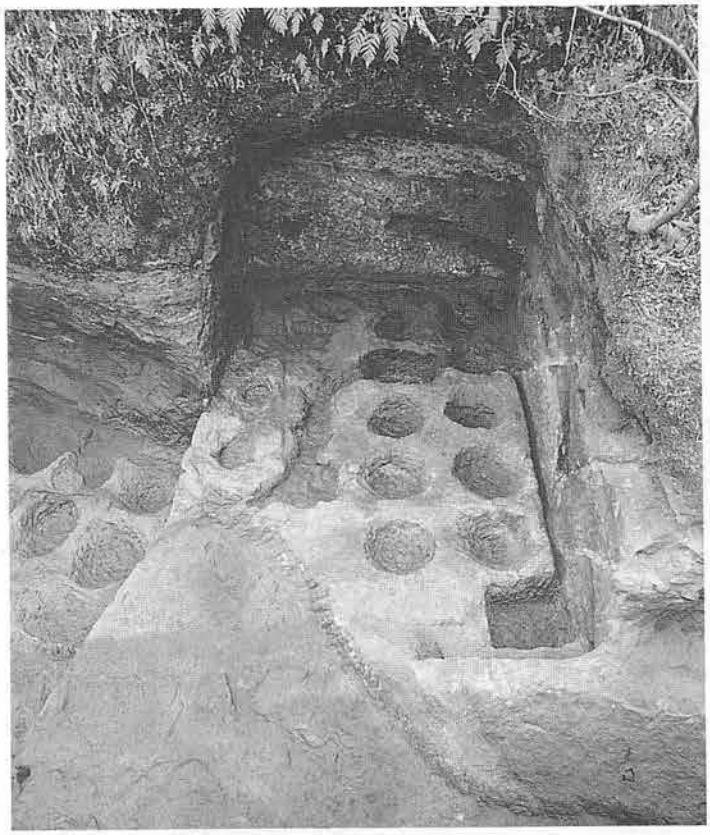
2．２号やぐら東壁

3．２号やぐら西壁



4．２号やぐら床面西側ピット列

5．２号やぐら床面前壁付近ピット、方形穴

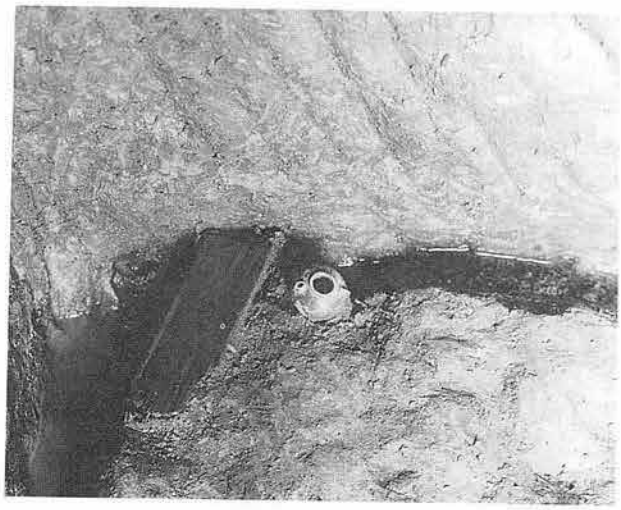


1、2号やぐら全景（北から）

2．1・2号やぐら全景（北から）

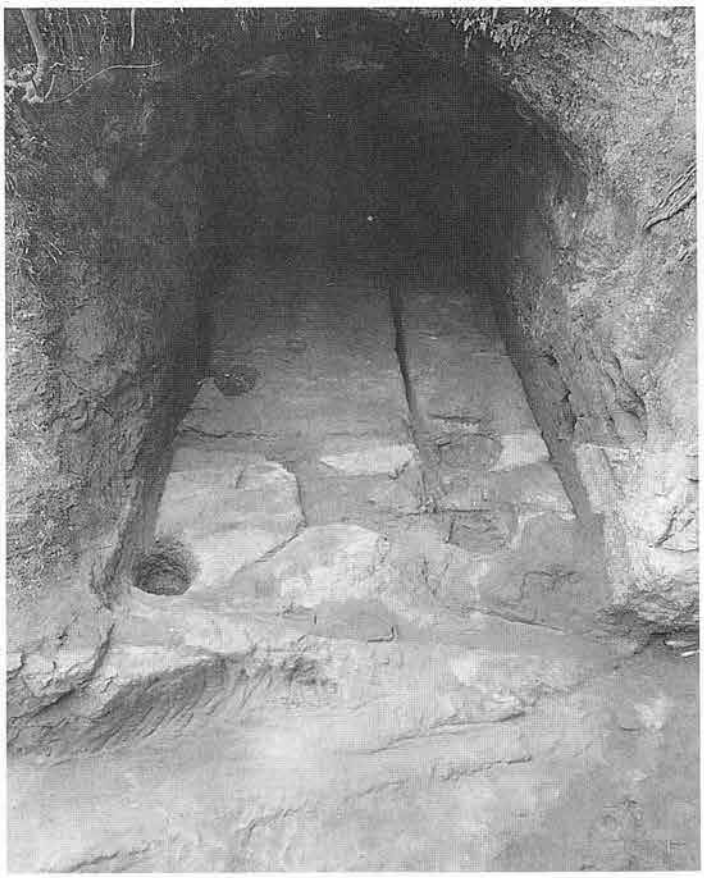
図版12

1．3号やぐら調査前状況



2．3号やぐら奥壁東際
床面上出土木製品と瀬戸水注

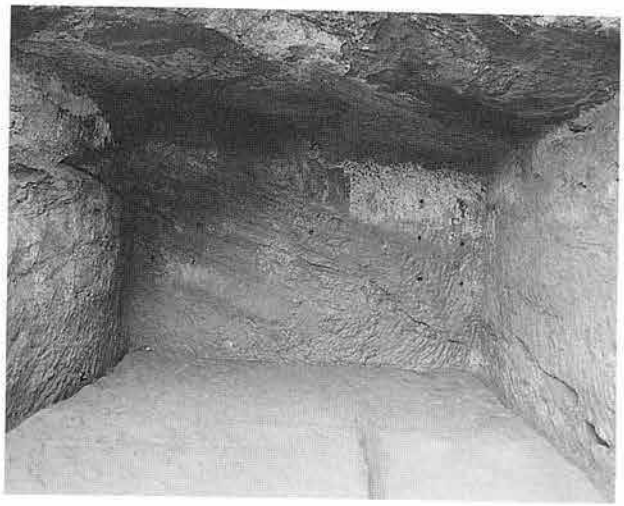
3．3号やぐら西壁際
床面上出土常滑甕片



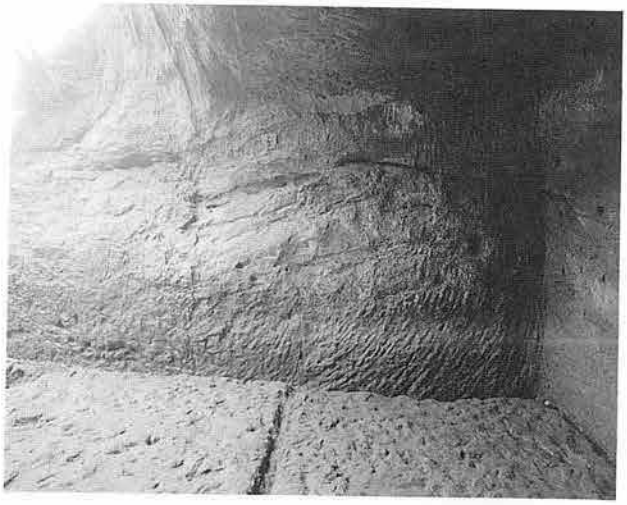
1、3号やぐら全景（北から）

2．3号やぐら床面前方部（南から）

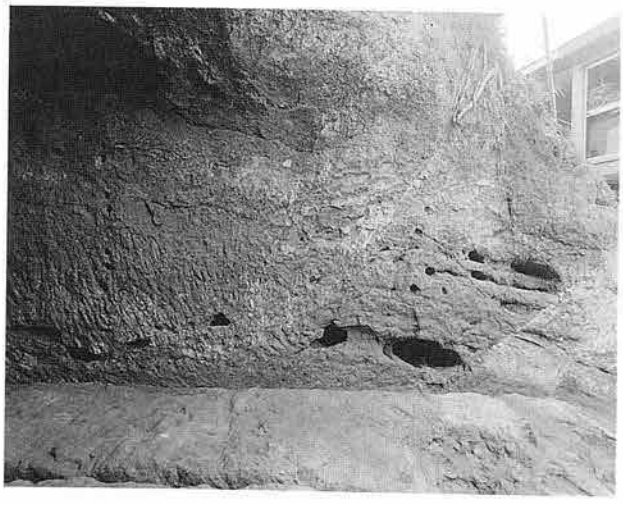
図版14



1．3号やぐら奥壁



2．3号やぐら東壁



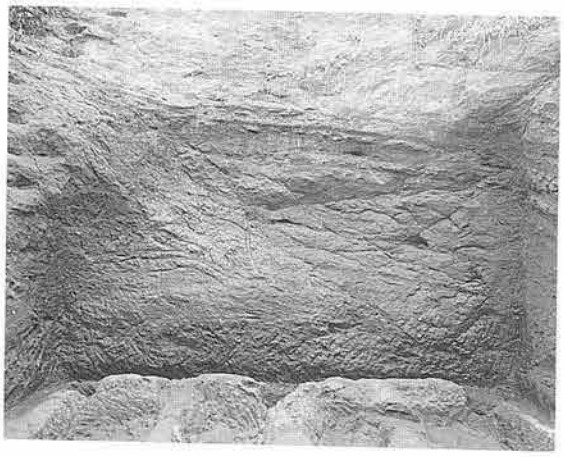
3．3号やぐら西壁

1．4号やぐら調査前状況

2．4号やぐら東側奥壁際
中間層出土人頭骨

3．4号やぐら東壁寄土丹層遺物出土状況

図版16



2．4号やぐら東壁

1．4号やぐら奥壁

3．奥壁際焼土層検出状況（北から）

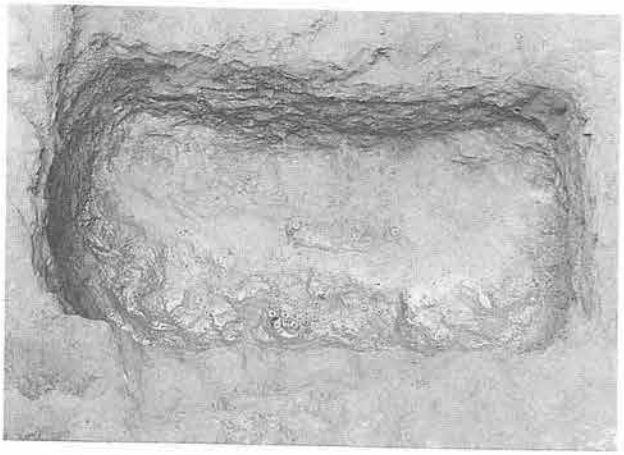
4．4号やぐら周溝東側焼土層出土
白かわらけとかわらけ

1．4号やぐら全景（周溝、焼土層遺物出土状況）（北から）

2．4号やぐら及び前方部全景（北から）

図版18

1．4号やぐら東側、
前方検出状況（北から）



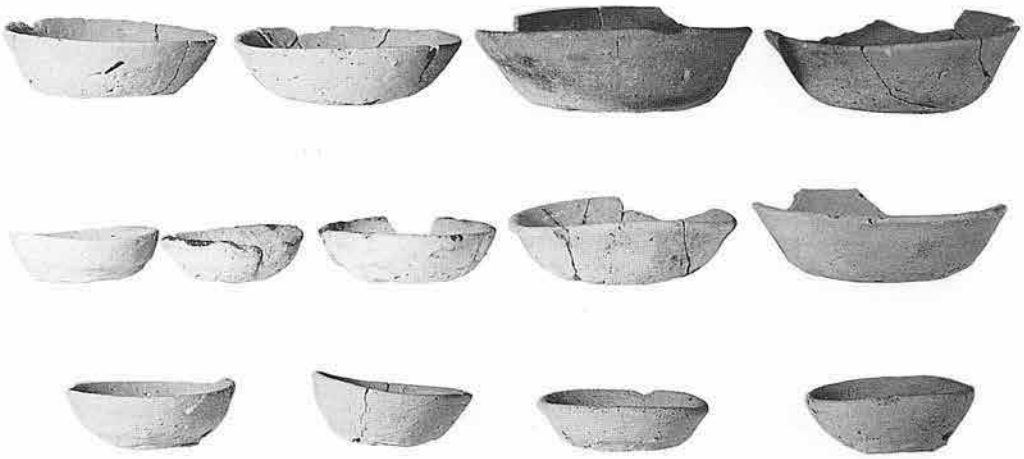
2．4号やぐら前方西側方形穴底
銭出土状況

3．2号やぐら北側延長トレンチ内ピット

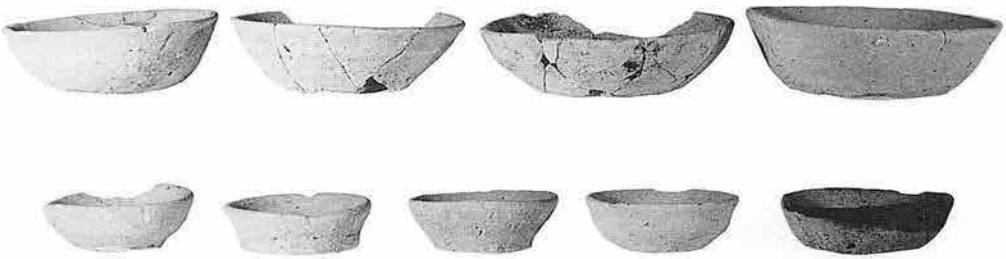
包含層出土　　ピット 6 出土

上部平場遺構

上層出土



上部土丹層（炭層）上出土　奥壁寄西側区

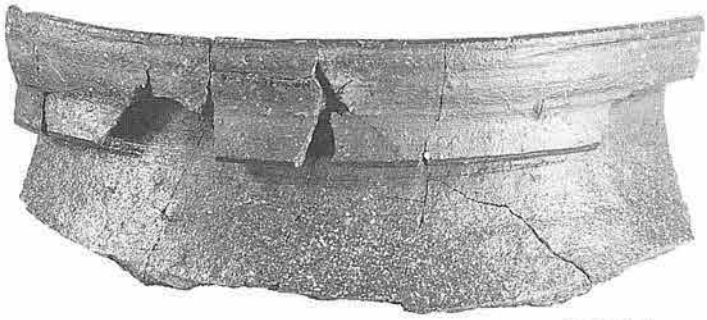


上部土丹層（炭層）上出土　東側区

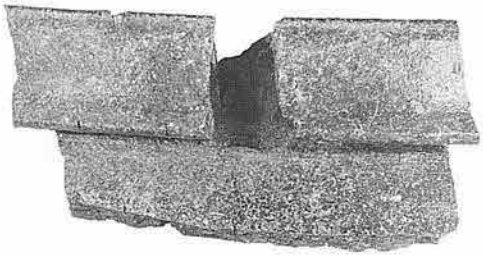
下部土丹層上出土　東測区

I 号やぐら出土遺物（ I ）かわらけ

図版20



下層出土

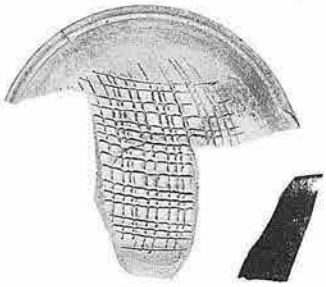


下層出土

下層（暗褐色粘質土）出土

上層出土

上部土丹層出土



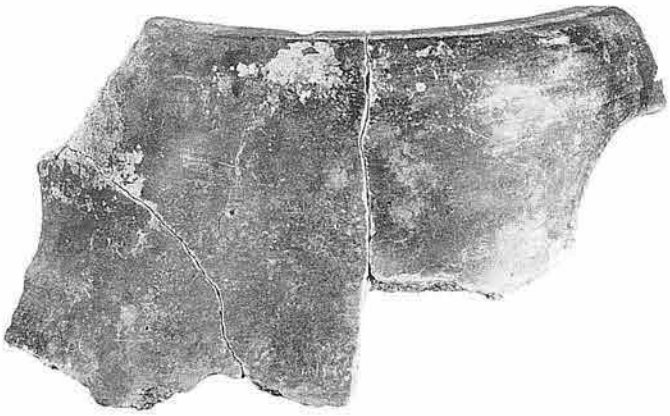
上層出土

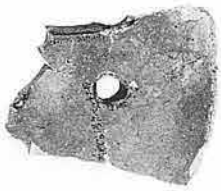
下層（暗褐色粘質土）出土

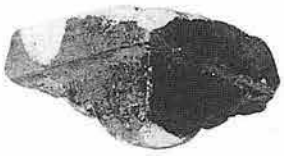
上層出土

上部土丹層出土

1号やぐら出土遺物（2）







上層出土

ピット1出土

上部土丹層出土

上層出土

下層（暗褐色粘質土）出土

1号やぐら　出土遺物（3）

図版22

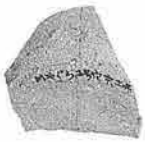
床面上出土

上層（土丹層）出土

床面上出土

ピット７出土

下層（土丹層）出土



上層（土丹層）出土

下層（土丹層）出土

下層（青灰色土丹層）上出土

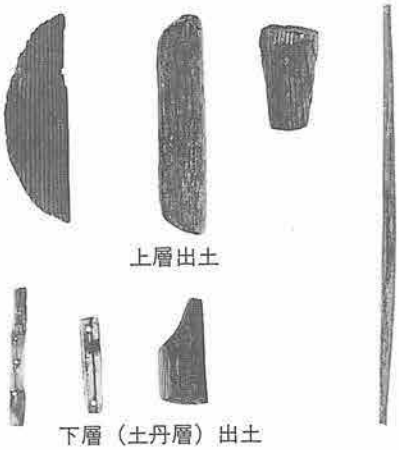
上層出土
（土丹層中）

床面上出土

上層出土
（土丹層中）

床面上出土

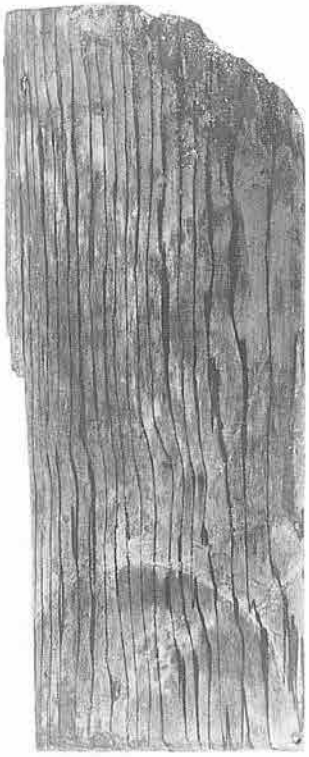
2号やぐら出土遺物（Ⅰ）



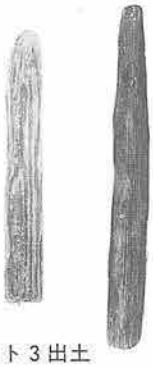
上層出土

下層（土丹層）出土

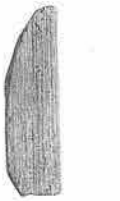
下層（青灰色土丹層）上出土



ピット 2 出土

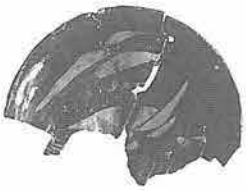


ピット 3 出土

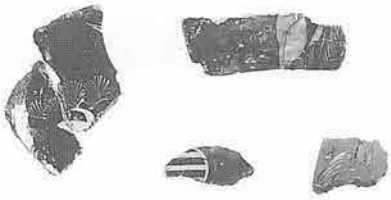


ピット 4 出土

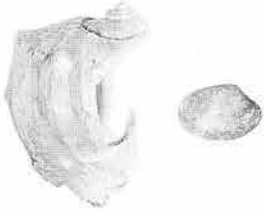
床面上出土



下層（青灰色土丹層）上出土



上層（土丹層）出土



上層出土

2 号やぐら出土遺物（2）

図版24

上層出土かわらけ

下層出土かわらけ

ピット１出土かわらけ

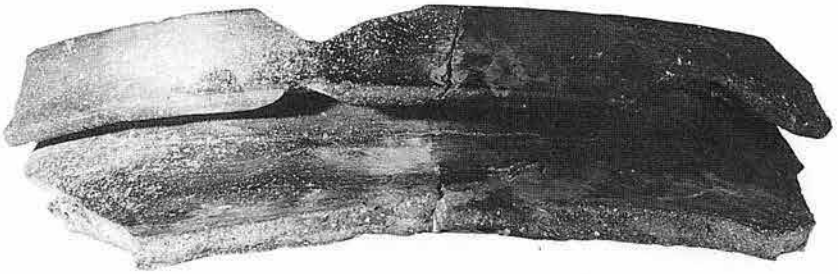
上層出土（甕こね鉢）

下層出土（甕）

上層出土（平鉢）

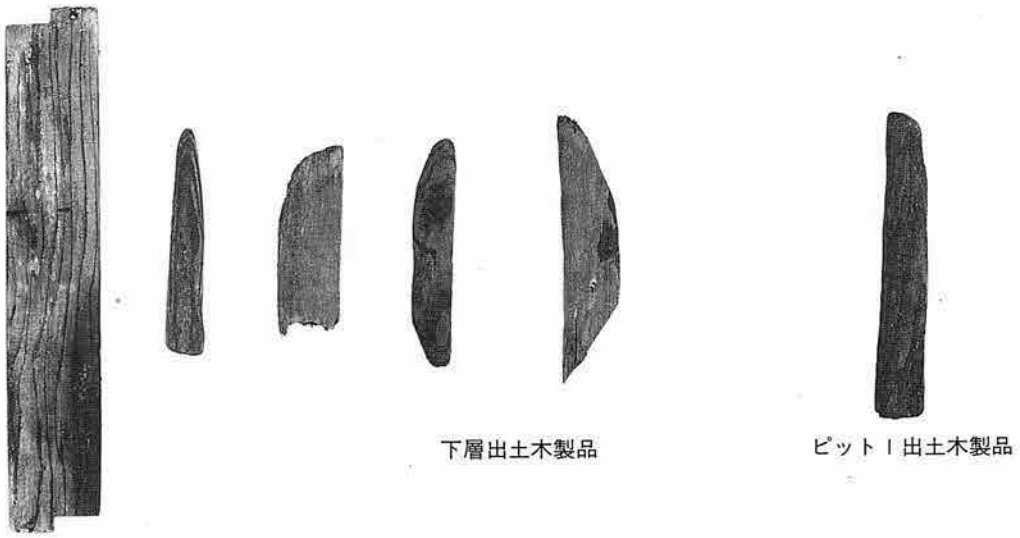
床面出土（水注）

3号やぐら出土遺物（１）



西壁際床面上・ピット２出土常滑（甕）

上層出土木製品



下層出土木製品　　ピット１出土木製品

３号やぐら出土遺物（２）

図版26

東壁際中間層出土

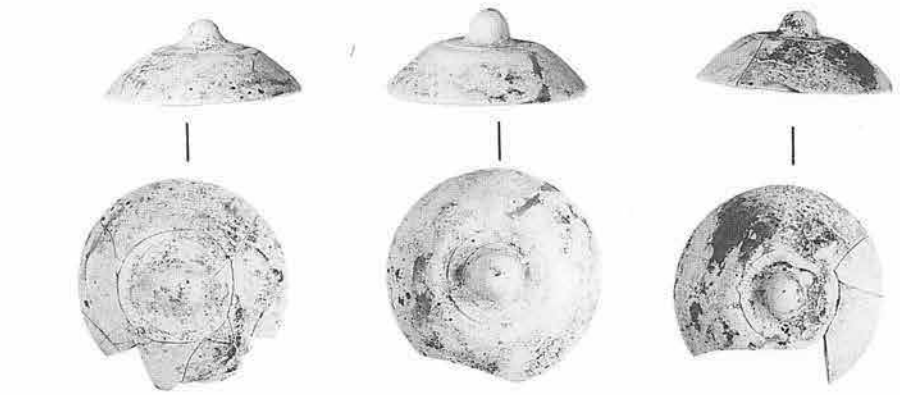
奥壁寄焼土層（炭）出土

周溝焼土層中出土

周溝　焼土層下層出土

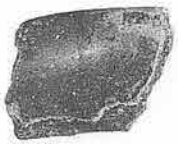
4号やぐら前方部分ピット出土

4号やぐら出土遺物（1）かわらけ

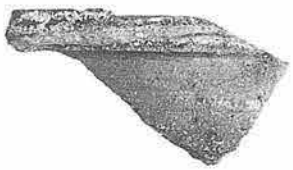


周溝焼土層中出土白かわらけ

白かわらけ（墨書文字）



周溝焼土層下層出土手焙り



常滑（甕）

木製品（折敷）

やぐら前方部方形穴内出土

4号やぐら出土遺物（2）

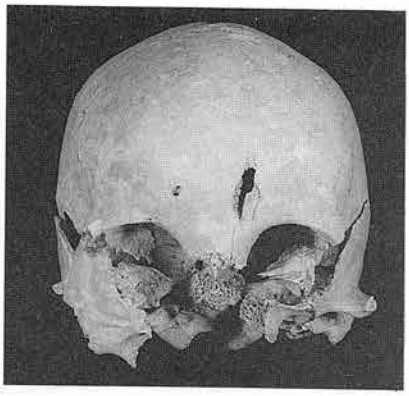


写真１．２号やぐら出土１号人骨の頭蓋正面観。

写真２．２号やぐら出土１号人骨の頭蓋右側面観。

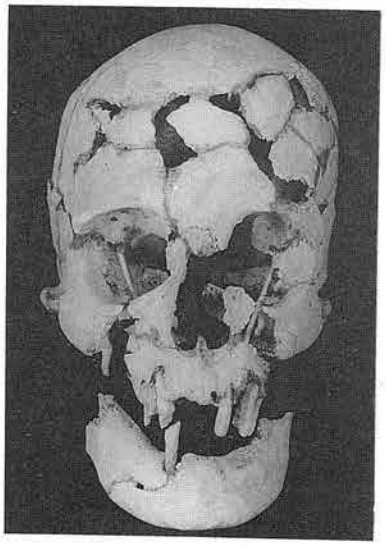


写真３．２号やぐら出土２号人骨の頭蓋正面観。

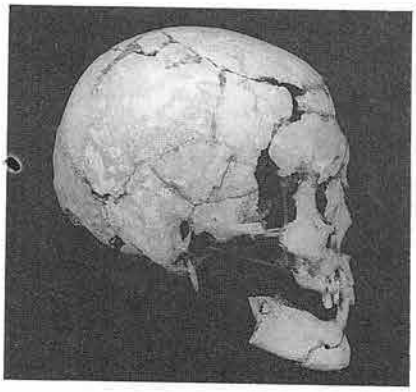


写真４．２号やぐら出土２号人骨の頭蓋右側面観。

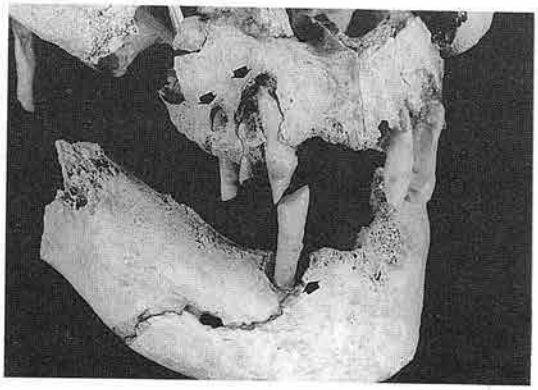


写真５．２号やぐら出土２号人骨の歯根膿瘍（矢印）を示す。

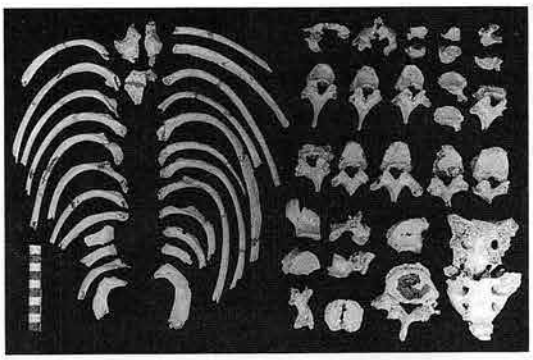


写真６．２号やぐら出土２号人骨の胸骨・肋骨・椎骨の各片。

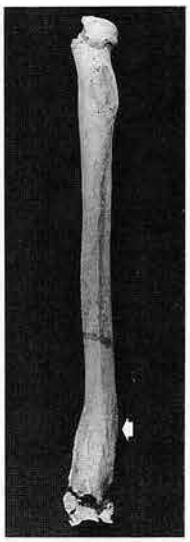


写真８．
２号やぐら出土２号人骨の左橈骨下端骨折の変形治癒（矢印）。
橈骨が下端付近で背側に折れ曲がっている。

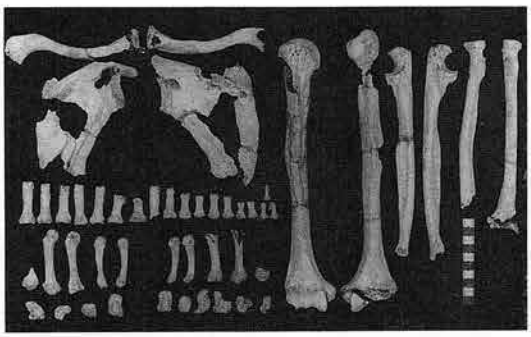


写真７．２号やぐら出土２号人骨の上肢骨片。

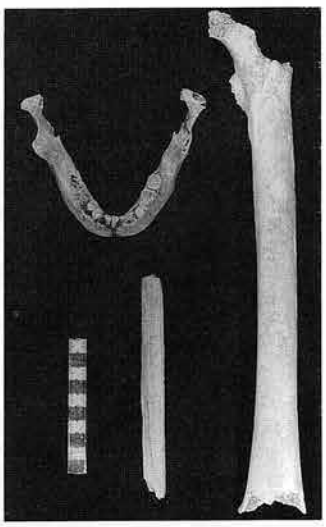


写真10．２号やぐら出土３号人骨の下橈骨と左大腿骨片および左腓骨体片。

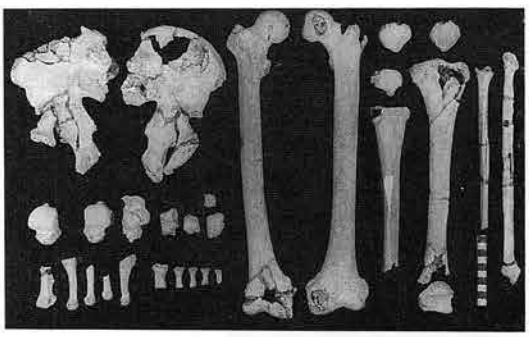


写真９．２号やぐら出土２号人骨の下肢骨片。

写真11. 4号やぐら出土人骨の頭蓋正面観。

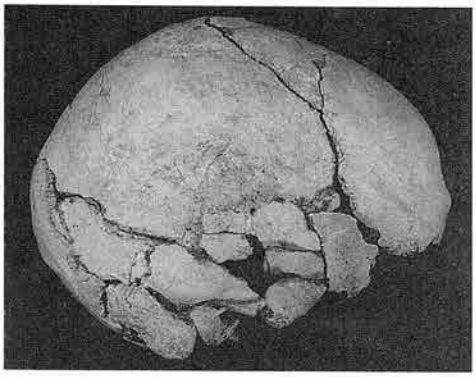


写真12. 4号やぐら出土人骨の頭蓋右側面観。

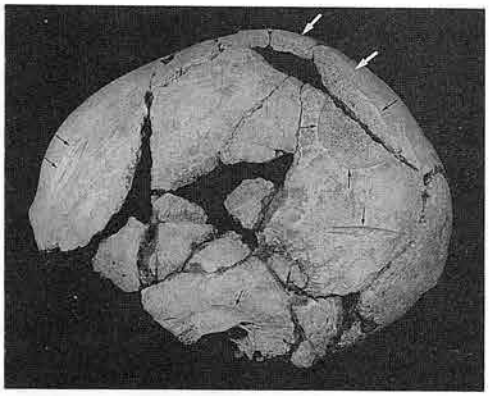


写真13. 4号やぐら出土人骨の頭蓋冠の左側面観。刀創の部位（矢印）を示す。

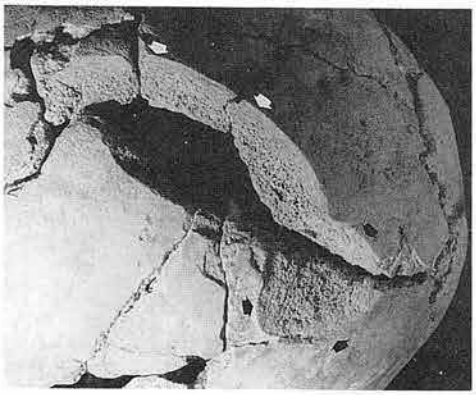


写真14. 4号やぐら出土人骨頭蓋冠の刀創（矢印）の拡大写真。

写真15. 4号やぐら出土人骨頭蓋冠の刀創（矢印）の拡大写真。

7．若宮大路周辺遺跡群（No.242）

御成町872番14

例　言

1　本編は鎌倉市御成町872番14に於ける店舗併用住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

2　発掘調査は建築対象面積150m²のうち70m²を国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が、残る80m²を若宮大路周辺遺跡群発掘調査団（団長・吉田章一朗）が実施した。国庫補助事業対象範囲の調査期間は平成3年2月13日から3月30日である。

3　本編は国庫補助事業対象範囲の発掘成果をまとめたものであるが、遺構の関連性の点から遺構全測図は全調査範囲を掲載し、必要に応じ調査団対象範囲の遺構についても一部とり上げている。

4　調査の実施にあたっては、若宮大路周辺遺跡群発掘調査団の協力を得た。

5　本編の執筆は、第一章から第三章、第五章を木村が、第四章(1)、(2)を福田　誠、菊川　泉が、第四章(3)を菊川英政が分担して行った。また資料整理、図版作製に片岡睦枝、福田　誠、田代郁男、菊川英政、継　実、菊川　泉、浜野洋一、熊谷洋一、佐々木靖、丸井宏子、関　理恵子、新山久美子、中島さやかの協力を得た。

5　本編に使用した写真は全て木村が撮影した。

6　現地調査の調査体制は下記の通りである。

主任調査員　木村美代治
調　査　員　片岡睦枝、瀬田哲夫、渡部律子
調査補助員　山上玉恵
調査協力者　海野直宏、鎌倉市高齢者事業団

7　出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例　言 …… 314

本 文 目 次

第一章　調査地点の位置と環境 …… 317
第二章　調査の経過 …… 319
第三章　層序と検出された遺構 …… 320
(1) 層　序 …… 320
(2) 1面の遺構 …… 322
溝1（河川） …… 322
土壙1 …… 324
建物1・2・3 …… 326
(3) 2面の遺構 …… 327
溝2・4 …… 328
木組遺構 …… 330
土壙2・3 …… 331
(4) 古代の遺構 …… 331
溝状遺構 …… 333
柱穴 …… 333
第四章　出土した遺物 …… 334
(1) 1面の遺物 …… 334
溝1 …… 334
土壙1 …… 336
1面上 …… 338
(2) 2面の遺物 …… 346
溝2 …… 346
木組遺構 …… 348
土壙2 …… 349
2面上 …… 352
(3) 古代の遺物 …… 360
第五章　まとめ …… 365

挿図目次

図1　調査地点の位置図 …… 318
図2　グリット配置図 …… 319
図3　土層模式図 …… 320
図4　1面遺構全測図 …… 321
図5　溝1（河川） …… 323
図6　土壙1 …… 324
図7　建物1・2・3 …… 325
図8　2面遺構全測図 …… 327
図9　溝2・4 …… 328
図10　木組遺構 …… 329
図11　土壙2・3 …… 330
図12　古代遺構全測図 …… 332
図13　古代柱穴 …… 333
図14　溝1出土の遺物 …… 335
図15　法量分布図1（土壙1） …… 336
図16　土壙1出土の遺物 …… 337
図17　1面出土の遺物1 …… 339
図18　1面出土の遺物2（かわらけ） 341
図19　法量分布図2（1面） …… 342
図20　1面出土の遺物3（かわらけ） 344
図21　1面出土の遺物4（かわらけ） 345
図22　溝2・木組遺構出土の遺物 … 347
図23　土壙2出土の遺物 …… 351
図24　2面出土の遺物1 …… 352
図25　2面出土の遺物2 …… 355
図26　法量分布図3（2面） …… 356
図27　2面出土の遺物3（かわらけ） 358
図28　2面出土の遺物4（かわらけ） 359
図29　古代の出土遺物1 …… 361
図30　古代の出土遺物2 …… 363

図版目次

図版1　調査区近景
1区全景（2面時） ……366
図版2　1面全景・土壙1土層断面
土壙1 ……367
図版3　溝1下層・溝1土層断面
溝1上層 ……368
図版4　1面かわらけ出土状況
礎石割りぐり検出状況 ……369
図版5　2面全景・溝2全景
溝2土層断面 ……370
図版6　木組遺構・木組土層断面
木組部分 ……371
図版7　溝2杭跡・溝4
土壙3 ……372
図版8　古代柱穴・古代トレンチ全景
溝状遺構土層断面 ……373
図版9　溝1・土壙1出土の遺物 ……374
図版10　1面出土の遺物 ……375
図版11　2面出土の遺物 ……376
図版12　2面出土の遺物 ……377
図版13　1面出土のかわらけ ……378
図版14　2面出土のかわらけ ……379
図版15　古代の遺物 ……380
図版16　古代の遺物 ……381

第一章　調査地点の位置と環境

本調査地点は、鎌倉市御成町872番14に所在する。鶴岡八幡宮社頭から南に向かって走る若宮大路の一ノ鳥居と二ノ鳥居の中程にあたり、現在のJR横須賀線のガードの南側、若宮大路の西に位置し、若宮大路に面している。

本調査地点の遺跡名称である「若宮大路周辺遺跡群（神奈川県遺跡台帳No242）」は東西700m、南北1100mにおよぶ広い範囲をさし、東は滑川から西は今小路まで、北は鶴ヶ岡八幡宮の社頭から南は小町大路（現在の国道134号線）までにおよび、鶴岡八幡宮寄りの若宮大路の東西両側に所在する「北条泰時・時頼邸跡（同No.282）」、「宇都宮辻幕府跡（同No.239）」、「北条時房・顕時邸跡（同No.278）」を除く鎌倉の旧市街地の大部分を包括した遺跡名称である。従って既に同遺跡名で報告されている幾つかの調査地点とは、立地、周辺の状況、遺構の性格等に於いて必ずしも共通しているとは限らない。小字名は「蔵屋敷」と呼ばれ、本調査地点はこの南端にあたり、本調査地点の100m程南に若宮大路と大町大路の交差する下馬四ツ角、400m北に二ノ鳥居、250m西に今小路がある。

本調査地点付近の地形は、明治21年（1889）の横須賀線の開通工事に伴い、現在の横須賀線のガード付近の若宮大路車道は大きく削平されていて市街地の中で最も標高が低い所の一つである。現在の車道面で海抜約2.8m、また調査地点の現地表で海抜約4.0mである。本調査地点周辺の調査は、ごく隣接した地域ではあまり行われていないが、250m程北側の鎌倉駅西口周辺から二ノ鳥居周辺にかけては調査例も多く、また350m程西側の現在の今小路を挟んだ西側ではかなり広い面積の調査も行われ、次第に当時の様子が明らかにされつつある。今小路西遺跡（御成小学校内）(4)では、13世紀後半から14世紀前半にかけての南北2つの武家屋敷とこれを取りまく庶民居住区が検出されており、さらに同遺跡の南側の屋敷の下層からは8世紀から10世紀にかけての遺構も検出され、古代の官衛的性格をもつと考えられている大規模な建築遺構も検出されている。また鎌倉駅周辺では千葉地遺跡(17)、千葉東遺跡(16)、諏訪東遺跡(14)、蔵屋敷東遺跡(10)、蔵屋敷遺跡(18)をはじめ多くの調査が行われ、中世の溝や道路等による区画や掘立柱建物跡、方形竪穴建築跡、井戸などが数多く検出されている。さらにこれらのうち数ケ所の調査地点では古代の掘立柱建物跡や住居跡も検出されている。二ノ鳥居から三ノ鳥居にかけての「北条泰時・時頼邸跡」、「宇都宮辻幕府跡」及び「北条時房・顕時邸跡」等の各調査地点の調査では若宮大路際に若宮大路と平行する木組の護岸をもつ大溝が検出されているが、若宮大路西側の「北条時房・顕時邸跡」南辺以南では大溝の木組は検出されておらず、若宮大路西側を南北に流れる河川との関係が考えられている。若宮大路修景計画に伴う若宮大路の調査では狭いトレンチ調査ながら若宮大路全域にわたり調査が実施され、本調査地点に近い若宮大路西側のトレンチで河川の堆積と考えられる堆積土を検出しており、二ノ鳥居付近から下馬四ツ角にかけての若宮大路西側を流れる中世から近世にかけての河川の存在が明らかにされている。

1　本調査地点
2　御成町　868－12地点
3　御成町　727地点
4　今小路西遺跡（御成小学校内）
5　今小路西遺跡（福祉センター用地内）
6　由比ヶ浜１－128地点
7　由比ヶ浜２－18－12地点
8　由比ヶ浜２－２－10地点
9　由比ヶ浜２－地点
10　蔵屋敷東遺跡
11　御成町11－２地点
12　御成町819－１地点
13　御成町806－３地点
14　諏訪東遺跡
15　御成町228－２地点
16　千葉地東遺跡
17　千葉地遺跡
18　蔵屋敷遺跡
19　小町１－81地点
20　小町１－83－１地点
21　小町１－1028－１地点
22　本覚寺旧境内遺跡
23　小町１－305地点
24　（推定）藤内定員邸跡遺跡
25　小町１－75－１地点
26　小町１－309－５地点
27　小町１－319－２地点
28　小町１－75－１地点
29　小町１－75地点
30　小町１－67－２地点
31　二ノ鳥居西遺跡
32　小町１－106地点
33　小町１－116－４地点
34　小町１－116地点
35　小町１－120－１地点
36　扇ヶ谷１－74－８地点
37　小町２－345－２地点
38　小町282地点
39　小町280－２地点
40　若宮大路遺跡　Bトレンチ

図１　調査地点の位置図

第二章　調査の経過

本調査地点の調査は、平成２年８月に店舗併用住宅建設の事前相談があり、８月27日に鎌倉市教育委員会により試掘調査が行なわれ、建設予定地内に２カ所の試掘壙を設定した。その結果地表下70～80cm程で中世の遺構面が検出されたため本調査を実施することとした。

調査にあたり店舗併用住宅のため、全建築面積のうち貸店舗部分を若宮大路周辺遺跡群発掘調査団（団長・吉田章一朗）が、残る住宅部分を国庫補助事業調査として調査を実施した。

平成３年２月14日に国庫補助事業対象範囲（１区）の表土掘削を大型重機を用いて行い、２月20日から人力により掘り下げ、遺構の検出を開始した。試掘調査の土層観察では、遺構面は中世基盤層である褐色粘土層直上の１面と思われたが、表土掘削後人力で掘り下げたところ褐色粘土層上部に破砕した貝殻を多量に含む黄色砂の整地層が確認されたため、これを１面とし遺構の検出を行った。１面の調査終了後、中世基盤層まで掘り下げこれを２面とした。１区の１・２面を通して、溝（４

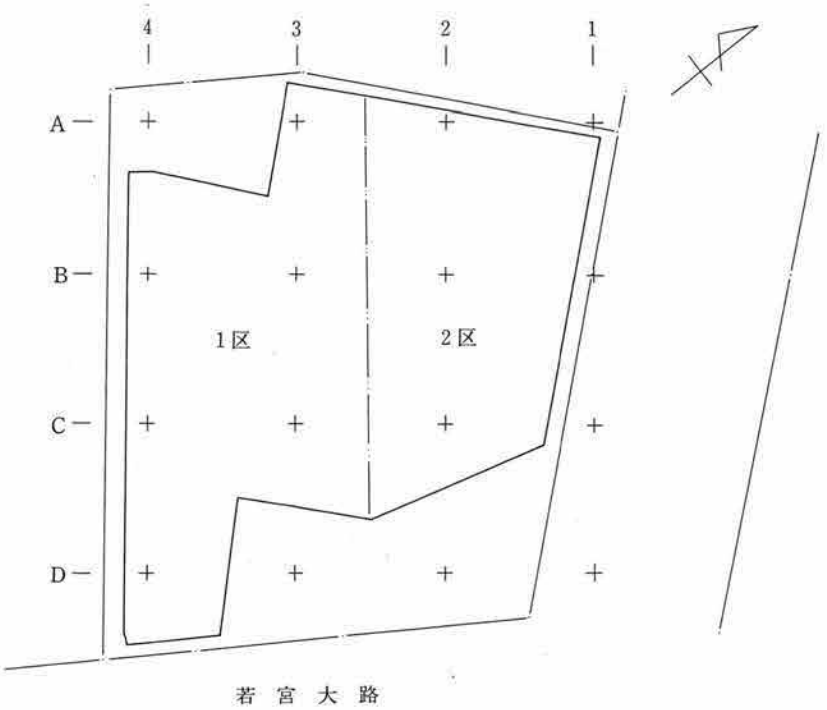


図２　グリッド配置図

条)、土壙（１基)、木組遺構（１基)、柱穴多数が検出された。さらに２面で検出した土壙の底部で古代の遺構と思われる落ち込みが確認されたため、これを調査することにしたが、遺構が深く現地表から３ｍ程に及ぶ事がわかり山留めの強度等の関係から調査区（１区）全域の調査は断念し、４×３ｍのトレンチを設定し遺構の確認をするに止まった。３月30日まで１区の調査を行い、その後４月５日から事業者負担範囲（２区）の表土掘削を行い１区で検出された遺構面の広がりをそれぞれ確認した。２区からは新たに２面で井戸２基が調査区西側に検出された。１区同様中世２面、古代１面の計３時期の遺構面の調査を行い、２区の調査は平成３年４月28日まで実施し、５月２日に調査機材等を撤収して現地の調査を終了した。

調査にあたり調査区内に若宮大路と直行方向に任意の軸線を設けこれを東西軸とし、これに直行する南北軸を設定し調査区内に４ｍの方眼を配した。東西軸に北から１、２、３、４と算用数字を当て、南北軸に西からＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄとアルファベットを当てた。各グリットの呼び名は北西隅の軸線の交点の杭名を用いた。南北軸は磁北から40度程東に振れているが、本編では便宜上南北軸の北を北と称している。

第三章　層序と検出された遺構

(1)　層　序（図３・８）

本調査地点の現地表の海抜は約4.00mである。東側はすぐ若宮大路の歩道に面し、現在の若宮大路車道は横須賀線のガード付近では大きく削平を受けている。本調査地の現地表と現道路面で1.２ｍ程の比高差がある。

表土層（１、２）は約50cm程堆積し、その下に30cm程の暗褐色砂質土(3)が堆積している。この砂質土は近世以降の堆積と考えられ、東側では近・現代の削塀を受け、この削平は一部中世遺構面ま

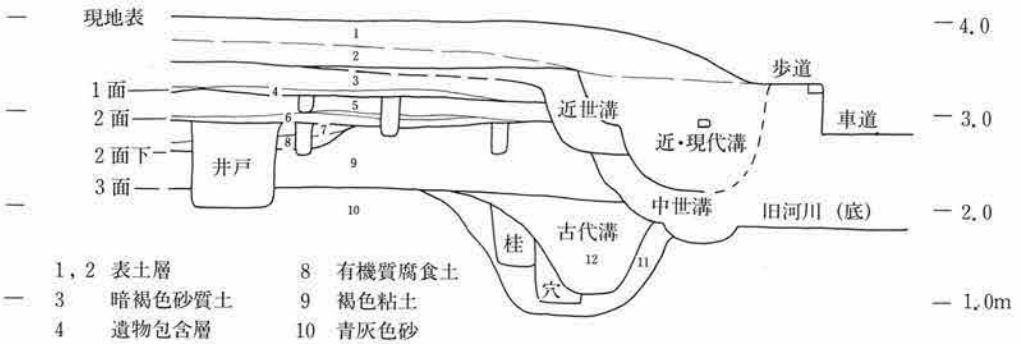


図３　土層模式図

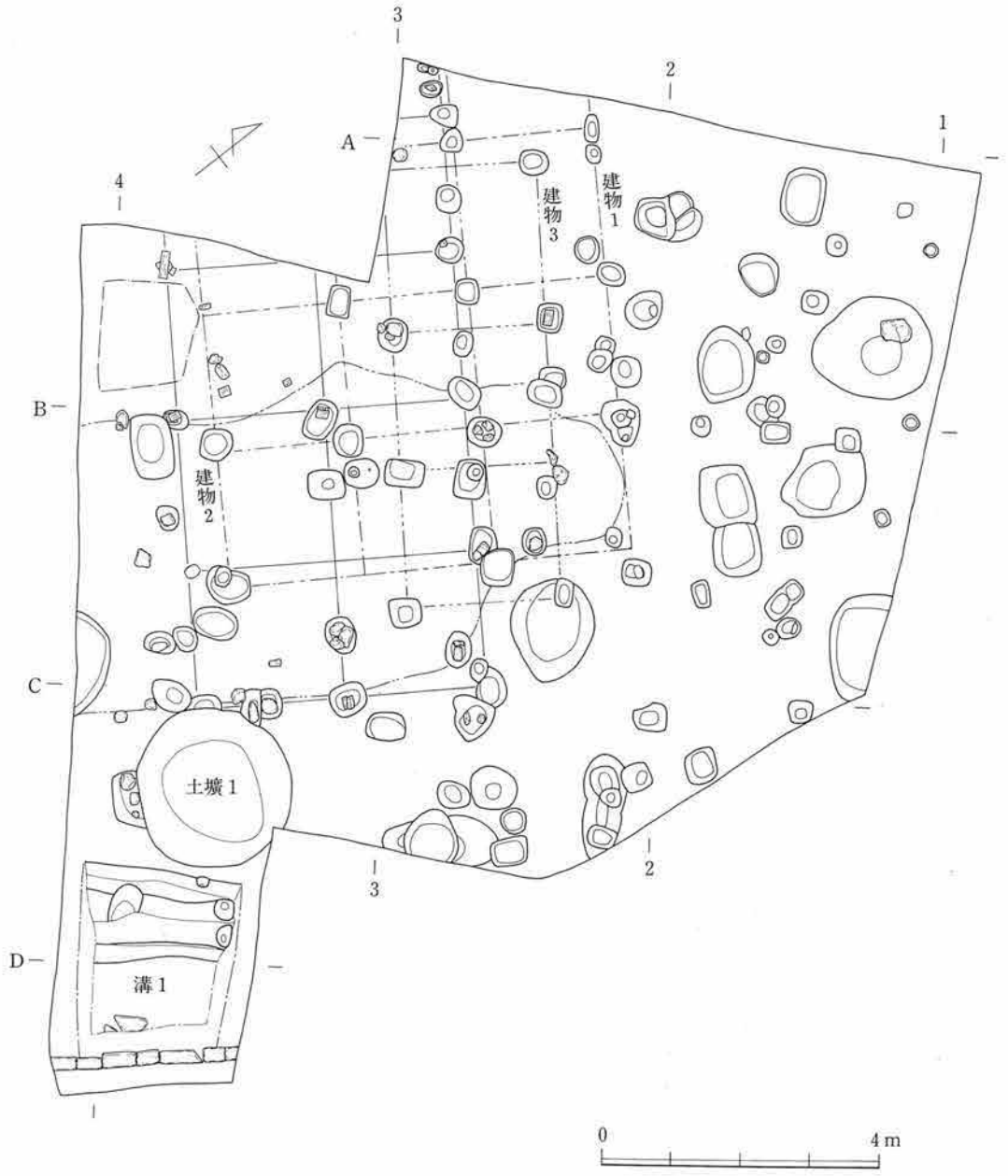


図 4　1 面遺構全測図

で達している。この下に10cm程の遺物包含層(4)が認められ海抜3.1m程のところで1面を検出した。1面構成土(5)は厚さ20～30cm程であるが、粘土や砂質土の薄い堆積層の積み重ねで堅固な地業層はみられなかった。最上部は破砕した貝殻を多量に含むややきめの粗い黄色砂（5－1）による整地層がみられ、その下に混入物をほとんど含まない締まりの良い褐色粘土層（5－2）があり、1面の遺構の多くがこの層の直上で確認された。さらにその下に炭化物や砂粒を多く含むやや締まりの悪い褐色粘土（5－3）及び褐色砂質土（5－4）がみられる。1面構成土を取り除くと有機質腐食土(6)の堆積がみられ、直下で部分的に締まりの良い褐色粘土と砂の整地層が検出されたため精査を試みたが、新たに顕著な遺構の検出は出来ず生活面とは認めにくいため簡単な記録に止め、中世基盤層まで掘り下げこれを2面とした。2面は調査区東側がやや高く西に向かって緩やかに傾斜している。さらに調査区西半では2面を構成する非常に締まりの良い茶色味褐色粘土(7)の下に有機質腐食土(8)の堆積が確認されたため、これをさらに掘り下げ（2面下）遺構の確認を行ったが新たな遺構は検出されなかった。中世基盤層である褐色土層(9)を40～50cm掘り下げると古代トレンチ西側では青灰色細砂(10)が検出されたが東側では水磨した小土丹の厚い堆積(11)が認められ両者を壁として黒褐色粘質土(12)を覆土とした大きな落ち込みが検出された。

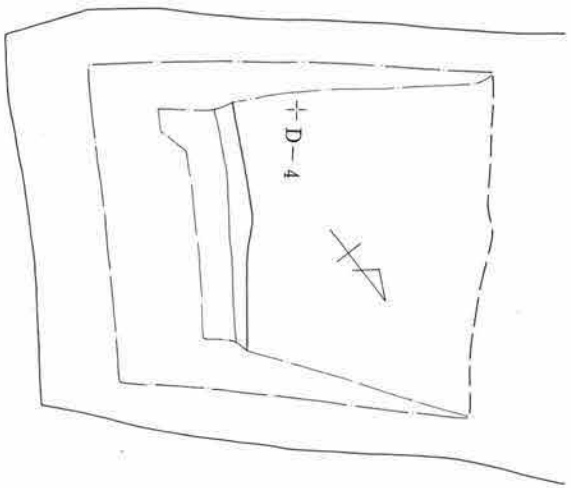
(2)　1面の遺構（図4）

1面は現地表から70～90cm程下で検出された。1面直上に破砕した貝殻を多量に含む黄色粗砂が確認された。この砂は調査区南側の1区中央部（B－3グリット）付近で厚く堆積し幅4m程の帯状を呈し、北に行くにしたがって薄くなり2ライン付近で検出されなくなる。周辺部に比べ10cm程の高まりを見せる。この砂面より上から掘り込まれた遺構は、溝1（河川）上層及び土壙1で出土した遺物からみて検出された1面より新しく1面以降に構築されたものであるが、その後の削平によりこれらの遺構に伴う生活面は失われてしまっている。

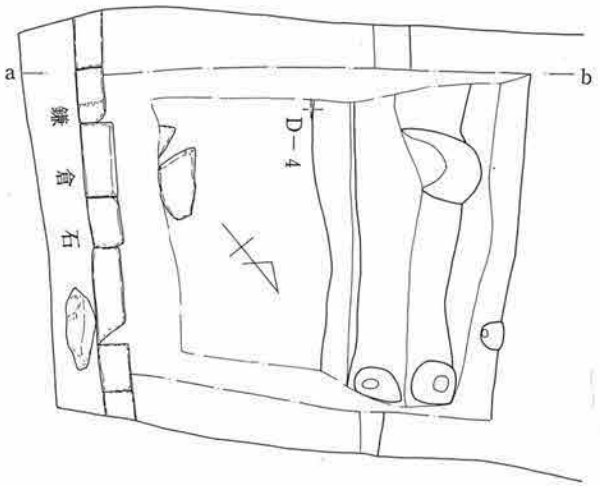
溝1（河川）（図5）

調査区東端、若宮大路際で検出された。検出された範囲は溝の西側の立ち上がりのごく一部分で、南北に4m程が確認されたにすぎない。溝上部は近・現代の溝と考えられる攪乱ですでに壊されており、調査区東端の溝覆土最上部には、断面が15×20～20×30cm程の長方形で、長さ30～65cmの鎌倉石の切り石による石列が、東面を揃えるように検出された。この切り石は現在も歩道の下を流れる暗渠が造られる以前の川の護岸の一部か、暗渠が造られた後の歩道の縁石の一部と思われる。近・現代の攪乱層の下層の溝覆土は大別して4時期に分けられ、中世から近世にかけて溝の存在が確認された。近世に於いては数回の掘り直しが認められ、近世覆土の最上部には多量の宝永火山灰がみられた。中世の溝覆土と考えられる部分はこれら近世の覆土の下で溝底のごく一部が確認されただけであるが、堆積土の様子から少なくとも2時期に分けられる。最も深い溝底の海抜は約1.6

A層
1：暗褐色粘質土　締まり無し
2：青灰色土
3：青灰色粘質土
4：青灰色砂質土
5：褐色粘土
B層
6：暗褐色土
7：茶味褐色粘土
8：褐色粘質土
C層
9：褐色土　宝永火山灰多量に含む
10：灰褐色　火山灰少ない
D層
11：茶味褐色粘質土　締まり無し
12：褐色土　火山灰少量含む
13：褐色土
14：灰褐色砂質土　締まり無し
15：茶褐色粘土　締まりよい
16：灰褐色砂質土　締まり無し
17：茶褐色粘土　締まりよい
18：灰褐色土
19：灰茶褐色土
20：灰褐色土
21：灰褐色砂質土
22：灰褐色土
23：黄灰褐色砂
24：灰褐色砂質土　締まりよい
25：灰褐色砂質土　締まりよい
26：黄褐色砂質土　小土丹、粗砂多く含む
E層
27：青灰褐色砂質土　締まりよい
28：青灰色砂層　小土丹、かわらけ片含む
29：暗褐色粘質土
F層
30：青灰色粗砂
31：暗青灰色砂　炭化物含む



下層



上層

図5　溝1（河川）

mであり、１面からの深さは1.5m程である。

溝１（河川）の全容は調査区外へ続くため不明と言わざるを得ないが、若宮大路修景計画に伴う発掘調査でも、本調査地点近くの若宮大路西側歩道のトレンチで同様の河川の堆積土が検出されている。しかしながら現在の車道部分のトレンチでは削平により川底付近まで攪乱されていて河川の東側の立ち上がりは確認されていない。このため河川の幅は断定できないが、少なくとも10mを越えると考えられる。また同調査では、河川の堆積は下馬交差点の南付近まで確認されている。

溝１の出土遺物は少なく、これだけで溝１の年代を考えることは難しいが、中世の堆積層から手捏ね成形のかわらけが出土しており少なくとも13世紀後半には存在していたと考えたい。

土壙１（図６）

溝１の西側、C－３グリットで検出された。確認面は１面直上に検出された黄色粗砂上面である。直径2.3mの円形を呈し、深さは検出面から60cm程で底部はほぼ平坦である。覆土は上部に小土丹と炭化物を多く含み、中程に西側から流れ込むように10～15cm程の炭化物の堆積がみられ、多量のかわらけが出土した。土壙１は１面より新しく、本来の掘り込み面は削平され、検出されなかったため本来の遺構の深さはわからないが、形状からごく浅い井戸の可能性も考えられる。出土したかわらけはやや薄手で器壁が内碗気味に立ち上がる轆轤成形の製品が多く、手捏ね成形の製品はほとんど含まない。本来の遺構構築面を削平されているため、土壙１に伴う時期の遺構はほかには確認出来なかったが、１面の遺構のうち柱穴等は遺物をほとんど含まず、ごく浅い掘り込みしか確認さ

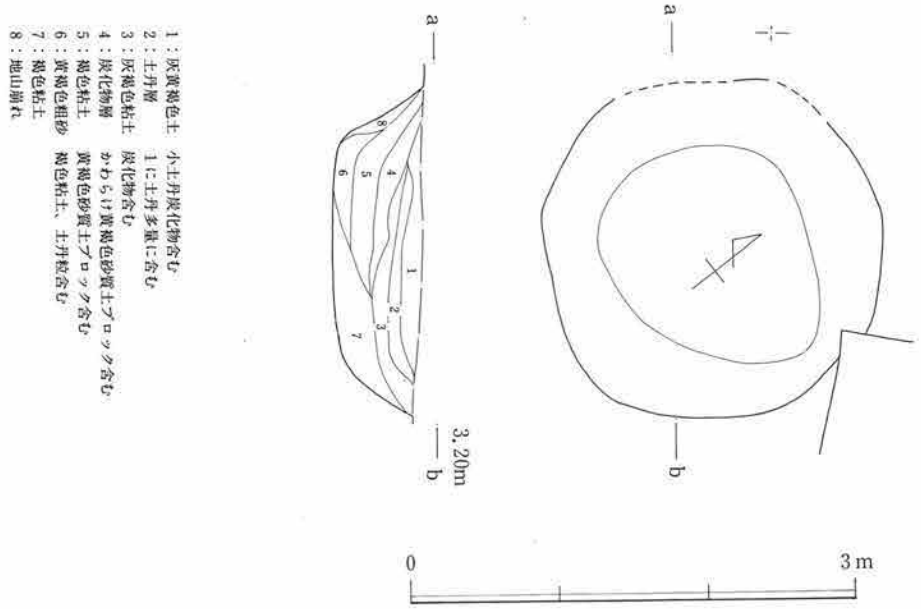


図６　土壙１

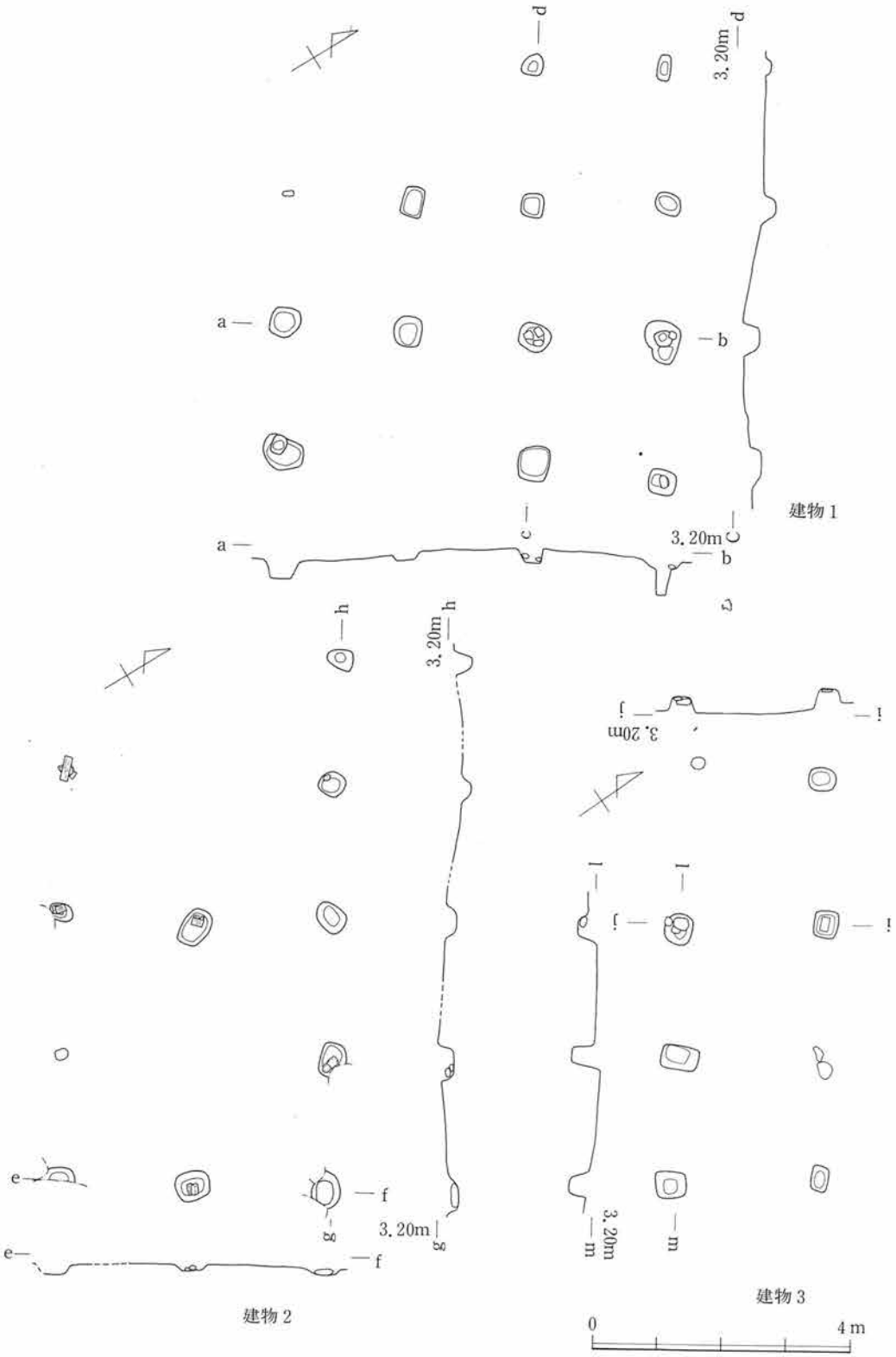


図7　建物1・2・3

れないものもあるため、土壙1に伴う時期の柱穴もあるかもしれない。

柱穴群（図7）

1面では1、2区を通じて100穴近くの柱穴が検出された。多くの柱穴は1溝（若宮大路）に平行もしくは直行する方向性をもっていると思われるが明瞭な規則性を見いだせるものは少ない。このうち3棟の建物が復元可能であるが、いずれも調査区外へ続くと思われ、また柱並びや柱穴の深さもやや不揃いなものを含み建物の全容は判然とせず、可能性を指摘する程度に止めたい。

建物1

1区から2区にかけて検出された。東西4間、南北4間以上と考えられる掘立柱建物で調査区外へ続く可能性が高い。東辺及び北辺の1列は、柱並びにやや規則性を欠き、さしかけ状の付属施設かも知れない。柱間は2～2.1mで、柱穴の掘り方は一辺50cm程の隅丸方形ないしは不整方形を呈し、深さは10～20cm程である。

建物2

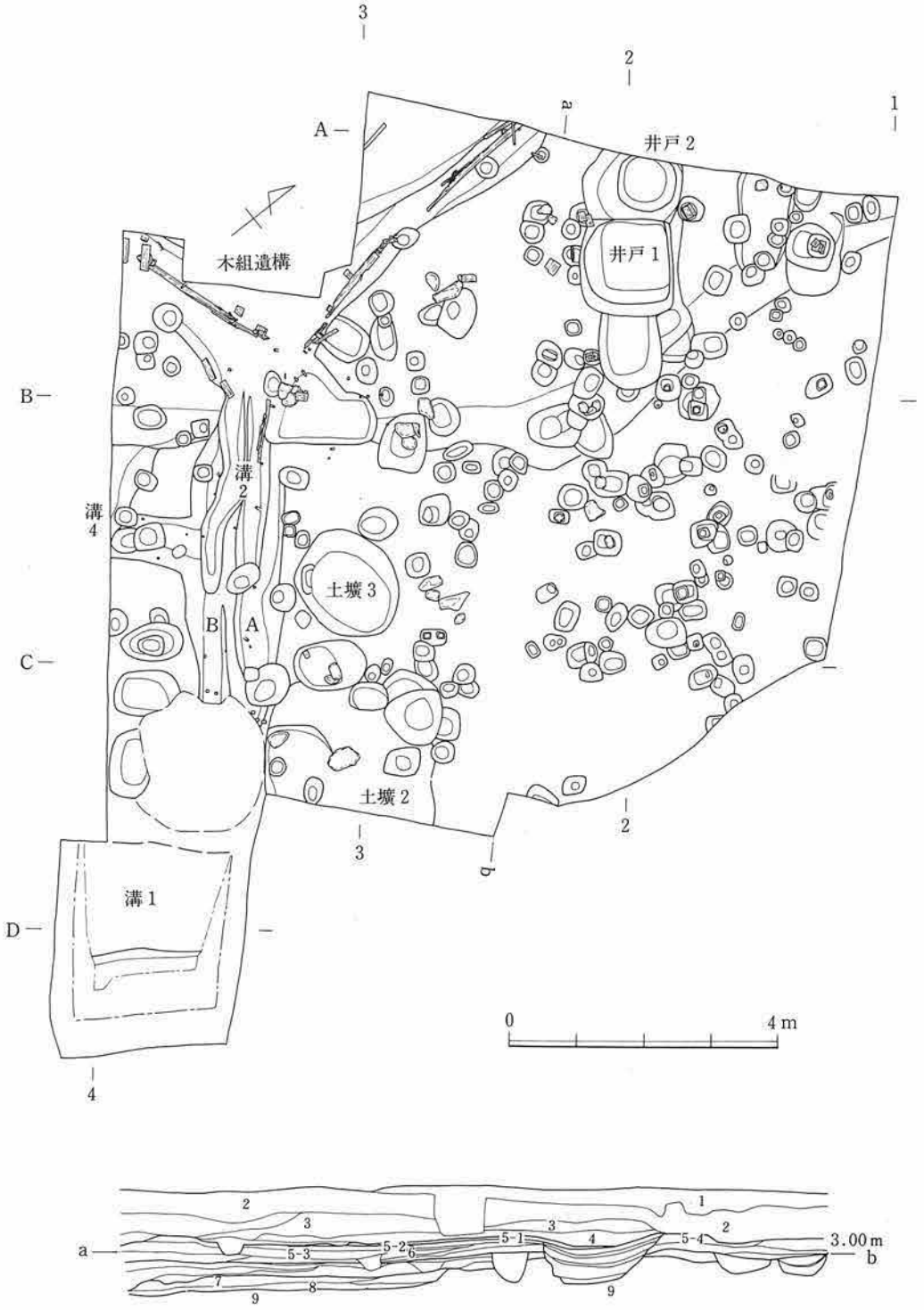
1区で検出された。掘立柱建物もしくは礎石建物と考えられる建物の北東側の部分で、東西4間、南北2間が検出され、さらに南側へ続くと思われる。柱間は東西、南北とも2.1mで一定している。柱穴の掘り方は一辺が40～60cm程の隅丸方形ないしは楕円形を呈し深さは確認面から10～15cmと浅く、柱穴内に礎石状の伊豆石や小さな割ぐり状の石が数個あるもの、礎板などが検出されたものが4穴ある。礎石の上面レベルは1面確認面とあまり差がなく、掘り方も浅いことを考えるとこの建物は削平を受けた上面の遺構の可能性も考えられる。

建物3

東西3間、南北1間が検出された。調査区内に南北に続く柱穴が検出されないためおそらく南北1間程度の小さな掘立柱穴建物と考えられる。柱間も南北2.1m～2.2m、東西2mと不揃いである。柱穴の掘り方は一辺30～60cm程の隅丸方形を呈し、深さは30～45cm程である。

(3)　2面の遺構（図8）

1面の下30～50cm程で確認された。2面へ掘り下げる途中、部分的に砂による整地層が検出され、人頭大の土丹や鎌倉石の散布がみられた。1面で浅い柱穴内に割ぐり状の鎌倉石や土丹の投げ込みが検出されていたため、これらと関連した遺構の可能性も含めて遺構の確認を行ったが石の分布にはっきりした規則性は認められず、また砂の整地層の範囲もごく部分的に確認されただけであった。新たな遺構の検出も少なく生活面とは認めがたいが、場合によるとごく短期間の生活面であったか



3
2
1
a
A
井戸2
井戸1
木組遺構
B
溝2
溝4
土壙3
B
A
C
土壙2
3
2
b
溝1
D
0
4m
4
2
1
3
3
2
a
5-3
5-2
6
5-1
4
5-4
3.00m
b
7
8
9
9

図8　2面遺構全測図

も知れない。２面は調査区東側がやや高く西に向かって緩やかに傾斜し、調査区西半では中世地山が20cm程削平されていてこれを東側の生活面レベルに合わせるように褐色粘土で埋めて２面を構成している。２面で検出された遺構は溝１に直行する東西方向の溝とこれに続く可能性がある木組遺構、土壙と多くの柱穴の外、今回の報告範囲外であるが２区で井戸が２基検出されている。

溝２

調査区の南、B－３～C－３グリットにかけて東西方向に約５m検出された。検出時の最大幅1.5m程で２条の溝が切り合うように検出され、土層観察により新旧２時期の切り合いが確認された。北側が新しく深さ30cm、掘り方上端で幅70cm、底部幅50cm程で溝底は小さな凹凸はあるがほぼ平坦である。南側の古い溝は新しい溝と切り合っていて北側の立ち上がりがはっきりしないがほぼ同規模の溝でろう。溝の東端は土壙１、西端は木組遺構と切り合っているため全容ははっきりしない。遺存状態はあまり良くないが細い角杭や杭の抜き取り痕が所々に残り、溝の西側には幅９cm、長さ１m程の横板が２枚検出された。本来は土止めとして横板をわたし所々細い角杭を打って止めた溝であろう。

溝４

溝２の南に直行するように検出された南北方向の溝で、南北に1.5m程検出されたがさらに調査区外へ続いている。幅は上端で70cm、溝底で30cm程で深さは30cm程である。溝底には東側に２ヶ所、西側に３ヶ所の杭の抜き取り痕が確認された。また溝２以北ではこの溝は検出されず、おそらく溝２と同規模で同じような構造をもつことから溝２と同時期に存在していたものであろう。溝１と溝２・４の関係については土壙１に切られていることもありはっきりしない。

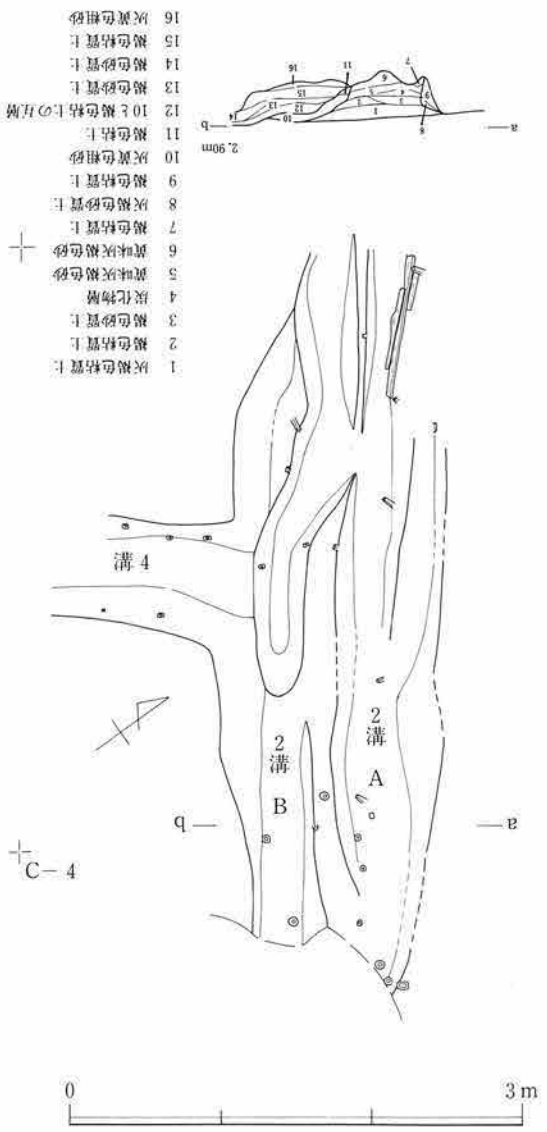
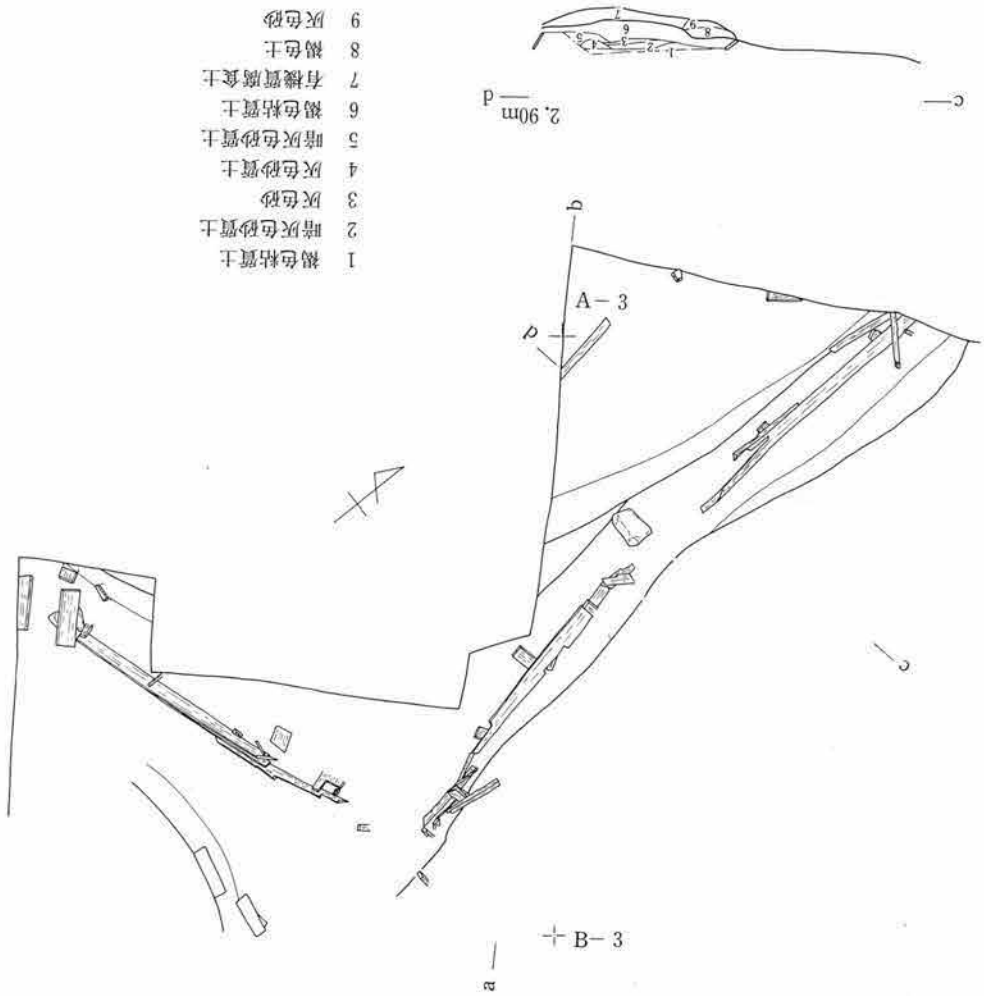


図９　溝２・４



1 褐色粘質土
2 暗灰色砂質土
3 灰色砂
4 灰色砂質土
5 暗灰色砂質土
6 褐色粘質土
7 有機質腐食土
8 褐色土
9 灰色砂

1 褐色粘質土（木片多い）
2 褐色粘質土
3 有機質腐食土
4 褐色粘質土
5 褐色土 （木片多い）
6 褐色粘質土
7 茶褐色粘質土
8 灰色砂
9 褐色粘質土
10 褐色粘質土
11 褐色砂質土
12 褐色土

0 3 m

図10 木組遺構

木組遺構（図10）

調査区の南西側に検出された。横板が南北に4.5m、これと直行するように2.4m程検出された。溝2同様遺存状態は悪く、かなり腐食が進んでいる。木組の南辺は上層からの掘り込みや試掘壙、軟弱な堆積層も重なって木組に伴なう掘り込み等ははっきりしなかったが、これに直行する北辺の木組は2面（確認面）から深さ30cm程の掘り方が確認された。横板は細い角杭、もしくは横板と同様の板材を杭として、西側および北側へ倒れるのを防ぐように不規則に打たれている。北辺南北方向の横板の南1.4mの所にこれと平行する横板の一部が確認され、両者の間の覆土は木片を多く含む軟弱な有機質腐食土が多く堆積している。遺構の大半が調査区外に続くためこの木組遺構の性格は判然としないが、前述の構造等から考えて溝の一部と考えたい。いずれにしても溝1及び溝2等とは方向性が大きく異なり、北辺南北方向の横板は溝2から40度程北に振れ、ほぼ磁北と一致している。今回の調査で検出された遺構のうち、柱穴に関しては規則性がはっきりしないものも多く断定は難しいが木組遺構と同方向の軸をもつものはない。溝1から7～8m程の位置になる。

本調査地点に最も近い「御成町868番地点」（本調査地点の西60～70m程に位置している）で検

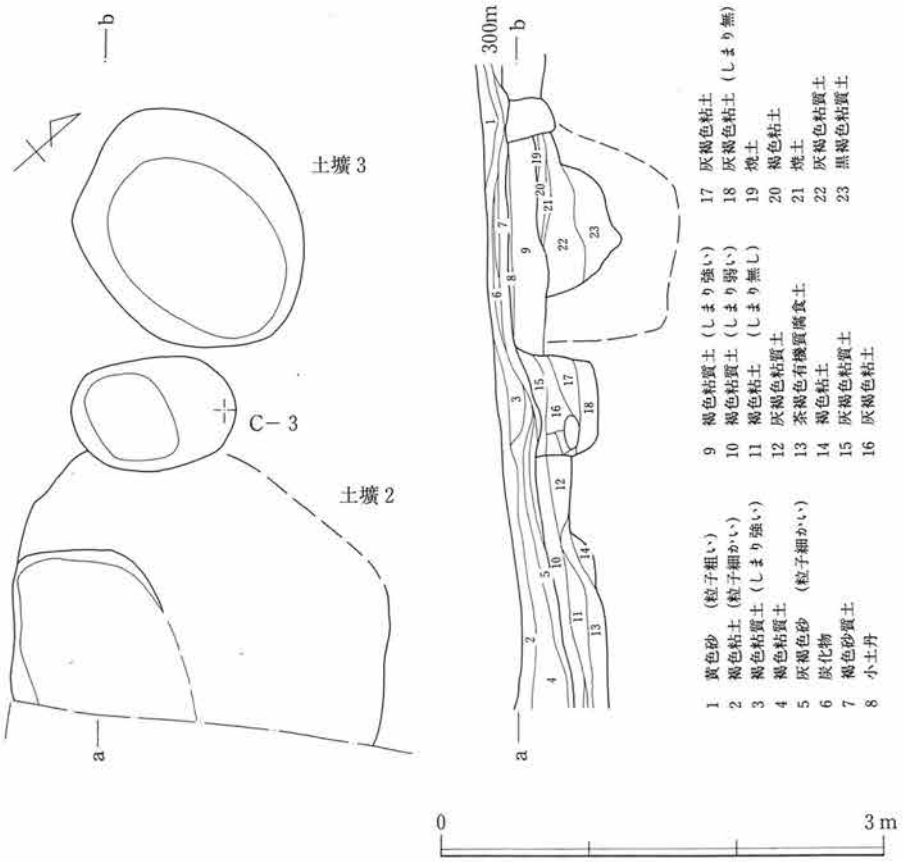


図11 土構 2・3

出された道路や溝、建物等は若宮大路の軸方向と異なり、本遺跡の木組遺構と同じ方向性をもっている。またこれより西に位置する「今小路西遺跡」や北西に位置する「千葉地遺跡」や鎌倉駅西側の調査などに於いても若宮大路と異なる方向性をもつ遺構が数多く検出されている。本調査地点の木組遺構は調査区の西端で検出され、これ以西は調査区外であるためはっきりしないが、このあたりから西にかけて方向性が大きく変化している可能性が高いと思われる。

土壙２（図11）

１区調査区東端北寄り、C－３グリット付近で検出された。東側は調査区外へ続くため全容は不明であるが、南北2.5m、東西2.0m以上の円形に近い掘り方で土壙の壁はなだらかで、深さは確認面から40～50cm程である。土壙の覆土は茶褐色の有機質腐食土が底部に15cm程堆積し、褐色及び灰褐色粘質土が堆積するが、いずれも締まりが無く炭化物や砂を多く混入している。掘り込み面は他の遺構と切り合いが多く、判然としないが２面地山面よりやや高く、しかも完全に１面構成土が覆っていることから２面掘り下げ途中で検出された部分的な砂の整地層に伴う時期かも知れない。

土壙３

溝２の北、土壙２の西側B－３グリットで検出された。直径1.4～1.8mやや東西に長い楕円形を呈し深さは80cm程である。覆土は灰褐色及び黒褐色の粘質土で、最上部に焼土の堆積がみられた。土壙２より古く地山直上からの掘り込みであるが遺物はほとんど出土していない。

柱穴

２面では１、２区を通じて約150穴の柱穴が検出された。１面に比べ掘り方もしっかりしているが、溝２、溝４及び木組遺構と切り合っているものも多く規則性を見いだせるものは少ない。１列もしくはＬ字状に並ぶものはあるが、その間隔も不規則なものがほとんどである。柱穴の密度は１区北端から２区にかけて多く２溝や木組遺構を一つの区画の境として主体部はこれより北に寄っていると思われる。

(3) 古代の遺構（図12）

古代の調査は、２面土壙３の調査時に土壙壁に青灰色砂を掘り込み黒褐色粘質土を覆土とした落ち込みが認められたため、土壙３を中心に遺構の広がりを確認したが、遺構の掘り方が深く山留め等の強度の点から調査区全域を調査出来ないため、４×３m程のトレンチを設定し古代の遺構の確認を行う事にした。またこのトレンチから溝１にかけて幅50cm程のトレンチを設け、溝１（河川）に関連した中世地山の立ち上がりの確認も合わせて行った。２面を構成する中世地山の褐色粘質土を30～40cm掘り下げるとトレンチ西側では青灰色砂が認められたが、黒褐色土の覆土の堆積は予想

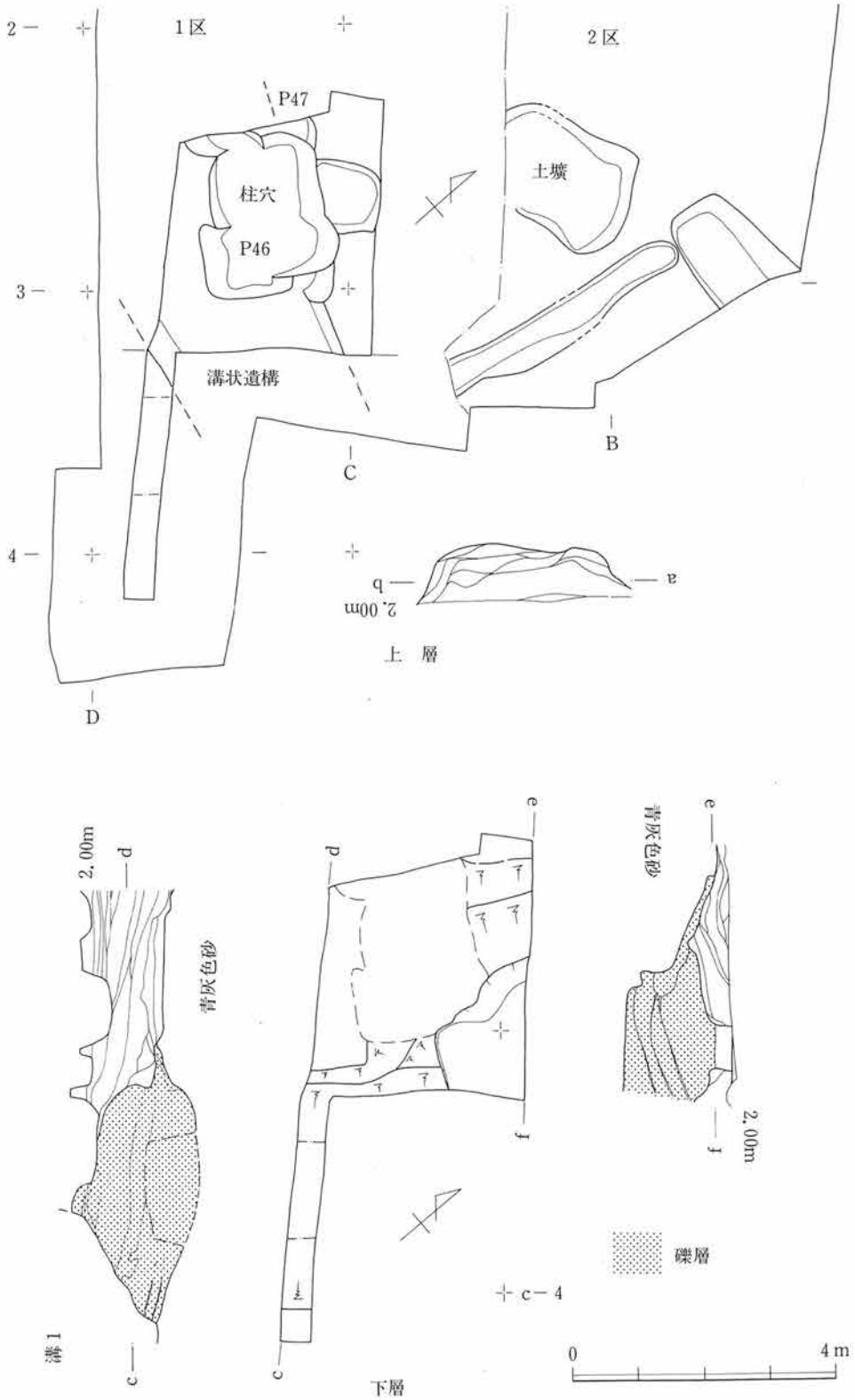

1区
2区
P47
柱穴
P46
土壙
溝状遺構
2
3
4
B
C
D
a
b
2.00m
上 層
2.00m
d
青灰色砂
e
f
c
溝1
下層
c－4
礫層
0
4 m

図12　古代遺構全測図

以上に広がり、トレンチの大半が遺構覆土であったためこれをすべて掘り上げた。

溝状遺構

幅が掘り方の上端で2.7m、底部で、2.0m程で、深さは確認面から1m程である。さらに東西方向に続くが調査面積も狭く、溝と断定するには疑問が残る。底部の海抜は1.4mである。遺構覆土は上部に褐色粘土と青灰色粗砂の薄い堆積層が互層をなし、その下は褐色及び黒褐色粘土が堆積している。溝状遺構の底部付近から最も多く遺物が出土している。

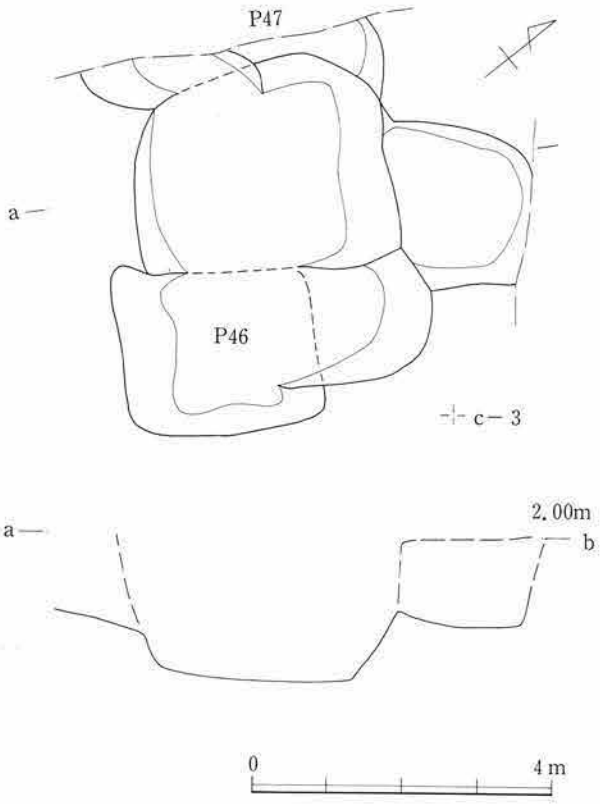


図13　古代柱穴

柱穴

大半を溝状遺構に切られるため柱穴の規模ははっきりしないが、一辺1.3～1.7m程の方形の掘り方を呈し、3ないし4穴切り合った状況で検出された。深さは確認された最も残りの良い部分で91cm程ある。この遺構を柱穴とするには柱痕や柱穴の並びなどが確認されておらず定かではないが、掘り方の規模は今小路西遺跡で検出された官衛遺構に伴う柱穴の規模に比べてほぼ同規模の掘り方であり、かなり大きな掘立柱建物の存在が疑われる。遺物は溝状遺構に切られていることもあり須恵器の小片が数点出土したにすぎない。

古代遺構以前の土層堆積

溝状遺構の北側壁は西側部分は青灰色砂であったが、東側は水磨した指頭大から数センチ大の土丹が厚く密に堆積し、その中程に薄く数層の植物遺体を含む有機質腐食土がみられたため、これを青灰色砂まで掘り下げた。青灰色砂はトレンチ東に向かって落ち込んで行き、溝1（河川）の西側で立ち上がり始めるが1溝によって上部は切られているため全容はわからないが深さは最大1.5m程である。遺物はなく時期は不明であるが溝状遺構及び柱穴群に先行するある時期に自然水路があったと考えられる。

第四章　出土した遺物

今回の調査で出土した遺物は、１・２区を合わせ収納箱にして約60箱程であるが、かわらけが大半を占める。出土した遺物のうち遺構に伴うものは遺構単位にまとめ、包含層及び面上に広がる遺物については各面単位にまとめ、必要に応じて出土場所を明記した。また調査区を二分しているため包含層及び面上に広がる遺物等に関して、図示した遺物の数量的な点については必ずしも実際の出土量を反映していないところもある。

(1)　Ⅰ面の遺物

溝１（河川）出土の遺物（図14）

溝１から出土した遺物はごく少なく、しかも小片が多いため図示出来るものは僅かであった。調査した部分も狭く堆積層ごとに遺物をとりあげたため記述もそれに従っている。ちなみにＡ・Ｂ層は近・現代の堆積層、Ｃ・Ｄ層は近世の堆積層、Ｅ・Ｆ層は中世の堆積層である。

１～４まではＡ・Ｂ層の出土遺物である。

１はかわらけ。体部中程やや上に撫での境目がつき、下部は強い撫でで凹む。端部は丸くおさまり、内面は内湾している。胎土は素地に微細な雲母を多く含み赤灰色を呈し、割れ口はザックリしている。口径11.6cm、底径7.8cm、器高3.0cm。

２は青磁鎬蓮弁文碗。釉は不透明の緑色を呈し、胎土は白色で堅緻である。

３は瀬戸の盤。外面は底部、体部ともにへら削り、内面は三条の沈線が巡る。胎土は黄灰色を呈し、割れ口は砂っぽい。

４は灯明皿。内面と口縁の外側に鉄釉が施されている。外面は細かいへら削りで調整している。

５～７はＣ層の遺物である。

５は手捏ね成形のかわらけ。口端部はやや丸みを帯びた縁帯状になり、内側は少し肥厚する。砂粒が多いが硬く焼き締まり、淡赤灰色を呈する。復原口径12.3cm。

６は山茶碗。砂粒を多く含み、青灰色を呈する。轆轤の回転方向は時計廻り。口端部に若干の降灰がみられ、割れ口はザックリした感じ。

７は瓦質手焙り。内外面は撫で調整、口端部は円弧に沿ってへら磨きが施される。

８～12まではＤ層の出土遺物である。

８は小型の轆轤成形のかわらけ。大きく外反する体部、口端部は丸く収めている。胎土は気泡が入り粗く赤灰色を呈する。口径6.7cm、底径5.2cm、器高1.7cm。

９は白磁口兀皿。胎土は白色の素地に黒い細かな粒が入る。小片のために口径等は不明。

10は瓦質碗。胎土は素地に砂粒を多く含んでいる。小片のため口径等は不明。

11は瓦質の無頸壺か。細片のため口径等不明。

12は常滑甕の底部片。外面に指頭による撫で、内面に自然釉がみられ、底部は砂底である。

13～19まではＥ層の出土遺物である。

13は轆轤成形のかわらけ。体部中程から口縁にかけて外反し、端部は丸く収めている。胎土は粉質の素地に細かな気泡が多く入り粗い。底面には糸切り痕とスノコ痕が入る。口径10.3cm、底径6.2cm、器高3.0cm。

14は轆轤成形のかわらけ。厚めの器壁で器高も低いようである。内面に仕上げ撫でが見られる。口径10.6cm、底径７cm、器高2.6cm。

15は青磁碗。内外面に不透明な緑釉を施している。小片のため口径等は不明。

16は山茶碗。きめ細かい灰白色の胎土で堅緻。内面と口縁周辺の外面に釉がかかる。小片のため口径等は不明。

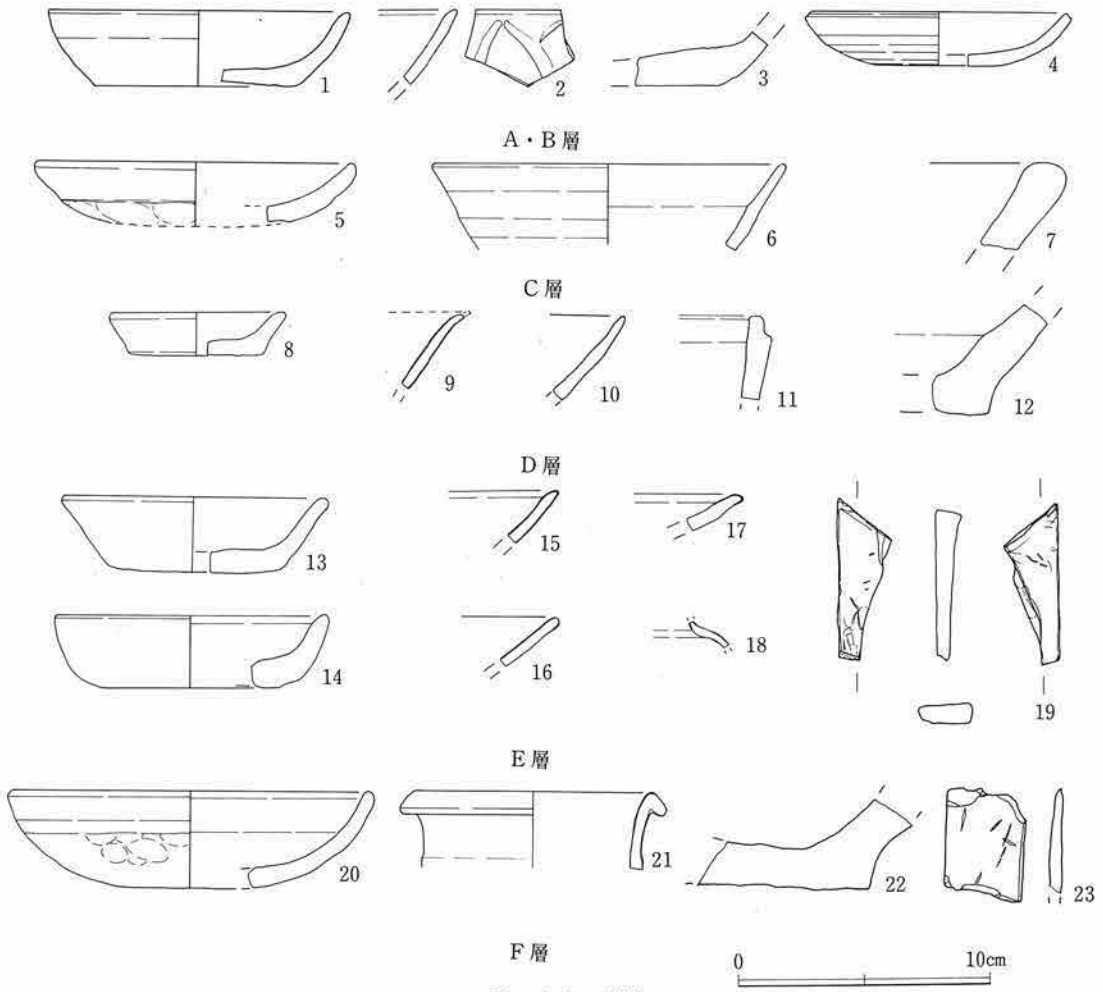


図14　溝１出土の遺物

17瀬戸の小皿か、碗。口縁の内外面に釉を施している。胎土は黄灰色。

18は瀬戸の小壺か水注細片。外面に淡緑色の釉を施す。

19は砥石片。淡黄灰色を呈す粘板岩。目が細かいところから中砥と思われる。

20～23まではＦ層（最下層）の遺物である。

20は手捏ね成形のかわらけ。指頭と撫での境目が不鮮明で側面観は丸い。胎土は気泡の入る粗い素地で、灰褐色を呈する。口径13.6cm、器高3.6cm。

21は白磁四耳壺の口縁～頸部片。灰白色の胎土に透明な釉が内外面に施されている。口径9.3cm。

22は常滑甕の底部片。底部は砂底、内面に僅かに自然釉がかかる。

23は砥石片。暗灰色を呈す粘板岩。表面に研ぎ傷がみられ、目が細かいところから中砥と思われる。

土壙１出土の遺物（図16）

１～36まではかわらけである。この内１～23までが小型の轆轤成形の製品、24だけが手捏ね成形の製品である。小型の轆轤成形の製品の口径は９cm未満までに皆収まってしまい、器高もほぼ２cm付近に集中する。底径は若干のばらつきが見られるが、５cm内外にかたまっている。底径の小さい21、器高の低い22、立ち上がりに丸みの少ない23などは混入している可能性がある。24は手捏ね成形なので混入品と思われる。大半の胎土は砂などの混和は少ないものの素地は細かい気泡が入る。焼成は比較的良く、全体にやや赤みがかった灰黄褐色を呈す。

25～36までは轆轤成形の大型の製品。口径からみて11cm前後と13cm前後に分けられ、いわゆる中型品と大型品の分類分けが出来る。器壁は比較的薄く、胎土も小型品に似て砂が少なく硬く焼き締まり、赤身の強い淡黄褐色を呈す。

37は常滑の甕口縁部片。小片のため口径は不明。頸部から強く外側に外反させた口縁の端部は丸く収

図	番号	口径	底径	器高
16	1	7.3	4.9	1.8
16	2	7.4	5.1	1.8
16	3	8.1	5.9	1.9
16	4	7.2	5.2	1.8
16	5	7.6	5.1	1.9
16	6	7.4	4.9	2.0
16	7	8.2	5.2	2.0
16	8	8.0	5.2	1.7
16	9	7.6	4.6	1.8
16	10	7.6	4.2	2.0
16	11	7.3	4.6	2.0
16	12	7.6	5.0	2.0
16	13	8.1	5.0	1.9
16	14	8.0	5.2	2.1
16	15	7.9	5.5	2.0
16	16	7.6	5.5	1.9
16	17	7.3	5.0	1.9
16	18	8.0	5.2	2.0

図	番号	口径	底径	器高
16	19	8.0	5.2	1.9
16	20	8.0	5.7	2.1
16	21	7.3	4.2	1.9
16	22	7.4	4.6	1.4
16	23	7.8	5.4	2.0
16	24	8.5	－	1.6
16	25	10.2	6.6	2.9
16	26	12.2	7.1	3.5
16	27	12.4	6.6	3.5
16	28	11.0	6.0	3.2
16	29	11.4	5.9	3.7
16	30	13.4	8.6	3.5
16	31	11.0	7.0	3.1
16	32	11.4	5.9	3.6
16	33	13.5	8.6	3.8
16	34	11.0	5.2	3.3
16	35	11.6	6.2	3.5
16	36	12.9	8.0	3.6

(cm)

表１　かわらけ法量表１（土壙１）

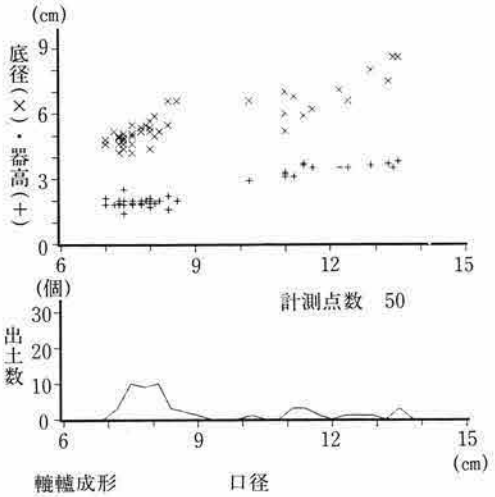


図15　かわらけ法量分布図１（土壙１）

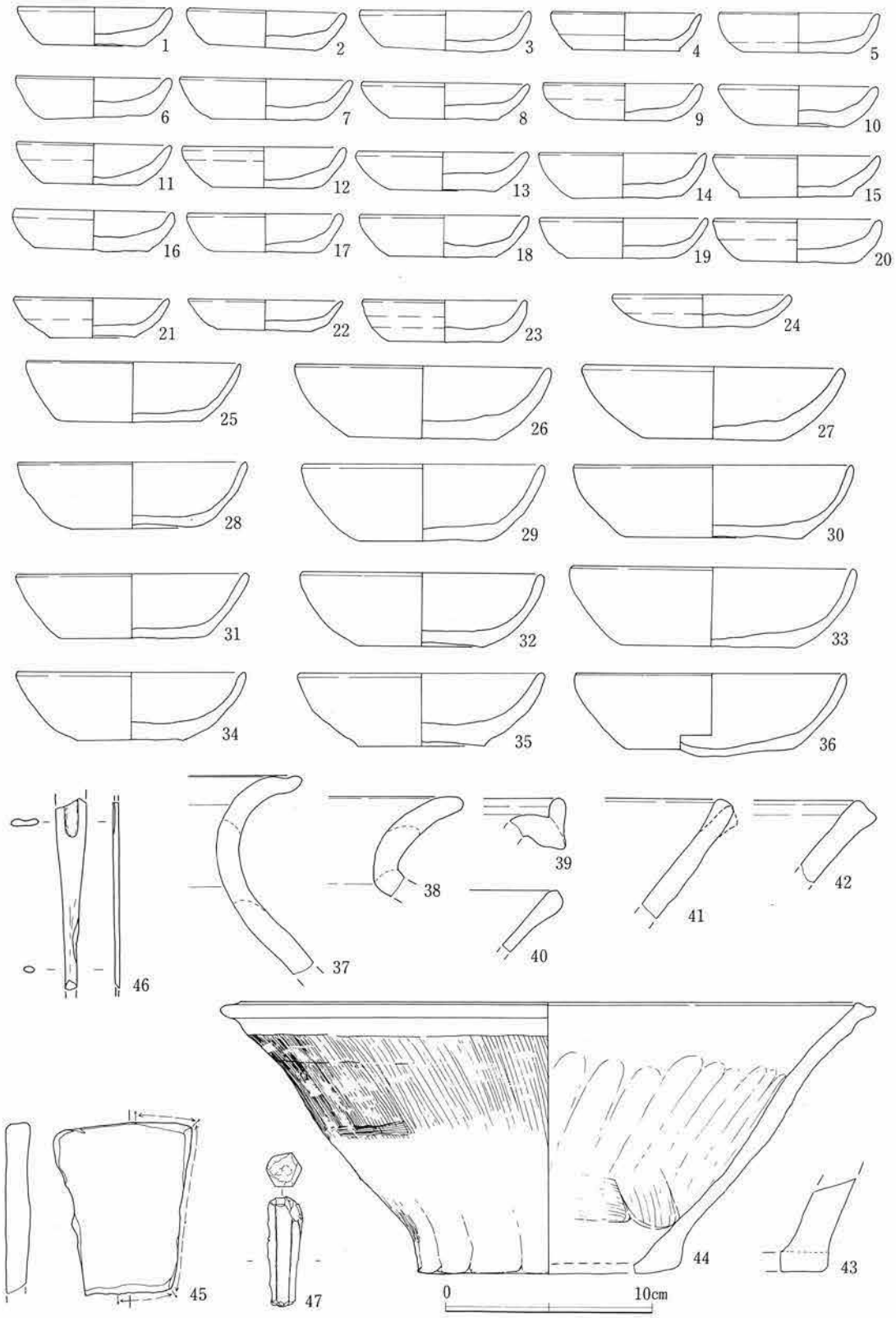


図16　土壙１出土の遺物

められ、内側に沈線状に一条の窪みが口縁を巡る。口縁から頸部にかけて自然釉が厚くかかる。

38は渥美甕の細片。口縁端部は丸く収められ、内外面に刷毛塗りの釉がみられる。

39は常滑甕のN字状口縁細片。

40は山茶碗窯系の捏鉢細片。砂粒の多い素地で淡青灰色を呈する。

41・42は常滑捏鉢の口縁部細片。共に片口部分。

43は常滑甕の底部細片。気泡が多く粗い胎土で淡赤灰色を呈する。

44は常滑捏鉢の口縁～底部片。僅かに片口部が残っているが図示はしていない。底部は砂底。外面下部はへら状工具での撫で上げ、上部は粗い刷毛の後に撫で消し。内面にも指頭による撫で上げがみられる。口縁端部は強い撫でにより面を成し更に外側に引き出されている。口径29.5cm、底径12.5cm、器高13.2cm。

45は常滑捏鉢の小片。長辺8cm、短辺約6cmの長方形に二次加工した製品。用途不明。

46は骨製笄。両端部を欠損する。残存長9cm。

47は水晶。長さ5.4cm、幅1.4cm。全体に傷が多いが透明度の高いものである。未製品。

(福田　誠)

I面上の出土遺物　(図17)

1、3～11は青磁、3～7は劃花文碗。2は白磁である。

1は櫛描文碗の体部。釉は明緑灰色。素地は明灰色を呈し、ややしまりが弱い。微細の砂粒を少量含む粗胎から成る。同安窯産のものか。

2は白磁碗。釉は緑白色で透明。素地は灰白色でやや締まりが悪く粗胎。

3の釉は明緑灰色透明。素地は明灰色を呈し、比較的精良な胎土から成るが、ややしまりが弱い。

4の釉は明緑灰色。素地は明灰色を呈し、緻密。胎土はごく精良である。

5の釉は青灰色透明。素地は明灰色でごく精良な胎土から成るがややしまりが弱く、細かい気泡を生じている。復元口径16.8cm。高台部を欠く。

6の釉は暗緑灰色透明。素地は暗灰色を呈し比較的精良な胎土から成るがややしまりが弱い。

7の釉は黄灰色で透明。素地は明黄灰色でしまりが弱い。胎土は比較的精良である。底径6.4cm。

8は蓮弁文碗。釉は暗緑灰色で透明。素地は明灰色を呈し緻密。精良な胎土から成る。

9は櫛描文皿。釉は明緑灰色透明。素地は明灰色で緻密。比較的精良な胎土から成る。体部中央から口縁にかけての立ち上がりが比較的直線的であり、龍泉窯産の製品と思われる。

10は碗の口縁部小片。内体部に一条の沈線をもつ。口縁部及び沈線は茶褐色に発色しているが、釉は緑灰色を呈し、透明。素地は明灰色。胎土は精良であるがしまりが悪く、気泡が生じている。

11は碗の口縁部小片で、輪花を呈するもの。釉は青灰色で不透明。素地は明灰色を呈し緻密で、胎土は精良である。

12は白磁口兀皿の口縁部小片。釉は淡水青色で素地は濁白色を呈する。胎土は精良で緻密。

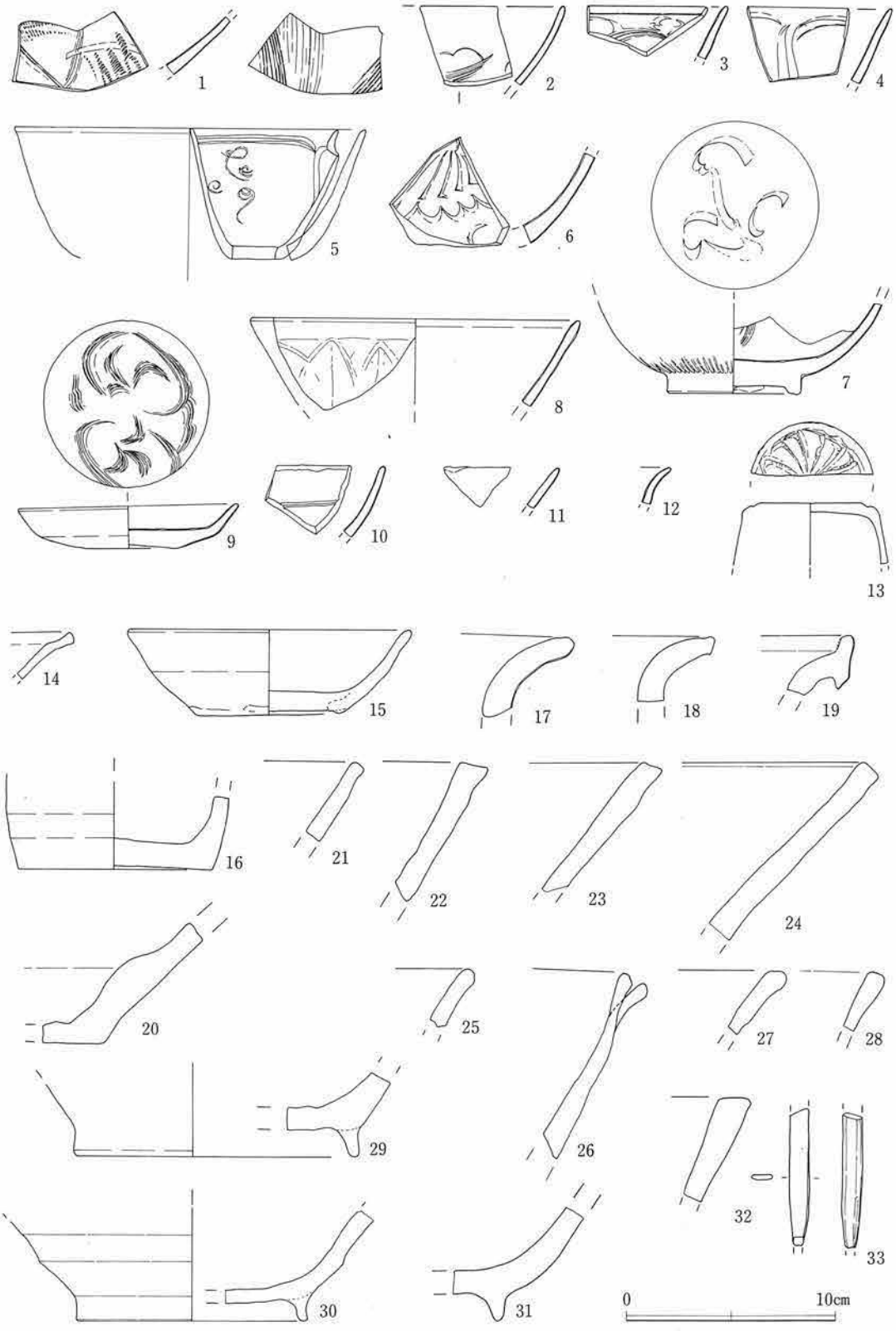


図17　1面出土の遺物1

13は青白磁梅瓶蓋。上面の菊花様の文様は粗く削り出されている。釉は不透明な水青色。素地は灰白色で比較的緻密。胎土は精良である。

14は瀬戸、折縁皿と思われる口縁部小片。釉は灰釉の刷毛塗りである。素地は明灰色を呈し緻密。ごく精良な胎土から成る。

15は山茶碗。ごく浅い高台が粗雑にはり付けられており、籾殻痕がわずかに残る。底部には回転糸切り痕が明瞭に認められる。焼成がきわめて弱く、軟質で全体に灰白色を呈ししまりが悪い。胎土は比較的精良である。口径13.4cm、底径6.8cm、器高4.1cm。

16は瀬戸。壺の底部と思われる。体外部には薄く施釉され、部分的に緑灰色を呈する。素地は灰白色で緻密。胎土はごく精良だが2～5㎜大の長石をわずかに含む。内底部には降灰釉がわずかに付着する。底径9.2cm

17は渥美の甕の口縁部小片。表面は暗緑茶褐色を呈し、刷毛塗りによる施釉である。素地は暗灰色で、やや粗い石粒を含む砂っぽい胎土から成る。

18・19は常滑の甕の口縁部。18は表面は暗褐色を呈する。長石粒を含む粗い胎土から成り緻密である。19は口縁部を上下に広げて、縁帯状につくったもの。表面は暗緑茶灰色を呈する。粗い砂粒を多く含む胎土から成り、ややしまりが悪い。

20は常滑の甕の底部。精良な胎土から成りごく緻密である。下体部は横撫でで成形されている。

21～24は常滑捏鉢の口縁部。21は丸味をもつ口縁部で外面部に強い撫でが巡る。胎土はごく精良で緻密であり、明灰色を呈する。22は1mm大の長石粒を多く含むやや粗い胎土から成り、堅緻。口縁部の断面は四角形に近く、口縁外面に強い撫でが巡る。23も口縁の形態はこれに近い。胎土は細かい長石粒を多く含む粗いもので、堅緻である。24は2㎜～4㎜の粗い長石粒を含む砂っぽい胎土から成り、ややしまりが弱い。内体部は弱い摩滅が認められる。

25～31は山茶碗窯系捏鉢、胎土はいずれも粗い長石、石英粒を多く含む砂っぽいもの。26・29・30・31は内面はかなり摩滅している。

32は手焙り。鉢形のものと思われ、瓦質。素地は赤灰色を呈し緻密である。口縁部上面から外体部にかけてクスベ状に黒灰色を呈する。

33は骨角製品。笄と思われるが両端部を欠く。裏面は平らに比較的丁寧に削られている。

（菊川　泉）

I面出土のかわらけ（図18・19・20・21）

1区1面から出土したかわらけは収納箱にして15箱余りである。1面包含層及び1面遺構検出面直上のものを含めている。計測可能なものが214点（このうち図示したもは130点）である。

図18は轆轤成形の製品、図19は法量分布図。図20・21は手捏ね成形の製品である。

轆轤成形の製品に関してはやや粗い雲母粒を含む胎土で焼成のやや弱いものが多くみられ、色調は赤灰色、ないしは明茶灰色を呈する。器形は比較的浅型で、器壁が厚く、口縁部は丸みを持つ。

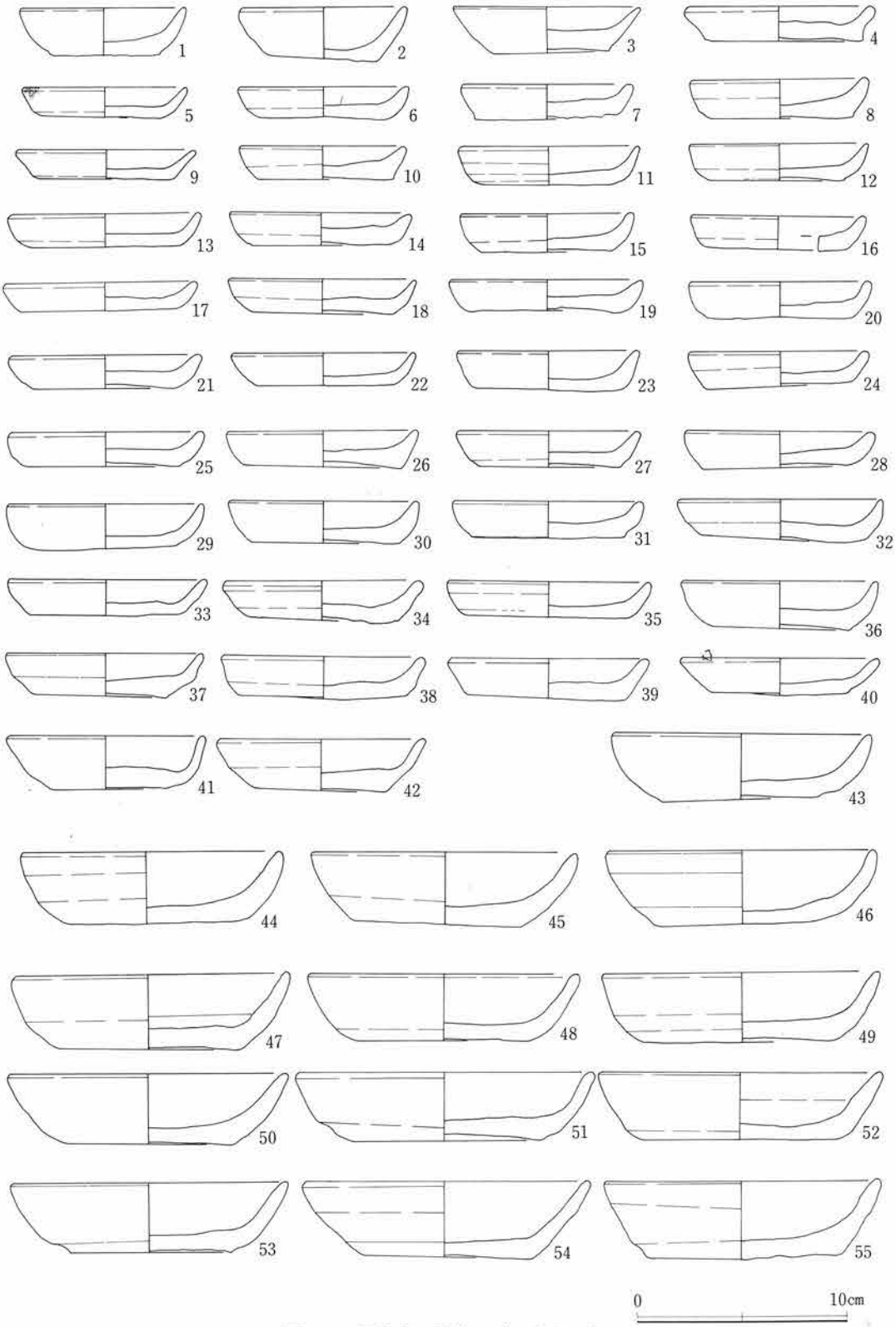


図18　1面出土の遺物2（かわらけ）

手捏ね成形の製品は、図20－18・22・27・30、図21－3・28・34のように浅型薄手で口縁部外周に強い撫でが施され縁帯状になるものと見られるが、大半は器壁が厚く口縁部が舌状に細くなるものが多い。体部下部の指頭痕と上部との境目の撫でが比較的弱く、底部は丸味を持ちやや深型といえるもので、精良な胎土に黒雲母粒を含み、淡褐色を呈し焼成もやや弱い。

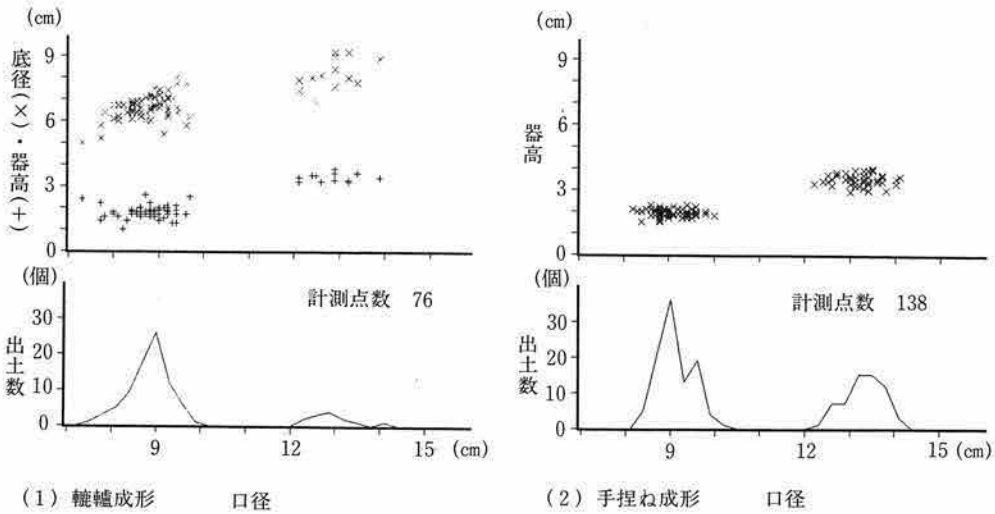
これら1面出土のかわらけの法量を概観するならば、小型轆轤成形の製品は、口径9㎝前後、底

図	番号	口径	底径	器高
19	1	7.7	5.2	2.2
19	2	7.3	5.0	2.4
19	3	8.8	6.5	2.2
19	4	8.8	7.2	1.6
19	5	7.7	5.8	1.4
19	6	8.1	6.0	1.6
19	7	8.0	6.7	1.7
19	8	8.4	6.7	1.9
19	9	8.3	6.4	1.4
19	10	7.8	6.4	1.6
19	11	8.4	6.1	1.9
19	12	8.4	6.5	1.8
19	13	8.8	7.1	1.6
19	14	8.6	6.4	1.6
19	15	8.0	6.1	1.8
19	16	8.1	6.7	1.6
19	17	9.0	7.4	1.4
19	18	8.2	6.7	1.0
19	19	9.1	6.9	1.5

図	番号	口径	底径	器高
19	20	8.4	6.8	1.7
19	21	8.9	6.8	1.6
19	22	8.6	6.6	1.6
19	23	8.5	6.9	1.8
19	24	8.4	6.9	1.8
19	25	9.0	7.2	1.7
19	26	8.9	7.5	1.7
19	27	8.5	6.7	1.8
19	28	8.9	6.7	1.8
19	29	9.2	6.6	2.1
19	30	8.9	7.1	1.9
19	31	8.8	7.2	1.9
19	32	9.6	7.7	1.7
19	33	9.3	7.0	1.3
19	34	9.2	7.1	1.9
19	35	9.4	7.7	1.7
19	36	9.2	6.6	2.1
19	37	9.2	6.3	2.0
19	38	9.4	8.0	2.1

図	番号	口径	底径	器高
19	39	9.2	7.4	1.9
19	40	9.2	6.5	1.8
19	41	9.1	5.4	2.0
19	42	9.7	6.2	2.5
19	43	12.1	7.4	3.2
19	44	12.1	7.9	3.4
19	45	12.4	8.0	3.5
19	46	12.5	6.9	3.5
19	47	12.9	8.4	3.6
19	48	12.6	8.1	3.2
19	49	12.9	9.0	3.3
19	50	13.2	8.0	3.3
19	51	13.9	8.9	3.4
19	52	13.2	9.2	3.2
19	53	12.9	7.6	3.3
19	54	13.4	7.8	3.6
19	55	12.9	9.2	3.8

かわらけ法量表2



（1）轆轤成形　口径　　（2）手捏ね成形　口径

図19　かわらけ法量分布図2（1面）

図	番号	口径	底径	器高
20	1	8.7		2.1
20	2	8.2		2.1
20	3	8.6		2.1
20	4	8.4		1.5
20	5	9.5		2.1
20	6	9.3		1.7
20	7	8.5		2.1
20	8	9.3		1.9
20	9	8.4		2.0
20	10	8.3		2.0
20	11	8.8		1.9
20	12	8.8		1.5
20	13	8.9		2.0
20	14	9.2		1.9
20	15	9.5		1.7
20	16	8.7		2.0
20	17	9.0		2.1
20	18	9.4		2.0
20	19	9.3		2.1
20	20	8.7		2.1
20	21	9.5		2.1
20	22	9.0		1.9
20	23	8.8		2.2
20	24	8.7		2.0
20	25	8.8		2.1
20	26	8.9		1.8
20	27	9.4		1.9
20	28	9.8		1.9
20	29	9.6		1.9

図	番号	口径	底径	器高
20	30	9.2		2.1
20	31	8.7		1.8
20	32	9.5		1.7
20	33	9.4		1.7
20	34	8.8		2.0
20	35	8.6		2.3
20	36	9.1		1.9
20	37	8.6		1.8
20	38	8.9		2.1
20	39	8.9		2.0
20	40	9.2		1.9
20	41	9.1		2.2
20	42	8.8		2.0
20	43	8.6		1.8
20	44	9.0		1.8
20	45	8.7		2.0
20	46	8.8		2.0
20	47	7.0		3.4
20	48	13.7		3.6
20	49	13.1		3.4
20	50	13.4		3.6
20	51	12.4		3.4
20	52	13.3		3.1
20	53	12.6		3.2
21	1	12.2		3.3
21	2	13.1		3.9
21	3	12.9		3.8
21	4	13.1		3.6
21	5	13.4		3.0

図	番号	口径	底径	器高
21	6	13.4		3.9
21	7	13.0		3.5
21	8	12.5		3.4
21	9	14.1		3.6
21	10	13.1		3.4
21	11	12.6		3.5
21	12	13.0		3.3
21	13	13.5		4.0
21	14	13.1		3.2
21	15	13.4		3.6
21	16	13.4		3.4
21	17	13.7		3.6
21	18	13.0		3.5
21	19	13.6		3.5
21	20	13.0		3.5
21	21	13.7		3.7
21	22	13.7		3.6
21	23	13.4		3.3
21	24	13.0		3.6
21	25	13.6		3.5
21	26	13.0		3.6
21	27	13.6		3.4
21	28	13.3		3.9
21	29	13.3		3.7
21	30	13.3		3.5
21	31	13.7		3.7
21	32	13.8		3.0

かわらけ法量表3

径は6～7.5cm、器高2cm前後に集中し、大型轆轤成形の製品は、個体数が少ないが概ね口径13cm前後、底径8cm前後、器高3.2～3.5cm辺りに集中する傾向がみられる。小型手捏ね成形の製品は、口径9cm前後、器高2cm前後に集中。大型手捏ね成形の製品は口径13～14cm、器高3～4cm辺りに集中する。1面と2面のかわらけを比べると轆轤成形の製品では、口径はほぼ9cmと同じだが1面の方が2面のものに比べ器高が高い。また2面で多く見られる静止糸切り痕は1面では見られない。胎土も砂が少なくなり焼きも甘くなる傾向がある。手捏ね成形の製品では小型の口径は9cmとほぼ同じだが、大型品の口径は2面では14cmを越えるものもあるが、1面のものは13～14cmが主で2面よりひとまわり小さい。また1面の方が器高が高く器壁も厚い。口径の小型化と併せて全体の形がより丸く、深くなる。胎土は精良だが焼きがやや甘く、淡褐色を呈する一群が主になる。図20－47は口径7.0cm、器高3.3cmの小型で深い手捏ね成形のかわらけである。

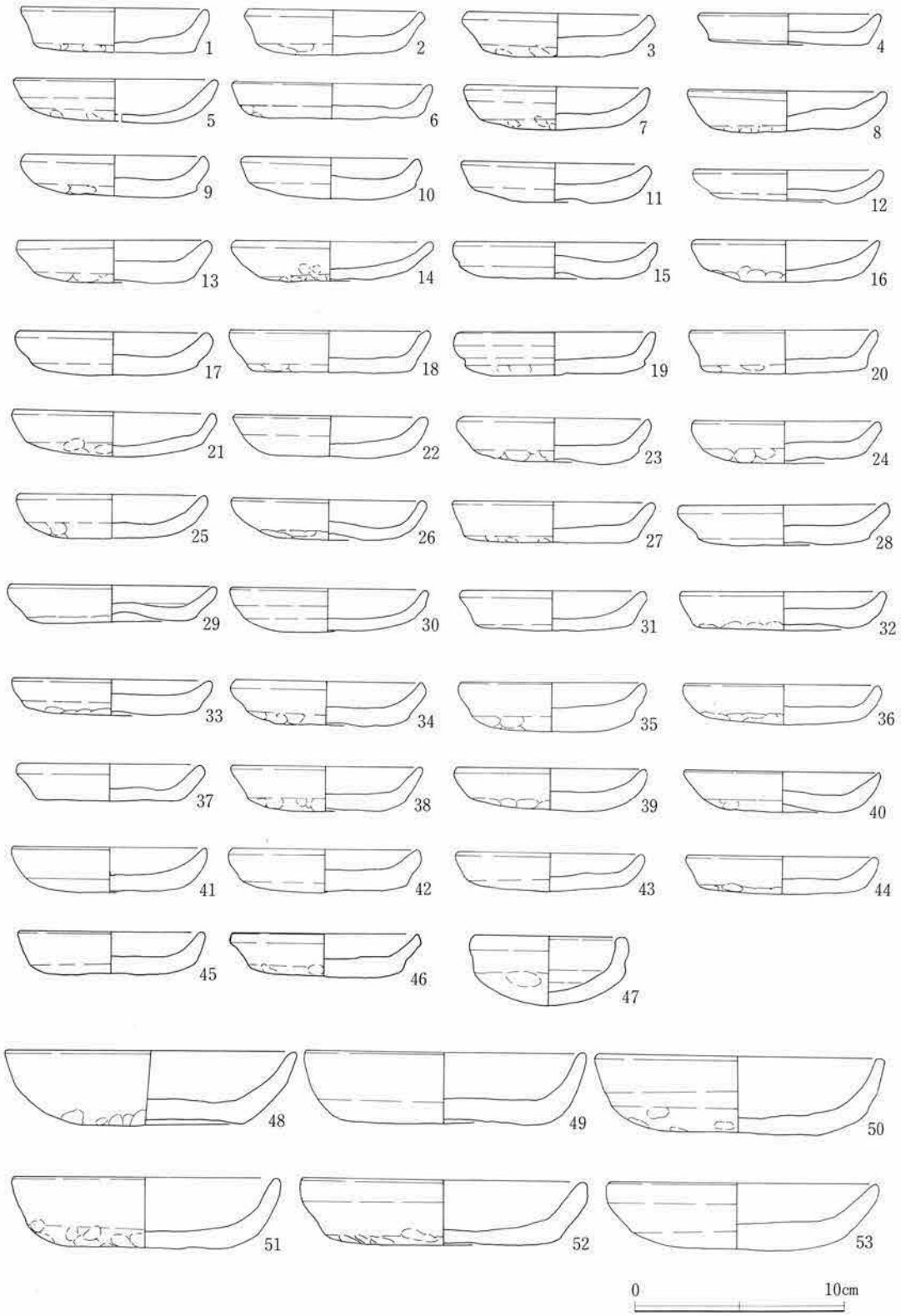


図20　1面出土の遺物3（かわらけ）

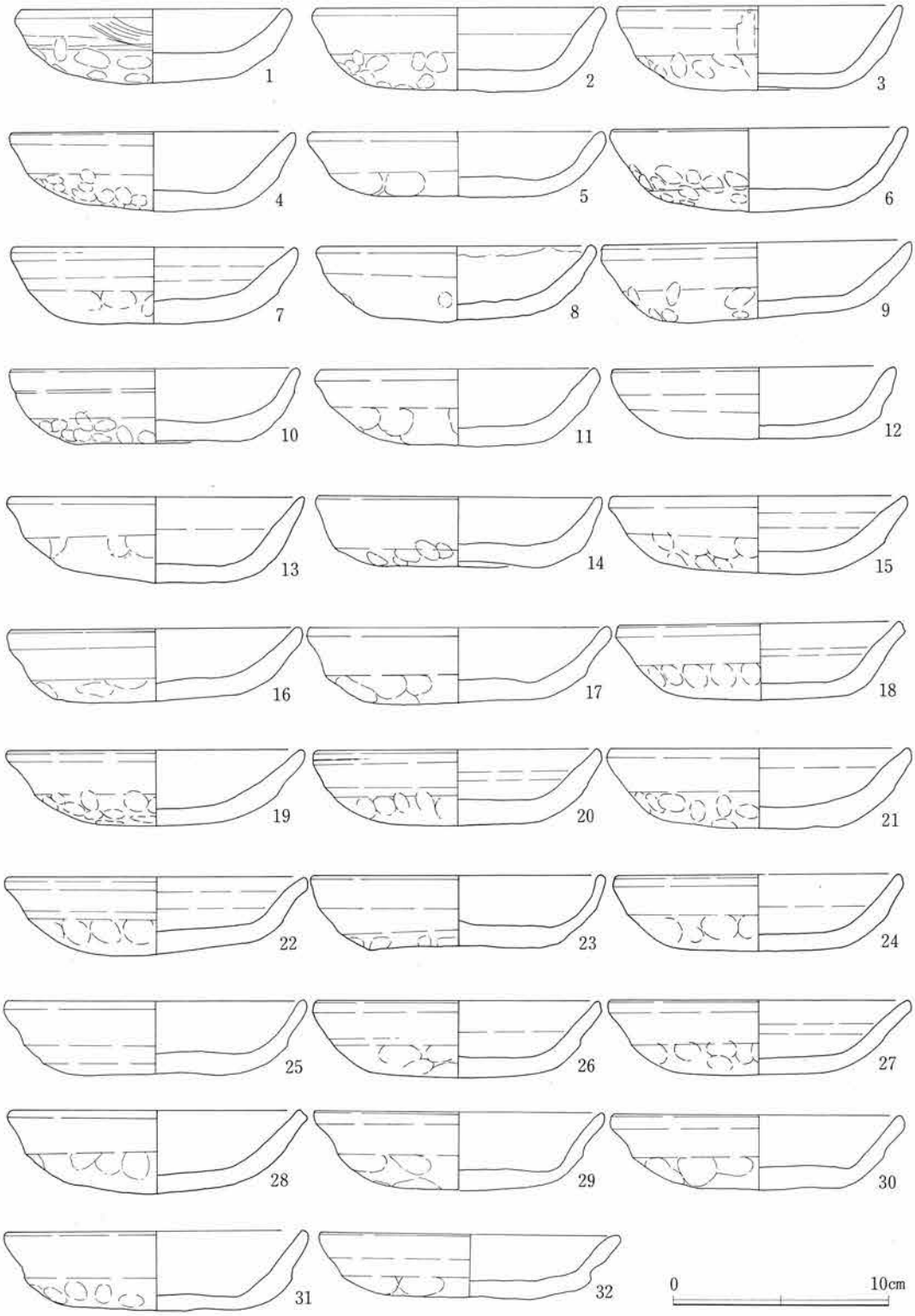


図21　1面出土の遺物4（かわらけ）

(2)　2面の遺物

溝2出土の遺物　(図22－1～13)

1・2は青磁、3～13はかわらけである。このうち1～11までが2溝A、12・13が2溝Bの出土である。

1は劃花文碗の細片で、内面に蓮華文を配し、釉は透明感のある淡緑色である。胎土は灰色を呈し堅緻である。口径は細片のため不明。

2は櫛掻文皿である。体部上部と下部の境目が明瞭で上部の外反がきついことから同安窯の製品と思われる。内面に弧状の文様が配されている。底面はへら削りによりいっきに仕上げられている。底面を抜かし外面、内面には透明感のある淡緑色の釉が施されている。口径10.6cm、底径5.6cm、器高2.0cm。

3は轆轤成形で、糸切りとスノコ痕を有し、外面に調整用の比較的強い撫でが入る。内定面に仕上げ撫でが見られる。胎土は細かな黒雲母など砂粒を多く含み、焼成はよく焼き締められ硬く仕上がり、淡赤灰色を呈する。口径8.9cm、底径6cm、器高1.9cm。

4は轆轤成形で体部外面中程に撫でによる稜線が付く。内定面に仕上げ撫でが見られる。胎土、焼成、色は3に類似するものである。口径8.1cm、底径5.1cm、器高1.8cm。

5は轆轤成形であるが全体に歪が激しい。胎土、焼成、色などの質感は先述した3・4に類似する。口径10.2cm、底径7.4cm、器高2.2cm。

6～8までは手捏ね成形の小型のかわらけである。6・9は胎土、焼成、色など類似し、7・8も類似する。

6は底面中央部が直径約4cmの範囲で偏平になり、体部中程から始まる強い撫でまでの間に指頭痕が一列の幅に入る。体部上部の口縁を作る強い撫では勢い良く施されている。胎土はきめの細かな素地に少量の雲母、針状物が見られ、全体にやや焼きが甘い感がある。色は淡褐色を呈す。口径9.0cm、器高2.0cm。

7の口端部は端を丸く収めている。口端部の内外面に墨もしくは煤の付着が見える。胎土はやや砂の多い素地だがよく焼き締められているために叩くと乾いた音がし、色も赤灰色を呈する。口径9.5cm、器高1.9cm。

8は体部の撫でが弱く指頭痕との境目に段が付かないために、側面観は丸い感じを受ける。底面中央がへそ状に窪む。胎土、焼成、色の感じは7に似て良く焼き締まり、赤灰色を呈する。口径9cm、器高1.9cm。

9は側面観から偏平な感じを受ける器形である。強い撫でにより口端部はやや緑帯状を呈し外面に沈線が入り、内面は肥厚する。外底面中央部がへそ状に窪み、内底面に仕上げの撫ではない。胎土、焼成、色等は6に似てやや甘い焼きで淡褐色を呈する。

10～13までは大型のかわらけで、12は轆轤成形、他は手捏ね成形の製品である。

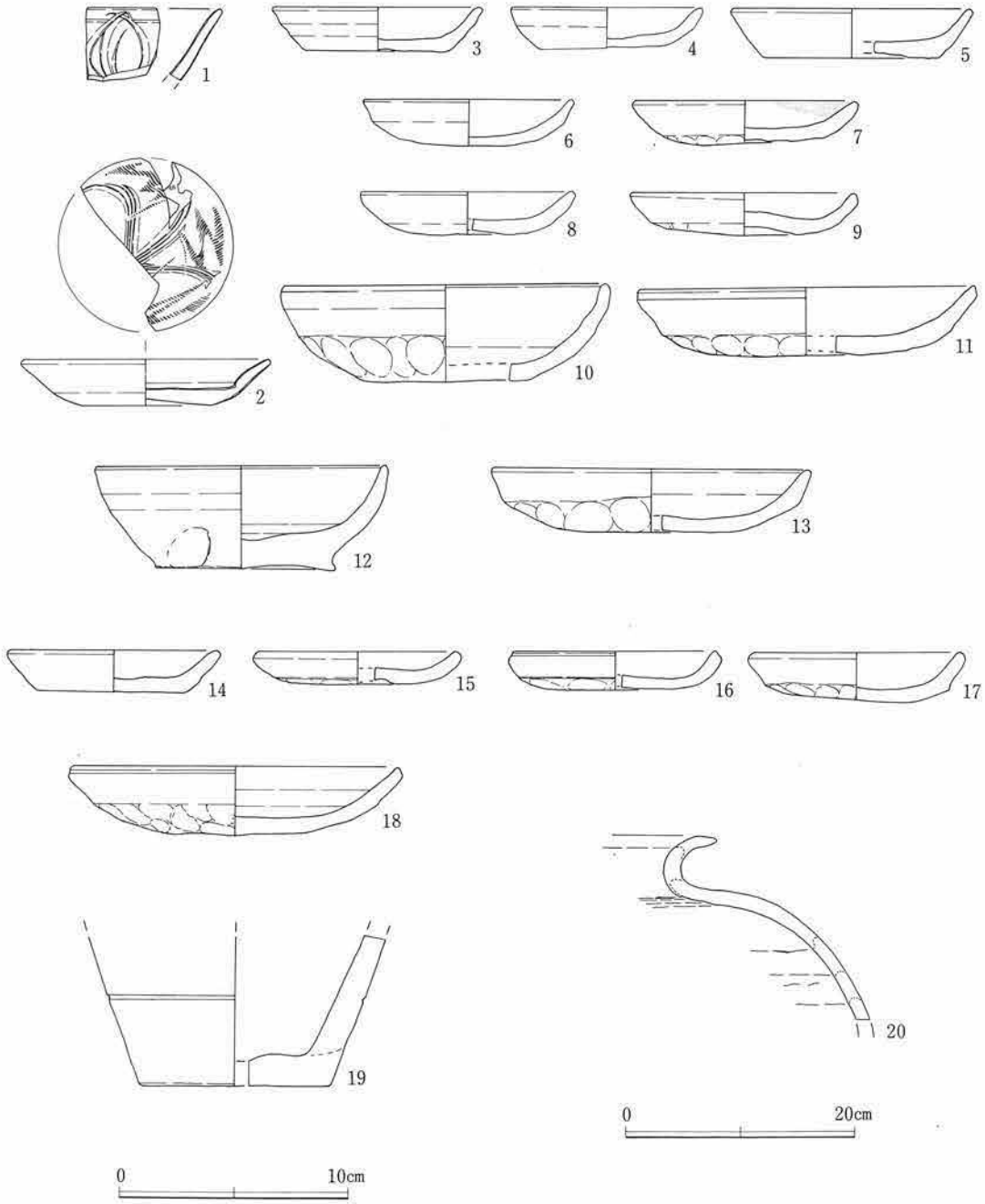


図22　溝 2 ・木組遺溝出土の遺物

10は指頭痕のある底部が丸く、立ち上がり部分が高い。口径に対し器高が高いため深い印象を受ける。底面は直径7.0cmの範囲で偏平になりあたかも平底の様相を呈する。内外面中程から口縁にかけて強い撫でが施され、体部は段状に立ち上がる。口端部は丸く収められているが内側に肥厚する。胎土はきめ細かい素地で砂粒は殆ど見られない。焼成は硬く焼き締まり叩くと乾いた音がし、発色は淡赤灰色を呈する。

11は側面観が偏平で、外面の強い撫でのため指頭痕と撫での境目が明瞭である。また口端部は縁帯状を呈し沈線が巡る。外面には全て黒色の油煙と思われる煤が付着している。胎土はきめ細かな素地で混和されているものは殆ど見られない。焼成温度が高いのか、淡赤灰色を呈し硬く焼き締まり叩くと金属的な乾いた音がする。

12はほぼ完品の静止糸切り底の製品である。粗い目の糸切り痕と分厚い底部が主な特徴とされる。土壙2（図23－15）のかわらけもこのような形になると思われる。立ち上がりは内湾気味に上方に引き上げられているが、横撫での痕跡も糸切り痕のように粗く残る。これは比較的ゆっくりした回転の轆轤の使用によるものと思われる。また外面下部には切り離した後に形を整えたと思われる手ないしは指の痕がつく。胎土はきめの細かい素地に微細な雲母が多く含まれる。口径12.5cm、底径7.7cm、器高4.5cm。

13は底面が直径6.0cmの範囲が偏平になる。体部ほぼ中程で撫でによる急な立ち上がりで、指頭痕との境目になる。端部は丸く収められているが、強い撫でのためにやや外反気味となる。胎土は精製された良質のもので砂粒を殆ど含まない。焼成は硬く焼き締められ叩くと金属的な音がし、淡灰色を呈する。口径13.2cm、器高2.8cm。

木組遺構出土遺物（図22－14～20）

14～18がかわらけ、19・20は渥美の製品である。

14は轆轤成形の製品で外面の強い横撫でのため外反気味になり、口端部は少し歪んでいる。底面には明瞭に糸切り痕とスノコ痕が残る。胎土は素地に砂粒と微細な雲母を多く混和して構成されている。焼成は硬く焼き締められて、淡赤灰色を呈す。口径8.7cm、底径6.4cm、器高1.8cm。

15は外面中程で指頭痕と撫でとの境目に一条の沈線が巡る。底面には成形時に寄せ合わせたような痕跡が見受けられる。丸く収まる端部は口端部内面で肥厚する。胎土は精良で硬く焼き締まる。口径8.5cm、器高1.4cm。

16は体部中程で指頭痕と撫での境目に一条の沈線が巡り、口端部はやや面を成してここにも一条の沈線が巡る。胎土は15と同じであるが焼成の違いからか色調は灰褐色を呈している。口径8.7cm、器高1.7cm。

17は全体の歪が激しく口縁は波打っている。外面の強い撫でのために指頭痕との境に段が付く。内底面には仕上げの撫でがみられる。胎土は素地に砂粒を多く含み、硬く焼き締められている。色調は赤灰色を呈す。口径8.9cm、器高2.1cm。

18は大型のかわらけである。口端部の作りを除くと13のかわらけに似る。直径約6㎝の範囲で底部が偏平になり、体部中程で指頭痕と撫での境目が付く。口端部はやや面を成し沈線が巡り、内面は肥厚する。硬く焼き締まり淡灰褐色を呈す。口径14㎝、器高3.0㎝。

19は渥美の壺である。外面はへら削りの後撫で消されている。底部から上に3.8㎝の所に一条の沈線が巡る。内面には降灰による自然釉がかかる。底径8.3㎝。

20は渥美甕の小片である。小片のために口径は復元できない。体部上半と口縁の内外面には刷毛塗りによる灰釉が厚く施されて、外面には平行の叩き目が観察される。口縁は頸部から大きく外に折り曲げられ、端部はやや肥厚気味に丸く収められる。胎土は砂が多いものの目の詰まった素地で堅緻である。

土壙2出土の遺物（図23）

1は劃花文碗。体部は内湾気味に立ち上がり、口端部で気持ち外に開く。内面に蓮華文を配し、素地は灰白色を呈し堅緻だが気泡が入り粗い。釉は透明緑灰色を呈する。復原口径17.0㎝。

2は劃花文碗。小片のために口径は不明である。口縁に輪花状の切れ込みが入る。素地は灰白色を呈し、釉は淡緑灰色を呈する。

3は青磁碗。胎土は淡灰色を呈し、堅緻。釉は淡緑色。口径14.7㎝。

4は白磁合子。口径7.8㎝、器高約1.3㎝。側面に蓮弁、頂部に唐草状の文様を配する。素地は灰白色を呈し、薄い。釉は透明感のある白色を呈する。

5～20はかわらけである。

5～14までの小型のかわらけの内、5～7が轆轤成形で他のものは手捏ね成形のかわらけである。小型のかわらけは糸切り底で器高が低く、全体的に口縁部の歪が大きく胎土に気泡が多く入るが焼きが非常に良いもの（5・6・7）。胎土の質、焼成の感じは概ね似ているが、手捏ね成形のもの（8・10・11）。手捏ね成形ではあるが、やや丸みを帯びた底部で胎土もきめ細かくなるもの（12・13・14・15）。平でコースター状のもの9）。の4種類に大別される。

5の口端部は丸く収めているが全体的に成形時の歪が激しい。外底部は糸切り痕とスノコ痕を残し、内底部には最終調整の撫でが明瞭に観察できる。胎土は砂粒の多い素地を使用しているが高温で焼かれたのか明赤灰色に焼き締まり叩くと金属的な乾いた音がする。口径9.0㎝、底径6.1㎝、器高1.8㎝。

6の外面の歪は少ない。外底面の糸切り痕は完全に撫で消され、一見手捏ね成形のかわらけのようである。内底面に仕上げの撫では入らない。口径8.9㎝、底径5.7㎝、器高1.8㎝。

7は一部口縁を折り曲げ灯明皿として使われたらしく口端部に煤の付着が見られる。外底面には、糸切り痕とスノコ痕が明瞭に残る。胎土、焼成、色の感じは4に似る。口径9.7㎝、底径6.5㎝、器高2.1㎝。

8は口端部に一条の沈線が巡る手捏ね成形。内面の撫では器壁を時計廻りに一周した後外に逃げ

ている。仕上げの撫では見られない。胎土、焼成、色の感じは糸切りの４・６に似て非常に硬く焼き締まっている。口径9.0cm、器高1.7cm。

９は底部からほぼ直角に短く立ち上がり、口縁部は平で面を成す。胎土は素地に砂を多く含み硬く焼き締まり、赤灰色を呈する。口径9.2cm、器高1.2cm。

10は口端部は丸く収められている。外底面に当たるところは重ね焼き時に付いたと見られる黒班が見られる。内面の立ち上がりが緩やかなために碗と言うより皿のイメージが強い。胎土はきめ細かい素地を使い焼き締まっている。口径9.8cm、器高1.9cm。

11は部分的に口端部に一条の沈線が巡り、内外面に製作・乾燥時に付いた粘土の合わせ目、ひび割れが明瞭に残る。胎土、焼成、色は硬く焼き締まり明赤灰色。口径9.4cm、器高２cm。

12は全体に丸みが強くなったイメージを受ける。内面には時計廻りに撫でが巡り、内底面の仕上げの撫では見られない。胎土は素地がきめ細かく、焼き締まり金属的な音がする。淡赤灰色を呈す口径8.9cm器高2.1cm。

13は体部上方の強い撫でにより口端部が気持ち縁帯状になり部分的に一条の沈線が見られる。胎土は素地がとてもきめ細かく、焼き締まり、硬い。色は10に似て淡灰赤色を呈す。

14は体部外面に強い撫でが入り指頭による調整を行っている底面との境目が明瞭である。また境目に幅約１mm程の竹櫛のようなもので沈線が巡る。この強い撫でのために内面の立ち上がりは急になり、口端部は縁帯状になる。口径9.7cm、器高2.6cm。

15～20までは大型のかわらけ。15のみが糸切り痕を有す轆轤成形品、他は全て手捏ね成形の製品である。手捏ね成形のかわらけは胎土、焼成、色の感じは似通っている。いずれもきめ細かい素地を使い、硬く焼き締められている。色は淡赤灰色である。

15は高台状に飛び出した底部片である。外底面にいわゆる静止糸切り痕が明瞭に認められる。胎土は、きめの細かい素地の中に微細な雲母を大量に含み、一見して見分けが付く。硬く焼き締まり灰褐色を呈する。内面には明瞭な横撫でが入り、仕上げの撫では認められない。底径は8.2cm。

16は指頭痕が残る底面が比較的偏平である。立ち上がりは内外面共に強い撫でが２カ所に入り、側面観は段状を呈し指頭痕は殆ど見えない。口径13.3cm、器高3.0cm。

17は体部外面の指頭痕と撫での境目が不鮮明である。内定面の仕上げ撫では認められない。口径13.6cm、器高3.2cm。

18は体部外面の指頭痕は不鮮明だが立ち上がり部の撫では強く境目は明瞭である。口端部は僅かに縁帯状を呈し口端部内面の強い撫でのために端部はやや肥厚気味となる。内底面の仕上げ撫では認められない。口径13.6cm、器高3.6cm。

19は口端部は僅かに縁帯状を呈し、端部内面は肥厚気味になる。体部上方、内外面を巡る撫では時計廻りで上方に逃がしている。内底面の仕上げの撫では認められない。口径13.5cm、器高3.6cm。

20の口端部は縁帯状を呈し中に一条の沈線が巡り、手捏ね成形の製品の中でも古式の様相を呈している。内面にへら記号とも傷とも見られる条線が二条認められる。14～18の大型の手捏ねかわら

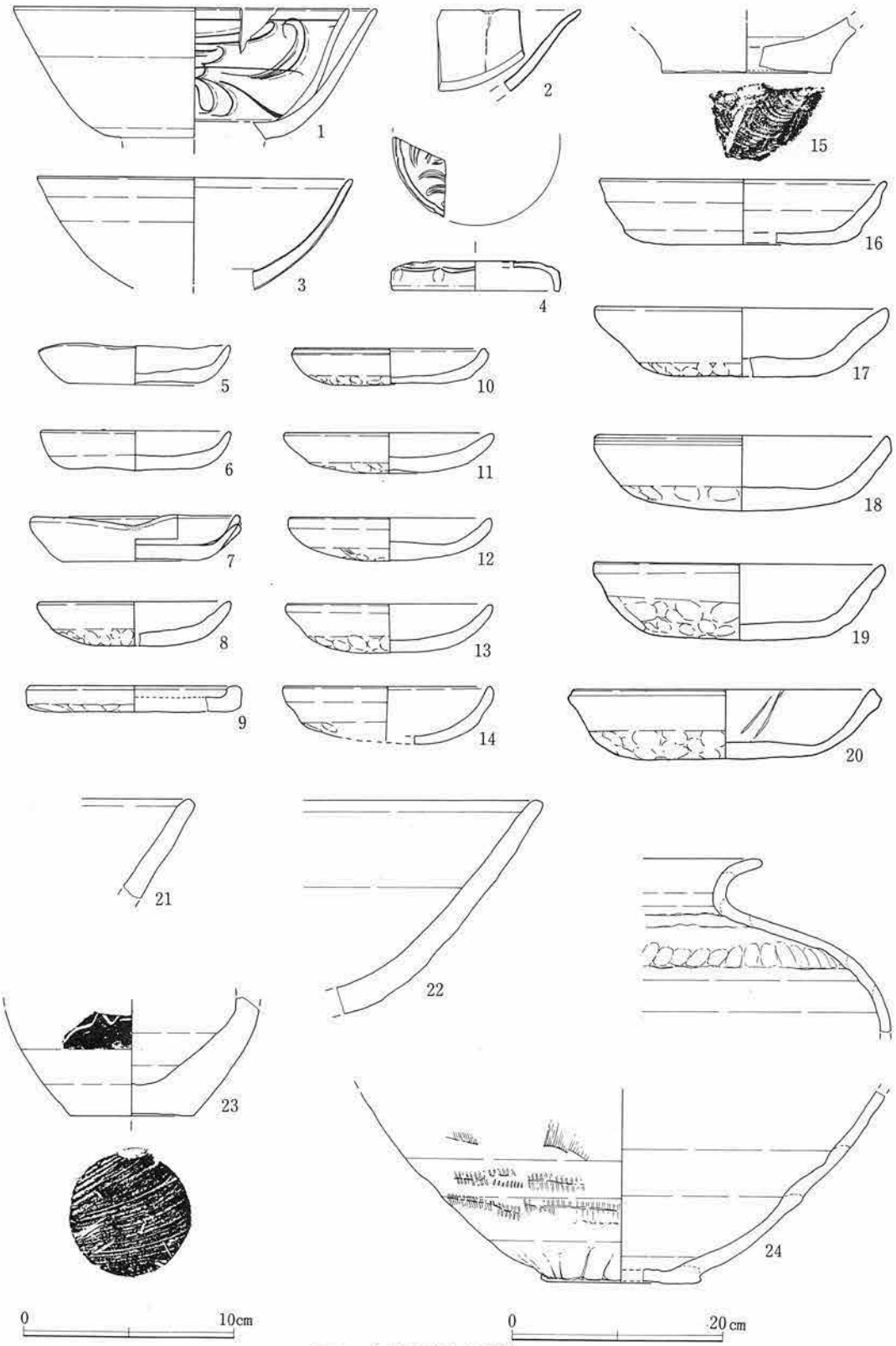


図23　土壙 2 出土の遺物

け製品の中でも一番器壁が薄く、側面観は押し潰された印象を受けまた硬く焼き締まっている。口径14.1cm、器高3.2cm。

21. 渥美捏鉢の口縁部細片である。胎土は砂が多くザックリした割れ口を呈している。

22. 山茶碗窯系捏鉢の口縁部片である。底部を欠損し、胎土は灰白色の素地に砂粒を含む。

23. 渥美の小壺と思われる。底部から体部中程までの破片で、体部中程、割口に僅かに波状文が認められる。底面は完全に止まった状態での糸切り痕を有し平行に溝の入った叩き板を使い底面を調整してる。外面は篦削り調整の後に横撫でにより仕上げられている。胎土は微細な砂を含む良質なもので色は青灰色を呈する。

24.渥美の甕である。口縁部片と底部片で外面には格子状の叩き目と粗い刷毛目が付く。内面は破片の全面に降灰による自然釉がかかる。口縁部から肩部にかけて灰釉が施されている。底径30cm。

（福田　誠）

2面上出土の遺物（図24・25）

図24は青磁で、1は櫛描文碗、2～13は劃花文碗、14～17は櫛描文皿である。

1は櫛描文碗の体部片。釉は明緑灰色で透明、釉層がごく薄い。素地は明灰色を呈し、緻密。ごく精良な胎土からなる。同安窯産のものか。

2の釉は暗緑灰色で透明。素地は明灰色で緻密。胎土は精良である。

3の釉は緑灰色で透明。素地は灰色を呈し、やや粗胎である。

4は口径12cm程度の碗と思われる。釉は暗緑灰色透明。素地は暗灰色で緻密。精良な胎土からなる。

5の釉は暗緑灰色で透明。素地は灰色を呈し、やや締まりが無い。胎土は比較的精良である。

6は口縁部が輪花になるもの。釉は暗緑灰色透明。素地は灰色を呈し、胎土は精良であるが、やや締まりが悪い。

7はやはり輪花の口縁をもつものと思われる。釉は淡緑茶褐色透明。素地は明茶褐色を呈し、緻密。精良な胎土からなる。

8の釉は明緑灰色で不透明。釉層が比較的厚い。素地は明灰色を呈し緻密で、精良な胎土からなる。

9の釉は暗緑灰色透明。素地は暗灰色を呈し緻密。胎土はごく精良である。

10の釉は暗緑灰色で透明。素地は黒灰色を呈する。胎土は比較的精良だが、ややしまりが悪く細かい気泡を生じている。

11の釉は緑茶灰色を呈し、透明。釉は高台まで施されている。素地は暗灰色で緻密。ごく精良なは胎土から成る。

12の釉は暗黄灰色透明。素地は明茶灰色で比較的緻密。胎土は精良であるが微細の砂粒が少量含む。

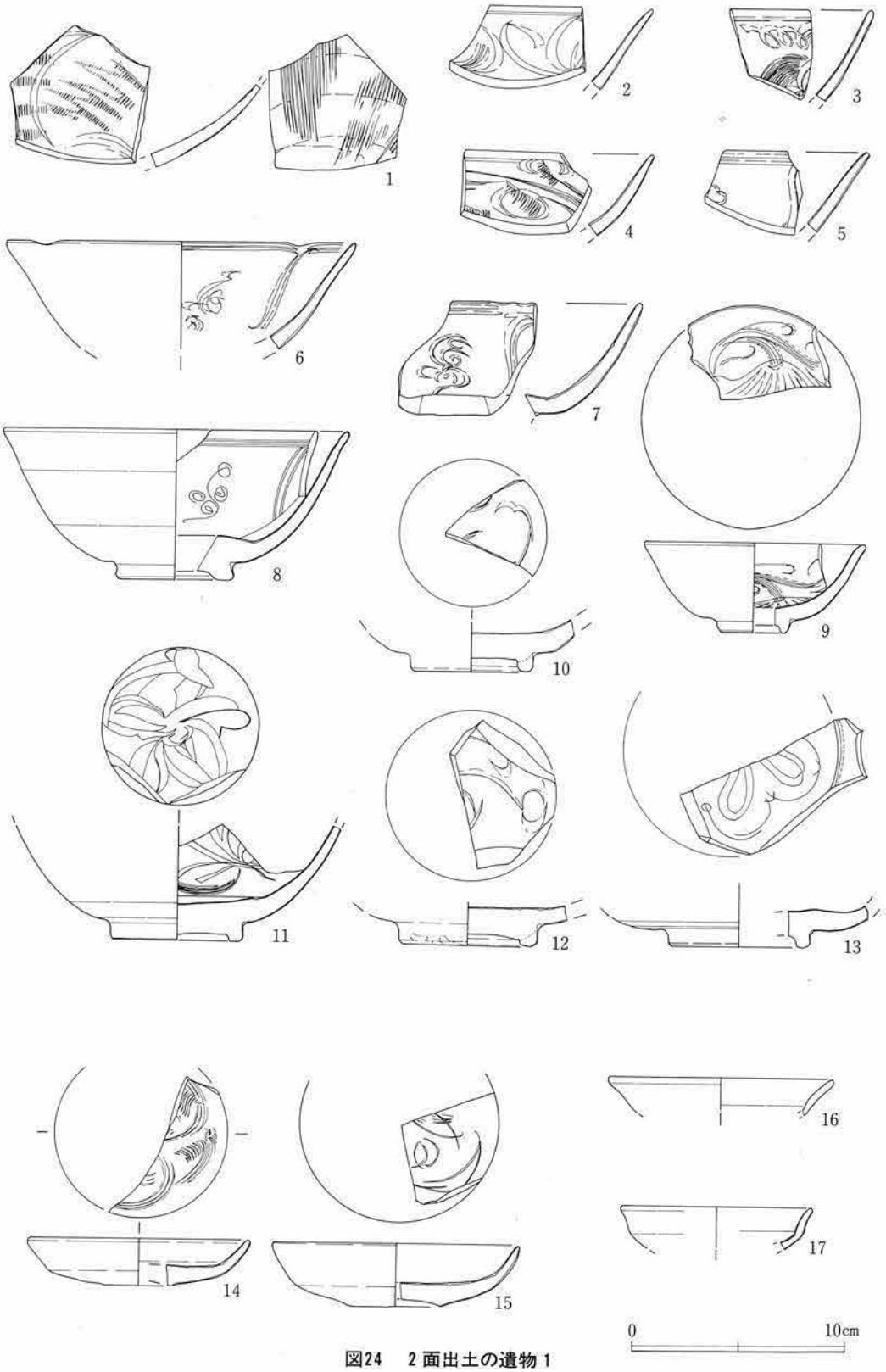


図24　2面出土の遺物1

13は見込み部分が広く、高台から体部への立ち上がりがゆるいもので、かなり大型の碗と思われる。釉は緑青色で透明。素地は灰白色で緻密。胎土は微細な砂粒を含む。

14は櫛描文皿。釉は明緑灰色でやや不透明。胎土は明灰色を呈し緻密。比較的精良な胎土から成る。

15はやはり見込み部分に櫛描文の施されているもので、釉は明茶灰色透明。素地は濁白色で緻密。微細の砂粒を含む胎土からなる。14と同様、体部から口縁部にかけての立ち上がりがゆるいのが器形の特徴で、龍泉窯系の製品と思われる。

16は明茶灰色を呈し透明。素地は濁白色で緻密胎土は精良である。

17の釉は暗緑茶灰色で透明。素地は明茶灰色を呈し緻密。胎土は精良である。16・17は体部から口縁部への立ち上がりが強く外反する特徴を備え、共に同安窯産のものと思われる。

図25－１～５は白磁、６・７は青白磁。８～16は国産陶器。

１は玉縁碗の口縁部。釉は黄白色を呈する。素地は灰白色で緻密。比較的精良な胎土から成る。

２は端反碗の口縁部。釉は緑白色。素地は灰色で緻密。胎土は精良だが、微細の砂粒を少量含む。

３は櫛描文碗。釉は緑白色で透明。素地は灰白色でやや締まりが悪く、粗胎である。

４は櫛描文碗。釉は青灰白色で不透明。素地は灰白色を呈し、ややしまりが悪く気泡を生じている。胎土は比較的精良だが、微細の砂粒を少量含む。

５は櫛描文碗。釉は黄白色透明。素地は灰白色を呈し、緻密。胎土は粗い。

６は碗の底部。内底面に文様が施されている。釉は水青色。素地は濁白色を呈し、緻密。精良な胎土から成る。

７は合子の蓋。釉は淡水青色で透明。素地は濁白色で緻密。胎土は精良である。

８は山茶碗窯系捏鉢。長石粒の多い粗い胎土から成り、焼成が弱いものか、やや硬質である。口縁部が比較的強く外反している。内面の磨耗が著しい。

９は渥美産と思われる捏鉢の底部素地は暗灰色を呈し、緻密。精良な胎土から成る。

10は山茶碗窯系捏鉢。粗い長石粒を多く含む粗い胎土から成り、５～８㎜大の石粒も混入している。焼成は良く、硬質。内面はかなり摩滅している。

11～15は常滑の甕。

11の素地は暗灰色を呈し、緻密。長石粒を多く含む粗い胎土から成る。表面は暗茶褐色を呈し、肩部には暗緑灰色の降灰釉が厚くかかる。

12の素地は明茶灰色を呈し、精良な胎土から成る。表面は赤灰色を呈し、肩部は降灰釉の付着で明緑灰色を呈す。

13の素地は暗灰色を呈し、ごく緻密。胎土は極めて精良である。表面は赤灰色を呈する。

11～13はいずれも頸部から口縁への立ち上がりがＳ字状を呈する特徴をもち、鎌倉で出土する常滑の甕の形態としては時期が古いもの。

14は長石粒を含む粗い胎土から成り、緻密。表面は茶褐色を呈し、内底面には暗緑灰色の降灰釉

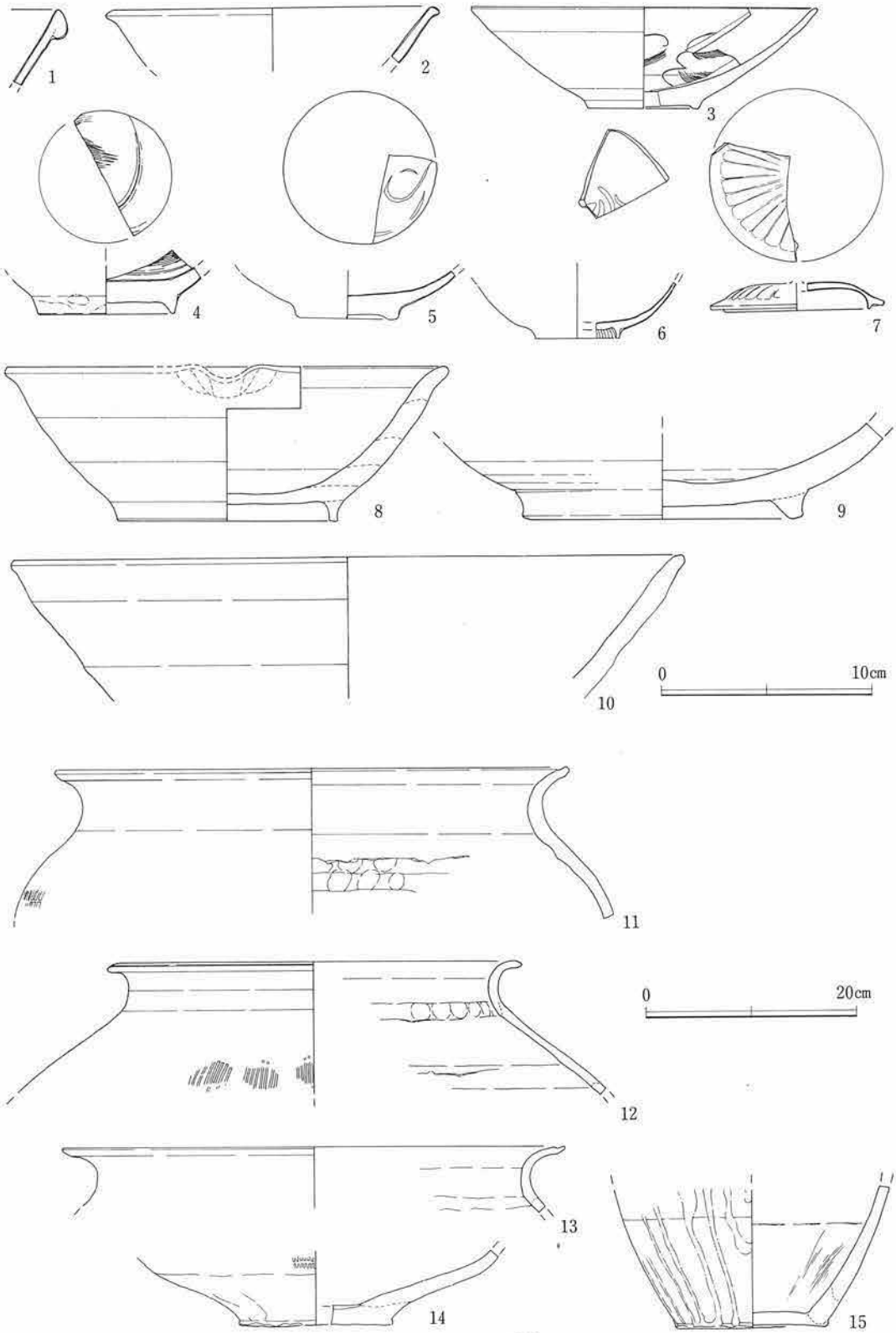


図25　2面出土の遺物2

が厚く付着する。

15はごく精良な胎土から成り、緻密。茶褐色を呈し、内面は緑灰色の降灰釉が付着する。

（菊川　泉）

2面出土のかわらけ（図26・27・28）

1区2面から出土したかわらけは収納箱にして25箱程である。計測可能なものが283点（このうち図示したものが96点）である。図26は2面出土のかわらけの法量分布図、図27－1～23は轆轤成形の製品、図27－24～61・図28－1～34は手捏ね成形の製品である。

轆轤成形の製品は、胎土から雲母など砂粒を多く含み、焼き締まっているものが多い。色調は赤灰色ないし淡褐色を呈する。器形は全体的に器高が低く偏平な感じを受ける。体部の立ち上がりは比較的直線的できつく立ち上がり、口縁部はやや肥厚気味となる。体部の開きはやや開き気味のものもあるが口縁部と胎土、底部の糸切り痕（静止糸切り）から時代の下るものとは明瞭に区別できる。

手捏ね成形の製品は、硬く焼き締まるものと、やや焼きの甘いものがある。小型のものは全体に器高が低く、焼きの良いものは口縁部が縁帯状に、やや焼きの甘いものの口縁部は丸く収められている傾向があり、いずれも器形に歪みが生じている。大型の製品は体部下部の指頭痕が明瞭に残り、中には平底を意識しているようなものも多くみられる。小型、大型ともに器高が低めで、器壁も薄い。

2面のかわらけの胎土は、1・黒雲母などの砂粒を多く含み、赤灰色に硬く焼き締まるもの。2・精良な胎土で僅かな砂粒しか含まず、淡～赤灰色に硬く叩くと金属的な音がする程焼き締まるもの。3・精良な胎土に黒雲母を含み、淡褐色を呈し焼きがやや甘い感じのもの、の大きく分けて3

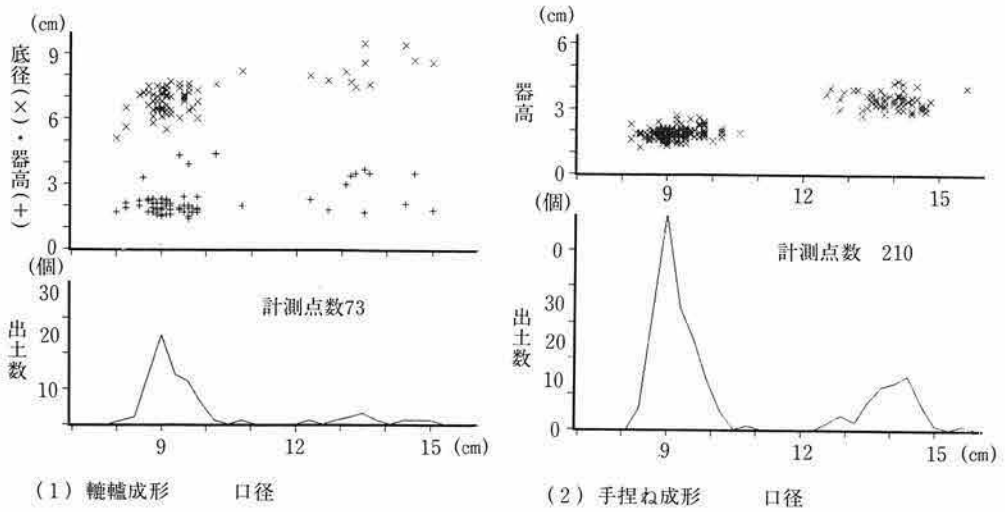


図26　かわらけ法量分布図3（2面）

タイプに分けられる。1は静止糸切り痕を有する轆轤成形の製品に、2、3は手捏ね成形の製品に多く見られる。図27－6・15・22、28－19～35は2面直上の出土である。図28－34は口径9.2cmの小型に属するかわらけの底部に尖孔が施されたもの、35は最大径10.3cm、器高1.4cmの内折れのかわらけである。

これら2面出土のかわらけの法量を概観するならば、小型の轆轤成形の製品は口径9cm、底径7cm前後、器高2cm前後が主となるが、1面と比べて口径8.5cm以下のものはほとんどみられない。大型の製品は、出土量も少なくはっきりしないが口径12cmを越えるものがある。小型手捏ね成形の製品は口径9cm、器高2cm前後が主であり1面と大きな違いはみられないものの、大型の手捏ね製品は口径14cmを越えるものが多くなり、器高3～4cm前後とやや大型化する傾向にある。

図	番号	口径	底径	器高
27	1	8.6	7.2	1.7
27	2	9.1	7.1	1.8
27	3	9.0	7.2	1.6
27	4	8.9	6.8	1.5
27	5	8.8	7.1	1.7
27	6	8.9	7.5	1.7
27	7	8.7	6.6	1.9
27	8	8.8	6.1	1.7
27	9	8.8	6.8	1.9
27	10	8.8	6.4	2.1
27	11	8.8	5.8	1.8
27	12	9.6	7.6	1.4
27	13	9.1	7.5	2.0
27	14	9.4	7.4	1.7
27	15	9.1	6.4	2.0
27	16	9.8	7.3	1.9
27	17	9.5	6.8	1.9
27	18	9.8	6.8	2.0
27	19	9.6	6.4	2.4
27	20	10.8	8.2	2.3
27	21	12.3	8.0	3.0
27	22	13.5	9.5	3.2
27	23	13.1	8.2	3.7
27	24	9.5		2.5
27	25	8.8		2.1
27	26	8.9		2.1
27	27	8.8		2.4
27	28	8.7		2.0
27	29	9.2		2.0
27	30	9.0		1.9
27	31	8.6		2.1
27	32	8.8		2.1

図	番号	口径	底径	器高
27	33	8.6		2.1
27	34	8.9		1.9
27	35	8.4		1.7
27	36	8.5		1.7
27	37	9.0		1.8
27	38	9.0		2.1
27	39	8.7		1.8
27	40	8.9		1.6
27	41	8.8		2.0
27	42	8.8		1.7
27	43	8.9		1.6
27	44	8.4		1.8
27	45	8.9		2.0
27	46	9.4		1.7
27	47	8.9		1.5
27	48	8.9		1.7
27	49	8.6		1.7
27	50	9.3		1.4
27	51	9.2		1.4
27	52	9.0		2.0
27	53	8.9		2.1
27	54	9.4		2.0
27	55	9.0		1.3
27	56	9.6		2.0
27	57	9.3		1.7
27	58	9.1		2.1
27	59	8.6		1.9
27	60	9.4		2.1
27	61	10.0		1.5
28	1	12.8		3.0
28	2	12.5		3.7
28	3	13.3		2.7

図	番号	口径	底径	器高
28	4	12.9		3.8
28	5	13.4		3.1
28	6	13.1		3.9
28	7	13.8		3.1
28	8	13.6		3.4
28	9	14.1		3.6
28	10	13.8		2.8
28	11	14.4		2.9
28	12	14.0		3.5
28	13	14.6		3.1
28	14	12.8		3.5
28	15	14.2		3.4
28	16	14.2		3.4
28	17	14.7		2.9
28	18	14.2		4.2
28	19	14.2		3.0
28	20	14.1		3.0
28	21	14.0		3.3
28	22	8.2		2.2
28	23	8.3		2.1
28	24	8.2		2.3
28	25	8.8		1.8
28	26	9.0		1.6
28	27	8.9		1.4
28	28	9.0		1.7
28	29	9.1		1.9
28	30	9.3		2.3
28	31	9.4		2.0
28	32	8.8		2.0
28	33	9.1		1.8
28	34	9.2		2.0
28	35	9.4		1.4

かわらけ法量表4

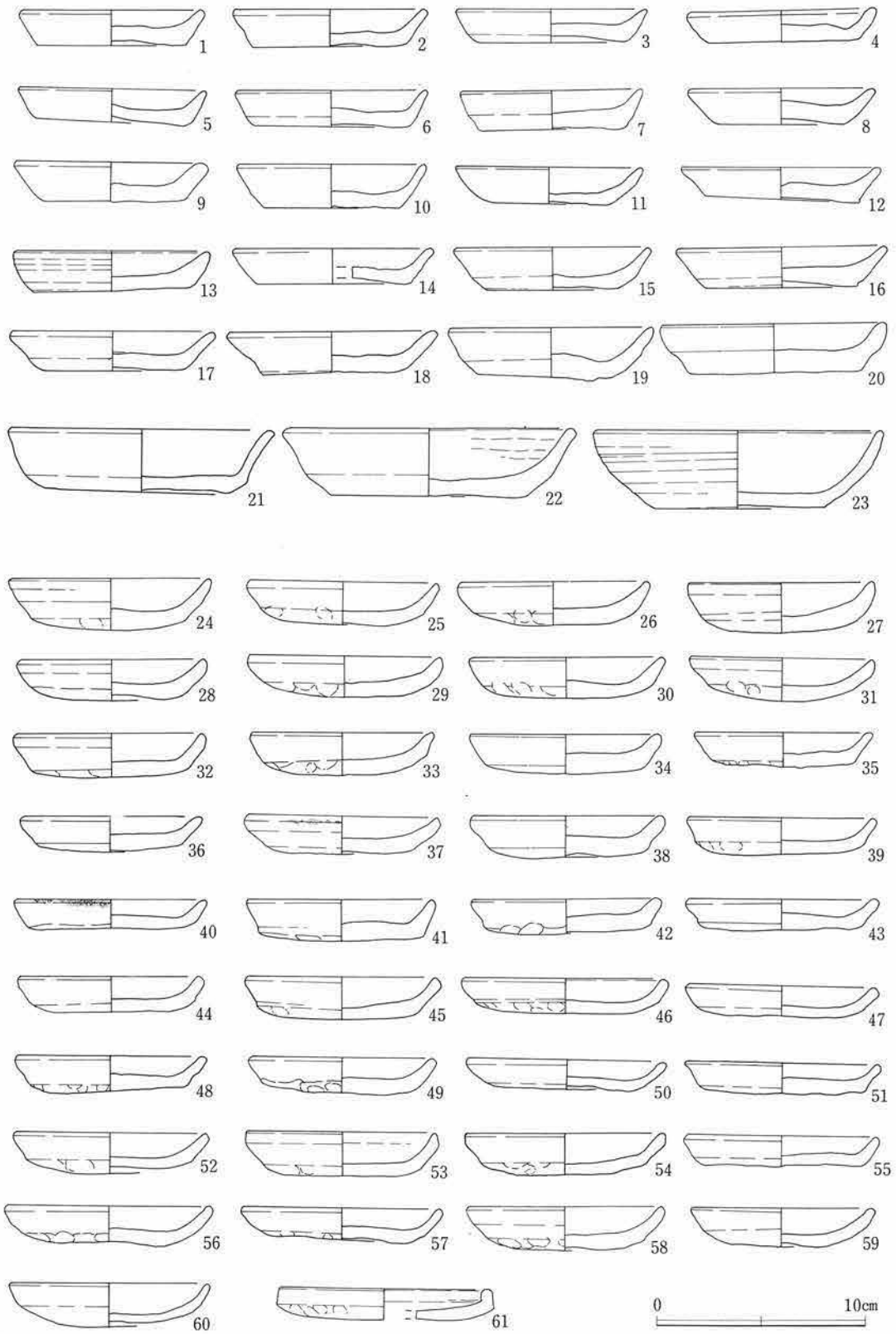


図27　2面出土の遺物3（かわらけ）

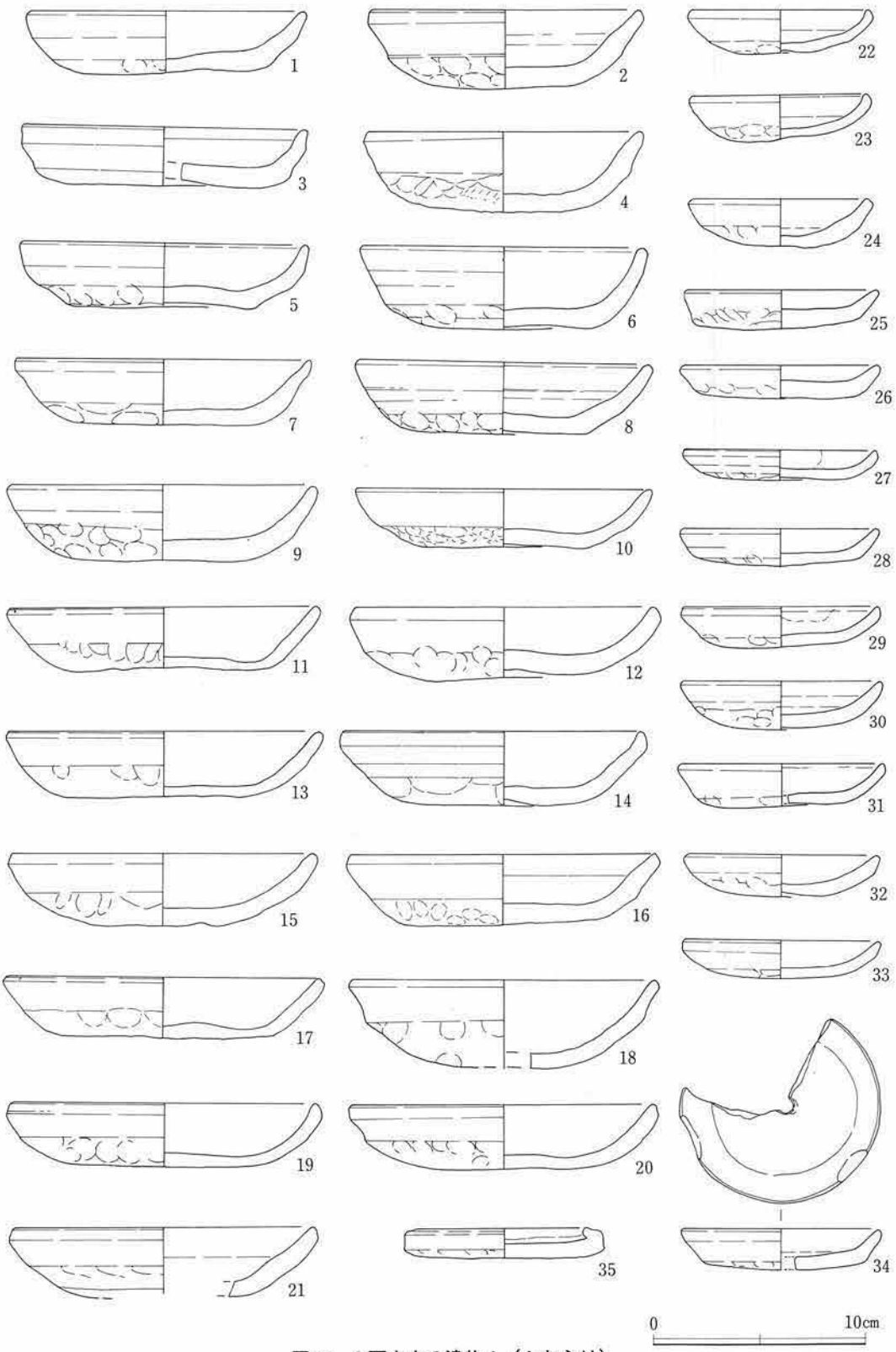


図28　2面出土の遺物4（かわらけ）

(3) 古代の遺物（図29・30）

1～28は土師器、29～43は須恵器・灰釉陶器である。溝状遺構内出土資料で占められているが、他の遺構・包含層中から得られた資料に付いては、各々文中に記すことにした。なお、残存率1/8程度の小片から復原実測したため口径等に若干の誤差が含まれている。

1・2は坏蓋。須恵器坏蓋を模倣したものであるが、天井部をヘラケズリした後、内外面にヘラミガキ調整を施している。1は明橙褐色を呈し、胎土中に微砂粒・赤褐色粒・白色針状物質を多く混入する。2も同質の胎土であるが、茶褐色を呈している。

3～11は坏。3は前代の特徴を残し、口縁部下に強い稜線を有する。10は口縁部が短く外反している。比較的大きな破片で、全体の約1/3が遺存する。11は大口径で浅い器形を呈し、口縁部は短く外反する。胎土の特徴として、いずれも砂粒・赤褐色粒を含有するが、白色針状物質は8にだけ認められた。10は溝状遺構底面の出土。

12は内黒の坏。口縁部を欠失する。外底面と体部下端をヘラケズリし、内面はヘラミガキ後黒色処理を施す。内面のヘラミガキは不定方向で、特に暗文を意識したとは思えない。胎土中に微砂粒・白色針状物質を多量に含み、焼成は不良である。

13は甲斐型坏の小片かも知れない。内面にヘラミガキ調整を行うが、暗文か否か判然としない。胎土中に微砂粒・白色針状物質を含む。

14～18は盤状坏と呼ばれるもの。

14は器高が低く、より盤に近い形状といえるが、完全な平底にはなっていない。口縁部の約1/3を欠失する。外面体部下半から不定方向のヘラミガキ調整を行う。外底面中央寄りには、焼成後に「大」の刻書がなされ、内面には赤彩された痕跡がみられる。胎土中に微砂粒・赤褐色粒・白色針状物質を含み、器表は淡橙褐色を呈する。口径13.4cm、底径11.0cm、器高2.7cm。溝状遺構底面の出土。

15は口唇部に沈線を有する。約1/4が残存。外面は丁寧なナデ調整、体部内面は横位のヘラミガキ調整、内底面は不定方向のヘラミガキ調整を行い、外底面には回転ヘラ切り痕が残る。胎土中に極微砂粒・赤褐色粒・白色針状物質・金雲母粒を含み、明橙褐色を呈する。口径13.6cm、底径10.2cm、器高4.2cm。

16は口唇部に沈線を有す。約1/4が残存。外面体部下端と外底面は手持ちヘラケズリ調整、体部内面は横ないし斜位のヘラミガキ調整が行われる。特に暗文を意識したとは思えない。胎土は15と同質で、やや粒子が粗い。明橙茶褐色を呈する。口径は13.8cm、底径10.4cm、器高3.2cm。

17は口縁部の小片。焼成が甘いため、口唇部の沈線は磨滅しかけている。体部内面には黒漆状の付着物がみられる。胎土中に極微砂粒・赤褐色粒を含む。

18は体部下半から底部の破片。内面は丁寧なナデ調整後、体部に斜放射状の暗文、底部に環（ループ）状暗文を配す。外面は器表が荒れて不明瞭となるが、ヘラミガキ調整と思われる。胎土中に

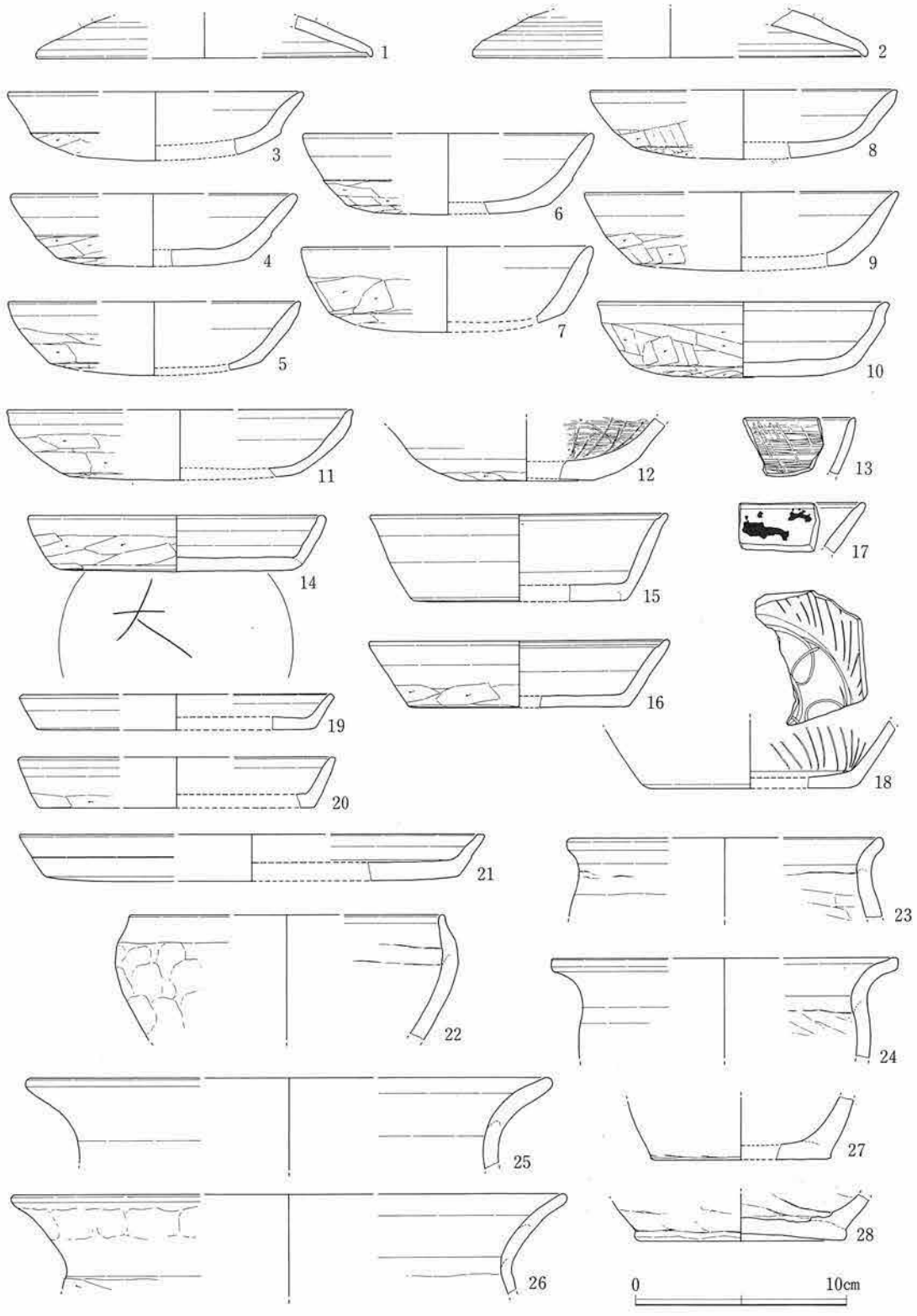

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm

図29　古代の遺物

は極微砂粒、赤褐色粒、白色針状物質を含み、焼成良好、暗赤褐色を呈する。底径9.6cm、中世地山直上で出土している。

19～21は盤。いずれも復原口径の1/9程度の小片であるため、口径等に誤差が含まれる。

19は内外面とも丁寧なナデ調整。外底面のみ手持ちヘラケズリ調整を行う。胎土中に微砂粒を多く含み、赤褐色粒・白色針状物質も混入する。明茶褐色。口径14.6cm、底径13.0cm、器高1.7cm。

20は内面ナデ調整、外面体部下半と外底面に手持ちヘラケズリ調整を行う。胎土は19と同質。暗赤褐色を呈する。口径14.6cm、底径13.0cm、器高2.4cm。

21は体部内外面に稜を有する。外底面ヘラケズリ後ヘラミガキ調整、内底面および体部内外面はナデ後粗略なヘラミガキ調整を行う。胎土中に極微砂粒・赤褐色粒・白色針状物質を少量含み、焼成堅緻、明橙褐色を呈する。口径21.4cm、底径19.6cm、器高2.2cm。

22は埦もしくは鉢と思われる。他の遺物より若干遡る可能性もあるが定かでない。成形は概して粗雑。内外面ともナデを基本とするが、体部外面には指オサエの痕跡が残る。胎土中に粗砂粒を多く混入し、焼成は不良。

23は小形甕。口縁部が短く外反する。体部内面は木口状の粗いナデ調整。胎土は22と同質である。溝状遺構底面の出土。

24は小形甕。口唇部端面に浅い溝状の窪みがめぐる。体部内面はヘラナデ後ナデ調整。胎土中に微砂粒を多量に含み、白色針状物質もみられる。

25は同一個体と思われる胴部片、底部片も出土したが、接合は出来なかった。胴張甕である。胎土中に砂を多く含み、赤褐色粒・白色針状物質・金雲母粒・泥岩粒も混入する。

26は体部外面をヘラケズリする甕。口縁部外面に指頭痕も残る。器壁は薄く、胎土中に砂粒を多く混入する。

27は甕底部1/3片。外底面には木葉痕が残る。胎土等からみて25と同一個体であろう。

28は甕底部。全周が依存する。内底面はヘラナデ後指頭による強いナデ調整を行う。外底面には木葉痕が残る。胎土中に粗砂粒・赤褐色粒を多く混入し、白色針状物質もみられる。

29～36・38～43は須恵器、37は灰釉陶器である。

29～31は坏蓋。29は外面に白斑状の降灰がかかる。胎土は精良で黒色微粒を少量混入する。30はかなり焼きが甘い。内外面とも鈍い光沢の灰黒色に薫蒸されるが、内外面中央部は二次的な使用により磨耗し、素地の灰白色を呈している。胎土中には微砂粒を少量混入する。31は坏蓋のつまみ部分と思われる。輪高台状を呈しており、中央部に指頭痕が残る。胎土中に白色粒を多く含む。武蔵地方窯の製品と思われる。

32は坏であろうか。体部上半を欠失する。外底面はヘラケズリ調整後、粗略なヘラナデ様の調整を加えている。胎土中に白色粒子を多く含み、針状物質も少量混入する。

33は坏。底部は回転糸切り後、全面回転ヘラケズリ調整する。胎土中に粗砂粒を含み、白色針状

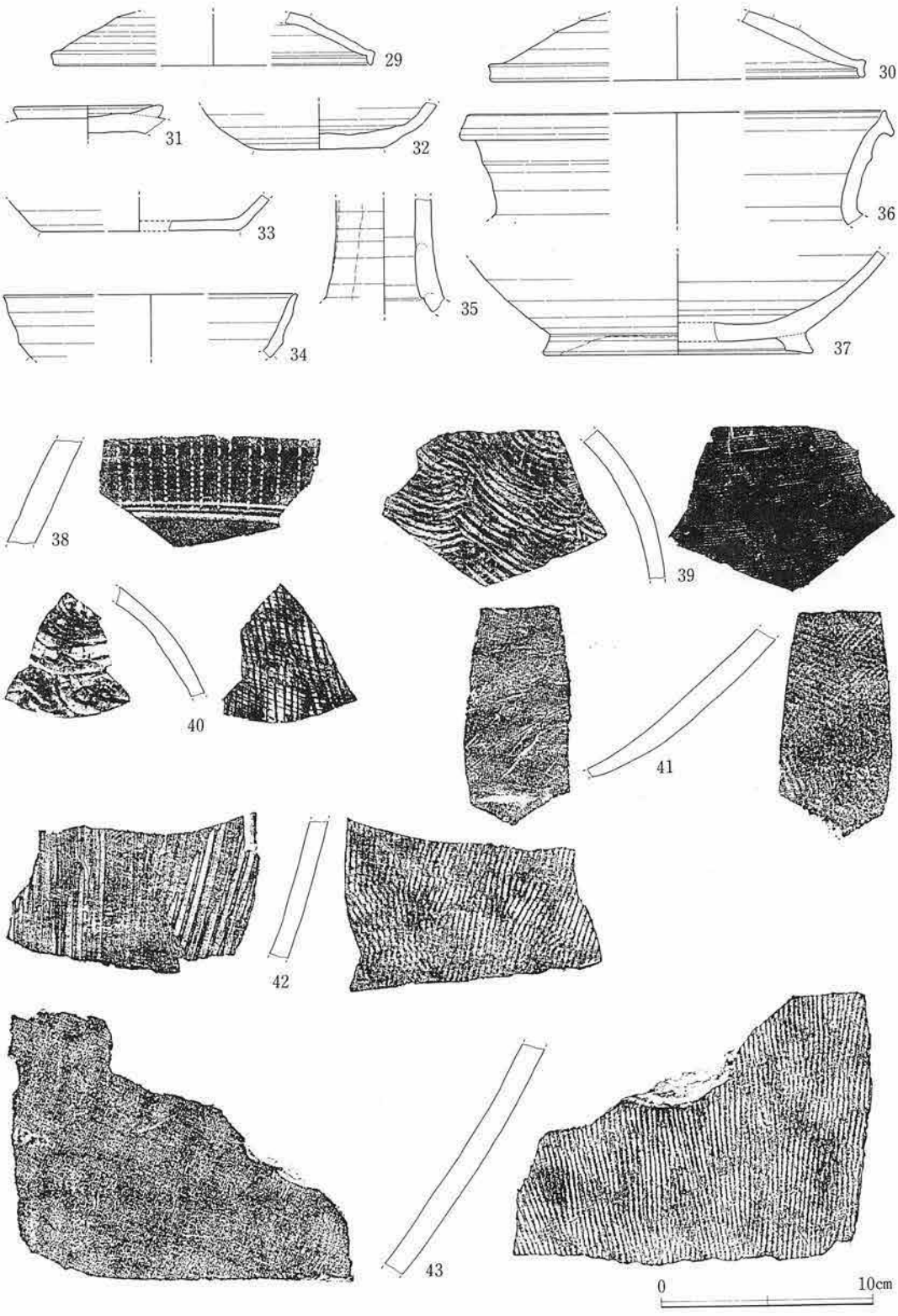


図30　古代の遺物 2

物質の含有が目立つ。北武蔵産と思われる。溝状遺構下の柱穴46から出土。

34は高台付坏。体部外面の轆轤目が顕著である。胎土中には黒色砂粒を多く含み、焼成良好。灰白色を呈する。

35は壺あるいは瓶の頸部片。外面には濃緑色の自然釉がかかる。胎土は灰白色を呈し、白色および黒色の微粒子を多く含む。遺存部が少なく、2段継ぎか3段継ぎか判然としない。

36は壺あるいは甕の口縁部。口縁部下に1条の隆帯を有する。胎土は精良、黒色粒を多く含む。

37は灰釉陶器壺であろうか。体部はかなり丸味を帯びており、高台はしっかりとしたものを貼りつける。高台部外面には透明感のある淡緑色の灰釉がかかる。胎土は精良、白色および黒色粒を多く混入する。

38～43は頸部以下の拓影。全て別個体である。

38は頸部。3条の沈線と列点状の刺突文を配している。胎土は精良、白色粒を多く含む。

39は肩部。外面は横位の細かいハケ目。内面は青海波文である。胎土中に白色微粒を多く含む。

40は肩部。外面は格子目。内面は青海波文である。胎土中に白色粒を多く含む。

41は底部付近。外面は平行叩き目であるが下位は磨耗している。内面はヘラケズリ後ナデ調整を行う。灰白色を呈し、胎土中に白色微粒を少量含む。

42は体部下位。外面は平行叩き目。内面はヘラによる強い掻き上げ。胎土中に粗い白色粒を含む。

43は体部下位。外面は平行叩き目。内面は横位のヘラケズリ。胎土中に白色粒を多く含む。

本調査地点での古代遺物は、総数450点ほど出土しており、そのほとんどが溝状遺構の覆土中から出土したものである。年代指標となる須恵器坏は外底面を回転ヘラケズリしており、坏蓋は端部を短く折り曲げ、かえりを持たない。坏蓋天井部のつまみは円盤状の粘土を強く押しつけ、高台状を呈するものである。いずれも8世紀第1四半期ないし第2四半期に属するもので大きな時期差を有するものはない。土師器坏は相模型と呼ばれる坏が主体となり、前代からの系譜をもつ坏がわずかに含まれている。盤状坏の出土点数も多く、年代的には8世紀前半としてまちがいはなかろう。

なお今回の報告分ではないが、2区の調査に於いても中世以前の遺構として、土壙2基、溝1条が検出された。このうち土壙は短辺1.6m、長辺2.5m程の隅丸長方形で、深さは確認面から50cm程で、底部の海抜は約2.2mである。土壙内から略完形の坩形土器1点のほか、壺、甕、手捏ね鉢形土器等が出土しており、先の溝状遺構より更に古く、古墳時代前期にまで遡るものと推定される。

(菊川英政)

第五章　ま　と　め

本調査で検出された遺構の年代観は検出された１、２面とも大きな時期差は認められず、出土した遺物からおよそ13世紀中頃から後半にかけてと考えられる。また1面土壙1は、薄手内攣気味の轆轤成形のかわらけが主で、法量も大・中・小に分けられ、時期が下り14世紀前半の遺構と考えられるがこの時期の生活面は後世の削平により失われてしまっている。溝１（河川）は遺構のごく一部にすぎず出土遺物も少なく上限は定かではないが、13世紀後半にはすでに存在し、中世・近世を通してほぼ同じ所を流れ、近・現在まで続いていた。溝1（河川）は、若宮大路修景計画に伴う発掘調査等でその存在が確認されている若宮大路の西側を南北に流れる河川の一部と考えられ、本調査地点の溝１の立ち上がりが河川の西の限界という事になろう。現在の扇ケ谷から流れる河川は、二ノ鳥居あたりから歩道（もしくは歩道西側）の下が暗渠になり200m程南下して若宮大路を横断して南東に向かい滑川に合流しているが、この流れが造られたのが横須賀線の開通工事の頃という。本調査地点の東側を流れる河川はこの時に横須賀線の土手の西側、江ノ電の線路の間の側溝の流れを集めて南下するようにされたものであろう。この河川の幅は同調査の二ノ鳥居南側でのトレンチで最大幅20m程と確認されている。本調査地点東の調査では、現道路面90cm程まで攪乱を受けており東側の立ち上がりは確認されていないが、歩道下では河川の覆土がみられ、川底レベルは海抜1.9mと確認されており、この付近の川幅は少なくとも10mを越えるものと考えられる。また佐助ケ谷から流れる河川は現在の流れとさほど変わらない地域を流れ、下馬四ツ角の南付近で若宮大路を横断し、滑川に合流していたと考えられている。本調査地点から下馬四ツ角にかけては若宮大路西側を流れる２本の河川が合流する氾濫源的な土地柄であったと考えられる。

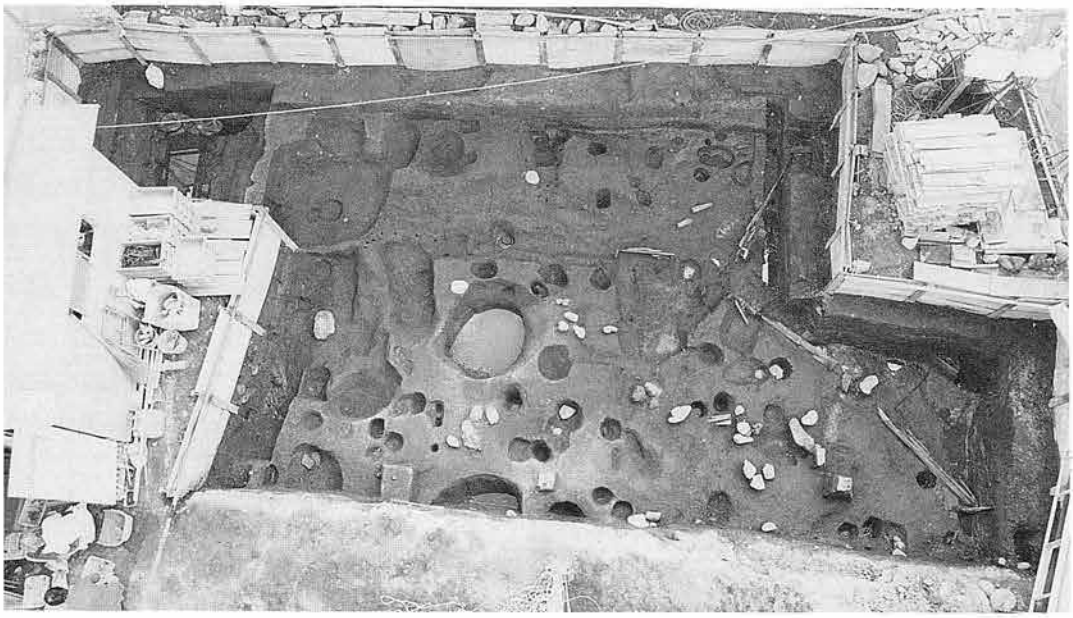
本調査地点の西側、特に今小路と若宮大路に挟まれた地域は、鎌倉駅西口周辺を除きまだ調査例が少なく不明な点が多い。今回の調査で検出された木組遺構は若宮大路からわずか７～８ｍしか離れていないにもかかわらずその方向性は若宮大路と大きく異なっている。御成町868番地点で検出された石垣や道路、溝などの方向性もまた似た傾向を示し、この周辺の遺構群が若宮大路の方向性にとらわれていないと考えられる。このような傾向は今小路西遺跡や鎌倉駅西側の幾つかの調査地点でもみられる。現在までのところ本調査地周辺の調査件数は少なく今後の調査の増加により当時の地割りの様子が次第にはっきりしてくるであろう。

中世以前の遺構は調査面積も狭く判然としないが、検出された柱穴の規模は今小路西遺跡の官衛遺構の柱穴に匹敵するものであり、本調査地周辺に８世紀前半に大きな掘立柱建物が存在する可能性があると思われる。

今回の調査は、調査対象面積が150㎡と狭く、また本報に収録した範囲はこのうち80㎡に付いてのみであり（遺構全測図は調査対象面積全域を掲載したが）、２区の遺構の事実記載や遺物の数量的な問題に付いてはあまり今回の報告では触れておらず、かなり中途半端な報告になってしまった感は否めない。これからの調査方法や報告書の体裁等考えなければならない問題であろう。

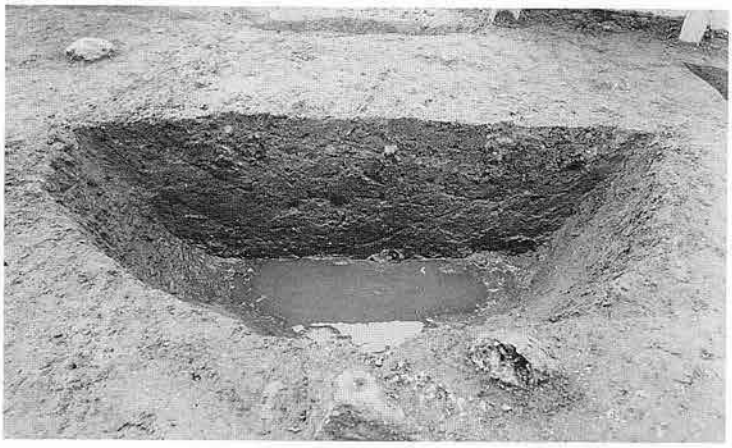
図版 1

調査区近景　（1区2面時・北より、画面左が若宮大路）
リモコン式高所撮影装置による・魚眼レンズ使用



1区全景（2面時・北より）

Ⅰ面全景（東より）

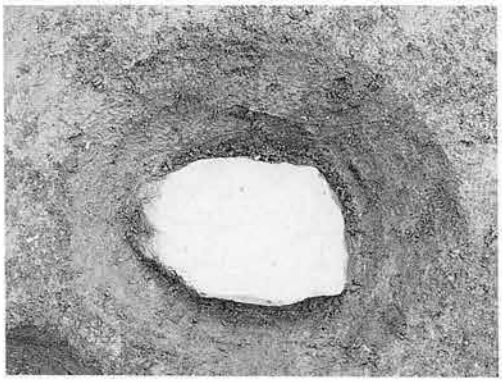


土壙Ⅰ土層断面

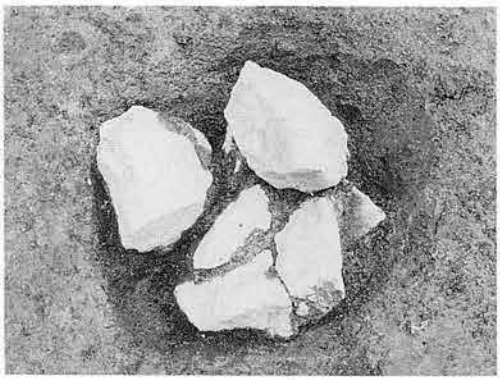
土壙Ⅰ（南より）

図版 3

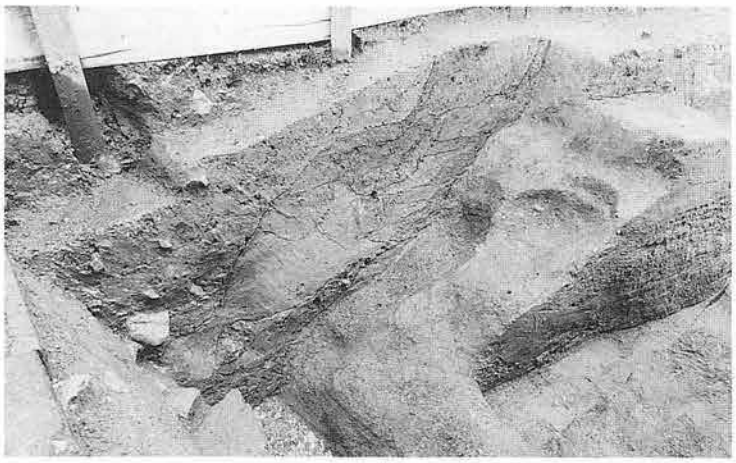
I面かわらけ出土状況



I面建物　礎石、割ぐり



溝1下層（南より）

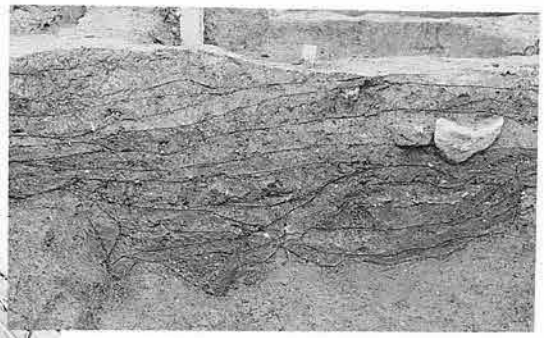


溝1土層断面

溝1上層（南より）

図版 5

2面全景（東より）



溝2土層断面

溝2全景（西より）

木組遺構

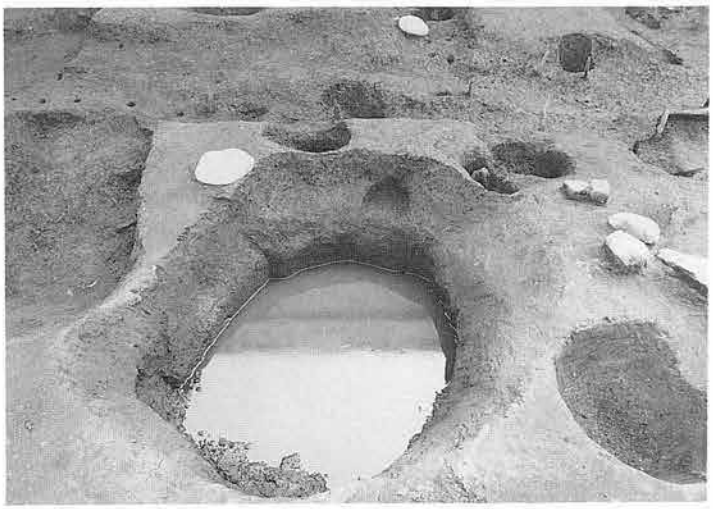
木組遺構　土層断面

木組遺構部分

図版 7

溝2坑跡

溝4（南より）



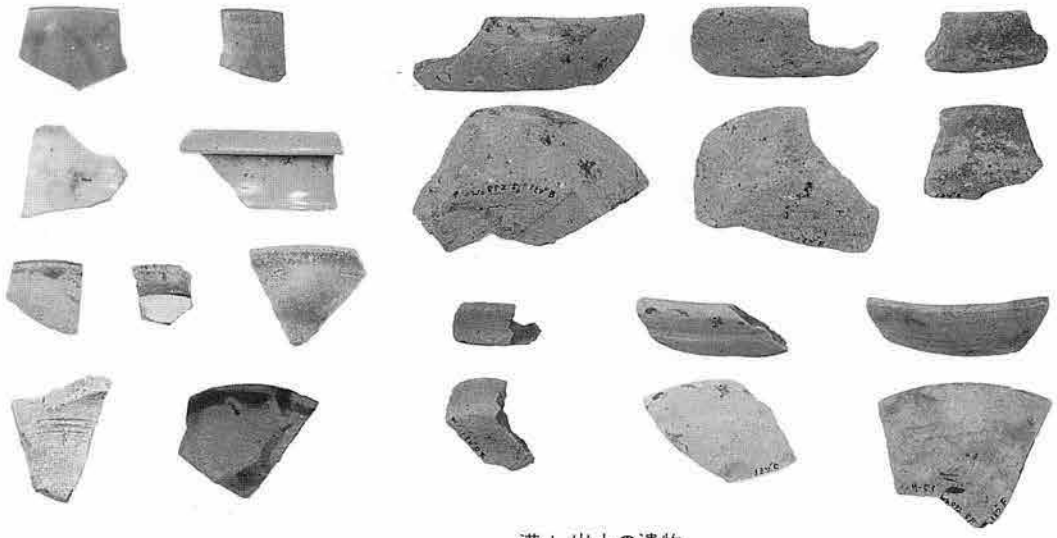
土壙3（北より）

古代桂穴

古代トレンチ全景（東より）

古代溝状遺構土層断面

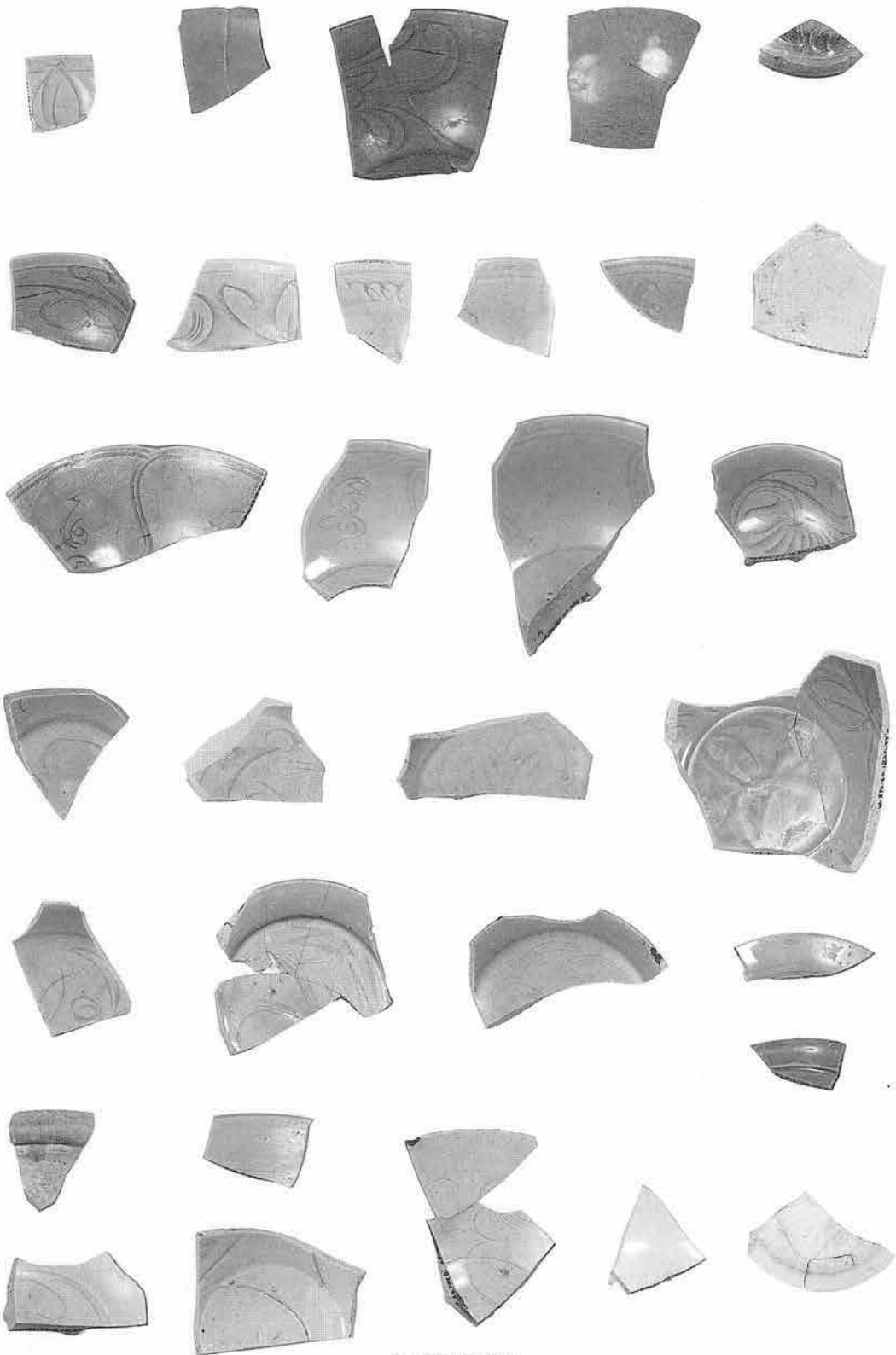
図版 9



溝 1 出土の遺物

土壙 1 出土の遺物

図版11



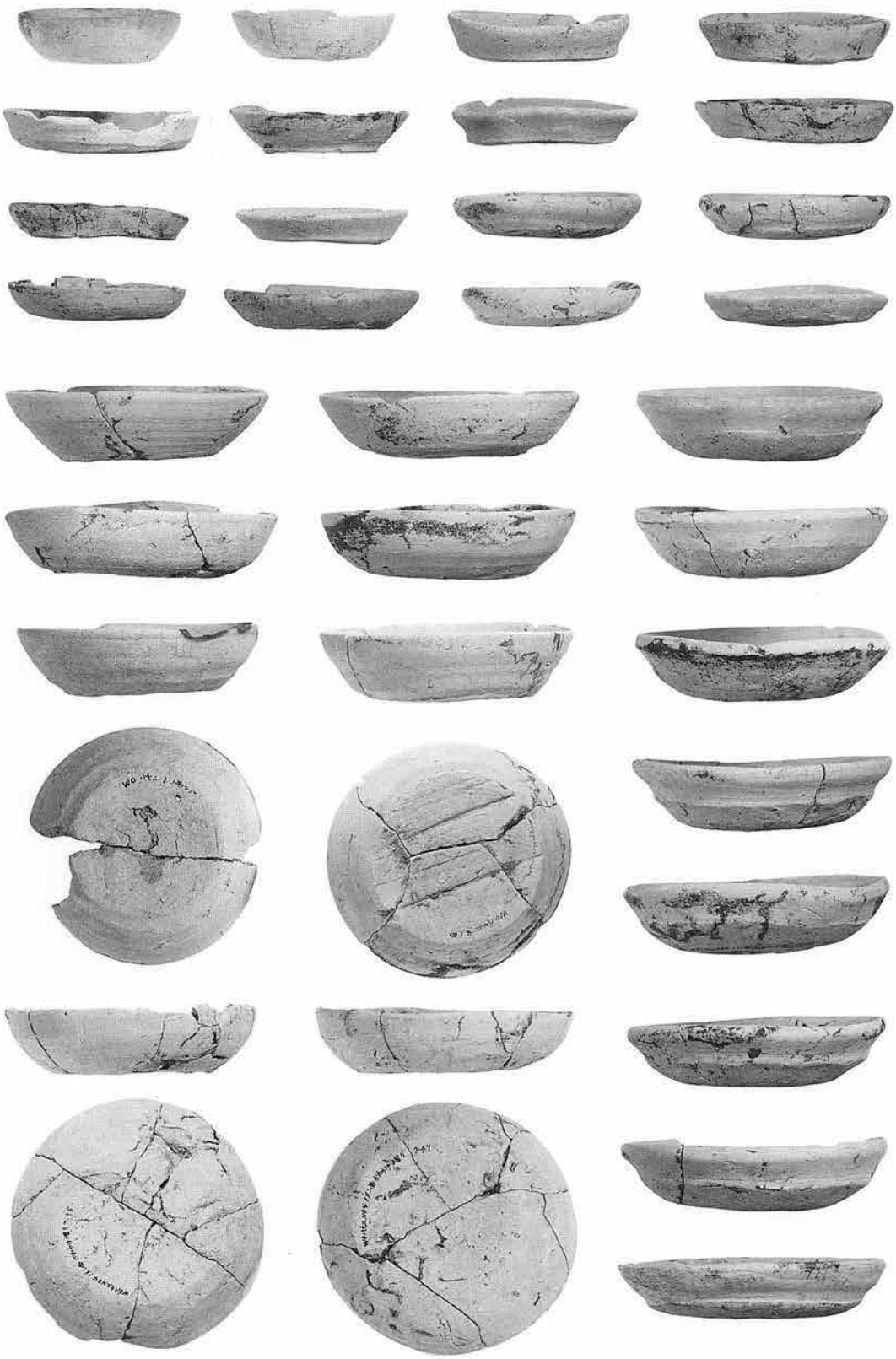
2面出土の遺物

溝2・木組遺構

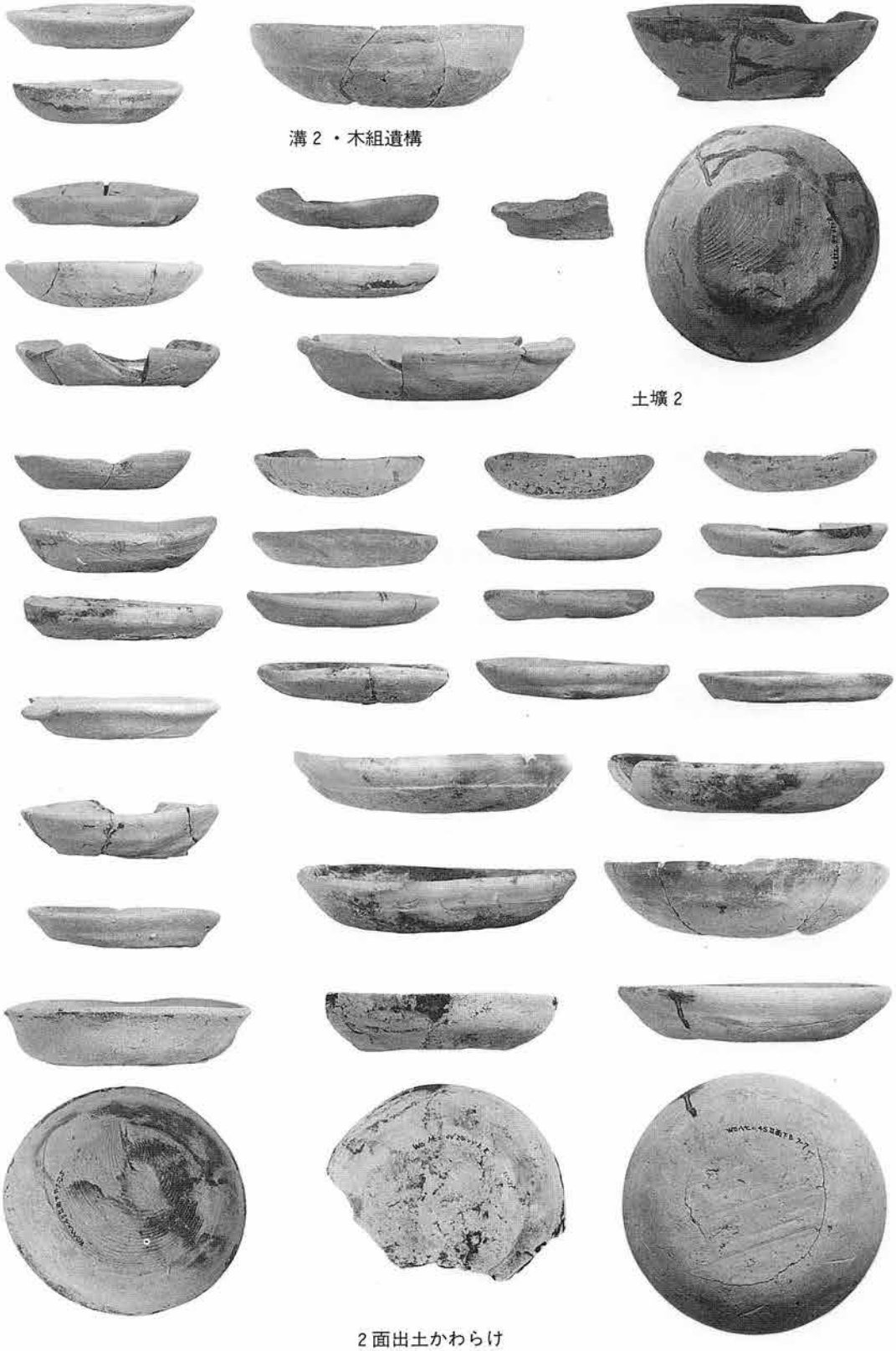
土壙2

2面出土の遺物

図版13



I 面出土かわらけ

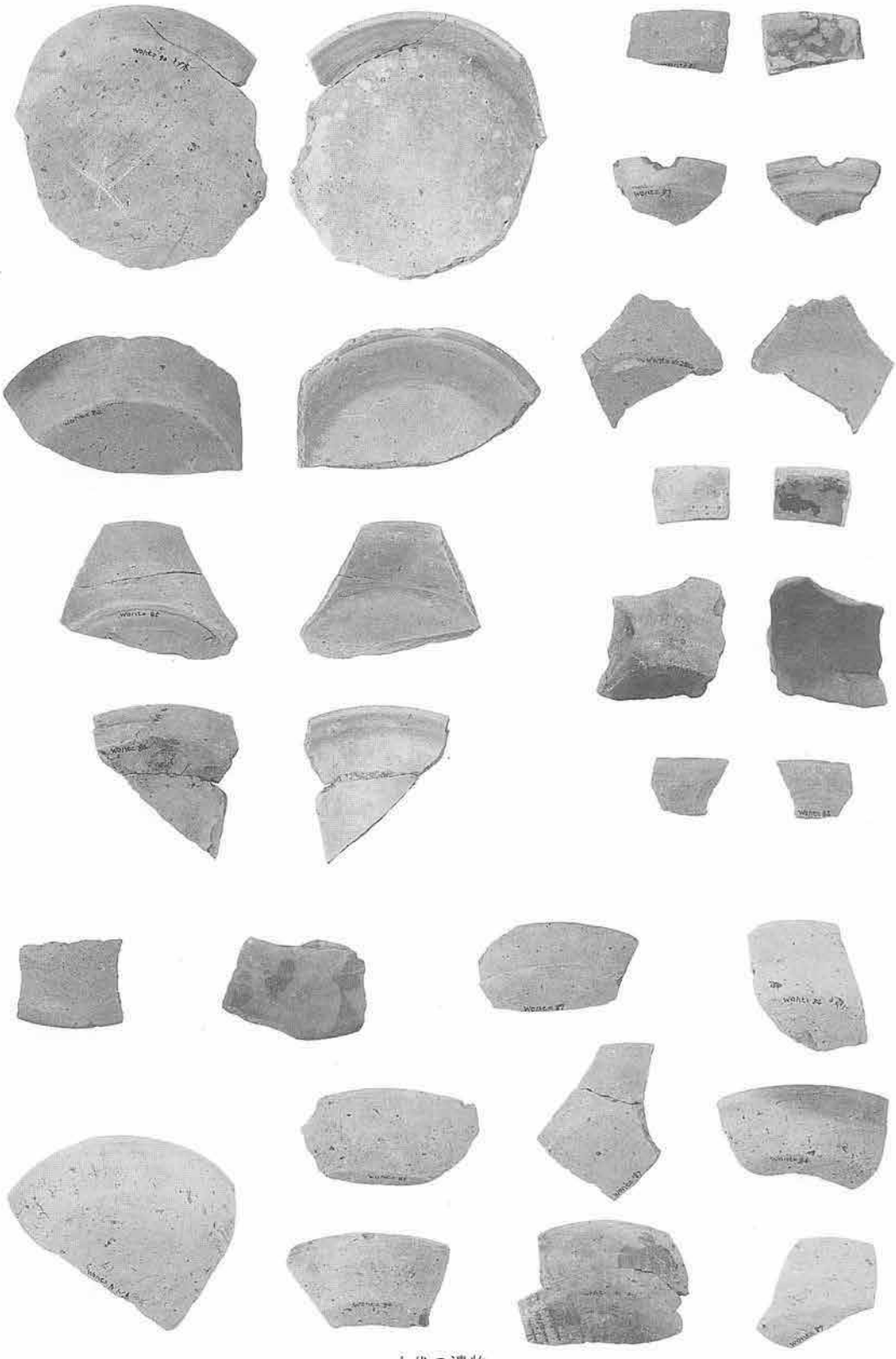


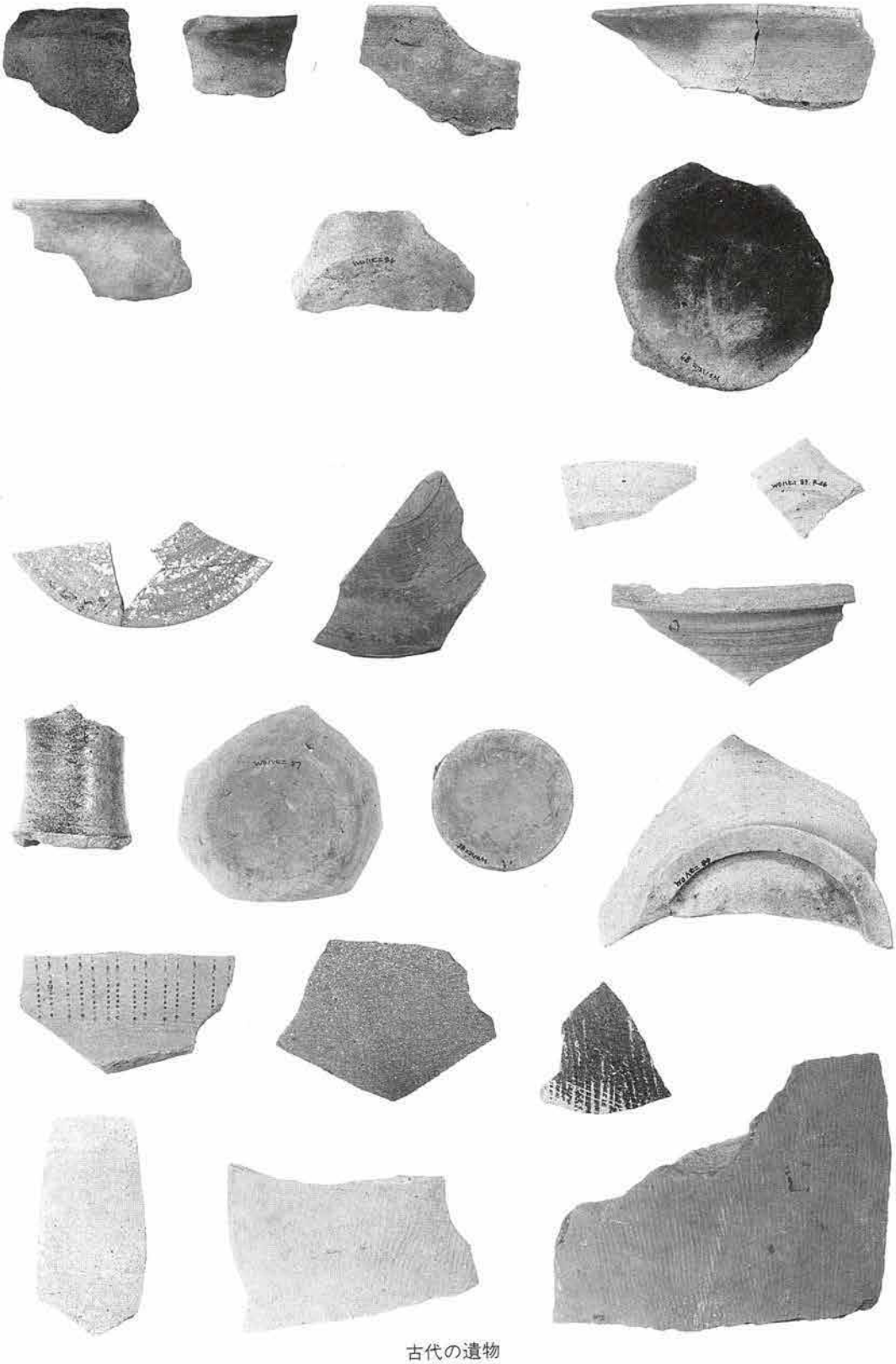
溝２・木組遺構

土壙２

２面出土かわらけ

図版15





古代の遺物

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　8

平成３年度　発掘調査報告

発行日　平成４年３月

編集
発行　鎌倉市教育委員会

印刷　㈱稲元印刷